
遊 戯 王5D's The Power of Fellows

BRAVE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊 戯 王 5 D ' s T h e P o w e r o f F e l l o w s

【Nコード】

N 7 2 4 3 0

【作者名】

B R A V E

【あらすじ】

フリーターであつた村上 鉄也は気が付いたらいつの間にか『遊戯王5D's』の世界へトリップしていた。『ジャンク・シンクロン』と共に鉄也は5D'sの世界を過ごしていくのであつた。これから一体、彼に何が起こるのやら……

第1話 少年とガラクタ戦士（前書き）

トリッパ―小説は初めてです。

第1話 少年とガラクタ戦士

- ??? Side -

『その少年！ 直ちに止まれ！』

「ハアハア・・・しつこいなあ、もう！」

午後11:00・・・僕は息が途切れる程走っていた。

なぜなら僕は警察に追われているからだ。

何も悪いことをしていないのに追われている。

なぜこうなっている？ そんな説明は後だ！

『鉄也あ！ あそこに入れ！！』

僕は言われた方向を見ると、そこにはマンホールが外れた下水道があった。

下水道かよ。しかし、他に方法がねえ！

僕は下水道の中へ飛び込んだ。

バsshャーン！

「いたたたた．．．．．」

『大丈夫か！？』

「ああ、水があったのおかげでなんとか助かった。逃げ道を見つけ
てありがとう、ジャンク。」

これは痛かった。

下水道が予想したのより深かったのだ。

はしごを掴めばよかった。

水がクツシヨンになってくれたとはいえ流石にきつかった。

まあ、とりあえず警察に見つからないよう安全な場所を探したほうがいいな。

そろそろ自己紹介に入ってもいいだろう。

僕の名は『村上^{むらかみ}鉄也^{てつや}』。この世界の住人ではない。いわゆる
トリップパーだ。

一年前、22歳のフリーターであった僕はなぜか『遊戯王5D's』
というアニメの世界にトリップしてしまってさ、僕の体も14歳の
頃になっていた。

そしてあいにく僕はサテライト出身であった。

マーカーは今のところついていない。

最初はサテライト出身である事に問題はないと思ったが、どうもそ
うはいかなかった。

現在、僕はセキュリティというネオ童実野シティの警察たちに追わ

れていたのだ。

見知らぬ場所だったから見物をしながら歩いていたら進入禁止エリアに入ってしまったのが原因だった。

「ふう。　ここなら大丈夫そうだな。」

ここなら安全だと思い、僕は座った。

こんなつらい経験をするぐらいならGXのトリッパーになりたかったな。

せめてトリップした時間帯にダイダロスブリッジが出来ていたらよかったのに。

『大丈夫か、鉄也？』

「ああ、休憩すれば大丈夫だ。」

オレンジ色の帽子をかぶってマフラーを巻いて、眼鏡をかけたロボットのような者が僕に話しかけた。

こいつは僕の精霊、『ジャンク・シンクロン』、通称ジャンクだ。

これは現世でも持っていた僕のカードであり、最も信頼しているカードでもある。

僕のデッキはこのアニメの主人公、不動^{ふどう}遊星^{ゆうせい}のデッキではない。

この『ジャンク・シンクロン』を生かしたシンクロデッキだ。

僕のデッキはカード単体では役に立たないが、仲間との力を合わせることで発揮するというデッキ、まさにパワー・オブ・フェローズだ。

もちろん、ちゃんと上級モンスターも入れている。

まあ、今度僕のデュエルを見れば分かる。

「よいしょっと。」

そろそろここから去るか。

セキュリティに見つかったらマーカーを付けられてしまう。

あれ、顔面にレーザーを使ってるんだよね。

遊星やクロウは目元にかかっていたし。

超痛そうじゃねえか。

取りあえずマーカーは勘弁。

立ち上がった途端、僕の顔に光照らされて眩しかった。

よく見ると懐中電灯を持ったセキュリティの1人が僕を照らしていた。

ちくしょう、もう見つかったのか!?

「そこまでだ！ おとなしく連行させてもらう！」

誰が連行するか！

たしかセキュリティは2人いたな。

もう1人が来ないうちに逃げるしかない。

僕は腕についていた機械を起動した。

「^{デュエル}だったら決闘だ!!」

そう。僕は目覚めていたらなぜかデュエルディスクを持っていた。

そしてディスクの中には現世で作ったデッキが入っていたのだ。

「デュエルか。いいだろう。」

そう言つて、セキュリティはデュエルディスクを起動した。

とりあえず、もう1人が来る前に早めに終わらせて立ち去ろう。

「デュエル!!」

鉄也 VS ・ セキュリティ

ちなみに僕とセキュリティの足元には水が流れていた。

「僕のターン！僕はモンスターをセットし、カードを2枚伏せてターン終了！！」

鉄也 LP 4000

手札3枚

セットモンスター1体

伏せカード2枚

「私のターン！！私はダーク・ヒーロー ゾンバイアを召喚！」

ダーク・ヒーロー ゾンバイア

4

ATK 2100

いきなり攻撃力が高い下級モンスターか。

「さらに、ビッグバン・シュートをゾンバイアに装備！」

ダーク・ヒーロー ゾンバイア
ATK 2100 2500

「ゾンバイアでセットモンスターを攻撃！」

「そうはさせない！ くず鉄のかかしを発動！！」

「くつ！ カードを2枚伏せ、 ターン終了だ。」

このカード好きなんだよね。 現世で何度も助けてもらったし。
結局除去されるオチなんだけど。

セキュリティ LP 4000

手札2枚

ダーク・ヒーロー ゾンバイア（攻）

ビッグバン・シュート（ゾンバイアに装備）

伏せカード2枚

「僕のターン、ドロー！」

おお！ ジャンクじゃねえか。 でも墓地にレベル2以下のモンスターがいない今、まだ使わないほうがいいな。
あの伏せカード2枚は絶対罠だよな。
それでも僕はやる！

「手札からサイクロン発動！！ ビッグバン・シュートを破壊！」

「何！」

「ビッグバン・シュートが破壊されたことにより、ゾンバイアはゲームから除外される！！」

「くっ！」

ゾンバイアが次元の裂け目に吸い込まれた。
すまんゾンバイア、お前が嫌いなわけじゃない。
現世でもお前を結構気に入って使ってたぞ。
あんまり役に立つ様な使用が出来なかったがな。
あの融合モンスターを持っていなかったし。

「そして僕はモンスターを反転召喚！！ デス・コアラ！！」

デス・コアラ

ATK 1100

「お前の手札は2枚！ デス・コアラの効果で800ポイントのダメージを与える！」

ジュバババツ！

デス・コアラがセキュリティの顔をひつかいた。

「くっ！ サテライトのクズが！」

こいつ・・・今、何と言った！？

セキュリティ

LP 4000 3200

どうせ破壊されるかダメージを回避されるかそんなのどうでもいい。ブラフである可能性もある。とにかく攻める！

「デス・コアラで直接攻撃！！」

「畏発動、炸裂装甲！！」

ドッカーン！

デス・コアラが爆発した。

あ、本当に罠カードだった。

すまん、デス・コアラ！！ 本当にすまん！！

「僕はメインフェイズ2に入り、シールド・ウイングを守備表示で召喚！！」

シールド・ウイング

2

DEF900

まあ、盾があれば何とかなるだろう。
しかし表側守備表示って便利だな。

鉄也 LP4000

手札2枚

シールド・ウイング

伏せカード2枚

「手札からサイクロンを発動！！ 破壊するのは勿論、くず鉄のか

かしだ！！」

くっ！！ 頼みの綱が破壊された！！

シールド・ウイングを召喚しておいてよかった。

「さらに、閼次元の開放を発動！！ これでゾンバイアを開放させる！！」

ダーク・ヒーロー ゾンバイア

4

ATK 2100

まあ、ビッグバン・シュートを使っただけだから持っていたのは当然か。

てゆうか待てよ！

「さらに、手札から融合を発動！！ 手札の魔力吸収球体と場のダーク・ヒーロー ゾンバイアを融合！！」

まさかあのカードか！

僕は魔力吸収球体を持っていたのにあれだけ持っていなかったんだよな。

「異星の最終戦士を融合召喚！！」

異星の最終戦士

7

ATK 2350

「ターンエンド。」

セキュリティ LP 3200

手札 0 枚

異星の最終戦士

でもよかった。

モンスターが召喚できないのはつらいが、シールド・ウィングがいて助かった。

「僕のターン！（今は何も出来ない。） ターン終了だ。」

鉄也

手札 3 枚

シールド・ウィング（守）

伏せカード2枚

「私のターン！ 私は命削りの宝札を発動！！ 私はカードを5枚
ドローする。」

何だと！ 非OCGカードを使う気なのか！？
しかも命削りっておい！

アニメの世界だということはわかるが、禁止カードにさせるよ。
5D'sの時代だから明らかに禁止カードにするべきだろ。

「さらに私は地砕きを発動！ シールド・ウイングを破壊！」

しまった！ 頼みの壁モンスターが破壊された！
王国ルールだったら地砕きなど効かなかったのに。
すまん、シールド・ウイング。
セットしておくべきだった。

「さらに、私はデーモンの斧を装備！！」

異星の最終戦士

ATK2350 3350

僕の伏せカードはブラフとして伏せておいたジャンク・アタックし
かない。

この状況では無意味だ。

「異星の最終戦士でサテライトへ直接攻撃!!」

異星の最終戦士が僕へ向かって斧を振り下ろした。

「くっ！」

鉄也

LP 4000 650

「カードを1枚セットし、ターン終了だ。デュエリストだとしても所詮、サテライト。カードもサテライト同様、雑魚だ。」

セキユリティ LP 2800

手札1枚

異星の最終戦士（攻）

デーモンの斧（異星の最終戦士に装備）

闇次元の開放（発動中）

伏せカード1枚

ピキ！ こいつ、今何て言った？

雑魚だと？

カードゲーム好きなフリーターである僕が言ってられるセリフじゃないが、僕を馬鹿にするのはともかく、僕のために戦ってくれるカードたちを馬鹿にすることは許さん！

僕は必ずこいつを倒す！！

「僕のターン！僕はカードを1枚セットし、ターン終了だ！！」

モンスターは召喚できないがこれで何とかするしかねえ。

鉄也 LP4000

手札3枚

伏せカード2枚

「私のターン！連行させてもらっぞ！異星の最終戦士で直接攻撃！」

「そうはいくか！聖なるバリア・ミラーフォースを発動！！
（頼む、成功してくれ！）」

ミラーフォースが僕を囲んだ。よし、これで・・・

「させるわけがないだろう！魔宮の賄賂を発動！相手にカードを1枚ドロースせ、ミラーフォースの効果を無効にする！」

何！ミラーフォースが失敗だと！

結局連行されるのか。
もう終わりだ…………

すると、僕のデッキの1番上のカードが光りだした。

「ん？　！！！」

引いたのは…………このカードだ！

「バトルを続行！　異星の最終戦士で直接攻撃！！」

異星の最終戦士が持つデーモンの斧が僕へ振り下ろした。

バsshャーン！！

今の衝撃で水が思い切り跳ねた。

「これで終わりだな。」

鉄也　LP650

……………ありがとう。
助かったぜ。

『クリクリ〜！！』

「何！ なぜだ！」

「それはこのカードのおかげだ。」

僕は墓地からカードを取り出した。

そのカードは僕がピンチのときに助けてくれているカード……

・クリボー。

「クリボーだと！ いつの間に！？」

「お前が魔宮の賄賂を発動した時からだ。 ドローしたカードがクリボーだったんだよ。」

まさか魔宮の賄賂の効果によって引くとはな。

こりゃあ、ここで諦める訳には行かないな。

サンキュー、クリボー。

「ち、まあいい。 次のターンで決める。 異星の最終戦士の攻撃力は3350！！ モンスターが召喚できないお前には負けも当然！ カードをセットし、ターン終了！！ （私が伏せたカードはデストラクション・ジャマー……異星の最終戦士が破壊されようともこのカードで防げばいい。）」

セキュリティ LP3200

手札1枚

異星の最終戦士（攻）

デーモンの斧（異星の最終戦士に装備）

伏せカード1枚

たしかにこのターンはただ運がよかっただけかもしれない。

だが、クリボーやジャンクが僕を信じているなら僕は絶対勝つ！

いや、勝たなければならない！！

このドローに賭ける！

「僕のターン、ドロー！！（このカードだ！！） 僕の逆転だ！！」

「何！？」

「僕は禁じられた聖杯を発動！ 異星の最終戦士の攻撃力を400ポイントアップさせ、効果を無効化させる！」

異星の最終戦士

ATK3350 3750

「なんだ、壁モンスターを召喚するための悪あがきか。」

「いや、僕が召喚するのは壁モンスターではない。僕はチュー

ナーモンスター、ジャンク・シンクロンを召喚！」

『まってましたぜ、鉄也！！』

ああ、今決めるぜ。

ジャンク・シンクロン

3

ATK1200

「チューナーモンスターだと？ だが無駄だ。チューナーモンスターだけではシンクロ召喚は出来ない。」

「そんな常識ぐらい分かっている！ ジャンク・シンクロンには特殊効果がある！ このモンスターが召喚に成功した時、墓地からレベル2以下のモンスターを守備表示で特殊召喚させる！！ 僕はクリボーを特殊召喚！」

『クリクリ〜』

クリボー

1

DEF200

「僕は手札から増殖を発動！ クリボーをリリースし、クリボート

ークンを開いてるフィールドにクリボートークンを可能な限り特殊
召喚させるー!」

『クリクリー!』

『クリー』

クリボートークン(×4)

1

ATK300

「レベル1のクリボートークン2体にレベル3のジャンク・シンク
ロンをチューニング! 集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす
道となれ!」

行け! 僕のフェアリットカード!!

1 + 1 + 3 = 5

「シンクロ召喚! いでよ、ジャンク・ウォリアー!」

『トアアー!ー!』

ジャンク・ウォリアー

5

ATK 2300

「何かと思えばレベル5の弱小モンスターじゃねえか。」

「勝手に言ってる。ジャンク・ウォリアーがシンクロ召喚に成功した時、自分フィールドに存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分、攻撃力をアップさせる。パワー・オブ・フェローズ！」

『『クリクリ〜！』』

クリボーたちはエネルギーをジャンク・ウォリアーへ放出させた。

ジャンク・ウォリアー

ATK 2300 2900

「それでも足りないぜ。サテライトのクズは脳ミソもクズの様だな。」

「僕への悪口はいい。だが、僕のために戦っているモンスターたちを侮辱させるのは許さない!!」

そつだ．．．弱いカードだからこそ僕はお前らを使っているんだ。どのカードも完璧ではない。

力を合わせていてこそ真の力を発揮させるんだ。

僕は手札からカードを抜いた。

「仲間がいるこそ強くなる！ 装備魔法、団結の力をジャンク・ウォリアーへ装備！」

「何！」

「僕のモンスターは3体！ よって、ジャンク・ウォリアーの攻撃力が2400ポイントアップする！ パワー・オブ・ユニティー！！」

僕のジャンク・ウォリアーは仲間を侮辱した怒りと共に、クリボーたちからさらなるエネルギーを集めた。

ジャンク・ウォリアー

ATK 2900 5300

「攻撃力5300!! （だ、だがダメージは1550!! ライフポイントが何とか残る!!）」

「さらにリバーズカードオープン！ 装備魔法、ジャンク・アタックをジャンク・ウォリアーへ装備！！ バトル！！ ジャンク・ウォリアーで異星の最終戦士を攻撃！ スクラップ・フィスト！！」

『トアア！！』

僕のジャンク・ウォリアーが放つ拳に相手の最終戦士は跡形もなく吹っ飛んだ。

セキュリティ LP3200 1650

「くっ！ まだだ、まだ私は終わっていない！」

「それは僕のセリフだ！ ジャンク・アタックの特殊効果を発動！ ジャンク・アタックを装備したモンスターが相手モンスターを戦闘によって破壊した場合、相手プレイヤーに破壊されたモンスターの攻撃力の半分だけダメージを与える！！」

「何！」

「カード達に謝罪しな。」

ジャンク・ウォリアーがセキュリティに近づき、火炎弾を放った。

ドッカーン！

セキュリティ LP16500

こうして僕は勝った。

セキュリティはのびてしまったので水が流れていない所に放置しておいた。

どうせ後で誰かに見つかったもらうだろう。
気絶している間に反省しておけ。

『やったな、鉄也!!』

「ああ、ジャンク。 お前のおかげだ。 しかし腹減った。」

今日は結構疲れた。

とにかく僕は早く下水道から脱出したい。

明日のことも考えておかないとな。

さっさと隠れ家に戻って飯でも食って寝るか。

第1話 少年とガラクタ戦士（後書き）

感想をお待ちしております。

第2話 脱ニート計画（前書き）

《注》 主人公はニートではありません。

第2話 脱二ト計画

- 鉄也 Side -

ピピピピ．．．．．

午前9：00．．．．．僕の目覚まし時計が鳴り始めた。

バン！

目覚ましを叩いて僕は寝入った。

眠い．．．．．マジ眠い。

昨日、セキュリティに追い回されたおかげで隠れ家に戻るのに道迷った。

時間を見たらもう1時過ぎていたな。

とりあえず眠い。

そもそもなんで僕はトリップしたんだ？

現世での人生は結構悪くなかったぞ。

19歳の頃、大学で弱いものいじめをしていた学生がいてね、災いな事にそいつは有名な実業家の息子だった。

ある日、そいつが僕の友人をいじめているのを見てすごく腹が立った。

僕はそいつを真っ先にボコボコにした。

そしてそいつが父親にそれを報告して僕は退学になった。

友人も僕を庇おうとしたが無駄だった。

別に悔いはない。

両親も理解してくれた。

僕は正しいと思えばやる男だ。

退学になった僕はフリーターになった。

まあ、フリーター生活3年間の人生は嫌いではなかったぞ。

バイトを色々探すのに苦労してたな。

清掃員、コンビニのレジ、クリーニング、電気屋さん、他に色々・
・・・・

ちなみにトリップする前にやっていたバイトはレストランの従業員だ。

なかなかいい給料だったぞ。

住んでいたアパートもなんとか稼いでいけるほどの家賃だったし、大家さんも結構親切な人だった。

電化製品や水道を直してあげたら美味しい料理をおごってくれた。

仕事が終わればガンブラを組み立てたりアニメをレンタルしたりゲームをやったりしてたな。

休日では友人とサッカーをしたり、ゲーセンに行ったり、エロゲーを貸し合ったりして、勿論デュエルもしてた。

交通安全の仕事もしてて子供や老人達の笑顔を見るのが僕にとって癒しでもあったな。

生活は大変だったが、楽しかった。

彼女も出来たぞ。

初デートの前にトリップしてしまったんだが。

現世での悔いがないのになぜ僕はトリップしてしまったんだー！

仕事が減多に見つけられないサテライトにとって僕はフリーターからニートに格下げてしまうじゃないかー！

ニートだけは嫌だ！

嫌だあああー！！

．．．．．
．脳が興奮しすぎて眠れなくなった。畜生。

『大丈夫か、鉄也？』

ジャンクか。

大丈夫だ僕は。

腹が減った。

何か食べ物があるか？

『カップラーメンがありますぜ。』

とりあえず僕はお湯を沸かし始めた。

料理は出来るが、現在食べ物缶詰かインスタントフードしか持っていない。

まあ、フリーターの人生を送ってきた僕には平気だ。

この食料達は僕にとって救いだ。

そしてカップラーメンを考えた奴は神だ！！

『これからどうします？』

そうだな、色々見回ったからなんとか道を覚えたいし、そろそろシテイにでも行くか。

遊星かゴドウィンと出会えばどうすればいいか分かるかもしれないし。

そう思い、僕は出来たお湯をカップラーメンに入れた。
3分が30分みたいに感じる。

『なあ、鉄也．．．』

「何だ？」

ジャンクが僕に何か聞き始めた。

『あんた臭いよ。』

．．．．．こいつの言うとおりだ。

僕は下水道から脱出して以来、風呂に入っていない。
飯の後に風呂を沸かすか。

僕は出来たカップラーメンを食べ始めた。

1時間後．．．

風呂に入ってサッパリした僕は服を着てサテライト脱出計画を考えていた。

僕は機械いじりが得意が、D・ホイールのような架空の機械の知識などない。

バイクの運転自体、未経験だ。

とりあえず計画を立てないとな。

．．．．．
．．．．．

トリップして単に町をふらつき回ってたわけではない。

脱出ルートを探る為だったのだ。

さて、1年間の経験により僕は脱出ルートを考えることが出来た。とりあえず、僕の調べたルートでなら脱出できるはずだ。

これなら明日から実行できる。

それまでに準備をしないと。

僕は金庫を開けた。

中には5万円とデッキが2つ入っていた。

サテライトを脱出するために貯めておいたのだ。

ちなみに僕のデッキは3種類。

ジャンク同様、がらくたをモチーフにしたファンデッキと言ってもいい。

衣服の換えは持たなくていい。

どうせ荷物になるだけだ。

とにかく持ち物が決まった。

所有物

リュックサック

所有金5万円

デュエルディスク

カードデッキ×3

トレーナー

缶詰の食べ物×20

皮手袋

地図

地図（脱出計画用）

水筒

こんなもんだろう。

しかし護身用にスタンガンとか煙幕も必要かもしれないな。
買いに行くしかないな。

僕はサテライトの闇市場へ歩いていった。

闇市場にはたくさん人がいた。

闇市場へは何度か行ったことがある。

新聞を買って情報調達するためだった。

僕は新聞をあまり読まないが、この状況だとしかたがない。

新聞の情報によると、フォーチュンカップはまだ始まっていない。

だとするとダークシグナーの侵略がまだだということだ。

早く行かなければならない気がする。

「スタンガンに煙幕弾、そして粘着弾を下さうい。」

僕は必要なものを買い始めた。

「おやおや、あんちゃんもサテライトを脱出する気かい？ ヒヤヒヤヒヤ。」

「ああ、誰かにチクるんですか？」

「そんなわけではないよ。 どうせマーカ―を付けられて牢獄へ閉じ

込められる可能性が99%だよ。　ウヒヤウヒヤ。」

「……そうかもしれないな。

だがサテライトに引きこもっては何の意味もない。

僕はスタンガン1つ、煙幕4つ、そして粘着爆弾2つ買った。

代金3万6千円。

なんとか買えた。　つーか安かった。

武器にしては安かったよ。

サンキュー、おっさん。

さて、脱出の準備は整った。

脱出してみせる。

いや、脱出しなければならない。

これはサテライトから抜け出すためのものではない。

ニートになってしまった自分自身を元に戻すための計画でもあるのだ。

そう……これは『脱ニート計画』！！

「きゃあー!!」

「ほお、いいカードじゃねえか。」

何だよ、せっかく格好良く決めていたのに。

「返してください!!」

振り返ると3人の青年が少女1人に手を出していた。

「うるせえ。 女はおとなしく人形遊びでもしてろ。」

どうやら少女はあいつらにカードを取り上げられているようだ。
また弱いものいじめか。

そういう奴は少し懲らしめないとな。

僕はそいつらに近づこうとした。

「ちょっとあんちゃん。」

止めるなおっさん。

こういう奴は見逃せないんだよ。

「このカードを。」

お、このカードは！

「いいんですか？」

「いいんだよ。 脱出に必要かもしれないだろ。」

ありがとう、おっさん。

「氷結界の龍 ブリューナクはお前が持つより余程いいんだよ。」

ブリューナク！？ あの子あんなレアカードを！？

とりあえず僕は止めに入った。

ビリリリ！！

「ぎゃあー！！」

リンチの1人が気絶した。

僕がスタンガンで懲らしめたのだ。

このスタンガン結構使えるな。

買っておいてよかった。

「てめえ、なにしやる！」

「決まってるだろ。お前らのような奴を懲らしめに来たんだよ。」

「この野郎。」

「デュエルだ！ 僕が勝ったらお前等が奪ったカードを全て返して貰う！ お前が勝てば僕のカードを全て渡す！！」

「ふん、お前のようなガキに交換条件を満たすカードなどあるか！？」

交換条件か。

ジャンク・シンクロンデッキだと認めてくれないだろう。
仕方ない。

「見せてやる。」

「これは！！」

アンティーク・ギアゴーレム
「古代の機械巨兵だと！？」

アンティーク・ギアガジェルドラゴン
「古代の機械巨竜もあるぞ！！」

これがジャンクをモチーフしたサブデッキ・アンティーク・ギア・古代の機械シリーズだ！！

この世界では結構レア物だからな。

これならブリーナクとの交換条件になるだろう。

古代の機械って名前からしてがらくたじゃないか。

サブデッキだが、ある意味メインデッキよりも強い。

これなら同意してくれるだろう。

「あ、兄貴！！」

「いいだろう。その条件、乗った！」

こいつがボスカ。

僕が使うのは勿論、ジャンク・シンクロンデッキだ。

安心しろ、古代の機械達よ。

こいつらに負けん。

「だ、だめだよ！ 私のカードのためにそんなことを！」

「安心しろ。必ずカードを取り返してやる。」

「「デュエル！！！！」」

鉄也 vs 不良

不良が先攻を取った。

「俺のターン！ 俺はゴブリン突撃部隊を召喚！」

ゴブリン突撃部隊

4

ATK 2300

ゴブリン突撃部隊か。

城ノ内 vs マスクザロックの対戦を思い出した。

城ノ内さんよ。

あんたは僕が最も尊敬するキャラだが、じいさんにゴブリンの親父狩りはやりすぎだと思う。

でもあのシーンは超シユールだったな。

「カードを2枚セットし、ターン終了だ！」

不良 LP 4000

手札 3枚

ゴブリン突撃部隊

伏せカード 2枚

「僕のターン！僕は手札からハリケーンを発動！お前の魔法、罾カードを全て手札へ戻す！」

「何！」

「さらに手札を1枚捨て、チューナーモンスター、クイック・シンクロンを特殊召喚！」

クイック・シンクロン

5

ATK700

「手札をコストに攻撃力たったの700か。メインデッキにしておくべきだったんだな。」

「メインデッキとは古代の機械の事か？あいにくこれがメインデッキだね。僕は墓地からボルト・ヘッジホッグを特殊召喚！！」

『キュッ！』

ボルト・ヘッジホッグ

2

ATK800

「墓地からモンスターだと!?!」

「このモンスターはフィールド上にチューナーモンスターが存在する場合、墓地から特殊召喚する事が出来る! さらにレベル2、ボルト・ヘッジホッグにレベル5、クイック・シンクロンをチューニング! 集いし叫びがこだまの矢となり空を裂く! 光さす道となれ!」

2 + 5 = 7

「シンクロ召喚! いでよ、ジャンク・アーチャー!!」

弓を持ったオレンジ色の戦士が現れた。

ジャンク・アーチャー

7

ATK 2300

「攻撃力2300。相打ちを狙う気か?」

「いや、ジャンク・アーチャーは1ターンに1度、エンドフェイズまで相手モンスター1体をゲームから除外させる事が出来る！
デイメンジョン・シュート！！」

僕のジャンク・アーチャーがゴブリン達を別次元へ飛ばした。
悪いな、ゴブリン達よ。

お前らは使える時は使えるが所詮、攻撃した後は用済み扱いされる存在だ。

せめて守備表示になった所を打たれなかった事だけ感謝してくれ。

「く、ゴブリンが！」

「僕はまだ通常召喚を行っていない！　僕はザ・カリキュレーターを召喚！」

電卓の形をしたロボットが現れた。

ザ・カリキュレーター

2

ATK0

「何かと思えば攻撃力0の雑魚じゃねえか。」

「（せっかくカードをもらったが、使うまでもねえ。）　雑魚ではない。カリキュレーターは自分フィールド上のモンスターのレベルの合計の300倍攻撃力がアップする！」

「何!？」

『ビビッ! 2 + 7 = 9 . . . 300 x 9 = 2700』

ザ・カリキュレーター

ATK 2700

なんかカリキュレーターの喋り方が古いアニメのロボットみたいになってる。

「こ、攻撃力2700!!」

正直、このカードは恐ろしいぜ。

今回は使用していないが、ジャンク・シンクロンと地獄の暴走召喚と組み合わせると大変な事になるぜ。

「反省しな。ジャンク・アーチャーとザ・カリキュレーターで直接攻撃!」

「ぐあああ!!」

不良 LP 4000 0

やったー！ 1ターンキルだ！

ライフ4000の世界だから出来た事だがとにかく勝った！

「ちくしょう、逃げるぞ！」

あいつらデュエルに負けたから逃げようとし始めやがった。

こらあ！ ブリユーナクを持ち去って逃げる気か！？

まあ、こういうのは予想していたが。

「くらえ！ スクラップ・フィストォー！！」

ガッン！

僕は拳を逃げる2人にぶちかました。

こついうやり方は好きじゃないけどね。

「ぎゃあー！！」

「ウボアァー！！」

僕の自慢のスクラップ・フィストの前に二人はのびてしまった。
当然だ。

現世でもそうだったが、僕のスクラップ・フィストはその気になればコンクリートをも砕く。

せめてかめ〇め波を出さなかった事をありがたく思え。

とにかく僕は奪われたブリユーナクを取り返す事に成功した。

「はい、取り返してあげたよ。」

「ありがとう、お兄さん。」

「大事にしるよ。」

「うん。」

まあ、そろそろ隠れ家に戻るか。
でもその前に……

「君、どこに住んでんだ？ 送ってやるよ。一人だと危ないから。」

そう行つて僕はこの子が住んでいる場所へ送つた。
両親が心配していたので僕に感謝をしていた。
どうやら道に迷つてしまい、闇市場へ入ってしまったらしい。

「ありがとう、お兄さん。」

「じゃあ、これで。明日早いんで。」

「あの、どこへ行くの？」

少女が聞き出した。

「……答えは既に決まっている。」

「脱出するんだよ、ここから。」

そうだ。

ここにいても意味がない。

ここから出て早くゴドウィンと接触しなければな
なんとなくそんな気がする。
そう思って、僕は隠れ家へ戻って行った。

第2話 脱二ト計画（後書き）

感想お待ちしております。

第3話 脱出実行！！（前書き）

ちなみにタイトル「^ザThe ^{パワー}Power of ^{オブ}Fe^{フェ}ll^{ロー}ows^ズ（仲間の力）」の由来はジャンク・ウォリアーの効果名であります。

第3話 脱出実行！！

- 鉄也 Side -

僕は隠れ家に戻った後、もう少し準備をしていた。

脱出のための軍資金を稼ぎに行くのだ。

言い忘れていたが僕はトリップして以来、金がなかった。

どう稼いであったかという僕は捨ててあった電化製品をがらくた広場から集め、拾った道具で使いやすいように直しておき、それを

三千円〜一万円程度でサテライトの住民へ売り飛ばしたのだ。

電化製品として安いだろう。

とにかくサテライトでも評判になっていた。

電気屋のバイト経験3ヶ月がかなり役に立った。

ありがとう、電気屋の店長。 あんたのおかげで色々学んだ。

それはさておき、僕は直しておいた電化製品をリヤカーへ入れ、夜まで売り出し始めた。

その結果、3万円ぐらい稼げた。

資金が出来たので、そろそろ寝るか。

明日、僕の秘密兵器を紹介してやるよ。

翌日

午前7:00

『鉄也、時間だよ。』

この隠れ家も今日で最後だ。

ジャンクが僕を起こしてくれる。

サンキュー、ジャンク。

丁寧を起こしてくれる人がいれば目覚まし時計なんて必要ない。

目覚まし時計自体あまり好きじゃない。

気持ちよく寝ているときにビリビリ頭に響くから好きじゃないんだよな。

とにかく僕は起きた。

秘密兵器を紹介しよう。

ジャジャジャジャーン！

それはローラーブレード！！

ただのローラーブレードではないぞ。

モーター付だ。

前からこういうの欲しかったんだよ。

アニメの世界ばんざーい！！

以前拾ったローラーブレードを速く移動できるように改造しておいたのだ。

どれくらい性能が良くなっているかという点と履いただけでシャドウになれるぐらい。

あまりにも速過ぎるので練習がかなり必要だった。

ルチアーノよ、もしお前と出会ったらこれでお前のスキエルごと叩き潰す！！

とにかくD・ホイールがない僕にこれはいける！

さて、脱出の時間だ。

僕はローラーブレードをリュックに入れ、脱出を始めた。

- サテライト道路 -

脱出計画を実行して1時間・・・

考えてみれば原作知識が全然役に立っていない。

僕がトリップしていた場所が遊星との接触が全く無い場所だった。

普通、トリッパーは原作の主人公との接触になるはずだろ。

もしかしたらフォーチュンカップで会えるかもな。

ちなみに今のところ僕は普通に歩いている。

目的地へローラーブレードを使いたいけど、ここは慎重に動くべきだ
と思ったからだ。

ブーン！

「ん？ ああ！」

僕は直ちに身を隠した。

・・・・・・・・・・・・・・・・

よし、クリアだ。

危なかった。

バイクだ。

2台のバイクが走っていた。

はつきりしてはないが1台は見たことがあるような赤バイ、もう1

台のバイクは白バイだった。

おそらく白バイはセキュリティだろう。

.....

待てよ！？

今のはもしかして.....

.....

まあいいか。

今は自分自身を優先するのが先だ。

とりあえず僕は計画を続行する。

- 地下水道 -

これは僕の脱出ルートだ。

この水道はシティの水力発電へつながっている。

考えたところ、水道のほうに敵が見つかりにくいと思っていた。

僕が調べたルートなら脱出は成功する！！

ようし、ここで右だ。

30分後、僕は発電地域へのパイプラインへ入った。

パスワードが必要なロックがあった。

7桁か.....面倒だ。

僕は接着爆弾を貼り付けた。

爆発時間を10秒へセットしてっと。

. . . 9 . . . 8 . . . 7 . . .

爆発を起こしたら緊急バザーが鳴る。
早いうちに脱出をしないとな。

僕はローラーブレードを履き始めた。

. . . 2 . . . 1 . . .

さてつと . . .

『やっちまえ、鉄也!』

ああ、ジャンク。

ドッカーン!!

ドアが爆発すると同時に僕は飛び込んだ。

ビー!! ビー!! ビー!! ビー!!

緊急バザーが鳴り出した。

セキュリティがここへ来るには時間がかかる。

コースは一直線。

セキュリティが来る前に一気に走る!

「うおおおお!!」

僕はローラーブレードを一気に走らせる。

ここはスピードで決める!

時間が30分経過．．．．．セキュリティが来ていないのはまだ
ましだが、何も起きない？
とにかくおかげで僕は最終ルートへ入ることが出来た。

．．．．．

やっぱりおかしい。あまりにも簡単すぎる。
まさか何かが．．．

ウィーーーーーン．．．．．

シャッターが閉まった。

「しまった！！ 罠だったか！？」

くそ、どうすえばいい？
状況が難しくなった僕の前に巨大なロボットが現れた。

「デュエルカイシデュエルカイシ．．．．．タダチニデュエルカ
イシ．．．デュエルディスクスタンバイ．．．．．」

巨大ロボの腹部に板が現れた。
デュエルか？

ここを突破する為はそれしかないのか？
いいだろう、やってやる！

「デュエル！！」

「デュエルSTART!!」

鉄也 vs デュエルロボ

「僕のターン！僕はモンスターをセットし、カードを1枚伏せてターン終了!!」

鉄也 LP4000

手札4枚

セットモンスター1体

伏せカード1枚

「私のターン！私はカードを3枚セットし、ターン終了。」

デュエルロボ LP4000

手札3枚

伏せカード3枚

「僕のターン！僕はセットモンスター、ライトロード・ハンター
ライコウを反転召喚！！」

ライトロード・ハンター ライコウ

2

ATK200

「ライトロード・ハンター ライコウの効果により、真ん中の伏せ
カードを破壊！！」

『ギャオーン！！』

ライコウは相手の伏せカードを切り裂いた。
伏せカードは魔法の筒だった。
よし、良いカードを破壊した。

「今のリバース効果により、デッキから3枚カードを墓地へ送る。
そして僕はジャンク・シンクロンを召喚！ ジャンク・シンクロ
ンの効果により、墓地からスピード・ウォリアーを守備表示で特殊
召喚！！」

ジャンク・シンクロン

3

ATK1200

スピード・ウォリアー

2

DEF 900

「ジャンク・シンクロンでプレイヤーへ直接攻撃！」

「リバーズカードオープン、メタル・リフレクト・スライム！！
このカードは発動後、モンスターとして扱われる。」

メタル・リフレクト・スライム

10

DEF 3000

「だったら僕はジャンク・シンクロンの攻撃を中止し、緊急同調を
発動！僕はバトルフェイズにシンクロ召喚を行える！レベル2、
ライトロード・ハンター ライコウにレベル3、ジャンク・シンク
ロンをチューニング！集いし星が新たな力を呼び起こす。光さ
す道となれ！」

2 + 3 = 5

「シンクロ召喚！ いでよ、ジャンク・ウォリアー！」

ジャンク・ウォリアー

5

ATK 2300

「ジャンク・ウォリアーの効果発動！ このモンスターがシンクロ召喚に成功した時、自分フィールド上に存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力分アップする！！ パワー・オブ・フェローズ！」

57

レベル2以下のモンスター

スピード・ウォリアー（ATK 900）

ジャンク・ウォリアー

5

ATK 2300 3100

「ジャンク・ウォリアーでメタル・リフレクト・スライムを攻撃！」

スクラップ・フィスト!!」

バツシャーン!

水しぶきが出来た。

スライムだから当然だろう。

しかし上手く行かなかったな。

ジャンク・シンクロンで相手を直接攻撃してから緊急同調で決めるつもりだったのにな。

「カードを2枚セットし、ターン終了。」

鉄也 LP 4000

手札3枚

ジャンク・ウォリアー（攻）

スピード・ウォリアー（守）

伏せカード2枚

「私はエンドフェイズの瞬間、スケープゴートを発動する。このカードの発動により、羊トークンを4体特殊召喚する。」

羊トークン×4

1

DEFO

羊トークン!?

まさか防御系デッキか!?

「私のターン! 私は相手プレイヤーのジャンク・ウォリアーとス
ピード・ウォリアーをリリースし……………」

僕のモンスターをリリースだと?

もしかして……………」

「溶岩魔神ラヴァ・ゴーレムを相手フィールドに特殊召喚!」

溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム

8

ATK3000

やはりラヴァ・ゴーレムか!?

く、だったらこのデッキはロックバーンだ!!

「カードを1枚セットし、ターン終了。」

デュエルロボ LP4000
手札2枚
羊トークン×4(守)
伏せカード2枚

「僕のターン!!」

「その瞬間、ラヴァ・ゴーレムの効果発動。相手プレイヤーに1000ポイントのダメージを与える。」

鉄也LP4000 3000

「僕はトラスト・マインドを発動!僕はラヴァ・ゴーレムをリリースし...」

「罨発動!生贄封じの仮面。このカードがフィールド上に存在する限り、お互いのプレイヤーはモンスターをリリースすることが出来ない。」

やはりこうきたか。

これで僕はラヴァ・ゴーレムをフィールドに残してしまう。
ラヴァ・ゴーレムのレベルでシンクロなんて出来ないしどうすればいいんだ?

「だったらラヴァ・ゴーレムで攻撃!!」

「畏発動、グラヴィティ・バインド - 超重力の網 -。」

やはりな。

これで動きが封じられた。

仕方ない。

「モンスターをセットし、ターン終了だ。」

鉄也 LP3000

手札2枚

ラヴァ・ゴーレム（攻）

セットモンスター1体

伏せカード2枚

「私のターン。私はカードを2枚セットし、ターン終了。」

デュエルロボ

手札1枚

羊トークン×4（守）

グラヴィティ・バインド（発動中）

生贄封じの仮面（発動中）

伏せカード2枚

「僕のターン、僕は1000ポイントのダメージを受ける。」

鉄也 LP 3000 2000

「（まずは邪魔な羊を破壊するしかねえ。）僕はセットモンスター、デス・コアラを反転召喚！」

デス・コアラ

3

ATK 1100

「デス・コアラ・・・レベル3のモンスター・・・グラヴィティ・バインドでの攻撃が可能。 畏発動、落とし穴。」

落とし穴だと！？

ヒュルルルルルル・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・ドゥン。

デス・コアラは現れた瞬間、穴に落ちてしまった。
すまん、デス・コアラ。

またこんな役になってしまった。

「だがデス・コアラの効果は発動する。相手の手札1枚につき400ポイントのダメージを与える！」

デュエルロボ
手札1枚

デュエルロボ LP 4000 3600

「そして僕は切り込み隊長を召喚！」

切り込み隊長

3

ATK 1200

「そして切り込み隊長の効果により、手札から不意打ち又佐を特殊召喚！」

不意打ち又佐

3

ATK 1300

「そしてリバースカード、メテオ・レインを発動！！これで切り込み隊長と不意打ち又佐は貫通能力を得る！バトル！切り込み隊長で羊トークンを攻撃！そして不意打ち又佐は二回攻撃が可能。不意打ち又佐で羊トークン2体を攻撃！」

『戦えるものは私に続け！！』

『切り込み隊長に遅れを取るわけにいかん！！』

敵といっても羊だけだな。

僕の騎士と武士が羊を斬りに掛かった。

なんかイメージが残酷。

でもこれでダメージは3800。

これなら勝てる。

「私は闇の呪縛を不意打ち又佐へ発動。不意打ち又佐は攻撃力800下がり、攻撃不可能。」

何！ちくしょう・・・

不意打ち又佐

3

ATK 1300 500

「だが切り込み隊長の攻撃が残っている！」

デュエルロボ LP 3600 2400

「・・・ターン終了だ。」

鉄也 LP 2000

手札1枚

ラヴァ・ゴーレム（攻）

切り込み隊長（攻）

不意打ち又佐（攻）

伏せカード1枚

「私のターン。私はカードを1枚セットし、ターン終了。」

デュエルロボ LP2400

手札1枚

羊トークン×3(守)

グラヴィティ・バインド(発動中)

生贄封じの仮面(発動中)

闇の呪縛(発動中)

伏せカード1枚

これがラストターンだ。

ここで逆転のカードを引かなければ僕はここから出られない。

どうせこのターンで決まるならやるしかないな。

このドローカードに僕の未来が懸かっている……………

……………

「僕のターン、ドロー！」

鉄也 LP2000 1000

ようし、このカードで！

「僕は相手の生贄封じの仮面をコストに、トラップ・イーターを特殊召喚！！」

トラップ・イーター

4

ATK1900

僕のデッキの弱点といえば王宮の弾圧で特殊召喚を封じられるか、スキル・ドレインで効果を無効化させられる、あるいは墓地肥やしが出来なくなるくらいだ。

（他にも月の書とかミラフォされると危機に入ってしまうものもあるが。）

だがトラップ・イーターは相手の表側表示となっている罠カードを1枚コストに特殊召喚することが出来る。

このカードは結構頼りになる。

この状況も例外ではない。

「さらに、ラヴァ・ゴーレムをリリースし、邪帝ガイウスをアドバンス召喚！！」

邪帝ガイウス

6

ATK2400

「私は奈落の落とし穴を発動。邪帝ガイウスを破壊し、除外する。」

「僕は邪帝ガイウスの効果発動！ 闇の呪縛を除外する！！」

「ビビ！ これで不意打ち又佐は攻撃可能・・・」

不意打ち又佐

3

ATK500 1300

「さらに、僕はエンジェル・リフトを発動！ このカードは墓地から攻撃力1000以下のモンスターを特殊召喚することが出来る。」

ようし、これで大逆転だ。

「僕が特殊召喚するモンスターはライコウによって墓地に送られたザ・カリキュレーターだ！」

ザ・カリキュレーター

2

ATK0

「ザ・カリキュレーターの効果発動！！ レベルチャージ！！」

『切り込み隊長、レベル3・・・不意打ち又佐、レベル3・・・ト
ラップ・イーター、レベル4・・・私自身、レベル2・・・3+3
+4+2=12・・・12×300=3600』

ザ・カリキュレーター

2

ATK 3600

「3+3+4+2=12・・・ザ・カリキュレーターの攻撃力36
00・・・私のライフ以上・・・」

「バトル！ 切り込み隊長と不意打ち又佐で羊トークンを全滅！！」

『敵を全て倒せ！！』

『今夜はジンギスカンだ！』

今度こそ僕の武士と騎士は羊トークンを全滅させた。
すいません、羊さん達。

ジンギスカンって酷いなお前達。

「これでがら空きだ！ ザ・カリキュレーターで直接攻撃！！ デ
ジタルチャージビーム！」

ビビビビ〜！

仲間の力を集めたカリキュレーターのビームがロボットに直撃した。

デュエルロボ LP24000

「私の敗北・・・ロック解除・・・」

ウィーン・・・

シャッターが開いた。

ようし、ここからでられるぞ。
しかし出た瞬間・・・

ピカア！

「そこまでだサテライト！ おとなしく連行してもらおう！-」

僕はサーチライトの光を浴びていた。

ちくしょう、やはりデュエルロボは時間稼ぎだったか。

こうなったら煙幕だ。

僕は煙幕を投げた。

プシュウウウ・・・

「な！ これは！-？」

「煙幕か!？」

煙がセキュリティの眼をくらました。
今のうち逃げるぜ!!
僕はローラーブレードをフルスピードにした。

- ネオ童実野シティ -

ハア、ハア

出られたんだな、ここから。
やったー!! 自由だー!!

.

しかし喜んでいる場合ではない。
今後の計画を立てないとな。

ネオ童実野シティに着いたからにはゴドウィンと会えばいいだろうか。

ピカアア

ん?

考えているとスタジアムのような建物に巨大な光があった。
何だろう

うろつきまわったらセキュリティに見つかってしまいかもしれないのに僕はスタジアムに入っていた。

「こ、これは!!」

僕が見たものはものすごい展開だった。

赤いバイクと白いバイクが走りあい、美しく輝いている白い龍と悪魔と思わせる黒い龍が戦っていた。

そうか、このデュエルは……

ここから離れないと危ないのにあまりにも迫力のある戦いだったのでこの光景に僕はそのまま見惚れてしまった。

『おい鉄也、ちょっと危険じゃねえの？ それにまだ追われている身なんだぞ。』

「すまん、ジャンク。このデュエルだけは見逃すわけにはいかねえ。」

そうだ、このデュエル……こんな機会を見逃すわけにはいかん。

「キングは負けん! スピードスベル Sp!!」

……もうすぐ現れるな。

あれが。

……
……
……

ドクン！ ドクン！

「な、なんだ！」

「は！」

とうとうあの2人の前に現れたか・・・赤き竜が

「な、何だこれは！・・・S p - ジ・エンド・オブ・ストーリー！！！」

白いバイクの一人はこの状況になってもデュエルを続け始めた。

「頼む、スターダスト！」

赤いバイクの方も続けた。

『グオアアア！！！』

「そして、これこそが終幕となる！ 畏発動・・・うわああ！」

強大な衝撃波が現れた。

やばい！

ブワアアア！！

「うわああ！！！」

今の衝撃波に僕は巻き込まれてしまった。

．．．．．

2人は今の衝撃で吹き飛ばされてしまい、デュエルは中断になった。
これを予測していたはずなのに僕は驚いていたことがあった。
僕には妙な感じがしたのだ。

「うつっ．．．」

痛ててて．．．．．今の衝撃波のせいかな。

『おい鉄也！！　大丈夫か！？』

ジャンクか．．．．．ああ、大丈夫だ僕は．．．．．

ガクッ

『鉄也あ！！！！』

第3話 脱出実行！！（後書き）

ちなみに鉄也の服装はオレンジ色のフード付きトレーナーにジーンズです。

次回『第4話 フリーターと蟹とウニとじいさんと鼻毛のおっさん』

では、感想待ってます。

第4話 蟹とウニとじいさん（前書き）

鉄也 「タイトル長!!」

あと、彼の外見をBLACKCATのトレインに変更した。

第4話 蟹とウニとじいさん

- 鉄也 Side -

「ぎゃあああああ!!」

レーザーが僕の頬を焼きつけていた。

「ぐっ!」

頬を焼き付けられた後、僕はトラックの中へ放り込まれた。

.....

なんという災難だ。

あのデュエルのせいで僕は気を失ってしまい、結局セキュリティに捕まってしまった。

そして僕はネオ童実野シティへの不法侵入により、マーカーを付けられてしまった。

痛たたたた.....頬がまだズキズキする。

.....何かもう悲しくなってきた。

僕が一体何をしたというんだ。

フリーターとして頑張ってきた僕がなぜこんな目に遭ったんだ。
もう、最悪だ。

「うつうつ.....」

あまりの悲しさに僕の目から涙が流れ始めた。

ジユウウウ．．．．．

涙がマーカーに流れ、僕の頬を焼き付ける。

『大丈夫、鉄也？』

『クリクリ．．．』

精霊のカードであるジャンクとクリボーが僕を心配してくれている。
デッキは奪われたが、僕はこの2枚を隠し持つことに成功していた。

「ああ。すまん、心配かけて。」

そうだ。

ここで泣いても意味がない。

多少つらいが、一応計画を練らないとな。

そういえばサテライトの罪人は皆収容所へ連れられるんだよな。

だったらゴドウィンと会えるということか。

少し気が晴れた僕はトラックが収容所へ着くのを待つしかなかった。

．．．．．

ちなみに僕のマーカーは左の頬に 塗りつぶし だ。
じゃなくて 線 だ。

デザインは悪くないんだけど所詮、罪人の証なんだな。

そういえばと父さんがいつてたな。

ニートと罪人だけにはなるなと。

．．．．． すいません、父さん母さん．．． 訳分らない理由で
両方ともなってしまいました。

とりあえずゴドウィンと会って何をすればいいんだろう。
暗殺は却下だ。

あんなやり方は間違っているし、すればダイダロスブリッジを建設
することが出来なくなる。

ルルーシュよ、君のやり方では世界を変えられない。

だと言って交渉が聞く相手ではないよな。
とりあえず話をしてみればいいか。
そう考えている間に僕は収容所へ着いた。

- 収容所 -

PROFILE

NAME : TETSUYA MURAKAMI

ID : G2MA2-100

AGE : 15

HEIGHT : 170cm

Weight : 60kg

「ちょっと放してくれ！僕はゴドウィンと話がしたいんだ！」

僕はただゴドウィンと話がしたいのにセキュリティは全く話を聞いてくれない。

「うるせえ！ 長官は忙しいんだ。 サテライトのクスと構っている暇はねえんだよ！」

クスだとお！！

この野郎……………

拳を振りたいが今の僕は我慢するしかなかった。

ドン！

痛たたたた……………

セキユリティが僕を牢獄へ放り投げた。

もうちょつと手厚く入れてくれよ。

マーカーにぶつかってしまったじゃないか。

まだ出来立てだから痛いんだよ。

「ほらよ、これからここがお前の住む場所だ。 再教育の時間まで反省しておくんだな。」

一体何を反省しろと言った。

セキユリティよ、あんたらは本当に正義の味方なのか？

反省するべきはあんた達の方だ。

結局、外へ出られるまで待つしかなかった。

『話聞いてくれなかったな、鉄也。』

『クリクリ』

ジャンクとクリボーが困った顔をしている。

「大丈夫だ。何とかなる。」

『クリクリ』

クリボーが実体化した。

クリボーは不完全だが、実体化することが出来るのだ。
僕はクリボーを抱いた。

不完全な実体化だが、モフモフしてて気持ちいい。
現世でもそうだったが、クリボーにはすごく癒される。

「ありがとう、クリボー。」

そつだ・・・お前らがいてくれれば僕は何とか立ち上げれる。

・・・そつえばあのデュエルは凄かった。

あの2人のデュエリスト・・・サテライトの流れ星、不動遊星とデ
ュエルキング、ジャック・アトラスの因縁のデュエルだった。

そしてあのデュエル・・・自らの身を盾にして仲間を破壊から守る
星屑の龍、スターダスト・ドラゴンに、力の象徴といえる程強力な
破壊力を持つ悪魔のような龍、レッド・デーモンズ・ドラゴンの戦
い・・・赤き竜の出現・・・アニメで何度か見たが、本物を見た感
想はどう説明すればいいのだろうか・・・

・・・トリップしてきたアニメ好きなフリーターが言っても意味がない
な。

僕も現世では自分のカードの破壊を防ぐためにスターダスト・ドラゴンを使っていたんだがな．．．デッキの中身は現世とそのままでったのにスターダスト・ドラゴンは入っていなかった。

どうやら世界観がそうさせてくれなかったようだ。

ちくしょう．．．こうなったらマテリアルドラゴンとかで我慢するしかねえ！

だが僕はそのカード持ってねえ！

読者よ！　僕にマテリアルドラゴンを譲ってくれ！！　プリーズ！
！（笑）

ドン、ドン、ドン、ドン．．．

今の冗談はさておき、ノックが聞こえ始めた。

「何だよ、再教育の時間からまだ早いだろ！！」

せっかく機嫌が直ったのに。

そういえば新入り観劇会があつたな。

クリボーがカードに戻った。

ガチャッ！！

ドアのロックが解除された。

- 収容所内デュエル場 -

ドン！

また強制的に放り投げられた。

抵抗しねえから普通に歩かせてくれ。

僕の近くに青年と老人がいた。

青年の方は遊星だ。

おお遊星だー！

生遊星だー！

かつこいいー！！

ところであなたの髪型、一体何を使ってああなるんだ？

「へへへへへへ．．．．．」

「へへへへへへ．．．．．」

「ようこそ、わがデュエル場へ。」

リンチの中、ウニのような髪形をした人が笑っていた。

この人って元プロデュエリストの氷室ひむろだったよな。

たしかジャックとライディングデュエルやって惨敗して酷く落ちてたっけ。

気の毒だな。

てゆうかよくあんな髪型でヘルメットかぶれたんだ。

人の事を悪く言っちゃいけないけど。

「おおー！！ あんたってもしかして元プロデュエリストの氷室

仁だろゝ!？」

なんか空気読めない老人が氷室を見てはしゃいでいた。
たしか名前は矢薙^{やなぎ} 典膳^{てんぜん}だったっけ。

「ほれ！ ほれ！ ほれゝ！ ほれ！」

じいさんはカードを見せ始めた。

たしか『水晶ドロク』に『アシヨカピラー』のような超レアカードでありながらメリットが小さくデメリットが激しい『秘宝デッキ』を持っていながらデュエルのやり方もカード効果も全く理解していない人だったよね。

「お前は？」

「……………持っていない。」

「お前サテライトからの不法侵入者だったな。 それじゃあデッキなんて持つてゐるわけないな。 サテライト住民っただけで下の下だ。」

「……………」

氷室でめえ…………

僕の拳が震えた。

殴りたいがここはデュエルで解決しなければならないと決まっっている。

それに彼は後で改心するんだから大目に見てやろつ。
しかし遊星クールだな。

「氷室ちゃんとデュエルできるなんてわしゃあ、幸せだろ？」

僕が回想している間に話が續いていた。
このじいさん本当に空氣読んでないな。
てゆうか遊星ほんとど無口だな。
なんか言ってやれよ。
僕も無口だけど。

「「デュエル!!」」

氷室 vs 矢薙

まあ、結果は分ってるけど暇だから見ておこうかな。
その時……………

「おい新入り、何無口になってんだよ？」

リンチの一人が僕に話しかけてきた。
アウトオブ眼中だと思っていたがやっぱり僕も注目された。

「え？ まさかデュエルですか？」

「決まってるんだろ、ここはデュエルで格付けが決まるんだよ!!
お前はこの雑魚山（ざいごやま）とデュエルをしてみろ。」

はあ…………仕方ない。

てゆうか雑魚山と言う名前なんだ。
名前だけにモブキャラだなこの人。

「いいだろう、デュエルだ！」

「新入りの癖に生意気な。格の違いを見せてやる、サテライトのクズが。」

ピキ・・・

僕はデッキを取り出した。

メインデッキはセキュリティに取り上げられていたが、何とかサブデッキを奪われることを免れた。
代わりにたのむぜ、お前達。

「デュエル！！」

鉄也 vs 雑魚山

「じゃあ先攻を譲ります、先輩。」

「サテライトの癖に生意気な。俺はブラッド・ヴォルスを召喚！」

ブラッド・ヴォルス

4

ATK1900

ブラッド・ヴォルスか。
先攻として悪くはないな。

「カードを1枚セットし、ターン終了だ。」

雑魚山 LP4000

手札4枚

ブラッド・ヴォルス（攻）
伏せカード1枚

「（くくく．．．さあ、このブラッド・ヴォルスを越えるモンスターを召喚して来い。 召喚してきた所を奈落の落とし穴で返り討ちにしてやる。」

「僕のターン！ アンティーク・ギア僕は古代の歯車を召喚！」

古代の歯車

2

ATK100

「（攻撃力100・・・奈落の落とし穴は通用しねえ。だが攻撃力も守備力も低い雑魚だ。）何雑魚モンスターを攻撃表示で召喚してんだ。馬鹿か？」

「古代の歯車の存在により、古代の歯車を手札から特殊召喚！」

古代の歯車

2

DEF800

「（モンスターが2体・・・生け贄の素材が成立したか。）」

遊星がこつちを見てる。

彼もこのデュエルに興味を持ち始めたようだ。

「（だがこつちには奈落の落とし穴がある。二重召喚を発動してもこのカードで返り討ちだ。）」

あの伏せカードは落とし穴か何か？
だがそんなの関係ない。

「僕は手札から強制転移を発動。」

「何！」

「このカードはお互いのプレイヤーが場のモンスターを決め、交換するカードだ。僕は攻撃表示である古代の齒車を選択。」

「う、こっちはブラッド・ヴォルスだ。」

「こういう使い道もあるんだよ。ブラッド・ヴォルスで古代の齒車を攻撃！」

ズバッ！

雑魚山 LP 4000 2200

「く、こいつ・・・」

「（上手い。壁モンスターを作っただけではなく相手のモンスターを奪い取るとはなかなかやるな。）」

遊星も今の戦略に感心しているようだ。

「カードを2枚セットし、ターン終了だ。」

鉄也 LP 4000

手札1枚

ブラッド・ヴォルス（攻）

古代の歯車（守）

伏せカード2枚

「俺のターン！ 俺はまずライトニング・ボルテックスを発動！」

ズガガガン！

僕のモンスターが全滅したか。

「さらに早すぎた埋葬を発動！！ ライフを800払い、墓地からデーモンの召喚を特殊召喚！！」

雑魚山 LP 2200 1400

デーモンの召喚

6

ATK 2500

「さらにデーモンの召喚をリリースし、偉大魔獣ガーゼットをアドバンス召喚！！」

偉大魔獣ガーゼット

6

ATK 0

なるほど。あのモンスターは下級モンスターをリリースするだけで一気に強力になるからな。

「偉大魔獣ガーゼットはリリースしたモンスターの元々の攻撃力の倍になる！！」

偉大魔獣ガーゼット

6

ATK 0 5000

「ガーゼットで直接攻撃！」

おおっと、これはやばい。

「畏発動、ガード・ブロック！！ 自分が受けるダメージを0にし、カードを1枚ドロウする。」

「何！」

鉄也 LP 4000

「チッ！ カードを1枚伏せ、ターン終了だ。」

雑魚山 LP 1400

手札0枚

伏せカード2枚

「（さあ、かかってくるがいい。伏せカードは奈落の落とし穴とミラーフォース。どんな強力なモンスターが来ても返り討ちだぜ。）」

今伏せたカードはミラフォか？

うん、絶対そうだ。

「僕のターン。僕は墓地から古代の歯車を除外し、岩の精霊タイタンを特殊召喚！」

岩の精霊タイタン

4

ATK 1700

「（フン。 アドバンス召喚の布石か。 召喚して来いよ。 返り討ちにしてやる。」

「僕は岩の精霊タイタンをリリースし、地帝グランマーグをアドバンス召喚！」

地帝グランマーグ

6

ATK 2400

「畏発動、奈落の落とし穴！！ これでお前のモンスターは破壊され、ゲームから除外される。」

奈落だったか。

タイタンを奈落の落とし穴で破壊すればいいのに。

「だが召喚したのに変わりはない。 地帝グランマーグの効果発動。 このモンスターがアドバンス召喚に成功した時、セットしたカードを1枚破壊できる。」

「な！ ミラーフォースを破壊する気か？」

何ばらしてんだよ。

てゆうか伏せカードのパターンが氷室と同じだ。

「僕が破壊するのは自分の伏せカードだ。」

地帝グランマーズは落ちる際に僕の伏せカードを潰した。
これでいい。

「馬鹿め。 そんなことをして何の意味がある。」

「これが最初から狙いだ。 セットしたカードはギア・タウン歯車街。 このカードが破壊された時、古代の機械と名の付いたモンスターを手札、デッキ、または墓地から特殊召喚することが出来る。」

「な、何い！！」

「僕は古代の機械巨竜を特殊召喚！」

古代の機械巨竜

8

ATK3000

「攻撃力3000の上級モンスターへの布石だったか。 だが、ガ
ーゼットには勝てん。」

「僕は手札から禁じられた聖杯を発動！ ガーゼットの攻撃力を400ポイント上げ、効果を無効にさせる。」

「何！？」

偉大魔獣ガーゼット

6

ATK 5000 400

「古代の機械巨竜で偉大魔獣ガーゼットへ攻撃！ ギアクラッシュ・ダイブ！！」

僕の機械巨竜が魔獣に突撃してくる。

「させるか！ 聖なるバリア・ミラーフォース・発動！！」

バチチチ・・・

ミラーフォースは発動せず、相手のデュエルディスクに『ERROR』と文字が表示されていた。

「無駄だ！ 古代の機械が攻撃する時、相手は魔法、罠を発動することが出来ない！！」

「何だとおおお！！」

「残念だったな。奈落の落とし穴でタイタンを破壊すればこんな事にならなかったのに手遅れだ。人をクズ呼ばわりしたことを反省しな。」

ドッカーン！

雑魚山 LP2200 0

相手は気絶した。

反省してろ。

まあ、せっかく会ったんだから遊星に話しかけてみよう。

振り替えてみると遊星はもう氷室とデュエルを始めていた。

おお！ 遊星のデュエルだ！

本物のデッキじゃないけど見ておこう。

遊星 vs 氷室

- 省略 -

「俺はトライアングルOを発動!!」

「うわあああ!!」

氷室 LP3000 0

いいデュエルだったな。

でも秘宝デッキはOCG出来るわけないよね。

とにかく氷室と遊星は和解した。

じいさんと氷室も仲直り。

めでたしめでたし。

僕は遊星に話しかけた。

「いいデュエルだったよ、遊星。」

「ああ、ありがとう。 お前のデュエルもなかなか良かったぞ。」

「いやあ、光栄です。 今度はあなたとデュエルをしてみたいです。」

「そうか。 デッキを取り戻したら相手にしたいものだ。 ところでお前はなぜ俺の名を知っている？」

「え？ あ。」

しまったああああ！！

遊星はまだ僕に名乗っていなかったんだ！！！！

どうしよう……

この言い訳なら……

「そりゃあ……… あんたはサテライトでチーム・サティスフ
アクションの一員として有名でしたから。」

「そうか。」

納得した！？

良かった………

「あ、名乗り遅れました。 僕は村上 鉄也と申します。」

「そうか、よろしくな。」

こうして僕と遊星は友達になった。

とりあえず一件落着………

「88号！」

………しなかった。

「取調べだ。 所長直々に行く。 来い。」

やばい、遊星がピンチだ！

「お前ら！ 遊星に指一本触れさせはせん！」

僕は拳を握った。

だが遊星が僕を止めた。

「よせ。 お前は関わらない方がいい。」

「遊星……………」

遊星は抵抗せずに連れて行かれた。

仕方がない、この状況で僕は何もすることは出来ない。

遊星よ、どうかあの鼻毛所長の拷問から生き延びてくれ。

- Side End -

第4話 蟹とウニとじいさん（後書き）

第4話でした。

次回はデュエルがありません。

次回「第5話 みんなの思い」

とりあえず感想お待ちしております。

第5話 黒き痣、そしてみんなの思い（前書き）

今回はデュエルが短いです。

代わりに結構長いです。

では第5話をお楽しみに。

第5話 黒き痣、そしてみんなの思い

- ??? Side -

）

ボクは左腕を眺めていた。

あの時から感じる。

間違いない。

やはり彼はボクと同じ痣を持っているんだね。

でも彼はまだ気付いていないみたいだね。

一度デュエルを試してみたいな

でも彼は今収容所に送り込まれたっけ。

あとで会いに行けばいいか

「おい、何をブツブツ言ってる！？ お前のターンだろうが！！」

おおっと、いかん。

試合中だった。

こんな面倒くさい事はさっさと終わらせよう。

「ああ、ごめんごめん ちょっと気を取られてさ。 さて、ボクのターンだったね」

??? LP4000

手札3枚

ドル・ドラ（攻、効果使用済み）
伏せカード1枚

相手プレイヤー LP500

手札1枚

A・O・J カタストル

DNA移植手術（発動中、光属性指定）

伏せカード2枚

「（伏せカードはミラーフォース。これならカタストルが破壊されても返り討ちに出来る。そしてカタストルが破壊された場合、次のターンで手札の使者蘇生でカタストルを復活させ、もう1枚の伏せカード、リミッター解除で逆転だ。）」

「ライフポイントに大差があるが、今の状況だと闇属性との戦闘を行わない限りバトルで無敵を誇るA・O・Jカタストルを率い、DNA移植手術で全てのモンスターを光属性に変更させた朝日選手の方が有利だ！彼は一体どうするのか！？」

「このターンで終わらせるよ。ボクはドル・ドラを除外し、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを特殊召喚。」

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン

10

ATK2800

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン
闇属性 光属性

「来たああ！ 彼のフェイバリットカード、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンだああ！ しかし今のレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンは光属性、カタストルを倒すことは不可能。一体どうするつもりだ！？」

「ボクはレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンの効果を発動墓地からデルタフライを特殊召喚」

デルタフライ

3

ATK1500

デルタフライ

風属性 光属性

「さらに、ボクは巨竜の羽ばたきを発動。 レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを手札に戻し、フィールド上の魔法、罠カードを全て破壊する。」

「（まずい！ デルタフライを除外してもう一度ダークネスメタルドラゴンを特殊召喚させるつもりだ！） 破壊される前に速攻魔法、リミッター解除を発動！！ このターン、エンドフェイズまでカタストルの攻撃力は倍になる！！」

A・O・Jカタストル

5

ATK2200 4400

「なるほどね、これだとレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン
を再召喚してもカタストルを破壊できない。 でも甘いよ ボク
はまだ通常召喚を行っていない。 アックス・ドラゴニートを召
喚
」

アックス・ドラゴニート

4

ATK2000

「そしてデルタフライの効果発動 このモンスターはこのモンス
ター以外のレベルを1つ上げることが出来る。 もちろんボクはア
ックス・ドラゴニートのレベルを上げる。」

アックス・ドラゴニユート

4
5

「レベル3、デルタフライにレベル5、アックス・ドラゴニユートをチューニング 静かなる闇よ。 光と共に世界を清めよ。 シンクロ召喚 舞え、ダークエンド・ドラゴン！」

3 + 5 = 8

ダークエンド・ドラゴン

8

ATK 2600

「さらにダークエンド・ドラゴンの効果発動 このモンスターの攻撃力を500ポイント下げることにより、相手モンスター1体を墓地へ送る。 ダーク・イヴァポレイション」

「何!？」

ダークエンド・ドラゴン

8

ATK 2600 2100

シューウウウウ

これでカタストルがダークエンドによる闇の霧によって消される。

「くう . . .」

「そしてダークエンド・ドラゴンを除外し、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを特殊召喚」

「何だと!?!」

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン

10

ATK 2800

別にそんな事をしなくてもダークエンド・ドラゴンで十分だけどねでも、可能だったら自分の一番好きなカードで決めたい。それがボクのやり方だ。

「レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンで直接攻撃 ダーク

ネス・メタル・フレア!!」

「うわあああ!!」

相手プレイヤー

LP5000

『勝者、漆黒のキング、黒崎^{くろやま} シュウ!! またまた無敗だ!!
このキングに次ぐ彼の無敗戦歴に勝るものはいないのか!?!』

また勝っちゃった。

でもこの程度じゃつまらないね。
そろそろ彼に会いに行こうか。
待っててくれよ、村上クン

- Side End -

・ゴドウィンSide・

・治安維持局・

「高須所長によれば、サテライトの男にシグナーに繋がる功績は現時点では認められないとの事でした。引き続き検査と観象を続けるということです。」

「うむ。それでもう一人の件は？」

「収容所が後から検査する予定であります。」

「よろしい。」

「面白い展開になってきましたね。ヒッヒッヒッヒ……………」

さて、会って見ましようか。

サテライトの男に。

そして黒き痣を持つ者に。

・Side End・

- 鉄也 Side -

- 収容所内デュエル場 -

自由時間の中、僕は激しく悩んでいた。

遊星が取調べに連れ去られて1時間経った。

電流拷問されて顔に鼻毛飛ばされて可愛そうに。

だが今の僕は遊星を心配しているわけではない。

いや、心配はしているが彼なら無事だからな。

僕が悩んでいるのは別の理由だ。

僕はなぜゴドウィンに会おうと思ったことだ。

会ってもゴドウィンが話を聞くはずがない。

よく考えたらサテライトの差別が終わるまで普通に数ヶ月待てばよかったかもしれない。

おそらく僕は原作知識を持っていながらこのままサテライトに引きこもるのを好んでいなかったのだろう。

あるいはニートの生活だと生活に問題なさそうだが、僕は一刻も早くフリーターの人生に戻りたかったかもしれない。

それに僕はこの世界でデュエルを楽しみたかっただろうな。

結局僕は色々な理由でサテライトを抜けたんだろう。

まあ、理由はどうあれこうなってしまったんだ。

収容所から出られるまでこのまま過ごすしかないだろう。

僕は手持ちのメインデッキから救うことが出来た5枚のカードを眺め始めた。

ジャンク、クリボー、そしてジャンク・シンクロンを素材とする3体のモンスターだ。

カードを眺めている間に看守達が来た。

僕はカードを隠した。

「100号!」

100号?

また誰が取り調べさせられると言っのか?

こんなの原作になかったような気がするんだが。

「100号!!」

100号さんよ、ああいうのは無視しておけ。

取調べに入れられたら大変な目に遭うぞ。

「100号、聞こえないのか!？」

痛たたたた!

看守が僕の髪を引っ張った。

100号とは僕のことだったか!?

ちくしょう。

わかったわかった。

行くから髪を引っ張らないでくれ!

- 収容所内検査室 -

収容所所長、鷹栖によって僕は無理やり連れ去られた。

「ぎゃああああ!!」

僕は取り調べられ始めた。

何で僕がこんな事に？

なぜシグナーでもない僕がこんな検査を受けなければならないんだ？

「電圧を上げる。」

鷹栖の野郎・・・

後で覚えてろ！

「ぎゃああああ!!」

- 監獄内 -

ボタン

「うん・・・」

『鉄也あー!!』

マジ酷い目に遭った。

電流流されてあの所長が僕に向かって鼻毛を飛ばしてた。

遊星、お前の気持ち分かるぜ。

しかしなぜ僕を検査する必要があったんだろう？

うつうつ．．．．．気分が悪い。

僕は寝入ってしまった。

．．．．．
．．．．．
．．．．．

「ぐぐぐ」

「100号!」

「はっ!」

今の声で目が覚めた。

何だ？

「お前に面会だ!!」

面会？

何で僕に面会が．．．．．

ガチャッ

ロックが解除され、客が入って来た。

「こんばんは」

黒髪をして黒いコートを着た青年が僕に挨拶をして着た。
色の割りにはすごい明るい人だな。

一体彼は誰だ？

「面会時間は5分だけだぞ。」

「会いに着たよ、村上くん」

「!？」

驚いた。

なぜ彼は僕の名を知っているんだ？

それ以前に何でトリッパである僕が存在を知っている!？

「君の誕生日だからね、ケーキ買って来たよ。」

え？ 誕生日？

そういえば現世でもそうだったが、6月18日・・・僕の誕生日だ。
サテライトで生活に困難だった僕はすっかり忘れていたな。

「HAPPY BIRTHDAY」

誰かが覚えてくれているのは嬉しいが、何であんたが知っているん

だ？

「あの………」

「何も聞かなくていい。君が聞きたいことなどすでに分かっている。なぜボクが君の存在を知っているかどうかだろ。」

「!？」

なんで分かるんだ!？

「ちょっとあんた!　もしかしてプロデュエリストの黒崎さん!？」

隣の部屋にいた矢薙のじいさんが声を掛け始めた。

彼のそばには遊星がいた。

彼はもう大丈夫なようだ。

「え？　プロデュエリスト??」

彼はもしかしてオリキャラなのか？

こういう小説にはよくあるパターンだが。

「ああ、そうです。　そういえば自己紹介を忘れていたね。　始めまして、ボクは黒崎　シュウ。」

「鉄也君、知らないのかい？　彼はたった3ヶ月で百戦錬磨を達した有名プロデュエリスト、デュエルキングと対当する『漆黒のキング』という異名を持つ黒崎　シュウさんだよ!　最近では彼とジャック・アトラスのどっちが強いかを人々が語り合ってるんだぞ。」

まだジャックとデュエルしたことが無いという意味なのか。
どれくらい強いんだろう。

「彼のようなデュエリストを生で見れるなんて夢のようじゃ〜」

「いやあ、そこまで褒められるとはね」

「どうか、わしのカードにサインくれ〜!〜!」

てゆうかそれよりなぜ彼が僕の存在を知っている!?

「ああ、そうそう。 君の痣はまだかい?」

「え、痣?」

僕に痣だと!?

もしかして僕が検査に連れて行かれた理由も痣と関係があるのか!?
この世界で僕は一体何者なんだ!?

「まだ無いようだね。 まあいい。 ボクがなぜ君の存在を知っている理由を教える前に君が何者かを当ててみようか?」

え?

「君はこの世界とは違う世界から来た。 そしてその世界で存在していた君はこの世界がどう動くのか知っていた。 違ukai?」

な!

当たっている!

まさかあんたもトリッパーか?

「もしかしてあんたもその世界から．．．」

「それは違う。　ボクはこの世界の存在だよ。」

だつたら何で．．．．．

「答えはすべてこの痣が教えてくれたんだ」

シウさんは左腕の袖を巻いた。

すると、彼の腕には黒い痣があった。

痣の形は翼が生えた龍の形であった。

「そして君はサテライトから抜けようとして逆にここに捕まってしまい、ボクと出会った。　なぜだと思う？」

なぜってもちろんサテライトで引きこもるのが嫌だったからだ。

しかしあんたと会ったのは．．．．．偶然じゃないな。

もしかして痣が導いたとか言うんじゃないだろうな、この人．．．

．．

「それは痣によつて導かれたんだよん」

やっぱり！？

チクショー！！

痣が原因でこんな目に遭ったというのか！？

しかし待てよ。

「そついえば、あの竜が現れた時、少し妙な感じがしていたんだが．．．．．」

「赤き竜の事かい？　ボクも見てたね、キングとサテライトのデュエル。君を待つためにいたんだけどね、あんな展開になるとは思わなかったよ。でもあれでは黒き痣の反応が薄いんだよね。」

あのデュエルを見てた！？

じゃあ、僕があのだスタジアムへ来ることを知っていたというのか！？

「正解」

ウソオォー！！

てゆうか心読まれた！

「あ、そろそろ時間だね　話はまた今度続けよう。　バイバイ

あと誕生日おめでとう。」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！」

ガチャッ

彼は歩き去っていった。

- Side End -

- シュウSide -

君はまだ痣が目覚めていない。

無理やりやらせても意味がないけどね

しかし急がないとね。

今後の展開にシグナーでは不十分な可能性がある。

ゴドウィンに黒き痣を持つ者を先取りされたら大変な事になるね。
とりあえずボクはじいさんの監獄へ近づいた。

「ほら、じいさん。 あんたが欲しかったサインだよ」

ボクはじいさんにサイン色紙をあげた。

「おお！！ ありがとー黒崎さん！ 大事にするよー！」

プロデュエリストならファンの期待に応えないとね。

「お前・・・鉄也と何を話していた？」

サテライト・・・いや、不動博士の息子か。

「君とは関係ない話だよ、不動くん」

君の痣も興味はあるんだけど、今はそんな暇なんてないんだよ。

ボクは一刻も早く黒き痣を持つ者、『アンデサイデッド』を集めなければならぬ。

- Side End -

- 鉄也 Side

「はあ……………」

一体彼は何者だったんだ？

僕に痣があつたというのか？

しかし彼の痣はダークシグナーの色ではなかった。

だったら悪のシグナーではないんだな。

でも一体あの痣は何なのだ？

僕にも痣があつたとは……………まあ、トリッパ―

によくあるパターンだな。

……………少し安心した。

僕がこの世界にトリップして来た意味があつた感じがする。

『鉄也!』

「なんだ、ジャンク？」

『何か良く分からないんだけど、誕生日だしケーキ食べなよ。』

そうだな。

とりあえず黒崎さんが持ってきた箱を開けた。

中に入っていたのはモンブランだった。

モンブランだー!!

僕は食べ始めた。

美味い………

トリップして以来、こんな美味しい食べ物食べた事がない。

自分が痣を持っている事実を知った事に気をとられていたんだが、礼を言うのを忘れてしまったな。

また会えるのかな……

今度会ったときにはちゃんと『ありがとう』と言わなきゃな。それにもっと説明を聞く必要があるしな。

『誕生日おめでとっ、鉄也!』

『クリクリ〜!』

ああ、サンキュー2人とも。

僕はケーキを頬張った。

- 翌日 -

僕たちは強制教育プログラムで場所を移された。
ゴドウィンが演説をしていた。
別に聞いている余裕なんてなかった。

30分後・・・

演説が終わり、遊星達と歩き去る時……………

「88号と100号は残れ。」

僕もか。

つまりゴドウィンも黒き痣の存在を知っているという訳か。
だがゴドウィンとの接触の手間が省けた。

まるで裏ワザでラスボスにたどり着いた気分だ。

とにかく遊星とゴドウィンの会話を無視した。

もう内容はすでに知っているからな。

会話が終わった。

「さて、あなたとの会話に移りましょう。」

「丁度いい。僕もあんたとの会話したかったからな。」

「ほお。では私が聞きたいことを知っていると？ 遊星君、あなたはこれと関係ありません。ここから去ってください。」

「鉄也……」

「大丈夫だ、遊星。」

遊星は歩き去っていった。

「ゴドウィン、あいにく僕に痣はまだ無い。」

「どうやら黒崎君があなたに伝えたようですね。」

「ああ。それだけではない。僕はあんたが何を企んでいるか分かっている。」

「それがどうしたんですか？」

「それを辞めてくれ。人々の命を犠牲にすることは間違っている！」

「どうやら分かっているようですね。しかし、それは同意しません。」

「なぜだ？」

「それは私にとって必要な力だからです。」

省略

会話が終わった。
駄目だった。

全く成果が出なかった。

僕も説得下手なんだよな。

全て知っているとこのゴドウィンは僕をそのままにした。
確かにサテライトがトップスの前では何も出来ない状況だ。

僕は部屋へ連れられた。

結局、原作に任せるしかないのか。

「これがお前の部屋だ。」

隣の部屋には遊星ともう一人いた。
たしか青山だったな。

「やあ、お隣さん。」

「こんにちは。」

釈放されるまでしばらくここで過ごすしかないな。

- Side End -

- 遊星 Side -

俺は他の皆と共に場所を移された。

俺は痣と竜のことを考え始めた。

一体この痣は何だ？

そしてあの竜は・・・

「おい、遊星。」

鉄也が外から声をかけた。

氷室とじいさんも来ていた。

俺は部屋を出て、皆と話し始めた。

「鉄也に氷室、それにじいさん。 お前らもここに？」

「なあ、なんでわしらはここにいるんじゃない？ ここは長期収容所じゃろ。」

「ああ、ボランティア活動をしてすぐに出られる立っただろ。」

「それはこっちだって同じだ。」

「本当、何でここに移されたんだ？」

どうやら皆ここへ移されたらしいな。

「・・・本当に出られないのか？」

「ああ。ここに移されたからには半年は出られない。下手をすれば長引いてしまう。」

「俺はここから出てやるべき事がある。」

「それは誰だって同じだよ、遊星。」

「とりあえず、ここに来たからにはあの鷹栖という所長に気をつけたほうがいい。奴は権力で振り飾って好き勝手するとしてもない野郎だ。」

「夜」

「なあ遊星、もし良かったら俺と一緒にここを出ないか？」

「？」

俺が考えている時、青山が俺に声をかけた。

「見ろよこれ。」

青山がベッドのクッションを持ち上げると、そこには大穴があった。

「半年も掛ったんだぜ。少し外へ出てみたくないか？」

- 長期収容所外 -

「で、ここから脱出できるんだぜ。　　すげえだろ。」

「これは？　　脱出した時点でマーカーに反応してしまうぞ。」

「大丈夫。　仲間が一時的にネットにハッキングをかけてくれる。
しばらくの間、収容所はマーカーに反応しない。　その間に脱出
つてわけだ。　　どうだ？」

「．．．．．いいだろう。　　しかしこの脱出に加えて欲しい人が
3人いる。」

「氷室にじいさん、そしてあの少年か？」

「ああ。」

「べつにいいぜ。　　脱出時間は明日の午後8時から9時。　　この機
会を逃せば次はない。　　いいな。」

俺は中へ戻り、鉄也、氷室、そしてじいさんに脱出の事を伝えてお
いた。

- Side End -

- 鉄也 Side -

「ぐああああ！！ あああああ！！」

ビッ！ ベッ！ バキィ！！

収容所の中では悲鳴が響いていた。

氷室だ。

氷室が凶器所有者としてはめられて、それで遊星のことを聞き出そうとされて拷問にあっってしまったんだ！

あの鼻毛野郎・・・

「氷室！！」

「氷室は重大の罪を犯した！！ この責任は囚人全てに責任を取ってもらう！！ この1年間、お前らの自由時間没収！！ そして房から出ることを禁止する！！」

「ちょっと待て！！ それじゃあ独房と変わらないじゃないか！」

「そうだそうだ!!」

「黙れ!! 貴様らゴミが何をほざく! 貴様らはこの世に不要な人間共だ!」

この野郎・・・調子に乗りやがって・・・

「貴様らゴミ共に自由も権利もない! 残るのは永遠に影で生き残る惨めさだ!! 貴様等などこいつと同じ目に遭わせてやる!! うわっはっはっは!!」

もう我慢ならん。

ドガッ!!

僕はドアをぶち壊した。

つんつん。

「ん?」

鷹栖がこつちをへ振り向いた。

バキィ!!

「ウボア!!」

僕は鷹栖をぶん殴った。

こんな事をしなくても原作通り遊星がデュエルをすれば良かったのだが、それでは僕の気が治まらなかった。

それに取り調べの仕返しもある。

「貴様あ！！何をしゃがる！！」

「お前のような奴がいるとムカつくんだよ。人をゴミ呼ばわりしてそうやって弱いものを虐めるのがそんなに楽しいか？ そんなお前は最低な人間だ！」

「貴様あ・・・お前ら、このガキを捕まえろ！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

ガチャン！！

所長を殴った結果、束縛されて監獄に戻された。
束縛とはなんたる屈辱だ。

「鉄也。」

隣の遊星が話しかけた。

「すまん、遊星に青山。脱出計画に僕を外してくれ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・安心しろ、俺が奴を片付ける。」

サンキュー、遊星。

- Side End -

- 遊星 Side -

「おいお前．．鉄也の言うとおりだ。この世に不要な人間などいない。お前がやっていることはただの弱いもの虐めだ。」

鉄也、俺もお前同様、高鷲を許せない。
しかし殴るのはやりすぎだ。
だが安心しろ、ここからは俺が何とかする。

「これはこれは．．サテライトのゴミが英雄気取りですか。」

「．．そして氷室は無実だ。奴は本物のデュエリストだ。何も企んだりはいしない。」

「ほお。それは俺様もデュエリストと知ってての発言か？ 奴は本物で俺は偽者だとも？」

「．．．．．」

「へっへっへ．．．よからう。ならば全員の前でデュエルで決着をつけよう。お前が勝てば氷室の罪に目をつぶり、あのガキの件も多めに見てやり、自由時間を奪わないと約束してやる。ただし！ お前が勝ったら？」

「．．．一生お前の言いなりになってやる。」

ざわざわ．．．．．

「いいだろう！ デュエルは今夜の８時半だ。分かったな！？」

「．．．．．いいだろう。」

「お、おい．．．」

悪いな、青山。

俺は仲間を置いていかない。

だがお前がせつかく立てた脱出計画だ。

一人で逃げてくれても構わない。

「たのむ！ わしの大切なカードなんじゃ！！ 取らないでくれ！」

じいさんのカードが取り上げられ始めた。

「へへへへ．．．」

「返してくれ、返してくれ．．．．．」

バキィ！！

「このデッキは没収だ！」

やはり卑怯な手を使ってきたか。

「いいかあ！　これがお前らの最後の時間だ！！　悔いの内容に過ごすんだな。」

ざわざわ・・・・・・・・・・

「ああ・・・・・・・・」

「くそう・・・・・・・・」

「遊星、何であんな事を！？　今夜は脱出をすると決めたはずだ！」

「仲間をおいて本当の自由はない。　それだけだ。」

「だがお前はカードを1枚も持ってないだろ！　どうするんだよ！？」

確かにそうだ。

氷室とじいさんはデッキを没収された。

俺のデッキはセキュリティに保管されている。

これでは大口を叩いただけとなってしまう。

すると、同僚達がやってきた。

「遊星、ずいぶん派手なことをやってくれたじゃねえか。」

.....

同僚達は俺を橋へ連れて来た。

同僚の一人が話し始めた。

「いいか・・・デュエリストってのはな、肌身離さずとっておく1枚のカードが必ずあるんだよ。だからこのカードをお前に託すぜ。」

彼はそう言っただけ俺にカードを渡した。

「俺のカードも使え!!」

「俺のも!!」

「これで鷹栖を懲らしめてくれ!!」

「俺も!!」

「俺たちの代わりに頼むぜ!!」

みんな・・・

「…………お前らのカード、確かに受け取ったぞ。」

「…………おおおおお!!」「」「」

ありがとう、お前達。

俺はお前達のカードを信じて必ず勝って見せる！

「遊星！！」

「！！」

監獄の奥の方から声が響いた。

鉄也だ。

鉄也が俺を呼んでいる。

「何だ？」

「僕のカードも受け取ってくれ！！」

鉄也は束縛の袖から4枚のカードを出した。

「……………このカードは！！」

「僕の代わりに使ってくれ、遊星。 あんたならこのカードを使いこなせるはずだ。 頼む！！（デッキデスで墓地へ送られてしまう可能性が高いが、役に立ててくれたら嬉しい。）」

「……………ありがとう、鉄也。 お前のためにも必ず勝って見せる。」

- 午後 8 : 3 0 -

囚人の権利を賭けたデュエルが始まった。

「デュエル！！」

遊星　VS　鷹栖

俺はお前達の為にも必ず勝つ！！

第5話 黒き痣、そしてみんなの思い（後書き）

今回の話はいかがでしたか？

オリキャラが追加されました。

すいません、ヒロインはまだ出ません。

黒き痣という設定はいきなりすぎたでしょうか？

たぶんつまらなかった一面もあるような気がしますけど、次回は遊星のデュエルになります。

それでは次回『遊星VS鷹栖 唸れ、怒涛の大魔神!!』

お楽しみに！

第6話 遊星V S 鷹栖 怒涛の大魔神！！（前書き）

遊星と鷹栖のデュエルです。 内容が変わっています。

第6話 遊星vs鷹栖 怒涛の大魔神!!

- 鉄也Side -

自由を賭けたデュエルが始まった。

原作通りなら遊星が勝つ……だったらいんだが。

先攻はもちろん遊星だった。

たしか最初は世紀の大泥棒だったな。

「俺のターン、俺はサファイアドラゴンを召喚！」

サファイアドラゴン

4

ATK1900

「おお！ 俺のカードだ！ 行けえ、遊星！」

え、サファイアドラゴン？

世紀の大泥棒じゃない！？

もしかして僕がカードを貸したためにデッキの内容が変わってしまったのか！？

ああ、どうしよう……

「ターン終了だ。」

遊星 LP4000

手札5枚

サファイアドラゴン（攻）

「へっへっへ．．．言い忘れていたがこのデュエルディスクは勝った者しか外せねえぜ。」

「？」

「俺様のターン！！俺はC・リペアラー^{チェーン}を召喚！」

C・リペアラー

4

ATK1600

「さらに、手札からデーモンの斧を発動！ C・リペアラーに装備
！！」

C・リペアラー

4

ATK 1600 2600

「バトルだ！ C・リペアラでサファイアドラゴンを攻撃！！」

ズバッ！！

C・リペアラの斧がサファイアドラゴンを切り裂いた。

「ああ、俺のサファイアドラゴンが！！！」

「くっ．．．」

遊星 LP 4000 3300

やばい！

遊星にダメージが！！

バチバチバチバチ．．．．．ビリリィ！！

「ぐああああ！！！」

「遊星！！！」

遊星のデュエルディスクから電流が流れた。

「へっへっへ．．．このデュエルディスクはプレイヤーがダメージを受けた場合、そのプレイヤーに電流が流れる仕組みになってるんだ。勝った者しか外せないというのはこういう事だ。」

「はあ、はあ．．．（このデュエルはやばい．．．）」

「さらにC・リペアラーの効果発動！！ このモンスターが相手モンスターを戦闘によって破壊した場合、相手プレイヤーは300ポイントのダメージを受ける！！」

「何！！」

遊星 LP 3300 3000

バチバチ．．．

「ぐああああ！！」

本当にやばい．．．最初のターンでライフが1000ポイントも削られた！

原作より酷い状況だ！！

ちくしょう、何で僕はあんな事をしたんだ！？

「カードを1枚伏せ、ターン終了だ！」

鷹栖 LP4000

手札3枚

C・リペアラー（攻）

デーモンの斧（発動中、C・リペアラーへ装備）

伏せカード1枚

「俺のターン！（よし、このカードだ！）俺はサイバー・レイダーを召喚！！」

サイバー・レイダー

4

ATK1400

サイバー・レイダーか。

あれならいける！

「あれは俺のカードだ！！」

「俺はサイバー・レイダーの効果を発動する！ このモンスターが召喚、反転召喚、特殊召喚に成功した場合、モンスターに装備されている装備カードを破壊、またはこのモンスターに装備することが

出来る！！ 俺はデーモンの斧をこのモンスターに装備！！」

サイバー・レイダー

4

ATK 1400 2400

C・リペアラー

4

ATK 2600 1600

「バトル！！ サイバー・レイダーでC・リペアラーを攻撃！！」

サイバー・レイダーがC・リペアラーへ向かって斧を振りかざした。
だが……………

「畏発動！！ アンカー・ソウル（アニメオリジナル）！！ この
カードは発動後、C・リペアラーの装備カードとなり、C・リペ
ラーは戦闘によって破壊されなくなる！！」

ズバァ！！

しかしC・リペアラーはビクとしなかった。

「…………だが、ダメージは発生する。」

鷹栖 LP4000 3200

「ようし、いいぞ！ これで奴にも電流だ！！」

そうだといいんだが、氷室さん、あいつは卑怯な奴なんだよ。

「ぐああああ．．．．．」

「？」

鷹栖は電流を浴びた演技をしている。

「なんてね。 おおっと、このディスクは故障のようだ。」

そうだ。

あいつは最初から自分の身を危険にさらす様な真似をせず、相手だけ痛めつける好き勝手な野郎だ。

この卑怯者が。

「あいつは始めから自分に電流が流れないようにしているんだ！！」

「卑怯だぞ！！」

「そうだそうだ！！」

「こんなデュエル、中止しろ！！」

しかし鷹栖は涼しい顔して鼻毛を抜いてやがる。
マジム力つく。

「ふん！ しょうがないだろ。このディスクは故障なんだから。
しかしデュエルは始まったら中止は出来ない。さあ、お前のタ
ーンを続ける！」

「・・・カードを1枚セットしてターン終了だ。」

遊星 LP3000

手札4枚

サイバー・レイダー（攻）

伏せカード1枚

「俺様のターン！俺はC・スネークを召喚！」

C・スネーク

3

ATK800

「C・スネークをサファイア・ドラゴンに装備！！このモンスター

「は相手モンスターに装備することができ、攻撃力・守備力を80ポイント下げるのさ!」

サイバー・レイダー

4

ATK 2400 1500

「くっ．．．これでサイバー・レイダーの攻撃力がC・リペアラより低くなった。」

「C・リペアラでサイバー・レイダーを攻撃だ!」

ドン!!

遊星 LP 3000 2900

ビリリイ!!

「ぐああああ!!」

「さらにC・リペアラの効果により、300ポイントのダメージだ!」

遊星 LP 2900 2600

バチバチバチバチ．．．．．

「ぐああああ！！」

ガクッ

遊星は今のダメージで膝を突いてしまった。

「はあ、はあ．．．」

「どうやらゴミ共のカードでは俺様に勝つのは無理のようだな。」

「はあ、はあ．．．好きに言うがいい。俺は皆が託したカードで必ずお前に勝つ！」

「ほお、それはたのもし。　　だったらもしそのデッキが破壊されたらどうなるかな？」

「何！？」

「C・スネークの効果発動！　このカードを装備したモンスターが戦闘によって破壊された場合、そのモンスターのレベル分だけデッキからカードを墓地へ送る！！」

「何だと!!」

「サイバー・レイダーはレベル4だ! デッキから4枚のカードを墓地へ送りな!」

墓地へ送ったカード

激流葬

悪夢の鉄檻

団結の力

ザ・キックマン

遊星のデッキ:19枚

「俺様はターン終了だ。」

鷹栖 LP3200

手札3枚

C・リペアラ

ソウル・アンカー(発動中、C・リペアラへ装備)

まずい。

もうデッキが半分以下になっている。

もしかしたら原作で活躍していたカードも墓地へ送られた可能性があるかもしれない！

「俺のターン！ 俺は強欲な瓶を発動！！ デッキからカードを1枚ドロースる！」

「ほお。 デッキをさらに縮めるつもりか。」

「そして俺は巨大ネズミを召喚し、カードを1枚伏せてターン終了だ！」

巨大ネズミ

4

DEF 1450

遊星 LP 2600 デッキ枚数17枚

手札3枚

巨大ネズミ（守）

伏せカード2枚

「俺のターン！（へっへっへ．．．その伏せカードは威嚇する咆哮。 そのカードが発動されたターン、俺様は攻撃できない。 だがそんなの関係ない。）」

「この瞬間、リバーカードオープン！ 威嚇する咆哮！！ この
ターン相手プレイヤーは攻撃宣言をすることが出来ない！」

あれはいいカードだ。

だが鷹栖には別の方法があるんだよ！

「ほお、考えたな。 だがこっちにも手がある。 俺はC・リペア
ラーの効果発動！ C・スネークを墓地から特殊召喚！」

C・スネーク

3

ATK800

「さらにこの瞬間、地獄の暴走召喚を発動！！ このカードは攻撃
力1500以下のモンスターが特殊召喚に成功した時、同名モンス
ターを3体まで特殊召喚することが出来る！！ 俺はデッキからC・
スネークを2体特殊召喚する！！」

C・スネーク×2

3

DEF800

「これでお前も特殊召喚が出来るぜ。」

「……………このデッキに巨大ネズミは1枚しか入っていない。」

「へ、へ、へ……………だろうな。そして、俺様はC・シューターを召喚——！」

C・シューター

2

ATK1100

「C・シューターの効果発動——！ 1ターンに1度、Cと名のついたモンスターをリリースし、相手プレイヤーに800ポイントのダメージを与える！ C・スネークをリリース——！」

ドギューン——！！

遊星 LP2600 1800

「ぐああああ——！」

「さらに、俺様は永続魔法、ポイズン・チェーン、そして永続魔法、パラライズ・チェーンを発動!!」

「はあ、はあ・・・（ポイズン・チェーンにパラライズ・チェーン？）」

やばい！

あのポイズン・チェーンはアニメ効果だ！
あれはきつい!!

「ポイズン・チェーンはこのターン、攻撃しなかった場合、自分の『C』と名のついたモンスターのレベルの合計分だけ相手プレイヤーはデッキからカードを墓地へ送る!!」

「く・・・威嚇する咆哮が裏目に出たか。」

「レベルの合計は12！　12枚カードを墓地へ送りな。」

墓地へ送ったカード

ならず者傭兵部隊

ジエネティック・ワーウルフ

デーモンの斧

リビングデッドの呼び声

トライホーン・ドラゴン

2人3脚ゾンビ

ゴブリン突撃部隊

砂塵の大竜巻

ピラミッド・タートル

ドラゴン・ゾンビ

挑発

死者蘇生

デッキ枚数：5枚

「まずいぞ！ もうデッキが10枚切った！！」

「さらにパラライズ・チェーンの効果発動！！ 効果によって相手のデッキからカードが墓地へ送られるたびに相手プレイヤーへ300ポイントのダメージを与える！！」

遊星 LP1800 1500

「ぐああああ！！」

「ターンエンドだ。」

鷹栖 LP3200

手札0枚

C・リペアラ（攻）

C・スネーク×2（守）

C・シューター（攻）

ソウル・アンカー（C・リペアラへ装備）

パラライズ・チェーン（発動中）

ポイズン・チェーン（発動中）

これは僕の責任だ！！

もし僕が遊星にカードを貸さなかったらこんな事にはならなかった！
なのに、僕は自分のこだわりのせいで逆に状況を変えてしまったんだ！！

「俺のターン！！」

まだやるというのか！？

もういい……………

「もうやめろ、遊星！！」

言わずにはいられなかった。

「！？ 鉄也？」

「もういい、あんたは十分良くやった！！ もうこれ以上続けるな！！」

「何を言っている？ 俺はまだやれる。」

「もういいんだ！ こんな状況も僕が原因なんだ！！ 本来あんた

が勝てるデュエルを僕がカードを渡したせいでもう勝つことは出来ないんだよ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「鷹栖！！ 頼む、デュエルを中止してくれ！！ 代わりに僕が前の言いなりになる！」

もう駄目だ！！

これ以上続けたら遊星はここから出られなくなる！
だったらわが身に代えて原作を何とか直すしかない！！

「てめえ、てめえが原因で遊星が勝てないとはどういう事だ！？」

「どう責任取るんだよ！！」

「この野郎！！」

同僚達が僕に罵声を掛け始めた。
無理もない。

僕が原因だから・・・・・・・・

「やめろ、お前達！！」

「！？」

遊星・・・・・・・・

「鉄也もお前達と同じくカードを俺に託したんだ！ 彼の気持ちもお前らと同じだ！！ 力になりたい思いを傷つけるのは止める！！」

．．．．．僕を庇うというのか？

「鉄也．．．なぜお前が自分自身を攻めているのは分からない。
だが、お前は俺のためにカードを託してくれた。それがどんな力
ードであろうと俺はお前を信じてこのデュエルに勝って見せる！！
だから最後まで見ててくれ！！」

！！

遊星．．．．．

そうだ．．．これがこのアニメが好きになった理由だ。
遊星が僕を信じてくれるなら僕も遊星を信じる！！
ありがとう、遊星！！

「がんばれえ！！ 遊星！！」

「俺のターン！！」

パツ！！

突然明かりが消えた。

「な、なんだ？ 停電か！？」

青山だ。

彼が脱出を始めたんだ！

「（あいつは脱出したか。）」

パツ！！

明かりが戻った。

「どうやら停電のようだったな。デュエル続行だ!!」

「俺は巨大ネズミを攻撃表示に変更!! さらに罠カード、リミット・リバー스를発動!! 墓地からならず者傭兵部隊を特殊召喚!!」

巨大ネズミ

4

ATK1400

ならず者傭兵部隊

4

ATK1000

「俺は巨大ネズミでC・リペアラーを攻撃!!」

巨大ネズミはC・リペアラーへ走っていった。

「あんちゃん、何やっておるんじゃ? C・リペアラーの方が上じやぞ!」

「いいや、巨大ネズミは戦闘によって破壊された場合、デッキから

攻撃力1500以下の地属性モンスターを特殊召喚することが出来る！ 遊星はダメージを覚悟してまでその効果を発動させるつもりだ。」

ドッカーン！！

C・リペアラは突っ走ってくる巨大ネズミを粉碎した。

遊星 LP 1800 1600

バチチチ！！

「ぐうう！！」

「馬鹿め。C・リペアラの効果により、相手にさらに300ポイントのダメージを与えるぞ！！」

遊星 LP 1600 1300

「ぐああああ！！」

一体何を召喚するんだ、遊星？

攻撃力1500以下じゃ意味がないぞ!!

「はぁ、はぁ……俺は巨大ネズミの効果を発動!! 俺はデッキから逆ギレパンダを特殊召喚する!!」

『ガウウ!!』

逆ギレパンダ

3

ATK800

逆ギレパンダ!!

その手があったか!

「自爆特攻してまで攻撃力たったの800だと? なめてるのか?」

「逆ギレパンダは相手モンスター1体につき、500ポイント攻撃力がアップする!! お前のモンスターは4体!! よって、攻撃力が2000ポイントアップされる!」

「何い!?!」

逆ギレパンダ

3

ATK 800 2800

「バトル！！ 逆ギレパンダでC・スネークを攻撃！！」

ズバババ！！

逆ギレパンダはC・スネークをダンボールのように切り裂いた。

「攻撃の手口を間違えたな！ C・スネークは守備表示だ！」

「逆ギレパンダは守備モンスターを攻撃した時、攻撃力が守備力を超えていればその数値分、相手にダメージを与える！！」

「何！！」

鷹栖 LP 3200 1200

ビリビリビリビリ・・・・・・・・バチチチー！！

「お、俺のデュエルディスクが・・・・・・・・・・うああああああ！！」

今度は鷹栖だ。

青山があいつのデュエルディスクに電流が流れるようにしておいたのだ！！

グッジョブ、青山！！

「ば、馬鹿な．．．なぜ俺様のデュエルディスクに電流が．．．」

「フィールド上のモンスターが減った為、逆ギレパンダの攻撃力が下がる。」

逆ギレパンダ

3

ATK 2800 2300

「俺はならず者傭兵部隊でC・スネークを攻撃！」

『トアアア！！』

ならず者達はC・スネークをボコボコにした。

逆ギレパンダ

3

ATK 2300 1800

「さらに、ならず者傭兵部隊をリリースし、C・リペアラを破壊
！！」

「何だと！？」

逆ギレパンダ

3

ATK 1800 1300

いいぞ、遊星！

これでC・リペアラでモンスターを増やす事を封じ、相手のモン
スターが一気に減った！

「俺はメインフェイズ2に入り、ドーピングを発動！！ドーピン
グを逆ギレパンダに装備！！」

逆ギレパンダ

3

ATK 1300 2000

ドーピング？

あの状況でまだデッキに残ってたのか！？
てゆうか誰だよ、今頃ドーピングを取っておいてる奴は？

今はデーモンの斧や団結の力という立派な物があるぞ！！
まだ悪魔の口づけをつけた方がましだぞ。
まあ、これで逆ギレパンダのデメリットを十分補えるな。

「所長！！ 侵入者を連行しました！！」

おお、青山！！

「お前・・・」

「貴様・・・早く俺様のデュエルディスクの電源を切ってくれ！」

「残念だが、それは出来ないぜ。」

「どういうことだ！」

青山は制御システムを破壊したのだ。
だから電源を切るのは不可能だ。

「貴様・・・このサテライトのゴミを蹴散らした後に殺してやる！！」

「なんとも言えよ。 どうせお前は遊星に勝てはしない。」

おお、遊星もそうだが青山、お前格好いいぞ！！

「うぬぬぬ・・・」

「・・・お前はなぜ戻ってきた？」

「お前の言う通りさ。仲間を捨てて逃げたらきつとそこで足枷になる。そうして生きたって、本当の自由は手に入らない。」

「うん．．．．．もしお前がこいつの罪を独断で裁くのなら、新たな条件をデュエルに追加だ。もし俺が勝ったらこいつの脱走に目をつぶってもらう。」

「いいだろう！もしお前が負けたらこいつもお前と道連れだ。」

「デュエルを再開だ！俺はカードを2枚伏せ、ターン終了だ！」

遊星 LP1500 デッキ枚数：4枚

手札1枚

逆ギレパンダ（攻）

ドーピング（逆ギレパンダへ装備）

伏せカード2枚

「おのれ．．．．．ゴミはゴミらしくほざいてろ。（奴の2枚

の伏せカードは強制的にバトルをさせるバトル・マニア．．．そしてカードを除外させなくする王宮の鉄壁。俺様の収容所の監視力メラで覗いておいたからな。王宮の鉄壁は問題ない。あれはブラフだ。しかしバトルマニアが発動されればポイズン・チェインの効果は発動できない。このターン、逆ギレパンダの攻撃力を越えたモンスターを召喚しなかったら俺様の負けだ。だったら．．．俺様のターン！」

「俺はそのスタンバイフェイズにバトル・マニアを発動！！ お前のモンスターは全て攻撃表示となり、バトルフェイズに攻撃を行わなければならない！」

「ほお．．．俺様はチューナーモンスター、C・コイルを召喚！！」

C・コイル

4

ATK 1100

そういえばC・コイルってアニメではレベル4だったな。

「さらに、レベル2、C・シューターにレベル4、C・コイルをチューニング！！」

2 + 4 = 6

「シンクロ召喚！ いでよ、C・ドラゴン！！」

C・ドラゴン

6

ATK 2500

「くっ……………」

逆ギレパンダ

3

ATK 2000

「遊星……………」

「へっへっへ……………C・ドラゴンで逆ギレパンダを攻撃！」

ドン！！

逆ギレパンダはC・リペアラーの攻撃によってつぶされた。

遊星 LP 1500 1000

「ぐああああ！！！」

「遊星！」

「さらに、C・ドラゴンの効果発動！！ このモンスターが戦闘ダメージを与えた時、デッキから3枚カードを墓地へ送る！」

「くっ・・・」

墓地へ送ったカード

残骸爆破

瓦礫の王

世紀の大泥棒

デッキ枚数：残り1枚

「デッキからカードが墓地へ送られた為、パラライズ・チェーンの効果発動！！」

遊星 LP 1000 700

バチバチバチバチ・・・

「ぐああ!!」

遊星のライフは残り700・・・
そしてデッキは残り1枚・・・
もし残骸爆破が来なかったら遊星の負けだ!!

「これで俺様のターンは終了だ。」

鷹栖 LP1200

手札0枚

C・ドラゴン（攻）

ポイズン・チェーン（発動中）

パラライズ・チェーン（発動中）

「俺のターン!!」

遊星は最後のカードを引いた。

「俺は黙する死者を発動!! 墓地に存在している通常モンスター
を守備表示で特殊召喚する! 俺は2人3脚ゾンビを特殊召喚する
!」

2人3脚ゾンビ

3

DEF800

最後のカードは残骸爆破じゃなくて黙する死者だったのか！？
これじゃ……………勝てない！

「ぶわっはっはっはっは！！　どうやらここまでのようだな。　お
前の手札は0。　ライフポイント700で伏せカードも無い。　あ
るのは雑魚モンスターだけだ。」

「ああ、このターンで終わりだ。　お前の敗北だな。」

「何！？」

「俺はお前が監視カメラで俺の手札を盗み見していたのは初めから
分かっていた！！　だから俺は最初からこのカードを取っておいた
！！」

遊星は袖の中からカードを出した。

「何！？」

「俺はチューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを召喚！
（鉄也、お前のカードを使わせてもらっぜ。）」

『行っくぜえ！！』

ジャンク・シンクロン

3

ATK1200

あ、あれは僕のモンスターだ！
たのむぞ、ジャンク・シンクロン！

「がんばれ、遊星！！」

「チューナーモンスターだと！？」

「このモンスターは召喚した時、墓地からレベル2以下のモンスター
1を守備表示で特殊召喚することが出来る！！」

メタモルポット

2

DEF600

「レベル2、メタモルポットとレベル3、2人3脚ゾンビにレベル
3、ジャンク・シンクロンをチューニング！！」

「まさかあのモンスターか！？」

あれだ・・・遊星はあのカードを使う気だ！

「集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます。光さす道となれ！」

2 + 3 + 3 = 8

「シンクロ召喚！粉碎せよ、ジャンク・デストロイヤー！」

『フン！！』

ジャンク・デストロイヤー

8

ATK 2600

4本の腕を持つ魔神のようなモンスターが現れた！！

『…………おぬし、鉄也ではないな。』

ああ、デストロイヤー。

遊星はデュエルが出来ない人たちの代わりにデュエルをしているんだ。

今の間だけ頼むぜ。

『しかしおぬしは鉄也と同じオーラ．．．いや、それ以上の感覚がする。いいだろう、力を貸してやろう。』

「こ、攻撃力2600！！　だが、ライフは残る！　俺様の勝ちだ！」

「ジャンク・デストロイヤーの効果発動！！　このモンスターはシンクロ召喚に成功した時、チューナー以外のこのモンスターに使用したシンクロ素材の数までフィールド上のカードを破壊することが出来る！！」

「何！？」

いいぜ、遊星！！

「俺はC・ドラゴンとパラライズ・チェーンを破壊！　タイダル・エナジー！！」

ズガガガン！！

ジャンク・デストロイヤーが放つ巨大なエネルギー弾に鷹栖のカードは粉碎した。

ようし、勝てる！！

「いいぞ！　これで相手のフィールドはがら空きだ！」

さあ、お前の罪を数えろ！！

「行けえ、遊星！」

「バトルだ！ ジャンク・デストロイヤーでプレイヤーへ直接攻撃
！！」

「デストロイ・ナックル！！」

僕も言ってしまった。

いや、言わずにはいられなかった。

ドッガン！！

鷹栖 LP12000

ビリビリ・・・・・・・・・・バチチチチチチ！！

「ぐぎゃあああ！！」

鷹栖は丸焦げになった。

「あんちゃん！」

「やったー！！ 遊星の勝ちだー！」

「勝ったぞー！ 遊星が勝ったぞー！」

「これで俺たちはあいつから縛られることは無いぞー！！」

やったな・・・遊星。

翌日

原作通り、鷹栖はゴドウィンにしょつ引かれた。
そして、遊星は収容所から解放される事になった。
僕達は遊星にさよならと言ったことにした。

「やったな、遊星。」

「もしゴドウィンがいなかったら大変なことになっていたな、遊星。」

「わし等も後から解放されるらしいぞ。」

「よかったな。」

「あんちゃん、このカードを。」

じいさんは『トーテムポール』を遊星に渡した。

心使いはいいんだけどじいさんよ、そのカードに今後の出番は来ないぞ。

「遊星、このカードを持っていけ。ダウンタウンの『ブートレッグ』に雑賀^{さいが}という男がいる。このカードを見せればお前に手を貸

してくれる。」

氷室は遊星に『大牛鬼』のカードを渡した。

「……………ありがとう。」

遊星は僕へ振り向いた。

「鉄也…………お前のカードのおかげで俺は勝てた。礼を言う。」

「いやあ…………僕の方こそ諦めかけてた自分を救ってくれて感謝しますよ。」

遊星、お前には借りが出来た。

いつか返させてもらっぜ。

「今度会えたらお前とのデュエルを試してみたいな。」

「ああ、楽しみにしてるぜ。」

遊星は去った。

また会おうぜ、遊星。

S i d e E n d

第6話 遊星vs鷹栖 怒涛の大魔神!! (後書き)

もうすぐサテライト脱出編終了です。

では、次回『釈放・・・そして今後の計画』をお楽しみに。

第7話 釈放・そして今後の計画（前書き）

不死武士シンクロ作ってみたい。

第7話 釈放・・・そして今後の計画

- 鉄也 Side -

遊星が収容所から解放されて3日経った。

自由時間は沢山あったが、結局暇であった。

しかーし・・・・・・・・・・

ゴドウィンが僕を解放してくれたのであった!!

多分僕を利用するためのが、そんなことはどうでもいい!!
収容所とおさらばだ!!

バンザーイ!!

バンザーイ!

バンザーイ!!

バンザーイ!!!

バンザーイ!

ばんざーい!

ばんざーい.....

.....

考えたほど嬉しくない。

結局これからどうすればいいんだ？

僕は氷室、じいさん、そして青山にさよならを言った後、外へ出た。
一応デッキと荷物は返してもらった。（スタンガンと爆弾は没収された。）

お金は隠しポケットに入っていたので取られずに済んだ。

しかしリュックに入っていたサブデッキ1個取られた！！

スクラップデッキが……ドラゴン高いんだぞ！！

おのれ、セキュリテイめ！！

……仕方ないが、探すのを止めておこう。

どこにあるか分かんないし、見つけようとしたらまた捕まるかもしれない。

もしかしたらセキュリテイ個人が取ったかもしれない。

すまん、スクラップ達よ。

しかしどうしようかな……

黒き痣が覚醒してないしどうやって覚醒させれば良いかどうか分からない。

……

……

……

.
.
.
.

そうだ！

シグナーとデュエルすれば良いかも！

それなら覚醒する可能性は高い！

しかし誰とデュエルすれば良いんだ？

遊星は今頃雑賀の隠れ家にいるだろう。

場所が分からんから無理だ。

ジャックはゴドウィンのせいでアクセスが難題だから止めておこう。

龍可^{るか}は どうやってデュエルさせれば良いか分からんし、

突然聞き出すのもなんだか止めておこう。

クロウはどっかでカードでも盗んでるだろう てゆうか

彼に痣なんてまだねえ！

だったら

僕は行き先を決めた。

「ようし、ジャンク、クリボー！！ 行こうぜ！！」

『OK！！』

『クリクリ〜!』

まあ、この先どんな危険が起きるのかは百も承知だ。
だったら、冒険気分で行こう!

なんとかなるって!

わずかなお金と明日のパンツさえあればなんとかなる!!

行こうぜ、ジャンク、クリボー!

次の行き先は……………『ダイヤモンドエリア』!!

- Side End -

サテライト脱出編『完』

第7話 釈放・．．そして今後の計画（後書き）

読んでくれてありがとうございます。

やつとサテライト脱出編終了です。

次からフォーチュン・カップ編始まります。

それでは次回『神風の少女』をお楽しみに！

感想お待ちしております。

六武衆復活だど！？

彼らの時代が帰ってきたか！！

第8話 神風の少女（前書き）

1日で3話更新できた!!

第8話 神風の少女

- Narration -

デュエルアカデミア

スピーカーが鳴った。

『神風さ〜ん！ 実技試験が始まります〜す！！ 直ちに試験場へ来て下さい！！』

ある人はデュエルアカデミアの屋上でマンガ本を顔に被せながら寝ていた。

服装からして少女であつた。

「ぐ〜〜」

『お〜い起きろよ、結衣^{ゆい}！！』

「ん〜うるさいよ、ファルル。」

茶色の翼が生えた銀髪の青年によって長い緑色の髪を後ろに結んだ少女は起こされた。

- ??? Side -

ふあああ

「よく寝た。」

『実技試験がもうすぐ始まるぞ!!』

どうやら私はデュエルアカデミアの屋上で漫画を読んでいたらしい間に眠ってしまった様だ。

そして私は精霊のカード、ファルルによって起こされた。

「あともう少し」

『寝るな!』

「いいじゃないか、徹夜で勉強したんだから。」

『時間の6割をゲームと深夜アニメに使って徹夜どころじゃないだろ!! それを夜更かしというんだよ!!』

「いいじゃないか、スバル達の初任務を見たかったんだから。それにフェイトやなのはの格好いいシーンも見えたかったし。」

『だからそういうのは録画しておけ!』

「分かってないな、ファルルは。アニメは生の方が一番いいんだ

よ。」

『学生はアニメより試験の方が大事だろ！』

「でも試験の結果も良かったじゃないか。」

『それはいい。だが成績優秀なのは良いけど夜更かしは良くないぞ。』

「はいはい、ではお休み〜」

『寝るなあ！！』

―5分後―

―試験場―

「~~~~」

結局ファルルがうるさいので来てしまった。

ちなみに私の名は神風^{かみかぜ} 結衣^{ゆい}。

デュエルアカデミア中等部3年生だ。

得意科目は体育以外。

好きなものはゲーム、漫画、そしてアニメ（特になのは）。
ちなみになのはとフェイトは私の嫁だ！！

勿論デュエルも好きだ。

まあ、簡単に言えば私はオタクだ。
他には喫茶店でバイトをしている。
残りの説明はまた今度ね。

「~~~~」

『歌っていないで準備しろ!』

「はいはい。」

私は試験場へ入った。

相手は男子生徒であり、デュエルディスクを用意して待っていた。
彼は余程イライラしていた。

「うぬぬぬぬ……………」

「ファルル、この人イライラしてるね。」

『そりゃあ、そうだろ。　時間に遅れてアニソン歌いながら入って
来たんだから。』

「こいつ…………ナメテやがるのか!？」

イライラしてるわね。

でも、これは作戦の1つ。

気が散っていたらまともに考えることが難しくなる。

これはかつて宮本武蔵がわざと巖流島へたどり着く時間に遅れるこ
とで佐々木小次郎に勝った戦略だ。

『いや、結衣の場合はただ昼寝してただけだろ。』

ファルルは呆れて言った。

まあまあ、細かいことは気にせずに。

「遅れてすみません、デュエル始めましょう。」

「フン、まあいい。俺様をイライラさせた分、デュエルで返してやる!」

仕方ないわね。

まあ、遊んでやるか。

「デュエル!!」

結衣　v s　生徒A

「私のターン! お前倒すけどいいよね? 答えは聞いてない!! 私にはモンスターをセットし、カードを2枚伏せてターン終了!!」

結衣　LP4000

手札3枚

セットモンスター1体

伏せカード2枚

「俺のターン！ 俺は手札からジェネラルデーモンを捨て、バンディモニウム万魔殿
- 悪魔の巣窟 - を手札に加える！ さらに、手札から二重召喚を発
動！ バンディモニウム万魔殿を発動し、インフェルノクインデーモンを召喚！」

インフェルノクインデーモン

4

ATK900

「さらにジェノサイドキングデーモンを召喚！！」

ジェノサイドキングデーモン

4

ATK2000

なるほどね、クイーンでキングの攻撃力を上げ、大ダメージを狙っ
てるのね。

「ジェノサイドキングデーモンでセットモンスターを攻撃！ 炸裂、
五臓六腑！！！」

キングデーモンの腹から蟲が出てきた。
ちよつと気持ち悪いよ。

ブウォー!!

私のセットモンスターが虫達を振り払つた。

「何!? モンスターが破壊されていないだど!?」

シールド・ウイング

2

DEF900

「私のセットモンスターはシールド・ウイング。このモンスターは1ターンに2度、戦闘によって破壊されない。」

「ちつ・・・ターン終了だ。」

生徒A LP4000

手札2枚

ジェノサイドキングデーモン（攻）

インフェルノクインデーモン（攻）

万魔殿・悪魔の巣窟・（発動中）

「（俺の手札にはデイスカバード・アタックがある次の俺のターンでジェノサイドキングデーモンはクインデーモンの効果で攻撃力が4000となり、クインデーモンをリリースしてキングデーモンの直接攻撃で勝ちだ。仮にキングデーモンが破壊されたとしても手札のデスルークデーモンで蘇生させればいい。」

「よし、私のターン！（あ、いいカードだ。」

「スタンバイフェイズに入り、俺のデーモン達は攻撃力が1000ポイントアップする！」

ジェノサイドキングデーモン

4

ATK2000 3000

インフェルノクインデーモン

4

ATK900 1900

「私はシールド・ウイングをリリースし、アームド・ドラゴン・V5をアドバンス召喚！」

アームド・ドラゴン LV5

5

ATK 2400

「アームド・ドラゴン LV5でインフェルノクインデーモンを攻撃！ アームド・バスター！！」

ズガガガン！！

「くっ．．．」

生徒A LP 4000 3500

「私はカードを1枚セットし、ターン終了。 私はこのターンのエンドフェイズにアームド・ドラゴンの効果発動！ アームド・ドラゴン LV5をLV7へ進化させる！」

アームド・ドラゴンがさらに凶暴な姿に変わった。

アームド・ドラゴン LV7

7

ATK 2800

結衣 LP 4000

手札 3枚

アームド・ドラゴン LV7（攻）

伏せカード 3枚

「ちい、俺のターン！俺はジェノサイドキングデーモンでアームド・ドラゴンを攻撃！」

「（伏せカードを警戒せずに攻撃とは意外と単純ね。）畏発動、和睦の使者！アームド・ドラゴンは戦闘によって破壊されずダメージも受けない。」

「（もし相手の手札に攻撃力3000以上のモンスター、あるいは装備カードがあったらキングデーモンは破壊される。だったら・・・）カードを1枚セットし、ターン終了だ！」

生徒A LP 3500

手札 2枚

ジェノサイドキングデーモン（攻）

万魔殿 - 悪魔の巣窟 - （発動中）

伏せカード 1枚

「私のターン、私は一刀両断侍を召喚！」

一刀両断侍

2

DEF800

「それを待っていた！！ 畏カード、激流葬を発動！！ これで全てのモンスターを破壊！」

強大な水が流れ始めた。

「考えたわね。 でも甘いわ。 一刀両断侍をリリースし、畏発動、風霊術 - 「雅」を発動！ このカードは相手のカード1枚をデッキの1番下に戻す！ 私はジェノサイドキングデーモンを選択！」

「ここでジェノサイドキングデーモンの効果発動！ サイコロを振り、2か5が出た場合、効果を無効にして破壊する！！」

立体映像のサイコロが現れた。

「ダイスロール！！」

出た目は・・・・・・『4』

「く、失敗か・・・」

一刀両断侍は竜巻に変わり、キングデーモンが水から引き起こされ、相手のデッキの1番下に飛ばされた。

「だが、もう通常召喚は行つた。」

「でも特殊召喚は可能。私は墓地から一刀両断侍を除外し、風の精霊 ガルーダを特殊召喚！」

風の精霊 ガルーダ

4

ATK1600

「風の精霊 ガルーダでプレイヤーへ直接攻撃!!」

「くそ!!」

生徒A LP3500 1900

「カードを1枚伏せ、ターン終了。」

結衣 LP 4000

手札1枚

風の精霊 ガルダ（攻）

伏せカード2枚

「俺のターン！ ちい、リロードを発動！！ 手札をデッキに戻し、その枚数分ドロする！！」

「私はリロードの発動により永続畏、便乗を発動！」

「カードを1枚セットし、モンスターをセットしてターン終了だ．．．．（このターンはなんとか凌ぐしかない！）」

生徒A LP 1900

手札0枚

セットモンスター1体

万魔殿 - 悪魔の巣窟 - （発動中）

伏せカード1枚

「私はガルダをリリースし、ゴッドバード・アタックを発動！ このカードは鳥獣族をリリースする事でフィールド上のカードを2

枚破壊することができる！！　その伏せカードとセットしたモンスターを破壊！」

さて、ゴッドバードアタックによって破壊されたカードは……………
・
1枚目は幻影の壁、効果破壊の前では無力ね。
そして2枚目は……………

「俺はその効果にチェインして威嚇する咆哮を発動！　このターン、相手プレイヤーは攻撃宣言が出来ない！」

威嚇する咆哮……………フリーチェインのカードね。
攻撃は出来ないか。

「そしてレベル調整を発動！　相手はカードを2枚ドロし、アームド・ドラゴン　LV7を蘇生！！」

アームド・ドラゴン　LV7
7

ATK2800

「んぬぬぬ……………また上級モンスターが……………」

相手は苦戦の状況中、2枚ドロした。

「便乗の効果により、手札を2枚ドロ。　カードを2枚セットし、

攻撃が出来ないからターン終了!」

結衣 LP4000

手札1枚

アームド・ドラゴン LV7(攻)

便乗(発動中)

伏せカード2枚

「俺のターン! ようし、レベル調整のおかげでなんとか良いカードが引けたぜ! 俺はシャドウナイトデモンを召喚!」

シャドウナイトデモン

3

ATK2000

フォーリング・ダウン

「さらに装備魔法、**墮落**をアームド・ドラゴン LV7に装備!

アームド・ドラゴンのコントロールを得る!」

墮落...そのカードだとアームド・ドラゴンが取られちゃうわね。

一応、神の宣告^{カミゼン}を伏せておいたけど発動しないでおこう。

『グオアア!!』

私のアームド・ドラゴンに異変が起こり始めた。

「あらら〜取られちゃった。」

「さらに、魔導師の力を発動！ このカードをシャドウナイト・デ
ーモンに装備！ 俺のフィールドの魔法、畏カードは3枚！ 攻撃
力が1500ポイントアップする！！」

シャドウナイトデーモン

3

ATK2000 3500

「シャドウナイトデーモンでプレイヤーへ直接攻撃！ （よし、こ
のデュエル貰ったぜ！！）」

「畏発動、攻撃の無力化！！」

「攻撃の無力化は攻撃モンスターを対象をとる効果！ シャドウナ
イトデーモンの効果発動！ サイコロを振り、3が出たら効果を無
効にして破壊する！」

「6分の1の確立ね。 やってみなさいよ。」

「ダイスロール！！」

また立体映像のサイコロが現れた。
出た目は．．．．．『1』であった。

「あらら、また外しちゃったね。」

まあ、6分の1だから仕方がないけど。
それでも一応、手加減しようと思ったんだけどごめんね。

「せっかく逆転のチャンスだったのにごめんね。」

「く．．．ターン終了だ。」

生徒A LP1900

手札0枚

アームド・ドラゴン LV7（攻）

シャドウナイトデーモン（攻）

万魔殿・悪魔の巢窟・（発動中）

魔導師の力（シャドウナイトデーモンへ装備）

墮落（アームド・ドラゴン LV7へ装備）

「私のターン！（来たわね、ファルル。）」

『ああ、俺に任せろ。』

「私のターン！ まず、墮落の効果により、800ポイントのダメージを受けてもらっわ。」

生徒A LP 1900 1100

「私は霞^{ミスト・バレー}の谷のファルコンを召喚！」

霞の谷のファルコン

4

ATK 2000

『さあてと、腕が鳴るぜ。』

ファルルは剣を手にした。

「攻撃力2000。いいモンスターだ。だが、俺のモンスター軍を倒すには不十分だ。」

たしかに彼の言う通りだ。

霞の谷のファルコンはレベル4で攻撃力は2000。

下級モンスターにしてはいいステータスだ。

しかし今の状況には及ばない。

「私は装備魔法、ビッグバン・シュートをシャドウナイトデーモンに装備させる！」

「（ビッグバン・シュート!? ビッグバン・シュートの効果を利用してシャドウナイトデーモンを除外する気か? だが、相手の手札は0枚。除去カードがない限り、そんな事は出来ないはずだ。だが、．．．）シャドウナイトデーモンの効果発動! このカードがカードの効果の対象になった時、サイコロを振り、3が出た場合、その効果を無効にし、破壊する!」

「じゃあ、どうぞ。」

相手はサイコロを転がした。

出た目は．．．．．『5』!!

3回目のサイコロも失敗か。

この人ギャンブルデッキの割りにギャンブル運が悪すぎるんじゃないの?

可哀想だけど私の勝ちね。

「3じゃなかったわ。じゃあ、ビッグバン・シュートをシャドウナイトデーモンに装備!」

じゃあ行くわよ、ファルル。

「ファルコンは攻撃する時、自分フィールド上のカードを1枚手札に戻さなければならない。私はビッグバン・シュートを手札に戻し、シャドウナイトデーモンを攻撃!」

「何!?!」

『行くぜ!?!』

「ビッグバン・シュートが離れた為、装備モンスターを除外する。」

『ハアア！』

ファルルが雄叫びを上げると同時に次元が歪み、穴が現れ、シャドウナイトデーモンはその穴に吸い込まれていった。

「さらに、相手フィールド上に『デーモン』と名の付いたモンスターが存在しなくなった為、墮落は破壊される！ 戻ってきて、アームド・ドラゴンー！！」

「くっ！！」

『ガアアー！！』

アームド・ドラゴンの体が元に戻り、私のフィールドに帰ってきた。墮落されたのが余程嫌だったのか、アームド・ドラゴンは相手へ向かってかなり怒っていた。

「モンスターの数が減ったので霞の谷のファルコンでプレイヤーへ直接攻撃！ 疾風一閃！！しゅぷういっせん」

ズバッ！！

ファルルは相手へ向かって瞬く間に剣を振った。

「うわああー！！」

「大丈夫？」

私は手を貸した。

「…………ちくしょう、ノーダメージで負けるとは!!」

「まあまあ、楽しかったよ。また相手してあげるからこの時まで腕を（特にギャンブル運を）磨いておいてよ。」

「うつ…………分かった。」

さらにイライラしてるね。

ごめんなさい。

「じゃ、私はこれで。」

私はそう言って試験場を出て行った。

試験日は実技試験が終われば帰っていいのだ。

そして私は学校が終わるといつもあの場所へ行く。

『（また結衣の不陰気が変わったな。） また行くのか？』

「……………うん。」

- 病院 -

私は医者と話していた。

「あの、先生．．．．兄の状態はどうなのですか？」

「あれほどの傷だ。　まだ植物状態から起き上がることが出来ない。」

「そうですか．．．」

「我々も全力で手を尽くしているから安心してくれ。　必ず君の兄さんを救い出すよ。」

「．．．．ありがとうございます、先生。」

「あと、結衣ちゃん。　気持ちは分かるけど危険だからあの場所へ絶対行かないように。」

「．．．．はい。」

私は病院を出て行った。
すいません、先生。

どうしてもあそこへ行きたいんです。

私は先生の忠告を無視してある場所へ向かった。

『おい、結衣。　先生も言ってたろ！！　危険だから行くな！！』

先生もファルルも私の身を案じて止めようとしてくれているけど、私は聞く耳を持たなかった。

なぜなら私の憎しみは消えないから。

大丈夫．．．今度こそ勝てる。

いや、絶対勝つ！

今度こそ．．．．．今度こそ倒す．．．．．あの女を！！

私は『ダイモンエリア』へ向かった。

第8話 神風の少女（後書き）

まあ、結衣のデッキはどんなデッキか大体分かりましたか？

あと、最近実戦での遊戯王の経験が少ないのでもしなんかおかしい所があつたら言ってください。

それでは次回『フリーターvs魔女』お楽しみに。

追加情報 色々修正していました。

第9話 鉄也vs魔女（前書き）

第9話投稿です

作者の最も相手にしたくないモンスターランキング

第1位 裁きの龍

第2位 マシンナーズ・フォートレス

第3位 BF - アーマード・ウイング

第4位 ダーク・アームド・ドラゴン

第5位 フェニキシアン・クラスター・アマリリス

第9話 鉄也vs魔女

- 鉄也Side -

- ダイモンエリア -

僕は何とかダイモンエリアへ着いた。

遊星は来ていなかった。

おそらく時間帯が合わなかっただろう。

ダイモンエリアにはものすごい瓦礫の量があった。

一体、彼女はどのくらいこのエリアへ来たんだ？

まあ、目的は彼女に会ったらデュエルをする。

ただそれだけだ。

僕がダイモンエリアに着いた時はエビルナイト・ドラゴンと千年原人が向かい合っていた。

エビルナイト・ドラゴン

7

ATK2350

千年原人

8

ATK2750

何い！！

両方ともプロモカードじゃねえか！！

ビデオカメラを持っていたら良かったな。

「俺のターン！ 巨大化を発動！ エビルナイト・ドラゴンに装備
！！」

エビルナイト・ドラゴン

7

ATK 2350 4700

攻撃力4700。

もう社長の究極の嫁を越えてるよ。

「千年原人を攻撃！」

「ふっふっふ．．．甘い！ 砂塵の大竜巻を発動！ 巨大化を破壊
！！」

「何！？」

エビルナイト・ドラゴン

7

ATK 4700 2350

「千年原人でエビルナイト・ドラゴンを粉砕だ!!」

「くそう、負けだあ!!」

青年G LP 2000

まあ、敗因は巨大化を破壊された所じゃなくてエビルナイト・ドラゴンを使用していた所だろ。

悪いけど今頃あのモンスターは役に立たないぞ。

ブオォー!!

「!？」

もう来たのか？

「ま、魔女だー!!」

「魔女が来たぞー!」

「逃げるー!」

ダイモンエリアへいた人々達は逃げ去っていく。
来たんだな、彼女が。

全く．．．．．意気地なし共が。

昔の地球人を見習え。

昔の地球人は侵略してくるサイヤ人達に諦めずに挑んだんだぞ。

結局最後はサイヤ人に頼ることになっているが。

それはともかく仮面をつけた女が来た。

彼女は黒薔薇の魔女と呼ばれたデュエリスト．．．．．『十六夜いざよい』

アキ!—!」

「．．．．．逃げないのね。」

「ああ。 僕はこの為に来たんだ。 あんたは僕とデュエルしても
らおう。」

「．．．．．」

ウィーン．．．

彼女はデュエルディスクを起動した。

「「デュエル!—!」」

鉄也 VS アキ

「私のターン！」

アキが先攻か。

「私は永続魔法、種子弹丸を発動。そしてイービル・ソーンを召喚！」

彼女のフィールドに物騒な植物が出てきた。そして棘が生えた球を持った植物が現れた。

イービル・ソーン

1

ATK100

種子弹丸 プラントカウンター 0 1

「イービル・ソーンをリリースし、相手プレイヤーへ300ポイントのダメージを与える。イービル・バースト！」

イービル・ソーンは僕に向かって棘の付いた球を投げ出した。
うわぁ、危ない！！
僕はとっさに避けた。

鉄也 LP 4000 3700

あんな物投げるなんて洒落になんねえぞ！？
それにアニメではそんな風じゃなかったような気がするが？

「さらにもうひとつの効果発動。 イービル・ソーンを2体攻撃表示で特殊召喚。」

イービル・ソーン×2
2

ATK 100

種子弹丸 プラントカウンター 1 2

「そして種子弹丸を墓地へ送り、このカードに乗っているプラントカウンターの1個につき相手プレイヤーへ500ポイントのダメージを与える！！」

ドバババババババツ！！

急に植物が種をマシンガンのように吐き飛ばしてきた。
これは避けられない！

鉄也 LP 3700 2700

ビシッ！！ バシッ！！ バシッ！！

「ぐあぁっ！！」

今僕はサイコデュエルの力を実感した。
種が当たった所がかなり痛い。
実弾に撃たれているような気分だ。

「カードを1枚セットし、ターン終了。」

アキ LP 4000

手札3枚

イービル・ソーン×2（攻）

伏せカード1枚

マジかよ！

先行1ターン目でもう僕のライフが1000以上削られている！！
ライフ4000の世界ではこれはきつい！
それに加えて物理ダメージなんてきつすぎる！！

このデュエル、長引くのは危険だ。

「僕のターン！僕はモンスターをセットし、カードを2枚伏せ、ターン終了だ！」

まずはこれでいい。

鉄也 LP2700

手札3枚

セットモンスター1体

伏せカード2枚

「私のターン。私はボタニカル・ライオを召喚！」

ボタニカル・ライオ

4

ATK1600

やばいな。

あれは植物族アツカーだ。

「ボタニカル・ライオは自分フィールド上の植物族1体に付き、3

00ポイント攻撃力がアップする!!」

ボタニカル・ライオ

4

ATK1600 2500

「私は2体のイービル・ソーンを守備表示に変更し、ボタニカル・ライオでセットモンスターを攻撃!」

ズババツ!

甘いな。

僕のモンスターはライコウだ!

「ライトロード・ハンター ライコウの効果発動! あんたのボタニカル・ライオを破壊! そしてデッキの1番上から3枚墓地へ送る。」

墓地に送った3枚のカードは...セーフ!! セーフだ!!

地獄の暴走召喚が墓地へ送られていない。

あのカード、いつ必要になるか心配だしな。

「私はカードを1枚セットし、ターンを終了する。」

アキ LP 4000

手札 2枚

イービル・ソーン×2（守）

伏せカード 2枚

「僕のターン！僕はワン・フォー・ワンを発動！手札からモンスターを墓地へ送り、チューニング・サポーターを手札から特殊召喚する！」

中華鍋をかぶったモンスターが現れた。

チューニング・サポーター

1

ATK 100

「さらにチューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを召喚！」

ジャンク・シンクロン

3

ATK 1200

『いくぜ、鉄也!!』

ああ。

「このモンスターが召喚に成功した時、墓地からレベル2以下のモンスターを特殊召喚することが出来る！ 現れよ、スピード・ウォリアー!!」

『トアア!!』

スピード・ウォリアー

2

DEF900

「チューニング・サポーターの効果発動！ このモンスターはシンクロ素材に使われる場合、レベル2として扱うことが出来る！ レベル2のチューニング・サポーターにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！ 集いし星が新たな力を呼び起こす。 光さす道となれ！」

2 + 3 = 5

「シンクロ召喚！！　いでよ、ジャンク・ウォリアー！！」

『トアア！』

ジャンク・ウォリアー、久々に参上！！

ジャンク・ウォリアー

5

ATK 2300

「ジャンク・ウォリアーの効果発動！　このモンスターがシンクロ召喚に成功した時、自分フィールド上のレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする！　パワー・オブ・フェローズ！！」

パワー・オブ・フェローズ．．この小説のタイトルもそうだ。レギュラーモンスターなのに出番が少なくてすまなかった、ジャンク・ウォリアー。

でも安心しろ、デッキが戻ってきたから今後出番が増えるぞ。

ジャンク・ウォリアー

5

ATK 2300 3200

「チューニング・サポーターの効果でカードを1枚ドロ―！さらに罠発動、トラップ・スタン！このターン罠カードの効果は無効化される！」

棘の壁とかが伏せられてたらせつかくのシンクロ召喚が台無しだ。封じさせてもらうぜ。

「（私のイービル・ソーンは守備表示。攻撃しても意味がないのになぜ？）」

「手札から装備魔法、メテオ・ストライクを発動！！ジャンク・ウォリアーに装備し、貫通能力を得る！」

『ハアアツ！！』

ジャンク・ウォリアーに強大なオーラが現れた。

ちなみに今のメテオ・ストライクはチューニング・サポーターによって引いたものだ。

こんな状況でドロ―出来るとはアニメの世界の影響でディスティニードロ―の確率が高くなったのかな？

「バトル！ジャンク・ウォリアーでイービル・ソーンを攻撃！スクラップ・フィスト！！」

ドーン！

ジャンク・ウォリアーはイービル・ソーンを一瞬に粉碎した。生で見ると格好いいぜ！

アキ LP 4000 1100

これでライフが上回った。

「これでターン終了だ！」

鉄也 LP 2700

手札0枚

ジャンク・ウォリアー（攻）

スピード・ウォリアー（守）

メテオ・ストライク（ジャンク・ウォリアーへ装備）
伏せカード1枚

「私のターン、私はアースクエイクを発動！ フィールド上のモン
スターはすべて守備表示になる！」

ジャンク・ウォリアー

5

DEF 1300

ああ、せっかく攻撃的に優勢なジャンク・ウォリアーが防御体制を取ってしまった！

「さらに永続罠、アイヴィ・シャックルを発動！ 相手モンスターはすべて植物族となる！」

アイヴィ・シャックルということはあのモンスターが手札に来ているな。

「さらにイービル・ソーンをリリースし、ローズ・テンタクルスをアドバンス召喚！」

棘の蔓が生えた薔薇の様な怪物が現れた。

ローズ・テンタクルス

6

ATK 2200

「ローズ・テンタクルスでスピード・ウォリアーを攻撃！ ソーン・ウィップ1！！」

バシィ！！

スピード・ウォリアーが巨大な鞭打ちによって破壊されてしまった。

ギユウ・・・

「痛！」

ローズ・テンタクルスの蔓が僕を締め付けた。

「ローズ・テンタクルスの効果発動！ 植物族を戦闘によって破壊した時、相手プレイヤーへ300ポイントのダメージを与える！」

鉄也 LP2700 2400

それだけじゃないんだよな、ローズ・テンタクルスは。

「ローズ・テンタクルスはバトルフェイズ開始時の相手の植物族の数だけ追加攻撃が可能！ ジャンク・ウォリアーを攻撃！ ソーン・ウィップ2！！！」

バシィ！！

ギユウ・・・

「ぐっ！！！」

さらにもう1本の蔓が僕を締め付ける。

鉄也 LP2400 2100

「これで終わりよ．．．．．」

ローズ・テンタクルスは僕を持ち上げた。

ちよっ．．．高くない？

高すぎる、高すぎるよ！

5メートルぐらい上がってるよ！

これだとマジ死ぬって！

「ローズ・テンタクルスで直接攻撃！！ ラスト・ソーン・ウィツ
プ！！」

ローズ・テンタクルスは僕を思い切り地面へ叩きつけようとし始めた。

ヒュルルルルル．．．．．

ここで終わってたまるか！！

まだ僕は死ぬ訳にはいかねえ！！

ピカーン！！

「うつ！！」

振り下ろされるとき、僕の左腕に違和感を感じた。

「墓地からモンスターカードを発動!!」

ピタッ。

ローズ・テンタクルスは地面に叩きつける寸前で止まった。
危なかった・・・あと30センチで頭が地面に直撃される所だった。

ドサッ

ローズ・テンタクルスは僕を放してくれた。
しかし痛かった。
放すより丁寧に降ろしてくれ。

「なぜローズ・テンタクルスが攻撃を・・・」

いててて・・・今は腕や胸がズキズキする。

「はぁ・・・はぁ・・・僕は墓地からネクロ・ガードナーを除外した。このモンスターは墓地から除外することで相手の攻撃を1度だけ無効にすることが出来る。ちなみにネクロ・ガードナーはワン・フォー・ワンの時に墓地へ送った。」

「・・・なるほどね。　うっ!!」

彼女は納得した直後、腕に違和感を感じ始めた。
痣だ。

『竜の足』の痣が疼き始めたんだ。
僕も左腕の袖を卷いた。

僕にもやはりあった。
痣が。

「なるほど、これが僕の痣か。」

僕の疼いている痣はシグナーと違い、黒であつた。
そして絵柄は．．．．．人型？

「あ、あなたもその痣を！？」

「ああ、そのようだな。」

どうやら黒崎さんの言つてた事は間違つていなかったな。

「（１人ならず２人までも．．．） あなたも痣を持つ者．．．お前は忌むべき敵．．倒さなければ。」

しまった．．自分の痣を見ることが出来たのはいいんだが、後の事を考えてなかった。

アキはこの痣を忌むべき印として認識しているんだ。
ということは僕も彼女の敵になつてしまったという事だ。
．．．．．和解案が思いつかない。

どうやらこのデュエルに決着を着ける必要があるな。

「まだあんたのターンだ。」

「私はカードを１枚セットし、ターン終了！」

アキ LP 1100

手札1枚

ローズ・テンタクルス（攻）

アイヴィ・シャックル（発動中）

伏せカード2枚

「僕のターン！僕は2枚目のジャンク・シンクロンを召喚！」

ジャンク・シンクロン

3

ATK 1200

「大丈夫か、鉄也？」

ジャンクが体がボロボロな僕を心配してくれている。

「ああ。多少計算違いな事があった。」

もう1回頼むぜ、ジャンク。

「ジャンク・シンクロンの効果で墓地からチューニング・サポーターを特殊召喚！」

チューニング・サポーター

1

DEF300

「さらに異発動、ロスト・スター・ディセント！！ このカードは墓地に存在するシンクロモンスター1体を守備表示で特殊召喚することが出来る！ この効果で特殊召喚されたモンスターは効果が無効化され、レベルが1下がり、守備力が0となる。 蘇れ、ジャンク・ウォリアー！！」

ジャンク・ウォリアー

4

DEF0

「レベル1、チューニング・サポーターとレベル4、ジャンク・ウォリアーにレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング！！ 集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます。 光さす道となれ！」

1

+

4

+

3

||

8

これで決めるぜ！

「シンクロ召喚！粉碎せよ、ジャンク・デストロイヤー！」

ジャンク・デストロイヤー

8

ATK 2600

『立てるか、鉄也？』

「ああ。なんとかな。」

『しかしおぬしにそんな痣が存在していたとはな。』

ああ、だが今はそれどころじゃない。

「（攻撃力2600・・・しかし私には攻撃の無力化と棘の壁が伏せてある。）」

「ジャンク・デストロイヤーの効果発動！ このモンスターがシンクロ召喚に成功した時、シンクロ素材に使ったチューナー以外のモンスターの数までフィールド上のカードを破壊することが出来る！」

「何！？」

「チューナー以外のモンスターは2体！ よって僕はあんたの伏せカード2枚を破壊！！ タイダル・エナジー！！」

ズガガガガン！！

ジャンク・デストロイヤーは拳のエネルギー弾で相手の伏せカードを粉砕した。

まさに粉砕 玉砕 大喝采！！

「さらに、チューニング・サポーターの効果発動！ デッキからカードを1枚ドロウする！ バトル！ ジャンク・デストロイヤーでローズ・テンタクルスを攻撃！ デストロイ・ナックル！！」

ドッガン！

デストロイヤーの拳がローズ・テンタクルスを粉砕した。

アキ LP 1100 700

「カードを1枚セットし、ターン終了だ。」

鉄也 LP 2100

手札0枚

ジャンク・デストロイヤー（攻）

伏せカード1枚

「私のターン！ 私はチューナーモンスター、
ナイトローズナイト
夜薔薇の騎士を召喚
！！」

夜薔薇の騎士

3

ATK1000

夜薔薇の騎士？

確かあのモンスターは植物族限定の切り込み隊長。
という事は……………

「夜薔薇の騎士の効果発動！ 手札からロードポイズンを特殊召喚
！」

ロードポイズン

4

ATK1500

「レベル3、夜薔薇の騎士にレベル4、ロードポイズンをチューニングー！！ 冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の華よ、開け！」

3 + 4 = 7

来るぞ．．．あのモンスターが。

「シンクロ召喚！現れよ、ブラック・ローズ・ドラゴン！」

『グアアー！！』

薔薇を纏った黒き竜が現れた。

あれはシグナーの竜の1つ．．．『ブラック・ローズ・ドラゴン』
！！

ブラック・ローズ・ドラゴン

7

ATK 2400

「ブラック・ローズ・ドラゴンの効果発動！！」

ブラック・ローズ・ドラゴンはシンクロ召喚に成功した時、フィールド上のカードをすべて破壊させる効果を持つ。

だが、その効果を発動したら彼女のフィールドはがら空きになってしまう。

いったい何をするつもりだ？

「墓地のイービル・ソーンを除外し．．．ジャンク・デストロイヤーの攻撃力を0にする！！　ローズ・リストラクション！！」

「何だと！？」

ギユウ．．．

『うう！』

「ジャンク・デストロイヤー！！」

ジャンク・デストロイヤーがブラック・ローズ・ドラゴンの墓に締め付けられた。

そんな馬鹿な！

ジャンク・デストロイヤーは攻撃表示。

ブラック・ローズ・ドラゴンの効果は守備表示モンスターにしか通用しないはずだ！！

ジャンク・デストロイヤー

8

ATK26000

しまった！

このブラック・ローズ・ドラゴンはアニメ効果だ！！（アニメ初登場時では攻撃表示でも可能となっている。）
くそ、こんな状況でそう来るとは油断した！

「ブラック・ローズ・ドラゴンでジャンク・デストロイヤーを攻撃！
ブラック・ローズ・フレア！！」

ビィー！！

ブラック・ローズ・ドラゴンが僕のデストロイヤーヘビームを放つ。

「くっ・・・畏発動！！」

『フン！！』

ブチチッ！！

ジャンク・デストロイヤーは蔓を破って腕を構えた。

「迎え撃て、デストロイ・ナックル！！」

デストロイヤーは拳で攻撃を受け止めた。

バチバチバチバチ・・・

お互いの攻撃が押し合っている・・・

ドッガン！！

今ので巨大な衝撃波が出来た。

ブワアア！！

「うわああ！！！」

今の衝撃で僕は思い切り吹き飛ばされた。

ドーン！

Side End -

- 結衣Side -

「だ、大丈夫ですか？」

私がダイモンエリアへ行く時、煙が見えた。

あの女がいることを認識し、私は直ちに掛けた。

しかし私が着いた時にはダイモンエリアの瓦礫が増えてあり、彼女はいなかった。

遅かったんだ。

しかし、ダイモンエリアで重傷を負っていた私と同年ぐらいのマ

ーカー付きの男性を見つけた。

恐らくあの女にやられたんだ。

『結衣、こいつはまだ息してる！ 早く病院へ！！』

「分かってる！！」

私は携帯電話を掛けた。

お願い、しっかりしてください！！

- Side End -

第9話 鉄也VS魔女（後書き）

では次回・・・まあ、タイトル考えていません。

第10話 突然な展開（前書き）

10話投稿です

『便乗』とか間違っていたので第8話を少し直しておきました。

宿題やらなきや・・・

第10話 突然な展開

- 鉄也 Side -

「こんにちはー、てっちゃん!!」

「あ、こんにちは、美央^{みお}姉さん!」

なんだ急に?

頭の中にイメージが……………

「元気かな? 学校はどう?」

「もう絶好調ですよ。」

……………これは……………懐かしい。

「コマンド・ナイトでセットモンスターを攻撃!!」

「はい、魔装機関車 デコイチの効果発動! デッキからカードを1枚ドロ―する!」

「さらに翻弄するエルフの剣士で直接攻撃!」

．．．．．現世で遊戯王をやっていたことを思い出すな。

中1の時、実家へ遊びに来た親戚の美央姉さんがカードを眺めてた所を見たのが始まりだった。

最初は別に興味なんて無かったが、偶然見たエルフの剣士が格好いいと思つて少しやりたくなって見た。

色々難しかったな。

ルールの理解とかチェーンとかスペルスピードとか制限・禁止の変更とか．．．．．

たまに飽きたりしてデュエルマスターズにはまり始めたけどまた遊戯王に復帰し始めたことを思い出すな。

現世ではただのカードゲームなのにそこら辺の子供以上に熱くなつてきたりした事もあった。

あれは本当に楽しいカードゲームだった。

「リミッター解除を発動！！ 機械王で直接攻撃！！」

「あちゃゝまた負けた。」

．．．．．現世での記憶か．．．．．

「あたしの勝ちだよゝん！」

「やっぱ姉さんには敵わねえな。」

「さあ、もう1回やろう！」

「ええ、まだやるの？」

美央姉さんはしょっちゅう僕の家へ遊びに来てたな。

色々勉強を教えてもらったりゲームやってたりして。

そして遊戯王．．．この世界ではデュエルモンスターズというんだ
つたな．．．デュエルモンスターズを沢山やっていた。

美央姉さんは僕以上に熱くなってたな。

僕がフォロイ出来ないくらい。

まあ、兄弟がいない僕にとって美央姉さんは実の姉のような存在だった。

「はい、もしもし」

これは．．．．．

「え、美央姉さん？ 来てませんけど。」

そうだ。

僕が大学に通って半年ぐらいのころ．．．．．
美央姉さんは行方不明になってしまったんだ。

．．．．．

- - - - -

「はっ！！」

なんだ、ただの夢か。

.

よく見ると僕は白衣を着て体中あちこちに包帯を巻かれてベッドにいた。

.

夢だったのか！？

もしかして5D'sの世界へトリップしてしまった事は夢だったのか！？

『クリクリ〜！！』

聞き覚えのある鳴き声だ。

「クリボー・・・」

振り向くとクリボーが心配した表情で浮いていた。

「・・・やはり夢ではなかったか。」

クリボーが僕へ話しかけているのがその証拠だ。

やはりトリップは現実だな。

クリス・

クリボーが涙目で僕を見ている。

「僕は大丈夫だ。ほら、おいで。」

「クリクリ〜!!」

クリボーが僕の胸へ飛び込んだ。

僕はクリボーを優しく抱きしめた。

クリボーは嬉しく泣いている。

そうだな。

僕は現世へ帰れなことを悔やんではない。

美央姉さんや友人達に会えないのは寂しいが僕はやるべきことを探す！

「よしよし。」

僕はクリボーを撫でた。

どうやら僕はアキとのデュエルで気を失ってしまい、誰かによって病院へ連れて行かれたようだな。

走馬灯が走るほど気を失っていたのか。

ちなみに僕はあの時負けてはいなかった。

[illegible]

「ブラック・ローズ・ドラゴンでジャンク・デストロイヤーを攻撃
！ ブラック・ローズ・フレア！！」

ビィー！！

「くっ．．．畏発動！！ シンクロ・ストライク！！ このターン、
ジャンク・デストロイヤーはシンクロ素材に使ったモンスター1体
につき攻撃力が500ポイントアップする！！」

『フン！！』

ブチチツ！！

ジャンク・デストロイヤー

8

ATK0 ATK1500

「迎え撃て、デストロイ・ナックル！！」

『トアア！！』

バチバチバチバチ．．．．．ドッガン！！

ブワアア！！！！

「うわああ!!」

鉄也 LP2100 1200

ドーン！

[illegible]

まあ、僕が倒れていなかったらデュエルは続いたということだ。

シャ
ー
・
・
・

ドアが開いた。

「どうやらもう大丈夫なようね。」

振り向くとそこには長い黄緑の髪を後ろに結んだ少女がいた。トリップしてきた僕と同年ぐらいかな。

「君は？」

『鉄也、あの人がおめえを病院へ連れて来たんだぜ。』

「ジャンク！」

突然、ジャンクが現れた。

そうか、あの子が。

「あ、ありがとうございます。」

「礼なら私よりもその子達に言いなさい。その子達があなたを徹夜で看病してたんだから。」

そうか・・・こいつらが。

「そうですか。　ありがとな。　ジャンク、クリボー。」

『クリクリ〜』

『そんなの礼に及ばないっスよ』

「あ、申し遅れました。　僕は村上^{むらかみ}　鉄也^{てつや}といいます。　こいつらはジャンクとクリボーだ。」

「ジャンクとクリボー・・・分かりやすいわね。　私は神風^{かみかぜ}　結衣^{ゆい}、よろしくね。」

明るい人だな。

「よく言われます。」

でもこの子はマーカー付きである僕を警戒しないのか？
この病院も僕を受け入れてくれたみたいだし。
でも、まずは礼だ。

「ありがとうございます、神風さん。」

「いや、無事でよければ。」

シャー……

また誰が入ってきた。

眼鏡をかけて白衣を着た壮年な男性が入ってきた。
この部屋を担当としている医者か。

「あ、佐々木先生！」
ささき

「やあ、結衣ちゃん。彼の調子はどうだい？」

「見てのとおり、バッチリです。」

本当に見ての通りです。

「しかし大した物だね。もう傷が治りかけているよ。」

「まあ、先生のおかげです。」

「この調子だと君は明日から退院出来そうだね。 ゆっくり休みた

まえ。」

結構いい人だな。

「あの．．．．．僕のような人がここにいて良いんでしょうか？」

「安心したまえ。ここにいるみんなは差別などしないしマーカーが付いてる人達もここで世話になっているよ。」

「そうですか。」

「お金はいいからゆつくりしたまえ。」

「ありがとうございます！！」

なんて親切な人だ。

やっぱり医者の前では全ての人間は平等なんだね。

「じゃあ、また来るね。」

神風さんはもうそろそろ帰るつもりらしい。

「ありがとう、神風さん。」

神風さんに手を振った。

ベッドで寝るなんて久しぶりだ。

僕はゆつくり寝た。

- Side End -

- 結衣 Side -

「しかし結衣ちゃん、あれほどダイモンエリアへ行くなといったのに。」

私は佐々木先生と話していた。

「……………ただ、私は黒薔薇の魔女を倒したかったです。」

「気持ちは分かるけどね、もし君の身に危険が起こったら君のお兄さんが悲しむよ。」

「……………」

「まあ、お兄さんの意識が戻ってくるのを待ちたまえ。そして魔法女に関わらない方がいい。」

私は病院を出た。

『結衣、本当に危険だから止めておこう。それに多分、魔女はしばらくあのエリアに來ないよ。』

「ファルル．．．．．」

- Side End -

- 鉄也 Side -

- 翌日 -

僕はやっと退院することが出来た。

「ありがとうございます、先生。」

「では、お大事に。」

太陽の光が明るく照らしてある。

さて、何をすればいいのかな？

デュエル・オブ・フォーチュンカップはまだ開催されていない。
時間帯だともうすでに始まっていた筈なのだが。

たぶん、僕の存在が歴史を若干変えてしまったのだろうか？

「あ、村上さん？」

考えているうちに神風さんに会った。

僕の様子でも見に来たのだろうか・・・

「あ、神風さん！　ありがとうございます。」

「え、いえ。　体の方は大丈夫ですか？」

「いやあ、体調は万全ですよ。　天下一武道会へ出場できますよ。」

今日の僕はすごく気分がいい。

病院で休んでたからだろうか？

カリン塔を登れるくらい絶好調だ。

「そうですか、それは良かったですね。」

「これもあなたのおかげです。　ただ助けてもらったのも何かだし・

・何かお礼でもさせてもらえないでしょうか？」

せっかく助けてもらったんだ。

礼ぐらいしないと男がすたる。

「え、いや、別にいいですよ。」

「でも、それじゃあ・・・僕の気が済まないの。何でも良いですから」

「ええっと・・・」

その時、ファルルが現れた。

『結衣、せっかく感謝されているんだ。礼ぐらいさせても良いだろ。』

ファルルの言うとおりだ。
いい事言っじゃないか。

「それじゃあ、買い物に付き合ってもらえます?」

買い物か。
悪くはないな。

「・・・・・・・・いいんですね?」

服かアクセサリーでも買うのか?

「いいですよ。」

「良かった。ちょうど手助けが必要な所だったんです。ところで村上さんは何歳ですか?」

「え、１６ですけど。」

「へえ、私より1歳上ですね。でも成人っぽく見えますね。」

「そうですか。」

この子は15歳か。

『おいお前、今のをすぐに撤回しろ!!』

ファルルが急に撤回しろと言い出した。

何でだろう？

とりあえず買い物に付き合う事にした

- ネオ秋葉原シティ -

僕と神風さんは電車から降り、ある場所へ着いた。

ちなみに神風さんはメーカーがついた頬に化粧をしてくれた。

.....

僕が考えていた『買い物』とは全く違っていた。

そこには眼鏡をかけた人達、アニメキャラが写っているシャツを着ている人達、それにアニメキャラのコスプレを着ている人達が熱苦しい空気を漂っていた。

「あの・・・神風さん・・・・・・・・これって・・・・・・・・」

「『コミケ』です。」

やはりコミケだったか!!

買い物がこれだったとは・・・

コミケ・・・それはオタク達が時間、体力、そして金を消費してまで同人誌を手に入れる為の戦場!!

「あの・・・神風さんって常連なんですか？」

「うん。あなたは初めてだね。」

「・・・・・・・・・・ああ。」

正直、僕はオタクではないが現世で友人との付き合いで何度か行ったことはある。

あれは色々な意味でマジエネルギーを消耗させる。

まさかシリアス度が高い5D'sの世界でも存在していたとは・・・

神風さんは地図と財布、そして紙袋を取り出した。

「気をつけたほうが良いわよ。今回の人数は異常。あなたにはここここへ行ってもらわね。この紙に買って欲しい同人誌のリストが書いてあるから頼んだわよ。そしてこのルートでこう行つて・・・ここへ入ってそして・・・そして2時にこの場所へ集合!」

神風さん、あなたはこなたですか？

「そしておつりが出ないようにこの小銭が入った財布をしっかりと持っておくこと。以上、質問は？」

「すみません、一体何を質問しろというんですか？」

『すまん、結衣がこんなんで。』

「ファルルよ、謝らなくていい。

お前は悪くない。

悪いのは乗ってしまった馬鹿な自分だ。

「では、任務実行！」

結局、僕は熱苦しい空気の中で同人誌を買い始めた。

退院したばかりの僕にとってこれは色々な意味できつい。

そりゃあ、彼女が極度のオタクとは予想しなかったからな。

しかもネオ秋葉原シテイって何だよ！？

未来の世界でも秋葉は健在なのかよ！

だが男に二言はない。

僕はとりあえず買う事にした。

.....

なんていう熱苦しい戦場なんだ。

汗をかいてたまたま化粧をし直す必要もあつた。

たしか神風さんって僕と同年くらいだったような気が。

「成人っぽく見えますね」と。

あ、ハルヒの同人誌も入っていた。

僕は回りを見た。

•
•
•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

[illegible][illegible]

.....

「リストに書いておいたのを全部買ってくれた？」

「買いましたよ。 てゆうか18禁の本をいつも読んでいるんですか？」

「そうですよ。」

「未成年のあなたがどうやって・・・」

「兄が買ってくれていますから。」

「兄が!？」

「本だけじゃなくアダルトゲームも買ってもらっています。」

「アダルトゲームもかよ!」

驚いた。

世の中にはこういうシスコンも存在するんだな。
お兄さんよ・・・あんたはもつと妹に常識というものを教えなさい。
それにしても喉が渴いた。

「まあ、疲れたでしょう。 なんか飲み物を買ってあげますから何が良いですか？」

「え、じゃあオレンジジュースで。」

「じゃあ、すぐ戻ってきます。」

僕は遠く離れた自動販売機のある場所へ行った。

しかし考えてみれば少し楽しい。

サテライトでの差別に押されていないし、セキュリティとの接触もないし、サテライトにいるときより気分がいい。

それにコミケの中だが、初めてシティを体験することが出来た。

人が沢山いて賑やかそうだしSFアニメでよく出るテレビジョンやコンピューターを始めて見た。

「ん？」

ジュースを買って振り向くとそこにはカードが売ってある場所があった。

僕はパックを5個買った。

インフェルニティ・ドワーフ・・・・・・・・ハネワタ・・・・・・・・レ
ベル・ステイラー・・・・・・・・壱空間転送装置・・・・・・・・E・
HEROワイルドマン・・・・・・・・インフェルニティ・ガーディア
ン・・・・・・・・まあ、悪くは無いな。
いいカードが何枚か入っていた。

「神風さん、お待たせ。　　うわ・・・」

ベンチに戻ると神風さんはもう同人誌（18禁）を読み始めていた。

「ああ、ありがとう。」

「もう読んでるんですか？」

「うん。」

そういえばこの子って秋葉系！？
秋葉系なのか！？

「……………それって面白いんですか？」

……………こんな事を聞いている僕って余程暇なんだな。

「うん、興味深い。」

興味深いんだ。

「……………読みたい？」

「いや、いいですから！！」

無理だ！

僕にそういうのは無理だ！！

……………

やはり暇だ。

フォーチュンカップもまだ開催されてないしそこら辺のテレビジョンもデュエル関連な事が映っていない。

暇だー！！

待てよ、この世界なら．．．．．

僕は同人誌を読んでいる神風さんに話しかけた。

「神風さん．．．」

「結衣。」

「え？」

「結衣でいい。」

「じゃあ、僕も鉄也でいいです。では結衣さん、」

「何？」

「結衣さんはメーカー付きの僕に不審を感じないんですか？」

「．．．．．まあ、私は怪我していたあなたを見つけていたら放っておけなくてしょうがなかったからね。それにあなは悪い人じゃないみたいだったし。それに丁度人手も必要だったから。」

まあ、マニアックな一面もあるけどやっぱり良い人だな。
人を見る目もあったけどしかしやはり最後は利用されたな。
それはともかく．．．．．

- Side
End -

第10話 突然な展開（後書き）

では次回、『気晴らし』をお楽しみに。

第11話 気晴らしデュエル（前書き）

最近植物族の魅力さに気づいた。

今は植物族の勉強を終え、魚族のお勉強中です。

第11話 気晴らしデュエル

- Narration -

- 公園 -

鉄也と結衣は展示場から出てデュエルする場所を探した。
人が多いので珍しく人が少ない広い公園でデュエルすることになった。

「最初に言っておく。私がかーなり強い!!」

「(ゼロノス気取るか。なら僕もそれに応えて...) 言っとくが僕は最初から最後までクライマックスだぜ!!」

「(.....やるわね。)」

鉄也と結衣はデュエルディスクを起動した。

「デュエル!!」

鉄也 LP 4000

VS

結衣 LP 4000

「私のターン！ 私はドラゴンフライを召喚！」

2本足で立っている羽が生えた緑色の昆虫が現れた。

ドラゴンフライ

4

ATK1400

「（ドラゴンフライ……風属性リクルーターか。）」

「カードを1枚セットし、ターン終了。」

結衣 LP4000

手札4枚

ドラゴンフライ（攻）

伏せカード1枚

「（リクルートを警戒するべきだな。だったら……）僕は手札からボルト・ヘッジホッグを墓地へ送り、ワン・フォー・ワン

を発動！ デッキからチューニング・サポーターを特殊召喚する！
」

『ハア！！』

チューニング・サポーター

1

ATK100

「そしてチューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを召喚！」

『俺っち、参上！！』

ジャンク・シンクロン

3

ATK1200

「ジャンク・シンクロンの効果発動！ このモンスターの召喚時、墓地からレベル2以下のモンスターを守備表示にして特殊召喚できる！！ この方法で特殊召喚されたモンスターの効果は無効化される。僕はボルト・ヘッジホッグを特殊召喚！」

『キユ〜!』

鉄也の前に背中にボルトが生えたハリネズミが現れた。

ボルト・ヘッジホッグ

2

DEF800

「（自身の効果で蘇生されていないからこれなら後でもう一回使用できる。）」

「ジャンク・シンクロンはチューナーモンスター。レベル6のシンクロが狙いなの?」

「いや、チューニング・サポーターはシンクロ素材となる場合、レベル2になることが出来る。」

チューニング・サポーター

1
2

「行くぞジャンク!!! レベル2、チューニング・サポーターとレベル2、ボルト・ヘッジホッグにレベル3、ジャンク・シンクロン

をチューニング！ 集いし叫びがこだまの矢となり空を裂く！ 光
さす道となれ！」

ジャンク・シンクロンが輪と化し、星となったチューニング・サポ
ーターとボルト・ヘッジホッグを囲んだ。

2 + 2 + 3 = 7

「シンクロ召喚！ いでよ、ジャンク・アーチャー！」

オレンジ色の鎧を着て弓を持ったロボットの様な戦士が現れた。

ジャンク・アーチャー

7

ATK 2300

「まず、チューニング・サポーターの効果発動。 このモンスター
を素材にしたシンクロ召喚が成功した時、デッキからカードを1枚
ドロウする。 そしてジャンク・アーチャーの効果発動！ 相手モ
ンスター1体をエンドフェイズまで除外する！」

「な・・・（これではリクルートが出来ない。）」

「デイメンジョン・シュート！」

ジャンク・アーチャーがドラゴンフライへ光の矢を放った。

シュルルルルル・・・

ドラゴンフライが次元の穴に包まれた。

「ジャンク・アーチャーでプレイヤーへ直接攻撃！」

ジャンク・アーチャーの片目がつぶり、結衣へ狙いを定めた。

「スクラップ・アローー！！」

ビューン！

ジャンク・アーチャーは光の矢を放った。

「その瞬間、畏発動！ ガード・ブロック！！」

バチチチ・・・

結衣の周りにバリアが現れ、光の矢を防いだ。

「ダメージを0にし、カードを1枚ドローする！」

「惜しかった。カードを2枚伏せてターン終了だ。」

シュルルルル・・・

ジャンク・アーチャーによって除外されたドラゴンフライが戻ってきた。

鉄也 LP4000

手札2枚

ジャンク・アーチャー（攻）

伏せカード2枚

「私のターン！（しかしやるわね。1ターン目でシンクロ用のモンスターを3体も召喚させて手札のリスクも十分補っている。）
私はファルルを召喚！」

霧の谷のファルコン

4

ATK2000

「よう、鉄也。結衣との買い物は楽しかったか。」

「やあ、ファルル。意外と大変だったぞ。」

「まあ、そりや当然だ。結衣、デュエル中に名前で呼ぶと言っ

たはずだ。」

「いいじゃない。彼もあなたの存在を知っているじゃない。」

『……………まあ、今回だけは良いだろう。』

「じゃあ、デュエル続行。私は装備魔法、ビッグバン・シュートを発動！」

「ファルコンにビッグバン・シュートを装備したら攻撃力は2400……………ジャンク・アーチャーを越える!!」

「私はビッグバン・シュートをジャンク・アーチャーに装備！」

「え？」

ジャンク・アーチャー

7

ATK2300 2700

「はっ！　そういえば霧の谷は……………」

「霧の谷のファルコンでジャンク・アーチャーを攻撃！」

「（自爆特攻？　いや違う!）」

「霧の谷のファルコンが攻撃宣言を行う時、自分のカードを1枚手札に戻さなければならぬ！ 私はビッグバン・シュートを手札に戻す！」

「ハッ！」

ファルルが竜巻を起こし、ビッグバン・シュートのカードを飛ばした。

バチチチ・・・

次元に亀裂が入り始めた。

「ビッグバン・シュートがフィールドから離れた為、ジャンク・アーチャーをゲームから除外する！！」

「うっ！」

「ジャンク・アーチャー！！」

シュルルル・・・

ジャンク・アーチャーが次元の裂け目に吸い込まれた。

「迂闊だった。ファルコンを持っていたから気付くべきだった。」

「じゃあ、攻撃を続行！ ファルコンでプレイヤーへ直接攻撃！」

「（ドラゴンフライと合わせたらダメージが大きい。）僕は和睦の使者を発動！」

3人の修道女が僕の前に現れ、バリアを張った。

「僕の戦闘ダメージは0となる！」

「攻撃をしても意味はないわね。私はカードを2枚伏せ、ターン終了。」

結衣 LP4000

手札4枚

霧の谷のファルコン（攻）

ドラゴンフライ（攻）

伏せカード2枚

「僕のターン！（ジャンク・アーチャーのせいで補ったとはいえ手札を消費しすぎだな。）ドロー！（よし！）」

鉄也は一時的に焦ったが、開き直った。

「僕は戦士の生還を発動！ ジャンク・シンクロンを手札に加え、召喚！」

『ようし、行くぜ！』

ジャンク・シンクロン

3

ATK 1200

「僕はジャンク・シンクロンの効果発動！ チューニング・サポーターを復活！」

チューニング・サポーター

1

DEF 300

「またドローをする気？ しかしチューニング・サポーターのレベルは変更できない。」

「ああ、ジャンク・シンクロンの効果だからな。しかし今の特殊召喚にチェーンして僕は地獄の暴走召喚を発動！ このカードの効果により、チューニング・サポーターをデッキから2体特殊召喚！」

チューニング・サポーター×2

1

ATK 100

「（地獄の暴走召喚のせいで相手モンスターが増えてしまうが、仕方がない。） 君もモンスターを2体特殊召喚できるぜ。」

「私はデッキからドラゴンフライを特殊召喚する！」

ドラゴンフライ×2

4

DEF1000

「（やはりリクルートが狙いか。） チューニング・サポーター2体をレベル2に変更！」

チューニング・サポーター×2

1
2

「レベル1、チューニング・サポーターとレベル2、チューニング・サポーター2体にレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング！ 集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます。 光さす道となれ！」

1 + 2 + 2 + 3 = 8

「シンクロ召喚！ 粉碎せよ、ジャンク・デストロイヤー！」

4本の腕を持った魔神のようなモンスターが現れた。

ジャンク・デストロイヤー

8

ATK 2600

「チューニング・サポーターの効果のより、デッキからカードを3枚ドロースる！！」

デストロイヤーは鉄也へ顔を向けた。

「鉄也よ、傷はもう良いのか？」

「ああ、もう大丈夫だ。心配かけてすまなかったな。」

「おぬしが無事であればそれでいい。」

「ありがとう、デストロイヤー。さて、ジャンク・デストロイヤーの効果発動！ このモンスターに使用したチューナー以外のシンクロ素材の数までフィールド上のカードを破壊することが出来る！」

！ 君の伏せカード2枚とドラゴンフライを破壊する！ タイダル・エナジー！！」

『ウオオ・・・』

ギユウ・・・

ジャンク・デストロイヤーは4つの拳にエネルギーを溜め、それを一気に放とうとした。

「それを発動させない！ 私はデモンズ・チェーンを発動！」

『な、何！？』

突然、鎖が現れジャンク・デストロイヤーを縛り付けた。

「デモンズ・チェーンに縛られたモンスターは効果を発動することは出来ず、攻撃を行えない。」

「やるな。だが僕はジャンク・デストロイヤーをその鎖から解放させる！ 魔法カード、シンクロ・キャンセルを発動！」

ピシ・・・ピキピキピキ・・・・・・バリーン！

ジャンク・デストロイヤーは鎖を破り、分裂した。

ジャンク・シンクロン

ATK 1200

チューニング・サポーター×3

1

ATK 100

「ま、まさか!?!」

「ああ、ジャンク・デストロイヤーをもう一度シンクロ召喚させる
!?!」

1 + 2 + 2 + 3 = 8

「シンクロ召喚!! 粉碎せよ、ジャンク・デストロイヤー!!」

『でかしたぞ、鉄也。』

ジャンク・デストロイヤー

8

ATK 2600

「僕は再び効果を発動させる！ 君のドラゴンフライ2体と伏せカードを破壊！ タイダル・エナジー！！」

ヒュルルル・・・

チュドドドーン！

ジャンク・デストロイヤーの4つの拳から放つエネルギー弾が降り注ぎ、相手のドラゴンフライと伏せカードを粉碎した。
今度こそジャンク・デストロイヤーの効果は成功したのだ。

「（ドラゴンフライとミラーフォースが・・・）」

「さらに、チューニング・サポーターが素材であった為、カードを3枚ドロウさせる！」

「やるわね。デモンズ・チェーンを除去しただけでなく、カード破壊と手札増強させるなんて。」

「へへ、僕の強さにお前は泣いたか？」

「甘いわね。その程度じゃまだまだ私を泣かせないわよ。」

「そうだな。僕は装備魔法、ジャンク・アタックをジャンク・デストロイヤーに装備！」

鉄也が装備させると同時にジャンク・デストロイヤーの周りにくず鉄が現れた。

「バトルだ！ ジャンク・デストロイヤーで霧の谷のファルコンを攻撃！！」

ジャンク・デストロイヤーはファルルへめがけて拳を構えた。

「おぬしとおぬしのマスターには感謝しておる。」

「そりやどうも。」

「しかし全力で向かうのが恩というものだ。」

「分かっている。 かかって来い。」

「デストロイ・ナックル！！」

ドッガン！！

ジャンク・デストロイヤーの強大な拳の前にファルルは粉碎された。

結衣 LP4000 3400

「く．．．やるじゃないの。」

「さらにジャンク・アタックの効果発動！ このカードを装備したモンスターが相手モンスターを戦闘によって破壊した場合、そのモ

ンスターの攻撃力の半分のダメージを与える！ 僕の必殺、パート2！！ ナツクル・ボンバー！！」

ジャンク・デストロイヤーの周りに浮いているくず鉄が結衣へ目掛けて飛んだ。

結衣 LP 3400 2400

「へへっ……………泣けるで。 カードを2枚伏せ、ターン終了だ。」

鉄也 LP 4000

手札3枚

ジャンク・デストロイヤー（攻）

ジャンク・アタック（ジャンク・デストロイヤーへ装備）

伏せカード2枚

ジャンク・デストロイヤーは少しだけ鉄也のほうへ振り向いた。

『彼もまだまだ子供じゃの。』

彼は鉄也の無邪気な表情に少し呆れたようだ。

『しかし鉄也が楽しんでいるのを久しぶりに見たわい。』

彼も鉄也を見て嬉しそうだ。

「私のターン！ 大寒波を発動！ お互い次の私のターンまで魔法、罠カードをセットできず、発動することも出来ない！」

カチカチカチカチ……………

鉄也のフィールドに存在する魔法、罠カードが凍りついた。
結衣の場には魔法、罠カードはなかった。

「（くず鉄のかかしとリビングデッドが……………）」

「私はハンター・アウルを召喚！」

手足が生えたフクロウが現れた。

ハンター・アウル

4

ATK1000

「さらに、墓地のドラゴンフライを除外し、風の精霊ガルーダを特殊召喚！」

風の精霊 ガルダ

4

ATK1600

「ハンター・アウルは場の風属性モンスター1体につき攻撃力が500ポイントアップする！ 私の場にはドラゴンフライ、ガルダ、そしてハンター・アウル自身が存在する！」

ハンター・アウル

4

ATK1000 2500

「まだジャンク・デストロイヤーより程遠いぜ！ それに大寒波のせいで攻撃力上昇カードは使えない！」

「分かっている！ 私はドラゴンフライでジャンク・デストロイヤーを攻撃！」

ドラゴンフライはジャンク・デストロイヤーへ飛び掛ってきた。

「自爆特攻で来るか！？」

『フン！！』

デストロイヤーは飛んでくるドラゴンフライを思い切り殴り飛ばした。

結衣 LP 2400 1200

「ドラゴンフライの効果発動！ このモンスターが戦闘によって破壊された場合、デッキから攻撃力1500以下の風属性モンスターを特殊召喚することが出来る！ 私が特殊召喚するモンスターはハーピー・レディ１（英語版）！！」

「ハーピー・レディ１！ そうか、その手があったか！？」

紅い髪をして緑の翼が腕と一体化した女性が現れた。

Harpie Lady 1

4

ATK 1300

「（英語版か。 たしかに日本版だと露出度高すぎるからな。 外では使えないだろう。 グッジョブ、英語版！！）」

「英語版でもハーピーはやっぱり色っぽいの」

今の言葉にハーピー・レディは嫌な顔をしている。

「（あんたはエロ親父か！？ 英語版でもこの人の前では無駄なのか！？ ハーピーが気の毒に。）」

「とりあえずハーピー・レディ1の効果発動！ このモンスターがフィールド上に存在する限り、風属性モンスターの攻撃力は300ポイントアップする！！」

ハンター・アウル

4

ATK 2500 2800

ハーピー・レディ1

4

ATK 1300 1600

風の精霊 ガルダ

4

ATK 1600 1900

「まだバトルフェイズは終了していない！　ハンター・アウルでジャンク・デストロイヤーを攻撃！」

ズバッ！！

ハンター・アウルの鎌がジャンク・デストロイヤーを切り裂いた。

「くっ．．．」

鉄也　LP 4000　3800

「私の美技に酔いなさい。　ハーピー・レディと風の精霊ガルーダで直接攻撃！！」

「うわあああ！！」

ズバッ！！　ズバッ！！

ハーピー・レディとガルーダの爪が鉄也を思い切り引っ掻いた。

鉄也　LP 3800　300

鉄也は今の攻撃で尻餅をついた。

「いててて．．．」

立体映像なのについて痛いと言ってしまふ鉄也であった。
鉄也は立ち上がった。

「まさか自分のライフを削ってまで総攻撃を仕掛けるとは．．．．
やるな。」

「あんたもね。 ジャンク・デストロイヤーの使用には驚いたわ。」

「久々に熱くなれた。 礼を言っぜ。」

「え、いやあ．．．」

「大寒波の発動中、カードはセット出来ない。 ターン終了だな。」

「うん、ターン終了。」

結衣 LP 1200

手札 2枚

ハンター・アウル（攻）

風の精霊ガルーダ（攻）

ハーピィ・レディ 1（攻）

「僕のターン！僕はモンスターをセットし、ターン終了！（頼むぜ、ライコウ。）」

鉄也 LP 300

手札 3枚

セットモンスター 1体

伏せカード 2枚

「私のターン！私は一刀両断侍を召喚！」

一刀両断侍

2

ATK 500 800

ハンター・アウル

4

ATK 2800 3300

「一刀両断侍！？あのモンスターは・・・」

「一刀両断侍でセットモンスターを攻撃！このモンスターが裏側

守備表示モンスターを攻撃した時、そのモンスターをリバーセせずに破壊する。」

ズバババツ！

一刀両断侍がセットモンスターを表に出ださせずに素早く切り裂く。

「ライコウが．．．（やはり表守備表示での召喚が行える世界だとリバーセモンスターだとばれてしまうか。）」

「ライトロード・ハンター　ライコウね。あのモンスターは厄介よね。一刀両断侍が手札にあって良かったわ。ハンター・アウルで直接攻撃！」

「そうはさせん！　罨発動、リビングデッドの呼び声！！　ジャンク・デストロイヤーを復活させる！」

ジャンク・デストロイヤー

8

ATK2600

「私はバトルを続行させる！　ハンター・アウルでジャンク・デストロイヤーを攻撃！」

「そうはさせない！　くず鉄のかかしを発動する！」

ガキン！

くず鉄のかかしがハンター・アウルの鎌を防いだ。

「私はカードを1枚セットし、ターン終了。」

結衣 LP1200

手札1枚

一刀両断侍（攻）

ハンター・アウル（攻）

ハーピィ・レディ1（攻）

風の精霊ガルーダ（攻）

伏せカード1枚

「僕のターン、（手札は多分、ファルコンの時に戻したビッグバン・シュートだろう。だったら伏せカードは攻撃反射系か？）手札からハリケーンを発動！ フィールド上の魔法、罠カードを全て手札に戻す！！」

巨大な竜巻が現れ、フィールド上の魔法、罠カードを飲み込もうとした。

「私はハーピィ・レディ1をリリースし、ゴッドバード・アタックを発動！ 私はリビングデッドの呼び声と伏せてあるくず鉄のかかしを破壊！！」

「何!？」

ハーピー・レディは鉄也の伏せカードへ飛び掛った。

「リビングデッドの呼び声が破壊されたため、ジャンク・デストロイヤーは破壊される!」

ハンター・アウル

4

ATK 3300 2500

一刀両断侍

2

ATK 800 500

風の精霊 ガルーダ

4

ATK 1900 1600

「どう、この状況は？」

「こりゃあ、確かにまずいな。モンスターをセットすると一刀両断侍ですぐに破壊されてしまう。表側守備表示で召喚してもエンドフェイズでガルーダの効果で強制的に攻撃表示へ変更させられ、

ハンター・アウルにやられてしまう。」

「分かってるじゃないの。」

「しかし攻撃力1700以上のモンスターを召喚することが出来れば一刀両断侍を攻撃して僕の勝ちだ。」

「そしてそのモンスターをあなたは今、召喚できるの?」

「出来ないな。僕はカードを1枚セットし、モンスターをセット。ターン終了だ。」

鉄也 LP300

手札2枚

セットモンスター1体

伏せカード1枚

「分かっているのにモンスターをセットするの? 私のターン!

私は一刀両断侍でセットモンスターを攻撃!!」

「意地でも防いでやる! 炸裂装甲を発動! 一刀両断侍を破壊!」

「くっ……だったらハンター・アウルでセットモンスターを攻撃!!」

「(それが狙いだ!)」

ハンター・アウルがセットモンスターを切り裂いた途端、黒い幽霊のようなものが現れ、鉄也と結衣の手札を奪った。そして奪った手札は墓地へ送られた。

「あれ？」

「君が破壊したモンスターはメタモルポットだ！！ リバース効果により、お互いの手札は全て墓地へ送られ、お互いにカードを5枚ドローする！」

2人はカードをドローした。

「（このカードは！）」

「（これならいける！）」

『トアア！！』

急にスピード・ウォリアーが現れた。

スピード・ウォリアー

2

DEF900

「何でモンスターが？」

「このカードのおかげさ。」

鉄也は墓地からカードを取り出して説明した。

「リミッター・ブレイク。このカードが墓地へ送られた時、デッキ、手札、または墓地からスピード・ウォリアーを特殊召喚することが出来る。」

「メタモルポットの時に墓地へ送ったのね。だったら私はガル―ダでスピード・ウォリアーを攻撃!!」

ガル―ダがスピード・ウォリアーを切り裂いた。

「へへ・・・」

「この状況から一気に守りきるなんてやるわね。私はカードを2枚セットしてターン終了!」

結衣 LP 1200

手札3枚

風の精霊ガル―ダ（攻）

ハンター・アウル（攻）

伏せカード2枚

このときの鉄也はデュエルを楽しんでいた。

収容所での出来事やセキュリティに追われる時と違い、彼は熱くなっていた。

「僕のターン！ 結衣さん……………」

「ん？」

「僕は今、楽しい。」

「そうなの？」

「ああ、ラウンド2を始めようぜ！」

「ラウンド2？」

「僕はメタモルポットの効果が発動した時、手札を5枚に復帰させるからいつもそれをラウンド2と呼ぶ。今の僕は楽しくてたまんねえぜ。」

「へえ……私も同感よ。このデュエルを楽しんでいるわ。」

「じゃあ行くぜ、僕のターンー!!」

- Side End -

第12話 相手が雷神鬼ならこっちは計算鬼だ（前書き）

最近、このサイトで色々な遊戯王小説を読んでいます。

5D'sのトリップって少ないですね。
それでも頑張っていきます。

第12話 相手が雷神鬼ならこっちは計算鬼だ

- 鉄也 Side -

さあて、何とか手札を復帰させた。
ここから反撃だ!!

鉄也 LP 300

手札 5枚

結衣 LP 1200

手札 3枚

ハンター・アウル（攻）

風の精霊ガルーダ（攻）

伏せカード 2枚

ハンター・アウル

4

ATK 2000

風の精霊ガルーダ

4

ATK 1600

「僕のターン！僕はダンディライオンを召喚！！」

僕の前にタンポポの姿をしたライオンが現れた。

ダンディライオン

3

DEF 300

たしか原作ではダンディライオンって十代しか持っていないカードだったよな。

僕が使っても大丈夫なのかな？

まあ、今回ぐらい良いだろう。

「さらに、墓地からライトロード・ハンター ライコウとジャンク・シンクロンを除外し、カオス・ソーサラーを特殊召喚する！！」

悪魔のような印象をした魔導師が現れた。

「カオス・ソーサラーの効果発動！ このモンスターは1ターンに1度、攻撃する変わりに表側表示のモンスターを除外することが出来る！僕は風の精霊ガルーダを除外させる！カオス・ディメンション！！」

カオス・ソーサラーは次元のゆがみを作り始めた。

「そうはさせない！ 風の精霊ガルダをリリースし、風霊術・『雅』を発動！ このカードは風属性モンスター1体をリリースする事で相手フィールド上のカード1枚をデッキの1番下に戻す！」

「何！？」

ヒュルルルル……

ガルダはそよ風と化し、カオス・ソーサラーを包み込んだ。そしてカオス・ソーサラーは飛ばされた。

「カオス・ソーサラーが！」

「せっかく召喚したのに残念だったね。」

「だが、ダンディライオンの表示変更だけは封じた。カードを1枚セットし、ターン終了だ。」

鉄也 LP300

手札3枚

ダンディライオン（守）

伏せカード1枚

「私のターン！ 私はフィールド魔法、ミスト・バレー しんぷう霞の谷の神風（小説オリジナル効果）を発動！」

ヒュウウウ．．．．．

周りに鮮やかな風が流れ始めた。

「ん、風か？」

「そしてエレメントの泉を発動！」

風の次には天使が座っている泉が現れた。

そよ風に泉．．．．．

なんて美しい風景だと僕は思った。
精神的に癒される。

「さらに私は霞の谷の雷鳥を召喚！」

結衣さんの前に黄色い鳥が現れた。

霞の谷の雷鳥

3

ATK1100

「さらにこのモンスターは『霞の谷』と名の付いたモンスター1体を手札に戻すことで手札から特殊召喚することが出来る！ ミスト・

「コンドルを特殊召喚!!」

『ギョッ!!』

そよ風が雷鳥を掻き消し、首の周りにインディアンの飾りをつけた青いコンドルが現れた。

ミスト・コンドル

4

ATK1400

「この効果によって特殊召喚されたミスト・コンドルの攻撃力は1700となる!!」

ミスト・コンドル

4

ATK1700

「そしてエレメントの泉でライフを回復か。」

結衣 LP 1200 1700

「そう、でもそれだけじゃない。霞の谷の雷鳥はフィールドから手札に戻った場合、特殊召喚する！」

そよ風が吹き始め、雷鳥が再び現れた。

霞の谷の雷鳥

3

ATK 1100

「さらに、霞の谷の神風の効果発動！ 風属性モンスターが手札に戻った場合、デッキからレベル4以下のモンスターを特殊召喚することが出来る！ 戻って来て、ファルル！」

『やあ、また会ったな。』

霞の谷のファルコン

4

ATK 2000

マジかよ。

もうモンスターが4体も揃ったぞ！

これじゃあダンディライオンでも防ぎきれない！

このカードを使うしかないか。

「あ、ちなみに風属性モンスターが増えたことにより、ハンター・アウルは攻撃力がアップする！」

ハンター・アウル

4

ATK 1500 3000

それにモンスター4体で1体が攻撃力3000だと！

「バトル！ 霞の谷のファルコンでダンディライオンを攻撃！！
今の攻撃宣言により、霞の谷の雷鳥を手札に戻す！」

ヒュルルルル・・・

そよ風が雷鳥を飛ばし、雷鳥は戻って来た。

結衣 LP 1700 2200

「そしてまた神風のパターンか。」

「そのとおり。私はデッキからランス・リンドブルムを特殊召喚する!!」

双方の槍を持った緑色のドラゴンが現れた。

ランス・リンドブルム

4

ATK1800

やばい、あのモンスターは貫通持ちだ！

ハンター・アウル

4

ATK3000 3500

ズバッ!!

ファルルはダンディライオンを素早く切り裂いた。

するとダンディライオンは散り、綿毛が現れた。

綿毛トークン×2

1

DEF0

「ダンディライオンは墓地へ送られた時、綿毛トークンを2体特殊召喚させる！」

「だったらランス・リンドブルムで綿毛トークンを攻撃！ せっかくのラウンド2なのにこれで終わりね。」

仕方がない。

「果たしてそうはいくかな？」

ガキイ！

鎧武者のようなモンスターが突然現れ、ランス・リンドブルムの攻撃を受け止めた。

「あれは！？」

「ネクロ・ガードナーだ。このモンスターは墓地から除外することと攻撃を1回だけ無効に出来る。」

「なるほど、メタモルポットによって送られたもう1枚ね。私はハンター・アウルとミスト・コンドルで綿毛トークンを攻撃!」

ズバババツ!!

せっかく召喚された綿毛トークンがあつという間に破壊された。

「そして霞の谷の雷鳥で直接攻撃……………」

「うわあっ!!」

だったらこのカードで防ぐしか……

「……………」と言いたい所だけどこのモンスターは自身の効果によって特殊召喚された場合、攻撃することが出来ないのでターン終了。」

結衣 LP2200

手札0枚

霞の谷のファルコン(攻)

ハンター・アウル(攻)

霞の谷の雷鳥(攻)

ミスト・コンドル(攻)

ランス・リンドブルム(攻)

霞の谷の神風(フィールド魔法)

エレメントの泉(発動中)

伏せカード1枚

「驚かすなよ。」

「えへへ」

しかしやるな。

1ターンで一気にモンスターを5体も特殊召喚させてライフも回復させるとはな。

頼みのカオス・ソーサラーも封じられたし。

反撃を狙うどころか逆にまたピンチだ。

メタモルポットを使う事が裏目に出たか。

しかし相手も手札を一気に消費した。

ハンドアドバンテージなら僕にある。

僕の方が有利だ。

だったら……

「僕のターン！僕はブラック・ホールを発動！フィールド上のモンスターは全て破壊される！！」

また次元が歪み、全てを吸い込もうとした。

そういえば今回のデュエルは次元の歪みが多いな。

作者がハルヒの影響を受けているせいなのか？

「させない！魔宮の賄賂を発動！ブラック・ホールの効果を無効にする！」

「くっ……ドロー！（しかないカードが引けた！）僕は2枚目のジャンク・シンクロンを召喚する！！」

『戻ってきたぜ!!』

ジャンク・シンクロン

3

ATK1200

「ジャンク・シンクロンの効果により、チューニング・サポーターを特殊召喚!」

チューニング・サポーター

1

DEF300

「でも、それだとレベル4しかないわ。」

「分かっている。このモンスターは墓地に存在し、チューナーモンスターがフィールド上に存在する場合、守備表示で特殊召喚することが出来る! 戻って来い、ボルト・ヘッジホッグ!!」

『キュ〜!!』

ボルト・ヘッジホッグ

2

DEF 800

「レベル1、チューニング・サポーターとレベル2、ボルト・ヘッジホッグにレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング！ 権力よ、罪人を叩き潰し道を正せ。」

1 + 2 + 3 = 6

「シンクロ召喚！ であえ〜ゴヨウ・ガーディアン！！」

『御用だ！！！』

歌舞伎のようなメイクをした和風のモンスターが現れた。

ゴヨウ・ガーディアン

6

ATK 2800

「チューニング・サポーターの効果により、カードを1枚ドロ。」

ドロしすぎてデッキが薄くなってきたな。

さて、一番最初に倒すべきモンスターは・・・

「ゴヨウ・ガーディアンで霞の谷の雷鳥を攻撃！　ゴヨウ・ラリアット！！」

ゴヨウ・ガーディアンはロープが付いた十手を雷鳥へ投げつけた。

「くっ・・・」

結衣　LP2200　500

ギユウ・・・

ゴヨウ・ガーディアンは攻撃した霞の谷の雷鳥を縛り、僕のフィールドへ持って行った。

霞の谷の雷鳥

3

DEF700

「なぜ雷鳥が!？」

「ゴヨウ・ガーディアンは相手モンスターを戦闘によって破壊して墓地へ送られた場合、自分フィールドに表側守備表示で特殊召喚させることが出来る。カードを2枚伏せ、ターン終了だ。」

鉄也 LP300

手札2枚

ゴヨウ・ガーディアン（攻）

霞の谷の雷鳥（守）

伏せカード3枚

「私のターン！（ハンター・アウルでゴヨウ・ガーディアンを戦闘破壊できるし、ランス・リンドブルムで雷鳥を攻撃すれば勝てるけど伏せカードが気になるね。）私はハリケーンを発動！」

ブオオオ.....

巨大な竜巻が魔法、罠カードを飲み込み始めた。

「これでフィールド上の魔法、罠カードは全て手札に戻る！」

「速攻魔法、異次元からの埋葬を発動！僕は除外されているジャ

ンク・シンクロン、ライトロード・ハンター ライコウ、そしてネ
クロ・ガードナーを墓地へ戻す！」

棺桶が現れ、3枚のカードを吸い込んだ。

「さらに罫発動！ シンクロ・ストライク！！ ゴヨウ・ガーディ
アンの攻撃力をアップさせる！」

ゴヨウ・ガーディアン

6

ATK 2800 4300

竜巻は止んだ。

「……………ハンター・アウルによるゴヨウ・ガーディアンへの
戦闘破壊とランス・リンドブルムの貫通能力を警戒していたのね。」

「そのとおり。」

「（ランス・リンドブルムの攻撃を実行したらネクロ・ガードナー
の攻撃を無効化されて次のターンでのゴヨウ・ガーディアンの攻撃
によって負けてしまう。） 私はモンスターを全て守備表示に変更
してターン終了。」

正しい選択だ。

ゴヨウ・ガーディアン

6

ATK 4300 2800

結衣 LP 500

手札 0 枚

霞の谷のファルコン（守）

ミスト・コンドル（守）

ランス・リンドブルム（守）

ハンター・アウル（守）

霞の谷の神風（フィールド魔法）

エレメントの泉（発動中）

「僕のターン！（ようし、この状況を一気にひっくり返したぜ！）
僕は装備魔法、団結の力を発動！ ゴヨウ・ガーディアンに装備
！！」

ゴヨウ・ガーディアン

6

ATK 2800 4400

「僕はゴヨウ・ガーディアンでランス・リンドブルムを攻撃！ ゴヨウ・ラリアット！！」

ゴヨウ・ガーディアンはランス・リンドブルムを縛り上げた。

ランス・リンドブルム

4

DEF 1200

ゴヨウ・ガーディアン

6

ATK 4400 5200

これで貫通能力の恐れはない。

考えてみればコントロール強奪のゴヨウ・ガーディアンとモンスターの数で強化する団結の力は相性が良すぎる。

今でもうアルティメットどころかF・G・Dを超えてるよ。

F・G・Dよ．．．お前は既に死んでいる！！（《注》ゴヨウ・ガーディアンではF・G・Dを戦闘によって破壊することは出来ません。）

しかし奪えば奪うほど強くなるなんてこれじゃあ、警察というより泥棒だな、ゴヨウ・ガーディアンよ。

ちなみにこれは元々僕のカードではない。

おっさんのだ。

闇市場でおっさんからもらったカードだ。（第3話参照）

サンキュー、おっさん。

「カードを1枚セットし、ターン終了だ。」

鉄也 LP300

手札2枚

ゴヨウ・ガーディアン（攻）

ランス・リンドブルム（守）

霧の谷の雷鳥（守）

団結の力（ゴヨウ・ガーディアンへ装備）

伏せカード1枚

「（霧の谷の神風を発動したターンにシンクロ召喚への手順をすれば良かったわね。しかしすごい．．．．残りのライフがたったの300なのに逆にこっちが押されるなんてすごすぎる！でも私だってここで終わってなんかいない！このカードに賭ける！！）」

多分、結衣さんは今、天馬 夜光がライフが残り98である武藤 遊戯に感化されてる状況にあるだろう。

彼女に来るか．．．．．ディステイニードローが．．．．．

「私のターン！！ 私は貪欲の壺を発動！ 風の精霊ガルーダ、ハッピー・レディ1、ドラゴンフライ2体、霞の谷のファルコンをデッキに戻し、カードを2枚ドローする！」

一体何がくるのだろうか・・・

「（バードマンと便乗・・・）私はミスト・コンドルを手札に戻し、チューナーモンスター、A・ジエネクス・バードマンを特殊召喚する！！」

ミスト・コンドルが消え、緑の鳥型の宇宙飛行士っぽい物が現れた。

A・ジエネクス・バードマン

3

ATK1300 1800

「さらにエレメントの泉でライフを回復し、霞の谷の神風の効果でドラゴンフライを特殊召喚させる！！」

結衣 LP500 1000

ドラゴンフライ

4

DEF1000

「行くわよ、ファルル。」

『雷神様か。いつでもいいぜ。』

「レベル4、霞の谷のファルコンにレベル3、A・ジェネクス・バードマンをチューニング！！ 霞の谷の雷神よ、今こそその雷の力を解き放て！」

4 + 3 = 7

「シンクロ召喚、ミスト・バレー霞の谷の雷神鬼！！」

空から雷が起き、黒き翼が生えた緑色の巨人が舞い降りた。雷神と呼ぶにはふさわしい姿だ。

霞の谷の雷神鬼

7

ATK 2600

「霞の谷の雷神鬼の効果発動！ 1ターンに1度、自分フィールド上のカード1枚を手札に戻し、攻撃力を500ポイントアップさせる！！ 私はドラゴンフライを手札に戻す！」

霞の谷の雷神鬼

7

ATK 2600 3100

「さらに今の効果により、エレメントの泉でライフを回復し、神風の効果でチューナーモンスター、霞の谷の幼怪鳥を特殊召喚する！」

結衣 LP 1000 1500

骸骨を被った鳥が現れた。

霞の谷の幼怪鳥

2

ATK 400

「2体目のチューナーモンスターだと！」

やばい．．．彼女が持つモンスターはほとんどバウンス効果を利用する。

シンクロ召喚されるモンスターがバウンス効果を発揮させるモンスターと考えるとあのモンスターしかない！

「レベル4、ハンター・アウルにレベル2、霞の谷の幼怪鳥をチューニング！！ 氷の世界に眠りし龍よ、今こそ氷の力を解き放て！」

間違いない．．．．あのモンスターはゴヨウ・ガーディアンと同じくらいの強さを持つ強力なモンスター．．．．

4 + 2 = 6

「シンクロ召喚！ 凍結せよ、氷結界の龍 ブリユーナク！！」

モンスターがチューニングし、氷の体をした龍が現れた。

氷結界の龍 ブリユーナク

6

ATK 2300

「ブリューナクの効果は知っているかしら？」

「ああ。このモンスターは手札を任意の枚数だけ墓地に送ること
でその枚数分フィールド上のカードを手札に戻す。その手札コス
トをジェネクス・バードマンと雷神鬼で作るとはなかなかやるな。」

「じゃあ、続けるわ。私は手札を2枚墓地へ送り、あなたの伏せ
カードとランス・リンドブルムを手札に戻す！ この時、ランス・
リンドブルムは私の手札へ戻り、エレメントの泉の効果が発動する
！」

カチカチカチカチ．．．．．バリーン！

ブリューナクの吐く氷の息に鉄也のカードは凍りつき、ガラスのよ
うに砕け散った。

「（ミラーフォースが．．．）」

結衣 LP 1500 2000

「そして霞の谷の神風により、私はハーピー・レディーを特殊召喚
させる！！ そして手札のランス・リンドブルムを墓地へ送り、ゴ
ヨウ・ガーディアンを手札に戻す！」

結衣 LP 2000 2500

ハーピー・レディ 1

4

ATK 1300 1600

霞の谷の雷神鬼

7

ATK 3100 3400

「くっ・・・シンクロモンスターはエクストラデッキに戻る・・・」

何ということだ。

今のデイスティニードローで僕のフィールドが一気にから空きになつてしまった。

「私はまだ通常召喚を行っていない。 ミスト・コンドルを召喚！」

ミスト・コンドル

4

DEF 1000

「バトル、氷結界の龍　ブリューナクで霞の谷の雷鳥を攻撃！（ぐめんね。）」

ブリューナクの吐く息に雷鳥は凍りついた。

「そしてハーピー・レディーで直接攻撃！！」

「墓地からネクロ・ガードナーの効果発動！　このモンスターを外し、攻撃を無効にさせる！！」

ネクロ・ガードナーが現れ、ハーピー・レディの爪を受け止めた。

「これでネクロ・ガードナーは使えなくなつたわ。これでフィニッシュよ！　霞の谷の雷神鬼で直接攻撃！！　豪雷激烈掌（ごうらいげきれつしょう）！！」

雷神鬼の掌がこっちへ向かって来る。

これをくらったら終わりだ。

だが、まだ終わらせない！

意地でも止めてやる！！

「いいプレイングセンスだ！　だが、伊達にハンドアドバンテージじゃないんだぜ。頼むぜ！」

『クリクリ〜！』

バチチチ・・・

急にモンスターが飛び掛り、雷神鬼の攻撃を受け止めた。クリボーだ。

クリボーが僕の盾になってくれた。
さつき使おうと思ったが、使わなくて良かったので取っておいた甲斐があった。

「クリボー!？」

「たとえフィールドにカードがなくても手札で発揮できるカードが僕にはある。サンキュー、クリボー。」

『クリクリ〜!』

クリボーは墓地へ入っていった。

「ミスト・コンドルを攻撃表示で召喚しておくべきだったな。」

「やるわね・・・だったら次のターンで決める。」

結衣 LP2500

手札0枚

霞の谷の雷神鬼（攻）

氷結界の龍 ブリユーナク（攻）

ハーピィ・レディー（攻）

ミスト・コンドル（守）

霞の谷の神風（フィールド魔法）

エレメントの泉（発動中）

霞の谷の雷神鬼

ATK 3400 2900

正直、運が良かったな。

ミラーフォースを伏せてもまた雷神鬼とブリューナクの効果でバウンスされてしまうだろう。

だったらこれはラストターンだ。

このドローに賭ける！

「ドロー！！ 僕も貪欲な壺を発動！ ジャンク・シンクロン、ライトリード・ハンター ライコウ、ダンディライオン、そしてチュニング・サポーター2体をデッキに戻し、デッキからカードを2枚ドローする！！」

僕はこの状況を絶対抜いてみせる。

この為のハンドアドバンテージだ。

「（カリキュレーターにレベル・ステイラー！ これなら・・・
．．．）」

「（今のでライフも十分補給した。 このターンで私をフィニッシュできるモンスターを召喚できるはずがない。 守りに入ったとしても次のターンのドローカードと雷神鬼の効果で手札を稼ぎ、ブリューナクの効果で一気に決める。）」

「悪いけど、次のターンなんてないぜ。」

「え？」

「僕のターン！ 僕は手札を1枚墓地へ送り、チューナーモンスター、クイック・シンクロンを特殊召喚する！！」

僕のフィールドにカウボーイのようなモンスターが現れる。

クイック・シンクロン

5

ATK500

「さらに、ザ・カリキュレーターを召喚！！」

ザ・カリキュレーター

2

ATK0

「カリキュレーター？ 私に勝つにはレベルが足りないよ。」

「どうやらカリキュレータの効果を知っているようだな。 君が『雷神鬼』なら僕は『計算鬼』で対抗するぜ！」

「……………」

ガーン！！

僕はショックを受けた。

と、とにかく……………

「あ、ああ……………オッホン。このモンスターはフィールド上のレベル5以上のモンスターのレベルを1下げ、墓地から特殊召喚が可能。クイック・シンクロンのレベルを1つ下げ、レベル・ステイラーを特殊召喚！」

クイック・シンクロン

5 4

テントウ虫が出た。

レベル・ステイラー

1

ATK600

「クイック・シンクロンはシンクロ素材に使用する時、『シンクロン』と名の付いたチューナーモンスターとして扱うことが出来る。」

クイック・シンクロンの前にカードのルーレットが現れた。

クルクルクルクル・・・・・・・・・・

カードのルーレットが回り出す。

クイック・シンクロンはポケットから銃を抜いた。

「僕が選択するモンスターは・・・・・・・・」

ドギューン！

クイック・シンクロンの弾丸が1枚のカードを貫いた。
そのカードは・・・・・・・・

「ジャンク・シンクロン！！」

「レベル1、レベル・ステイラーにレベル4、クイック・シンクロンをチューニング！！ 集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！」

行くぜ、マイフェイバリット！！

1 + 4 = 5

「シンクロ召喚！ いでよ、ジャンク・ウォリアー！」

『トアア！！！！』

ジャンク・ウォリアー

5

ATK 2300

「ザ・カリキュレーターの効果により、攻撃力がアップする!!」

『ジャンク・ウォリアー、レベル5・・・私自身、レベル2・
・5+2=7・・・7×300=2100・・・』

ザ・カリキュレーター

2

ATK 2100

「攻撃力2300と攻撃力2100・・・ミスト・コンドルが攻撃表示だったら勝てるかもしれないけど、それじゃあ勝てないわ。」

「だが攻撃力が高ければ勝てる! ジャンク・ウォリアーの効果発動! このモンスターがシンクロ召喚に成功した時、自分フィールド上のレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分攻撃力がアップする! パワー・オブ・フェローズ!!」

ジャンク・ウォリアー

5

ATK 2300 4400

「攻撃力4400!？」

「バトルだ！ ザ・カリキュレーターでハーピー・レディ1を攻撃
！ デジタルチャージビーム!!」

結衣 LP 2500 2000

「ハーピー・レディ1が破壊されたことにより、攻撃力が下がる！
」

霞の谷の雷神鬼

7

ATK 2900 2600

「そしてジャンク・ウォリアーで霞の谷の雷神鬼を攻撃!!」

「霞の谷の雷神鬼の効果発動! 霞の谷の神風を手札に戻し、攻撃力をアップさせる!」

霞の谷の雷神鬼

7

ATK 2600 3100

「それでもジャンク・ウォリアーの攻撃力が上だ!! スクラップ・フィストオ!!」

「こつちも最後まで真っ向勝負よ!! 豪雷激烈掌!!」

ジャンク・ウォリアーの拳と雷神鬼の掌がぶつかり合う。

バチバチバチバチ.....

僕の興奮が治まらねえ。

このデュエル...熱いぜ!!

ドクン!

「うつ!!」

ドクン！！

な、何だ！？

腕が急に．．．

「う．．．．．」

痣か！？

何で今さら．．．

とりあえず僕は左腕を押さえた。

ドッカーン！！

「きゃああ！！」

結衣 LP2000 0

「ハア、ハア．．．．．」

腕の痛みが治まった。

痣は．．．．．消えた。

「はははは．．．負けちゃった。」

まあいい。

今こそチャンスだ。

僕は人差し指を指してこう言った。

「ガッチャ！！　楽しいデュエルだったぜ！」

一度言ってみたかったんだよな、これ。

「うん！　こっちも楽しかったよ。」

スザクとカレンの因縁の戦いのようなデュエルを終えた後、公園を後にして結衣さんの家へ行くことになった。

- 午後6：00　神風家自宅 -

「どうぞ。」

「おじゃまします。」

結構広い家だな。

「買い物に付き合ってくれてありがとう。」

「意外と大変だったぞ。　で、どこに置くんのだ？」

「勿論、私の部屋。」

やはりそうだな。

オタクなら絶対そうだ。

「うわ．．．」

彼女の部屋には色々なフィギュア、漫画の本棚、パソコン．．．．．
オタクの部屋だ。

「たしかにオタクだな。 電車並のオタクだな。」

「最高の褒め言葉です。」

「もう二度とこんな事に付き合わせないで下さい。」

「はははは．．．．．私の友達もそう言ってたっけ。 そうですね
ばあなたはどこに住んでいるの?」

「．．．．．野宿です。」

嘘じゃない。

サテライト住民は皆、野宿と変わらない。

「じゃあ、せつかくだから泊まっていきなさいよ。」

「え?」

違和感なく答えたな、この人。

結衣さんは僕がサテライトだということを知らないのか?

まあ、そうだな。

マーカー付きとなっているのはサテライトだけとは限らない。

しかしこの子の為にもマーカー付きである僕と関わるのは今日限り
にして欲しい。

「だって、せつかく退院させて付き合わせたのもなんだか悪いし。」

だったら最初からコミケに付き合わせるなよ。

「いや、僕はマーカー付きですし。」

「まあまあ、そんな硬い事言わずに。」

だがせつかく親切に勧めてくれているし、考えてみれば今の僕に住む場所なんてない。

痣の事も考えておきたいし、精神的な休息も必要だ。

「それじゃあ、お言葉にあまえて……………」

僕は1日だけ結衣さんの家へ泊まることになった。
明日の予定も考えないとな……………

- Side End -

To be continued……………

第12話 相手が雷神鬼ならこっちは計算鬼だ（後書き）

ご存じない方達に説明しておきます。

この話で登場したフィールド魔法、『霞の谷の神風』はオリカではありません。

『STORM OF RAGNAROK』でOCGされています。
ミスト・バレーとは相性がいいカードです。

ちなみにOCGだと効果は1ターンに1度です。
次からはそうしない事にします。

それでは次回・・・・・・・・・・・・・・・・まあ、次回もお楽しみに！！

PROFILE・神風 結衣（前書き）

ヒロインのキャラ設定です。
少しネタバレがあります。

PROFILE - 神風 結衣

神風 かみかぜ
結衣 ゆい

イメージCV：平野 綾

年齢 15歳

身長 156cm 体重 禁則事項

外見 水色の眼と長い緑色の髪を後ろに結んでいる。

性格

（性格モチーフはこなた）極度のオタクであり、漫画、ゲーム、アニメが好きである。 普段は明るいが、怒ると怖い。 信頼している人以外の人達とはあまり話をしない。 多少、人をこき使わせる一面があるが、根は優しい。

一人称は『私』。

スリーサイズ 普通以上／細い／引き締まっている

【詳細】

この小説のヒロイン（多分）。 らき すたのこなた並のオタクであり、アニメ、漫画、ゲームにはまっている。 デュエルアカデミア中等部に通っている。 ゲームの才能はかなり高い。 勉強は好きではなく、あまり勉強する一面はないが、頭は良くて成績はデュエル、筆記と共に優秀である。 身体能力は普通であるが、苦手なスポーツが多い。 未成年だがD・ホイルの運転が出来る才能

もある。両親は幼い頃に事故で亡くしており、セキュリティである兄と暮している。ちなみにオタクになったのも兄の影響である。（作者がらきすたの影響を受けて考えてしまったキャラらしい。）兄が黒薔薇の魔女により重傷を負って以来、黒薔薇の魔女を目の敵にしている。

あまり勉強はしないが、学力は高い。
一方、体力は平均以下。

好きなもの

兄、アニメ、漫画、デュエル、ゲーム（ギャルゲー、アダルトゲー、格ゲー、とにかく色々なゲーム）、リリカルなのは、コスプレ、らきすた、コミケ、イベント、萌え、グッズ、色々な食べ物、アニメキャラとのフラグ

嫌いなもの

黒薔薇の魔女、発売延期、オタクを嫌がらせる者

得意なもの

バイク（未成年だがD・ホイールの運転が出来る）、ゲーム、料理、勉強（しかし好きではない）、水泳

苦手なもの

困っている人、各種のスポーツ

【使用デッキ】

ミスト・バレー、風属性によるバウンスコンボデッキ。

途中でダーク・シムルグを中心とした風属性と闇属性の混合デッキに改良された。

切り札は《霞の谷の雷神鬼》《氷結界の龍 ブリューナク》《ミスト・ウォーム》《A・O・J カタストル》《ダーク・シムルグ》

精霊のカード

《霞の谷のファルコン》

効果モンスター

星4 / 風属性 / 鳥獣族 / 攻2000 / 守1200

このカードは、自分フィールド上に存在する

カード1枚を手札に戻さなければ攻撃宣言をする事ができない。

【詳細】

名前『ファルル』。

真面目でクールな性格だが、ツツコミが多い。

あるきっかけで結衣と出会い、名前を付けられて彼女のカードとなった。

主である結衣を気づかっており、彼女の世話役でもある。

彼女の勝手な行動に色々動かされて困っているが、結衣を相棒として信頼している。

【備考】

下級モンスターでは攻撃力が高い。 自分フィールド上のカードを手札に戻さないと攻撃できないが、カードの種類に制限が無いので大した問題ではない。 むしろ《光の護封剣》や《禁止令》を手札に戻して再使用できる為、優秀な効果である。 相手モンスター

に《ビッグバン・シュート》を装備して手札に戻せば相手モンスターを除外できる。 風属性・鳥獣族モンスターであり、《ゴッドバードアタック》や《風霊術 - 「雅」》のコストにも有効。

第13話 8月31日で宿題を全部終わらせようとする時と同じ位悩む主人公

今回はデュエルありません。

鉄也「作者よ．．．最近のサブタイトル、ちょっとおかしくね？」

一度考えてみた歌

ブラック・フェザー

B Fが倒せない(第1章)

原曲 エアーマンが倒せない

作詞 B R A V E

気が付いたらいつも友人とデュエル

そしていつも黒羽使って来る

諦めずに俺はB Fに挑戦するけど

すぐにシンクロ出てくる

聖なるあかりさえあれば楽にB Fを封じれそうだけど

何回やっても何回やってもブラックフェザーが倒せないよ

あの鎧は何回やっても砕けない

弱そうな奴を先に狙ってみたけど月影で返り討ちにされちゃう

防御体制に入ってみたけど貫通されてちや意味が無い

だから次は絶対勝つためにミラフォだけは最後までとっておく

第2章考え中

第13話 8月31日で宿題を全部終わらせようとする時と同じ位悩む主人公

- 鉄也 Side -

- 7:00、神風家自宅 -

僕は結衣さんの家で泊まることになった。
今夜は何も難しい事を考えなくていい。
ただ休むだけだ。

「どうぞ。」

「ありがとうございます。」

結衣さんが夕飯を作ってくれた。
夕飯はチャーハンだった。

「いただきます!!」「」

僕はチャーハンを食べた。

「ん、旨い!!」「」

「そうですか。」

「料理上手じゃないですか。」

「いやあ、それ程でも。」

そう．．．これ程楽しい思いはトリップして以来、滅多になかったからな。

美味しい．．．．．

「ご馳走様でした。」

夕飯はとても良かった。
久々のご馳走だった。

「ねえ．．．．．」

結衣さんが聞き出した。

「ん？」

「ゲームやらない？」

「ゲーム？」

スマ○ラ．．．鉄○．．．ストリートファイター．．．デッ○・オ
ア・アライヴ．．．メトロ○ド．．．ド○クエ．．．ポケ○ン．．．
ゼ○ダの伝説．．．色々なゲームを持っていた。
さすがはオタク。

久々にゲームに出会った。

正直、遊びたい。

「じゃあ、このゲームでいいか？」

僕が選んだのはスマ○ラだ。

「いいよ。」

僕はスマ○ラでも強者だ。

戦略はア○クの炎と怪力でガンガン攻める！！

「よし、ア○クだ！！」

「じゃあ、私はヨッ○ーで。」

『3 . . . 2 . . . 1 . . . G O ! ! !』

.

「な、何いい！！」

負けた。

ストックが1つも削れず負けた！！

与えたダメージも余程少ない！！

いや、今のはマグレだ！

絶対マグレだ！！

「じゃあ、今度はアイスク○イマーで。」

「うっ . . .」

「プリ〇．．．．．」

「うう．．．」

「マ〇ス。」

「ぬぬ．．．」

「今度はピーチね。」

「．．．．．」

負けた。

全然勝てない。

ピッ〇やメタナ〇トも使って見たのに全然勝てない。

彼女強すぎ！！

まさに神技！！

「私の連勝ね。」

「すまん、違うゲームでいいか？」

「今度はマリ〇カートでいい？」

「いいぜ。」

．．．．．負けた。

この子コースをすごく把握出来ている上にドライビングテクが脅威的だ！！

「じゃあ、これで……………」

．．．負け

「このゲーム……………」

．．．敗北

「このゲームでいいですか？」

．．．惨敗

全然勝てない。

まるでナイト・オブ・ラローズが紅蓮○天八式を相手にしているような感じだ。

「次は何をしたい？」

「……………もういいです。」

まあ、負けたとはいえ何とか楽しめたし一応良かった。

「あ、お風呂沸いたけど入る？」

「いや、どうぞ。」

「じゃあ、暇だったらアニメのDVDでも見てて。」

「……………そうしておきます。」

結衣さんは風呂へ行った。

.....

うわゝ話が終わったら暇になってしまった。

はあ・・・

なんか落ち着きがなくなってきた。

結局アキとのデュエルしてから突然結衣さんに出会って計画がずれているし。

そもそも計画自体考えていない。

黒き痣が少し現れたのは良いけどあれが良いのか悪いのか・・・

今日はゆっくりとしようと思ったがそう簡単にいかなかったか。

明日のパンツがなけりやもう終わりだ・・・と
いうほどではないがな。

『黒き痣って一体なんなのでしょうね。』

「さあな。まあ、黒崎さんにもう1度会えば全てが分かる筈だ。」

連絡先はもらっている。

明日、公衆電話でも見つけて連絡しよう。

僕はコード〇アスR2を見始めた。

全部見たアニメだが、気分転換にもう1度見よう。

.....
.....
.....

ル〇ーシュよ、お前は悪魔であり、英雄であつた!!

- Side End -

- 結衣Side -

シャアアア.....

『今日も色々あつたな。』

風呂場の外からファルルが話しかけて来る。

「まあね。意外と面白そうな人だつたね。」

『結衣はああいうのに興味深いからな。』

「あははは．．．．．」

『しかし油断したとはいえ、アカデミアでも『風姫』と呼ばれるお前が負けるとはな。』

「まあ、彼も結構強かったしね。」

『確かにあいつは読めない奴だったな。』

私は体を流した後、風呂に入った。

「ねえ、ファルル。私、鉄也とデュエルした時、腕がちょっと痺れちゃってて。」

『！！ それって．．．．．』

「少し腕を見たら私の痣が疼き出てたんだ。」

『やはり．．．あいつもその痣に関係あるということか？』

「分からない。でも彼なら痣の事を知っているかもしれないと思つてさ。」

『聞き出すのか？ あいつは今日しか泊まらないぞ。』

「うっっん．．．．．」

- Side End -

- 鉄也 Side -

考えてみれば彼女の家に誰もいない。
一人で暮らしてるのか？

「やあ、鉄也。」

結衣さんが来た。

せっかく知り合ったし、話でもしたほうが良いだろうと思った。

「ねえ．．．君の家族は？」

「え、家族？」

「ほら．．．両親とか．．．」

「もっていないよ。」

「え？」

「私が幼い頃に事故で死んじゃったんだ。」

いないのか……………

「……………すまん。」

「いいよ、別に。もう既に昔の頃だったし。」

「あ、そういえば君は兄がいると言ってたな。」

今の発言により、結衣さんのトーンが下がった。

「兄さんは今、入院している。」

「入院？」

「しばらく前から怪我をして昏睡状態なんだ。」

まさかこの子……………

「……………もしかして君、一人なのか？」

「……………まあね。」

「……………一人で寂しくないのか？」

「大丈夫だよ。私にはファルルがいるし、兄さんは必ず戻って来

る。」

「……………そうか。」

彼女は大丈夫と言っていたが、僕には分かる。
大丈夫ではない。

「あ、もうこんな時間だ。そろそろ寝ないと。」

「明日に何かあるのか？」

「明日は月曜日だよ。学校に決まってるでしょ。」

学校……………デュエルアカデミアか。

「鉄也は明日出て行くの？」

「……………ああ。僕だってやらなければならない事（多分）があるんだ。」

「そう。宿先でもあるの？」

「……………ああ。」

- 午後0時 -

結衣さんはもう寝ている。
明日の計画どうしよう……………

僕はカードを眺めながらため息をついた。

黒き痣の事が余計気になってきた。

ゆっくり休むつもりだったがどうも思い通りにならなかった。

マーカー付きである僕がいたら彼女にも迷惑かけそうだからな。

僕は飯を作り、手紙を書いておいた。

『結衣さんへ

お世話になりました。

入院と食事ありがとうございます。

コミケのお付き合い楽しかったです。

あなたはマーカー付きである僕と関わらない方が良いので僕は去っていきます。

朝食を作っておいたので温めて食べてください。

また会えると良いですね。

鉄也』

国語は苦手だ。

僕は結衣さんの部屋へ入って行った。

．．．．．布団がずれてる。

かけなおしてあげた。

「ん？」

．．．．．彼女の目から涙が流れている。

「やはり辛いんだな。」

行くの？

ジャンクが聞いてくる。

「ああ。」

僕は手紙を置いて出て行った。

- ネオ童実野シティ -

僕は公衆電話へ入った。

[illegible]

収容所でケーキを食べていた時、包み紙に数字が書いてあった。

9957836008

あの部分をちぎって隠しておいた。

[illegible]

僕はその番号を電話に掛けた。

トゥルルルルル．．．トゥルルル．．．トゥルルル．．．．．

『やあ、村上クン』

「何で僕だと分かったんですか？」

『この番号、特別用の携帯電話のみだからね。』

「まあ、それはともかく黒き痣の事なんですけど。」

『分かった。 全て話そう。 君はどこにいる？ 迎えに来てやるよ。』

- Side End -

第13話 8月31日で宿題を全部終わらせようとする時と同じ位悩む主人公

次回『黒き痣とブルーアイズと招待状』

今回はちょっと文章が下手だったかもしれん。

第14話 黒き痣とブルーアイズと招待状（前書き）

サブタイトルはオーズを真似て書きました。
今回もデュエルはありません。
それにいつもと比べて短いです。

第14話 黒き痣とブルーアイズと招待状

- 午後0時 -

シュウは鉄也を車で迎えに来た後、彼を乗せて行った。

「（黒き痣・・・これは一体・・・・・・・・・・）」

「ところで村上くん。」

「はい。」

「そのモンスターって君の精霊かい？」

シュウはジャンクのことを言っていた。

「え、黒崎さんも見えるんですか？」

『どうやらそうみたいだな。』

「まあね。あ、そろそろ着くよ。」

シュウは鉄也を彼の家の中に入れた。

「うわ．．．すごく広い。」

シュウの家は広くて豪華であった。

「どうぞ、あがってあがって。」

「ああ、お邪魔します。」

鉄也はリビングで座って待っていた。
シュウがコーヒーを持ってきた。

「コーヒーどうぞ。」

「ありがとうございます。」

鉄也はコーヒーを飲んだ。

「ん．．．．．いいコーヒーですね。」

「どうだい、ブルーアイズマウンテンの味は？」

「これがブルーアイズマウンテン．．．（こ、これが原作で3000円もするコーヒーなのか！？ たった今、頭の中にバーストストリームが走った！！ まさにブルーアイズ！！）」

「気に入ったようだね。そろそろ黒き痣の話をしようか。」

「はい。」

シュウは5000年前のシグナーの話をした。

星の民の王が赤き竜を呼び起こしたこと……………
赤き竜とシグナーが地縛神と戦ったこと……………
そして赤き竜が地縛神をナスカに封じ込めたこと……………
赤き竜が5つに分かれて人間に封印されたこと……………
鉄也は既に知っていることだが詳しく覚えていないので好都合だった。

「そして黒き痣は……………」『アンディサイドッド』と呼ばれる。

「あんでいさいでつど？」

「^{アンディサイドッド}Undecided（決心していない者）……………黒き痣を持つ者はシグナー、またはダークシグナーでもある。」

「10000年前の戦いの時、赤き竜と地縛神の戦いがきっかけであった。激戦の中、赤き竜によるプラスエネルギー、そして地縛神によるマイナスエネルギーがぶつかり合い、そのぶつかり合いによって新しいエネルギーの破片が人間界に飛び散って封じ込まれた。その破片は混純の魂を生み出したともいえる。」

「……………それがアンディサイドッド……………」

「そして今、その封じ込まれた魂があるエネルギーの暴走によって痣として蘇った。」

「エネルギーの暴走……………ゼロ・リバーズか!？」

「よく知っているね。そう、不動博士の旧モーメントによる暴走がアンディサイドッドの封印を解いた。その痣は既にその時代に

存在していた者、あるいは時によって生まれてくる特定の人間に転生される。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そして黒き痣は持つものによって形が違ふ。」

「形？」

「黒き痣の形はそれを持つ者の心を象徴させる。」

「・・・・・・・・」

「そしてアンディサイドッドは持つ者の心によって育つ。」

「育つ・・・・・・・・だからアンディサイドッドなのか。」

「もし痣の成長が良ければ世界を守る為の存在となる。」

「悪ければ・・・・・・・・」

「悪ければ世界に絶望をもたらす存在となってしまう。」

「・・・・・・・・ダークシグナーとなる事か。」

「そのとおり。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」

鉄也はこの時悩んだ。

自分が世界を守るシグナーのような存在としてこの世界へ来たらいいかもしれない。

しかし鉄也は自分を善人だと思ってはいない。

もし自分が世界に絶望をもたらす存在だとしたらどうする

自分がその為にこの世界へトリップしたらどうなるか

「ところで君はどうだい？」

「え？」

「君は痣を見たんだろ。 だからボクを呼んだ。」

「ああ、2回だけ見た。 今はないんだけど。」

「へえ、どんな形だい？」

「. . . 人の形をしていた。」

「人型か。」

「黒崎さん。 なぜ僕の存在を知っていたんですか？」

「ああ、それ？ 1つは前も言ったとおり、痣によって導かれたから。 そしてもう1つはある人に君に会うように頼まれたからだ。」

「ある人？ あなたの他に誰か僕の存在を知っているんですか？」

「そのとおり」

「・・・・・・・・・・黒崎さん。」

「なんだい？」

「あなたは何故、僕に痣の話をするんですか？」

「それはね、そのある人が君なら世界を守る存在として助けたいと教えてくれてね、ボクも君と会った時、同感した。そして君はボクと共にダークシグナーからの世界への危機を救うのを手伝ってもらいたいと思う。　どうかい？」

「・・・・・・・・・・世界か。　スケールでかいな。」

「まあ、考えたまえ。」

「そうしておきます。」

「それで、君に要求がある。」

そう言つてシユウは懷から封筒を出した。

「え、要求？」

「ゴドウィンは君をデュエル・オブ・フォーチュンカップに招待している。」

「招待されているだど？」

「断つても構わないんだけど、君の痣を覚醒させるチャンスだよ。」

どうする？」

この時、鉄也は一瞬迷った。

ゴドウィンに招待されているという事は彼は鉄也の痣を利用して
いる事……………

鉄也をダークシグナーへと目覚めさせようとしている可能性もある
.

……………

おそらく出場しないほうが身のためだろう……………
しかし鉄也は……………

「……………僕は自分がなぜこの世界にいるか知り
たい。自分の痣の意味が分かればそれが分かるかもしれない。
だから僕は出場する。」

「……………いい決意だね　じゃあ、これをどうぞ。」

シュウはフォーチュンカップの出場権である封筒を鉄也に手渡した。

「フォーチュンカップは3日後。　エントリーは16人。　ちなみ
にボクも出る。　分かったね？」

「（16人エントリー？　イレギュラーの存在で変わってしまった
のか？）　ああ、分かった。」

「まあ、もうこんな時間だ。　今夜はここに泊まっていきたまえ。」

「ありがとうございます。　あと1つ聞いて良いですか？」

「ん」

「『ある人』って誰ですか？」

「それは秘密だよ」

「はあ……………」

「……………フォーチュンカップか。（遊星とまた会えるし、あとキングとアキ姉さんにも会える。それにスターダストとレッド・デーモンズを生で見れるチャンスだ。）」

『頑張ろうぜ、鉄也！』

『クリクリ〜！』

「ああ。お前らがいれば怖いものなしだぜ。」

『じゃあ、お休み。』

『クリ〜』

「ああ、お休み。」

鉄也は客用室にあるベッドでゆっくり寝た。

第14話 黒き痣とブルーアイズと招待状（後書き）

では、次回『風姫との遊び相手はリヴァイアサン』

第15話 風姫のお遊び相手はリヴァイアサン（前書き）

一言

これは1度更新した話ですけど何か色々ミスが多くてなんかちよつとデュエルの形を変えようとして1度だけ排除しました。そしてもう1度やり直しました。

すいません、自分はルールを完全に理解できていない駄目作者ですがこれからも読者の期待を裏切らないように頑張ります。

第15話 風姫のお遊び相手はリヴァイアサン

- 結衣 Side -

私が起きた時には鉄也はいなくなっていた。
本当に行っちゃった。

そんなに急いでたんだ。

私は置いてあつた手紙を読んだ。

『よう、結衣。 良く寝たか?』

「おはよう、ファルル。」

『あいつは...』

「うん。 もう行っちゃった。」

マーカー付きだけど彼は悪い人じゃなかったのは私には分かる。

私は冷蔵庫を開けた。

書いていた手紙の通り食事が作つてあつた。

「昨日のうちに聞き出せば良かった。」

ピッ...ピッ...

私は食べ物を電子レンジに入れて温め始めた。

「…………まあ、また会えるよね。」

私は温まった朝食を食べた。

「……………!! 美味しい!」

彼って結構料理上手だったんだ。
私がついている時より美味しい。

『早くしろ。 学校が始まるぞ。』

「はいはい。」

朝食を終えた後、私は制服に着替えた。
そして私はアカデミアへ歩いて行った。

私はいつも通りデュエルアカデミアで授業を過ごす。
別に興味ないので授業なんて聞いていない。

『……………結衣はよくこれで成績優秀だな。』

ファルルが私の成績の良さに疑問を持つ。

「うるさいよ、ファルル。」

「ハア．．．ハア．．．．．」

今、私は体育の授業に入っている。

実を言うと私は身体能力なら普通だけど体力が全く少ない。

『つたく．．．．．なんでお前は体育だと体力が低いんだよ？』

「うるさいな、ファルルは。オタクはイベントという物によってエネルギーが増幅するんだよ。」

『何だ、その理屈は？どこからそういう考えが出てくる？』

とにかく体育は苦手だ。

体育以外なら全部OKだ！！

私が一番好きな授業は勿論実技。

そして体育の後はまた別の授業。

体力補給の為に私は寝る。

『寝るなあ！！』

いちいちうるさいよ、ファルル。

「でさあ、それがね・・・」

「うっそ」

「へえ」

休み時間では友人と話している。
取りあえず色々話している。
そしてたまに寝る。

実技の授業だ。

私はデュエルディスクを取り出し、デッキをセットする。

このデッキはアカデミアでは使わないんだけどね、今回はあの日の為のウォーミングアップのために使っておく事にした。

「さてつと。 私の相手は」

「俺だ！ 神風 結衣、今度こそ長年の恨みをここではらせてくれる！！」

あ、この人は確か……………

「すみません、誰でしたか？」

誰だっけ？

正直覚えていない。

「海永だ！ 海永 うみなが 蛮だ！！ ばん てゆうか俺はお前のクラスにいるだろ！！（激怒）」

「すみません。 友人以外の名前はあまり覚えません。」

「うぬぬぬ……………とにかく今までお前に惨敗した屈辱を今ここではらせてやる！！」

「あの……………私たちって3回ぐらいしかデュエルしてなかったけど。」

「名前覚えていないのにそこは覚えているのかよ!？」

「うん、なんとなく。」

「とにかく復讐だ!! リベンジだ!!」

リベンジって大げさな……

ちなみに私に負けた生徒達の殆どが私に恨みを持っている。

私のような異常な性格を持ち、才能の無駄使いであるオタク女に負ける事が彼らにとってかなりの屈辱なのだろう。

「はいはい。」

私と海村は……

「海永だ!!」

人の心を読まないで下さい。

……とにかく私と龍崎はデュエルディスクを起動させた。

「デュエル!!」

結衣 LP4000

VS

海永 LP4000

「俺のターン！」

あ、先攻取られた。

まあ、いいか。

海山君ってどんなデツキだったっけ？

「だから海永だ！！俺はニードル・ギルマンを召喚！」

赤い槍を持った水色の半漁人が現れた。

ニードル・ギルマン

3

ATK 1300

「このモンスターがフィールドに存在する限り、魚族・海竜族・水族は攻撃力が400ポイントアップする！ このモンスター自身も海竜族！！ よって攻撃力が上昇する！」

ニードル・ギルマン

3

ATK 1300 1700

「さらにカードを2枚伏せてターン終了だ!!」

海永 LP4000

手札3枚

ニードル・ギルマン（攻）

伏せカード2枚

「私のターン！ 私はモンスターをセット！ そしてカードを2枚セットし、ターン終了。」

結衣 LP4000

手札3枚

セットモンスター1体

伏せカード2枚

「俺のターン！ 俺は深海のディーヴァを召喚！」

海越君の前に・・・

「海永だ！」

とにかく海越君の前にピンク色の人魚が現れた。

深海のディーヴァ

2

DEF 400

「おい神風！」

「ん、なに？」

「お前、わざと俺の名前を間違えてんじゃねえだろうな？」

「さあ、何のことでしょう？」

「・・・まあいい。俺は深海のディーヴァの効果発動！ デッキからレベル3以下の海竜族を特殊召喚することが出来る！ 俺はデッキからシー・アーチャーを特殊召喚する！！」

今度はボーガンを持って亀に乗っている人魚が現れた。

あ、思い出した。

確か海竜族デッキだったんだ。

シー・アーチャー

3

ATK 1200

「レベル3、シー・アーチャーにレベル2、深海のデューヴァをチ
ューニング！！ 無敵なる闇の力よ、敵を切り裂き、我に勝利を！
」

3 + 2 = 5

「シンクロ召喚！！ 粉碎せよ、A・O・J カタストル！！」

昆虫の形をした銀色の機械が現れた。

A・O・J カタストル

5

ATK 2200

「今回のデッキは一味違うぜ。 カタストル入れておいたからな。
A・O・J カタストルは……………」

「私もそのカードを持っているから知ってるよ。 カタストルは闇
属性以外との戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わずそのモンスター

「破壊することが出来る。カタストルはシンクロモンスターの中でも最も強力な効果を持つモンスターだよ。」

私は説明に割り入った。

「・・・・・・・・・・」

「空気を読んでいなくてすいません。」

「と、とにかくニードル・ギルマンでセットモンスターを攻撃！」

「私は攻撃の無力化を発動！！」

突っかって来るニードル・ギルマンに対し、渦が現れた。

「させるかよ！ 魔宮の賄賂を発動！ これで攻撃の無力化を無効だ！！」

渦がが消滅した。

私は仕方なくドローをした。

でもいいカードが引けた。

ニードル・ギルマンがセットモンスターを突き刺した。

「ドラゴンフライの効果発動。このモンスターが戦闘によって破壊された時、デッキから攻撃力1500以下の風属性モンスター1体をデッキから特殊召喚することが出来る。私はハーピー・レディ1を特殊召喚する。」

ハーピー・レディ1

4

ATK1300 1600

「リクルーターだったか。 だったらカストールでハーピー・レディ1を攻撃だ！」

カストールがハーピー・レディにビームを放ってくる。

「残念ながらダメージは発生しません。」

「分かってる。 確かにこのモンスターの効果は強力だが、代わりにダメージ計算は行われない。 カードを2枚伏せ、ターン終了だ。（伏せカードは奈落の落とし穴と拷問車輪、そしてこのカード・（。）」

386

海永 LP4000

手札2枚

A・O・J カストール（攻）

ニードル・ギルマン（攻）

伏せカード3枚

「じゃあ、私のターン！ 私はテラ・フォーミングを発動！ このカードの効果により、私はフィールド魔法、霞の谷の神風を手札に

加える。」

「（霞の谷の神風！？ そんなカード、聞いたことねえぞ。）」

とりあえずフィールド魔法を手札に加えた。

「私は霞の谷の神風を発動。そしてウィングド・ライノを召喚。」

鎧を着て、翼が生えたサイが現れた。

ウィングド・ライノ

4

ATK1800

「私は今の召喚にチェーンし、激流葬を発動！」

何処かから洪水が流れ始めた。

「何！ ちつ・・・だが、お前のモンスターも破壊されるぜ。」

「残念。ウィングド・ライノの効果発動！」

ウィングド・ライノは巨大な翼を羽ばたき、洪水を回避した。

「何！？」

ウィングド・ライノは溺れるカタストルとニードル・ギルマンを置き逃げにして私の手札に戻った。

「ウィングド・ライノは罫カードが発動した時、手札に戻る。」

「ちっ．．．だが、これで通常召喚は出来ない。」

「ところが、今のおかげで霞の谷の神風の効果が発動する。」

「？」

ヒュルルルル．．．．．

さわやかな風が私のデッキを囲んだ。

「霞の谷の神風の効果発動．．．．．」

そしてそよ風がフィールドに吹き、ファルルが現れた。

「風属性のモンスターが手札に戻る時、デッキからレベル4以下の風属性モンスターを特殊召喚する事が出来る。」

ファルルが空から舞い降り始めた。

霞の谷のファルコン

4

ATK2000

『いいのか、結衣？ このデッキはアカデミアでは使わないんじゃないのか？』

「まあ、それもそうだけだね。でも今度の為にこのデッキをウォーミングアップする必要だからね。じゃあ、がんばって行こうね、ファルル。」

『ああ、任せろ。』

「暴発動、奈落の落とし穴！ 霞の谷のファルコンを破壊し、除外する！」

「え？」

『え？』

ファルルが地面に足をつけた途端、穴が開き、落ちてしまった。

「あ。」

『うわああああー!!』

ヒュルルルルル・・・

ちよ、ちよと待ってよ？

ありえないよね。

鳥獣なのに落とし穴にはまるなんてありえないよね。

.....

.....まあ、仕方がないか。

これはデュエルモンスターズであり、ポケモンではない。

完全に自然の法則に逆らうゲームだ。

しかしファルルをあんな目に遭わせたには全力で行かせてもらうわね。

「カードを2枚伏せてターン終了。」

結衣 LP4000

手札1枚

霞の谷の神風（フィールド魔法）

伏せカード2枚

「俺のターン！俺はコダロスを召喚！」

コダロス

4

ATK1400

「させません。 リバースカードオープン、キックバック！！ コ
ダロスの召喚を無効にし、手札に戻させます。」

「ちっ、ターン終了だ。」

海永 LP 4000

手札 3枚

伏せカード 2枚

「私のターン。 私はウィングド・ライノをもう1度召喚する。」

ウィングド・ライノ

4

ATK 1800

「その瞬間、畏発動！ 忘却の海底神殿！」

神殿の瓦礫が現れ、周りが巨大プールに変わった。
霞の谷の神風とイメージが合わない。

ウィングド・ライノはまた飛び去っていった。

「発動の意味は無いが、ウィングド・ライノが手札に戻る。 これ

でまたがら空きだぜ。」

「あら、神風の効果を忘れましたか？」

「何？　しまった！」

「私は霞の谷の神風の効果でシールド・ウイングを特殊召喚する。」

シールド・ウイング

2

DEF900

「ターン終了です。」

結衣　LP4000

手札2枚

シールド・ウイング（守）

伏せカード1枚

「俺のターン！　俺はもう1度コダロスを召喚だ！」

コダロス

4

ATK1400

「コダロスの効果発動！ 海を墓地へ送る事で相手のカードを2枚する事が出来る！ 俺の場に海は無いが、忘却の海底神殿は海として扱える！ 俺は忘却の海底神殿を墓地へ送り、お前のシールド・ウイングとその伏せカードを破壊するぜ！」

「ただではさせません。 畏発動、強制脱出装置。 シールド・ウイングを手札に戻します。」

「何だと!？」

コダロスが放つ波を前にシールド・ウイングは強制的に飛ばされて逃げ切った。

コダロスに発動させても良かったんだけどね。
でもシールド・ウイングを取っておきたい。

「そして霞の谷の神風の効果を発動。 デッキからチューナーモンスター、霞の谷の戦士を特殊召喚する。」

霞の谷の戦士

4

ATK1700

「コダロスで霞の谷の神風を破壊すべきだったね。」

「霞の谷の戦士はコダロスを上回っている……ターン終了だ。」

海永 LP 4000

手札 3枚

コダロス（攻）

伏せカード 1枚

「私のターン。そろそろ攻撃に入るべきね。私は女忍者ヤエを召喚！」

女忍者ヤエ

3

ATK 1100

「（くっ……落ち着け。俺の伏せカードは拷問車輪。これなら相手がシンクロしようとしなくとも攻撃を封じれる。）」

「女忍者やエの効果発動。 手札から風属性モンスターを1枚墓地へ送る事で相手フィールド上のカードをすべて相手の手札に戻す。 私は手札のウィングド・ライノを墓地へ送り、発動。 忍法、大竜巻の術!!」

相手は仕方なく伏せカードを手札に戻す。

「そろそろバトルね。 霞の谷の戦士でコダロスを攻撃!」
今こそファルルの仮りを返させてもらう。

海永 LP 4000 3700

「そして女忍者やエで直接攻撃!」

海永 LP 3700 2600

「カードを1枚伏せ、ターン終了。」

結衣 LP4000

手札1枚

霞の谷の戦士（攻）

女忍者ヤエ（攻）

霞の谷の神風（フィールド魔法発動中）

伏せカード1枚

「俺のターン、（手札に使えるカードがねえ！ それに拷問車輪を伏せても女忍者の前では意味が無い！）俺はリロードを発動！手札を全てデッキに戻し、その枚数分ドローする！（まだ十分だ。）さらに、トレード・インを発動！手札の海竜神・ネオダイダロス捨て、カードを2枚ドローする！」

ネオダイダロス？

普通、ダイダロスだけで十分でしょ？

わざわざデッキに入れる必要なんて無いと思うけど。

「そして伝説の都アトランティスを発動！フィールド魔法の発動によって霞の谷の神風を破壊！」

ああ、神風が破壊された。

それにアトランティスがあるって事はやっぱりあのモンスターが手札に？

「そしてネオダイダロスを除外し、水の精霊 アクエリアを特殊召喚する！！」

水の精霊 アクエリア

4

ATK 1600

「さらにアクエリアをリリースし、リヴァイア・ドラゴン海竜・ダイダロスをアドバンス
召喚!!」

巨大な海竜が現れた。

RPGで言えばリヴァイアサンだ。

海竜・ダイダロス

76

ATK 2600 2800

やっぱり出てきちゃったわね。

念のためにこのカードを伏せて置いてよかった。

「ダイダロスの効果発動!! アトランティスを墓地へ送り、ダイ
ダロス以外のカードを全て破壊する! タイダル・フォース!!」

ダイダロスはアトランティスを破壊し、大嵐を巻き起こした。

海竜 - ダイダロス

67

ATK 2800 2600

「おっと、破壊される前に速攻魔法、エネコン（エネミーコントロール）発動！ ライフを1000払い、コマンド入力右左右右BB A などはず、ダイダロスを守備表示に変更する。」

海竜 - ダイダロス

7

DEF 1500

「また攻撃に失敗か。（ち、ライフがぜんぜん削れてねえ。）カードを2枚伏せ、ターン終了だ。（だったら来るなら掛かって来い。1枚は落とし穴。これならダイダロスを破壊するモンスターが現れようと返り討ちだ。もう1枚は2枚目の忘却の海底神殿。これで相手がシールド・ウィングを召喚しても破壊してやる。）」

海永 LP 2600

手札 0枚

海竜・ダイダロス（攻）
伏せカード2枚

「私のターン。（ライフのアドバンテージはこっちにあるけど、なんかやばくなって来たわね。シールド・ウィングを召喚してももし相手が海を持っていたらこっちが不利になるわ。だったらこのカードに賭けるしかないわね。）私は天よりの宝札を発動（原作効果）！お互いの手札が6枚になるまでカードをドローする！」

「この状況で手札を6枚だと……………（まずい、何か逆転のカードを引かれたら俺の負けだ！）」

この状況で手札が6枚になるとは……………
これって誰かの陰謀？

とりあえず私はこのドローに賭けるしかないわね。

さて、これで手札は6枚……………シールド・ウィング……………
・バーサーカー・ソウル……………始皇帝の陵墓……………
始祖神鳥シムルグ……………ニトロユニット……………あ、ラッキー！

「（ニヤリ）私はフィールド魔法、始皇帝の陵墓を発動！ライフを1000払い、モンスターの生け贄を1体減らす事ができる。
私はライフを1000ポイント払う。」

結衣 LP4000 3000

「（生け贄を減らして強力なモンスターを召喚か．．．．．掛かって来い。落とし穴で返り討ちだ！）」

「私はトラファスフィアを召喚する！！」

白い鎧を着た青い鳥人が現れた。

トラファスフィア

6

ATK2400

トラファスフィアは地面に舞い降りた。

「その瞬間、落とし穴を発動！これでトラファスフィアを破壊だ！！」

「フフ、残念。」

トラファスフィアは落とし穴に気付き、とっさに空中へ飛び上がった。

「何？」

「残念でした。トラファスフィアは罠カードの効果を受けません。」

」

「な、失敗したか・・・」

「そしてニトロユニットを発動！ このカードをダイダロスに装備
！」

ダイダロスに爆弾が取り付けられた。

「（ライフを払ったけど、何とかノーダメージで勝てたわ。）私の
勝利ね。 いいウォーミングアップになった。 例を言うわ。 ト
ラファスフィアでダイダロスを攻撃！！ エアロ・スラッシュ！！」

ズババツ！！

「くっ・・・だが、ダイダロスは守備表示だ。」

「ところがニトロユニットの効果発動。 このカードを装備したモ
ンスターが戦闘によって破壊されて墓地へ送られた場合、そのモン
スターの攻撃力分相手プレイヤーにダメージを与える。」

「何！？ ダイダロスの攻撃力は2600・・・俺のライフ
と同じだ・・・」

ピカア・・・

ダイダロスに取り付けられていた爆弾が光った。

ドッカーン！！

「うわああ!!」

海永 LP 26000

「いいデュエルだったわ。」

私は海島君に手を出した。

「海永だ。 しかし完敗だ。 風姫にはやっぱり適わなかったか。」

「そんな事はないよ。 あなたも十分良くやったよ。 前より十分強くなっているし、私も結構やばい状況だったよ。 天よりの宝札を引かなかつたら多分、負けてたよ。」

アカデミアの後、私は家へ帰り始めた。

『結衣、これでいいウォーミングアップになっただろう。』

「まあ、なっただけ。あれで大丈夫かな？」

『今後の相手は一筋縄では行かないぞ。せいぜい頑張るんだな。』

「分かってる。私は絶対勝つ。いや、勝ってみせる。せめてキングとデュエル出来る所までたどり着きたい。」

お兄さん、私は楽しみにしています。

デュエル・オブ・フォーチュンカップを！！

- Side End -

第15話 風姫のお遊び相手はリヴァイアサン（後書き）

それでは次回『フォーチュンカップ開催!!』をお楽しみに！

第16話 フォーチュンカップ開幕！！（前書き）

出来ればこれ読んだらメッセージに書いてください。
感想ではなくメッセージに書いてください。

マテリアルドラゴンはブラック・ローズやデミスの全体除去効果を
無効に出来ますか？
サンダー・ブレイクでモンスターを対象にした場合、無効にできま
すか？

第16話 フォーチュンカップ開幕！！

- 鉄也 Side -

- デュエルスタジアム -

僕は3日間、黒崎さんの家に居候していた。

3日間、家事を手伝ってあげたりカードを見せてもらったりしていた。

しかし黒崎さん自身のデッキは見れなかった。

彼はフォーチュンカップでお楽しみにと言っていた。

そして今日、デュエル・オブ・フォーチュンカップが始まった。

ゴドウィンの陰謀で多少な不安はあるが、後戻りは出来ない。

こうなったら天下一武闘会に出場する気分で行こう！！

オラア、ワクワクしてきたぞ！（悟空口調）

そして今、僕は黒崎さんとスタジアムの前にいる。

「あ、村上くん。 今、ボクはちょっとやらなければならない事があるからお先に。」

「え、どうしたんですか？」

「大丈夫、試合までに戻るから。 では、失礼。」

.....行ってしまった。

「はあ．．．．．」

『ま、頑張っ て行こうぜ!』

「ああ。」

僕はスタジアムに入っ ていっ た。

・スタジアム内・

「おい、鉄也じゃねえか!？」

ん？ この声は．．．．．

「おお、鉄也君!」

「氷室にじいさん!」

収容所にいた時の僕の同僚、氷室に矢薙のじいさんだ。

「元気ですか？」

「ああ、お前は？」

「ばっ ちりだ。まさかこんな場所で再会するとはな。」

「奇遇じゃの」

本当に奇遇です。

しかし彼らがいるとすれば近くに・・・

「遊星！！」

遊星がいた。

こっちこっち。

「！ 鉄也か！」

遊星もこっちを振り向いた。

「久しぶりだな、遊星。」

「ああ。 お前も無事開放されたんだな。」

「まあね。 でも何で君はここにいるんだ？」

もちろん、遊星は招待されている。

彼の友達が人質に取られているんだよな。
でも知っていたら状況がおかしくなる。

「俺はゴドウィンによって招待された。」

そつえば遊星はまだ痣の事を完全に知らなかったな。

ここは知らないふりをしておかないとな。

「奇遇だな。 僕も招待されたんだ。」

「！？ お前もか？」

「ああ。」

スターダストを見せてくれと言いたかったが、何故知っていると聞かれそうだから止めておいた。

まあ、別に見なくてもいい。

現世で持っていたからな。

「ねえねえ、遊星の知り合い？」

緑色の髪をした女の子・・・・・・・・・・じゃなくて男の子が声をかけ
てきた。

龍亞だ。

双子の妹、龍可るかに変装している龍亞だ。

てゆうか龍亞との初対面が変装した姿なんだ。

「龍亞、こいつは俺の友人、村上 鉄也だ。」

遊星が僕を龍亞へ紹介している。

短い間しか会っていない僕を友人と呼んでくれるなんて遊星、お前はなんていい奴だ。

「へえ・・・・・・・・俺、龍亞って言っんだ。」

「よろしく、龍亞君。」

そして龍亞に瓜二つの女の子、龍可とサスペンダーを着て眼鏡を
掛けた少年・・・・・・・・名前忘れた。

とにかくその二人が龍亞の側に来た。

「こっちが俺の双子の妹、龍可だ。」

「龍可です。 よろしく、鉄也さん。」

さすが龍可。

龍亞と違って礼儀が正しい。

「ねえ、君……男の子だね。」

龍亞に聞いた。

もちろん、龍亞が女装しているのは知っている。
しかし普通ならこれでスルーするはずがない。

「ああ、これは俺の双子の妹、龍可が招待されてたんだけどさ、龍可が出たくないから俺が代わりに出場してるんだ。」

「へー龍可ちゃんって強いんだ。」

「うっ……………」

龍亞が今の言葉に反応した。

悪いが龍亞君、あくまでも招待されているのは龍可ちゃんの方だよ。

「でもほら〜似てるでしょ〜」

確かに似てる。

そりゃあ、双子だからな。

「ま、僕も出場するんだ。 相手出来ると良いね。」

「え、鉄也もデュエルするの？」

「ああ、こいつのプレイングセンスは中々の物だ。」

中々の物……サブデッキしか見てないのに褒めすぎだよ。

「それじゃあ、行きましょうか。 遊星」

龍亞、キャラ付けはやめておけ。

龍可が可哀想だろ。

嫌な表情かおしてるよ。

「じゃあ、行こうか。 君とデュエルできると良いな、遊星。」

「ああ。 試合で会おう。」

僕は遊星と龍亞と一緒に待合室へ行った。

「龍亞……化粧はやめた方がいい。」

遊星の言つとおりだ。

- 待合室 -

待合室には沢山のデュエリストがいた。

エントリーは16人。

僕というイレギュラーの存在のせいで人数が変わったんだ。

騎士、ボマー、フランク、アキ、来宮、炎城、ムクロ、そして勝手に増えたモブキャラ達……

あれ、炎城、ムクロ？

確か出場したんじゃないかって乱入したんじゃないかったか？

まあ、僕の存在がそれを変えたんだろう。

しかしアキがいる。

そういえば僕はアキに敵として認識されているよな。

気をつけないとな。

僕は彼女のデュエルの中から少し反省していた。

自分の目的の為に彼女を利用したのはいけないかったと思う。

そこはどうしようかな。

「あ！」

マジかよ……

僕はこの人を予想していなかった。

「ゆ、結衣さん？」

「え？」

結衣さんだ。

結衣さんもこの大会に出場していたのか！？

「鉄也？」

「何で君がここに？」

「そりゃあ、私はフォーチュンカップに招待されたんだけど。もしかしてあなたも？」

「ああ。」

な、何で彼女が招待されたんだ？

ゴドウィンが招待する者は全て痣を持つ者とそれを覚醒させる為に採用した刺客のみだ。

もしかして彼女も痣を持つ者なのか？

それともゴドウィンの差し金か？

それとも余っただけか？

せめて差し金は違つて欲しい。

取りあえず僕は無関係を装うことにした。

「へえ．．．．．すごいじゃない。」

「お互いがんばりましょう。」

「ええ、あなたとの再戦を望むわ。」

「ああ。ちょっと聞きたいんだけど．．．．．あの人がどうかしましたか？」

「え？」

僕は話しかける前、彼女の視線がアキへ向いていたのが分かった。彼女と一体何か関係があるのだろうか。

「いや、別にそんなことは無いけど。」

「そうか。」

・・・・・・・・・・・・・・・・黒崎さん、遅いな。

『E v e r y b o d y l i s t e n ! デュエル・オブ・フォーチ
ュンカップ！ついに開幕だ！！』

MCと呼ばれる長いリーゼントの男性が現れ司会を始めた。
観客はやっと始まったか・・・ってな感じで声を盛り上げていた。
すると会場の真ん中に黒き悪魔のような竜、レッド・デーモンズ・

ドラゴンが現れた。

そしてライティング・デュエルの入場コーナーからDホイールに乗ったデュエルキング、ジャック・アトラスが現れた。

すると観客席から黄色い声で「アトラス様〜!!!」と言っていた。

そして、ジャックは舞台の真ん中でDホイールから降りるところ叫んだ

「キングは1人！ この俺だ！ 俺とデュエルするのは誰だ!？」

さすがキング。

キングなだけに度胸がでかい。

でもこの人、キングの称号を抜いたらただのニートだよな。

ダークシングナーの件が終わったら仕事探すの手伝ってあげよう。

もちろん、自分の仕事が見つかってジャックとの友情関係が出来たらの話だが。

とりあえずジャックが言った後にデュエルフィールドが開いて下から自分を含めて15人のデュエリストが現れた。

なぜ15人？

黒崎さんがまだ来ていないからだ。

うわ〜レッド・デーモンズだ。

社長さん、頑張りすぎだろ!!!

近くで見ると迫力があるぜ。

1人1人モニターに映っていると、1人の男が映ると同時に観客から声が消えた。

左頬に大きなマークが付いている遊星だった。

「おい、マーク付きがいるぞ?」

「いやね。招待状を盗んだんじゃないの?」

「あんなやつ選ぶくらいなら俺らを選べよな」

などなどブーイングの嵐だった

僕もマーカー付きだが何故か遊星だけ注目されている。

髪型か？

多分、蟹だから目立ちやすいんだろう。

さすが主人公。

人気者だ。

MCはどうすれば良いかと慌てていたが長髪の男がMCからマイクを奪い取り語りだした。

ボマーだ。

ボマーさん、熱いスピーチを頼むぜ！

「お集まりの諸君！私の名前はボマー、ここに立つデュエリストとして諸君が何を見ているのか問いただしたい！」

観客は皆静かになりボマーの話を聞いていた。

「彼は我々と同じ条件で選ばれた紛れも無いデュエリストだ！マーカーが有ろうが無かろうがカードを持てば皆同じだ。この場に立っていることに何ら恥じる事はない。寧ろくだらぬ目で彼を見ている諸君の言葉は暴力に他ならない！」

観客達は拍手をした。

龍可……..じゃなかった。

龍亞は目を輝かせている。

いいぞ、ボマー！！

あんたはいい人だ！

あんたの悲劇には涙を流したぜ。

その後、ゴドウィンの演説やMCからの大会の説明があった後、モニターから試合の対戦表が写された。

あれ？ 原作と違ってトーナメント表になっていない。

デュエルの相手はランダムに指摘されるという事か。

僕は第5試合で、相手は死羅という男だった。

死羅って誰だっけ？

.....

ああ、そうだ。

炎城 ムクロに出番を譲った親切な人だ（笑）。

たしか彼とデュエルしたものは恐怖で二度とデュエルが出来なくなると言ってたな。

あれって勝ち負け関係ないという意味でか？

だったらこの改造したデッキで片付けてやる！！

とりあえず試合が原作通りに進んだ。

僕は待っている間に別の部屋から結衣さんとデュエルを見ていた。

第1試合 龍可（龍亞） VS ボマー

チュドドドドーン！

原作通りボマーが勝った。

ボマーさん、あんた子供相手に本気出しすぎです。

第2試合 十六夜アキ VS ジル・ド・ランスボウ

「や、やめろ．．．やめてくれえ！！」

「ブラック・ローズ・フレア！！」

ブラック・ローズのアニメ効果によって誇り高き騎士は散った。
お気の毒に．．．．．。
しかし可哀想なのはアキの方だろう。

第3試合 不動 遊星 VS 炎城 ムクロ

最初から乱入ではなく炎城 ムクロが大会に出場して普通にライ
ディング・デュエルが始まった。

「ダイナマイト・ナツクル！！」

しかし原作通り遊星が二トロ・ウォリアーで勝利。
あのモンスターの効果ちよつとやばい。

『や、やめろおお！！』

この試合を見ていたジャンクが嘆いた。
理由はあれだ。

ギブ&テイクによって蘇生されたジャンク・シンクロンが仲間
である二トロ・ウォリアーによって破壊されたからだ。
自身の分身であるジャンクにとってそれを見るのはきつい。

第4試合 来宮 虎堂 VS プロフェッサー・フランク

原作通り来宮が勝った。

てゆうかどうでも良い試合なので全然見てなかった。
そろそろ僕の番だな。

僕は準備に入った。

「気をつけたほうが良いわよ。 死羅というデュエリストを相手にした者は恐怖でデュエルが出来なくなるという噂があるわ。」

「助言ありがとう、結衣さん。」

「じゃあ、頑張つてね。」

「ああ。」

『それでは第5試合、このフォーチュンカップに選ばれし者は……
……戦う少年、村上 鉄也!!』

僕の出番だ。

デュエル形式はスタンディング。

戦う少年………初登場ではまあまあか。

僕はフィールドに出てきた。

「マーカー付きは引っ込んでろ!!」

「大会から出て行け!!」

ブーイングが酷い。

観客さんたちよ、ボマーの演説をもう忘れたのか？
しかしここは耐えるしかない。

『そしてこの少年の相手は……蘇る死神、死羅!!』

死神のような黒マントを着た男性が現れた。

この人が僕の相手だ。

不意打ちをくらったキャラとはいえ、蘇る死神と呼ばれるほどの
実力者だ。

油断は禁物だ。

『一体何のデツキでしょうね……ライトロード？ 剣闘獣
？ それともビークロイド!?』

いや、ビークロイドはないだろう。

名前からして明らかにアンデッド族デツキだろ。

「デューエル!!」

鉄也 LP4000

V S

死羅 LP 4000

「僕が先行で良いですか？」

「構わん。」

「じゃあ、行きます。僕のターン！」

よし、これならいける！！

あのモンスターの為にデッキをいじっておいた甲斐があった。

「僕は手札のボルト・ヘッジホッグを墓地へ送り、ワン・フォー・ワンを発動！ デッキからチューニング・サポーターを特殊召喚する！！！」

チューニング・サポーター

1

ATK 100

「さらに、ジャンク・シンクロンを召喚！」

ジャンク・シンクロン

3

ATK1200

「ジャンク・シンクロンの効果発動！ 墓地からボルト・ヘッジホッグを特殊召喚する！！」

『キュッ！！』

ボルト・ヘッジホッグ

2

DEF800

「そして機械複製術を発動！ このカードの効果により、チューニング・サポーターを2体デッキから特殊召喚する！！」

チューニング・サポーター×2

1

ATK100

「チューニング・サポーターはシンクロ素材にされる時、レベルを2にすることが出来る。僕はチューニング・サポーター1体のレベルを2にする。」

チューニング・サポーター

1 2

「レベル2、チューニング・サポーターとレベル1、チューニング・サポーター2体にレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング！我が味方を火力にし、敵を粉碎する力となれ。」

2 + 1 + 1 + 3 || 7

「シンクロ召喚、出撃せよ！！　ダーク・ダイブ・ボンバー！！」

僕のフィールドにオレンジ色の戦闘機型のモンスターが現れた。

ダーク・ダイブ・ボンバー

7

ATK 2800

そう、これは唯一禁止カードとされているシンクロモンスター．．．

．．．．．ダーク・ダイブ・ボンバーなのだ！！
トリップした時に何故か持っていたカードだが、どうせ禁止カードになるから使用しないと考えていた。

しかし勿体無いので禁止カードになる前に１度ぐらい使っても良いだろうと思って入れておいたのだ。

「そしてチューニング・サポーターがシンクロ素材にされた場合、デッキからカードを１枚ドローする。僕は３体使用したので３枚ドローする。」

よし、完璧だ。

「僕は墓地のチューニング・サポーター２体を除外し、ホーリーシャイン・ソウル神聖なる魂を特殊召喚する。」

神聖なる魂

6

ATK2000

「さらに、墓地のジャンク・シンクロンとチューニング・サポーターを除外し、カオス・ソーサラーを特殊召喚する！！」

カオス・ソーサラー

6

ATK 2300

これで準備は整った。

後は攻めるだけ．．．．．

ダーク・ダイブ・ボンバー

7

ATK 2800

神聖なる魂

6

ATK 2000

カオス・ソーサラー

6

ATK 2300

ボルト・ヘッジホッグ

2

DEF800

『なんと、これはすごい！！ 1ターンで攻撃力2000以上のモンスターが3体もフィールドに揃った！！』

驚くのはまだ早いぜ、MC。

僕はこのターンでけりをつける。

「確かにいいモンスター軍だ。 だが、最初のターンは攻撃できない。」

「たしかにそうだ。 だが、このターンで決める。」

読者達ならもうお解かりだろう。

「何？」

「ダーク・ダイブ・ボンバーの効果発動！ 自分のモンスター1体をリリースする事で相手プレイヤーにリリースしたモンスターのレベル分、200ポイントのダメージを与える。 ボルト・ヘッジホッグをリリースし、ダーク・ダイブ・ボンバーの効果発動！ 喰らえ、汚い花火（禁止カードなだけに）！！」

バチバチバチバチバチ・・・・・・・・・・・・・・・・

ボルト・ヘッジホッグが紫色のエネルギー弾に変わり、ダーク・ダイブ・ボンバーがそれを投げつけた。

こういう効果の発動の仕方なのか。

ドッカーン!!

「くっ……………」

死羅 LP 4000 3600

「最初のターンにダメージを受けるとは……………だが、私のターンで返してやろう。」

「何勘違いしてるんだ。 まだ俺のメインフェイズは終了してないぜ。」

一度言ってみたかったんだよな、これ。
さあいくぜ、バーサーカー・ソウル!!

「ダーク・ダイブ・ボンバーの効果は1ターンでの回数制限がない。」

「何!?!」

「つまり、また発動出来る。 僕はカオス・ソーサラーをリリースし、効果発動!!」

ドッガン!!

死羅 LP 3600 2400

「くっ……………」

「そして神聖なる魂をリリース！！ 追加攻撃！！」

ドッカーン！！

死羅 LP 2400 1200

「うわあああ！！」

フッ……………汚ねえ花火だ。

「くっ……………先行ターンでライフがこんなに削られるとは……………しかしこれでリリースするモンスターがいなくなった。」

「違います。この効果はダーク・ダイブ・ボンバー自身をリリースして発動することが可能です。」

「何！？ それじゃあ……………」

「ダーク・ダイブ・ボンバーをリリースし、効果発動！」

しかしダーク・ダイブ・ボンバーはエネルギー弾にならず、死羅に近づいた。

何をするんだ？

ガシッ！！

ダーク・ダイブ・ボンバーは死羅に抱きついた。

こういう形で爆発するのか？

てゆうかこれ、栽培マンだ！！

自爆の形が栽培マンだ！

まあ、これでいいだろう。

「ダーク・ダイブ・ボンバーで相手プレイヤーを爆殺！（AIB
O風）」

ドッカン！！

「ぐああああ！！！」

そう、これでいいんだ。（ベジータ口調）

死羅 ヤムチャ
LP12000

ライフ4000の世界でよかった。

僕の手札だとこれ以上ダメージを与えられないからな。

『なんと先行ターンでライフを一気に0だぁ!! 2回戦へ進出出来るのは、村上 鉄也!!』

しかし観客の言葉は歓声ではなく、罵声であった。

「卑怯だぞ!」

「マーカー付きはやっぱり引っ込んでろ!!」

「この卑怯者!!」

.....やはり今のはやりすぎたか。

「汚えぞ、このマーカー野郎!」

汚い?

だから汚い花火なんだよ(効果的に)

しかしやはりやり過ぎたな。

恐怖を味わう前に決着を付けさせれば問題ないと思ったんだが、それをしたら結局こうなっちゃったし。

『あの.....どうしましうか、長官?』

MCがゴドウィンに聞く。

『皆さん、お静かに。』

ゴドウィンの言葉に観客達は静かになった。

『この大会に招かれたデュエリスト達は全て私が見込んだ者達です。開始前にボマーが言った通り、たとえメーカー付きであろうとなかろうとこの大会に出場される者は全てその権利を持っております。彼も今の戦略があつてこそ、出場の権利があるということです。』

ゴドウィン、意外と良い事言うな。

『しかし．．．．．今の戦略はやはりやりすぎです。　　ということで、せつかくの勝利ですがデュエルをやり直してもらいます。』

やり直し？

仕方がないな。

『それからもちろん、ダーク・ダイブ・ボンバーは今から禁止カードとなります。　　よって今後の使用は禁止となります。』

あ。

まあ、別にこっちには問題ないな。

「何故だあああああああああああああああああああああ
あああああ！！」

ギャラリー中、リアクション1人。

もちろんボマーさんである。

すいません、ボマーさん。

DDBが予定よりも早く禁止カードになってしまいました。別に今後の出番は無いので原作では問題ありません。

DDDB無しで遊星相手に頑張ってください。

MCはアナウンスに戻った。

『それでは、デュエルを再開します!!』

「おのれ．．．．さっきの借りを返してやる．．．」

あ、死羅が怒ってる。

まあ、当然だろう。

僕はデッキからダーク・ダイブ・ボンバーと機械複製術を抜いてデッキをディスクに戻した。

ちなみに機械複製術はDDB用に3枚入っていた。

「いいでしょう。これからが本番です。」

「デュエル!!」

鉄也 LP 4000

VS

死羅 LP 4000

- Side End -

第16話 フォーチュンカップ開幕！！（後書き）

では次回、「やり直しデュエル！！ 死神なんてブツ飛ばせ！！」
をお楽しみに。

第17話 やり直しデュエル！ 死神なんてぶっ飛ばせ！！（前書き）

- 前回のあらすじ -

謎の男「おのれ鉄也め！ ダーク・ダイブ・ボンバーが禁止カードになってしまった……… これで5D'sの世界も滅んでしまった………」

鉄也「いや、あのカード1度しか出番なかったから。別に滅んだりしないから。」

謎の男「うわっ！ いつの間に！？ どうやってここに来た！？」

鉄也「さあな。三沢くんの特技を真似てみたら気付かれずにお前に近寄れた。」

謎の男「おのれ！ だが次の世界がお前の死に場所となる！」

鉄也「いや、これは5D'sのトリップ小説だから。次の世界なんてないから。」

謎の男「な、何！？」

鉄也「てゆうかお前、誰だよ？ ゾル大佐とかになられてショッカイを率いられては困るな。ここでお前を片付けるしかない。」

FINAL ATTACK RIDE

「お、おのれえ．．．．．」

鉄也「スクラップ．．．．．フイストオ！！」

謎の男「ぎゃあああああ！！」

鉄也の拳により、謎の男は消滅した。

鉄也「これで世界は救われた．．．．．」
．．．．．てゆうか前回のあらすじになってねえぞ。
」

第17話 やり直しデュエル！ 死神なんてぶっ飛ばせ！！

- Side / 鉄也 -

ダーク・ダイブ・ボンバーが現世で禁じられている先行キルの使用によってアニメの世界でも禁止カードになった。

そしてデュエルをやり直す事になった。

ダーク・ダイブ・ボンバーはもう使えない。

まあ、別に使わなくても勝つ自身はある。

「デュエル！！」

「僕のタ……………」

「私のターン！！！」

うわ、この人強引に先行取ったぞ。

さっきのダーク・ダイブ・ボンバーが余程気に食わなかったのか。

「私はミイラの呼び声を発動！」

うわ……………フィールドの周りに棺桶がぞろぞろ……………
出たな……………アンデット版のヴァルハラ……………

「このカードの効果により、闇より出でし絶望を特殊召喚する！」

棺桶の中から巨大な邪神のような影が現れた。

闇より出でし絶望

8

ATK2800

「さらに、モンスターをセット！そして、フィールド魔法、アンデットワールドを発動！ターン終了。」

死羅／LP4000

手札2枚

モンスター／闇より出でし絶望（攻）、裏側守備表示モンスター

×1

魔法・罨／ミイラの呼び声、アンデットワールド

予想通りアンデット族デッキだったな。
じゃあ、まずはこれだ。

「僕のターン。僕はモンスターをセットし、カードを2枚セット。ターン終了です。」

鉄也 / LP4000

手札3枚

モンスター / 裏側守備表示モンスター × 1

魔法・罠 / リバース × 2

「私のターン。私は裏側守備表示のモンスターを反転召喚。」

包帯を巻いた不気味なラクダのゾンビが現れた。

デス・ラクーダ

3

ATK500

「うわー社長さん、あんたの作ったデュエルディスク、未来の世界でもあってか物凄く進化してるよ。」

デス・ラクーダがカードのイラストより不気味に見える。

「デス・ラクーダが反転召喚に成功した時、カードを1枚ドロ―する。そして私はスター・ブラストを発動。ライフを500払い、手札のノーブル・ド・ノワールのレベルを1下げる。そしてノーブル・ド・ノワールを召喚。」

死羅 LP 4000 3500

ノーブル・ド・ノワール

54

ATK 2000

「それではバトルフェイズに入らせてもらいます。 ノーブル・ド・ノワールでモンスターを攻撃。」

「セットモンスターはライコウだ。 リバース効果を発動させてもらう。 僕は闇より出でし絶望を破壊する。」

ライトロード・ハンター ライコウは闇より出でし絶望に向かって飛び掛かり、喰らいついた。

『グオアア!』

闇より出でし絶望は悲鳴を上げて破壊された。
しかしライコウって強力だよな。

正直、制限か準制限になるべきだと思っけど。

「さらにライコウの効果により、デッキから3枚カードを墓地へ送る。」

カリキュレーター・・・ネクロ・ガードナー・・・お、ボルト・ヘッジホッグだ!

「くっ．．．．．デス・ラクーダで直接攻撃だ。」

「あいた。」

デス・ラクーダは僕に近づき、後ろ足で蹴りを放った。
てゆうかそういう攻撃の仕方なんだ。

鉄也 LP 4000 3500

「私はメインフェイズ2に入り、デス・ラクーダを裏側守備表示に変更し、カードを1枚伏せてターン終了だ。」

死羅 / LP 3500

手札1枚

モンスター / ノーブル・ド・ノワール（攻）、裏側守備表示モンスター×1

魔法・罫 / ミイラの呼び声、アンデットワールド

「僕のターン。僕は手札のチューニング・サポーターを墓地へ送り、ワン・フォー・ワンを発動！デッキからチューニング・サポーターを特殊召喚する！」

チューニング・サポーター

1

ATK100

「そして僕はジャンク・シンクロンを召喚！」

ジャンク・シンクロン

3

ATK1300

「さらに、ジャンク・シンクロンの効果により、墓地からチューニング・サポーターを特殊召喚する！」

チューニング・サポーター

1

DEF300

「レベル1、チューニング・サポーターとレベル2、チューニン

グ・サポーターにレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング
！ 権力よ。 罪人を叩き潰し、道を正せ！」

1 + 2 + 3 〃 6

「シンクロ召喚！ であえ、ゴヨウ・ガーディアン！」

ゴヨウ・ガーディアン

6

ATK 2800

「チューニング・サポーターの複数使用により、デッキからカードを2枚ドローする。」

ようし、これで手札のロスを補った。

「バトル！ ゴヨウ・ガーディアンでノーブル・ド・ノワールを
攻撃！ ゴヨウ・ラリアット！！！」

どうする……………ノーブルでデス・ラクーダを盾にするか……
……伏せカードを発動するか……………

バキィ！

死羅 LP3500 2700

デス・ラクーダを盾にしなかったか。
どうやらドロローが必要か。

「ゴヨウ・ガーディアンの効果により、ノーブル・ド・ノワール
を守備表示で特殊召喚する。」

ノーブル・ド・ノワール

5

DEF1500

「ターンエンドだ。」

鉄也 LP3500

手札3枚

モンスター／ゴヨウ・ガーディアン（攻）、ノーブル・ド・ノワ
ール（守）

魔法・罨／リバーズ×2

「私のターン。私はデス・ラクーダをリバーズし、カードを1枚ドロ―する。さらに、私はデス・ラクーダをリリースし、レッドアイズ・アンデットドラゴン真紅眼の不死竜をアドバンス召喚！」

紅い目をしたゾンビのような黒い竜が現れた。
出たー！！

あのレッドアイズのアンデット族リメイク版！
どうやら相手のデッキは現世でも売ってるストラクチャーデッキ・アンデットワールド・をベースとしたデッキか。

真紅眼の不死竜

7

ATK2400

『グオアアアー！！』

しかしなんか奇妙だな。

リアルに見えるのは分かっているが、本当に襲ってきそうに見える。

「さらに、私は一族の結束を発動。私の墓地にはアンデット族しか存在しない。よって攻撃力が800ポイントアップする。」

真紅眼の不死竜

7

ATK 2400 3200

「バトルに入ります。 真紅眼の不死竜でゴヨウ・ガーディアン
を攻撃！ ブラック・デス・フレア 死黒炎！！」

真紅眼の不死竜が僕へ向かって黒い炎を吐く。

アンデットワールドの効果によってゴヨウ・ガーディアンはアン
デット族だ。

真紅眼の不死竜の効果によってゴヨウ・ガーディアンのコントロ
ールを奪われたらまずい。

まずは念の為……………

「ノーブル・ド・ノワールの効果でノーブル・ド・ノワールに攻
撃対象を変更させる！！」

クイツ……………

ノワールは指を動かし、炎を自身に向けた。

「そして畏発動！ くず鉄のかかし！」

ノワールの前に緑の炎のかかしが現れた。

「無駄だ。 トラップ・ジャマー発動！ くず鉄のかかしの効果を無効にし、破壊する。」

かかしが消えた。

ボワアッ！！

「くっ……………」

真紅眼の不死竜の攻撃の前にノワールは燃えてしまった。

まあ、幸いノワールが守備表示だったし、念の為に攻撃対象を変更させてよかったな。

「私は真紅眼の不死竜の効果を発動させる。 ノーブル・ド・ノワールを特殊召喚させる。」

『グオア！！』

バキバキバキバキ……………

真紅眼の不死竜が雄叫びを放ち、地面が裂けた。そしてその裂け目からノワールが現れた。

ノーブル・ド・ノワール

5

ATK2000 2800

考えてみればレッドアイズよ、一体お前に何があったんだ!?

「私はカードを1枚伏せ、ターン終了。」

死羅 / LP 4000

手札0枚

モンスター / 真紅眼の不死竜(攻)、ノーブル・ド・ノワール(攻)

魔法・罫 / ミイラの呼び声、アンデットワールド、一族の結束(アンデット族指定)、リバーズ×1

『蘇る死神』と呼ばれているけど結構普通のデュエルじゃないか。まあ、今のうちだけかもしれない。

油断は禁物だ。

攻めるなら今だ。

「あいつ、相手のモンスターを奪って盾にしたぞ。」

「汚えぞ、このマーカー野郎!」

.....マーカーを持つのは辛いな。

遊星に苦勞クロウ.....お前らの気持ちがあつてきたよ。

あ.....すまん、クロウ。

読み仮名間違えた。

とにかくあれは正しい戦略だったぞ！

もしゴヨウ・ガーディアンが今の攻撃によって破壊されたら相手に譲ってしまつて大変な事になるんだぞ！！

とりあえず僕のターンだ。

伏せカードはエンジェル・リフトのみ。

ここで良いカードを引かなければ負けてしまう。

「僕のターン、ドロー！（このカードだ！）」

どうやら僕のディスティニードローは遊星並みになったみたいだな。

「どうしました？ 私のデュエルに怖気付きましたか？」

「怖気付いた？ 違うな。僕はこの状況を裏返すカードを引いたんだよ。僕はシンクロ・キャンセルを発動！ ゴヨウ・ガーディアンをエクストラデッキに戻し、シンクロ素材としたモンスターを特殊召喚する！」

ジャンク・シンクロン

3

ATK1300

チューニング・サポーター×2

1

ATK100

「さらに、このモンスターは墓地に存在し、フィールドにチューナーが存在しているときに特殊召喚することが出来る。現れよ、ボルト・ヘッジホッグ！」

『キュ〜』

ボルト・ヘッジホッグ

2

DEF 800

「くつ．．．．．ライコウの時に送られましたか。」

「レベル2、ボルト・ヘッジホッグとレベル1、チューニング・サポーター、そしてレベル2、チューニング・サポーターにレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング！ 集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます。光さす道となれ！」

2 + 1 + 2 + 3 || 8

「シンクロ召喚！粉碎せよ、ジャンク・デストロイヤー！」

『トアアア！！』

ジャンク・デストロイヤー

8

ATK2600

．．．．．すまん、ウオリアー。

デストロイヤーがお前より出番が多いような気がする。
もしそうだったらすまん。

『鉄也よ．．．．．相手の方から邪悪な気配を感じる．．．．．』

デストロイヤーが僕に話しかける。

「邪悪な気配だと？」

『そうじゃ。あのモンスターからじゃ。』

あのモンスター．．．．．デストロイヤーは真紅眼の不死竜の
事を言っている。

邪悪の気か．．．．．なるほど、だから妙な感じがしたんだな。
レッドアイズよ。本当にお前に何があったんだ！？

「そしてジャンク・デストロイヤーの効果発動！ このモンスターがシンクロ召喚に成功した時、チューナー以外のシンクロ素材にしたモンスターの数までフィールド上のカードを破壊することが出来る。」

「何！？」

「ジャンク・デストロイヤーのシンクロ素材は4体！ よって3枚まで破壊できる。 僕はお前の真紅眼の不死竜、ノーブル・ド・ノワール、そしてその伏せカードを破壊だ！ 粉碎せよ、タイダル・エナジー！！」

ジャンク・デストロイヤーは拳からエネルギー弾を放った。

ドガガガン！

「くっ……………炸裂装甲までが……………」

お、良いカードを破壊した。

「ようし、さらにチューニング・サポーターの効果により、カードを2枚ドローする！」

ドローしたカードに攻撃力の上昇や追加召喚ができるカードは無かった。

まあいいだろう。

「じゃあいくぜ！ ジャンク・デストロイヤーで直接攻撃！ デストロイ・ナックル！！」

『フン!』

ドガガガガン!!

「うああ!!」

死羅 LP 2700 100

ようし、相手のライフも風前の灯!

このままいくぜ!

『鉄也よ……有利なのはわかっているが、油断は禁物じや。』

「分かっている。カードを3枚伏せ、ターン終了だ。」

鉄也 / LP 3500

手札 2枚

モンスター / ジャンク・デストロイヤー (攻)

魔法・罫 / リバース × 4

「くつ．．．．．私のターン．．．．．私は命削りの宝札（アニメオリジナルカード）を発動する。私はカードを5枚ドロし、5ターン後に手札を全て捨てる。」

また命削り出た！！

一体どこが命削りなんだよ！？

「私はミイラの呼び声の効果発動。手札から闇よりで出でし絶望を特殊召喚する！」

闇より出でし絶望

8

ATK2800 3600

「さらに、私は魔法カード、生者の書・禁断の呪術・を発動。私は相手の墓地に存在するモンスターを1体除外し、自分のアンデッド族を蘇生させる。」

ブワア．．．．．

僕の墓地からソリッド・ビジョンのモンスターカードが現れる。

墓地のモンスター
ジャンク・シンクロン

チューニング・サポーター×2
ライトロード・ハンター ライコウ
ネクロ・ガードナー
ザ・カリキュレーター

「私は相手のネクロ・ガードナーを除外し、真紅眼の不死竜を蘇生させる。」

真紅眼の不死竜

7

ATK 2400 3200

やはりネクロ・ガードナーを選んだか。
折角取っておいたのに。

.....

ああ、フリーチェインするの忘れた！

「さらに、撲滅の使徒を発動。 右から2番目のカードを選択し、除外する。」

除外されたカードは.....ミラフォだ。

「私は魂を削る死霊を召喚！」

魂を削る死霊

3

ATK 300 1100

「それではバトルに入りましょう。 真紅眼の不死竜でジャンク・デストロイヤーを攻撃。 死黒炎！」

『ぐあああ！』

「ジャンク・デストロイヤー！！」

ジャンク・デストロイヤーは真紅眼の不死竜の攻撃に耐えられず、破壊された。

鉄也 LP 3500 2900

「ジャンク・デストロイヤーはアンデッドワールドの効果により、アンデッド族として扱われている。 真紅眼の不死竜の効果により、ジャンク・デストロイヤーを特殊召喚させる！」

ジャンク・デストロイヤー

8

ATK 2600 3400

「くっ……………」

「どうです？ あなたのモンスターが相手になる気分は？」

『……………すまん、鉄也。』

気にするな。

僕が不注意だっただけだ。

相手が生者の書を発動した時、ネクロ・ガードナーをフリーチェ
ーンで除外するのを忘れた。

そうすれば真紅眼の不死竜の攻撃を無効にして奪われることはな
かった。

僕のプレイングミスが原因だ。

お前は悪くない。

「私はジャンク・デストロイヤーで直接攻撃。 デストロイ・ナ
ツクル！！」

「そうはいくか！ 速攻魔法、スケープ・ゴート！！ このカー
ドの効果により、羊トークンを4体特殊召喚する！」

デストロイヤーの拳の前に4匹の羊が現れた。

羊トークン×4

1

DEF0

「では、ジャンク・デストロイヤーと魂を削る死霊、そして闇より出でし絶望で羊トークンを破壊！」

デストロイヤーの拳と死霊の鎌が羊達を破壊し、そして闇より出でし絶望が羊トークンを飲み込んだ。イメージが残酷だ。

「私はカードを2枚伏せてターン終了だ。」

死羅／LP100

手札0枚

モンスター／真紅眼の不死竜（攻）、ジャンク・デストロイヤー（攻）、闇より出でし絶望（攻）、魂を削る死霊（攻）

魔法・罫／ミイラの呼び声、アンデッドワールド、一族の結束（アンデッド族指定）、リバーズ×2

『これはなんと云う展開だ！ さっきまで優勢だった村上 鉄也

が一気に押され始めた！ ライフの差だと村上 鉄也の方が有利だが、状況的に死羅が圧倒的に有利だ！ しかし相手のライフもわずか100。 村上選手、ダメージを与えられるか！？」

くっ．．．．．まずい。

状況がひっくり返されただけでなく、攻撃力3000以上のモンスターが3体も揃っている。

魂を削る死霊を攻撃表示にしたということはあの伏せカードは攻撃反射系カードだな。

そして最悪なことに、こっちはミラフォを失った。

このデッキに他の攻撃反射カードは魔法の筒と炸裂装甲しか入っていない。

ワン・フォー・ワンでデッキを見たから多分、魔法の筒はデッキの下奥にあると思う。

そして炸裂装甲をドローしたとしてもこの状況から切り抜けない！

「僕のターン、ドロー！」

『クリクリ〜』

クリボー！

『クリ〜．．．．．』

クリボーが僕を心配している。

クリボーもあの不死竜を警戒しているのだ。
大丈夫だ。

こんな時にお前がいれば心強いぜ。

「この瞬間、はたき落とし発動！ そのドローカードを捨てても

「らいます。」

「何!?!」

ドローしたクリボーがはじかれ、墓地に入った。

クリボーオオオオオオ!!

くそ……………仕方ない。

「僕はシールド・ウィングを召喚! ターン終了だ。」

シールド・ウィング

2

DEF900

鉄也/LP2900

手札1枚

モンスター/シールド・ウィング(守)、羊トークン(守)

魔法・罠/リバーズ×3

まずいな……………リバーズカードは右からエンジェル・リフトとリミッター・ブレイク、そして星蝕・レベルクライム。これは全部ブラフだ。

このターン、相手がモンスターを召喚しなかったらまだ何とか残れる。

ここは運に任せるしかない。

「私のターン。私はサイクロンを発動！ 真ん中の伏せカードを破壊する！」

天はまだ我を見放してはいなかった！

「リミッター・ブレイクの効果発動！ このカードが墓地へ送られた時、手札、デッキ、または墓地からスピード・ウォリアーを特殊召喚する！ デッキからスピード・ウォリアーを特殊召喚！」

『トアア！』

スピード・ウォリアー

2

DEF 400

「くっ……小賢しい真似を。真紅眼の不死竜でシールド・ウィングを攻撃！」

ボワァー！

シールド・ウイングは真紅眼の不死竜が放つ炎を受け止めた。

「シールド・ウイングは1ターンに2度、戦闘によって破壊されない。」

「ならば、魂を削る死霊と闇より出でし絶望でシールド・ウイングを攻撃！」

くっ………今度こそシールド・ウイングは破壊された。

「そしてジャンク・デストロイヤーでスピード・ウォリアーを攻撃！」

ジャンク・デストロイヤーの拳の前に、スピード・ウォリアーは粉碎した。

くそ………相手のモンスターを利用するなんて卑怯だぞ………
………と言いたい所だが、さっきまでゴヨウを使っていた人が他人の事など言えない。

「ターン終了だ。」

死羅 / LP 100

手札 0 枚

モンスター / 真紅眼の不死竜（攻）、闇より出でし絶望（攻）、魂を削る死霊（攻）、ジャンク・デストロイヤー（攻）

魔法・罠 / ミイラの呼び声、アンデッドワールド、一族の結束（アンデッド族指定）、リバーズ×1

何とか凌いだぜ。

ライフの差だところちの方が有利だが、このままでは負けてしま
う。

だったらこのドローにかけるしかない。

まさかあの伏せカード、2枚目のはたき落としだったりしないだ
ろうな。

もしあれが2枚目だったら僕は負ける。
だがドローしないよりましだ。

「僕のターン、ドロー!!」

．．．．．何も来ていない。

どうやらはたき落としではなかった様だ。

俺が引いたカードは．．．．．

『行こうぜ、鉄也!』

ああ、ジャンク。

この状況から必ず突破して見せるぜ!

『クククク．．．．．』

「？」

何だ？

今、妙な声が聞こえたんだが。

『クククク．．．．．』

はっ！！

いつの間にか周りの視線が暗くなっていた。
一体何が．．．．．

『クリクリ．．．．．』

『一体どうなってるんすか？』

ジャンクとクリボーが僕の側に現れた。

「分からん。　しかしやな予感がする。」

『ククク．．．感じるぞ．．．．．お前の心の奥に眠る闇が．．．』

「お前は！」

僕が見た物．．．．．それは真紅眼の不死竜．．．．．
真紅眼の不死竜が僕に話しかけているのだ。

「．．．．．この暗闇の原因はお前か。」

『そうだ．．．．．私はあらゆるデュエリストの心の闇を増幅させ、捕食するためにこの空間へ送り込むのだ。』

人の絶望を増幅させる存在．．．．．そうか、これが恐怖の原因か。

てゆうか真紅眼の不死竜の仕事なんだ。

闇より出でし絶望じゃなくて真紅眼の不死竜の仕事なんだ。

3度目に聞くがレッドアイズよ、お前に何があったんだよ。

「なるほど．．．．．相手をしたデュエリストは2度とデュエルが出来なくなるのはお前が原因か．．．．．お前のマスターはそれを知っているのか？」

『マスターだと．．．．．馬鹿め、あいつは何も知らず私を使つてデュエルしているだけだ。　私はあいつを利用しては過ぎん。　それよりも、お前の絶望を頂に来了。』

「デュエリストの魂を利用するなんて嫌なモンスターだな。言
つておくが、僕はフリーターだ。あらゆる絶望を乗り越え、これ
からも乗り越えながら生きていく存在だ。」

世間の風ほど厳しい人生なんてないぜ。

人間はその風に吹かれながら成長するんだ。

お前が言う様な絶望など僕には通用しない。

『ほお．．．．たしかに今のお前には絶望の気配が薄いな。
では、これを聞こう。お前は这个世界の存在ではなからう。』

「ああ、それがどうした。」

『では、お前の元の世界で起こった真実を見せてやろう。』

「真実？」

ピカア．．．．．

急にまぶしい光が僕を照らし出した。

「ここは」

建物
歩いている人々
これは 僕がいた世界だ。

- Side End -

To Be Continued

第17話 やり直しデュエル！ 死神なんてぶっ飛ばせ！！（後書き）

あけましておめでとうございます。

アクセスPVがやつと10万超えました。

読者達に感謝します。

今年も遊戯王5D's The Power of Follow
sをよろしく願います。

ちなみにプレイヤーのフィールド表示とSideを変更しました。

あと、前回までジャンク・シンクロンの攻撃力が1300じゃなく
て1200になっていました。

まあ、シンクロにしか使用していないのでそこは別に気にしないで
ください。

では、次回をお楽しみに。

第18話 FLASHBACK!! 現世での出来事（前書き）

現世と現世に出ている原作が多少、矛盾しています。

ちなみに今回だけライフポイント8000ルールとなっています。

第18話 FLASHBACK!! 現世での出来事

- Side / 鉄也 -

「でさあ こんな事があつてね」

「ママー!」

「なあユウジ、ゲーセン行こうぜ!」

人々が話している

スウ

「うわっ!」

ちよつと驚いた。

人が僕の前を歩いてすり抜けた。

そうか、この世界はただのイメージ

真紅眼の不死竜が作り出した空間だな。

真紅眼の不死竜は僕の絶望を増幅させて捕食すると言っていた。

そして飛ばされた空間は僕がかつて住んでいた世界

すなわち現世のイメージを見せている。

つまり 僕はこの世界で何かあったのか?

シュウウウ

周りが暗くなり始めた。

夜だ。

夜になったのか。

スウ……………

「!？」

ツンツンとした黒髪と黒目を持った青年が走っていた。

この人は……………

「どこだ……………どこに^どいるんだ？」

……………僕だ！

- Side End -

- Side / 鉄也（現世） -

☞ 助けてくれ
・
・
・
・
・
☞

俺は聞こえた。

確かに聞こえたんだ。

この暗い夜、バイトの帰りに何か妙な声が聞こえたのだ。俺の周りにその声の主であるような人がいない。

幽霊なのか？

一体何なのかよく分からない。

俺はその声の主へたどり着くように追った。

☞ 助けてくれ
・
・
・
・
・
☞

森だ。

森の中から声だ。

[illegible]

絶対、幽霊だ――！！

[illegible]

とりあえず俺は森の中に入った。

- Side End -

- Side / 鉄也 -

[illegible]

「そうだった。」

?

「なんか思い出してきたな。」

鐵也？

•

「どうしたんだ、鉄也？」

ジャンクが僕に話しかけてくる。

「あ、すまない、ジャンク。現世の事を思い出してきた。」

『現世？ 元々鉄也の住んでいた世界の事ですか？』

「ああ。」

.....

「つてゆうかお前は僕の現世でも持っていたカードだっただろ。
何でお前は知らないんだ？」

『.....鉄也がいた世界では俺のような精霊は存在しなかつたんだろ。』

「.....まあ、そういう事か。」

たしかにデュエルモンスターのカードは現世では紙同然だから
な.....

.....何か現世とアニメの世界の扱いの差が悲しいな。

「とりあえず、続きを見る。これからの『俺』の展開が見える
ぜ。」

「え、いま『俺』と.....」

- Side End -

- Side / 鉄也 (現世) -

あるゝひ、もりのゝなゝか、熊さんに、であつたゝ

[illegible]

「あははは
・
・
・
・
・
・
・
」

実は俺、幽霊は多少苦手なんだー！！

☞ 助けてくれ
・
・
・
・
・
☞

正直、こんな事はしたくなかった。

何も知らずに森をさまようなんて絶対抜け出すことが出来なくなる展開はよく映画とかにあるパターンだ。

しかし、誰かが助けてほしいというのに放っておくのは嫌であった。

俺は映司さんの言った事を思い出す。

『手が届くのに伸ばさなかったら死ぬほど後悔する。それが嫌だから手を伸ばすんだ。』

そうだ．．．．．俺は手を伸ばす！

幽霊なんぞ怖くねえさ！！

俺はとりあえず探し始めた。

『うう．．．．．』

「ああ！」

俺は見つけた。

熊さんでもなく、幽霊でもなく、間違いなく少年であった。彼は背中に酷い出血があつて倒れていた。

「おい、大丈夫か！？」

『はあ、はあ．．．．．』

「ちよつと待ってる！ 今すぐ病院を呼ぶからな！」

俺は携帯電話を取り出した。

しかし．．．．．

「な、携帯が動かない！」

携帯電話は全然起動できてない。バッテリーは十分あつたはずだ。

「おい、しつかりしろ！」

俺はちょっと少年の顔を見た。

「!!」

この少年の顔．．．．．昔の俺のに似ている．．．．．

「お前は一体．．．．．」

「フッフ．．．．．」

「!!」

振り返るとそこにはフードを被った長身の人がいた。

「私から逃げられると思っていたか？」

「誰だ、お前は!？」

「フッフ．．．．．平行ワールドへ逃げて助けを求めるつもりだっただろうか残念だったな。」

声からすると、男だな。

この少年．．．その男に狙われていたのか。

「お前．．．こいつに何をした？」

「何故、君が知る必要がある？」

「……………こいつは俺に助けを求めた。知る権利は十分以上にある。」

「君に助けを求めた？」

何だ？ この男の表情が微笑み始めた。

「ちょうどいい。君も死んでもらおう。」

「な、何だと!？」

「まあ、仮に君ではなかったとしても、見られてしまったのなら殺すしかないからな。」

「は、言っておくが俺は喧嘩で1度も負けてことが無いぜ。」

「フッフ……………喧嘩ではない。闇のゲームだ。」

「闇のゲーム!？」

シューウウウウ……………

「な……………」

急に黒い霧が俺の左腕を包み込んだ。

「うわぁ!」

霧が消えた途端、意外とありえない物を見た。

「デュ、デュエルディスク!?」

よく見るとデュエルディスク……………アニメ遊
戯王で見るデュエルディスクであった。

市販で売ってあるプラスティックで出来ているおもちゃのデュエ
ルディスクではなかった。

デッキもセットされていた。

「そうだ……………これで闇のゲームを始めるのだ。」

よく分からんが仕方がねえ……………

「デュエル!!」

鉄也 LP 8000

VS

謎の男 LP 8000

シュシュシュシュッ!!

カードが自動にシャッフルされた。

俺は5枚のカードをドローした。

俺の手札は……………俺のデッキそのままだった。

「私のターン、私は神獣王バルバロスを召喚する。」

神獣王バルバロス

8

ATK1900

「うわああ!!」

俺が見たもの……それは赤い槍を持ったケンタウロスのようなライオン、神獣王バルバロスであった。

「フフ、驚いたか。これが闇のゲームだ。カードを2枚伏せ、ターン終了だ。」

謎の男/LP8000

手札3枚

モンスター/神獣王バルバロス(攻)

魔法・罠/リバーズ×2

本物のモンスター……..
あいつは闇のゲームだと言った。
だったらもし攻撃が来ると……..
ゴクッ。

「俺のターン！俺はモンスターをセットし、カードを2枚セッ

ト。 ターン終了だ。」

俺はカードをデュエルディスクにセットした。
すると俺の前に伏せカードのソリッドビジョンが現れた。

鉄也 / LP 8000

手札 3 枚

モンスター / 裏側守備表示モンスター 1 体

魔法・罨 / リバーズ × 2

伏せカードはミラーフォースと奈落の落とし穴……………
これで総攻撃を封じる。

「私のターン。 私は針虫の巣窟を発動。 デッキの上からカードを 5 枚墓地へ送る。」

墓地肥やしがメインか……………

「ほお……………いいカードを墓地へ送りましたね。 私は神獣王バルバロスのレベルを 1 下げ、レベル・スティーラーを特殊召喚する。」

背中に星が付いたテントウムシが現れた。

神獣王バルバロス

87

レベル・ステイラー

1

ATK600

あいつのデッキ……墓地からモンスターを特殊召喚させてリリース要因にする、またはシンクロ召喚に使用する戦略だな。

「私は停戦協定を発動。」

「何!?!」

「裏となっているモンスターは全て表側守備表示となり、リバー効果は発動しない。」

俺のモンスターが正体を現す。

その正体は白いオオカミのモンスターであつた。

ライトロード・ハンター ライコウ

2

DEF100

「くっ．．．停戦協定の効果でライコウのリバーは発動しない。」

「ライコウですか。このまま攻撃していれば厄介でしたね。では、停戦協定の効果でダメージを受けてもらいますよ。」

鉄也 LP8000 6500

くっ．．．．．レベル・ステイラーはこういう使い方もあるんだな。

停戦協定の発動前に効果モンスターを召喚すればダメージを加算する事が出来たのに召喚する前に発動したという事は．．．．．あのモンスターのリリース要因か。

「さて、その伏せカードが心配だ。私はレベル・ステイラーをリリースし、人造人間・サイコ・ショッカーをアドバンス召喚。」

人造人間 - サイコ・ショッカー

6

ATK2400

「やはりサイコ・ショッカーだったか！」

まずいな．．．帝モンスターであれば良かったんだが、サイコ・ショッカーを出されたら伏せカードを発動できない！

「メテオ・ストライクを発動。 人造人間・サイコ・ショッカーへ装備。」

トラップを封じ、貫通能力か。

「バトルです。 人造人間・サイコ・ショッカーでライトロード・ハンター ライコウを攻撃！」

ビィー！！

サイコ・ショッカーのビームがライコウを貫く。

「メテオ・ストライクの効果により、貫通ダメージを与える。」

ビィー！

サイコ・ショッカーが俺の腹にビームを放った。

「ぐっ．．．．．」

熱い！

ビームが俺の腹を焼き尽くしている。

「うっう．．．」

鉄也 LP 6500 4200

「はあ、はあ……………」

シャツに穴があき、腹に傷が出来た。
闇のゲーム……………やはりダメージが実現するのか……………

「神獣王バルバロスで直接攻撃！」

バルバロスの槍が俺に向かってくる。
速い！

バルバロスは獲物を駆るように走ってくる。

「うわあああ！！！」

ビュッ！！

シュッ！

俺はタイミングを合わせ、槍をかわした。

鉄也 LP 4200 2300

「はあ、はあ……危なかった。」

槍は俺の右肩をかすったが、刺さらなくてよかった。

「私はメインフェイズ2に入り、サイコ・ショッカーのレベルを1つ下げ、墓地からレベル・ステイラーを特殊召喚する。ターンエンドです。」

人造人間・サイコ・ショッカー
6 5

レベル・ステイラー

1

DEF0

謎の男/LP8000

手札2枚

モンスター/神獣王バルバロス(攻)、人造人間・サイコ・ショッカー(攻)、レベル・ステイラー(守)

魔法・罠/メテオ・ストライク(人造人間・サイコ・ショッカーへ装備)

まずい．．．．．負けたら本当に死んでしまう。

この少年も同じ目に遭ったのか？

俺が負ければ俺が死んでしまうだけでなくこいつも．．．．．
．．．．．こいつは俺に助けを求めた。
だったら俺がどうなろうと今更振り返りなどしない！

「俺のターン！」

デブリ・ドラゴン！

これだ！

「俺は手札のダンディライオンを墓地へ送り、ワン・フォー・ワンを発動！ デッキからチューニング・サポーターを特殊召喚する！」

中華鍋を被ったロボットが現れる。

チューニング・サポーター

1

ATK300

「墓地へ送ったダンディライオンの効果発動！ このモンスターが墓地へ送られた時、綿毛トークンを2体特殊召喚する！」

俺の前に可愛い綿毛のモンスターが現れる。

綿毛トークン×2

1

DEF 0

「さらに、デブリ・ドラゴンを召喚する！」

今度は白くて小さい龍が現れる。

デブリ・ドラゴン

4

ATK 1000

「デブリ・ドラゴンの効果発動！ このモンスターが召喚に成功した時、墓地から攻撃力500以下のモンスターを攻撃表示で特殊召喚する！」

タンポポとライオンを合わせたような可愛いモンスターが現れる。

ダンディライオン

3

ATK300

「俺はダンディライオンとチューニング・サポーターにデブリ・ドラゴンをチューニングし、スターダスト・ドラゴンを特殊召喚する！」

デブリ・ドラゴンが4つの輪となり、ダンディライオンとチューニング・サポーターは4つの星となった。
そしてその星達は輪をくぐった。

3 + 1 + 4 = 8

「現れよ、スターダスト・ドラゴン！」

キラキラ……………

『グオアアアー!!』

星屑のように輝く、美しき白き竜が空から舞い降りる……………

スターダスト・ドラゴン

8

ATK 2500

このデュエル．．．．負けるわけには行かない！
力を貸してくれ、スターダスト・ドラゴン！！

- Side End -

- Side / 鉄也 -

『鉄也、アレって確かスタジアムで見た竜じゃないか！』

ジャンクは遊星とジャックのライディング・デュエルの時の事を

話している。

「ああ。アレは伝説の竜、スターダスト・ドラゴンだ。」

『すごいモンスターっすね。』

「ああ。あれは世界に1枚しかないカードだ。まあ、この世界の事じゃないけどな。」

スターダストにデブリ・ドラゴンか……。懐かしいぜ。ジャンク・ウォリアーとかを召喚する前に先に出しておいて、その後、ジャンク・ウォリアーの効果でパワーアップした攻撃力で攻め、スターダストで効果破壊を防ぐのが俺の戦略だったな。

しかし今はスターダストとブラック・ローズを持っていない上に、デブリは抜いてしまっているな。

「ダンディライオンの効果をもう1度発動！ 綿毛トークンを2体特殊召喚する！」

綿毛トークン×2

1

DEF0

「そしてチューニング・サポーターの効果発動。カードを1枚ドロ―する！」

そしてあの時、俺が引いたカードは……………

「装備魔法、団結の力を発動！ スターダスト・ドラゴンに装備する！ 俺のフィールドのモンスターは5体！ よって攻撃力が4000ポイントアップする！」

スターダスト・ドラゴン

8

ATK 2500 6500

「攻撃力6500だと！？」

「バトルだ！ スターダスト・ドラゴンで人造人間・サイコ・シヨッカーを攻撃！ シューティング・ソニック！！」

『グオアアア！！』

スターダスト・ドラゴンが放つ光の光線がサイコ・シヨッカーを消滅させた。

「くっ……………」

謎の男 LP 8000 3900

「このデュエルでお前を倒す！」

そっだ．．．．この出来事が俺の人生を変えた。

- Side End -

To Be Continued

第19話 光り輝く救世竜（前書き）

主人公がトリップして以来、1カ月後だった設定でしたが、1年後に変更しました。

あと、また修正しました。

第19話 光り輝く救世竜

- Side / 鉄也（現世） -

.
.
.
.
.

俺は声が聞こえた。

その声は俺へ助けを求めている。

声を追ってたどり着いたら森の中で深手を負った少年を見つけた。

そして驚いた事に、少年はガキの頃の俺にそっくりだった。

もしかして彼はワームなのか？と冗談を考えている

場合ではない。

彼を助けようとしたら謎の男が現れた。

そして俺は闇のゲームに巻き込まれた。

鉄也 / LP 2300

手札1枚

モンスター / スターダスト・ドラゴン（攻）、綿毛トークン×4

（守）

魔法・罨 / 団結の力（スターダスト・ドラゴンへ装備）、リバー

ス×2

謎の男／LP 3900

手札 2枚

モンスター／神獣王バルバロス（攻）、人造人間・サイコ・シヨ
ツカー（攻）、レベル・ステイラー（守）

魔法・罠／なし

「バトルだ！ スターダスト・ドラゴンで人造人間・サイコ・シ
ヨツカーを攻撃！ シューティング・ソニック！！」

「くっ……………」

謎の男 LP 8000 3900

このデュエル……………負ける訳にいかない。

「壁モンスターを増やしただけでなく、団結の力による強化に使
うとは……………やりますね。」

「はあ……………はあ……………ターンエンドだ。」

鉄也／LP 2300

手札 1枚

モンスター／スターダスト・ドラゴン（攻）、綿毛トークン×4
（守）

魔法・畏／団結の力（スターダスト・ドラゴンへ装備）、リバー
ス×2

謎の男／LP3900

手札2枚

モンスター／神獣王バルバロス（攻）、レベル・スティーラー（
守）

魔法・畏／なし

「それでは、私のターン！ 私は神獣王バルバロスを守備表示へ
変更し、モンスターをセット。そしてカードを2枚セットし、タ
ーンエンドだ。」

神獣王バルバロス

7

DEF1200

謎の男／LP3900

手札0枚

モンスター／神獣王バルバロス（守）、レベル・スティーラー（
守）、裏側守備表示モンスター1体

魔法・畏／リバーズ×2

相手の戦略が大体読めてきた。^{タクティクス}

相手はレベル・ステイラー特殊召喚させ、上級モンスターへの生け贄召喚へつなげる戦略だ。

だったらレベル・ステイラーをなんとかしないと危険だ。

「俺のターン、俺は綿毛トークンをリリースし、邪帝ガイウスをアドバンス召喚！」

邪帝ガイウス

6

ATK2400

「邪帝ガイウスの効果発動！ このモンスターがアドバンス召喚に成功した時、フィールド上のカードを1枚除外することが出来る。」

「ちっ……………」

「レベル・ステイラーの復活効果は厄介だ。俺はレベル・ステイラーを除外する！」

シューウウウ……………

ガイウスは両手からブラック・ホールを作り出し、レベル・ステイラーを吸い込んだ。

「そして除外されたレベル・ステイラーは闇属性だ。邪帝ガイウスの効果により、1000ポイントのダメージを受けてもらう。」

謎の男 LP 3900 2900

ズキッ！！

さっきのサイコ・ショッカーとバルバロスの攻撃のせいで体が痛い。

「うつ．．．．．ターンエンドだ。」

鉄也 / LP 2300

手札1枚

、
モンスターノスターダスト・ドラゴン（攻）、邪帝ガイウス（攻）
綿毛トークン×3（守）

魔法・畏ノ団結の力（スターダスト・ドラゴンへ装備）、リバー
ス×2

．．．．．正直、バトルフェイズに入って攻撃したかったんだが、伏せカードが気になる。

ミラーフォースとか炸裂装甲だったら問題ないが、魔法の筒や次元幽閉などだったら俺は負ける。

除去カードが手札にない限り、むやみに攻撃するのは危険だ。

仮に相手が逆転するモンスターを出そうとしてもこっちは伏せカードで守れる。

「フフ．．．．．私のターン。 私は心鎮壺^{シン・ツェン・フー}を発動。」

な、心鎮壺だと!?

これじゃあ、サイコ・ショッカーの時と状況が変わらない!

「くっ．．．．．俺の伏せたカードを封じられたか。」

「では、私は私はカードをセットし、裏側守備表示となっているモンスターを反転召喚します。」

壺が現れた。

その中から不気味な眼が現れた。

メタモルポット

2

ATK900

「お互いのプレイヤーは手札を全て墓地へ送り、デッキからカードを5枚ドローする。」

お互い手札を捨て、新しく手札をドローした。
ちようどこっちは手札に困っていたから良かったが、相手も手札が増えたから不利だ。

「私はメタモルポットをリリースし、マテリアルドラゴンをアドバンス召喚！」

金色の竜が現れた。

マテリアルドラゴン

6

ATK2400

「私は神獣王バルバロスを攻撃表示に変更し、マテリアルドラゴンと神獣王バルバロスで綿毛トークンを攻撃！」

マテリアルドラゴンの光線とバルバロスの槍が綿毛トークンを破壊する。

「さらに、モンスターが減った事で団結の力は弱体化する。」

スターダスト・ドラゴン

8

ATK6500 4900

「カードを2枚伏せ、ターン終了だ。」

謎の男／LP2900

手札2枚

モンスター／神獣王バルバロス（攻）、マテリアルドラゴン（攻）
魔法・罠／心鎮壺、リバーズ×4

くそ．．．．．相手はまた状況を立て直した。
こつちも何とかしないと．．．．．

「俺のターン！俺はジャンク・シンクロンを召喚！」

頼むぜ、俺のメインチューナー！

『トアアア！』

俺の前にオレンジ色のロボットが現れた。

「ジャンク・シンクロンの効果発動！このモンスターが召喚に

成功した時、墓地からレベル2以下のモンスターを特殊召喚する！」

チューニング・サポーター

1

DEF100

伏せカードが気になる。

しかし長引くのも安全ではない。

だったら数で攻める！

「さらに、俺はチューニング・サポーターと綿毛トークンにジャンク・シンクロンをチューニング！」

1 + 1 + 3 〓 5

「シンクロ召喚、ジャンク・ウォリアー！！」

『ンヌヌ．．．．．トアア！』

オレンジ色のロボットが成長したみたいに紫色のロボットの戦士へ変わった。

ジャンク・ウォリアー

5

ATK2300

格好いい……

美しく、その身を捧げてカードを守るスターダスト・ドラゴンとは違い、このモンスターからは仲間の力を借りて戦うという闘志を感じる。

ジャンク・ウォリアー……俺が最初に手に入れ、お気に入りであり、メインアタッカーであるモンスターだ。

俺はこのモンスターをスターダスト以上に気に入っている。自分が最も気に入っているモンスターを初めて見るの印象は感動的だ。

スターダスト・ドラゴン

8

ATK4900

「チューニング・サポーターの効果でカードを1枚ドロ！そしてバトルだ！ジャンク・ウォリアーで神獣王バルバロスを攻撃！スクラップ・フィストォー！」

『トアアア!』

ドッガン!

『ゲオアアア!』

ジャンク・ウォリアーの拳を前に、バルバロスは粉碎された。

謎の男 LP 2900 2500

「だがこの瞬間、オプション・ハンターを発動! 戦闘によって破壊されたバルバロスの攻撃力分、ライフを回復する!」

謎の男 LP 2500 5500

「な．．．．．わざと回復するように誘ったのか。 だったらスターダスト・ドラゴンでマテリアルドラゴンを攻撃だ!」

「かかったな。 私はドレインシールドを発動。 スターダスト・ドラゴンの攻撃を無効にし、その攻撃力分、ライフを回復する。」

「し、しまった!」

謎の男 LP 5500 10400

しまった．．．．．攻撃反射系カードではなく攻撃吸収カード
だったとは．．．．．

これで相手に大きすぎるライフアドバンテージが出来てしまった。

「俺は邪帝ガイウスでマテリアルドラゴンを攻撃。」

2体のモンスターは相打ちによって消滅した。

「この瞬間、時の機械・タイム・マシンを発動。 私はマテリ
アルドラゴンを復活させる。」

相手の前に巨大な機械箱が現れた。
そしてマテリアルドラゴンが出てきた。

マテリアルドラゴン

6

ATK 2400

「うっ．．．．．カードをセットし、ターン終了だ。」

鉄也 / LP 2300

手札 4 枚

モンスター / スターダスト・ドラゴン (攻)、ジャンク・ウォリアー (攻)

魔法・罫 / 団結の力 (スターダスト・ドラゴンへ装備)、リバー
ス × 1、リバー ス × 2 (発動不能)

「私のターン。私はおろかな埋葬を発動。デッキからレベル・
ステイラーを墓地へ送る。」

「な．．．．．2枚目か！」

「マテリアルドラゴンのレベルを1つ下げ、レベル・ステイラ
ーを特殊召喚する。」

マテリアルドラゴン

6
5

レベル・ステイラー

1

ATK 600

「まだだ、私はマテリアルドラゴンのレベルを下げ、レベル・ステイラーをもう1体特殊召喚する。」

マテリアルドラゴン

5 4

レベル・ステイラー

1

ATK600

「いつの間に3枚目を!？」

「フッフ、正確には2枚目だった。針虫の巣窟の時、2枚墓地へ送ったのだ。」

くっ……まさかレベル・ステイラーが始めから2枚送られてたとはな。

「私はマテリアルドラゴンとレベル・ステイラー2体をリリースし、アドバンス召喚!」

マテリアルドラゴンとレベル・ステイラーが渦に巻き込まれ、周りが明るくなり始めた。

明るいといっても黒い光であり、闇を纏った光のようなものであった。

「空が・・・・・・・・・・・・・・・・」

目の前に現れたもの・・・・・・・・それは太陽・・・・・・・・黒い太陽であつた。

「あれは・・・・・・・・」

「力を制する邪神よ、今こそ我に示せ！！ 我が邪神、アバター！！！」

邪神アバター

10

ATK0

「くつ・・・・・・・・」

「邪神アバターの効果・・・・・・・・このモンスターの攻撃力・守備力はフィールド上で1番高い攻撃力を持つモンスターのその数値分に100ポイント加算する。」

1番高い攻撃力は・・・・・・・・スターダスト・ドラゴン

スターダスト・ドラゴン

8

ATK 4100

シューウウウ・・・

黒き太陽は形を変え始めた。

その姿は・・・黒いスターダスト・ドラゴンとなった。

邪神アバター

10

ATK 0 4200

「くっ・・・」

「バトルだ。邪神アバターでジャンク・ウォリアーを攻撃。

ダーク・シューティング・ソニック!!」

発動出来る伏せカードは炸裂装甲・・・だが、邪神アバターの効果で2ターンの間、魔法・罠カードを発動できない。

「くっ・・・迎え撃て、スクラップ・フィストオ!」

『トアアアア!』

しかし、邪神の攻撃の前に、ジャンク・ウォリアー歯が立たなかった。

『ウアアアア!』

「ジャンク・ウォリアー!」

バリリン!

ビュビュビュビュビュ!!

「うわあああ!」

シューティング・ソニックが俺に当たる所であった。

鉄也 LP 2300 400

「くっ……………」

スターダスト・ドラゴン

8

ATK 4100 3300

邪神アバター

10

ATK4200 3400

「私はターン終了だ。」

謎の男／LP10400

手札1枚

モンスター／邪神アバター（攻）

魔法・罠／心鎮壺、リバーズ×1

これはまずい……………

「俺のターン、俺はモンスターをセットし、スターダスト・ドラゴンを守備表示へ変更する。ターンエンドだ。」

鉄也／LP400

手札4枚

モンスター・スターダスト・ドラゴン（守）、裏側守備表示モンスター1体

魔法・畏ノ団結の力（スターダスト・ドラゴンへ装備）、リバー
ス×1、リバーズ×2（発動不能）

「クククク．．．．．そろそろ君に痛みを味わせようか．．．
．私のターン、私はマジック・ホール・ゴーレムを召喚。」

マジック・ホール・ゴーレム

3

ATK0

「私は邪神アバターの攻撃力を半分にし、相手プレイヤーへダイ
レクトアタックする。だが．．．．．」

邪神アバター

10

ATK4200

「くつ．．．．．アバターは攻撃力が変動されないモンスター
だったな．．．．．」

まずい．．．．．仮に攻撃力が半減してもライフが少ない．．．

「ダーク・シューティング・ソニック!!」

ブワアア!!

アバターの攻撃が俺へ向かってくる。

まだ負けるわけにいかない!

「俺は手札のクリボーの効果発動! このカードを手札から捨てることで自分が受ける戦闘ダメージを0にする!」

『クリクリ〜!』

クリボーが俺の前に現れ、攻撃から庇おうとした。

「フッフ．．．その程度で我が邪神の攻撃を防げんと思うのか?」

「何?」

ビュビュビュビュビュッ!!

邪神アバターのシューティング・ソニックはスターダスト・ドラゴンと違っていた。

「ぐああああ!」

この攻撃．．．．．まるで矢のようだ。
俺はエネルギーの矢の吹雪を受けた。

「がはっ・・・・・・・・」

俺は口から何かを吐いた。

「あ、ああ・・・・・・・・」

俺が吐いた物・・・・・・・・それは血であつた。

俺の腹からも大量の血が流れてきた。

「ゴホッ、ゴホッ・・・・・・・・」

「クククク・・・・・・・・言つたはずであろう。これは闇のゲームだ。闇のゲームでの邪神は攻撃が止まらない。ダメージが0であろうと、攻撃が無効されようと止まらないのさ。」

「くそ・・・・・・・・この野郎・・・・・・・・ゴホッ・・・・・・・・」

邪神とはいえ、卑怯だぞ！
痛い・・・・・・・・痛みが止まらない。

「うう・・・・・・・・」

目まいがしてきた。

「私はターンエンドだ。」

謎の男 / LP 10400

手札1枚

モンスター / 邪神アバター (攻)、マジック・ホール・ゴーレム
(攻)

魔法・罾 / 心鎮壺、リバーズ×1

ちくしょう

- Side End -

- Side / 鉄也 -

そうだ 俺にこんな事があ
ったんだ。

『て、鉄也にそんな事が・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

「ああ、これが事実だ。」

『もしかして鉄也はこのデュエルに負けて・・・・・・・・・・』

「ジャンク！」

『！！』

「今から俺の格好いいところを見せてやるぜ。」

『鉄也・・・・・・・・・・・・・・・・（こんな事実を見て冷静なんて
・・・・・・・・）』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『（いや違う！鉄也はそんな事を言っているんだけど鉄也は耐えようとしているんだ。）』

- Side End -

- Side / 鉄也 (現世) -

「うっ
俺の
ターン
」

「も……もう止めるんだ！」

!

少年の声だ。

『もう止めるんだ！　僕が原因で君がこんな目に遭つてしまつて
いるのも全部、僕のせいだ！　もう君が僕の為に苦しんでいる姿な
んて見たくないよ！』

[illegible]

『ごめん．．．．．ごめんよ．．．．．
助けを求めたのにこんな事に巻き込んでしまつて．．．．．
ゴホッ．．．．．ゴホッゴホッ．．．．．』

「はあ……はあ……何か勘違いしてないか、少年？」

『え?』

「俺が．．．俺がこんな目にあつたのも．．．お前を助けに行つたのも．．．全部．．．俺の意思だ。」

『うつ．．．うつ．．．』

「だから、自分を攻めるのはよせ。大体、俺は助けられるのに助けないつというのは嫌なんだよ。」

『鉄也さん．．．』

ズキィ!

「う．．．ゴハッ!」

俺は．．．何うまい事を言つてんだ、

「少年．．．」

『．．．は、はい．．．』

「大口を叩いてすまん。正直、俺も限界だ。お前を助けられないかもしれん．．．だから．．．代わりにこいつを倒させてくれ。」

「俺のターン！」

アバターは危険だ。

あのモンスターを破壊できるカードは伏せておいた炸裂装甲しかない。

しかし、今は発動できない。

「俺のターン！ 俺はモンスターをセットし、スターダスト・ドラゴンを攻撃表示へ変更！」

スターダスト・ドラゴン

8

ATK4900

「スターダスト・ドラゴンでマジック・ホール・ゴーレムを攻撃！ シューティング・ソニック！」

「フン……そのくらいのダメージなど大したことなど無い。」

謎の男 LP10400 5500

「はあ．．．はあ．．．．．しかし、これで直接攻撃は防げた。」

「しかしこの瞬間、リバーズカードオープン！ ダメージ・コンデンサー！ 私は手札を1枚捨て、モンスターを特殊召喚する。現れよ、神禽王アレクトール！！」

神禽王アレクトール

6

ATK2400

くつ．．．．．スターダストがいなくなった時のアバターへの戦力か．．．．．

「ゴホッ．．．俺はおろかな埋葬を発動。デッキからネクロ・ガードナーを墓地へ送る。カードを1枚セットし、ターンエンドだ。」

鉄也／LP400

手札2枚

モンスター・スターダスト・ドラゴン（守）、裏側守備表示モンスター2体

魔法・畏／団結の力（スターダスト・ドラゴンへ装備）、リバー
ス×2、リバーズ×2（発動不能）

「私のターン．．．．私はランサー・デーモンを召喚。」

ランサー・デーモン

4

ATK1600

「私は神禽王アレクトールで裏側守備表示のモンスターを攻撃。
この瞬間、ランサー・デーモンの効果発動。アレクトールに貫
通能力の効果を与える。」

「そうはいくか！ 墓地のネクロ・ガードナーの効果発動！ 攻
撃を1度だけ無効にする！」

「ほお．．．．では、邪神アバターでスターダスト・ドラゴ
ンを攻撃。ダーク・シューティング・ソニック！」

『グオアアア！』

「スターダスト・ドラゴン！！」

鉄也 LP 400 300

シュウウウウ．．．．．

「攻撃力が1番高かったスターダスト・ドラゴンがいなくなった為、邪神アバターは神禽王アレクトールの攻撃力を超える数値となる。」

邪神アバターはスターダスト・ドラゴンの姿から神禽王アレクトールの姿へ変わった。

邪神アバター

10

ATK 2500

「

私はランサー・デーモンでセットされているモンスターを攻撃。

バリリン！

「モンスターは．．．．カードガンナーだ。このモンスターが破壊された時、カードを1枚ドロウする！」

まずい．．．．勝てる気がしなくなってきた。

アバターがいて、魔法カードが発動できない今、俺に勝算なんてあるのか！？

迷いながら俺はカードガンナーの効果でカードをドロ―した。

???

1

ATK 0

DEF 0

「！」

俺は手札を確認した。

．．．．．
．．．．．

ある！

見つかったぞ！

「私はターンエンドだ。」

謎の男／LP 5500

手札 0 枚

モンスター／邪神アバター（攻）、神禽王アレクトール（攻）、
ランサー・デーモン（攻）
魔法・畏／心鎮壺

「俺のターン．．．．．はあ．．．はあ．．．．．俺はカードをセットし、ターンエンドだ。」

鉄也／LP300

手札2枚

モンスター／裏側守備表示モンスター1体

魔法・畏／リバーズ×3、リバーズ×2（発動不能）

俺は．．．．．この相手のターンに．．．．．賭ける！

「私のターン。私は神禽王アレクトールでモンスターを攻撃。この瞬間、ランサー・デーモンの効果で貫通ダメージを与える。」

「そうはいくか！ 俺は^{リアクティブ・アーマー}炸裂装甲を発動！ 神禽王アレクトールを破壊する！」

バリーン！

神禽王アレクトールは砕けた。
そして邪神アバターはランサー・デーモンの姿に変わった。

邪神アバター

10

ATK1700

「ちつ．．．．．なら、私はランサーデーモンでそのセツトされたモンスターを攻撃!!」

「モンスターはクリッターだ。俺はクリッターの効果により、デッキからバトルフェーダーを手札に加える!」

「ならば、邪神アバターで直接攻撃だ!」

「現れよ、バトルフェーダー!!」

バトルフェーダー

1

ATK0

バチバチバチバチ．．．．．

バトルフェーダーがアバターの攻撃を受け止めた

「くっ．．．カードを1枚伏せ、ターン終了だ。」

謎の男／LP5500

手札0枚

モンスター／邪神アバター（攻）、ランサー・デーモン（攻）
魔法・罠／心鎮壺、リバーズ×1

「俺のターン！　ゴホッ、ゴホッ．．．．．ふふふ．．．．．
ふはははは！！」

「どうしました？　あまりの痛みに理性を失いましたか？」

「ふ、違うな．．．．．俺は邪神に勝てるモンスターを召喚できる。」

「なに！？」

「俺はリビングデッドの呼び声を発動！　俺はスターダスト・ドラゴンを復活させる！」

『グオアアア！』

スターダストが再び俺の前に現れた。

「この瞬間、カウンター罠、魔宮の賄賂を発動！」

「させない！ 俺は神の宣告を発動！」

鉄也 LP300 150

「何！？」

「ライフを半分払い、魔宮の賄賂の発動を無効にし、破壊する！
！」

雷がソリッド・ビジョンの魔宮の賄賂に直撃し、破壊した。

「くっ．．．．．蘇生は成功したか．．．．．しかし、スターダスト・ドラゴンを召喚しても無意味だ。」

「はあ、はあ．．．．．そんなの分かっている！ 俺はまだ通常召喚を行っていない。俺は救世竜セイヴァー・ドラゴンを召喚
！」

俺の前に桃色の竜が現れる．．．．．

救世竜セイヴァー・ドラゴン

1

ATK 0

「ぐつ．．．．．俺はレベル8、スターダスト・ドラゴンと．
．．．．．レベル1、バトルフェーダーに．．．．．
レベル1、救世竜セイヴァー・ドラゴンをチューニング！ 集いし
星の輝きが．．．．．新たな奇跡を照らし出す．．．．．光さ
す．．．．．道となれ！」

8 + 1 + 1 = 10

「シンクロ召喚！ 光来せよ、セイヴァー・スター・ドラゴン！」

『グオアアア！！』

セイヴァー・スター・ドラゴン

10

ATK 3800

「ガハッ！」

視界が霞んできた．．．．．もう少しで俺も終わりか．．．．．

「ほお．．．．．確かにたいしたモンスターだ。しかし、邪神アバターの効果を忘れたのか？」

邪神アバターはセイヴァー・スター・ドラゴンと同じ姿になり始めた。

邪神アバター

10

ATK3900

「フ、違うな．．．．．セイヴァー・スター・ドラゴンの効果を．．．．．発動！ サプリメーション・ドレイン！！」

シュウウウウ．．．．．

邪神アバターの姿が元の太陽の形に戻り始めた。

邪神アバター

10

ATK0

「な・・・・・・・・・・アバターが！」

「セイヴァー・スター・ドラゴンの効果だ。1ターンに1度、フィールド上のモンスターの効果を無効化できる。これで邪神アバターの効果を無効化した。」

「うつ・・・・・・・・・・」

「邪神なんて・・・・・・・・・・この手でぶっ倒してやる！セイヴァー・スター・ドラゴンで邪神アバターを攻撃！シューティング・ブラスター・ソニック！」

セイヴァー・スター・ドラゴンの攻撃が邪神アバターを貫き、その衝撃波が謎の男に広がった。

ブワアアアア！！

謎の男 LP 5500 1700

「ア、アバターが・・・おのれ・・・・・・・・」

「はあ・・・・・・・・はあ・・・・・・・・俺はカードをセットし・・・・・・・・ターンエンドだ。そしてこのエンドフェイズ、セイヴァー・スタ

「・ドラゴンは．．．．．エクストラデッキに戻り、墓地から．．．．．スターダスト・ドラゴンを特殊召喚する。」

セイヴァー・スター・ドラゴンの姿が消え、スターダスト・ドラゴンが現れた。

スターダスト・ドラゴン

8

ATK2500

鉄也／LP150

手札1枚

モンスター／スターダスト・ドラゴン（攻）

魔法・罨／リビングデッドの呼び声（指定モンスターなし）、リバー×2、リバー×2（発動不能）

「くっ．．．．．私のターン．．．．．私はマジック・プラントを発動．．．．．心鎮壺を墓地へ送り、カードを2枚ドロ―する。」

ようし、心鎮壺がない今、俺の勝利は決まった。

「私はランサー・デーモンをリリースし、偉大魔獣 ガーゼットをアドバンス召喚！」

偉大魔獣 ガーゼット

6

ATK 3200

「マジック・プランターを発動したのは過ちだったな。俺は奈落の落とし穴を発動！」

「な、奈落の落とし穴だと!？」

「ガーゼットは破壊され、ゲームから除外される！」

「くっ……（私の手札のモンスターは冥府の使者ゴーズ……だが、今の私のライフではスターダスト・ドラゴンの直接攻撃に耐えられない）……ターンエンドだ。」

謎の男 / LP 1700

手札 1枚

モンスター / なし

魔法・罠 / なし

「俺のターン! ゴフッ！」

また口から大量の血が出てきた。
もう．．．．．限界か．．．．．

「ゴホッ、ゴホッ．．．．．バトルだ！ スターダスト・ドラ
ゴンで．．．．．ダイレクトアタック！」

『グオアアア！』

「これで終わりだ．．．．．」

スターダスト・ドラゴンは口にエネルギーを溜めた。

「シューティング．．．．．ソニック！」

ビィー！！

「うわああああ！」

スターダスト・ドラゴンの光線が相手に直撃した。

謎の男 LP17000

「はあ．．．．．はあ．．．．．勝った．．．．．
．俺の勝ちだー！」

「くっ．．．．．おのれ．．．．．この私が負けるとは．．．
．．．いったん引き上げるしかないか．．．．．」

謎の男はポケットからカードを取り出した。

「魔法カード、ワーム・ホール!」

シューウウウ．．．

空中が歪み、穴が出来た。

謎の男はワーム・ホールに入り込んだ。

「あ、待て、この野郎! うっ!」

ズキ．．．．．

「ゴハア．．．．．」

また血を吐いた。

無理だ．．．．．もう追う力もない。

「ちくしょう．．．．．」

俺は木の近くで座った。

わかる．．．．．俺はもう終わりだ。
しかしよくぞ耐えてくれた、俺の体よ。

「おい．．．．．少年．．．．．」

『鉄也さん．．．．．』

「すまなかつたな、お前を助けられなくて……」

『ぼ……僕の方こそすいません……こんな目に
遭わせてしまって……』

「はあ……デュエルモンスターのいい、闇のゲームと
いい、一体何が起ってるんだよ……」

『……』

少年は答えなかった。

「……
まあいい、今更知っても意味などないしな。」

『あの……鉄也さん……』

「はあ……はあ……何だ？」

『一つだけお願いして良いですか？』

「？」

『僕の……代わりに……戦ってく
れませんか？』

戦い……今の闇のゲームのようなものか。

「．．．．．言っておくが、俺はもう無理だぞ．．．．．
．．．出来ればやってあげても良かったんだが。」

太陽が昇り始めた。

「はあ．．．はあ．．．．．もう朝か．．．．．
」．．．」

『鉄也さん．．．．．』

「何だ？」

『出来れば戦ってくれたんですね？』

「．．．．．ああ。」

『．．．．．ありがとうございます。』

『

ピカアアア．．．．．

な、何だ．．．．．

彼の左腕が輝き始めた。

「痣？」

『．．．．．お願い．．．．．します．．．．．
』

何だ．．．．．急に声が．．．．．

「．．．．．」

『なあ、鉄也あ．．．．．』

「あ、あああ．．．．．」

『あ、起きた!』

俺が目覚まして見たもの．．．．．
それは．．．．．

「うわあああ!」

『うわあああ!』

「ジャ、ジャンク・シンクロン!？」

俺が見たもの．．．．．それはジャ
ンク・シンクロンであつた。

『もう．．．．．いきなり大声を出さないでくれよ。びつくりしたじゃないですか。』

「．．．．．す、すまん。」

．．．．．
はっ!
．．．．．

俺は一体・・・どうしたんだ？
何も・・・覚えていない。
俺は何故・・・ここにいるんだ？

- Side End -

- Side / 鉄也 -

・・・こうして俺はあの少年の姿となり、5
D'sの世界へトリップした・・・
そしてトリップする前に何があったのか忘れてしまった。
あれから1年・・・俺はここにいる。

『そんな事があつたなんて・・・』

『

「ああ・・・」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「・・・・・・・・・・・・・・・・おい、レッドアイズ！」

『!?!?』

『どうです？ 十分苦しみましたか？』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・全然。

『え？』

『何？』

「これが俺の絶望と言いたいのか・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・笑わせるぜ！」

『何!?!?』

「こんな真実・・・・・・・・今更知ってもどうでもいい事だ。」

『フッフ・・・・・・・・強がっているつもりか・・・・・・・・』

・

「ごたごたうるせえ・・・・・・・・さっさとデュエル
に戻れ。」

『いいだろう。デュエルでお前の闇を食わせてもらおう。』

『鉄也 大丈夫か?』

ピカアア

周りが明るくなり始めた。

- Side End -

To Be Continued

第19話 光り輝く救世竜（後書き）

それでは次回もお楽しみに。

またミスをしてしまいました。

何とか修正できました。

今度こそミスがないように……………

第20話 絶望があるからこそ希望をつかめ（前書き）

ジャンク・バーサーカーという新しいジャンクモンスターが登場！
さらに、EXTREME VICTORYの表紙を飾っている！

しかし、アニメでは呆気なく倒されるなんて何だろう、この扱いは

．．．．．

第20話 絶望があるからこそ希望をつかめ

- Side / 鉄也 -

はっ!!

眼に見えるもの……デュエルステージ……観客
達……

ここはフォーチュンカップ会場……

……視界が元に戻ったか。
てゆうかあの空間からどれだけ時間が経ったんだ？

……見たところ、全然経っていないな。

俺は万華鏡写輪眼の幻術のようなものにでも掛かっていたのか？

鉄也 / LP 2900

手札 1枚

モンスター / 羊トークン × 1

魔法・罨 / リバース × 3

死羅 / LP 100

手札 0枚

モンスター / 真紅眼の不死竜（攻）、闇より出でし絶望（攻）、

魂を削る死霊（攻）、ジャンク・デストロイヤー（攻）

魔法・罾ノミイラの呼び声、アンデットワールド、一族の結束（アンデット族指定）、リバーズ×1

「何している！ 貴様のターンだろ！」

「ああ、悪りい。俺のターンだ。俺はジャンク・シンクロンを召喚する！」

ジャンク・シンクロン

3

ATK1300

「鉄也……………大丈夫っすか？」

「何言ってんだ、ジャンク？」

「……………大丈夫ならいいです。」

……………

とりあえず、今はデュエルを続ける。

「俺はジャンク・シンクロンの効果を発動する！ このモンスターが召喚に成功した為、墓地からレベル2以下のモンスターを特殊

召喚する。 チューニング・サポーターを特殊召喚！」

チューニング・サポーター

1

DEF 100

「ジャンク・シンクロンの効果でレベルは変更できないが、シンクロ召喚に十分なレベルだ。 レベル1、チューニング・サポーターとレベル1、羊トークンにレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング！ 集いし星が新たな力を呼び起こす。 光さす道となれ！」

1 + 1 + 3 〃 5

「シンクロ召喚！ いでよ、ジャンク・ウォリアー！」

ジャンク・ウォリアー

5

ATK 2300

「俺はこの瞬間、星蝕・レベル・クライムを発動！ このカードは特殊召喚されたシンクロモンスターのレベルを1まで下げ、シンクロ召喚したモンスターのレベルと同じレベルを持つ星蝕トークンを特殊召喚する！」

ジャンク・ウォリアー

5 1

星蝕トークン

5

DEF0

星蝕トークン……………どう見ても魔法使い族じゃなくて植物族に見えるな。

「ふん、それに何の意味がある？」

「ジャンク・ウォリアーはシンクロ召喚に成功した時、自分フィールド上のレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分、攻撃力がアップする。」

「だからどうした？ レベル2以下のモンスターは存在しないではないか。」

「何勘違いしてるんだ。俺のフィールドにはレベル1となっているジャンク・ウォリアーがいる。ジャンク・ウォリアーはシンクロ召喚に成功した時、自身がレベル2以下であれば自身の攻撃力分、アップする！！　いくぜ、スーパー・フォース！！」

『ハアアアアア．．．．．』

ジャンク・ウォリアー

1

ATK2300 4600

「そしてチューニング・サポーターの効果により、カードを1枚ドロースる。バトル！　ジャンク・ウォリアーでジャンク・デストロイヤーを攻撃！　スクラップ・フィストオ！！」

正直、あの真紅眼の不死竜をぶっ倒したいところだが、俺の仲間があのもンスターに支配されているところなんて見たくない。

やり方が荒いが、お前を解放させる！

ジャンク・ウォリアーの拳がジャンク・デストロイヤーにぶつかった。

『すまん、鉄也よ．．．．．』

「気にするな、デストロイヤー。　よくある事だ。」

「これで止めを刺すつもりであるでしょうが、そうはさせません。わたしは永続罨、スピリット・バリアを発動！ これで私が受ける戦闘ダメージは0となる！」

バチチチツッ！！

死羅の周りにバリアが現れた。

死羅 LP 100

「・・・俺はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ。」

鉄也 / LP 2900

手札 0枚

モンスター / ジャンク・ウォリアー（攻）、星蝕トークン（守）

魔法・罨 / リバーズ × 3

「私のターン、私は地砕きを発動！ ジャンク・ウォリアーを破壊する！」

「俺はこの瞬間、シンクロ・バリアを発動！ ジャンク・ウォリアーをリリースし、このターン、俺が受けるダメージは0となる

！
」

ジャンク・ウォリアーが消え、俺の周りにバリアが現れた。

「だったら地砕きの対象は星蝕トークンとなり、破壊する！」

「くっ．．．．．だが、俺が受ける戦闘ダメージや効果ダメージは0となる。」

「私は魂を削る死霊を守備表示へ変更し、ターンエンドだ。」

死羅／LP100

手札0枚

モンスター／真紅眼の不死竜（攻）、闇より出でし絶望（攻）、魂を削る死霊（守）

魔法・罨／ミイラの呼び声、アンデッドワールド、一族の結束（アンデッド族指定）、スピリット・バリア

くそ．．．．．まずいな、相手は強力なモンスターがある上にスピリット・バリアのせいで戦闘ダメージを与えられない。

俺にも来てくれ．．．．．デイスティニードロー．．．
．．．

「俺のターン！俺は貪欲な壺を発動！俺はライトロード・ハンター ライコウ、チューニング・サポーター、ジャンク・シンクロン、ジャンク・デストロイヤー、そしてシールド・ウィングをデ

ツキに戻し、カードを2枚ドローする！」

ドローしたカードは……………

うつ……………この2枚に賭けるしかないか。

「俺はモンスターをセットし、カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

鉄也／LP2900

手札0枚

モンスター／裏側守備表示モンスター1体

魔法・罠／リバーズ×2

「私のターン……………私は闇より出でし絶望でモンスターを攻撃！」

「くつ……………」

メタモルポット

2

DEF600

「メタモルポットの効果発動！ お互い手札を全て捨て、カードを5枚ドローする！」

「丁度いい．．．．．私も手札に困っていたからな。」

お互い新しい手札をドローした。

「さらに、真紅眼の不死竜でダイレクトアタック！」

ボワアアア．．．．．

真紅眼の不死竜は口の中に炎を溜め込み始めた。

『今度こそ絶望を感じさせよう。』

ブワアアア！

炎が俺へ向かってくる．．．．．

「そうはいくか！ 俺はバトルフェーダーを特殊召喚！」

バトルフェーダー

1

ATKO

『．．．．．』

真紅眼の不死竜の動きが止まった。

「バトルフェーダーは相手プレイヤーの直接攻撃宣言時、手札から特殊召喚して相手のバトルフェイズを終了させる。」

「何！？ メタモルポットで引いたのか……………ならば、私はメインフェイズ2に入り、魔法カード、レベル・サンダー（アニメオリジナル）を発動！ 自分フィールドのレベルの合計分の100倍のダメージを相手プレイヤーに与える！」

真紅眼の不死竜 7

闇より出でし絶望 8

魂を削る死霊 3

合計： 18

バチバチバチバチ……………

モンスターの周りに電撃がおこり、俺に直撃した。

「くっ……………」

鉄也 LP 2900 1100

「さらに、私は神秘の中華なべを発動。闇より出でし絶望をリリースし、その攻撃力分、ライフを回復する！」

死羅 LP 100 3700

「カードを1枚伏せ、ターン終了だ。」

ちょっと押されてかけていたが、運が良かったぜ。

もしメタモルポットでバトルフェーダーを引かなかったら俺は負けていた。

しかしバトルフェーダーを引くとはなんというチートドローだ。とにかく……俺の勝ちだ！

死羅 / LP 3700

手札 2枚

モンスター / 真紅眼の不死竜（攻）、魂を削る死霊（守）

魔法・罠 / ミイラの呼び声、アンデットワールド、一族の結束（アンデッド族指定）、スピリット・バリア、リバーズ×1

「俺のターン、俺はジャンク・シンクロンを召喚！」

「またそのモンスターですか．．．．．」

「ああ、あいにくこれが俺のメインなんだね．．．．．」

ジャンク・シンクロン

3

ATK1300

「さらに、ジャンク・シンクロンの効果発動！俺は墓地からザ・カリキュレーターを特殊召喚する！」

ザ・カリキュレーター

2

DEF0

「ライコウの効果で墓地へ送ったのか。またジャンク・ウオリアーを召喚するつもりか．．．．．だが無駄だ。ジャンク・ウオリアーで私を倒すことは不可能だ。」

「やってみないとわかんねえだろ。俺はザ・カリキュレーター
の特殊召喚に地獄の暴走召喚を発動！ザ・カリキュレーターを2
体、デッキから特殊召喚する！」

ザ・カリキュレーター×2

2

ATK0

「今の地獄の暴走召喚でお前も同名モンスターを特殊召喚できるぜ。」

「私は真紅眼の不死竜を特殊召喚する。」

俺の場にカリキュレーターが増えたように、相手の場にも真紅眼の不死竜が増えた。

真紅眼の不死竜×2

7

ATK2400 3200

『クククク……愚か者めが……私を増やしてどうする……絶望を感じて理性を失ったか……』

「愚か？ 見せてやるよ……俺の実力……レベル2、ザ・カリキュレーターこいつらの実力をな……」

ター（１枚目）にレベル３、ジャンク・シンクロンをチューニング！
集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！」

2 + 3 〃 5

「シンクロ召喚！ いでよ、ジャンク・ウォリアー！」

『フン………トアア！』

ジャンク・ウォリアー

5

ATK2300

「さらに、俺はジャンク・ウォリアーの効果にチェインしてエンジェル・リフトを発動！ 墓地からレベル２以下のモンスターを攻撃表示で特殊召喚する！俺はザ・カリキュレーターを特殊召喚する！」

ザ・カリキュレーター

2

ATK 0

「真紅眼の不死竜よ．．．．．絶望がお前のゴールだ。 この
モンスターでお前を片付ける。」

『フン、その雑魚共で何が出来る？』

「雑魚共？ 何が出来る？ フィールドをよく見てみな。 ザ・
カリキュレーターは自分の場のモンスターのレベルの合計の300
倍、攻撃力がアップする。」

ジャンク・ウォリアー	5
バトルフェーダー	1
ザ・カリキュレーター	2
ザ・カリキュレーター	2
ザ・カリキュレーター	2

合計： 12

ザ・カリキュレーター x 3

2

ATK 3600

「そしてジャンク・ウォリアーはそのレベル2以下のモンスターの攻撃力分アップする。アルティメット・パワー・オブ・フェロースー!!」

ぐぐつ…………俺は拳を強く握った。

『ハアアア……………』

ジャンク・ウォリアーの周りに白いオーラが出た。

ピカア……………

ジャンク・ウォリアーが光ったと同時に、俺の左腕が光り始めた……………

「よくわからねえが、痣…………俺に力を貸してくれ……………」

『ハアア!!』

ジャンク・ウォリアー

5

ATK 2300 13100

「こ、攻撃力が1万を超えただど!?!」

『何！？』

どうだ、これがお前が呼んだ雑魚共の実力だ。
攻撃力1万越え……………オーバーキルレベルの攻撃力だぜ。

「おおつと、言うておくがスカウターの故障ではないぜ。」

「（く……………大丈夫だ、私にはスピリット・バリアがある。
仮にスピリット・バリアが破壊されたとしても私には魔法の筒が
伏せてある。）」

「俺はトラップ・スタンを発動！」

「何！」

「このターン、フィールド上の全ての罠カードの効果は無効化される。」

「くつ……………」

「レッドアイズよ……………これ以上、人々に恐怖を、絶望を
与えさせるわけにはいかない。お前を永遠に消滅させる！！」

『おのれええ……………』

「バトルだ……………ジャンク・ウォリアーで真紅眼の不死竜
を攻撃！」

『ハアアアア……………』

ジャンク・ウォリアーは拳にエネルギーを溜めた。

「アルティメット・ブレイカー!!」

『トアアアア!』

ジャンク・ウォリアーはその拳を真紅眼の不死竜に思い切りぶつけた。

『ウボアア~~~~!』

攻撃力1万を凌いでいるんだ。

どんな邪悪な精霊でも消滅できるだろう。

.

「くっ」

死羅 LP 3700 0

ジャンク・ウォリアーの拳による強大なエネルギーにより、真紅眼の不死竜は消滅した。

まあ、消滅したのはカードの中の精霊だけでカードには問題ない。

『決まったー!! 村上 鉄也、見事なコンボで大逆転だ!!』

そしてデュエルが終わった為、ソリッド・ビジョンのモンスター

達が消えた。

スウ・・・・・・・・

腕の痣が消えた。

とりあえず、俺は相手の元へ歩いた。

「いいデュエルでしたよ、死羅さん。」

俺は手を出した。

「あ、ああ・・・・・・・・」

とりあえず握手した。

色々あつて疲れた・・・・・・・・・・

「はぁ・・・・・・・・・・」

「鉄也！」

ん？

聞き覚えのある声が・・・・・・・・

「結衣さん・・・・・・・・」

「あんた、凄いじゃないの。あの状況からオーバーキルなんて
凄すぎるよ！」

「あ、ああ・・・・・・・・・・ありがとう。」

「あれ、どうしたの？ 元気が無さそうだけど。」

うつ・・・・・・・・・・気付かれたか。

「・・・・・・・・・・大丈夫？」

「ああ、ちょっと疲れたんだ。待合室で休憩したい。」

俺は一人で待合室にいる。
机の上にカードを並べた。

「みんな．．．．．ちょっと、話がしたい。」

カードからジャンクとクリボーが現れた。

『鉄也．．．．．』

『クリクリ〜！』

「すまなかった、ジャンク．．．．．お前が正しかった。
俺は．．．．．全然大丈夫ではなかった。」

『．．．．．』

「俺は．．．．．俺は哀れだった．．．．．自分の記憶を取り戻して傷ついた。むしろ思い出さなければ良かったと思

つていた。真紅眼の不死竜の言うとおり、俺はただ．．．．．強がっていた。どんなに表情を隠そうとしても．．．．．俺の心の中の絶望の感覚が収まらなかった。」

俺はあの日以来、何もかも失った。

仕事もくらしも．．．．．

愛する家族も友人も．．．．．

未来も将来も．．．．．

怒りも悲しみも抑えきれないほど．．．．．嫌な感覚だった。

『クリクリ〜』

『．．．．．やはり辛かったんだな。』

「ああ。」

『鉄也は哀れじゃないっすよ！ 人間はみんな完璧じゃないから辛いことがあっても当然っすよ！』

「そうだな．．．．．」

『だからもう、悩みを隠さなくていいっすよ！ ただのカードとはいえ、俺達が側にいますから！』

『クリー！』

「．．．．．ありがとう、お前ら。俺にとって、お前らはただのカードじゃない。俺の大切な友達だ！」

俺は全てを失ったと思った．．．．．しかしそれは違う。

俺には新しい仲間が出来た。

そして少年は俺を頼りにしていた。

新しいチャンスが．．．．俺にはある！

「もはや俺のこれからの未来は．．．．希望をつかむには．．
．．．戦うしかない。ジャンク．．．．クリボー．．．．
．これから一緒に戦ってくれるか？」

『当然っすよ！ 俺は鉄也の永遠の相棒だ！ 何時でも何があつても一緒に戦うつすよ！ 俺がデッキに入っていようとなかつとも共に戦うつすよ！』

「ジャンク．．．．」

『クリクリー！』

「クリボー．．．．」

「これから頼むぜ．．．．．相棒達！！」

- Side End -

T
O

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.
.
.
.
.
.
.

第20話 絶望があるからこそ希望をつかめ（後書き）

うーん、精霊との会話の部分がいまいちだったかな？

作者はちよつと文章が未熟なんで、良ければ読者の意見が聞きたいです。

番外編 もしThe Power of Followsに予告編があったら

文字通り、この小説がもしアニメだったらの予告編を書きました。

番外編 もしThe Power of Fellowsに予告編があったら

遊戯王5D'sそれは赤き竜に選ばれし者達の物語 .
.

「集いし星が新たな力を呼び起こす。」

そしてこの物語に

「光さす道となれ！」

1人のイレギュラーが動き出す。

「シンクロ召喚！ いでよ、ジャンク・ウォリアー！！」

『ハアアトアアア！』

MC『Everybody Listen!デュエル・オブ・フォー
チュンカップ! ついに開幕だ!!!』

ジャック・アトラス「キングは1人! この俺だ! 俺とデュエル
するのは誰だ!?!」

デュエル・オブ・フォーチュンカップ.....それは
選ばれしデュエリスト達が頂点の座を目指す為の戦場.....
..

ジル・ド・ランスポウ「出でよ、マスクド・ナイト!」

大寺 慎太郎「轟け、エレキマイラ!」

来宮 虎堂「マッド・プロファイラー!」

炎城 ムクロ「Sp・ジ・エンド・オブ・ストームを発動!」

シュウ「行くよ.....マイファイバリットレッドアイズ」

しかし、この大会にはある陰謀が隠されていた.....

フランク「お前の力を欲する者がいる。さあ、おじさんで行こうじゃないか。」

龍可「私は．．．．．私は．．．．．私はこの世界を守る！
クリボンや皆を守ってみせる！」

来宮 虎堂「魔女の切り札．．．来いよ！ 返り討ちにしてやる！
親にも捨てられた化け物が！」

ゴドウィン「私は見たいのです．．．．．あなたのレッド・デー
モンズ・ドラゴンと彼のスターダスト・ドラゴンが戦う所を．．．
．．．」

ボマー「遊星！ ジャック！ 奴を信じるな！ ゴドウィンに赤き
竜を渡してはならない！」

全てはある出会いから始まった．．．．．

少年『助けてくれ．．．．．』

鉄也「おい、大丈夫か！」

謎の男「フフフフ．．．．．闇のゲームを始めよう．．．
．」

鉄也「ぐあああぁ！（本物のダメージが．．．．．）」

謎の男「力を制する邪神よ、今こそ我に示せ！！ 我が邪神、アバ
ター！！！」

鉄也「集いし星の輝きが．．．．．新たな奇跡を照らし出す．．
．．光さす．．．．．道となれ！ シンクロ召喚
！ 光来せよ、セイヴァー・スター・ドラゴン！」

セイヴァー・スター・ドラゴン『グオアアア！』

鉄也「もう、俺も．．．．．限界か．．．．．」

そして5D'sの世界へ．．．．．

鉄也「少年は俺に思いを託した．．．．．それが俺の戦う
理由だ。」

繰り広げられる激戦．．．．．

龍亞「いつけえ、ガジェット・トレーラー！ ガジェットイング・キャノン！」

アキ「冷たい炎が世界の全てを包み込む、漆黒の花よ開け！ シンクロ召喚！ 現れよ、ブラック・ローズ・ドラゴン！」

結衣「私はこんなところで立ち止まっているわけにはいかないのよ！ 雷神鬼で……ダイレクトアタック！」

死羅「真紅眼の不死竜で攻撃！ 死炎弾！」

遊星「行け、ニトロ・ウォリアー！ ダイナマイト・ナックル！」

鉄也「粉碎せよ、ジャンク・デストロイヤー！」

それぞれの思いを背負うデュエリスト達……………

ボマー「私は故郷の為に……………負けるわけにはいかないのだ！」

鉄也「背負っている思いの差が……………違いすぎる。俺は……………この男に勝てるのか!？」

アキ「ディヴァインが教えてくれた……………仮面など必要無い

と．．．そのままの私で良いんだと．．．私はその言葉で救われた．
．．．ただ生きているだけで良い、もう考えない、ただ感じるだけ．
」

遊星「逃げるな、十六夜！」

シュウ「そんな事はシロちゃんが望んだりしていないよ。」

結衣「私は．．．．．私はただ．．．．．」

ジャック「遊星、これで俺達を邪魔する者はいない．．．．．このデュエルでどちらが真のキングの印を持つ者が決着をつける！」

遊星「（メテオ・ストリーム．．．．．カード達よ、お前達が出す答えは何だ？）」

鉄也「これ以上、人々に恐怖を．．．．．絶望を与えさせるわけにはいかない。お前を永遠に消滅させる！ アルティメット・ブレイカー！！」

ジャンク・ウォリアー『トアアア！』

そして因縁の決着．．．．．

ジャック「見たか遊星、キングの前では弱者の言い訳など通用しない！ デュエルの後の貴様に残されるのは敗北という二文字だけだ！」

遊星「集いし願いが、新たに輝く星となる！ 光指す道となれ！シンクロ召喚、飛翔せよ、スター・ダスト・ドラゴン！」

ジャック「アブソリュート・パワーフォース！！」

遊星「シューティング・ソニック！！」

鉄也「これが……俺の痣のモンスターか。いいだろう、一緒に戦ってくれ！ 集いし兵の魂を力に、不屈の戦士よ、力を己の拳に今、この大地に現れよ！ シンクロ召喚！ いでよ！」

遊戯王5D's The Power of Fellows

毎週水曜日、夕方6：00～6：30

テレビ東京系列にて放送中！！（しません）

現在デュエル・オブ・フォーチュンカップ編

鉄也「これからも頼むぜ
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
相棒達！」

番外編 もしThe Power of Fellowsに予告編があったら

作者「ズズ・・・・・・・・・・・・・・・・」

鉄也「スクラップ・・・・・・・・」

作者「ズズ・・・・・・・・・・・・・・・・」

鉄也「フィストオ！」

作者「ぶはあ！ 何をするんだ君は！？ お茶を吐き出しちゃったじゃないか。」

鉄也「何、予告編出してんだよ？」

作者「良いじゃないか、それくらい。」

鉄也「あまり良いと思わないんだが。 この小説がそんなに人気があるとは思わないし。 読者から反感を買ってしまいそうだし。 第一、あんたはミスが多すぎる。」

作者「ぐはっ！！（吐血） orz」

鉄也「ストーリー自体は問題ないと思う。 とりあえず、あんたはミスをしないように頑張るべきだと思う。」

作者「そこは自重しておくよ。」

鉄也「この予告編を取り消せ。」

作者「嫌です。　せつかく作つたのに消すなんて勿体ありません。」

鉄也「はああ．．．．．こんな駄目作者ですいません。」

作者「こんな自分ですいません。　とりあえず、ミスが無いように頑張ります。」

鉄也「しかし．．．．．あれが俺の痣のモンスターか。　オリカじゃないし、悪くはないな。」

作者「だろう？　　だろう！？　あのカード、結構好きなんだよね。」

ジャンク『え、鉄也はあのカードが何かわかったんですか！？』

鉄也「ああ。　そんなに難しくはなかったぞ。　ジャンク、お前も気に入るだろう。」

作者「読者も良ければ当ててみて下さい。　しかし感想にそのカードの名前を書かないで下さい。」

鉄也「じゃあ、読者のみんな。　これから『The power of Fellows』をよろしくな。」

第21話 風VS炎！！ 負けられない思い（前書き）

今回は意外と長かったです。

あと、まさかアポリアがZONEとデュエルするとは……………

殆どの人たちはZONEの正体なんてもう、わかっていますよね。

第21話 風VS炎！！ 負けられない思い

- Sideノゴドウィン -

「阿久津君．．．．．どうです、彼からの反応は？」

クルクル

《1分だけでしたが、リーダーによると、反応大ありで～～す！》

「そうですか。」

「ヒッヒッヒ．．．．．彼は間違いなくシグナーのようですね。」

「それはどうでしょうか．．．．．」

クルクルクルクル

《しか～し！ 彼は目覚めるまでには致しませんでした～～～～～
！！》

「次の試合へ進めましょう．．．．．秋山君。」

「はい。」

「あなたの出番です。 彼女の相手を頼みますよ。」

「かしこまりました。」

- Side End -

- Side / 鉄也 -

拝啓お父様とお母様

あなた達にとって俺はもう死んでいる存在ですけど俺は元気にやっています。

俺は最近、運命は不思議なものだと思い始めました。

信じられないかもしれませんが、俺は今、『遊戯王5D's』というカードゲームアニメの世界にいます。

謎の少年との出会いがきっかけに、俺は変なおっさんと死の戦いを繰り広げ、勝利に達しました。

しかし、俺は死んでしまいました。

俺は死ぬ時に失う気持ちと死へ急ぐ痛みを感じて怒りと悲しみを抑えられないくらい苦しい思いをしました。その反面、少年の感謝の気持ちを受けて安心して最後の日の出を見ました。

そして驚いた事に俺は『遊戯王5D's』の世界へ14歳の少年として転生してしまいました。

俺はその少年の体に転生し、新しい命を手に入れました。

この時、トリップする前の記憶がなくなってしまいました。

現世で使っていたカードが俺と一緒にいて、デュエルには困りませんでした。

それから驚いた事に、俺のカード、『ジャンク・シンクロン』と『クリボー』は精霊が宿っていました。

言い忘れていましたけど、この世界にはカードの精霊というものが存在するんです。

俺はこの2人と共にサテライトという低い身分でスラム街に1年間住んでいました。

もう、生活は大変でした。

食べ物を探したり、カードを拾ったりなど色々ありました。

それから1年後、サテライトへの差別に耐えられなくなった俺は、サテライトを抜け出す事にしました。

正直、原作通りじっとしていれば問題なかったかもしれないんですけど、このまま引きこもるのは好きじゃありませんでした。

そして俺はシティへ入ることに成功しました。

しかし、シティへの不法侵入でセキュリティに捕まり、罪人の証となる顔の刺青、マーカーを付けられ、収容所へ送られました。

収容所で俺はアニメの主人公、不動 遊星と出会いました。

あ、勘違いしないでください。

罪人扱いで連れ去られたけど遊星はいい奴ですよ。

彼はクールで優しく、絆を大切にする男です。

俺の好きなカード、『ジャンク・シンクロン』も元々、彼のカードです。

ちなみに彼はメ蟹ツクでもあります。

他にも収容所でカード好きな矢薙のじいさんやウニのような髪形をした氷室のおじさんと友達になりました。

そして俺はプロデュエリスト、黒崎 シュウという人と会いました。

彼はなぜか俺の誕生日を知っており、ケーキを持ってきてくれました。

なんかちょっと妙でしたけど、嬉しかったです。

彼は．．．どう説明したら良いかなあ．．．．．とりあえず、俺が特別な存在だと気付かせてくれました。

そして俺は彼とまた会う約束をしました。

収容所は囚人をクズ扱いする最低な所長がいました。

俺達は収容所の同僚達とカードを遊星に渡してその悪い所長をやっつけました。

遊星は俺のカードで勝利してくれました。

本当、彼に感謝しています。

俺はその後、収容所から解放され、自分の力を試す為に『黒薔薇の魔女』が来るダイモンエリアという場所に行きました。

彼女は悪い人ではありません。

ただ、助けを求めているだけなんです。

しかし、俺は自分の力を試すことを優先して彼女の気持ちを考えませんでした。

そんな自分は最低だと思いました。

次に向き合った時には謝りたいと思います。

俺はデュエルで彼女の力によって半殺しにされました。

その後、俺は神風 結衣という少女に助けられました。

お礼にちよつと付き合つてあげました。

彼女とデュエルもしました。

相手もなかなか強かったですけど、俺は何とかスクラップ・フィストでフィニッシュしました。

それから彼女に泊まらせて貰いました。

結衣さんはいい人です・・・・・・・・ちよつと異常でしたけど。

俺は自分の力を目覚めさせるためにデュエル・オブ・フォーチュンカップへ出場しました。

俺の最初の相手はなんと、原作では全く出番がなかったキャラでした。

彼は『蘇る死神』という異名を持っており、彼とデュエルした者は二度とデュエルが出来なくなるという噂があつたようです。

俺は彼を相手にダーク・ダイブ・ボンバーで先行1ターンキルを披露しました。

しかしダーク・ダイブ・ボンバーの使い方があまりにも邪道だったのでやり直しを要求され、さらにダーク・ダイブ・ボンバーが原作の予定より早く禁止カードになってしまいました。

まあ、元々禁止カードになる運命でしたけど。

とにかく、本番に入った俺は押したり押されたりしました。

それに、彼は知らずに邪悪な精霊が宿ったモンスターカードを持っていました。

『蘇る死神』と呼ばれる原因もあのカードにあったのです。

そしてその精霊は俺に少年との出会いの過去を見せて絶望に落とそうとしました。

記憶を取り戻した俺は、怒りや悲しみを出来るだけ押さえ込んで精霊を倒そうとしました。

俺は邪悪な精霊を永遠に消滅させようと、ジャンク・ウォリアーの攻撃力を1万オーバーにパワーアップさせてその精霊を破壊しました。

しかし、勝った後も俺は心の震えが止まりませんでした。

自分が記憶を取り戻した事実がショックだったのです。

ショックだった俺はジャンクとクリボーに慰めてもらいました。

この世界で未来をつかむには戦うしかないと思います。

本当、運命って不思議ですね。

だからこそ人生だな。

俺はこの世界で戦う決意をしました。

一応、現世での1番新しい情報はクラッシュタウン編が終わったところだったので、個人の生活には問題ないでしょう。

別に心配しないでください。

俺は強いし、仲間達カードがついています。

では、体をお大事に。

また書いておきます。

鉄也より

「ようし、これでいいな。」

ジャンクとクリボーと話してから俺は両親への手紙を書いた。

『どうやって送るんすか？ あんたの両親はこの世界にはいないんだろ。』

「送れねえから、送らねえよ。これは気持ちだ。」

そうだ、手紙なら気持ちだけでも良いんだ。

「う~~~~~~~~ん」

背伸びした。

さて……………これからどうするか……………

俺は左腕を眺めた。

痣は……………消えている。

あの少年……………彼に一体何があったんだろう？

『鉄也、これからどうします？』

「まあ、俺はフォーチュンカップを続ける。」

とりあえず俺は決めた……………戦うと。

今は……………勝ち取るのみ！

勝つ……………勝ち続ければ痣が目覚めるかもしれない。

痣が目覚めれば、少年の真実が分かるかもしれない。

そして、あの謎の男が誰かどうかわかるかもしれない。

「さて、試合でも見とくか。」

このフォーチュンカップ、モブキャラが数人いるからな。

念の為にそいつらを知る必要があるな。

ピッ！

俺はテレビをつけた。

『第6試合、勝者決定！ 次の試合へ進むのは、おおでら大寺 しんたろう慎太郎だ！』

「え？」

もう、試合が終わったの！？

嘘ー！！

俺が相手になるかもしれないのに試合を見ておかなかつたら作戦が練れない！

しかもやっぱりモブキャラだったか！

「うわ~~~~~！！」

『試合が全部終わってから手紙を書けばよかったですね。』

『クリ~~~~』

仕方ない……………とりあえず、代わりに第7試合と第

8試合を見ておくか。

それにしても喉が渴いた……………試合が始まる前にポカリでも買おう。

シュー……………

ドアを開けた途端、結衣さんがいた。

「結衣さん？」

「ねえ、鉄也……………ちょっとお願いがあるんだけど。」

「え、お願い？」

何だろう。

「あの……………貸してほしいカードがあるんだけど。」

- Side End -

- Side / 結衣 -

私はデュエル・オブ・フォーチュンカップへ選ばれた。
私は楽しみにしていた。

治安維持局が選んだ強者とデュエルする事……………

もしかしたらキングとのデュエルまでたどり着けるかもしれない。
私はデッキを出来るだけ強化した。

大会を楽しみにしていた。

しかし、出場者達を見た私は気が変わった。

私の新しい目的は…………あの女を倒すのみ。

「本当にこのカードで良いのか？」

「うん、貸してくれてありがとう。」

「別にいいさ。お前との再戦、楽しみにしてるぜ。」

「じゃあ、私、行ってくるね。」

「あ、君の番か。頑張れよ。」

「……………うん、じゃあね。」

カードを貸してもらって悪いね、鉄也。

私はスタジアムへ向かって行った。

・スタジアム・

『Ladies and Gentlemen！ いよいよ、第7
試合の始まりだあ！ まずは、唯一、デュエルアカデミアから選ば
れた生徒だー！ 風纏いし姫、その名も神風く結衣くー！』

フォーチュンカップは歓声で盛り上がっている。

『そして、彼女の相手となるのはくく炎の指揮官、秋山 ホムラだ
あ！』

私の前には赤い髪が立った青年がいる。

『それではくデュエル、スタンバイー！』

「くデュエルー！」

結衣 LP4000

VS

秋山 LP4000

悪いけど、あなたは私のウォーミングアップになってもらっわ。

「私のターン！ 私はシールド・ウィングを召喚！」

シールド・ウイング

2

DEF 900

「私はカードをセットし、ターンエンド。」

結衣 / LP 4000

手札 5枚

モンスター / シールド・ウイング (守)

魔法・罠 / リバーズ × 1

「私のターン！ 私はヴォルカニク・エッジを召喚する！」

妙な恐竜のようなモンスターが現れる。

ヴォルカニク・エッジ

4

ATK 1800

「ヴォルカニック・エッジの効果を発動！ 1ターンに1度、相手
プレイヤーに500ポイントのダメージを与える！」

バギューン！

ヴォルカニック・エッジの口から炎の弾を吐き出す。

結衣 LP 4000 3500

「くっ……………」

「私はカードを2枚セットし、ターンエンドだ。」

秋山 / LP 4000

手札3枚

モンスター / ヴォルカニック・エッジ（攻）

魔法・罠 / リバーズ×2

「私のターン！ 私は霞の谷のファルコンを召喚！」

霞の谷のファルコン

4

ATK2000

『行くぞ、結衣。』

うん、力を貸して、ファルル。

「私はテラ・フォーミングを発動し、霞の谷の神風を手札に加える！」

私は負けられない！

「私はフィールド魔法、霞の谷の神風を発動！ このカードは1ターンに1度、自分フィールド上の風属性モンスターが手札に戻る時、デッキからレベル4以下の風属性モンスターを特殊召喚することが出来る！ 私はシールド・ウィングを手札に戻し、霞の谷のファルコンでヴォルカニック・エッジを攻撃！ この時、霞の谷の神風の効果を発動！ デッキからドラゴンフライを特殊召喚する！」

ドラゴンフライ

4

ATK1400

「バトル！ 霞の谷のファルコンでヴォルカニック・エッジを攻撃！ 疾風一閃！」

ズバア！

「くっ……………」

秋山 LP 4000 3800

「さらに、ドラゴンフライでダイレクトアタック！」

「させん！ 私はガード・ブロックを発動！ ドラゴンフライの与えるダメージを0にし、カードを1枚ドロウする！」

「……………私はターンエンド。」

結衣 / LP 3500

手札 4枚

モンスター / 霞の谷のファルコン（攻）、ドラゴンフライ（攻）
魔法・罠 / 霞の谷の神風、リバーズ×1

「私のターン！ 私はヴォルカニク・ロケットを召喚。 このモンスターの召喚に成功した時、『ブレイズ・キャノン』と名の付いたカードを手札に加えることが出来る。」

ヴォルカニク・ロケット

4

ATK1900

「私は永続魔法、ブレイズ・キャノンを発動！」

ウィーン……………チャキツ！

相手の前に砲筒が現れる。

「ブレイズ・キャノンの効果を発動！ 手札の500ポイント以下の炎族モンスターを墓地へ送り、フィールド上のモンスター1体を破壊する！ 私はヴォルカニク・バレットを墓地へ送り、霞の谷のファルコンを破壊する！」

ドギューン……………チュドーン！

『ぐあああー！』

ヴォルカニク・バレットが射出され、ファルルが破壊された。

「ファルル！」

「私のターン！ 私は墓地のドラゴンフライを除外し、風の精霊
ガルーダを特殊召喚！」

風の精霊 ガルーダ

4

ATK1600

「私はガルーダをリリースし、風帝ライザーをアドバンス召喚！」

風帝ライザー

6

ATK2400

「風帝ライザーの効果を発動！ このモンスターがアドバンス召喚
に成功した時、相手フィールド上のカード1枚をデッキの1番上に
戻す！ 私はその伏せカードを戻す！ フローラル・ウェーブ！」

ブオオオオオ.....

ライザーが相手の伏せカードを飛ばした。

「バトル！ 風帝ライザーでヴォルカニック・ロケットを攻撃！
エア・サプレッション！」

『ハアアア！』

ヒュルルル．．．．バリーン！

秋山 LP3300 2800

「カードを1枚セットし、ターンエンド。」

一応、反撃の準備は整った．．．．

結衣／LP3500

手札2枚

モンスター／風帝ライザー（攻）

魔法・罨／霞の谷の神風、リバーズ×2

「私のターン！ 私はヴォルカニック・エッジを召喚！」

ヴォルカニク・エッジ

4

ATK1800

「私はヴォルカニク・エッジの効果を発動！ このターン、攻撃をする代わりに500ポイントのダメージを与える。」

ドギューン！

「くっ……………」

結衣 LP3500 3000

「私はライフを500払い、墓地のヴォルカニク・バレットの効果を発動する。デッキからヴォルカニク・バレットを手札に加え、ブレイズ・キャノンの効果を発動！ 手札のヴォルカニク・バレットを墓地へ送り、風帝ライザーを破壊する！」

秋山 LP2800 2300

チャキ・・・・・・・・・・ドギューン！

「この瞬間、風帝ライザーをリリースし、ゴッドバード・アタックを発動！ フィールド上のカードを2枚破壊する！ 私はブレイズ・キャノンとヴォルカニック・エッジを破壊する！」

「何！？」

ライザーが相手の方に飛び掛り、カードを破壊した。

「くっ・・・・・・・・私のカードを破壊するだけでなく、ライフと手札の消費を狙いましたか。カードを2枚伏せてターンをエンドだ。」

秋山 / LP 2300

手札 2枚

モンスター / なし

魔法・罠 / リバース × 2

「私はランス・リンドブルムを召喚！」

ランス・リンドブルム

ATK1800

「ランス・リンドブルムでダイレクトアタック！」

「この瞬間、ファイヤー・ウォールを発動！ 炎族モンスターを除外することでの相手の直接攻撃を無効にする。 私はヴォルカニック・エッジを除外し、ランス・リンドブルムの攻撃を無効にする！」

ランス・リンドブルムの前に炎の壁が現れ、攻撃を止めた。

「くっ．．．ターンエンド。」

「このエンドフェイズ、私は神の恵みを発動する。」

結衣 / LP 3000

手札 2 枚

モンスター / ランス・リンドブルム（攻）

魔法・罠 / 霞の谷の神風、リバーズ × 1

「私のターン。 このドローフェイズ、私はライフを500ポイント回復する。 そして、ファイヤー・ウォールの維持コストとして私はライフを500ポイント払う。」

秋山 LP 2300 2800 2300

「私は炎帝近衛兵^{えんていこのえへい}を召喚する。」

紅いドラゴンが現れた。

炎帝近衛兵

4

ATK 1700

「炎帝近衛兵の効果を発動。墓地の4枚の炎族モンスターカードをデッキに戻し、カードを2枚ドローする！ 私はヴォルカニク・ロケット、ヴォルカニク・エッジ、ヴォルカニク・バレット2枚をデッキに戻し、カードを2枚ドローする。」

うつ．．．．それだけじゃない。

神の恵みでライフが回復して、墓地に残っているヴォルカニク・バレットの効果でまた、手札を増強できる．．．．

秋山 LP 2300 2800

「私はカードをセットし、ターンエンドだ。」

秋山 / LP 2800

手札 3 枚

モンスター / 炎帝近衛兵（攻）

魔法・罨 / 神の恵み、ファイヤー・ウォール、リバーズ×1

「私は魔導戦士 ブレイカーを召喚する！」

魔導戦士 ブレイカー

4

ATK 1600

「魔導戦士 ブレイカーは召喚に成功した時、魔力カウンターを1個乗せ、魔力カウンターの数だけ攻撃力が300ポイントアップする。」

魔導戦士 ブレイカー

4

ATK1600 1900

「さらに、魔導戦士 ブレイカーの効果発動！ 魔力カウンター1
個取り除き、フィールド上の魔法・罠カードを破壊する！ 私はそ
の伏せカードを破壊する！」

『ハア！』

バリーン！

「次元幽閉が！」

「私は魔導戦士 ブレイカーを手札に戻し、A・ジエネクス・バ
ドマンを特殊召喚する！」

A・ジエネクス・バードマン

3

ATK1400

「バトル！ ランス・リンドブルムで炎帝近衛兵を攻撃！」

ズバア！

秋山 LP 2800 2700

「そして、A・ジエネクス・バードマンでダイレクトアタック！」

「ファイヤー・ウォールの効果を発動！ 炎帝近衛兵を除外し、攻撃を無効にする！」

「私はカードをセットし、ターンエンド。」

結衣 / LP 3000

手札 2枚

モンスター / ランス・リンドブルム（攻）、A・ジエネクス・バードマン（攻）

魔法・罫 / 霞の谷の神風、リバース×2

手札の内をばらしてしまっているし、ちょっとまずくなって来たかもしれないわね……………

「私のターン、神の恵みの効果でライフを回復し、ファイヤー・ウォールの維持コストを払う。」

秋山 LP 2700 3200 2700

「そして、私はヴォルカニク・ロケットを召喚する！」

ヴォルカニク・ロケット

4

ATK 1900

「このモンスターの効果により、ブレイズ・キャノンを手札に加える！」

「またブレイズ・キャノンが……」

「私はブレイズ・キャノンを発動！ そして墓地のヴォルカニク・バレットの効果を発動。 ライフを500払い、デッキからヴォルカニク・バレットを手札に加える。」

秋山 LP 2700 2200

くっ……これじゃあ、きりがなし。

「自分のライフを削り続けては意味が無い。私はブレイズ・キャノンを墓地へ送り、ブレイズ・キャノン・トライデントを発動！」

ガチャーン！

ブレイズ・キャノンが変形した。

「ブレイズ・キャノン・トライデントの効果を発動！ 手札の炎族モンスターを墓地へ送り、相手のモンスターを1体破壊する！ ランス・リンドブルムを破壊！」

チュドーン！

「そして、相手に500ポイントのダメージを与える！」

結衣 LP 3000 2500

「私はライフを500払い、ヴォルカニック・バレットを手札に加える。そして、ブレイズ・キャノンの効果を発動！ ヴォルカニック・バレットを墓地へ送り、A・ジェネクス・バードマンを破壊する！」

秋山 LP 2200 1700

チュドーン！

結衣 LP 2500 2000

「私はカードを2枚セットし、ターンエンドだ。」

秋山 / LP 1700

手札0枚

モンスター / ヴォルカニック・ロケット（攻）

魔法・罠 / ブレイズ・キャノン・トライデント、神の恵み、ファ

イヤー・ウォール、リバーズ×2

「私のターン！」

うつ……………今は……………なんとしても凌ぐしかない！

「私は魔導戦士 ブレイカーを召喚！」

魔導戦士 ブレイカー

4

DEF 1000

「魔導戦士 ブレイカーの効果発動！ このモンスターに乗っている魔力カウンターを取り除き、ブレイズ・キャノン・トライデントを破壊する！」

バリーン！

「くっ……………」

「私は……………カードを1枚セットし、ターンエンド。」

結衣 / LP 2000

手札 1枚

モンスター / 魔導戦士 ブレイカー（守）

魔法・罨 / 霞の谷の神風、リバーズ×3

「私のターン、私は神の恵みでライフを回復する。そして、スタンバイフェイズでファイヤー・ウォールの維持コストを払う。」

秋山 LP 1700 2200 1700

「私はヴォルカニック・ロケットをリリースし、ヴォルカニック・ハンマーをアドバンス召喚する！」

ヴォルカニック・ハンマー

5

ATK 2400

「私はヴォルカニック・ハンマーの効果を発動する。このターン、攻撃する代わりに墓地のヴォルカニックと名の付いたモンスターカード1枚につき、200ポイントのダメージを与える！」

ヴォルカニック・ロケット
ヴォルカニック・バレット
ヴォルカニック・バレット
ヴォルカニック・バレット

合計：4枚

「させない！ 私はヴォルカニック・ハンマーにデモンズ・チェー
ンを発動！ このカードの効果を受けたモンスターの効果は無効化
され、攻撃をする事は出来ない。」

「フン．．．．．なら、私はヴォルカニック・ハンマーをリリー
スし、火霊術 - 「紅」を発動！ ヴォルカニック・ハンマーの攻撃
力分のダメージを受けてもらおう！」

「私はカウンター罠、魔宮の賄賂を発動！ 火霊術 - 「紅」の効果
を無効にし、破壊する！」

「くっ．．．だが、魔宮の賄賂の効果でドローさせてもらう。タ
ーンエンドだ。」

秋山 / LP 1700

手札1枚

モンスター / なし

魔法・罠 / 神の恵み、ファイヤー・ウォール、リバーズ×1

「私のターン．．．．．」

．．．．．私が伏せているカードは攻撃の無力化のみ。
全く攻撃をしてこない相手には無意味だ。

強い．．．．．さすが、フォーチュンカップ。

「私はネフティスの導き手を召喚！」

炎を纏った女性が現れる。

ネフティスの導き手

2

ATK600

「私はネフティスの導き手と魔導戦士 ブレイカーをリリースし、デッキからネフティスの鳳凰神を特殊召喚する！」

私の前に炎を纏った金色の鳥が現れる。

ネフティスの鳳凰神

8

ATK2400

でも、私は．．．．．負けるわけにはいかないのよ！

「バトル！ ネフティスの鳳凰神でダイレクトアタック！ フェニ

ツクス・ブラスト！」

ネフティスが相手に体当たりする。

「ファイヤー・ウォールの効果を発動！ ヴォルカニック・ロケットを除外し、直接攻撃を無効にする！」

「私はターンエンド。」

結衣 / LP 2000

手札 1 枚

モンスター / ネフティスの鳳凰神（攻）

魔法・罠 / 霞の谷の神風、デモンズ・チェーン、リバーズ×1

「これは私にとっても多少、まづくなってきましたね私のターン．．．
．．．ほお、私も良いカードを引きました。まず、神の恵みの効果でライフを500ポイント回復。そして、スタンバイフェイズでファイヤー・ウォールの維持コストを払う。」

秋山 LP 1700 2200 1700

「そして、私は壺の中の魔術書（漫画オリジナルカード）を発動。」

お互いカードを3枚ドロ―する。」

うつ．．．．．この状況で手札増強なんて、そんな．．．．．

秋山 LP 1700 2200

「私はモンスターをセツトし、カードをセツト。 ターンエンドだ。」

秋山 / LP 2200

手札 2枚

モンスター / 裏側守備表示モンスター 1体

魔法・罾 / 神の恵み、ファイヤー・ウォール、リバーズ×2

「私のターン！ 私は．．．．．ネフティスの鳳凰神でモンスターを攻撃！」

「この瞬間、私は罾カード、ヴォルカニク・フォース（アニメオリジナルカード）を発動する！ このカードはヴォルカニク・デビルをデッキ、または手札から召喚条件を無視して特殊召喚することが出来る！ 私はデッキからヴォルカニク・デビルを特殊召喚する！ 現れよ、ヴォルカニク・デビル！！」

『グオアアア!』

ヴォルカニック・デビル

8

ATK3000

「!?!」

「さらに、ヴォルカニック・デビルが存在する時、攻撃表示である
モンスターはヴォルカニック・デビルに攻撃しなければならない。」

「くっ……………」

ネフティスがヴォルカニック・デビルに引き寄せられていく……

チュドーン!

結衣 LP2000 1400

「私は……………シールド・ウィングを召喚。」

シールド・ウイング

2

DEF900

「カードを1枚セットし、ターンエンド。」

結衣/LP1400

手札3枚

モンスター/シールド・ウイング(守)

魔法・罨/霞の谷の神風、デモンズ・チェイン、リバーズ×2

- Side End -

- Side / 鉄也 -

どうしたんだ、結衣さん？

俺とデュエルした時と違って、焦りすぎていないか？

もしかしてフォーチュンカップだから、やはり緊張しているのか？
だったら応援してやるしかないな。

「頑張れ、結衣さん!!」

- Side End -

- Side / 結衣 -

「私のターン！ 私は神の恵みでドローフェイズでライフを500
ポイント回復し、スタンバイフェイズでファイヤー・ウォールの維
持コストを払う。そして、私はファイヤー・トルーパーを召喚。」

ファイヤー・トルーパー

3

ATK1000

「ファイヤー・トルーパーの効果を発動。このモンスターが召喚、反転召喚、または特殊召喚に成功した時、このモンスターを墓地へ送る事で相手に1000ポイントのダメージを与える。ファイヤー・タックル！」

ボワアアア……………

「くっ……………」

結衣 LP 1400 400

まずい……………ファイヤー・ボール1枚で負けてしまう。

「私は装備魔法、メテオ・ストライクを発動。ヴォルカニック・デビルに装備する。バトルフェイズに入り、ヴォルカニック・デビルでシールド・ウイングを攻撃！ヴォルカニック・キャノン！」

ブワアアア！

「私は攻撃の無力化を発動！攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる。」

シューウウウ……………

渦が現れ、ヴォルカニック・デビルの炎を吸収した。

「惜しかったか。まあ、いいだろう。ターンエンドだ。（残念だが、次の相手のターンで終わりだ……………）」

秋山／LP2200

手札2枚

モンスター／ヴォルカニック・デビル（攻）、裏側守備表示モンスター1体

魔法・罠／メテオ・ストライク（ヴォルカニック・デビルへ装備）、神の恵み、ファイヤー・ウォール、リバーズ×1

「私の……………ターン……………」

「（もらった……………）このスタンバイフェイズ、バトルマニアを発動！ このターン、相手のモンスターは全て攻撃表示となり、攻撃が可能なモンスターは全て攻撃をしなければならない。」

「!」

シールド・ウィング

2

ATK0

まずい．．．．．ヴォルカニク・デビルの効果で私はヴォルカニク・デビルに攻撃をしなければならぬ。

攻撃を行ったらライフは確実に0。

だったら、このカードに賭けるしかない。

「私は貪欲な壺を発動！ 墓地の風の精霊 ガルダ、ランス・リンドブルム、風帝ライザー、霞の谷のファルコン、そして魔導戦士ブレイカーをデッキに戻し、カードを2枚ドローする！」

！！ 引いたカードは．．．．．

「！！ 私はシールド・ウィングをリリースし、神禽王アレクトールをアドバンス召喚！」

神禽王アレクトール

6

ATK2400

「何を考えている。 守備表示で召喚すれば自爆を免れたもの、攻撃表示で召喚したらヴォルカニク・デビルに攻撃をしなければならぬと変わらない。」

「そんなの分かっている。 神禽王アレクトールの効果発動！ 1

ターンに1度、エンドフェイズまで表側表示のカードの効果が無効にする。私はヴォルカニック・デビルの効果を無効にする。私はそのセットされているモンスターを攻撃！ 烈風波！！」

ブオオオオ！

アレクトールがセットされているモンスターを吹き飛ばす。

「なるほど、自爆を免れましたか。しかし、セットされたモンスターは火口に潜む者だ！ このモンスターの効果により、手札から天下人 紫炎を特殊召喚する！」

天下人 紫炎

4

ATK1500

「私はカードをセットし、ターンエンド。」

結衣/LP400

手札3枚

モンスター/神禽王アレクトール(攻)

魔法・罨/霞の谷の神風、デモンズ・チェーン、リバーズ×2

「私のターン、私はヴォルカニック・エッジを召喚する！」

「させない！ 私はキックバックを発動！ ヴォルカニック・エッジの召喚を無効にし、手札に戻す！」

「ならば、私はヴォルカニック・デビルで神禽王アレクトールを攻撃！ ヴォルカニック・キャノン！」

「リバーズカードオープン！ フローラル・シールド（ゲームオリジナルカード）！！ 攻撃を１度だけ無効にし、カードを１枚ドロ―する！」

私は負けるわけにはいかない．．．．．負けるわけにはいかない．．．．．負けるわけにはいかない！！

ドロ―したカードは．．．．．

「本当にこのカードで良いのか？」

「うん、貸してくれてありがとう。」

「別にいいさ。 お前との再戦も楽しみにしてるぜ。」

「ち、私はカードをセットし、ターンエンドだ。（伏せたカードは奈落の落とし穴。それに加えてヴォルカニック・デビルにフアイヤー・ウォール……………これで攻めも守りも完璧だ。）」

秋山／LP2200

手札1枚

モンスター／ヴォルカニック・デビル（攻）、天下人 紫炎（攻）
魔法・罠／メテオ・ストライク（ヴォルカニック・デビルへ装備）
、神の恵み、フアイヤー・ウォール、リバーズ×1

「私のターン……………」

私の……………勝ちだ！

「私はジャンク・シンクロンを召喚！」

『トアアア！』

鉄也……………あなたのカード、借りさせてもらっわ。

ジャンク・シンクロン

3

ATK1300

「ジャンク・シンクロンの効果発動！ 墓地からレベル2以下のモンスターを特殊召喚する！」

シールド・ウィング

2

DEF900

「さらに、私は神禽王アレクトールを手札に戻し、A・ジェネクス・バードマンを特殊召喚する！」

A・ジェネクス・バードマン

3

ATK1400 1900

「この瞬間、私は奈落の落とし穴を発動！ A・ジェネクス・バードマンを破壊し、除外する！」

くっ．．．．．A・ジエネクス・バードマンが穴へ落ちた。
でも、勝利に変わりはない！

「残念だけど、神禽王アレクトールが手札に戻っただけで十分よ。
霞の谷の神風の効果を発動！ アレクトールが手札に戻った事により、デッキから女忍者ヤエを特殊召喚する！」

女忍者ヤエ

3

ATK1100

「私は女忍者ヤエの効果を発動！ 手札の風属性モンスターを墓地へ送り、相手フィールド上の魔法・罫カードを全て手札に戻す事が出来る。 私は手札の霞の谷のファルコンを墓地へ送り、効果を発動する！ 忍法・突風の舞！」

「何！？」

「ごめん、ファルル。」

『構わない。 あまり役に立っていなかったし、結衣の力になるならこれぐらいやってやれるさ。』

ヒュルルルル．．．．．

相手のカードが飛ばされていく。

「さらに、神禽王アレクトールは相手フィールド上に同じ属性のモンスターが2体以上存在する場合、特殊召喚することが出来る！
ヴォルカニック・デビルと天下人 紫炎は炎属性であるため、私は神禽王アレクトールを特殊召喚することが出来る！」

神禽王アレクトール

6

ATK2400

「さらに、レベル2、シールド・ウィングにレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング！ 闇を纏いし正義の使者よ、光すら漆黒に包み込む兵器となれ！」

2 + 3 〓 5

「シンクロ召喚！ 蹂躞せよ、A・O・J カタストル！」

A・O・J カタストル

5

ATK 2200

「A・O・J カタストルだ！？（落ち着け．．．．．）
相手の狙いはカタストルでヴォルカニク・デビルを破壊し、アレ
クトールで天下人 紫炎を破壊する事。 女忍者のダイレクトアタ
ックを含んでもライフが200残る。」

「私はネフティスの導き手を除外し、風の精霊 ガルーダを特殊召
喚する！」

風の精霊 ガルーダ

4

ATK 1600

「何！？」

「そしてバトル！ A・O・J カタストルでヴォルカニク・デ
ビルを攻撃！ ディストラクティブ・レイ！」

ビューーン！

カタストルが放つレーザーがヴォルカニク・デビルに直撃した。

「まずい．．．．．カタストルの効果は強力だ。」

「A・O・J カタストルは闇属性以外のモンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わず、そのモンスターを破壊する！」

バリーン！

ヴォルカニック・デビルが破壊された。

「くっ．．．．．」

「さらに、風の精霊 ガルーダで天下人 紫炎を攻撃！」

秋山 LP 2200 2100

「悪いけど．．．．．私にはこの大会で勝たなければならない目的がある。ここで立ち止まっているわけにはいかないのよ！」

私の目的は復讐．．．．．それ以外にない！

「神禽王アレクトールでダイレクトアタック！ 烈風波！！！」

ブオオオオオオ！

「うわあああ！」

神禽王アレクトールがおこす風が相手を巻き込んだ。

秋山 LP21000

勝った……………

『決まったー！！ 次の試合へ進出するのは……………風纏いし
姫、神風 結衣だー！』

……………安心して、兄さん。

私はあの女を……………十六夜 アキを倒す！

- Side End -

- Side / 鉄也 -

- 待合室 -

「お疲れ様。」

結衣は俺と同じ部屋にいる。
俺はポカリを買ってあげた。

「ありがとう、鉄也。」

「いいよ、飲み物ぐらい。」

「いや、カードを貸してくれてありがとう。」

そう言って、結衣は俺にジャンク・シンクロンのカードを出した。

「あげるよ、そのカード。結構、君の役に立っていたみたいだし。」

「え？ あんたの大切なカードじゃないの？」

「良いんだよ。本来、4枚以上持っていたし。」

「そうなの！？」

「だからとつとけ。」

ジャンクがいなかったら負けてただろ。
余っているくらいなら、分けてあげるくらい構わないさ。

「・・・・・・・・・・ありがとう。」

「次の試合が始まるな。」

「・・・・・・・・・・（シユウの出番ね。）」

ピッ！

俺はモニターをつけた。

『Everybody Listen！　いよいよ第8試合の始まりだあ！』

始まって来たな。

次の試合・・・・・・・・・・黒崎さんの番だな。

『まずは、鉄壁の番兵、たちはな橘かずお和夫だあ！』

容姿の説明が面倒くさいので、とりあえず説明はモブキャラだけということにしよう。

『そして・・・・・・・・・・』

スタジアムの床が開き始め、黒崎さんが現れた。
そういえば黒崎さん、あんた一体、どこにいたんだよ！？

『16人目のデュエリスト……百戦錬磨の漆黒のキング、
黒崎 シュウだー!!』

ワー!!　ワー!!

黒崎さん、あんたの人気、すごいな。

『それでは、デュエル・スタンバイ!!』

「「デュエル!!」」

シュウ　LP4000

VS

橘　LP4000

「俺のターン！　俺はアステカの石像を召喚！」

アステカの石像

3

DEF2000

「さらに、俺はカードを3枚セットし、ターンエンドだ！（セットしたカードはD2シールド、ミラーフォース、メタル・リフレク

ト・スライム、そして奈落の落とし穴。さらに、手札には牙城のガーディアンがある。これで守りは完璧だ。」

橘／LP4000

手札2枚

モンスター／アステカの石像

魔法・罨／リバーズ×3

アステカか．．．．．じゃあ、相手のデッキは強力な防御系だという事か。

しかし、黒崎さんは余裕の表情を見せたままである。

「それじゃあ、ボクのターンだね。」

黒崎さんは急に指を空に指した。

「手札が良すぎる．．．．．このターンで十分だ。」

「な、何!？」

『なんと黒崎選手、1ターンキルを宣言した！一体、どんなプレイングセンスを見せてくれるのか!？』

「この6枚の手札で1ターンキルを披露しよう．．．．．まず1枚目。ボクはバイス・ドラゴンを特殊召喚するよ　バイス・ドラゴンはレベル5だが、相手フィールド上にモンスターが存在し、

自分フィールドにモンスターが存在しない場合、手札から特殊召喚する事が出来る。」

バイス・ドラゴン

5

ATK1000

あれはサイバー・ドラゴンのドラゴン族版だ。

しかしサイバー・ドラゴンと違い、ステータスが半減してしまう為、基本的にシンクロ素材がリリース要因に使われる。

「（くっ．．．．．奈落の落とし穴が通用しないステータスか。

しかし、あのモンスターを出したという事は、狙いはアドバンス召喚かシンクロ召喚．．．．．）」

「2枚目　ボクは魔法カード、巨竜の羽ばたきを発動。レベル5であるバイス・ドラゴンを手札に戻し、フィールド上の魔法・罠カードを全て破壊する。」

「何!？」

『ガウウウ!』

ブオオオ．．．．．

バイス・ドラゴンは翼を羽ばたき、相手の伏せカードを破壊した。

「そして、ボクはもう1度バイス・ドラゴンを特殊召喚する。」

バイス・ドラゴン

5

ATK1000

「さて……3枚目　ボクは未来融合・フューチャー・フュージョンを発動。ボクはエクストラデッキからF・G・Dを選択する。そして、デッキからタイラント・ドラゴン、ヘルカイザー・ドラゴン、アックス・ドラゴニート、デルタフライ、それから……仮面竜で良いか。この5体を墓地へ送る。」

「だが、フューチャー・フュージョンは時間が掛かる。」

「分かっているよ……4枚目。ボクはドル・ドラを召喚する。」

双頭の竜が現れる。

ドル・ドラ

3

ATK1500

「そして5枚目。行くよ……………レッドアイズ《マイ
フェイバリット》　ボクはドル・ドラを除外し、レッドアイズ・
ダークネスメタルドラゴンを特殊召喚する」

『グアアアア！』

彼の前に黒光りした鋼鉄のドラゴンが現れる。

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン

10

ATK2800

「あ、あわわ……………」

『出たー！！　彼のエースモンスター、レッドアイズ・ダークネス
メタルドラゴンだー！！　このモンスターが出たからには、彼の勝
利はもはや決まったのも同然だー！』

「ボクはレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンの効果を発動。
ボクは墓地のドラゴン族モンスターを特殊召喚する。　ボクが選
ぶのは……………チューナーモンスター、デルタフライ」

デルタフライ

3

ATK1500

「そして．．．．レベル5、バイス・ドラゴンにレベル3、デルタフライをチューニング 静かなる闇よ。 光と共に世界を清めよ。」

5 + 3 〓 8

「シンクロ召喚 舞え、ダークエンド・ドラゴン！」

ダークエンド・ドラゴン

8

ATK2600

「うつ．．．．．」

「そして6枚目．．．．．ドラゴンズ・ミラー 龍の鏡を発動 自分の墓地、またはフィールド上のモンスターを除外し、そのモンスター

を融合素材としたドラゴン族モンスターをエクストラデッキから特殊召喚する。僕は墓地のヘルカイザー・ドラゴン、アックス・ドラゴニース、デルタフライ、仮面竜、そしてバース・ドラゴンを除外し……現れよ、ファイブ・ゴッド・ドラゴンF・G・D!!!」

『『『『『グオアアアア!!!』』』』』

巨大な五つ首の龍が現れる。

F・G・D

12

ATK5000

「な、なんと……黒崎選手、ドラゴン族の強豪を一気に3体も召喚した！これはもう、決まったー!」

「あ、あわわ……」

黒崎さんの相手は怯えている。

無理も無いだろう……てゆうかダークエンドとレッドアイズがいるのにそれに加えてF・G・Dなんてやり過ぎだろ！オーバーキルだよ、もう。

「ダークエンド・ドラゴンの効果を発動 攻撃力・守備力を500ポイントダウンさせ、アステカの石像を墓地へ送る。ダーク・イヴァポレイション」

ダークエンド・ドラゴン

8

ATK 2600 2100

ブワアアア！！

アステカが黒い霧に包まれ、消滅した。

「フィニッシュだ。行くよ………F・G・D、ダークエンド・ドラゴン、そしてレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンでダイレクトアタック　ドラゴニック・バースト！！」

ブワアアアアア！

ドラゴン達が一気に相手へ攻撃をする。
もうやめて、彼の気力とはとくに0よ！
もう勝負はついたのよ！（笑）

ドッガン！！

橘 LP 4000 0

「ぽかーん……………あはは……………はは……………」

相手はアニメのように立ったまま白くなっている。

そりゃあ、1ターンでオーバーキルだもんな。

敵ながら可哀想だ。

「これが……………真のエンターテイメントだ」

- Side End -

To Be Continued……………

第21話 風VS炎！！ 負けられない思い（後書き）

ああ．．．．．何とか終わりました。

正直、一々試合をするのは面倒だと思ったのでシュウのデュエルは1ターンオーバーキルにしました（笑）

次回は龍可VSフランクになりますね。

じゃあ、次回『古の森へGO！！』をお楽しみに。

第22話 古の森へGO!!（前書き）

今回は龍可VSフランク戦です。

正直、今回は文章的にあまり自身がありません。

第22話 古の森へGO!!

- Side / 鉄也 -

- 古の森 -

ゾクゾクゾクゾクゾクゾク

「龍可ああああああ!」

今、俺は古の森にいる。

理由は龍可を探しに行こうとしたからだ。

- 数分前 -

俺は待合室にいた。

「やあ、村上くん」

「黒崎さん! 何処にいたんですか? 間に合っていないから

心配していましたよ。」

「いやあ、ゴメンゴメン　ちょっと、急用があつてね。　ボクも色々事情があつたんだよ。　でも、君の試合が始まった頃に戻ってきたよ。　君のジャンク・ウォリアー、凄かったよ。　なかなか見事なコンボだったね。」

黒崎さんは俺を褒めている。

「いやあ、それ程でも。　あなたの１ターンキルも凄かったですよ。まさか、あなたのデッキがドラゴン族だったとは……………」

しかし驚いた。

まさか、彼がOCG版のレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを持っていたとはな。

漆黒のキングと呼ばれている理由もあのモンスターからなのか。

「ハハハハ……………ん？　結衣じゃないか」

黒崎さんは俺の近くにいた結衣に反応した。

「シュウ……………」

「え？　知り合いだったんですか？」

「そうだよ　彼女はボクの友人の妹さ。　結衣、君も良くやったね　前よりも強くなっているじゃないか。」

友人……………結衣の兄だという事か？

「まさか2人とも会った事があったとはね。まあ、お互いに頑張ろう」

遊星やアキ、そしてジャックだけでなく、黒崎さんも結衣さんも強い……

もしかしたら俺の今後の勝つチャンスが薄いかもしれない。

「黒崎さん、もし俺があなたとデュエルする事になるんだったら……俺は全力で行きます。」

「ほお……構わないよ。ボクもそのつもりだしね。ところで、君はどうするんだい？」

「え？ だからフォーチュンカップを続けるって……」

「違う違う。僕が聞いているのは君は今夜何処で寝るんだと聞いているんだよ。」

「あ。なるほど。」

「まあ、別に僕の家で泊まってもいいんだけどね。」

「ねえ、鉄也……良かったら私の家で泊まらない？」

「え？」

「あ、丁度いいね。君達は良い友達みたいだし。村上クン、君は彼女の家で泊まりたまえ」

「え？　ちょ、ちょっと．．．．．」

ガシッ！

黒崎さんが俺の頭を掴み、顔を近づけた。

「村上クン、君は女の子の誘いを断るのかい？」

「．．．．．でも、あんたは俺の協力が必要なんじゃ」

「いーのいーの　痣の事なんて一晩ぐらい気にしなくても問題ない」

「でも．．．．．」

「誰が君にフォーチュンカップの出場権とその日までの住まいをあげたんだい？」

「それは．．．．．」

「このボクだよん　君は恩師のリクエストを1つぐらい引き受ける気持ちなど無いのかい？」

「．．．．．（汗）」

「じゃあ、頼むよ」

「．．．．．はい。」

黒崎さんは俺を放した。

「じゃあ、決まりね。結衣、村上クンを頼んだよ。（悪いね、村上クン。彼女の為にもちよつと、付き合つてやつてくれ。）」

「．．．．．うん。」

「あ、村上クン　ちよつと結衣と話したいんだけど、良いかい？」

「え？　良いですけど。」

黒崎さんは結衣の耳に近づいた。

「（結衣．．．．．こんな機会なんて滅多にないんだ。君は普通にフォーチュンカップを楽しみたまえ。復讐なんて、諦めるんだ。）」

「（！？）」

「（多分、シロちゃんもそう願っているよ。）」

「（ふ、ふざけないで！　あんたに何が．．．．．）」

黒崎さんは結衣から離れた。

結衣さんの表情が少し変わってたんだが．．．．．一体、何の話をしていたんだ？

「じゃあ、また後で。」

「あ、はい。」

「またね、結衣」

「・・・・・・・・じゃあね、シュウ。」

黒崎さんは出て行こうとした。
その時・・・・・・・・

「あ、村上くん。君にこれをあげるよ。」

「え？」

黒崎さんは鞆を取り出した。

「色々カードを手に入れてさ、良かったら君にあげるよ。明日の試合に役立つかもしれないし、良かったら、今晚見てくれ。」

「あ、ありがとうございます。」

「それじゃあ、またね。」

「はい。」

彼は行ってしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・じゃあ、帰ろうか？」

いや、待てよ．．．．．確か試合がもう１つあったような気が．．．．．

『Everybody！ イエーイ！ 緊急事態の発生だ！ 先程ゴドウィン主催からサプライズな提案がなされた！ ヘイ、惜しくも１回戦に負けたデュエリスト共よ、聞いているか？ これより、敗者復活戦が行われることが決定した！』

モニターからMCが喋り出した。
そうそう、敗者復活戦だ。

「敗者復活戦だつて。 見ていこうか？」

まあ、俺の場合は原作知識で分かっているんだが．．．．．

「いいだろう。 折角だから見ていこうぜ。」

『これより、敗者復活戦の組み合わせを発表する！ この試合はラウンドに抽選された１組のみ行われる。』

考えてみればアキにボコボコにされた騎士さん、どう考えても復活できないね。

お気の毒に．．．．．

『その幸運に選ばれたのは、惜しくもボマー選手に敗れたが、若干１１歳にして実力はゴドウィン主催の折り紙付き！ その将来性は右肩上がりの天井知らず、舞い降りたデュエルの天使！ ミッスウ．．．．．龍可ちゃん！』

スポットライトが観客席に座っている龍可に当たる。

ワー！　ワー！

「え、え．．．．．」

原作通り、龍可はちょっと緊張したような表情を浮かべている。

るーか！　るーか！　るーか！　るーか！

会場からは龍可コールがされている。

てゆうか龍可は緊張しているじゃないか。

彼女がやりたくないんだからやらせなくてもいいだろ。

「るーか！　るーか！　るーか！　るーか！」

ん？

「って結衣さん、あんたですか！？」

振り向けば、結衣さんも龍可コールをしていた。

「いいじゃないの。だって、龍可ちゃん可愛いし。」

「龍可は嫌がつてるじゃん。嫌がつてるなら出なくてもいいだろ。」

って、あれ？

結衣さん、さっきと比べてちょっと明るくなっていないか？

「いや、あの空気だと龍可は出場しないとやばいじゃない。」

「……………そうだな。」

そこは返す言葉も無いな。

無理も無いだろう、観客からの龍可への印象は龍亞のせいでおかしくなっているからな。

龍可は立ち上がった。

「それに、もう1度ディフォーマーを見てみたいしね。」

いや、あれは龍可じゃなくて龍亞の方なんだよね。

先程も言ったとおり、龍亞のせいで龍可の印象が台無しだ。

あんなキャラじゃないのに……………

龍可はステージに立った。

『さあ！天才デュエリスト龍可ちゃんの対戦相手は デュエルカ
ウンセラーの異名を持つ、プロフェッサー・フランクだ！』

「初めまして龍可さん。」

龍可の相手は丁寧にお辞儀をした。

原作通り、彼女の相手はフランクだ。

「あら、彼女の相手は意外と地味な人ね。」

地味？

こいつの本性は意外と最悪だぞ。

個人的に収容所の鼻毛所長より最悪なキャラだ。

実はロリコンサディストなんだぞ。

俺にとって、見てるだけでぶん殴りたいキャラだぞ。

「がんばれー、龍可ー!!」

俺も応援してあげる事にした。

「結局、あんたも応援しているじゃない。」

「まあ、一応知り合いだからな。」

頑張れ、龍可。

色々な意味で頑張れ。

「デュエル!!」

あ、始まった。

龍可 LP4000

VS

フランク LP4000

「私のターン、ドロー。 サニー・ピクシーを守備表示で召喚して
ターンを終了。」

サニー・ピクシー

1

DEF 400

龍可 / LP 4000

手札 5枚

モンスター / サニー・ピクシー (守)

魔法・罠 / なし

「私のターン。私は^{シンメトリ}L R ロールシャッターを召喚。」

はい、不気味なモンスターが出ました。

L R ロールシャッター

3

ATK 1200

「さあ、龍可ちゃん、あなたにはこのモンスターは何に見えますかね？」

とりあえず、妖精だけは言っな。

「・・・・・・・・・・妖精？」

言っちゃったよ、もう。

「ねえ、あの子、ちょっとさっきと違って元気がないんじゃない？」

「ああ、そうだな。」

だから、さっきのは龍可じゃなかったんだよ。
てゆうか、このおっさん最悪だ〜！

見てらんね〜！

あ、古の森を発動した。

「フッフッフ・・・・・全てをあからさまに・・・・・そして決して争う事を許さない世界、さあ・・・・・デュエルモンスターの精霊世界へ」

やばい！

龍可〜！

目を覚ませ〜！

ガチャッ！

クリボンに首輪が取り付けられた。

「やめろ〜！」

まじやめろ！

クリボンが可哀想！！

「超魔神イドでクリボンに攻撃！ バイオレント・エゴイズム！」

このおっさん・・・・・・・・クリボン虐待としてI&I社に訴えるぞ、この野郎！！

「装備された不死のホメオスタシスの効果によりクリボンは破壊されない。だが、不死の世界で永遠の苦痛を味わって頂きましょう。さあ・・・龍可ちゃん、よく思い出すんだよ・・・痛みの中から・・・恐怖の中から・・・あなたの本当の使命を・・・さあ！」

うわー！

龍可の目が死んでる！
分かっていただけ、見てらんねえ！

「あ、あの子・・・・・・・・大丈夫なの？」

大丈夫なわけないだろ。

『クリ〜！』

！？ どうした、クリボー？

『クリ、クリ、クリクリ〜！』

「え？」

『クリクリ〜、クリ〜！』

「・・・・・・・・・・そうか。」

クリボーは彼女とクリボンを助けに行こうと言っている。
どうやら、彼も見えていられないようだ。

一応、原作を進めば何もしなくていいんだが……………

「可愛い相棒の頼みだ、聞いてやるぜ。結衣さん、ちょっと外の空気を吸ってくるな。」

「え？ いいけど。」

じゃあ、彼女を助けに……………

「いってきまー！」

- ステージ -

ステージに着いた俺は龍可とフランクを見つけた。
フランクはぼんやりしている。

どうやら、あいつも精霊世界へ行ってしまったんだな。
ようし、彼女を救うぞ！

「スクラップ……………」

『ちょ、ちょっと……………鉄也あ！』

「な、何だ、ジャンク？」

『何するつもりだったんすか？』

「何って、目を覚ませようと・・・・・・・・」

『殴ってですか?』

「ま、まあ・・・・・・・・」

『彼女はまだ幼い女の子っすよ！ 他にも方法あるでしょうが!』

「そうだった。 すまん。」

危ない危ない・・・・・・・・シグナーは体が丈夫な存在だと思ってしまった。

「鉄也!？」

「あ、遊星。」

遊星がステージにいた。

そっいや、そうだったな。

遊星も様子を見に来てたよな。

「遊星はどうして此処に？」

「ちょっと、様子がおかしいと思ってな。」

「俺もそうだ。」

「しかし一体、どうなっているんだ？」

「さあ。」

ええつと．．．．．確か原作では．．．．．
俺は彼女の痣を見た。

「それじゃあ．．．．．いつてきまー。」

はい、俺の意識が消え始めました。

古の森

「．．．．．」

『鉄也？』

『クリクリ〜！』

「はっ！」

俺の周りに木が沢山．．．．．森だ！
森の中だ．．．．．どうやら俺は古の森の中へ入ったようだな。

「ようし、潜入成功！！」

よっしゃー！！

「しかし．．．．．良い所だな。」

気持ち良いな。

ポカポカしてて空気が爽やかだし、静かだし。

『キューン！』

『ピー！』

あ、精霊だ！

もけもけにマシユマロン、サニー・ピクシーにキーメイス、クリッターやプチテンシにダンディライオン、ロードランナーにワタポンにスポーア．．．．．

「平和だ．．．．．」

うん、平和だ．．．．．一生、此处で暮らしたいよ。

『鉄也！』

『クリクリー！』

「はっ！」

おおっと、いかん！

平和ボケしてる場合ではなかった。

「じゃあ、龍可を探そうか。」

こうして、俺達は彼女を探し始めた。

「龍可ー!!」

『龍可ちゃん!』

『クリクリ〜!』

しかし平和だな．．．．．
この森って争うことを禁じられているんだろ。
争うと天罰が起こる．．．．．
そして、ここはデュエルモンスターの世界．．．．．

「．．．．．前言撤回!」

古の森怖えー!!
まずい．．．．．orz
俺はこの場所から早く出たい!

「助けてくれー! 龍可あああああ!」

という事であった。

そう、さっきの龍可への叫びはあれである。

『助けようとしている人に助けを求めてどうするんですか!?!』

「だってしょうがないもん。この森の恐ろしさに気付いたから、怖くてしょうがないんだよ。ああもう、さっさと龍可を見つけてこの森から出たい!」

『ちよつと、情けないっすよ!』

「うるさい!」

『クリ〜……………』

「ん? どうした、クリボー? ああ!」

『グオアアアア!』

不気味な紫色のモンスターがいた。

「あれは……………超魔神イド!」

あれがいるという事は……………いた! 龍可だ!

サンライト・ユニコーンとクリボンもいる。

『グオオオオオ!』

超魔神イドが龍可とクリボンへ向かって襲って来た。

「きゃああああ!」

「危ない!」

ガシッ！

ズドーン！

「・・・・・・・・・・あれ？」

「大丈夫か？」

危なかった・・・・・・・・俺は何とか龍可とクリボンを抱んで超魔神イドの攻撃から回避した。

「て、鉄也さん？ 何で此处に？」

「簡単に言えば、俺も君と同じく精霊が見えるんだ。 ちょっと妙な感じがしててね、様子を見に行ったらこの森へ来た。」

「あ、ありがとう・・・・・・・・」

「礼なら俺じゃなくてこいつに言ってくれ。 助けに行こうといったのはクリボーだ。」

「ありがとう、クリボー。」

『クリ〜！』

龍可とクリボンはクリボーに向いて礼を言った。

『クリクリ〜！』

『鉄也あ！ あれ！』

「ん？ あれは……………」

ジャンクが指したもの…………それは岩山に埋められた龍であつた。

『龍可、龍可…………私はここだ。』

あれは……………

「知ってる。 私はあの龍を…………エンシェント・フェアリー・ドラゴン！」

そうだ…………あれは伝説の龍、エンシェント・フェアリー・ドラゴンだ！

「思い出したわ。 あの時私は確かに約束した。 この世界を守ると。 でも私は龍亞の声を理由にして、ここから逃げた。」

そうだ。

龍可は精霊の世界を守るとエンシェント・フェアリー・ドラゴンと約束したんだ。

まあ、逃げるのも無理もないよな。

あの時の龍可はまだ幼すぎるし、今の歳でも荷が重過ぎるよ。

「私、一人であなたたちを守ることが恐かったの。 それで私、忘れようとしてこの世界を心に閉じ込めて……………」

『グオオオー！』

うわ、またイドが出た！
空気読め、この馬鹿魔神！

『グオオオオオー！』

「ジャンク、クリボー！」

『クリクリ〜！』

ジャンクは龍可、クリボーはクリボンの前に立った。

『グオオオオオー！』

超魔神イドは俺へ襲ってきた。
って、俺かよ！

「うわぁ！」

俺は避けた。

何で俺に！？

あれか？ 俺が現世でお前を名推理と引き換えに交換に出した
のが気に入らなかったのか！？

お前は俺に不釣り合いだったから、仕方ないじゃないか。
結局、名推理は使っていないがな。
無駄話はともかく……………

「ジャンク、行くぞ！」

俺はデュエルディスクを起動した。

『おう!』

「ダメだよ、鉄也さん! 此処では争いは許されていない。」

「でも、このままだと……………」

シュウウウウウウ……………」

超魔神イドの前に人影が現れた。

「ククク……………」これがデュエルモンスターの精霊世界……………」

やはりフランクが来た!

「この私を取り込むとは、やはりお前はシグナー!」

原作通り、もう龍可の腕には痣がある。

「ほお……………」あなたは村上 鉄也じゃないですか。 何故あな
なたが此処に?」

「そんなのお前と関係ねえよ。」

「ふん、まあいい。 龍可さん、お前の力を欲する者がいる。 さあ、おじさん
と行こうじゃないか。」

ダークシグナーの事だな。
ところでフランク、お前一度、医者に診てもらえ!

「森が．．．．．」

フランクの周りから黒い霧が現れ、森が朽ち果てていく。

「これは．．．．．」

「あいつだ！ あいつの邪悪なる気がこの世界を汚染しているんだ！ このままだと精霊世界が．．．．．」

てゆうか、精霊世界が汚染されるほどって、お前は何処まで腐っているんだよ！

もう、ブラック・ジャック先生でも手に負えなさそうだな。

「どうして．．．私が．．．この世界を守らなければならないの？
どうして皆は私の力を．．．龍亞！ 私を呼んで！ あの時みにいに私を連れて帰って！ 龍亞！」

彼女は龍亞を呼び出そうとしている。

そうだ、あの時は龍亞が彼女を連れ戻したんだったな。

原作知識で知っていたことなんだが、子供がこんなに苦しむ姿なんて見てられないな。

『龍可．．．．．』

「龍亞！」

地面に龍亞が映った。

現実世界に繋がったって事だな。

『だめだよ。　みんなと約束したんだろ．．．．．？』

「龍亞．．．．．」

無意識で言ってるかどうか分からんけど、それはちょっと言いすぎだろ。

約束したのは事実だろうけど、龍可はお前の妹だぞ。

『俺、強くなるから．．．．．龍可はおれが守るから．．．．．だから龍可はその世界を守ってあげて．．．．．』

まあ、龍亞なりの考えだな。
俺も彼女に助言しよう。

「龍可、君は一人じゃない。俺にジャンクやクリボーがいるように、君にはクリボンや精霊たちがいるじゃないか。」

「クリボン．．．．．」

『クリ．．．．．』

「俺で良かったら、手伝ってやるよ。　ジャンクもクリボーも協力してやるさ。」

『そうっすよ！　力になってやりますよ！』

『クリクリ．．．！』

「鉄也さん．．．．．」

あとは、君の気持ち次第だよ。

「私は．．．．．この世界を守る！ クリボンやみんなを守る！」

「デュエル続行だあ！」

あ、そうだった。

デュエル中だったな。

「頑張れ、龍可！」

『何もしなくていいんすか？』

「ああ。」

これは龍可のデュエルだ。

悪いけど、今の俺は見えてやることしか出来ない。

龍可 LP 1500

VS

フランク LP 3700

「リバースカードオープン、ガリトラップ・ピクシーの輪！ 自分フィールド場に攻撃表示モンスターが2体以上存在する場合、相手プレイヤーは私の場の攻撃力の一番低いモンスターを攻撃出来ない！ クリボンをこれ以上攻撃させない！」

「ならば手札から永続魔法、悪意の波動を発動！ フッフッフ．．
．自分フィールド場のモンスターが戦闘で破壊されるたびに相手プ
レイヤーは300ポイントのダメージを受ける。 超魔神イドでサ
ンライト・ユニコーンを攻撃！ バイオレント・エゴイズム！」

超魔神イドはサンライト・ユニコーンに攻撃をするのだが、返り
討ちにされた。

フランク LP 3700 3400

「うう．．．痛いよ、お嬢ちゃん．．．だが、この痛みはお嬢ちゃ
んにも受けてもらうよ。 悪意の波動の効果を発動！」

龍可 LP 1500 1200

「さらに、魔法カード、精神汚染を発動！ モンスターが破壊され
たターンに発動が可能！ 相手の場の魔法か罠を1枚破壊できる！」

バリーン！

ピクシーの輪が破壊された。

「クリボンの守りが！」

「ターンエンドだ！　そして、このターンのエンドフェイズにイドは蘇る！」

超魔神イド

6

ATK 2200

「私のターン！」

「不死のホメオスタシスの効果により300ポイントのダメージを受けてもらおう！」

龍可　LP 1200　900

「私はカードを1枚伏せる。そして手札から魔法カード、癒やしの風、フィールド場のモンスター1体につき、ライフを200ポイント回復する。　ターンを終了。」

龍可 LP900 1500

「フッフッフ．．．本当はね．．．私にとってお前はどうでもいいんだよ。私はお前をただ倒せばそれで良い！ お前も．．．精霊も．．．苦悶するその表情を見させてもらえればそれで良いんだよ！ ウッハッハッハッハ！」

『この野郎！』

『クリ〜！』

「ジャンク、クリボー．．．．．ここは龍可に任せておけ。しかし最低だな、お前は．．．．．」

「超魔神イドでクリボンを攻撃！ 苦悶しろクリボン！」

『ああ！ クリボンが！』

「させない！ 罨カード発動、妖精の風！ フィールド場に表側表示で存在するこのカード以外の全ての魔法、罨カードを破壊する！」

「何！？」

クリボンとサンライト・ユニコーンの装備が破壊され、フィールド魔法である古の森も破壊された。

「互いのプレイヤーはこの効果によって破壊したカード1枚につき

400ポイントのダメージを受ける！」

フランク LP 3400 2200

龍可 LP 1500 300

「装備魔法が消えたことにより、クリボンの攻撃力は300に戻る！」

クリボン

1

ATK 0 300

「300に戻ったところで何になる？ バトル続行！ 精霊を食らいつくせ！」

イドがクリボンに襲い掛かる。

「クリボンのモンスター効果を発動！ 攻撃対象となったクリボンを手札に戻すことで、そのモンスターの戦闘ダメージを0にして、効果の対象になったモンスターの攻撃力分のライフをモンスターの

「ヒヤハハハハハハ!!」

もう、フランクは狂気に走ったのか、何の抵抗もなく笑っているだけだ。

「このままじゃあの人が……お願い、エンシェント・フェアリー・ドラゴン! 怒りを解いて!」

しかし、エンシェント・フェアリー・ドラゴンは既に我を失っており、龍可の声など届きはしなかった。

『ど、どうすりゃいいんすか!?!』

「龍可、デュエルだ! このデュエルを終わらせれば君もあいつもこの世界から抜け出せる!」

「そうか! リバーズカードオープン! オベロンの悪戯を発動! ライフを回復する効果を無効にし、お互いのプレイヤーはその数値分ダメージを受ける! クリボンのライフを回復する効果を無効にする!」

ブオオオオオオ……

巨大な竜巻が起こり始めた。

フランク LP 2200 0

「ヒヤハハハハハ!」

「うわあ〜!」

2人は飛ばされた。

『俺っち達も飛ばされちまうっすよ!』

『クリ〜〜!』

ああ、そろそろ脱出できるな……………ん?

「いや、待てよ……………」

ウィーン……………

俺はデュエルディスクを起動した。

『ちよつ、鉄也! 何してるんすか!?』

「いでよ、ジャンク・ウオリアー!」

『え? うわああ!』

ジャンクは強制的にウオリアーとなった。

『ン・・・・・・・・トアアア!』

俺はジャンク・ウォリアーを召喚した。

ガシッ!

ジャンク・ウォリアーは竜巻に飛ばされないように俺を掴んだ。

ブオオオオオオ!!

「・・・・・・・・ふっ。」

嵐がおさまった。

「サンキュー、ジャンク・ウォリアー。」

シュウウウウ．．．．．

ジャンク・ウォリアーが消え、ジャンクに戻った。

『うわゝゝゝ．．．．．何で此処に残ることにしたんですか？』

「ちょっと聞きたいことがあってな。」

俺は岩山に近づいた。

「おい、エンシエント・フェアリー・ドラゴン！」

『．．．．．あなたは．．．．．さっきの．．．．．』

「大丈夫かー！？」

『え、ええ．．．龍可のおかげで正気に戻ったわ。何故．．．あなたは此処へ残ることに．．．．．』

「ちょっと聞きたいことがあってな。」

俺は左腕を見せた。

「俺の痣．．．．．ちょっと、シグナーとは違うんだが、これが何か分かるか？」

『！？　そ、その痣は．．．．．』

「知っているのか！？」

『あなたが．．．選ばれし者だったのね．．．．．』

「教えてくれ！ 俺のモンスターは何なのか．．．．．」

『あなたは．．．．．そのモンスターを使いこなせるのかしら．．．．．』

「．．．．．」

『あなたのモンスターは．．．不屈の．．．．．戦士．．．．．』

『

「不屈の戦士！」

不屈の戦士．．．．．それが俺のモンスターか。

「ありがとう、エンシエント・フェアリー・ドラゴン。 出来れば
助けてやりたいんだが．．．．．」

『大丈夫．．．．．時が来れば私は開放される。』

「そうか。 じゃあ帰るぜ、ジャンク、クリボー。 またな。」

『鉄也．．．．．あなたは正しき闘志を持つ者だ．．．．．あ
なたならそのモンスターの力を抑えられるだろう．．．．．』

「？」

言っていることがよくわからないんだが．．．．．

じゃあな、エンシエント・フェアリー・ドラゴン。
ダークシグナーとの戦いが終わったらまた会おうな。

シューウウウウ．．．．．

俺の体が光の粒になり始めた。

「はっ！」

ここは．．．．．ステージだ。

「戻ったー！」

ソロモンよ！ 私は帰ってきたー！！

『そんなにはしゃがなくても．．．．あと、セリフと状況が合
ってませんよ。』

もう、古の森なんて行きたくねえよ。

「大丈夫、私は歩けるから。」

「ん？ あ。」

遊星と龍可だ。

「ありがとう、遊星。」

「うん。」

「大丈夫か、龍可？」

俺は彼女に話しかけた。

「うん、もう大丈夫。 ありがとう、鉄也さん。」

「いや、敬語を使わなくていい、鉄也でいいよ。 疲れただろう、帰ったらゆっくり休んどけ。」

『クリクリ』

『クリ〜！』

「……………ありがとう。」

さてつと……………俺はフランクの方へ向いた。

「まったく、嫌な奴だったぜ。」

俺は拳を上げた。

「あ、ああ……………」

フランクはやつれた表情をしている。

「……………」

俺は拳を下ろした。

「殴る価値も無いな。」

ロリコンサディストよ、お前はしばらくこのまま反省している。
俺も結衣さんの所へ戻ろう。

……………
……………

「はああ……………」

『クリ?』

『大丈夫ですか?』

「もう、疲れた」

本当に疲れたよ、今日は。

デュエルして、真紅眼の不死竜に嫌な思い出見せられて、そして
古の森……………

これから精神世界へ行くのは一日一回にしてくれ!

もう、音楽室でお茶とお菓子でもしてのんびりして~~~~

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d
.....

第23話 色々あった長い一日（前書き）

今回はデュエルがありません。
代わりにメタ発言と意外なキャラ達が登場します。

第23話 色々あった長い一日

- Side / 鉄也 -

龍可とフランクの引き分けによって、敗者復活戦は終了した。

原作だと残りの試合は明日の筈だったが、作者の都合で3日後となった。

『ちよつ、何メタな発言をしているんですか？ 作者に怒られますよ。』

「ああ、すまん。 作者は俺にデッキを作り直す時間としてこうしたらしい。」

『なるほど．．．．だからメタな発言はやめろって。』

そついうお前も十分メタな発言になっているがな。
てゆうかストーリーに戻るぞ。
結衣さんが喋り始めた。

「次から試合はトーナメント式になるんだよ。」

「え、そうなのか？」

「うん、今日の勝者達をランダムにシャッフルしてそこからトーナメント式になるんだ。」

それって、中忍試験か？

ナルトの中忍試験のようなやり方だったのか。

あ、MCが喋り始めた。

「Everybody listen! 白熱した大会第1日目はこれで終了だ! そして、これが明後日の試合のマツチメイト! それでは今日の興奮と感動を次の時までto be continued! Good bye!」

ピッ!

モニターにそれぞれの試合が映った。

第9試合 不動 遊星 VS 大寺 慎太郎

第10試合 神風 結衣 VS 黒崎 シュウ

第11試合 村上 鉄也 VS ボマー

第12試合 十六夜 アキ VS 来宮 虎堂

俺の相手は ボマーだと!?

「 シュウが私の相手 」

俺は感じ始めた この試合、激しい戦いになる事を

俺の相手はボマー．．．．．そして遊星は原作キャラではない
相手とデュエルする．．．．．

それでも俺がボマーに勝てば相手はアキ．．．．．
俺というイレギュラーの存在が起こした展開だ．．．．．
少し不安になってきた。

『大丈夫か、鉄也？』

「．．．．．」

いや、俺は決めたんだ。

展開がどうなるかと相手が誰だろうと、俺は戦うと！

「大丈夫だ、ジャンク。お前がいれば心強い。」

『鉄也．．．．．俺っちも、これからも頑張るっすよ！』

『クリ〜！』

「ありがとう、2人とも。」

遊星もそうだ。

相手が誰だろうとあいつが簡単に負けるはずがない。

「じゃあ行こうか、結衣さん。」

「．．．．．」

「結衣さん？」

彼女は冷静にモニターを見ている。

彼女の相手は黒崎さんか。

そりゃあ、あんな相手だと落ち着いて考えないといけないか。

「……………（私の対戦は十六夜とは正反対の方が。そして私の次の相手はシュウ……………シュウは強い。でも、私は目的の為にシュウだって倒してみせる！）」

『結衣！』

「ファルル？ あ、ごめん。じゃあ、私の家に行こう。」

「はい。」

俺と結衣さんはスタジアムを出ようとした。
すると……………

「龍可！ 何で自分から引き分けるんだよ！？」

「負けるより良いでしょ。あのままじゃ、勝てなかったんだから……………」

「2人共、今日は俺が送っていこう。」

お、遊星だ。

「遊星！」

「ん？ 鉄也じゃないか。」

「あ、鉄也に結衣の姉ちゃんだ!」

「鉄也くん!」

遊星だけでなく、龍亞と龍可、そしてじいさんと氷室のおじさんと後……とにかく眼鏡の少年がいた。

「やあ、遊星に龍可。お疲れ様。」

「鉄也、良いデュエルを見せてもらった。まさかジャンク・シンクロンでそこまで強力な戦略が出来るとは思わなかった。」

サンキュー、遊星。

主人公に褒められるなんて夢のようだぜ。

「いやあ、それほどでも。あんたもすげえよ。あのライディング・デュエルは最高だったぜ!」

「ありがとう。出来ればお前とのデュエルも楽しみだ。」

「ああ、俺とデュエル出来るまで負けるなよ。」

「もちろん、そのつもりだ。」

ん〜どうしよう……

このまま進んで遊星に勝ってみようかな?

いや、もし勝ってしまったらどうなるんだ?

遊星とアキのデュエルがないだけでなくジャックの権もあるし。

……………

いや、俺は自分の痣を目覚めさせるために来たんだ。
迷っていることなんてない。

「じゃあ、また今度会おう。 結衣さん……………あ。」

結衣さんは龍可の近くにいた。

「龍可ちゃん可愛い〜!」

結衣さんは龍可に抱きついていていた。

「あの……………ちょっと、苦しいんですけど。」

「良いデュエルだったのに、進出できなくて残念だったわね〜!」

「ま、まあ……………負けちゃったのは仕方ないですから。」

おいおい……………

抱きつきすぎだつて。

まあ、あのロリコンカウンセラーに抱きつけられるよりマシか。
あれ? 彼女は元気だな。

やっぱり、俺の知っている結衣さんだ。

「可愛い〜! 良かったら、お姉さんの家に一緒に来ない?」

「え?」

龍可脳内イメージ

「さあ、おじさんと一緒に行こうじゃないか。」

ガクガクガクガク・・・・・・・・・・

龍可が怖がり始めた。

「え、遠慮させてください・・・・・・・・助けて、龍亞！」

「る、龍可・・・・・・・・大丈夫か？」

龍可の震えに龍亞は気になってきた。

もしかしてあれか！？

今の発言であのロリコンカウンセラーのイメージが来てしまったか？

龍可が危ない！

「結衣さん、龍可が怖がっているから放してあげなよ。」

とりあえず俺は結衣さんを龍可から放させようとした。

「残念．．．．．色々着せてみたいコスプレがあったのに。」

結衣さんは龍可を放した。

「（コ、コスプレ！？）」

今の発言が聞こえたらしく、龍可は慌てて龍亞の方へ走っていった。

オタクなだけにあんたもロリコンだったか！

それにコスプレって言ってたよな！？

何であなたは小学生の女の子が着れるようなコスプレを持っているんですか！？

せめてそれを口に出すなよ！

龍可がビクリしているよ！

逃げろ、龍可！！

この人は俺が何とかするからとにかく逃げろ！

「とりあえず、帰ろうぜ。　またな、遊星。」

「仕方ない．．．じゃあ、またね龍可ちゃん。」

「う、うん．．．．．（この人、ちょっと異常だ。）」

「じゃあ、またな２人共。　お互いに頑張ろう。」

ああ、皆頑張ろう。

あと、遊星．．．．．早く子供達を送って龍可を落ち着かせるんだ！

こうして俺達は結衣さんの家へ行く事になった。

「あ、そうだ。パン買いに行こう。ちょっと良いパン屋さんを知っているんだよね。」

「パンか……………」

そういえばトリップして以来、最後に食べたパンはサテライトで食べたアンパンだったな……………

食べた俺は食中毒になったんだが、なんとか気合で治した。

「いいよ。」

俺達はパン屋へ行った。

・パンデイモニウム・

「着いたよ。」

着いた場所・・・・・・・・それは悪魔の巣窟のような建物であつた。

名前と外見からして明らかに悪魔が住んでそんな場所だつた。

「・・・・・・・・・・・・ここが？」

「そうだよ。此処がいつも私が通っているパン屋、パンデイモニウムだよ。」

パンデイモニウム！？

それがパン屋の名前なのかよ！？

『パン』しかあつてねえぞ！

お化け屋敷の間違いだろ！

「冗談だろ。」

「じゃあ、入ろう。」

「ちょ、ちょっと待て！ 俺は外で待つ！」

「え、何で？」

「え、いや．．．．．ちょっと．．．．．」

「あ、もしかして怖いんだ．．．．．」

結衣さんがニヤリとしている。

「．．．．．（汗）」

止めてくれ．．．．．俺は幽霊とかそついうの苦手なんだよ。
ちなみに訳分からん理屈だが、俺はアンデット族モンスターなら
平気だ。

「じゃあ、入ろう!」

結衣さんが俺の腕を掴んだ。

「やめろおおおお!」

俺は連れ去られた。

「いらっしゃいませ!」

「．．．．．あれ?」

パンデイモニウムの中は．．．．．
良い匂い、きれいな部屋、丁寧に並べられたパン．．．．．
外からの縁起の悪い外見とは裏腹にきれいな店であった。
店の中には壮年なおじさんと20代の女性がいた。
あれ? この2人から何か懐かしい感じが．．．．．

「あ、結衣ちゃん。テレビ見てたよ。進出おめでとう!」

「いやあ、それほども。今日もパン買いに来たよ。」

「今日はどんなパンが欲しいかね……………おや? 君はフォーチュンカップに出てきた村上鉄也君じゃないか。君も進出おめでとう。中々いいデュエルだったよ。」

「いや、それほども。」

「紹介するね、この人がパンデイモニウムの店長、ジャムおじさん、そして助手のバタ子さんだよ。」

「よろしく、ジャムさんにバタ子さん……………」

……………っておい!

明らかに違うアニメのキャラじゃねえか!

懐かしい感じがするかと思ったたらそこだったのか!?

「はは、よろしく。」

なんでこの人達が5D'sの世界に!?

もしかしてとうとうばいきんまんが勝ってしまったのか!?

……………

いや、それはないな。

多分、パラレルワールドみたいな存在だろう。しかしやはり似てるな。

高橋さん風になっているのに、違和感がない。

「アン、アン！」

子犬が俺の足元にいた。

もしかしてこいつの名前は……………

「あ、これがわしのペット、チーズじゃ。」

やはりな。

この人達がいるという事はもしかしてあいつもいるのか……………

……………

「……………」

いや、流石にそれは無いな。

いくらなんでも無理がありすぎる。

「君達は友達だったのか。」

「うん、最近の事だけだね。 ジャムおじさん、アンパンやカレーパンありますか？」

「もうすぐ出来上がるから待っておくれ。 あ、そうだ。 期間じゃないが、特別に2人にクリーム入りメロンパンを作ってあげよう。」

「え、あの期間限定のメロンパンですか？ ありがとうございます！」

俺達はこの店で座って待つことにした。

チーズは結衣さんに撫でてもらっている。

「……………良い店だな。」

外見以外はな。

「でしょう、ここは良いパンが沢山売ってあるんだ。」

「しかし、なんで悪魔の居城を意味するパンデイモニウムなんだよ？」

「ジャムおじさんによるとね、外見と中身のギャップを入れたら面白そうだからと言ってたよ。」

「ギャップが目的!？」

「うん。」

謝れー！

こんな無茶苦茶な設定を考えた作者、あのアニメが好きな子供達に謝れ！

「おいおい、小さい子達は怖くて中に入れないだろ！」

「いや、外でも良い匂いがするから子供達は怖がらずに入れるんだよ。」

「匂いで？ 始めから外見をパン屋らしくすればいいだろ。」

「そうすると面白くないだつて。」

「そういう理由で!？」

「うん。ちなみに店の外見は私がデザインした。」

「え、マジ!？」

「うん。結構面白かったよ。私がこの人達と友達になった理由もこれよ。」

へえ、結衣さん、あんた凄いな。

しかし、あんたはパン屋の外見に何の躊躇もなかったのかよ。

- 2時間後 -

「出来たよ、結衣ちゃん。」

バタ子さんがパンが入った袋を持ってきた。

「ありがとう。」

「あ、いくらですか？」

俺は財布を取り出そうと、手をポケットに入れた。

「いいんじゃないよ、わしのおごりだ。」

「え？」

「結衣ちゃん、フォーチンカップを頑張ってたまえ。もちろん、鉄也君も応援するよ。」

「ありがとうございます！」

「あ、鉄也君。ちょっと耳を貸しなさい。」

え？

ジャムおじさんが小声で話し始めた。

「鉄也君、君はマーカー付きだけどおじさんは君が良い人だと良くわかるよ。人々からの差別は厳しいけど、君もいつか報われるよ。良ければいつでもここへパンを買いに來たまえ。」

「！！」

ジャムおじさん……作者が無茶苦茶な設定で考えたキャラとはいえ、あんたは俺の知ってる子供達が大好きなジャムおじさんだー！

ようし、ダークシグナーとの戦いが終わったらいつでもパンを買いに行かせてくれー！

「あと、結衣ちゃんと仲良くやってくれ。彼女にもいい友達が出来たみたいだし。」

「はい、ありがとうございます！」

「じゃあ、君も頑張りたまえ。」

俺達は外へ出始めた。
行こう、クリボー、ジャンク。

『良かったっすね。』

ああ。

『クリ〜。』

「ちょっと君、小さな精霊君。」

『クリ?』

「君は鉄也君をいつまでも見守りたまえ。」

『クリクリ〜! (もちろん!)』

結衣の家

「じゃあ、お邪魔します。」

「どうぞ。　じゃあ、おやつでも食べよ。」

「ああ、ありがとう。」

俺達はパンが入った袋を開けた。

袋の中には色々なパンが入っていた。

アンパン、食パン、カレーパン、クリームパン、コロネなどが入っていた。

「じゃあ、メロンパン食べよう。　出来立てだから早いうちに食べよう。」

メロンパン．．．．．　そういえば期間限定だと言ってたな。

一体、どんな味なのか．．．．．

それじゃあ．．．．．

「「いただきます!」「」

パクッ!

「ん?」「

これは．．．．．

ポワ~~~~ン

「旨い!」「

パクパクパクパクッ!

旨い！ 旨すぎるぞ！

こんなに旨いパンは初めてだ！

「でしょ？ これは期間限定なんだけど特別に作ってもらってよかった。」

うーん、これで真紅眼の不死竜と古の森によって出来たストレスが解消できた。

ありがとう、ジャムおじさん。

あんたのおかげで俺は元気100倍だぜ！

でもパンデイモニウムはやはりちよつとな・・・・・・・・

『クリ〜？』

「お、クリボー。 お前も食べるか？」

『クリ〜！』

「そうか。 じゃあ、あ〜ん。」

俺はパンを千切って、クリボーの顔に押し込んだ。

モグモグモグモグ・・・・・・・・

クリボーはパンを食べ始めた。

当然だが、クリボーはちゃんと口がある。

毛むくじやらだから見えないだけだ。

なかったら喋れないだろ。

『クリクリ〜?』

クリボーは喜んでいる。

「お前も気に入ったか。」

久しぶりにパンが食べれて良かった。

「あれ? 今、クリボーが……………」

「え? ああ、クリボーは不完全だが実体化出来るんだよ。ほら。」

なでなで……………」

俺はクリボーを撫でた。

『クリ〜』

「へえ……………ちょっと、私も触っていい?」

「え? 良いよな、クリボー。」

『クリクリ〜!』

クリボーは結衣さんの方へ行つた。
結衣さんはクリボーを抱き始めた。

「うわ〜〜モフモフしてる〜。」

『クリリ〜〜〜〜』

本当にクリボーは可愛いよ。

スウ……………

「あれ？」

結衣さんの手がクリボーをすり抜けた。

「あ、たまにすり抜けてしまうんだ。だから不完全なんだよ。」

「あ、そうかあ。」

いつか完全に実体化できると良いな、クリボー。
とりあえずおやつの後、ゲームでもした。

「また負けたー！」

「本当にこの部屋を使っているんですか？」

俺はデッキを調整したかったので、場所を貸してもらおうとしていた。

「うん。私以外、誰も使わないし、デッキを調整したいならプレイヤーの方がいいでしょ。」

「じゃあ、私もデッキを調整するから。」

「ああ、部屋を貸してくれてありがとう。」

結衣さんは彼女の部屋へ行った。

「さてっと……………」

俺は貰ったカードを眺め始めた。

ガード・ブロック・・・ダーク・バースト・・・ディストラクション・ジャマー・・・激流葬……………お、ダーク・バーストはありがたい。

ジャンクをサルベージ出来る戦士の生還を妨害をする事が出来るアンデット・ワールドの影響を回避できる。

これは入れておこう。

他には……………ん？

「ジャンクカード!？」

俺が見たカード・・・ジャンク・シューター、ジャンク・ストライカー、ジャンク・ガードナー……………全部シンクロモ

ンスターであつた。

「ジャンク．．．．．バーサーカー？」

俺が見たカードは全く知らないカードばかりだった。

もしかしてOCGする予定のカード、またはオリジナルカードか？
まあ、いいか。

俺はテキストを読んだ。

「なかなかいい効果だな。 ジャンク、お前の新しい力が見れるぜ。」

『え？ 本当っすか？』

「ああ。 今から改良するぜ。」

『楽しみにしてるっす！』

ありがとう、黒崎さん。

あんたのおかげでデッキを強化できるぜ。

- Side End -

- Side / 結衣 -

私の次の相手はシュウ．．．．．
正直、私は勝てるかどうか自信がない。
でも、勝たなければ次へは進めない！

「結衣．．．．．こんな機会なんて滅多にないんだ。 君は普
通にフォーチュンカップを楽しみたまえ。 復讐なんて、諦めるん
だ。」

ドン！

ふざけないで、シュウ．．．．．
あなたに何が分かるの！？
私は写真が入ったフレームを手にとった。

「兄さん．．．．．」

許さない・・・・・・・・私はあの女を許さない！

『結衣・・・・・・・・俺も力になる。一緒に頑張ろう。』

「・・・・・・・・ありがとう、ファルル。」

私はカードを組み始めた。

私は負けない！

見てなさい、シユウ。

私はあの魔女を倒すためなら強くなってあなたさえ倒してみせる！

「待っていないさい・・・・・・・・十六夜 アキ！」

- Side End -

- Side / 鉄也 -

これを入れて、これを抜いてつと・・・・・・・・

「出来た！」

『出来たんすか？』

「ああ、大分強化出来た。これならいける！」

『本当！？俺、頑張るっすよ！』

ああ。頼むぜ、ジャンク。

「う~~~~ん……………」

俺は背伸びした。

「腹減ったな。今、何時だろう……………」

時計は6時を指していた。

「そろそろ夕飯にしよう。」

俺は部屋を出た。

トントン！

「結衣さん！」

俺はドアをノックして声をかけた。

「何、鉄也？」

「そろそろ夕飯の支度でもしましょうよ。」

「そつえばお腹が空いてきたわね。」

俺達は台所へ行つた。

「別に鉄也は手伝わなくていいよ。」

「いや、せっかく泊まらせて貰っているんだし、これぐらいしない
と。」

「そう。じゃあ、その野菜を切ってくれる？」

「わかった。」

俺は包丁を持った。

ズバツズバツズバツズバツ！

俺はキャベツを素早く切つた。
ちなみに効果音通り、並みの切り方ではない。

「へえ………凄いじゃない。中々器用ね。」

「いやあ、それほどでも。」

こうして俺はホイコーローを作つた。
結衣さんは味噌汁を作つた。
そしてテーブルに食事が揃つた。

「いただきます！」

パクッ！

「へえ．．．．．中々いけるじゃない。」

「気に入ってくれてありがとう。」

俺、ホイコーローって好きなんだよね。

味噌汁も好きだ。

現世では結構作ってたよな。

トリップして以来、サテライトでは全く食べられなかったから嬉しい。

「この前作ってくれた朝食も美味しかったよ。あなたは料理が上手ね。」

「まあ、俺は普段、一人で料理してるからな。」

本当、料理の腕が鈍ってなくてよかった。

「へえ．．．凄いね。ところで鉄也はデッキの調整はどうなの？」

「俺か？ デッキはかなり強くなった気がする。次の試合で試してみたいぜ。まあ、念の為にもうちょっと調整しようかな。結衣さんのデッキの調子は？」

「うーん、もうちょっと手入れが必要かな？」

「あはは、楽しみにしてるよ。」

結衣さんと黒崎さんには住まいを貸してくれて感謝してるよ。
俺のサテライトでの生活で背負っていたコンプレックスが今はもう感じない。

ダイモンエリアで結衣さんが来なかったら今の俺はどうなっていたか．．．．．

あなたと会えて良かったです、結衣さん。
ありがとう。

こうして話し合いながら夕飯は終わった。

「ご馳走様でした。」

- Side End -

- Side / 結衣 -

ザァー．．．．．

夕食を終えた私は鉄也と一緒に皿を洗っている。

キュッ！ キュッ！

「手伝ってくれてありがとう。」

「これぐらいやれますよ。」

ありがとう、鉄也。

デュエルに付き合ってくれたり、一緒にゲームをしたり楽しかったよ。

そして試合でカードを貸してくれたり、応援してくれたりして色々ありがとう。

特に一番嬉しかったのは……………

「結衣さん、色々ありがとう。」

「え？」

鉄也がいきなり喋り出した。

「あの時、結衣さんがダイモンエリアへ来なかったら俺は死んでいたかもしれない。助けてくれて本当にありがとう。」

「え？ まあ、それは……………」

「それだけじゃないんだ。俺は買い物に付き合ったり、デュエルしたり、ゲームしたりして料理とか一緒にしてさ……………辛い思いを背負っていた俺の気が晴れて楽しかったです。」

辛い思い？

そつえばマーカーを付けられているよね。

鉄也は色々大変だったのね。

「だから、あの時から俺はあなたに感謝しています。」

「・・・・・・・・・・私も言っておきたい事がある。」

「鉄也、私もあなたに感謝してるよ。」

「ん？」

「私に・・・・・・・・ジャンク・シンクロンをくれて本当にありがとう。私にとって必要なタイプのカードだったし、あのカードがなかったらあの状況で勝てる自信がなかったかもしれない。本当にあなたに感謝しているわ。」

「ああ、気に入ってもらえて嬉しいです。ジャンクはいつでもあなたの力になりますから、カードを是非、よろしく。」

「うん・・・・・・・・・・じゃあ、これからも使わせてもらうね。」

本当にありがとう。

でも、違う・・・・・・・・私が言いたい事はこれだけじゃない。

「あ、そういえば何故結衣さんはダイヤモンドエリアに？」

「！」

スルツ・・・

「危ない！」

パシイ！

鉄也は私が落とした皿を掴んだ。

「危ない危ない．．．．．割れるところだった。」

「ま、まあ．．．．．ただ通りすがっただけだったんだけど。
あなたを見つけたら助けを呼ばずにはいらなかったから。」

．．．．．私があそこへ行つた本当の理由は．．．

「あ、そうでしたか。それじゃあ、お互いに次の試合も楽しく頑張りましょう。黒崎さんは手強い相手になるだろうですけど、応援します。」

「．．．．．うん、お互い頑張ろう。」

楽しく頑張ろう．．．．．

ごめんね、鉄也．．．．．私にはそれだけは受け入れられない。

- Side End -

- Side / 鉄也 -

ザァー・・・・・・・・・・・・・・・・

「ふう〜〜・・・・・・・・・・」

俺は今、風呂場にいます。

風呂まで貸してくれて結衣さんに感謝しています。

結衣さんは既に入りましたので、俺の入浴時間は長くてもいいと思います。

『クリクリ〜〜!』

「クリボー! いつの間に?」

『クリクリ〜〜!』

「お前も一緒に入りたいのか。」

『クリ!』

いいぜ、相棒。

「はは・・・・・・・・じゃあ、まずはシャンプーをしないと。目を
を瞑れよ、クリボー。」

『クリリ〜』

クリボーは目を閉じた。

ゴシゴシゴシゴシ．．．．．

俺はクリボーの毛にシャンプーをかけ、洗ってから水を流した。
毛むくじゃらだから丁寧にしておかないとな。

「はい、終わったよ。」

『クリリ〜』

「じゃあ入るぜ、クリボー。」

俺達は風呂に浸かった。

「ああ〜〜〜気持ちいい。」

俺は左腕を眺めた。

痣はいまだに覚醒していない。

俺が自分の痣の力に気付いたのはアキとデュエルした時だったな。
俺はまたアキとデュエルする事になる。

まあ、その前にボマーに勝たなければならない。

エンシエント・フェアリー・ドラゴンは俺の痣は不屈の戦士だと
言った．．．．．

不屈の戦士．．．．．もしかしてあのモンスターか！

「あのモンスターか．．．．．悪くないな。」

そしてこの痣は元々少年の物だ。

あの男が少年を狙っていたのはこの痣を目的にしていたから・・・

・・・

少年よ、お前に一体何があつたんだ？

お前の使命は何なのだ？

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

『クリ〜？』

「いや、大丈夫だ。俺はこれからも頑張つて強くなるから。」

『クリリ〜！』

パシヤッ！

「うわぁ！」

クリボーが俺に水をかけた。

「やったな〜〜〜〜〜〜」

『クリ・・・・・・・・・・』

「ほ〜ら、仕返しだ！」

バシヤッ！

『クリクリ〜！』

バシャッ！ バシャッ！ パシャッ！

「はは、これでもくらえ〜！」

『クリクリリ〜！』

安心しろ、少年。

俺はこの世界でも生きていける。

それに俺は一人じゃない。

ジャンクやクリボーが付いてるし、俺には新しい友達が出来た。

俺は真実を掴んでみせる。

そして、お前の為にも戦つてやる。

俺は世界で希望を掴んでみせる！！

- Side End -

To Be Continued

第23話 色々あった長い一日（後書き）

次回は出来れば番外編となります。

もちろん、2月のイベントをやるつもりです。

まあ、間に合えばの話ですが。

制限時間残り2日間．．．．．俺は間に合うのか！？

ちなみに、鉄也は現世での原作知識と放送がクラッシュタウン編完結までしかなかったので、ジャンク・バーサーカーの原作知識は持っています。

では、次回をお楽しみに！

作者はバレンタインスペシャル番外編を書いたのだが正直、バレンタインの割にバレンタインスペシャルの番外編です。

2月14日から少し遅れていますけどせっかく書いていたので、投稿しました。

そういう細かい所は気にしないでください。

2月以内ならセーフです、多分。

ちなみにこの小説のアクセスPVが20万を超えました！

読者さん達に感謝しています。

これからもThe Power of Followsをよろしく
お願いします。

では、番外編をどうぞ。

作者はバレンタインスペシャル番外編を書いたのだが正直、バレンタインの割に

Side / 鉄也

ボトツ

自動販売機から温かい飲み物が出てくる。

プシュー

ゴクゴクゴクゴク

「ぷは~~~~やはり冬は寒いな。」

2月13日 俺は寒い外にいる。

本来なら結衣さんの家の中でのんびりしたいんだが、結衣さんから夕方まで家に入らないでと言われた。

まあ、理由は明日があの日だからな。

結衣さんは台所で忙しいので、俺は一日中、外で過ごす事になった。

ちなみにデュエル・オブ・フォーチュンカップの次の試合は明後日となっている。

しかしこれはおかしい。

俺が収容所から出て以来、まだ1ヶ月も経っていない。

そして俺が収容所にいた日は6月だ。

あそこで誕生日も祝ってもらったしな。

何故時間帯がおかしいかって？

それはこれが番外編だからだ。
つまり、この話があっても次回からはなかったという話になるのだ。

『そろそろメタな発言はやめましょうよ。』

「そうだな。じゃあ読者さん達、今まで読んだ事を全部忘れてください。」

『いや、それも無理でしょ。』

とにかく俺は散歩を続けた。

S i d e E n d -

S i d e / 結衣

さてつと・・・・・・・・材料が並んだ。

「それじゃあ、始めようか。」

私はチョコレートを切り刻み始めた。

『クリクリ』

クリボーが私の所に浮いて来た。

「あ、クリボー。手を貸してくれてありがとうね。」

『クリ?』

ちなみに昨日、私は鉄也からクリボーのカードを貸してもらったんだ。

『結衣……彼にチョコレートを渡すのか?』

「……………うん。」

『お前はいいのか?』

「……………さてつと、次は……………」

私はファルルが聞いた事を無視し、チョコを溶かして容器に流し込み、そして冷凍させた。

- Side End -

- Side / 鉄也 -

「ううゝゝ」

寒い寒い．．．．．

なんでこんなときに限って冬の番外編なんだよ！

せめて2月で夏だという設定にしてくれよ、この馬鹿作者！

あ、メタ発言になった。

まあ、結衣さんにはコートと手袋を貸してくれて感謝してるよ。

サテライトから脱出する時は全く用意してなかったからな。

俺の散歩が続く．．．．．

俺が歩く周りの店にはやはりチョコレートが売ってある。

それに、色々なキャッチコピーが載った看板がある。

- 愛する者に甘い幸せを -

- 恋の思いをお菓子に込めて．．． -

- 大好きな人へプ・レ・ゼ・ン・ト？ -

- 2人だけの甘い世界へ -

- 乙女達よ、成長への一步を踏み出そう -

- 2月14日に愛のおまじないを -

- さあ、愚かな人間共よ．．．愛さえ要らない絶望を味わおうではないか。 -

- LOVE? FOR? EVERYONE -

- 告白の準備を楽しもう。 -

っておい！

一部だけ嫌なキャッチコピーが入ってたぞ！

誰だー！？

愛の日に不吉なキャッチコピーを書く奴は誰だー！？

せつかくの明日への気分を壊す気かー！！

『そつえば明日って何なんすか？』

「え？」

ジャンクが意外なことを聞き出した。

「ジャンク．．．．．お前は知らないのか？」

『ごめん、色々ありそうだけどあまり意味が分からなくて．．．．．』

まあ、知らない奴もいるって訳だな。

「明日は2月14日。バレンタインデーだ。」

『バレンタインデー？』

「ああ、その日に女の人が男の人に日頃の感謝やら何やらの気持ちを込めてチョコレートを送る日なんだ。」

『へえ．．．チョコレートに意味があるんですか？』

「まあ、チョコは愛情の印みたいなものかな。甘いお菓子だからな。別にチョコレートじゃなくてケーキやクッキー、あるいは花を送る人もいるな。」

『なるほど。つまり愛って意味ですね。』

「『愛』じゃない、『愛情』だ。」

個人的に絶対、愛情のほうが正しい！と思う俺である。

『じゃあ、鉄也はそのチョコを貰った事あるんですか？』

「まあ、現世ではな。」

俺は現世でチョコレートを貰っているぞ。

学生時代で毎年、友人からチョコレートを1個か2個貰ったよ。もちろん、義理だ。

そして家族では母さんや従妹の美央姉さんから貰っている。まあ、トリップした今の俺にはそういう機会などないな。

『じゃあ、結衣さんはその感謝している男の人にチョコレートあげるんですね。』

「そういうこと。だから結衣さんはチョコレートを作る為に一日中、頑張つて……ん？」

そういえば結衣さんがチョコレートを渡したい人って一体、どんな人だろう？

『どうしたんすか？』

「いや、結衣さんが渡したい人ってどんな人だろうと思ってな……」

『なるほど……どんな人でしょね？ 凄い人かな？』

「まあ、良い人だという事だな。」

俺は散歩を続けた。

「お、パンデイモニウムだ。」

俺は悪魔の居城、パンデイモニウム（パン屋さん）へ入っていった。

「こんにちは。」

「おや、鉄也君じゃないか。」

「どうも、ジャムおじさんにバタ子さん。」

「今、お客さんへのバレンタインサービスチョコを作っているんだ。」

「へえ〜」

「あ、鉄也君。ちょっと手が必要なんだけど、手伝ってくれる？」

「う〜ん、いいですよ。」

まあ、番外編だからそれくらい良いだろう。

「……………あ、そうだ。」

俺は良い事を思いついた。
こうして俺は夕方までチョコ作りを手伝った。

- Side End -

- Side / 結衣 -

もう、夕方になっている。

作り始めてかなりの時間が経った。

そして……………

「出来たー！」

出来た……………明日へのチョコレートが。

「ほら、クリボー。見てみて。」

『クリリ？』

私はチョコレートをクリボーに見せた。

『クリクリ』

どうやらクリボーも気に入ったようね。

あとは箱に入れてつと……………

「あ、ありがとう、クリボー。明日、あなたにもあげるね。」

『クリー！』

トントーン！

「あの〜結衣さ〜ん。夕方ですし、もう入ってもいいですか？」

あ、帰ってきたんだ。

「あ、鉄也。入っていいよ。」

ガチャッ！

「ふうふう寒かった。」

「おかえり。」

「どうだ、チョコレートは出来たか？」

「うん、ばっちり。」

「へえ、誰にあげるんだ？」

「あなたと関係ないでしょ。」

「まあ、そうだな。じゃあ、クリボーを返してくれるか？」

「あのー、もう少し持たせてくれない？」

「え？ まあ、試合は明後日だし、いいか。」

「ありがとう。」

- Side End -

- Side / 鉄也 -

「ふう……………」

こうして2月14日となった。

結衣さんはチョコを届けるために家にはいない。

別にやることはないのでチョコを貰う確立0%の俺は今、ジョギングをしている。

しかし寒い！

2月の寒さじゃねえ！

作者が住んでいるところだと寒い？

知るかそんなの！

それに何で今に限ってバレンタインなんだよ！

投稿日を見ればもう過ぎてるじゃねえか！

『頑張れ〜鉄也〜！ 後、もう少しだ〜！』

「俺は平気だ。 てゆうか、ただ浮いてるだけで余裕に移動出来る精霊が言っつなよ……………」

気が付いたら俺はデュエルスタジアムへ着いた。

「ようし、休憩だ。」

俺はスタジアムの中へ入った。

『勝手に入っていいんすか？』

「大丈夫、ちよつとだけだ。」

スタジアムの中へ入った俺は観客席に座った。

俺はベルトのデッキケースを開き、ジャンク・シンクロンのカードを眺めた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

見てるか、少年？

俺は未来を掴むために戦うことを選んだ。

だから、今の俺はこのフォーチュンカップに懸ける。

大丈夫。俺はお前を恨んでない。

俺は記憶が戻って以来、これを使命として受け入れると決めた。
一生懸命、頑張るからこれからの展開を見てくれ。

「ジャンク・・・・・・・・これから頼むぜ、相棒。」

『おう！俺っちに任せな！』

「あ、こんな所にいたんだ、村上クン」

「ん？」

背後から見覚えがある声が・・・・・・・・

「黒崎さん！」

「おはよう、村上クンと……ジャンクだっけ。」

「何で此処に……」

「いやあ、暇だったからさ。明日は試合だし何故か此処に来たくなっただよね」

まあ、俺と同じ理由だ……

「それはともかく、今日はバレンタインデーだね」 君はチョコレートとかゲットしたかい？」

「いや、全然。俺がどれくらい女性の人口が少ないサテライトにいたと思う？」

「あ、ごめんごめん。そんなつもりはなかったんだけど。」

「まあ、別にいいよ。黒崎さんは貰ったんですか？」

「ん？ 僕は貰ったよ、彼女からチョコレートケーキを。」

「へえ、彼女がいたんですか。」

「まあね。羨ましいかい？」

「いや、そこまでは……」

「はははは……大丈夫 君にも春が来るよ。」

春か．．．．あいにく俺はそういうのは苦手なんだよな。
黒崎さんは小箱を手に持っていた。

「じゃあ、チョコレートケーキを君にあげるね。」

「え？ いや、せっかくあんたの彼女が作ってあげたケーキを俺が
食べるわけにはいかないでしょう。」

せっかくのバレンタインデーだから自分だけで食べなよ。

「違う違う．．．．ボクのは家においてあるよ。 このケーキ
は彼女が君に作ってあげたんだよ。 彼女はボクに君へ届けてと言
ったんだよ。」

え？

俺へのバレンタインケーキ？

「．．．．．もしかして以前、あんたが言っていた俺の存
在を知っている人は．．．．．」

「そう、彼女だよ。」

なるほど．．．．少し情報が手に入ったな。
使えるかどうか分かんが、番外編だから次の話でその記憶が消
えてしまいそうだけだな。

「じゃあ、彼女の名前は．．．．．」

「それは秘密だよ。」

「いいじゃないか、教えてくれても。」

「駄目駄目、ネタバレになっちゃうから駄目だよ。」

ちくしょう、番外編め！

「では、ケーキを楽しみたまえ。それじゃあ、明日の試合、お互い頑張ろう、村上くん」

「はああ．．．．．じゃあ、また明日。」

彼は去って行った。

一体．．．．．誰なんだ、俺を知っている人は？

「．．．．．」

『いいんすか？　せつかく情報を手に入れそうなのに。』

俺は箱を開けた。

中にはチョコレートケーキと小さいフォークが入っていた。

「別にいいさ、番外編だから仕方ないし、そのうち分かるさ。頂きます！」

パクッ！

俺はチョコレートケーキを味わった。

おお．．．．．

『そうね、今は忙しいし、それに今回は番外編だからまだ予定を決めるのも無理ね。』

「そうか、じゃあ仕事を頑張ってね」

『ありがとう、シュウ。シュウも私が作ったチョコケーキを早く食べてよね?』

「わかってるよ。君が作ったケーキなら必ず食べるさ。」

『じゃあ、明日の試合頑張ってね。応援してるから。』

「ありがとう。じゃあ、またね」

プツッ!

「.....」

結衣がボクの相手が.....
悪いけど、結衣.....君の為にもボクは手加減しないよ。

「さ、帰ってケーキを食べてデッキを調整するか。」

- Side End -

- Side / 結衣 -

私はチョコレートが入った箱を持って病院へ行った。

- 病院 -

『クリリ〜〜』

「ごめん、クリボー。ちょっと、カードに戻ってくれる？」

『クリ〜』

クリボーは私のポケットの中に入っていた。

「あの・・・神風^{かみかぜ} 士郎^{しろう}に会いたいんですが。」

「どうぞ、こちらへ。」

「はい。」

私は看護婦さんについて行った。

ガチャッ！

「先生、失礼します。」

病室の中、車椅子に座っている青年がいる。

「兄さん……………」

「……………」

兄は何も答えてくれない。

「……………先生、兄の意識はまだ戻らないんですか？」

「すまない、結衣ちゃん。色々手を尽くしているんだが、君のお兄さんはまだ植物状態のままだ。」

「……………ねえ、兄さん。私、今日の為にチョコレートを作つてあげたんだよ。」

「……………」

兄は何も答えてくれない。

「だって、今日はバレンタインの日だから……………いつも私の面倒を見てくれる兄さんに感謝しているから……………いつも私の側で笑ってくれる兄さんが好きだから……………」

『結衣……………』

兄は私を見る事もなく、何も喋る事はなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・お願い・・・・・・・・早く目を覚まして、兄さん・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「兄さん・・・・・・・・明日、試合があるから・・・・・・・・兄さんを傷つけたあの女を懲らしめておくから・・・・・・・・私、頑張るね。」

私はチョコレートが入った箱を兄の部屋に置いた。

私は病院を出た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『クリクリ〜〜？』

クリボーが私に声をかけた。

私のことを心配しているようだ。

「ううん、私は大丈夫よ。心配してくれてありがとう、クリボー。」

『クリリ〜〜』

「あ、あなたにもチョコレートを作ってあげたからあげるね。」

私はポケットから袋を取り出した。

「はい、クリボー。」

袋の中にはチョコレート・・・・・・・・クリボーの形をしてミルクチョコレートで目や足が描かれていた。

私がクリボーを借りたのはこの子の形をした容器を作るためだったから。

『クリクリ〜！』

「はい、あ〜ん・・・・・・・・」

私はクリボーの口に押し込んだ。

モグモグ・・・・・・・・

『クリクリ』

クリボーは喜んでいる。

「気に入ってくれてありがとう、クリボー。」

私の気分が少し落ち着いた。

『結衣．．．．．俺もお前と共に戦う。』

「ファルル．．．．．」

『正直、俺は復讐という目標は好きではない。だが、俺はお前の為ならいつでも力になってやると決めた。だから、いつでも俺を使え。』

「ありがとう．．．．．」

『その代わり、約束しろ。復讐を終えたらいつものお前に戻ると。』

「うん、約束するね．．．．．」

『じゃあ、帰ろうか。』

「そうね、デッキを調整したいしね。」

私がお家に帰ろうとしたその時．．．．．

「「あ。」

誰かさんと顔が合った。

- Side End -

- Side / 鉄也 -

「「あ。」

「結衣さん……………」

「あ、鉄也。」

帰ろうとした俺は結衣さんと顔が合った。

「クリボーを貸してくれてありがとう、鉄也。」

結衣さんはポケットからクリボーのカードを取り出し、俺に渡した。

「あ、返してくれてありがとう。 どうだった、チョコレートは？
受け取ってくれた？」

「．．．．．うん、彼は喜んで受け取ってくれたよ。」

そう言っていた結衣さんだったが、彼女の表情は．．．．．
少し暗かった。

「．．．．．大丈夫？」

「ううん、気にしないで。 ちょっと疲れただけだから。」

「そうですか。 じゃあ．．．．．疲れたときの．．．甘いものは
どうですか？」

「え？」

「ほ、ほら．．．．．作ったんです。」

俺はポケットから箱を取り出した。

「え、私に？ それってちよつと．．．．．」

おかしいですね、分かります。

「結衣さんに世話になってますから．．．俺はチョコレートを作
ったんです．．．．．良かったら受け取って下さい。」

俺はパンデモニウムでチョコレートを作っているのを手伝って

いたら、俺は感謝の気持ちとして結衣さんへ義理のチョコレートを作りました。

俺は何やってんだろう．．．．．日本のバレンタインで男が女の人に渡すなんて事はおかしいかもしれない。

でも、何故かやる気が俺に回っていました。

とにかくこれだけは言わせてもらおう。

俺はおかしくありません。

外国では男女問わずチョコレートを渡す国もあります。

仮におかしいと思う読者さん達がいるのなら、おかしいのは俺ではなく作者の方だと思ってください。

しかし義理とはいえ、チョコレートを渡すのは恥ずかしいです。

俺は今、全国のバレンタインチョコを渡す側の恥ずかしがり屋の女性の気持ちが理解してきたような気がします。

「．．．．．」

結衣さんは少し混乱しているような表情になっている。

いいですよ．．．．．笑ってもいいですよ。

「．．．．．ありがとう。」

「え？」

結衣さんは俺の作った義理チョコを受け取った。

「ありがとう、鉄也。頂くね。」

「結衣さん．．．．．」

良かった．．．．．笑われませんでした。

俺の気持ちがあつとした。

「じゃあ、明日の試合、お互いに楽しく頑張らしよう。」

「うん、出来れば決勝で会おうね。」

．．．．．ごめん、結衣さん。

こんな事を言ってる俺なんだが正直、俺のフォーチュンカップで
の本当の目的は自分の力を引き出す事なんだ。

そしてこれから起こり始めるシグナーとダークシグナーの戦いや
イリアステルの陰謀だけでなく、黒き痣．．．少年の真相．．．あ
の邪神の男．．．．．この世界は原作知識では物足りない事が起
きている。

俺は一刻も早く真相を掴みたい．．．掴めば俺の使命が分かる。

そのために俺は楽しくデュエルする余裕なんてないんだ。

悪いけど、分かってくれ。

751

「（チョコレートをありがとう、鉄也。でも、悪いけど．．．
．私はフォーチュンカップで楽しいデュエルという目的なんてない
の。ただ、憎らしいあの女を倒したい．．．．．それしか
ないのよ。）」

こうして俺たちは結衣さんの家へ帰りました。

- Side End -

- Narration -

こうして2人はお互いの心の中では違う目標が隠されているとも知ら、明日へと準備を整えた。

そして翌日・・・・・・・・・・

『Everybody Listen!! いよいよ大会2日目だー！ 泣いても笑っても、今日でキングへの挑戦者が決定する！ それでは、準々決勝の始まりだー！』

フォーチュンカップ2日目が始まった。

- Side End -

T
O

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.

作者はバレンタインスペシャル番外編を書いたのだが正直、バレンタインの割に

正直、今回は文章が下手だったと思います。

笑っていいです。

笑いたければ笑っていいです。

でも、出来ればその感情を感想に書かないでください。

第24話 準々決勝開始！ それぞれの目的！（前書き）

久しぶりにデュエルを書き入れた気がします。

第24話 準々決勝開始！ それぞれの目的！

- Side / 鉄也 -

「遊斗君！」

！？

俺の前には白銀の髪をした少年がいる。

「う、うああ．．．がはっ．．．．．」

彼の胸には血が出ていた。

お、おい．．．．．大丈夫か！？

「遊斗君！」

！

今の声は．．．．．俺だ。

ダダダッ！

俺は彼の方に走り始めた。

「遊斗．．．．．遊斗君！！」

あの少年は倒れてしまった。

「誰か．．．．．誰かああ！！」

何だ．．．．．いったい何があつたんだ！？

「はっ．．．．．！！」

．．．．．

俺はベッドの上にいた。

「夢か．．．．．」

あの遊斗という少年．．．．．少年の友人か？

「いったい何があつたんだ、少年？」

まあ、その為の大会だ。

こいつの事を全て知る為に出場したんだ。

「ジャンク！」

『うゝん．．．．．おはよう、鉄也』

ジャンクが現れた。

「頑張ろうぜ、ジャンク。」

『おう！』

「……………」

しかしあの遊斗という少年、彼は大丈夫なのか？

「おはよう、鉄也。」

あ、結衣さんだ。

「おはようございます、結衣さん。今日もお互いに頑張りましたよ。」

デュエルスタジアム

ワー！！ ワー！！

……………こうして大会の2日目が始まった。

『Everybody Listen！！ いよいよ大会2日目だー！ 泣いても笑っても、今日でキングへの挑戦者が決定する！
それでは、準々決勝の始まりだー！』

- 待合室 -

俺は遊星と一緒にいた。

今日の最初の試合は遊星だ。

デュエル形式はスタンディング。

原作と違ってボマーではなくオリジナルキャラとデュエルする事になっている。

負ける可能性もあるから俺は応援に来た。

そろそろ時間だ。

遊星は部屋を出ようとした。

「じゃあ頑張れよ、遊星。」

「ああ。ところで鉄也．．．．．」

遊星が俺に何か聞き始めた。

「ん？ 何だ、遊星？」

「鉄也．．．．．お前はこの大会で何か目的があるのか？」

そうだ．．．このフォーチュンカップの出場者達の中にはキングの座を手に入れる以外の目的がある。

アキはサイコデュエリストの力を人々に見せ付ける為．．．ゴドウインの差し金は報酬の為．．．ボマーは彼の故郷への支援の為だったがゴドウインの行った悪事が引き金となり、復讐の為となった．

・そして遊星は人質に捕られている友達を救う為、そしてジャックとの因縁をつける為だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

遊星に嘘は通用しないのは分かっている。

彼には収容所での借りもあるな。

とりあえずこれだけ言っておく。

「俺の目的は・・・・・・・・自分を見つけ出す為だ。」

「自分を見つけ出す為？」

「ああ。俺もお前と同じくサテライト出身でな、色々事情があつて気が付いたらこの大会までたどり着いた。そして俺は自分に何か使命があると気付いた。俺は自分が何なのか・・・・・・・・それでこの大会が自分を見つけ出す鍵だと思った。それだけだ。」

「なるほど・・・・・・・・じゃあ、お互い頑張ろう。」

「ああ、負けるなよ。お前ともデュエルしたいからな。」

遊星は出て行った。

俺も別の待合室へ行った。

「やあ、結衣さん。」

「あ、鉄也。そろそろ試合が始まるよ。」

「解ってる。」

ピッ！

俺はモニターをつけた。

・デュエルステージ・

『それでは第9試合の始まりだ！　まずは、サテライトの流れ星、不動〱遊星〱！！』

モニターには遊星が写った。

『そして彼の相手は．．．．轟くスーパースター、大寺〱慎太郎だ〱〱！』
おおでら しんた

茶髪に黄色いメッシュを塗ったビジュアルバンド系のようなエレキギターを持った青年が現れた。

「よう、サテライト。あの炎城を倒すとは凄えな。だが、俺を倒せるかな？」

「．．．．．」

遊星はデュエルディスクを起動させ、手札をドロ―した。

「それじゃあ、こっちも．．．」

相手はデッキをエレキギターのボディに差し込んだ。
すると……………

ウィーン……………シュシュシュシュツ……………

エレキギターのボディからカードをセットする板が出来、デッキをシャッフルした。

そして引いた5枚のカードをヘッドにある部分に固定させた。
そこが手札という事か。

「おお！」

オブライエンの銃方ディスクといい、騎士の盾型ディスクといい、いいなあ……………俺もそういうの欲しいな。

『それではデュエル、スタンバイ……………』

「「デュエル！！」」

遊星 LP 4000

VS

大寺 LP 4000

「俺のターン！」

お、遊星が先行か。

「俺はロードランナーを召喚！」

『ピーー！』

赤いブーツを履いたピンク色のひよこが現れた。

ロードランナー

1

DEF 300

てゆうか遊星、普通シールド・ウィングやマツシブ・ウォリアー
を持っているならロードランナーを入れる必要はないだろ。

レベル1である点でジャンク・シンクロンやワン・フォー・ワン
の使用でもチューニング・サポーターやレベル・ステイラーを持
っているならさらに優先度が低いじゃないか。

すまん、ロードランナー……これはあくまでも事実だ。

「これでターン終了だ。」

遊星 / LP 4000

手札 5枚

モンスター / ロードランナー (守)

魔法・罠 / なし

何も伏せなかったという事は相手の出方を伺っているな。

「頑張れ、遊星！」

「俺のターン！ 俺はRAI-MEIを召喚！」

紫のスーツを着た女性が現れた。

RAI-MEI

3

ATK1400

「オラァ、バトルだ！ RAI-MEIでロードランナーを攻撃！」

ギーーン！

相手は攻撃宣言すると同時にギターの弦を弾いた。

なるほど、そういうキャラ付けか。

いいなあ……俺もそういうデュエルディスク欲しいな。

バチバチバチバチ……

『ピーー！』

RAI・MEIの電撃により、ロードランナーは黒焦げになった。そして演出の都合か、何故か焼き鳥になったロードランナーの隣に丁寧に300円と書かれている紙が置いてあった。

「カードを1枚セットし、ターンエンドだ!」

大寺/LP4000

手札4枚

モンスター/RAI・MEI(攻)

魔法・罠/リバーズ×1

「俺のターン! 俺はマックス・ウォリアーを召喚!」

お坊さん型のロボットのようなものが現れた。

マックス・ウォリアー

4

ATK1800

「バトル! マックス・ウォリアーでRAI・MEIを攻撃! マックス・ウォリアーは相手モンスターを攻撃する時、ダメージステ

ツプの間攻撃力が400ポイントアップする。」

マックス・ウォリアー

4

ATK1800 2200

「スィフト・ラッシュ！」

ドガア！

RAI-MEIが破壊された。

大寺 LP4000 3200

「くっ．．．．．だが、RAI-MEIの効果を発動。デッキからレベル2以下の光属性モンスターを手札に加える。俺はデッキからレベル2のエレキトンボを手札に加える。」

「マックス・ウォリアーは相手モンスターを戦闘によって破壊した時、次の俺のターンまで攻撃力とレベルが半分になる。俺はカードを1枚セットし、ターンエンドだ。」

マックス・ウォリアー

4
2

ATK1800 900

遊星／LP4000

手札4枚

モンスター／マックス・ウォリアー（攻）

魔法・罠／リバーズ×1

「このエンドフェイズ、俺は永続罠、エレキヤノンを発動する！」

相手のフィールドに赤、青、黄色の巨大なカラフルな大砲が現れる。

「俺のターン！俺はエレキツツキを召喚。」

エレキヤノンと同様、カラフルな鳥が現れた。

エレキツツキ

3

ATK1000

「この瞬間、エレキャノンの効果を発動！ 1ターンに1度、雷族モンスターが召喚、特殊召喚される度に相手プレイヤーに800ポイントのダメージを与える！」

ギューーン！

バチバチ…………ドギューン！

エレキャノンからエネルギー弾が放たれた。

「くっ…………」

遊星 LP 4000 3200

「さらに、手札から一族の結束を発動！ 自分の墓地のモンスターの種族が1種類だった場合、自分フィールド上のその種族を持つモンスターは攻撃力が800ポイントアップする！ 俺の墓地は雷族のみ！ よってエレキッツキの攻撃力が800ポイントアップする！」

エレキッツキ

3

ATK 1000 1800

「バトル！ エレキツツキでマックス・ウォリアーを攻撃！」

「畏発動、くず鉄のかかし！ 攻撃を1度だけ無効にし、そのままセツトされる！」

ガキイ！

くず鉄のかかしがエレキツツキの攻撃を受け止めた。

「甘い！ エレキツツキは2回攻撃が出来る！」

「何！？」

エレキツツキの攻撃がマックス・ウォリアーに直撃した。

遊星 LP 3200 2300

「ターンエンドだ！」

大寺 / LP 3200
手札 4枚

モンスター／エレキツツキ（攻）
魔法・罨／一族の結束（雷族指定）、エレキヤノン

「俺のターン！俺はシールド・ウィングを召喚する！」

シールド・ウィング

2

DEF900

「カードをセットし、ターンエンドだ。」

遊星／LP2300

手札3枚

モンスター／シールド・ウィング（守）

魔法・罨／リバーズ×2

「俺のターン！俺はエレキタリスを召喚する！」

今度は電機を纏った赤いリスが現れた。

エレキタリス

3

ATK 700 1500

「エレキタリスの召喚により、エレキヤノンの効果発動だ！ 相手
プレーヤーに800ポイントのダメージを与える！」

バチバチバチ

「くっ . . .」

遊星 LP 2300 1500

まずいな エレキモンスターは殆んどが直接攻撃が出来る能力を持ち、戦闘を行うことによって相手の特定の動きを封じるシリーズだ。

それに加えてエレキヤノンによるバーンダメージ ライフ4000の世界では驚異的だ。

「バトル！ エレキタリスでシールド・ウィングを攻撃！」

エレキタリスが遊星のシールド・ウィングへ飛び掛る。

「俺はくず鉄のかかしを発動！ 攻撃を無効にし、セツトさせる。」

エレキタリスは突然現れたかかしにぶつかり、飛ばされた。

「おおっと、甘いな！ エレキタリスはエレキツツキ同様、2回攻撃が出来る！ もう1度エレキタリスでシールド・ウィングを攻撃だ！」

『キュッ！』

エレキタリスの前歯がシールド・ウィングに直撃する。

ビリリリイ！！

「シールド・ウィングは1ターンに2度、戦闘によって破壊されない。」

「そんなのお見通しだ。だがエレキタリスにはもう1つの効果があるんだよ。このモンスターと戦闘を行った効果モンスターはダメージ計算後に効果が無効化されるのさ。」

「何！？」

シールド・ウィングは今の攻撃によって痺れていた。

「エレキツツキでシールド・ウィングを攻撃！」

バチチチチッ！

バタッ！

シールド・ウイングも黒焦げになって倒れた。

焼かれたシールド・ウイングには丁寧に500円と書いた紙が置かれていた。

さっきのロードランナーといい、シールド・ウイングといい、鳥獣族への扱いが酷くねえか？

特にシールド・ウイングは鳥獣族だけど外見からして恐竜への分類だから食えないだろ！

「エレキツツキも2回攻撃が可能だ。エレキツツキでダイレクトアタック！」

「畏発動、ガード・ブロック！ 戦闘ダメージを0にし、カードを1枚ドロースる！」

遊星の周りにバリアが現れ、エレキツツキの攻撃を受け止めた。

「ほお．．．．．凌いだか。俺はターンエンドだ。」

大寺／LP3200

手札4枚

モンスター／エレキツツキ（攻）、エレキタリス（攻）

魔法・罨ノ一族の結束（雷族指定）、エレキヤノン

「俺のターン！ 俺はジャンク・シンクロンを召喚する！」

『トアア!』

ジャンク・シンクロン

3

ATK1300

来た、遊星のメインチューナー!
あれを出したってことはジャンク・ウォリアーだな!

「ジャンク・シンクロンの効果を発動! 墓地からレベル2以下の
モンスターを効果を無効にして特殊召喚する。 現れよ、シールド・
ウィング!」

774

シールド・ウィング

2

DEF900

「俺はカードをセットし、速攻魔法ダブル・サイクロンを発動!
自分の魔法・罠カードと相手の魔法・罠カード1枚を破壊する!
俺はセットしたカードとお前のエレキヤノンを破壊する!」

ブオオオオ．．．．．巨大な竜巻がお互いのカードを飲み込んだ。

「バーン効果を防いだか．．．．．」

竜巻が止んだ途端、また竜巻が起こり始めた。

ブオオオオ．．．．．バリーン！

竜巻は相手の一族の結束を破壊した。

「何！？」

「セットされた荒野の大竜巻の効果を発動！ セットされたこのカードが破壊された時、表側表示のカード1枚を破壊する。」

「なるほど．．．．．ダブル・サイクロンのデメリットをメリットに変えたのか。」

エレキツツキ

3

ATK1800 1000

エレキタリス

3

ATK1500 700

上手い！

エレキはいい効果があるがそれぞれのステータスが低いというデメリットがある。

一族の結束や攻撃反射カードがなければ簡単に倒せる！

「レベル2、シールド・ウイングにレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング！ 集いし星が新たな力呼び起こす。 光さす道となれ！」

2 + 3 〓 5

「シンクロ召喚！ いでよ、ジャンク・ウォリアー！」

『ハアアア．．．．．トアアア！』

ジャンク・ウォリアー

5

ATK2300

「バトル！ ジャンク・ウォリアーでエレキタリスを攻撃！ スク

ラップ・フィスト！」

ジャンク・ウォリアーの拳がエレキタリスに直撃した。
なんか残酷……………

「くっ……………」

大寺 LP 3200 1600

「カードを1枚セットし、ターンエンドだ。」

遊星 / LP 1500

手札1枚

モンスター / ジャンク・ウォリアー（攻）

魔法・罠 / リバーズ×2

いいぞ、ライフが並んだ上に今はジャンク・ウォリアーとくず鉄のかかしを持つ遊星の方が有利だ。

このままいけ、遊星！

「まさかいきなり形勢逆転と来るとはな……………少しやばくな
って来たな。俺のターン、俺はエレキトンを召喚！」

今度はカラフルなトンボが現れた。

エレキトンボ

2

DEF100

「そしてエレキツツキを守備表示へ変更。カードを2枚セットし、ターンエンドだ！」

大寺/LP1600

手札2枚

モンスター/エレキツツキ(守)、エレキトンボ(守)
魔法・罠/リバーズ×2

「俺のターン！俺はニトロ・シンクロンを召喚！」

ライターの形をしたモンスターが出た。

ニトロ・シンクロン

2

ATK300

「レベル5、ジャンク・ウォリアーにレベル2、ニトロ・シンクロンをチューニング！ 集いし思いがここに新たな力となる。光さす道となれ！」

5 + 2 7

「シンクロ召喚！燃え上がれ、ニトロ・ウォリアー！」

緑色の悪魔のようなモンスターが現れた。

ニトロ・ウォリアー

7

ATK2800

「ニトロ・シンクロンの効果を発動！ このモンスターがニトロと名の付いたモンスターのシンクロ素材にされた場合、カードを1枚ドロー出来る！ バトル！ ニトロ・ウォリアーでエレキツツキを

攻撃！ ダイナマイト・ナックル！」

チュドーン！

ニトロ・ウォリアーの攻撃がエレキツツキに直撃した。

「さらに、ニトロ・ウォリアーの効果を発動！ このモンスターが相手モンスターを戦闘によって破壊した時、相手フィールド上の表側守備表示モンスターを攻撃表示に変更し、そのモンスターを攻撃することが出来る。 ダイナマイト・インパクト！」

相手のエレキトンボが攻撃表示となった。

エレキトンボ

2

ATK900

ニトロ・ウォリアーはエレキトンボへ向かっていった。

「俺はガード・ブロックを発動！ 戦闘ダメージを0にし、カードを1枚ドロースする！」

チュドーン！

エレキトンボは破壊された。

大寺 LP1600

「どうやらこのターンで決まらなかったか。」

「危ねえ危ねえ．．．．．負ける所だった。俺はエレキトンボの効果を発動する！ このモンスターが相手によって破壊された場合、デッキからエレキと名の付いたモンスターを特殊召喚することができる。俺はエレキギリスを特殊召喚する！」

エレキギリス

1

DEF0

「俺はターンエンドだ。」

遊星 / LP1500

手札2枚

モンスター / ニトロ・ウォリアー（攻）

魔法・罠 / リバース×2

「俺のターン！俺は手札からエレキリンを墓地へ送り、ワン・フオー・ワンを発動。デッキからレベル1のエレキリギリスを特殊召喚する！」

エレキリギリス

1

DEF0

「（2体目のエレキリギリス？）」

「エレキリギリスが存在する限り、相手は他のエレキと名の付いたモンスターを攻撃対象にする事が出来ず、カードの効果の対象にも出来ない。つまり、ロックされたという事だ。」

「なるほど・・・攻撃が出来なくなっただけじゃないな。エレキリギリスの効果でくず鉄のかかしで攻撃を防げなくなる。」

「良く解ってるじゃねえか。さらにリバーズカードオープン、エレキパー！墓地からレベル4以下のエレキと名の付いたモンスターを特殊召喚する！現れよ、エレキリン！」

エレキリン

4

ATK1200

「さらに、今の特殊召喚にチェーンして地獄の暴走召喚を発動！
デッキ、手札、または墓地から同名モンスターを2体まで特殊召喚
する！ 俺はデッキからエレキリンを2体特殊召喚する！」

エレキリン×2

4

ATK1200

「お前もモンスターを特殊召喚することが出来るが……………」

「地獄の暴走召喚はエクストラデッキからの特殊召喚は出来ない、
そうだろ。」

「その通りだ。そしてエレキリンもダイレクトアタックが出来る。
バトル、エレキリンでダイレクトアタック！！」

バチバチバチバチ……………エレキリンの角から電撃が起こり
始めた。

まずい……………エレキリギリスのせいでくず鉄のかかしは発
動できない。

どうする、遊星？

「この瞬間、ニトロ・ウォリアーをリリースし、シンクロ・バリアを発動！ 次のターンのエンドフェイズまで俺の受けるダメージは0となる！」

ニトロ・ウォリアーがバリアと化し、エレキリンの攻撃を防いだ。

「自分自身に影響を与える効果だったか……俺はターンエンドだ。このエンドフェイズ、エレキパーによって特殊召喚されたエレキリンは破壊される。」

大寺 / LP 1600

手札 0 枚

モンスター / エレキリン × 2 (攻)、エレキギリス × 2 (守)

魔法・罠 / なし

「まあ、次のターンで終わらせればいい。（さうて、ゴドウィンの報酬でどうしようかな）やっぱ、まずは新品のギターを買ってレアカードを購入だな。いや、その前に新品のエフェクターが欲しいな。」

「俺のターン……ドロー！（エレキリンは直接攻撃が可能なモンスターだ。俺のライフでは防ぎきれない。だが、相手も手札が無くなっている。これは攻めるチャンスだ。このカードに賭けるしかないか……）俺は貪欲な壺を発動！ 墓地

に存在するニトロ・シンクロン、マックス・ウォリアー、ロードランナー、ジャンク・ウォリアー、そしてニトロ・ウォリアーをデッキに戻し、カードを2枚ドローする！」

まずいな……。遊星は攻撃が出来ない。

多分、彼は対象を取らないミラーフォースのような逆転のカードは持っていないだろうな。

だが、相手は手札を尽きているんだ。

あの状況を裏返すカードがあればいいんだが……。遊星はスターダスト・ドラゴンを出す気はないだろうな。

もっとも、あの状況で出しても勝ち目がないけどな。

だったら遊星はあのモンスターを使うしかない……………

「俺は手札を1枚捨て、クイック・シンクロンを特殊召喚する！」

クイック・シンクロン

5

ATK500

「さらに、俺はチューニング・サポーターを召喚する！」

チューニング・サポーター

1

ATK300

「レベル1、チューニング・サポーターにレベル5、クイック・シンクロンをチューニング！ 集いし力が大地を貫く槍となる。光さす道となれ！」

1 + 5 〃 6

「シンクロ召喚！ 砕け、ドリル・ウォリアー！」

片手がドリルになっている戦士が現れた。

ドリル・ウォリアー

6

ATK2400

「チューニング・サポーターの効果を発動！ このモンスターがシンクロ素材に使用された時、カードを1枚ドロウする！」

遊星の腕がゆっくり動いている。

このドロウに賭けるということか……………

「!!」

遊星の表情が微笑み始めた。

どうやらいいいカードを引いたか。

「大したモンスターだ。だが、エレキリギリスが存在する限りモンスターを攻撃するのは不可能だ。」

「モンスターを攻撃が出来ないなら突破すればいいだけだ。俺はドリル・ウォリアーの効果を発動する！ 1ターンに1度、攻撃力を半分にし、直接攻撃をする事が出来る！」

「何!？」

ドリル・ウォリアー

6

ATK 2400 1200

「バトル！ ドリル・ウォリアーでプレイヤーへダイレクトアタック！ ドリル・シュート!!」

ギューーーン！

ドリル・ウォリアーは相手へ向かって突撃した。

「くっ……………」

大寺 LP1600 400

「く……………危なかった。ドリル・ウォリアーの攻撃力がもう少し高ければ負けていた。」

「俺はドリル・ウォリアーのもう1つの効果を発動！手札を1枚捨て、このモンスターを除外する！」

ズボボボッ！！

ドリル・ウォリアーは地面に潜り始めた。

「これでターンエンドだ。」

遊星 / LP1500

手札1枚

モンスター / なし

魔法・罠 / リバース ×1

「俺のターン！　どうやらこれで終わりのようだな。俺はエレキ

ツネを召喚！」

エレキツネ

2

ATK800

「レベル4、エレキリンにレベル2、エレキツネをチューニング！
すべてを貫く雷よ、神速の獣となりてここに顕現せよ！」

4 + 2 〃 6

「シンクロ召喚！ 轟け、エレキマイラ！」

翼が生えており、蛇の尾を持ったカラフルなライオンが現れる。

エレキマイラ

6

ATK1400

「エレキマイラでダイレクトアタック！ サンダー・ファング！」

エレキマイラの電撃を纏う牙が遊星へ向かって行く……………
エレキリギリスの効果でくず鉄のかかしは通用しない。
だが、遊星ならこの状況を切り抜ける！

「俺は手札の速攻のかかしの効果を発動！ 手札からこのモンスターを捨て、ダイレクトアタックを無効する！」

「何！？」

バチチチチチ……………

くず鉄のかかしに似たサングラスをかけたかかしが現れ、エレキマイラの攻撃を受け止めた。

「だが、エレキリンの攻撃が残っている！」

「無駄だ！ 速攻のかかしは攻撃を無効にさせるだけでなく、バトルフェイズを終了させる！！」

「何だと……………ターンエンドだ。（しかし大丈夫だ、エレキリギリスがある限り相手は攻撃が出来ない。次で決めればいい。）」

大寺／LP 1600

手札 0 枚

モンスター／エレキマイラ（攻）、エレキリン（攻）、エレキリ
ギリス×2（守）
魔法・罠／なし

「俺のターン！」

ギューーン！

地面の中からドリル・ウォリアーが現れた。

「何！？」

「ドリル・ウォリアーは除外された次のターンにフィールドに戻り、
墓地のモンスターカードを手札に加える。」

ドリル・ウォリアー

6

ATK2400

「くっ……………」

ドリル・ウォリアー

ATK 2400 1200

「バトル！ ドリル・ウォリアーでダイレクトアタック！ ドリル・シュート！！」

「うわあああ！」

大寺 LP 400 0

『ついに決着！ サテライトの流れ星の不動遊星が逆転だ！ よって準決勝へ進むのは不動遊星だ——！』

やったな、遊星。

「あの蟹みたいな人、なかなかやるわね。」

おい、蟹は言い過ぎだろ。

ニコニコで蟹ネタになっているキャラだけど。

「ああ。 あいつはカードに最も愛されているデュエリストだ。」

「しかしね……………」

「ん？」

「あんたのデッキ、あの人のに似ているわね。」

「まあな。俺はジャンクしか使っていないけどな。」

思い出すな、俺がジャンク・シンクロンのポテンシャルに惚れた
時を思い出すな。

「それじゃあ、私の番ね。」

「そうですね。頑張ってください、結衣さん。」

「ええ。」

結衣さんはステージへ向かって行った。

S i d e E n d

S i d e / 結衣

じゃあ、私の番ね。

『さあて、お待ちかねの次の試合の始まりだあ！　まずは風纏いし
姫、神風　結衣だ〜！』

ウィ〜〜ン……………

相手の方からシュウが現れた。

『そして、彼女に対する相手は〜漆黒のドラゴンキング、黒崎
シュウだ〜！〜！』

「やあ、結衣。　準備はいいかい？」

「万全よ、シュウ。」

私は……………負けるわけにはいかない。

「シュウ……………あなたが私を邪魔するなら……………あな
たを叩き潰してあげるわ。」

「そうか……………じゃあ、始めようか。」

「「デュエル！〜」」

結衣　LP4000

VS

シュウ　LP4000

S
i
d
e

E
n
d
.

第24話 準々決勝開始！ それぞれの目的！（後書き）

正直、遊星のプレイングをどうすれば良いか迷っていました。

では、次回をお楽しみに。

第25話 風纏いし姫 VS 漆黒の竜王（前書き）

正直、今回は上手く書けたかどうか分かりません。

第25話 風纏いし姫 VS 漆黒の竜王

- Narration -

- 待合室 -

ブルルルルル．．．ブルルルルル．．．．．ピッ！

「あ、俺の携帯だ。」

男は携帯電話を取り出そうとポケットに手を入れた。
ちなみにこの男は大寺 慎太郎。

先程の第9試合で不動 遊星を相手に負けた出場者である。

ブルルル．．．．．ピッ！

ビィー！

彼が携帯のスイッチを入れた途端、立体映像のスクリーンが現れ、そこには「IIII」という文字が映っていた。

「^{あきい} 曉か。 何だ？」

「何だ」じゃねえよ、大寺！ あそこで負けるなんて何やってんだよ！ 観察対象にたどり着くまで勝ち続けるというのが任務だったよ！

ただろうが!』

急に怒鳴り始めた。

「仕方ないだろうが。相手が思ったより強かったんだから。俺は難易度高いロックまでかけたんだぞ。あのサテライトが俺様のロックコンボを切り抜けるようなモンスターを持ってたなんて予想しなかったぞ! でも安心しろ、何の意味もなく負けた訳ではない。ちゃんとゴドウィンから報酬はもらったぞ。」

「だからお前は甘いんだよ!。オレだったらあんな奴をバーンで一気に片付けるぞ! てゆうか報酬で解決させる気か!? この大馬鹿! !!」

ちなみに暁と呼ばれている者は一人称は『オレ』だが、女性である。

「あゝあゝ? 俺のエレキデッキにケチをつける気か? それに俺はフォーチュンカップでのデッキは本気にしていなかったぜ。なんなら今、ここでケリをつけようか?」

『望む所だ! オレもお前の態度には丁度腹が立ってた所だ!』

大寺はスクリーンと睨み始めた。

その時.....

ビィ!

『やめろ、2人とも。』

急にもう1つのスクリーンが現れた。

スクリーンには「EX」と文字が書かれていた。
声からして男性である。

『ルーカスは甘いんだよ！　こんな馬鹿は1度ぐらい痛い目にあわせないといけないよ！』

『慎太郎、本気ではいなかったお前なら負けてしまう可能性もあるのは分かっていたが、相手はイリアステルから見てシグナーである可能性が高かった男だ。　もう少し本気を出しても良かったはずだ。仕事をしっかりしてくれなければ困る。』

「す、すまん……………」

大寺はルーカスという者の発言に対し、謝った。

『ほおら、ざまあみろ。』

『そして暁、お前も言い過ぎだ。　負けたとはいえ慎太郎は頑張っていたんだ。　お前達、もう少し仲良くしろ。』

『うっ、ルーカスがそう言うなら……………』

ルーカスの一言により、暁も大人しくなった。

『とりあえず慎太郎、お前の失態による罰は綾あやが決める。　とりあえず別の仕事に入ってくれ。』

「ああ、確かあの『業火の竜』に選ばれた者の観察だったな。」

『そいっただけじゃない、あの帝^{みかど}を倒した奴もだ。』

「そうそう、わかった。じゃあ、試合が始まるからまた後で連絡な。あとルーカス、綾からの制裁を軽くしてくれ。」

『安心しろ、綾も鬼じゃない。じゃあ、仕事を頼むぞ。』

『しっかりしろよ!』

「はい。」

ブツンッ!

「さて、仕事に入るか。」

そう言っ大寺はパソコンを取り出した。
ちなみに彼の首の後ろには「XIEE」と文字が書いてあった。

「兄さん、デュエルしようよ。私のデッキ、結構強くなったんだ。」

「へえ、じゃあやってみようか。」

「デュエル!!」

「大天使クリスティアでダイレクトアタック！」

「うわ〜！」

結衣 LP 1300 0

「もう少しだったのに〜！」

「まだまだだな。」

「元々ずるいよ、そんなカード。こっちはまともに動けないじゃないか。」

「はははは．．．．ごめんごめん。でも結衣のデッキも凄く強いじゃないか。手を抜いたらこっちがやられるよ。」

「ただいま、兄さん。」

「お帰り、結衣。」

「あ、シュウに美央さん。お邪魔してたんですか。こんにちは。」

「やあ、結衣。」

「お邪魔してるわ、結衣。良かったら私と相手しない？」

「いや、無理無理！美央さんが相手だと無理！」

「あらゝ残念。」

「士郎^{シロ}ちゃん、結衣は君に似てきているね。」

「そうか。」

「むしろ悪い所も似てきているんじゃない？」

「いや、そこは言わないでくれ。」

「それよりも君がセキュリティになれたのが不思議だ。」

「はははは．．．．．そこも言わないでくれ。」

「結衣、デュエルは好きか？」

「うん、楽しいよ。」

「強くなりたいか？」

「まあね。出来ればデュエルキングになりたい。」

「キング？ クイーンじゃないのか？」

「あ、そうだった。」

「まあ、なりたかったら色々頑張れよ。デュエルしか出来ないキングはニートと同じだからな。」

「あはは、わかった。キングじゃなくてクイーンでしょう。」

ブルルルルル．．．．．

「もしもし．．．．え？　兄さんが．．．．」

- Side / 結衣 -

「結衣、準備は出来ているかい？」

「ええ、あなたが相手も負けないわ。」

．．．．．こうして今、私は此処にいる。

「デュエル！！」

結衣 LP 4000

VS

シュウ L 4000

「先行を貰うわ。」

「構わないよ。」

「私のターン。」

ドローしたカードは

『結衣………まずはどう動く?』

まずは相手の動きを見るしかないね。

「私は霞の谷のファルコンを召喚する!」

霞の谷のファルコン

4

ATK 2000

「ターンエンド。」

結衣／LP4000

手札5枚

モンスター／霞の谷のファルコン（攻）

魔法・罠／なし

「ボクのターン．．．．．ボクは手札を1枚捨て、コスト・ダウンを発動。このターン、ボクの手札とフィールド上のモンスターはレベルが2下がる。」

コスト・ダウン．．．．．一体何を召喚する気なの。

「そしてボクはホルスの黒炎竜　LV6を召喚」

「ホルス！？（まずい、あのモンスターは．．．．．）」

シュウの前に銀色の鳥が現れる。

ホルスの黒炎竜　LV6

64

ATK2300

「バトル。ホルスの黒炎竜　LV6で霞の谷のファルコンを攻撃。
ブラック・フレイム!!」

ボワアアア．．．．．

『ぐあああ!』

「ファルル．．．．．」

ホルスの炎がファルルを焼いた。

結衣　LP4000　3700

「さらに、カードを1枚セットし、ターンエンド。　」のハンドフ
エイズ、ホルスは進化する。」

『クオオオオ!』

ホルスは黒き炎を纏い、姿を変え始めた。

『グオオオ!』

ホルスは竜の姿へと化した。

ホルスの黒炎竜 LV8

8

ATK3000

シュウ/LP4000

手札2枚

モンスター/ホルスの黒炎竜 LV8(攻)

魔法・罾/リバーズ×1

「私のターン．．．．私はモンスターをセット。そしてカードをセットし、ターンエンド。」

結衣/LP3700

手札4枚

モンスター/裏側守備表示モンスター1体

魔法・罾/リバーズ×1

「ボクのターン。ボクはランサー・ドラゴニートを召喚する。」

槍を持った緑色の竜が現れる。

ランサー・ドラゴニユート

4

ATK1500

「バトル。ランサー・ドラゴニユートでモンスターを攻撃。」

「させない！私は聖なるバリア・ミラーフォースを発動！攻撃表示となっている相手モンスターを全て破壊する！！」

私の場の周りにバリアが現れた。

「甘いね。ボクは魔宮の賄賂を発動する ミラーフォースの発動と効果を無効にし、破壊する！！」

シュウウウウウ・・・

私を守っていたバリアが消えた。

「くっ・・・でも魔宮の賄賂の効果でカードをドローさせてもらうわ。」

「ボクはランサー・ドラゴニユートで攻撃を続ける。」

ズバア！

攻撃されたモンスターは・・・

シールド・ウィング

2

DEF 900

「シールド・ウィングは1ターンに2回まで戦闘によって破壊されない!」

「だが、ランサー・ドラゴニートには貫通能力がある。」

結衣 LP 3700 3100

「これ以上攻撃しても意味がないね。 カードをセットし、ターンを終了する。」

シュウ / LP 4000

手札1枚

モンスター / ホルスの黒炎竜 LV 8 (攻)、ランサー・ドラゴ

ニート (攻)

魔法・罾 / リバース × 1

．．．．．ホルスが存在する限り魔法を発動できない。
このドローにかけるしかないわね。

「ドロー！」

これは．．．．．

「私は霞の谷の雷鳥を召喚する！」

霞の谷の雷鳥

3

ATK1100

「さらに、このモンスターを手札に戻し、チューナーモンスター、
A・ジェネクス・バードマンを特殊召喚する！」

3

A・ジェネクス・バードマン

ATK1400 1900

「なるほど、レベル6のシンクロ召喚か。」

「霞の谷の雷鳥の効果を発動！ このモンスターが手札に戻った場合、特殊召喚される！」

霞の谷の雷鳥

3

ATK1100

「レベル3、霞の谷の雷鳥にレベル3、A・ジェネクス・バードマンをチューニング！ 封印されし雷槍の龍よ、秘めたる氷の力を解き放て！」

4 + 2 〓 6

「シンクロ召喚！ 凍結せよ、氷結界の龍 ブリューナク！」

「クオオオオ！！！」

氷結界の龍 ブリューナク

ATK2300

「私はブリューナクの効果を発動する！ 手札を任意の数だけ捨てる事でその枚数分、フィールド上のカードを手札に戻す。手札を2枚捨て、ホルスの黒炎竜とその伏せカードを手札に戻す！ 氷結封印！」

私は手札のドラゴンフライとスキル・サクセサーを墓地へ送った。

「クオオオオオ！」

ヒュルルルル……

ブリューナクの息がホルスと伏せてあるカードを凍りつけ始める。

「ボクはその効果にチェインしてバースト・プレスを発動 ランサー・ドラゴニートをリリースし、フィールド上に存在するその攻撃力以下の守備力を持つ表側表示のモンスターを全て破壊する！」

ランサー・ドラゴニート ATK1500

シュウのフィールド

ホルスの黒炎竜 LV8 DEF1800

結衣のフィールド

氷結界の龍 ブリユーナク DEF1400

シールド・ウィング DEF900

ブワアアア！

ランサー・ドラゴニートは巨大な炎と化し、ブリユーナクとシールド・ウィングを焼き始めた。

「くっ．．．．でも、ブリユーナクの効果は既に発動している。ホルスだけは手札に戻るわ。」

シュウはホルスを手札に戻した。

「私はカードを2枚セットし、ターンエンド。」

結衣／LP3100

手札0枚

モンスター／なし

魔法・罫／リバーズ×2

「ボクのターン．．．．ボクはドル・ドラを召喚する。」

ドル・ドラ

3

ATK1500

「バトル。ドル・ドラでダイレクトアタック。」

ボワアアア！！

ドル・ドラは炎を吐いた。

「私はデイメンジョン・ウォールを発動！」

「何！？」

シュウウウウウ……………

ドル・ドラの炎の前に次元の穴が現れ、炎を吸い込んだ。

「うわぁー！！」

ドル・ドラの炎が別の空間から炎が出た。

ボワアアア！

シュウ LP4000 2500

「ふう、驚いた。まさか自分のモンスターに攻撃されるとはね。なら、ボクはメインフェイズ2に入り、手札のホルスの黒炎竜LV8を捨て、トレード・インを発動。カードを2枚ドロウする。カードをセットしてターンエンドだ。」

シュウ/LP2500

手札1枚

モンスター/ドル・ドラ（攻）

魔法・罨/リバーズ×1

「私のターン……………!!」

このカードは……………これならいける！

「……………」

でも、まだ十分条件を満たしていない。
相手の動きに賭けるしかないわね。

「私は魔導戦士ブレイカーを召喚する！」

魔導戦士ブレイカー

4

ATK1600

「ブレイカーは召喚に成功した時、魔力カウンターを1個乗せ、攻撃力を300ポイントアップさせる！」

魔導戦士ブレイカー

4

ATK1600 1900

「魔導戦士ブレイカーの効果を発動！ 魔力カウンターを取り除き、その伏せカードを破壊する！」

『ハア！』

魔導戦士ブレイカー

4

ATK1900 1600

バリン！

破壊したカードは……………

「あ、竜の逆鱗が破壊されたか。」

伏せカードは竜の逆鱗だったか。

そのまま攻撃しても良かったけど念には念だったよね。

「バトル！ 魔導戦士ブレイカーでドル・ドラを攻撃！」

ズハア！

シュウ LP 2500 2400

「私はターンを終了する。」

結衣 / LP 3100

手札 1枚

モンスター / 魔導戦士ブレイカー（攻）

魔法・罫 / リバース × 1

「このエンドフェイズ、ドル・ドラは蘇る。」

ドル・ドラ

3

ATK1000

「ボクのターン・・・・・・・・！！ 来たか、ボクのフェイバリットカードが。」

あの反応・・・・・・・・もしかしてあのモンスターを引いたの！？

「ボクはドル・ドラを除外し、手札からこのモンスターを特殊召喚する。 現れよ、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン！！」

『グオアアアア！』

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン

10

ATK2800

「レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンの効果を発動！ 1ターンに1度、手札、または墓地からドラゴンを特殊召喚する事が出来る。 蘇れ、ホルスの黒炎竜！」

『クオオオオオ！』

ホルスの黒炎竜 LV 6

6

ATK 2300

「さらに、モンスターをセット。 バトル！ レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンで魔導戦士ブレイカーを攻撃！ ダークネス・メタル・フレアー！」

ボワアアア

「私は和睦の使者を発動する！ 私が受ける戦闘ダメージを0にし、自分のモンスターが戦闘によって破壊されない！」

バチチチチ

ブレイカーの周りにバリアが現れ、レッドアイズの炎を防いだ。

「ターンエンドだ。」

シュウ／LP2400

手札0枚

モンスター／レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン（攻）、

ホルスの黒炎竜 LV6（攻）、裏側守備表示モンスター1体

魔法・罠／なし

このターンを凌いだ……………ここで何かいいカードを引けば……………

「私のターン、ドロー!!」

ライザー!!

これでブレイカーを墓地へ送れる!

「私は魔導戦士ブレイカーをリリースし、風帝ライザーをアドバンス召喚する!」

風帝ライザー

6

ATK2400

「風帝ライザーはアドバンス召喚に成功した時、フィールド上のカード1枚を持ち主のデッキトップに戻す! フローラル・ウェーブ

「！」

ブオオオオオ！

ライザーが巻き起こす風がレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを吹き飛ばした。

「そして墓地の魔導戦士ブレイカーとドラゴンフライを除外し、手札のモンスターを特殊召喚する！ 現れよ、ダーク・シムルグ！」

「ダーク・シムルグ……君がそれを使うのは始めてみるな。」

「言っただけよ、シュウ。このデッキは前の試合よりも強くなっているからね。」

ダーク・シムルグ

7

ATK2700

「バトル！ ダーク・シムルグでホルスの黒炎竜を攻撃！ ダーク・テンペスト！」

「うつ……」

シュウ LP 2400 2000

「さらに、風帝ライザーでそのモンスターを攻撃！ エア・サプレッション！」

ブオオオオ！

攻撃されたモンスターは……

メタモルポット

2

DEF 600

「ありがたい。メタモルポットのリバーブ効果を発動！ お互いのプレイヤーは手札を全て捨て、手札が5枚になるまでドローする。」

「丁度いいわ。私も手札に困っていたし。」

引いたカードは．．．．．礼を言っわ、シュウ。
これでコンボが完成した。

「カードを2枚セットしてターンエンド。」

結衣／LP3100

手札3枚

モンスター／ダーク・シムルグ（攻）、風帝ライザー（攻）

魔法・罠／リバーズ×2

シュウを倒すことが出来れば．．．その実力なら．．．魔女に勝
てる！！

825

- Side End -

- Side / シュウ -

「ボクのターン。」

「この瞬間、リバースカードオープン!!」

ん!?

「魔封じの芳香を発動! このカードがフィールド上に存在する限り、お互いに魔法カードはセットしなければ発動できず、セットしたプレイヤーから見て次の自分のターンが来るまで発動できない。」

「.....なるほど、ダーク・シムルグは相手のカードのセットを封じる。魔封じの芳香との組み合わせで魔法カードすら発動できなくなったという事か。」

デッキ構築がミスト・バレーからダーク・シムルグに変わったか。確かに強くなっているな、結衣。

「そうよ。 あなたのメタモルポットが仇になったわ。」

「それはどうかかな?」

「話しは終わりよ。 さあ、あなたのターンよ。」

「そうだな。 じゃあ、デュエル続行だ。」

僕のドローしたカードは.....ニヤリ

「君はボクのメタモルポットが仇になったと言ってたけど違うね。」

「!？」

「ボクはアックス・ドラゴニートを召喚する。」

アックス・ドラゴニート

4

ATK2000

「アックス・ドラゴニート？ 今頃そんなモンスターで何ができるというの？」

「悪いけどそのコンボを崩させてもらうよ。ボクは君の魔封じの芳香を墓地へ送り、トラップ・イーターを特殊召喚する！」

ガブツ……ゴクツ！

巨大な不気味な魚のようなモンスターが現れ、私の魔封じの芳香を飲み込んだ。

トラップ・イーター

4

ATK1900

「魔封じの芳香が……………」

「このモンスターは相手フィールドの表側表示の罨カードを墓地へ送ることで特殊召喚できる。ちなみにそれは特殊召喚のコストだ。そしてダーク・シムルグは相手のカードのセットを封じれるが、手札からの魔法カードの発動は封じられない。」

「まさかそう簡単に崩されるなんて……………」

「弾圧用に入れていたけどこの状況でも役に立ったな。さて、……………」

「（ここでシンクロ召喚されたら押されてしまう……………ならば、）リバーズカードオープン！ ゴッドバードアタック！！ 風帝ライザーをリリースし、トラップ・イーターとアックス・ドラゴニートを破壊する！」

ビューーン！！

風帝ライザーが2体のモンスターへ目掛けて捨て身の突進をした。

ドッガン！！

「これで何とか……………」

「まだだ！ ボクは手札からバイス・ドラゴンを特殊召喚する！」

バイス・ドラゴン

5

ATK2000 1000

「バイス・ドラゴン!? まずい、シュウの手札には……………」

「ボクはバイス・ドラゴンを除外し、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを特殊召喚する! 再び戻って来い、ボクのパートナーよ!」

『グオアアアア!』

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン

10

ATK2800

「まずい…………あのモンスターは……………」

「さらに、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンの効果を発動! 墓地からドラゴン族モンスターを特殊召喚する。現れよ、ボマー・ドラゴン!」

ボマー・ドラゴン

3

ATK1000

「いつの間にそんなモンスターを……………」

「序盤からだ。コスト・ダウンのコストで墓地に送った。」

結衣、悪いけどこっちも事情があるんでね……………全力でいかせてもらっよ。

「……………」

「バトル。ボマー・ドラゴンでダーク・シムルグを攻撃、ダイナマイト・クラッシュ！」

ヒュルルル……………チュドーン！

「ボマー・ドラゴンの攻撃によるお互いのプレイヤーへの戦闘ダメージは0となり、このモンスターを戦闘破壊したモンスターはダメージ計算後に破壊される！」

シュウ LP2000

ボマー・ドラゴンの自爆により、ダーク・シムルグは破壊された。

「さらに、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンでダイレクトアタック！ ダークネス・メタル・フレア！！」

ボワアアア！

結衣 LP 3100 300

「うつ……………」

「カードを1枚セットしてターンエンドだ。」

シュウ／LP 2000

手札1枚

モンスター／レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン（攻）

魔法・罠／リバーズ×1

さて、この試合……………手札のこのカードを使つべきかどうか考えないとな……………

T
O

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.

ストラクチャーデッキ・サイキック・フォース - (前書き)

ただの嘘予告です。

ストラクチャーデッキ・サイキック・フォース -

CV：不動遊星

「未知なる力が今、世界を支配する．．．．．出撃せよ、マツクス・テレポーター！ 超能力が全てを制圧する！」

「遊戯王5D'sオフィシャルカードゲーム、ストラクチャーデッキ・サイキック・フォース。 今日表発売中。」

4月2日発売

1,050円（税込）

モンスターカード22枚、魔法カード8枚、罠カード10枚
制限カード2枚、準制限カード0枚

《マックス・テレポーター》×1

《マスター・ジグ》×1

《メンタルマスター》×1

《ディストラクター》×1

《ファイナルサイコオーガ》×1

《クレボンス》×2

《シャインエンジェル》×1

《キラ・トマト》×1

《サイコ・コマンダー》×2

《人造人間サイコ・ショッカー》×1
《サイコ・エンペラー》×1
《メンタルプロテクター》×1
《アーマード・サイキッカー》×1
《サイコ・ウォールド》×1
《パワー・インジェクター》×1
《カバリスト》×1
《テレキアタッカー》×1
《パンダボーグ》×2
《ライフ・コーディネイター》×1
《緊急テレポート》×1
《トルネード》×1
《念動増幅装置》×1
《アポート》×1
《治療の神 デイアン・ケト》×1
《リロード》×1
《脳開発研究所》×1
《最古式念導》×1
《重力解除》×1
《念導力》×1
《超能力治療》×1
《ドレインシールド》×1
《神の恵み》×1
《ブローニング・パワー》×1
《サイコ・ヒーリング》×1
《バトル・テレポーテーション》×1
《サイコ・チャージ》×1
《攻撃の無力化》×1

ストラクチャーデッキ・サイキック・フォース - (後書き)

鉄也「なあ作者。」

作者「何だ？」

鉄也「《マックス・テレポーター》が目玉なのか？」

作者「ああ、そうだが。」

鉄也「《マックス・テレポーター》は物足りないだろ。 普通、そこは《メンタルスフィア・デーモン》だろ。」

作者「そうなんだが、これはストラクチャーデッキなんだ。 シンクロは投入されないんだ。」

鉄也「そうだな、ドラグニティもそれに縛られていたな。 それでテレポーターか。 確かにそうだな。 強力なサイキック族は殆どがシンクロだから仕方ないな。 まあ、一応メンマスや緊テレなどのサイキック族サポートが結構あるから実際に売ってたら買う人も出るだろうな。」

作者「だろう？」

鉄也「でも、サイキック族のストラクチャーって出るのかな……」

作者「さあ。 出たら買いたい。」

鉄也「俺も同感だ。

じゃあ皆さん、次回もお楽しみに。」

第26話 第3の痣（前書き）

今回の話は色々苦労した・・・

第26話 第3の痣

「黒崎さん、これがあなたの探していたカードですね。」

「サンキュー、ゴドウィン。さすが治安維持局 頼りにしていただいた甲斐があつた。すまないねえ、カードを探してもらつて。」

「いえ、あなたのような強者が協力してくれるならそれぐらい沢ないことですよ。」

「さすがゴドウィン 話がわかる。」

「カードを手に入れたからにはしっかりと働いてもらいますよ。勿論、成功した時の報酬も用意しております。」

「わかつてるわかつてる。」

S i d e / 鉄也

「すげえ……………」

俺は今、黒崎さんと結衣さんのデュエルに動揺している。

ああいう展開は現世でもよくある事だがこの激戦をソリッド・ビ
ジョンで見ると俺の心臓の鼓動が高まってくる……………

「2人とも頑張れー!!」

S i d e E n d

- S i d e / 結衣 -

「ターンエンドだ。」

結衣 / L P 3 0 0

手札 3 枚

モンスター / なし

魔法・罨／なし

シュウ／LP2000

手札1枚

モンスター／レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン（攻）

魔法・罨／リバーズ×1

さすがシュウ……………

私が全力で行っているのに直ぐに裏返された。

でも、私は負けるわけにはいかない……………

「私のターン、ドロー！」

このカードに賭ける！

「私は壺の中の魔術書を発動！ お互いのプレイヤーはカードを3枚ドローする！」

「ここで手札を増やすことが出来たか。 丁度いい、ボクも手札に困っていた所だ。」

！！ ようし……………

「私は手札から霞の谷のファルコンを召喚する。」

霞の谷のファルコン

4

ATK 2000

『結衣．．．大丈夫か？』

うん、彼は強すぎる。

下手をしたら負けてしまう。

「攻撃表示で召喚したという事はビッグバン・シュートか？」

「．．．．．そうよ、私は装備魔法、ビッグバン・シュートを発動。レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンに装備する。」

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン

10

ATK 2800 3200

「この瞬間、畏カード、威嚇する咆哮を発動！ このターン、相手プレイヤーは攻撃宣言する事は出来ない。よって霞の谷のファルコンでの攻撃宣言は行えない。」

「くっ．．．．．私は光の護封剣を発動！ 相手ターンで数えて3ターンの間、攻撃することは出来ない！！！」

キラキラキラ…………

私の前に輝く剣が現れた。

「ターンエンド。」

「何とか凌いだか。」

結衣／LP300

手札2枚

モンスター／霞の谷のファルコン（攻）

魔法・罾ノビッグバン・シュート（レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンへ装備）、光の護封剣（残り3ターン）

「ボクのターン。レッドアイズを除外させるわけにはいかない。ボクはレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンをリリースし、アドバンスドローを発動。カードを2枚ドロウする。」

レッドアイズが消え、シュウはカードをドロウした。

自分が壺の中の魔術書を発動した事もあってシュウの手札はこれで6枚になった。

「そしてレッドアイズが離れた為、ビッグバン・シュートは破壊される。」

バリーン！

これでもう、2枚目を引かない限り使用は出来ない。

「でもこれで厄介なレッドアイズは消えたわ。」

「さらに、未来融合・フューチャー・フュージョンを発動。ボクはエクストラデッキからF・G・Dを選択し、デッキから真紅眼の飛竜、神竜ラグナロク、青氷の聖夜龍、仮面竜、そしてデルタフライを墓地へ送る。さらに、ボクはロード・オブ・ドラゴン・ドラゴンの支配者を召喚する。」

ロード・オブ・ドラゴン・ドラゴンの支配者

4

ATK1200

「さらに竜の鏡を発動。フィールドのロード・オブ・ドラゴンと墓地の神竜ラグナロクを除外し、エクストラデッキからドラゴン族モンスターを融合召喚する。現れよ、竜魔人 キングドラグーン！！」

シュウの場に竜と人が一体化したようなモンスターが現れる。

竜魔人 キングドラグーン

ATK2400

「そして、手札からD・D・クロウを墓地へ送る。　ダーク・シムルグを除外する。」

「くっ……………」

これでダーク・シムルグが呼べなくなった。

「カードをセットし、ターンエンドだ。」

シュウ/LP2000

手札1枚

モンスター/竜魔人　キングドラグーン（攻）

魔法・罫/未来融合・フューチャー・フュージョン（F・G・D指定、残り2ターン）、リバーズ×1

「私のターン……………」

ドローしたカードはシールド・ウィング……………」

「私はモンスターをセットし、霞の谷のファルコンを守備表示に変更する。　ターンエンド。」

霞の谷のファルコン

4

DEF1400

結衣 / LP300

手札2枚

モンスター / 霞の谷のファルコン（守）、裏側守備表示モンスター

1 1体

魔法・罠 / 光の護封剣（残り2ターン）

F・G・Dを呼ばれたら私は負ける……

光の護封剣で時間を稼いで何とか逆転のカードを引かないと……

……

「ボクのターン。」

- Side End -

- Side / シュウ -

「ボクのターン．．．ドロ。」

引いたカードは．．．．．サイクロンか。

「．．．．．カードをセットし、ターンエンドだ。」

シュウ / LP 2000

手札1枚

モンスター / 竜魔人 キングドラグーン（攻）

魔法・罨 / 未来融合 - フューチャー・フュージョン（F・G・D
指定、残り1ターン）、リバーズ×2

本来、サイクロンで光の護封剣を破壊すればボクは勝つ．．．．
しかし、今は少し時間を空けておこう。

「私のターン．．．．．」

「まだやる気かい？」

「当然よ．．．．．どれだけ私はこの機会を待っていたと思っているの？」

「じゃあ、一つ聞かせてもらおう。君が黒薔薇の魔女に勝つてどうする？」

「．．．．．どういう意味？」

「君が黒薔薇の魔女に勝った結果はどうなる？」

「そんなの簡単な答えよ。私が勝てば魔女は潰れる。どれほど強いであろうが、一度負けを味わえば敗北という屈辱で彼女は懲らしめられてしまう。屈辱に懲らしめられた魔女はもう、2度と人の前へ出られなくなるわ。」

「ふむ、確かにそうなるかもな。しかし本当にそれをやりたいのか？　せっかくのデュエルの実力を汚す気か？」

「．．．．．当然よ。」

「そうか．．．．．」

シロちゃん．．．．．君はどう思う？

君の妹は．．．結衣は大変な事になってきているよ。
ボクには彼女の心の闇を感じる。

「シロちゃん、君はいつになったら結衣に伝えておく？ 痣の事を。」

「……………」

「シロちゃん。」

「……実を言つとまだだ。」

「何でだい？」

「正直、私には自信ない。私は結衣が危険な身になってほしくない。」

「君はそれでも兄かい？ 伝えておかなければそれの方が危険だ。」

「あいつ達」も彼女の力を必ず狙つて来る。」

「……………わかつている。」

「だったら伝えておくべきだ、彼女の為なら。」

結局、シロちゃんは伝えてなかったんだな。
そして今は黒薔薇の魔女の事故によって植物状態となってしまうた。

ボクも自分から伝えておけば良かったかもしれない。はしなかった。

どうやらボクも同じことを考えていたからだろうな。

シロちゃんも美央も．．．．．

でもやはり、結衣には伝えておかなければいけない。

S i d e E n d

S i d e / 結衣

「そろそろ続けるわ。 私はA・ジェネクス・バードマンを召喚する！」

A・ジェネクス・バードマン

3

A T K 1 4 0 0

「レベル4、霞の谷のファルコンにレベル3、A・ジェネクス・バードマンをチューニング！ 霞の谷の雷神よ、今こそその雷の力を解き放て！」

4 + 3 〓 7

「シンクロ召喚！ 轟け、霞の谷の雷神鬼！！」

『グオオオオ！』

霞の谷の雷神鬼

7

ATK 2600

「霞の谷の雷神鬼の効果を発動！ 光の護封剣を手札に戻し、攻撃力を500ポイントアップさせる！」

霞の谷の雷神鬼

7

ATK 2600 3100

「バトル！ 霞の谷の雷神鬼で竜魔人 キングドラグーンを攻撃！
豪雷激烈掌！！」

バチチチ・・・・・・

『グアアア！』

キングドラグーンが悲鳴を上げて破壊された。

「おっと・・・・・・」

シュウ LP2000 1300

「まだ効果を發揮していなかったのに。」

「私はメインフェイス2に入り、光の護封剣を発動。 カードをセ
ットしてターンエンド。」

結衣 / LP300

手札1枚

モンスター / 霞の谷の雷神鬼（攻）、裏側守備表示モンスター1体

魔法・雷／光の護封剣（残り3ターン）、リバーズ×1

「ボクのターン。このスタンバイフェイズ、フューチャー・フュ
ージョンの効果を発動。フュージョン 現れよ、F・G・D!」

「『グオアアアア!』」

F・G・D

12

ATK5000

「この瞬間、風霊術「雅」を発動! セットされているシールド・
ウィングをリリースし、F・G・Dをエクストラデッキに戻す!」

ブオオオオ!

シールド・ウィングが巨大な竜巻と化し、F・G・Dを飲み込ん
だ。

「そしてF・G・Dは破壊されていない為、フューチャー・フュ
ージョンはフィールドに残り続ける。」

これなら万が一、ゴーズの効果を妨害できる。

「ボクはターンエンドだ。」

シュウ / LP 1300

手札 2枚

モンスター / なし

魔法・罠 / 未来融合・フューチャー・フュージョン、リバーズ×2

シュウの2枚の伏せカードは雷神鬼の攻撃宣言の時に発動していなかった。

だったら雷神鬼の攻撃は通るはず……

「このエンドフェイズ、墓地の真紅眼の飛竜^{レッドアイズ・ワイバーン}の効果を発動！ 通常召喚を行っていないターンのエンドフェイズにこのモンスターを除外し、墓地からレッドアイズと名の付いたモンスターを特殊召喚する！ 再び戻って来い、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン！！」

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン

10

ATK 2800

またシュウの厄介なモンスターが……でも、倒せないモ

ンスターではない。

ボマー・ドラゴンを呼ばれる前に排除しないと。

「私のターン。私は霞の谷の雷神鬼の効果を発動する！ 光の護封剣を手札に戻し、攻撃力を．．．」

「させない。ボクはその効果にチェーンしてサイクロンを発動。光の護封剣を破壊する。」

「なっ．．．．．」

バリーン！

「サイクロンが伏せてあつたなんて．．．．．」

そのサイクロン．．．．．私が光の護封剣を発動していた時にセツトしていた筈．．．

もしセツトせずに発動していたら私は雷神鬼を召喚できていなかった．．．．．

「シュウ．．．私を馬鹿にしているの？」

「ん？」

「とぼけないで。何で私に勝てそうな機会を与えたのよ？」

「簡単な理由だ。君の執念を試したかっただけだ。」

「執念．．．．．だったら見せてやるわよ！ 私はシンクロキャンセルを発動する！ 雷神鬼のシンクロを解除し、バードマンとフ

アルコンを特殊召喚する！」

霞の谷のファルコン

4

ATK2000

A・ジェネクス・バードマン

3

ATK1400

「さらに、私はジャンク・シンクロンを召喚する！」

ジャンク・シンクロン

3

DEF500

「ジャンク・シンクロンの効果を発動！ 墓地からシールド・ウィングを特殊召喚する！！」

シールド・ウイング

2

DEF900

「私は．．意地でも．．勝ち続けないといけないのよ。」

どうしても．．．．私はどうしてもあの女を倒したい！

ピカアアア．．．

「！！！」

私の右腕に．．．．．痣が．．．．．痣が見える！！
時々しか見えなかった痣が今ははっきりと．．．「三叉の槍の痣」
が！！

「私は．．私はここで負けるわけにはいかないのよ。レベル4、
霞の谷のファルコン、レベル2、シールド・ウイングにレベル3、
A・ジェネクス・バードマンをチューニング！霞の魔物よ、大蛇
の如く大地を喰らい尽くせ！」

4 + 2 + 3 = 9

「シンクロ召喚！蹂躞せよ、ミスト・ウォーム！！」

『グオオオオ!』

ミスト・ウォーム

9

ATK2500

Side End

Side / 鉄也

ピカアアア

「うつ」

『大丈夫っすか、鉄也?』

「ああ、大丈夫だ。」

どういう事だ？

急に俺の腕に痣が光り始めた。

黒崎さんが痣の力でも解放しているのか？

それとももしかして．．．．．

「ぐっ．．．．．」

俺には感じる．．怒りか憎しみ、そして悲しみのような思いが．
．．．．．

S i d e E n d

S i d e / シュウ

ピカアアア．．．．．

感じるよ、結衣。

とうとう目覚めさせたんだね、君の痣を。

「．．．．．」

でも、本来ならそんな形で目覚めさせたくなかったな。
ボクには見えていた。

君の情熱の炎が今は復讐に燃える炎になってしまっている……

「シンクロ召喚！ 蹂躞せよ、ミスト・ウォーム！！」

ボクのリバーズカードは神の宣告……………発動すればミスト・ウォームの召喚を無効にして破壊出来る……………

「結衣……………気持ちはわかるが復讐なんていい事ではない。」

「今更悪あがきはよしなさい、シュウ。」

「でも、君の気持ちは変わらないようだな。 だったらボクは君を止めたりしない。」

「ミスト・ウォームの効果を発動！ このモンスターがシンクロ召喚に成功した時、相手のカードを3枚まで手札に戻す！」

『グオオオオオ！』

プシューー！！

ミスト・ウォームのおこす煙がボクのリバーズカード、フューチャー・フュージョン、そしてレッドアイズを巻き込んだ。

「……………これであなたはから空きよ。」

「ああ、君の勝ちだ。」

「バトル。 ミスト・ウォームでダイレクトアタック！ ミスト・デストラクション！」

ミスト・ウォームがボクに体当たりしてくる……………

シュウ LP 1300 0

『これはなんと！ あの漆黒のキングが敗北したー！ デュエルアカデミアの学生が無敗戦記を破ったー！ 勝者は神風 結衣だー！』

ボクは結衣の元へ歩いた。

「君の勝ちだ、進出おめでとう。」

「ふん、もう邪魔をしないでもらっわ。 （なんだろう、この感覚・勝ったのに素直に喜べない。）」

「デュエルに勝った君への褒美だ。 受け取れ。」

「え？」

ボクは手札に持っていたカードを結衣に渡した。

せっかくゴドウィンに探してもらったのに使おうと思っていたんだが、結局使わなかったな。

まあ、元々使う為に探してもらったんじゃないけどな。

「竜の………溪………」

「このカードがいずれ君の力になる。」

ボクはステージから去っていった。

さて、そろそろあいつらも動き出しているだろうし計画を練らないとな。

結衣、そして村上クンにも色々説明しないとね。

S i d e E n d -

S i d e / 大寺

「ほお……いい物を見せてもらった。 ルーカス、データは届いてるか？」

『ああ。 よくやった、慎太郎。 やはり神風 結衣は「業火の竜」に選ばれた者だ。 じゃあ、次の観察対象、「不屈の戦士」の可能性である者のデータも頼む。』

「了解。」

S i d e E n d

S i d e / 鉄也

結衣さんが黒崎さんに勝った。
これで第1準決勝が決まった。

不動 遊星 V S 神風 結衣

正直、結衣さんの勝利に喜んであげたいが、どうも今はそんな気がしない。

あ、結衣さんが待合室へ戻ってきた。

「進出おめでとう、結衣さん。」

「．．．．．ありがとう、鉄也。 またあなたのカードに助けてもらった。」

結衣さんの表情は少し元気が無かった

「いや、それ程でも。それより大丈夫？」

「うん、ちょっと緊張の糸が切れたただけだから。大丈夫よ。」

「．．．．．彼女の顔を見るとそれが本音じゃないのはわかっていた。」

「さっき感じていた思い．．．．．」

「そして俺の痣が光ったのはもしかして．．．．．」

「あの．．．．．」

「ん？」

「いや、なんでもない。」

「人の感に障りそうだから聞かない事にした。
ま、今はとりあえず．．．．．」

「そろそろ俺の番だな。」

「頑張つてね。」

「ああ。」

「俺はステージへと向かって行つた。」

『さあ、本日の3試合目だ！　まずは戦う少年、村上鉄也だ！！！』

さて、一丁暴れるか。

『そしてその少年の相手となるのは――黒き暴風、ボマーだ――！』

俺の前にボマーが現れた。

「お互いいいデュエルをしましょう。」

「ああ。」

ゾクッ！

ちょっとボマーさん・・・あなたの視線が少し怖いんですけど・・・
・・・どうしてでしょうか？

『それからもちろん、ダーク・ダイク・ボンバーは今から禁止カードとなります。 よって今後の使用は禁止となります。』

T
O

B
E

C
O
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.
.
.
.
.
.
.

ストラクチャーデッキ・シャドウ・オブ・インフィニティ・（前書き）

嘘予告第2弾です。

一度やってみたかったストラクチャーデッキです。

今回のボイスはジャック・アトラスです。

ストラクチャーデッキ・シャドウ・オブ・インフィニティ

CV：ジャック・アトラス

「封印されし幻魔の王者よ、世界を制する力を奮い起こせ！ 蹂躞せよ、幻魔皇ラビエル！」

「遊戯王5D'sオフィシャルカードゲーム、ストラクチャーデッキ・シャドウ・オブ・インフィニティ」。好評発売中。」

4月13日発売

1050円（税込み）

モンスターカード19枚、魔法カード13枚、罠カード8枚
制限カード3枚、準制限カード3枚
再録カード1枚

《幻魔皇ラビエル》×1

《軍神ガープ》×1

《死霊騎士デスカリバー・ナイト》×1

《ジャイアントウィルス》×2

《幻銃士》×1

《ジャイアント・オーク》×1

《マッド・デーモン》×1

《E・HERO ヘル・ブラット》x 1
 《ダーク・リゾネーター》x 1
 《スナイプストーカー》x 1
 《魂を削る死霊》x 1
 《邪帝ガイウス》x 1
 《ヘルウェイ・パトロール》x 1
 《バトルフェーダー》x 1
 《E・HERO ヘル・ゲイナー》x 1
 《E・HERO マリシヤス・エッジ》x 1
 《グレイブ・スクワーマー》x 1
 《クリボー》x 1
 《デビルズ・サンクチュアリ》x 1
 《終焉の焰》x 1
 《サイクロン》x 1
 《闇の誘惑》x 1
 《ヴィシヤス・クロー》x 1
 《クリボーを呼ぶ笛》x 1
 《一族の結束》x 1
 《増殖》x 1
 《機雷化》x 1
 《ダーク・バースト》x 1
 《手札抹殺》x 1
 《悪夢再び》x 1
 《デーモンの斧》x 1
 《ヘイト・バスター》x 1
 《冥王の咆哮》x 1
 《リビングデッドの呼び声》x 1
 《奈落の落とし穴》x 1
 《闇の幻影》x 1
 《盗賊の七つ道具》x 1

《隠れ兵》 x 1

《邪神の大災害》 x 1

ストラクチャーデッキ・シャドウ・オブ・インフィニティ・（後書き）

今回のCVは王者とパワーのイメージがあるジャックで正しいですね。

ストラクチャーデッキの名前は《幻魔皇ラビエル》が収録されていた《SHADOW OF INFINITY》をそのままカタカナにただけです。

ちなみに嘘予告ストラクチャーデッキはこの小説のお約束となりました。

もし買いたいと思ったら「買いたい」とかそういう言葉を感想に書いてください（笑）

ちなみにトーチ・ゴーレムが入っていないのはワザとです。

次のはどんなストラクチャーデッキを書こうかな・・・

第27話 対決！！ 機械巨竜 VS 爆撃戦艦（前書き）

今回は鉄也 VS ボマーです

第27話 対決!! 機械巨竜 VS 爆撃戦艦

S i d e / 鉄也

「デュエル!!」

鉄也 L P 4 0 0 0

V S

ボマー L P 4 0 0 0

「私のターン! 私はキラ・トマトを召喚する!」

相手の場にトマトのおばけが現れた。

キラ・トマト

4

A T K 1 4 0 0

「カードを2枚セットし、ターンエンドだ。」

ボマー／LP4000

手札3枚

モンスター／キラー・トマト（攻）

魔法・罾／リバーズ×2

キラー・トマトか．．．．．確かにリアクターのデッキには必要だな。

「俺のターン。俺はフィールド魔法、ギア・タウン歯車街を発動する！」

「（歯車街！？）」

ゴゴゴゴゴゴ．．．

周りに巨大な歯車の街にが現れた。

「さらに、俺はイエロー・ガジェットを召喚する！」

黄色い歯車が現れ、変形した。

イエロー・ガジェット

4

DEF1200

「イエロー・ガジェットの効果を発動！ デッキからグリーン・ガジェットを手札に加える！ そしてカードをセットしてターンエンドだ。」

鉄也／LP4000

手札4枚

モンスター／イエロー・ガジェット（守）

魔法・罠／リバーズ×1

フィールド／歯車街

「どうやら前の試合とは違うデッキのようだな。私のターン、私はモンスターをセットし、バトル！ キラー・トマトでイエロー・ガジェットを攻撃！」

ガブツ！

キラー・トマトはイエロー・ガジェットに噛み付いた。

「ターンエンドだ。」

ボマー／LP4000

手札3枚

モンスター/キラー・トマト(攻)

魔法・罾/リバーズ×2

フィールド/歯車街

「俺のターン！ 俺は古代の機械獣アンティーク・ギアビーストを召喚！」

古代の機械獣

6

ATK2000

「古代の機械獣はレベル6だが歯車街が存在する場合、リリースを1体少なくする事が出来る。バトル！ 古代の機械獣でキラー・トマトを攻撃！ パウンド・クローー！！」

ズバッ！

機械獣の爪がキラー・トマトを切り裂いた。

ボマー LP4000 3400

「キラー・トマトの効果を発動！ このモンスターが戦闘によって破壊された時、デッキから攻撃力1500以下の闇属性モンスターを特殊召喚できる！」

「無駄だ。機械獣が戦闘に破壊したモンスターの効果は無効になる。」

「何！？」

「ターンエンドだ。」

鉄也／LP4000

手札4枚

モンスター／古代の機械獣（攻）

魔法・罨／リバーズ×1

フィールド／歯車街

悪いな、ボマー。

今回の俺のデッキはいつものデッキじゃ勝ちにくいかもしれないから、古代の機械デッキにしておいた。

このまま一気に行くぜ。

「私のターン！ 私は名推理を発動する。相手プレイヤーはレベ

ルを宣言し、デッキトップから通常召喚可能なモンスターが出るまでカードをめくり、そのモンスターが相手プレイヤーが宣言したレベルだった場合、墓地へ送る。違っていた場合、そのモンスターを特殊召喚する。さあ、お前のレベルを宣言しろ。」

レベルか．．．ボマーのデッキから考えると．．．．．

「俺が宣言するのは．．．５だ！」

「ならカードをめくらせてもらおう。大嵐．．．万能地雷 グレイモア．．．光の護封剣．．．ほお、モンスターカードだ。私のモンスターは．．．．．」

「．．．．．」

「レベル２、魔貨物車両 ボコイチだ！」

「ボコイチ！？」

相手の場に電車型のモンスターが現れた。

魔貨物車両 ボコイチ

２

DEF500

「さらに、リバースカードオープン、同姓同名同盟を発動！ 自分

フィールドのレベル2以下の通常モンスターを選択し、デッキから
同盟モンスターを可能な限り特殊召喚する！ 私はボコイチを2体
特殊召喚する！」

魔貨物車両 ボコイチ×2

2

DEF500

ボコイチを複数召喚・・・という事は・・・

「私はセットされているモンスターを反転召喚！ 魔装機関車 デ
コイチ！」

ボマーの場に機関車のようなモンスターが現れる。

魔装機関車 デコイチ

4

ATK1400

まさかそう来るとはな・・・少し原作知識に頼りすぎたか。

「魔装機関車 デコイチの効果を発動！ デッキからカードを1枚

ドロ―する。　この時、自分フィールドに魔貨物車両　ボコイチが存在する場合、その枚数分、追加ドロ―する。　これで4枚ドロ―だ。」

まずいな．．．．．あれだけハンドアドバンテージされたらこっちがピンチになりそうだ。

「私は魔貨物車両　ボコイチをリリースし、サモン・リアクター・AIをアドバンス召喚する！」

サモン・リアクター・AI

5

ATK2000

「さらに装備魔法、黒いペンダントを発動！　サモン・リアクター・AIに装備する！」

サモン・リアクター・AI

5

ATK2000　2500

「バトル！　サモン・リアクター・AIで古代の機械獣に攻撃！」

サモン・リアクターの効果は厄介だ。
早めに破壊しておかないとな。

「畏発動、炸裂装甲！！ サモン・リアクターを破壊する！」

「何！？」

ドッガン！

サモン・リアクターが爆発した

「くっ．．．だが、黒いペンダントの効果を発動だ。 フィールド
上のこのカードが墓地へ送られた時、500ポイントのダメージを
与える。」

鉄也 LP4000 3500

「私はメインフェイズ2に入り、カードを2枚セットしてターンエ
ンドだ。」

ボマー／LP3400

手札5枚

モンスター／魔装機関車 デコイチ（攻）、魔貨物車両 ボコイ

チ（守）×2

魔法・罾ノリバース×3

フィールドノ歯車街

「俺のターン！ 俺はグリーン・ガジェットを召喚！」

緑色の歯車が現れ、変形した。

グリーン・ガジェット

4

ATK1400

「グリーン・ガジェットの効果を発動！ デッキからレッド・ガジェットを手札に加える！」

「この瞬間、私は威嚇する咆哮を発動！ このターン、相手は攻撃宣言が出来ない。」

上手く凌いだか。

「カードを2枚セットし、ターンエンドだ。」

鉄也／LP3500

手札3枚

モンスター／古代の機械獣（攻）、グリーン・ガジェット（攻）

魔法・罠／リバーズ×2

フィールド／歯車街

「私のターン！ 私は手札を1枚捨て、ライトニング・ボルテックスを発動する！」

ゴゴゴゴ・・・ピカッ！

空から黒雲が現れ、雷が鳴り始めた。

今更言っけど海馬コーポレーションの技術が凄えな。

「リバーズカードオープン、魔宮の賄賂！ ライトニング・ボルテックスの効果を無効にし、破壊する！」

「何！？」

黒雲が消えた。

「だが、魔宮の賄賂の効果でドローさせてもらっつ。」

危なかった・・・俺の場がから空きになったら大ダメージだった。

「だが、お前の魔宮の賄賂が仇になった。」

「え？」

「私は月の書を発動する！ 魔装機関車 デコイチを裏側守備表示に変更する！」

何で月の書を．．．そのまま普通に守備表示へ変更させればいいじゃないか。

「さらに、墓地からADチェンジャーのを発動！」

ADチェンジャー．．．ライティング・ボルテックスのコストで捨てたのか。

知らねえぞ、そんなカード。

「このモンスターを墓地から除外する事でフィールド上のモンスター1体の表示変更を行う。私は裏側守備表示の魔装機関車 デコイチを攻撃表示に変更させる！」

「何だと!？」

つまり、デコイチの効果で追加ドロップって意味か!？

「私の場にはボコイチが2体存在する。よって3枚ドロップ！」

ちょっと待て、手札増強が良すぎるだろ！
ガジェット以上に稼いでるぞ！

「さらに私はメカ・ハンターを召喚する！」

ボマーの場に悪魔みたいなロボットが現れた。

メカ・ハンター

4

ATK1850

「そして魔貨物車両 ボコイチを2体とも攻撃表示へ変更だ！」

魔貨物車両 ボコイチ×2

2

ATK500

攻撃表示？

まさか……………

「バトル！ メカ・ハンターで古代の機械獣を攻撃だ！」

攻撃力は俺の機械獣のほうが上だが、当然あれを発動する気だな。

「このダメージステップに速攻魔法、リミッター解除を発動！ 私の機械族モンスターの攻撃力を全て倍にする！」

メカ・ハンター

4

ATK 1850 3700

魔装機関車 デコイチ

4

ATK 1400 2800

魔貨物車両 ボコイチ

2

ATK 500 1000

まずい、攻撃が全て通ると俺の負けだ。

「ガード・ブロックを発動！ 戦闘ダメージを0にし、カードを1枚ドロウする！」

グサッ！ グサッ！！

メカ・ハンターの武器が機械獣に刺さり、八つ裂きにした。

鉄也 LP 3500

「魔装機関車 デコイチでグリーン・ガジェットを攻撃！」

シュポーーー！

機関車がレッド・ガジェットを轢き飛ばした。
轢き逃げかよ、酷え。

鉄也 LP3500 2100

「さらに、魔貨物車両 ボコイチでダイレクトアタックだ！」

キイーーーーー！！

「うわあっ！」

2台の列車が俺に向かって走ってきた。

ズドーーン！

「どひゃあああ！」

跳ね飛ばされました。

ソリッド・ビジョンなのに跳ね飛ばされました。

「どひゃあああ！」と叫んで跳ね飛ばされました。

鉄也 LP 2100 100

「くっ．．．だが、エンドフェイズでリミッター解除の効果でお前のモンスターは全滅だ。」

「私はターンエンドだ。」

バリリリンー！！

ボマーがエンドフェイズを宣言したと同時に相手のモンスターは全滅した。

ボマー／LP 3400

手札5枚

モンスター／なし

魔法・罠／リバーズ×2

フィールド／歯車街

こりゃあ、少し大変だな．．．今の俺の手札にレッド・ガジェット以外のモンスターが無い。
罠カードならあるが、トラップ・リアクター召喚されたら負けてしまう。

「ドローー!!」

「ご隠居の猛毒薬!!」

これでライフを回復できる・・・いや、それ以上の組み合わせが出来る!

「俺はレッド・ガジェットを召喚する!」

レッド・ガジェット

4

ATK1300

「レッド・ガジェットの効果を発動! デッキからグリーン・ガジェットを手札に加える・・・だが、俺はその効果にチェーンしてご隠居の猛毒薬を発動! ライフを1200ポイント回復させる!」

「このタイミングでチェーンとは・・・まさか!」

「俺はさらにご隠居の猛毒薬にチェーンして連鎖爆撃チェーン・ストライクを発動! このカードを発動しているチェーンの数だけ相手に400ポイントのダメージを与える!」

Chain 3 連鎖爆撃

「くっ……………」

ボマー LP 3400 2200

Chain 2 ご隠居の猛毒薬

鉄也 LP 100 1300

Chain 1 レッド・ガジェット

「俺はイエロー・ガジェットを手札に加える！ そしてバトル、レッド・ガジェットでダイレクトアタック！」

レッド・ガジェットが相手に走っていった。

ズドン！！

ボマー LP 2200 900

「よし、当たった!」

「いい攻撃だ．．．．だが、そのダメージを私の戦力に変えさせてもらおう! 私は手札を1枚捨て、ダメージ・コンデンサーを発動! 自分が受けた戦闘ダメージ以下のモンスターをデッキから特殊召喚する! 私が召喚するのは．．．トラップ・リアクター・^{ダブルアール}RRだ!」

トラップ・リアクター・RR

4

DEF1800

「くっ．．．カードを1枚セットし、ターンエンドだ。」

鉄也／LP1300

手札2枚

モンスター／レッド・ガジェット（攻）

魔法・罠／リバーズ×1

フィールド／歯車街

まずい．．．ライフは俺が勝っているが状況は手札で勝っている
ボマーの方がかなり有利だ。

ジャイアント・ボマー・エアレイドを召喚したら俺の敗北だ．．
．．．．

ここは．．．このなんとか耐えるしかない！

「私のターン．．．」

S i d e E n d

S i d e / ボマー

「私のターン、ドロー！！　これは．．．」

ブラック・ボンバー．．．．．

ゴドウィンは約束した．．．私が手を貸せば故郷への支援を率い
てくれると．．．．．

しかし私は奴に騙された．．．．．あの男のせいで弟達を失っ
た！

そんな時．．．．．

「よう、おっさん！」

「！ 誰だ！？」

私が夜道を歩いていた時、何者かが私に声をかけた。

「あんたの故郷・・・滅んだんだろ。」

私に話しかけたのは赤いショートカットの背が低いボーイッシュな少女であった。

「何故君が知っている。」

「悪いけどそれは言えねえよ。それよりしたいんだろ、復讐を・・・」

「・・・子供には関係ない話だ。」

「（ピキ！！） 誰が子供だ！ オレは今年で20だ！」

「す、すまん・・・あまりにも背が低かったから・・・」

「人が気にしている事をお！！」

少女は背が低いことを言われて怒り出した。

「まあ、それよりおっさん．．．お前はゴドウィンを許せないだろう。」

「．．．．．」

「ほおら、おっさんにこのカードを渡すよ。これなら優勝も楽勝だ。」

そう言って少女は私にカードを渡した。

「このカードは．．．．．!？」

いつの間にか少女はいなくなっていた。

そうだ、私は負けるわけにはいかないのだ！
故郷のためにも．．．姉弟達のためにも．．．

「村上 鉄也．．．お前はいいデュエリストだ。私もなかなか楽しませてもらった。」

「それはどうも。あんたも結構やるじゃねえか。」

「だが、私は負けるわけにはいかない。　ここでお前を倒させてもらう！　私はブラック・ボンバーを召喚する！」

- Side End -

- Side / 鉄也 -

「私はブラック・ボンバーを召喚する！」

ボマーの場に黒くて丸い球体が現れる。

ブラック・ボンバー

3

ATK100

「ブラック・ボンバーの効果を発動！　このモンスターが召喚に成功した時、墓地からレベル4・闇属性・機械族モンスターを特殊召喚する！」

ブラック・ボンバーはモンスターを生み出した。

メカ・ハンター

4

DEF 800

「さらに、私は装備魔法、シンクロ・ヒーローを発動！ ブラック・ボンバーに装備し、レベルが1上がる！」

ブラック・ボンバー

3 4

ATK 100 500

！！ 狙いはレベル8のシンクロモンスターか！？

「レベル4、メカ・ハンターにレベル4、ブラック・ボンバーをチューニング！！ 暗闇の底より聞こえし慟哭よ、死神の鎧をまとい、姿を現すがいい！」

．．．．． 一体何を召喚する気だ．．．

4 + 4 = 8

「シンクロ！ 現れる、ダーク・フラット・トップ！」

ダーク・フラット・トップ

8

DEF 3000

「な、何だと!？」

ボマーの場に巨大な浮いている戦艦が現れた。

「おい、ボマー！ 何でお前がそのカードを持っている!？」

「・・・お前には関係のない事だ。」

そんな馬鹿な・・・

確かにダーク・フラット・トップはボマーのカードだ。

だが本来、あのカードはボマーがダークシグナーに覚醒するまで持っていない筈だ。

それだけではない・・・あのモンスターはダークシンクロモンスターのはずだが召喚方法は普通のシンクロ召喚だ。

シグナーとダークシグナー以外に存在する痣・・・現世で俺を殺した邪神の男・・・別世界の俺・・・そしてダークシンクロではな

いダークシンクロモンスター．．．．やはりこの世界は原作とは違う展開があるな．．．．

「私はリビングデッドの呼び声を発動！ 墓地に存在するサモン・リアクター・AIを特殊召喚する！」

サモン・リアクター・AI

5

ATK2000

「さらにダーク・フラット・トップの効果を発動！ 墓地から「リアクター」と名の付いたモンスター、またはジャイアント・ボマー・エアレイドを召喚条件を無視して特殊召喚する事が出来る！ 現れよ、マジック・リアクター・AI D！！」

マジック・リアクター・AI D

3

ATK1200

「ダメージ・コンデンサーのコストで墓地に送ったか．．．．」

「そしてサモン・リアクター・AIの効果を発動！ マジック・リ

アクター・A I D、トラップ・リアクター・R R、そして自身を墓地へ送り、デッキからジャイアント・ボマー・エアレイドを特殊召喚する！」

ジャイアント・ボマー・エアレイド

8

A T K 3 0 0 0

3体のモンスターが合体したようなロボットが現れる。

「私はジャイアント・ボマー・エアレイドの効果を発動！ 手札を1枚墓地へ送る事で、相手のカードを1枚破壊する！ シャープ・シューティング！」

バババババツ！！

ジャイアント・ボマー・エアレイドのマシガンが俺の伏せカードを打ち抜いた。

「俺はその効果にチェインして和睦の使者を発動！ このターン自分が受ける戦闘ダメージは0となり、モンスターは戦闘によって破壊されない！」

バチチチツ！

レッド・ガジェットの周りにバリアが現れた。

「カードをセットし、ターンエンドだ。」

ボマー／LP900

手札1枚

モンスター／ジャイアント・ボマー・エアレイド（攻）、ダーク・フラット・トップ（守）

魔法・罠／リビングデッドの呼び声（発動中）、リバーズ×1
フィールド／歯車街

「（伏せたカードは奈落の落とし穴・・・これでどうあがこうと勝ち目は無い。）」

「俺のターン・・・」

「まだやるのか・・・」

「当たり前だ！俺はここで終わるわけにはいかない！」

そうだ・・・相手がどれだけ強かろうと、俺は決めたんだ！
希望をつかむ為なら最後まで戦うと！

「ドロー・・・！」

・・・このカードに賭けるしかない！

「俺はイエロー・ガジェットを召喚する！ イエロー・ガジェットの効果でデッキからグリーン・ガジェットを手札に加える！」

イエロー・ガジェット

4

DEF1200

「馬鹿め。 ジャイアント・ボマー・エアレイドの効果を発動！ 召喚されたイエロー・ガジェットを破壊し、800ポイントのダメージを与える！ デス・ドロップ！」

ヒュルルルル・・・チュドーン！

イエロー・ガジェットに爆弾が投下した。

「くっ・・・」

鉄也 LP1300 500

「俺はリロードを発動！ 手札をデッキに戻し、その枚数分ドロ―する！」

俺は手札をデッキに戻した。

シュシュシュシュッ！！

俺はこのドローにかけるしかない！

「俺は2枚戻した為、2枚ドローする！」

引いたカードは………ようし！！

「俺はダブル・サイクロンを発動する！俺が破壊するカードは
前の伏せカードと、俺の歯車街だ！」

「何！？」

ブオオオオ！！

俺の歯車街と相手の伏せカードが破壊された。

「さらに、歯車街の効果を発動！このカードが破壊された時、
手札・デッキ・または墓地から、「アンティーク・ギア」と名のつ
いたモンスターを特殊召喚する事が出来る！ジャイアント・ボマー・
エアレイドの効果は1ターンに1度だけだ！よって古代の機械巨
竜の召喚を妨害できない！現れよ、古代の機械巨龙！！」

『グオアアア！！』

古代の機械巨竜

8

ATK 3000

「いいモンスターだ．．．．だが、そのモンスターは私のジャイアント・ボマー・エアレイドと互角だ。さらにダーク・フラット・トップがジャイアント・ボマー・エアレイドを蘇生させる事ができる。相打ちさせた所で無駄な足掻きだ。」

「俺は古代の機械巨竜でジャイアント・ボマー・エアレイドを攻撃する！」

「何！？ まさか．．．」

『グオアアアア！！』

俺の機械巨竜があいてのモンスターに突進していく．．．

「このダメージステップに速攻魔法、リミッター解除を発動！俺の機械族の攻撃力はすべて倍になる！」

古代の機械巨竜

8

ATK 3000 6000

「アルティメット・ギアブレイク!!」

ドッガン!!

古代の機械巨竜の衝突により、大爆発が起こった。

「うわあああ!」

ボマー LP9000

「勝った・・・」

少し危なかったが勝ったぜ。

『ついに決着! 村上 鉄也、あの状況からが見事にボマーを撃ち破ったぞ!!』

「いいデュエルだった、ボマーさん。 だが少し聞きたい事が・・・」

俺はボマーに近づいた。

知っておく必要がある、何故あんたがそのカードを持っているのかを・・・

『よって次の戦いは『見事なデュエルだった．．．私の完敗だ．．．』』

「！」

喋っているMCのマイクをジャックした。

『私は負けた．．．だが、私の使命は終わってはいない！』

ここだな．．．ゴドウィンが襲われるフラグは．．．

『私はこの大会に優勝し、式典でゴドウィンが行った事実を公にするつもりだった。だが、今になってそれは叶わぬ夢．．．ならば、この場で復讐を果たすまで！ これを観よ！』

ボマーが指を差した先にモニターが現れ、とある村が映し出されていた。

『無に帰した我が村を！』

止められるモニターだが何故かゴドウィンはモニターを止めなかった。

『これが私の村だ！ 故郷だ！ ゴドウィンは赤き竜を復活させようと我が村を実験材料にした．．．そして私の村は．．．』

突如村が大爆発を起こし、跡形もなく消え去っていた

『村人全員が行方不明．．．そしてその中に私の姉弟もいた．．．』

いったい何をする気だ．．．D・ホイールを持っていない状態でゴドウィンはどうするんだ？

ボマーはラジコンのコントローラーのような物を取り出した。

ピッ！

『遊星！ ジャック！ やつを信じるな！ ゴドウィンに赤き竜を渡してはならない！』

ブシューーン！

「何だ！？」

ギューーン！

巨大なD・ホイールが飛び出した。

「な、自動操縦！？」

ボマーの奴、D・ホイールを自動操縦でこのステージに呼び出したのか！？

てゆうかそれ、自動操縦が出来るD・ホイールだったのか！？ オリジナル設定かもしれんが、その技術をもつと別の事に役立てるよ！

『やつとはこの俺が決着をつける！ 私の村のために！ 姉弟のために！ この悲しみを二度と繰り返させないために！』

ボマーはD・ホイールに乗り始めた。

ギューーーン!!

ボマーはD・ホイールを思い切り走らせた。
まずい・・・遊星がいない!

ボマーはカーブの盛り上がっている部分をジャンプ台にしてゴド
ウインのいる方向へと飛んでいった。

「そうはさせるかああああ!!」

ズダダダダッ!!

ジュワァ・・・

「!?!」

俺の左腕が・・・痣が輝きだした。

「これは・・・」

力が・・・力がわいてくる!!

「うおおおお!!」

俺は思い切り走って飛んだ。

「な、何!?!」

俺は追いついた・・・何となくジャンプが届いた!!

「スクラップ・・・フィストオオ!!」

ドッガアーーン！

俺はボマーのD・ホイールに思い切り拳をぶつけた。

「うわあああ！」

ズドーン！

D・ホイールが落下し、バラバラになった。

「ぐっ……………」

「うわあああ！！！」

ドーーーーーン！

俺も空中にいたのでそのまま落下しました。

「いっててて……………」

ボマーは俺に近づき、俺の胸ぐらを掴んだ。

「貴様……………何故止めたあ！！！」

ボマーは復讐を妨害された事に怒りを露にした。

「ボマー……………気持ちは分かるが、力づくで決着を付けようとする
お前は奴と同じだ！」

「う．．．うおおあああ！！」

ボマーは何も言い返せず、叫ぶだけだった．．．
そして会場はあまりの出来事にただ啞然とするしかなかった。
するとゴドウィンは何も無かったのように報告を始めた。

「会場の皆様、御安心下さい。私は治安維持局長官として皆さんを守る責任があります。どんな事が起ころうとも、皆さんを守ります、この命に代えても。」

そして会場はゴドウィンの言葉を信じ拍手を送るのだった。
ゴドウィン．．．守る責任があるというのなら今の映像を説明しろよ。

セキュリティが動き始めた。

「あ、ちょっと待ってくれ！！」

「危険です、下がってください。」

ボマーはセキュリティによって連行された。

「ああ、くそっ！！」

聞かなければならない情報があるというのに！

『鉄也、大丈夫ですか？』

『クリクリ〜！』

「ああ、大丈夫だ。」

俺は立ち上がった。

「うっ！」

ズキィー！

「痛てててて．．．さっきの落下か．．．」

さっきまで輝いていた俺の痣は消えていた。

「．．．．．」

仕方ない、このまま次へ進むしかない。

第12試合 十六夜 アキ VS 来宮 虎堂

次の試合．．．激戦になるな。

「ジャンク．．．クリボー．．．頼むぞ、お前たち。」

『ラジャーー！！』

『クリリ〜〜！』

S i d e E n d -

T o B e C o n t i n u e d

S i d e / ルーカス

「．．．ボマーが敗れたか。」

「そんな．．．折角強力なカードを渡したのに。」

「落ち込むな、暁。　たまに負ける事も仕方が無い。」

「わかった．．．オレ、頑張るよ。」

「わかってる。　俺はお前を信じるさ。　だが俺たちの出番はまだ

だ。
」

「そうなんだ・・・」

「ああ、既にシエンと帝^{みかど}が動いている。
のモノにする為に・・・」

痣の力を一刻も早く俺達

第27話 対決！！ 機械巨竜 VS 爆撃戦艦（後書き）

今回の鉄也のデッキは【ガジェット・チェーン】でした。

第28話 嵐の前の静けさ（前書き）

今回はネタが少しあります。

第28話 嵐の前の静けさ

Narration -

II「ボマーがやられたか……………」

IV「残念だったわね、彼は全然役に立たなかったわ。所詮、彼は雑魚だったという事ね。　どうやらカードを渡すの損したみたいだね。」

V「……………いや、そうでもなかったみたいだ。」

IV「え？」

V「これを見る。」

モニターに映像が映った。

「うおおお！！　スクラップ・フィストオオ！！」

ドッガーーン！

「うわああああ！！」

V「ストップ。」

ピッ！

IV「これは……………」

II「なるほど、ボマーの敗北も無駄ではなかったという事か。」

V「大寺から送ってきたデータだとうやらボマーが復讐を止めようとした時に痣の力が動き出したようだ。」

IV「でも、まだ完全に覚醒していないという事でしょう。」

V「ああ。だが、次の試合で完全に覚醒する可能性がある。」

II「なるほど、黒薔薇の魔女か……………確かにあの女なら可能性はあるな。」

V「そういう事だ。」

IV「そういえば「不屈の戦士」と「業火の竜」のカードは見つかったの？」

V「「業火の竜」は帝が既に捜査済みだ。「不屈の戦士」は今……………シエンが探している。」

II「ルーカスの方は？」

V「問題ない、あいつは順調に仕事をこなしている。」

II「じゃあまだ俺たちが動く必要は無いというわけですね。」

V「ああ、今は他の奴らに任せればいい。」

II「……………それじゃあ、ポケモンやろうぜ!」

V「…………真面目にやれ。」

II「いいじゃん。だって俺たちは今何もしなくてもいいんだろう? じゃあ遊んでもいいじゃん。」

V「……………」

II「もう、いいよ。サンドラ、ポケモンやろうぜ。」

IV「OK! 何を使おうかな……………ギャラドスにしようかな……………ペンドラーも捨てがたいわね。」

II「ようし……………俺はメタグロスを入れようかな……………」

IV「じゃあ、ローテーションバトルね。」

V「……………DS取ってくる。」

Side End

S i d e / 鉄也

「ぐあああああ!!」

虎堂 L P 1 9 0 0 2 2 0 0

「（ぐ．．．．．体が引き裂かれる．．．魔女は本気で俺の命を削るつもりだ．．．ライフが0になったら報酬どころじゃない．．．俺の命まで割に合わねえぞ!）」

- 待合室 -

「あゝあ、あのおっさんフルボッコされてるな。」

「そうね。さすが黒薔薇の魔女なだけはあるわ。」

今の状況を説明しよう。

俺は今、待合室で結衣さんと一緒に次の試合を見ている。

原作通り、アキが来宮 虎堂とデュエルしている。

ちなみに関係ないが俺がこいつに付けたあだ名は「肩メガネ」だ。

「カードを1枚伏せてターンを終了。 このエンドフェイズ、フェニキシアン・クラスター・アマリリスを墓地から守備表示で特殊召喚する事ができる。」

フェニキシアン・クラスター・アマリリス

7

DEF0

アキ/LP2800

手札1枚

モンスター/フェニキシアン・クラスター・アマリリス(守)、

ローズ・トークン×2(攻)

魔法・罠/ローズ・フレイム、リバーズ×1

「ローズ・フレイムの効果を発動！」

「うわあああ!!!」

虎堂 LP2200 1700

「はぁ．．．はぁ．．．ば、化け物め．．．」

考えてみればアキがドSの素質があるように見えるのは俺だけか？

「俺のターン！ 3体のローズ・トークンをリリースし、手札から『マッド・プロファイラー』を特殊召喚する！」

マッド・プロファイラー

8

ATK2600 1300

ローズ・トークン

2

ATK800

「マッド・プロファイラーはフィールドの3体のモンスターをリリースすることで、手札から特殊召喚することができる。（もうこれは仕事じゃねえ！ 金もいらねえ！ さっさと勝ってここを去る！）マッド・プロファイラーのモンスター効果！ 手札を1枚墓地に送り、フィールド場に墓地へ送った同じ種類のカード1枚をゲームから除外する！」

墓地に送ったのは魔法カードであるためブラック・ガードンが除

外された。

マッド・プロファイラー

8

ATK 1300 2600

「まだだ！ マッド・プロファイラーの効果を使っぜ！ モンスターカードを墓地へ送り、フェニキアン・クラスター・アマリリスをゲームから除外する！」

そして今度はフェニキアン・クラスター・アマリリスが除外された。

意外と強いな、その効果。

「バトルだ！ マッド・プロファイラーよ、ローズトークンを攻撃！」

アキ LP 2800 1000

さらにアキを追い詰めたことにより会場は盛り上がっていた。

「良いぞ！ もっと化け物を攻撃しろ！」

「思い知ったか。 化け物はデュエルを汚すな！ 巢に帰んな！
手札より装備魔法、デストラクション・インシュランスを発動！」

アレだけ散々攻めて酷いことを言うな、こいつ。
ちよっかいを出したお前が悪いんだろうが。

「あのカードは破壊された時、相手プレイヤーに装備モンスターの
攻撃力の半分のダメージを与える効果があるわね。」

「ああ、あれで彼女は迂闊にマッド・プロファイラーを破壊できな
くなったという事だ。」

デュエルは続く。

「さらに装備魔法、ライト・ロー・プロテクションを発動！」

「次のカードは装備モンスターの攻撃力がカードの効果によって変

化した場合、そのカードを破壊するカードね。 あの2枚のカードを装備したという事は・・・」

「ああ、あのモンスターの対策だ。」

てゆうか2枚目の装備カードいらねえ・・・

「ターンエンドだ！」

肩メガネ/LP1700

手札0枚

モンスター/マッド・プロファイラー（攻）、ヘイト・エージェント（守）

魔法・罫ノディストラクション・インシュランス（マッド・プロファイラーへ装備）、ライト・ロー・プロテクション（マッド・プロファイラーへ装備）

「私のターン！ 私は夜薔薇の騎士を召喚する！」

夜薔薇の騎士

3

ATK1000

「レベル2、ローズ・トークン2体とレベル3、チューナーモンスターの夜薔薇の騎士をチューニング。冷たい炎が世界の全てを包み込む、漆黒の花よ開け！」

2 + 2 + 3 || 7

「シンクロ召喚！ 現れよ、ブラック・ローズ・ドラゴン！」

『グアアア！』

ブラック・ローズ・ドラゴンが現れたことによって実体化しているため会場が震えていた

ブラック・ローズ・ドラゴン

7

ATK2400

「魔女の切り札・・・来いよ！ 振り返ちにしてやる！ 親にも捨てられた化け物が！」

言っちゃったよ、この肩メガネ……………

「ピキ！」

カラン……………カラン……………

今の言葉がアキの心の引き金となり、髪留めが落ちた。

「人の心を踏み荒らすお前を許さない……………痛みをその身に刻め！」

「（ふんっ……………情報つてのは自分の身を守るために使うもんだ。これだけの装備魔法とヘイト・エージェントの効果、俺が負けるはずがない。奴の力をカードで跳ね返しやる！）」

言っておくが、そのセリフは死亡フラグだぞ。

「ブラック・ローズ・ドラゴンの効果を発動。墓地の植物族モンスターを1体をゲームから除外することで、モンスターの攻撃力を0にする。ローズ・リストラクション！」

マッド・プロファイラー

8

ATK26000

「そいつを待っていた！！ライト・ロー・プロテクションの効果が発動！装備モンスターの攻撃力が相手のカードの効果によって

変化したとき、そのカードを破壊する！」

バリーン！

ライト・ロー・プロテクションの効果によってブラック・ローズ・ドラゴンが大きな爆発と共に消えていった。

「罨カード、カース・オブ・ローズを発動。相手フィールドに存在するモンスターの攻撃力が変化したとき、そのモンスターの攻撃力と変化した数値分のダメージを相手プレイヤーに与える。やれ．．．．．」

肩メガネが薔薇の花びらに囲まれ始めた。

「な、何．．．．．うわあ．．．ぎゃああああ！」

悲鳴だけが会場に届いていた。

ドサッ！

そして薔薇が消えた時に全身ボロボロで倒れていた虎堂だけが残されていた。

肩メガネ LP1700 0（死亡確定）

「まあ、当然の結果ね。」

俺は結衣さんと同感だ。

気の毒だとは言わないぜ。

肩メガネよ、全てお前が悪い。

あんな酷いことを言ったお前の自業自得だ。

俺もあのメガネっ面を殴りたいぜ。

さすが俺の嫌いなキャラランキング第5位だ。

ちなみにこれが俺の嫌いなキャラクターランキングだ。

《フウ太君による鉄也の最も嫌いな遊戯王5D'sキャラクター
ンキングトップ5（全員あだ名）》

第1位 ロリコンサディスト

第2位 鼻毛所長

第3位 尻軽女

第4位 苦労

第5位 肩メガネ

レギュラーが1人入っていたみたいだが気のせいではない。
とりあえず本題に戻ろう。

『じゅ、準決勝進出は十六夜アキだ〜!!! 早く救護班を〜!!!』

モニターに次の試合が映った。

準決勝第1試合 不動 遊星 VS 神風 結衣

準決勝第2試合 村上 鉄也 VS 十六夜 アキ

「……………（汗汗汗汗汗汗）」

次の試合は20分後だ。

やばいな……俺の次の相手は十六夜 アキだ。
一度サイコデュエルを実感しているからどれだけ恐ろしいかわかる。

あの時は半殺しにされたからな……………
俺は死にたくないぞ。

一度死んでいるし、人生のフルコースメニューを食べるまで絶対死にたくないぞ。

《鉄也の人生のフルコースメニュー》

前菜…寿司

スープ…スッポン

肉料理…松坂牛の焼肉

魚料理…焼き鮭

メインディッシュ…未定
野菜料理…八宝菜
デザート…和菓子
ドリンク…玉露茶

『贅沢なメニューっすね。』

う〜〜〜ん、やっぱりメインはGODにしよう。

『いや、無理だから。』

解かってる、ジャンク。
ジョークだジョーク。

『てゆうか冗談言ってる場合じゃないっすよ。 彼女が次の相手だよ。 もうちょっと危機感持ってくださいよ。』

「大丈夫だ、何とかなる。」

『そう言ってる割には結構汗だくになってるじゃないっすか!』

「ああそつだ! 俺は緊張感MAXなんだよ! 恐怖感MAXだよ!
! だが試合前で漏らすキン肉マンよりはマシだ!」

本題から離れてしまったので戻ります。
てゆうか結構本題から話をそらしているな。
とりあえず次の相手はアキだ。
さすがに手強いな……………

まあ、時間があるからデッキに眼を通しておこつ。
その前に・・・

「次はあなたの出番ですね、結衣さん。」

「うん、それより・・・・・・・・・・」

- Side End -

- Side / 結衣 -

私は何とか準決勝へ勝ち進んだ・・・あともう1試合勝ち進めば
魔女と・・・十六夜 アキとデュエルする事になる。
でも、彼女の次の相手は・・・・・・・・

「それより鉄也・・・あなたはそれでいいの？」

「え？」

「ダイヤモンドエリアで出来た傷・・・魔女によってやられて出来たの
でしょう。」

「・・・・・・・・ああ、そうだ。俺はあの時、十六夜 アキにやられた。」

「あなたの次の相手．．．またあの黒薔薇の魔女なのよ。 棄権したほうがいいじゃないの？」

鉄也、悪い事を言わない。

あなたは退場した方がいいわ。

「．．．いいや、俺はそのまま続ける。」

「え？ でも鉄也、あなた一度魔女に傷つけられたのよ。 そんな相手にもう1度挑戦するなんて、怖くないの？」

「．．．正直、俺は怖い。 だが、俺は目的を達成するまで引く気はない。」

「目的？」

- Side End -

Side / ルーカス

- AMトラック -

「わかつているね、アキ。我々の存在を世に明らかにしたことに
より、リスクは各段に増えていく。さっきのようなアキを惑わす
ような輩が付きまとして来るだろう。」

「無駄な事です。私の使命はアルカディアムーブメントの理想を
この世に知らしめる事。奴らの戯言など耳に入るはずもない。
私の心はディヴァイン、あなたによって正しく導かれていく。」

「アキは賢いな．．．そう、彼等イリアステルの野望は悪しき者の
象徴である赤き竜の復活にある。人々は知らない。赤き竜によ
って彼等を跪かせようと、それに気付いているのが神より授けられ
た能力を持っている我々だけだ。」

「わかつています。」

「じゃあ、次の試合も頑張りなさい。村上 鉄也、彼の实力は予
想外だ。だが、アキの敵ではない。」

「わかりました。アルカディアムーブメントの光栄のためにも頑
張ります。」

「自らの力に負けそうになった時はこの髪飾りがアキの力を安定さ
せてくれる。では、行つてきなさい。」

「．．．．．」

話が終わったか。

アキは去って行った。

彼女が去って行った後、俺は部屋に入った。

「やあ、デイヴァイン。」

「ルーカスカ・・・」

「本当はアルカディアムーブメントの理想などどうでもいいだろう。アキもただの君の道具に過ぎない。違うか？」

「・・・・・・気付いていたのですか。」

「勿論だ。どれだけ俺はアルカディアムーブメントに手を貸していたと思う？」

「一応、君を警戒していたがやはり君は見方になる気は無さそうだね。」

「俺も自分の目的の為にサイコデュエリストの研究に手を貸しているからな。データを利用できるだけ利用しているだけだ。」

「確かにそうだね。君をこのままにさせたら我が組織に危害を加えそうだ。」

「元々俺を警戒していたんだろう。どうする？俺を始末するか？」

「・・・いや、やめておこう。君に何かをやらかしたら厄介な事になりそうだ。それに君はアルカディアムーブメントに色々役立ててもらっているしね、良ければ好きなだけ利用したまえ。その分、君を利用するさ。ただし、もし万が一、君が我が組織に問題のなる行動を起こしたらただでは済まないよ。」

「フツ．．．．．」

神風 結衣はもう既に調べがついた。

あとは村上 鉄也のみ。

さて、痣のデータ採集は慎太郎に任せておいて俺は試合観戦でもするか。

- Side End -

- Side / 鉄也 -

「目的？」

「そうだ。俺は．．．．．今まで自分が何者かどうか解からない。だから自分を確かめたい、自分が一体何者かを。だからこの大会に出場した。」

「何もリスクを負ってまで．．．．．」

「希望を掴む為の一步のチャンスだ。相手が魔女であろうと俺はもう引き下がる訳にはいかない。」

「でも．．．．．」

結衣さん、気を使ってくれるのはありがたいんですけど・・・

「結衣さん・・・今度はあなたが答えてください。」

俺はあなたがこの大会で何か企んでいる様に見えます。

俺からも段々掴めて来たような気がする・・・彼女の目的が。

「私が・・・？」

「正直に答えてください。あなたがこの試合で勝ちたい理由は何ですか？ 仮に俺が試合に負けてあなたが不動　遊星に勝てば同じ十六夜　アキを相手にする事になりますよ。」

「・・・私の理由は・・・。」

「・・・十六夜　アキ・・・ですね。」

「・・・・・・・・そうよ。」

やはりそうか。

一応、理由ぐらい聞いておくか。

「私の目的は・・・十六夜　アキを倒す事よ。」

「何でそんな事を・・・。」

「あの女のせいで・・・私の大切な家族が酷い目にあつたわ。」

「え？」

「兄さんは立派なセキュリティだった。お調子者でちょっと変態的な一面もあるけどで正直で優しい兄さんだったわ。私の勉強を手伝ってくれるしデュエルの相手をしてくれるし、両親がいなくても楽しかった。」

いい兄さんだったんだな．．．．てゆうか結衣さん今、自分の兄を変態と呼んでいませんでしたか？

妹が認めるほどの優しいけど変態的な兄って一体．．．．まあ、良い兄さんだからいいか。

「でも兄さんはある日、重傷を負った。」

「重傷？ まさか．．．」

「そうよ。兄さんは黒薔薇の魔女の騒動に巻き込まれたわ。」

「．．．．．」

「兄はある日、ダイモンエリアへ調査へ行ったわ。その結果、黒薔薇の魔女の騒動に巻き込まれて重傷を負った。そして兄は今、植物状態で入院している。」

何てこった．．やはり彼女の目的は復讐なのか。

「だから私はあの女が憎い．．．．だから、あなたに棄権してもらっわ。」

「アキに挑む為ですか？」

「そうよ。それにあなたが傷ついて欲しくないわ。」

「そう言うあなたは彼女を怖くないんですか？」

「私は．．．．．怖くなんてない。あの女を倒すためなら怖くない。」

それはどうかな．．．．．恐怖というのは一度実感してみないと解からないものだぞ。

俺が一度手合わせしたからわかる。

「じゃあ、やる気なんですね。」

「そうよ。私はずっとこの機会を待ってたから。」

彼女の眼．．．．．真剣だな。

普段見るふざけた様な一面と違って本気だ。

まさかそんな思いを背負っていたとはな．．．

止められなさそうだ。

「じゃあ、こうしましょう。もしあなたが次の相手、不動 遊星に勝てば俺は次の試合を棄権します。」

「え？」

「負けてしまったら仕方ないでしょう。俺はそのまま進みます。」

「．．．．．いいわ。」

同意してくれたようだな。

「じゃあ、頑張ってください。遊星も結構強いから油断しない方がいいですよ。」

「．．．助言ありがとう。」

そろそろ時間なので結衣さんは行った。

「はあ．．．．．」

俺は溜息をついた。

何、無謀な約束をしてるんだ俺は．．．色々知らなければならぬ状況だというのに。

ガチャッ！

誰かが入ってきた。

何となく誰が入ってきたかわかった気がした。

「黒崎さん．．．．．知っていたんでしょう。」

「まあね。」

「あなたは止めようとしなかったんですか？」

「君と同じ理由だ。彼女の意志は止められないと思った。」

「でも．．．」

「君だとどうする？」

「・・・・・・・・・・」

確かに同じ事をするかもしれないな。

「黒崎さん、あなたがデュエルした時、ワザと勝たせたんじゃないですか？」

「・・・・・・・・・・」

試合が始まった。

『Ladies and gentlemen!! いよいよ準決勝の開始だ!! 最初の試合は、サテライトの流れ星、不動遊星!!』

ステージに遊星が現れた。

『そして、サテライトの流れ星に対する相手は、風纏し姫、神風結衣!!』

結衣さんには悪いが遊星・・・・・・・・このデュエル、勝ってくれ!

「デュエル!!」

遊星 LP4000

VS

結衣 LP4000

- Side End -

To Be Continued

第28話 嵐の前の静けさ（後書き）

今回は文章が微妙だったかな・・・

第29話 流れ星 VS 風纏いし姫（前書き）

今回は遊星が凄いです。

第29話 流れ星 VS 風纏いし姫

- Side / 鉄也 -

始まった・・・遊星と結衣さんのデュエルが・・・
遊星は強い・・・でも、結衣さんのデッキ構築は遊星のデッキと
互角以上だ。

もしかしたら結衣さんが勝ってしまうかもしれない・・・

「デュエル!!」

結衣 LP 4000

VS

遊星 LP 4000

頼む、遊星・・・このデュエル・・・勝ってくれ!

- Side End -

- Side / 結衣 -

この男を倒せば・・・次は黒薔薇の魔女・・・
まずは下準備ね・・・

「私のターン！ 私はドラゴンフライを召喚する！ ターンエンド
！」

ドラゴンフライ

4

ATK1400

結衣 / LP4000

手札5枚

モンスター / ドラゴンフライ（攻）

魔法・罠 / なし

「俺のターン！ 俺はスピード・ウォリアーを召喚する！」

スピード・ウォリアー

2

ATK 900

「バトル！ スピード・ウォリアーでセットされているモンスターを攻撃！ スピード・ウォリアーの効果を発動！ 召喚されたターンのバトルフェイズに攻撃力が倍になる！」

スピード・ウォリアー

2

ATK 900 1800

「ソニック・エッジ！」

ズバァ！

スピード・ウォリアーの蹴りがドラゴンフライを切り裂く。

結衣 LP 4000 3600

「ドラゴンフライの効果を発動！ このモンスターが戦闘によって破壊された場合、デッキから攻撃力1500以下の風属性モンスター

「を攻撃表示で特殊召喚する！ デッキからシールド・ウィングを特殊召喚する！」

シールド・ウィング

2

ATK 0

「俺はカードをセットし、ターンエンドだ。」

遊星 / LP 4000

手札 4 枚

モンスター / スピード・ウォリアー（攻）

魔法・罠 / リバーズ × 1

「私のターン！ 私はシールド・ウィングを守備表示へ変更し、霞の谷のファルコンを召喚する！」

シールド・ウィング

2

DEF 900

霞の谷のファルコン

4

ATK2000

『出番か．．．』

頼むわよ、ファルル。

「私はカードをセットし、バトル！ 今セットしたカードを手札に戻し、霞の谷のファルコンでスピード・ウォリアーを攻撃！ 疾風一閃！」

『ハア！』

ファルルはスピード・ウォリアーへ目掛けて剣を振り下ろす。

「リバースカードオープン、くず鉄のかかし！」

ガキーン！

くず鉄のかかしが突然現れ、ファルルの剣を受け止めた。

「くず鉄のかかしは墓地へは行かず再びセットされる！」

「．．．．．私はカードをセットし、シールド・ウィングを守備表示へ変更する。ターンエンド。」

結衣／LP3600

手札4枚

モンスター／霞の谷のファルコン（攻）、シールド・ウイング（守）

魔法・罾／リバース×1

「俺のターン！俺はスピード・ウォリアーを守備表示へ変更し、カードガンナーを召喚する。」

彼の場合に両腕にキャノン砲、下半身にキャタピラーを装備したロボットが現れる。

スピード・ウォリアー

2

DEF400

カードガンナー

3

DEF400

「カードガンナーの効果を発動！ デッキトップから3枚カードを墓地へ送り、1枚につき攻撃力が500ポイントアップする！ カードをセツトし、ターンエンドだ。」

遊星／L4000

手札3枚

モンスター／カードガンナー（守）、スピード・ウォリアー（守）
魔法・罨／リバーズ×2

ここで突かせてもらっわ。

「そのエンドフェイズに私は霞の谷のファルコンをリリースし、ゴツドバードアタックを発動！ その伏せカードを2枚破壊する！」

「何!？」

「ごめん、ファルル。」

「構わない。俺よりもシールド・ウィングを優先するのが当然だ。」

ビューーーン！

ファルルは相手のフィールドへ飛び掛った。

バリリーン！

「くず鉄のかかしと和睦の使者が．．．．．」

「残念ね。 それじゃあ私のターン！ 私は霞の谷の雷鳥を召喚する！」

霞の谷の雷鳥

3

ATK1100

「さらに、私はテラ・フォーミングを発動！ デッキから霞の谷の神風を手札に加え、そのまま発動する！」

「（あのカードは彼女が初戦で使ったカード．．．．バウンスコンボか！？）」

「私は雷鳥を手札に戻し、A・ジェネクス・バードマンを特殊召喚する！」

A・ジェネクス・バードマン

3

ATK1400 1900

「雷鳥が手札に戻った事により、霞の谷の神風の効果を発動！ 私はデッキから2枚目の霞の谷の雷鳥を特殊召喚する！」

霞の谷の雷鳥

3

ATK1100

「さらに私は手札に戻った霞の谷の雷鳥を特殊召喚する！」

霞の谷の雷鳥

3

ATK1100

「2体のレベル3、霞の谷の雷鳥2体にレベル3、A・ジエネクス・バードマンをチューニング！ 霞の魔物よ、大蛇の如く大地を喰らい尽くせ！」

3 + 3 + 3 || 9

「シンクロ召喚！ 蹂躪せよ、ミスト・ウォーム！！」

ミスト・ウォーム

9

ATK2500

攻撃を通してもらっわ。

「ミスト・ウォームの効果を発動！ このモンスターがシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上のカードを3枚まで持ち主の手札に戻す！」

プシュウウウ・・・

ミスト・ウォームが放つ煙により、遊星のスピード・ウォリアーとカードガンナーが飛ばされた。

「バトル！ ミスト・ウォームでダイレクトアタック！ ミスト・デイヴァウア！」

「くっ・・・」

遊星 LP4000 2500

「私はターンエンドよ。」

結衣/LP3600

手札2枚

モンスター/ミスト・ウォーム(攻)、シールド・ウィング(守)

魔法・罠/なし

フィールド/霞の谷の神風

「俺のターン！俺は手札のスピード・ウォリアーを墓地へ送り、
ワン・フォー・ワンを発動！デッキからレベル・ステイラーを
特殊召喚する！」

レベル・ステイラー

1

DEFO

「さらに俺はジャンク・シンクロンを召喚する！」

ジャンク・シンクロン

3

ATK1300

「ジャンク・シンクロンの効果を発動！ 墓地からスピード・ウォリアーを特殊召喚する！」

スピード・ウォリアー

2

DEF400

「レベル2、スピード・ウォリアーにレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング！ 集いし星が新たな力を呼び起こす。光指す道となれ！」

2 + 3 〃 5

「シンクロ召喚！ いでよ、ジャンク・ウォリアー！！」

『ハアアア．．．．．トアア！！』

ジャンク・ウォリアー

5

ATK 2300

「ジャンク・ウォリアーの効果を発動！ パワー・オブ・フェローズ！！」

遊星のレベル2以下のモンスター

レベル・ステイラー

1

ATK 600

ジャンク・ウォリアー

5

ATK 2300 2900

「バトル！ ジャンク・ウォリアーでミスト・ウォームを攻撃！ スクラップ・フィスト！！」

ドッガーーン！

結衣 LP 3600 3200

「カードを1枚セットし、ターンエンドだ！」

遊星 / L 1500

手札 2枚

モンスター / ジャンク・ウォリアー（攻）、レベル・スティーラ

1（守）

魔法・罨 / リバース × 1

「私のターン！ 私はモンスターをセットし、ターンエンド！」

結衣 / LP 3200

手札 2枚

モンスター / シールド・ウィング（守）、裏側守備表示モンスター

1 1体

魔法・罨 / なし

フィールド／霞の谷の神風

「俺のターン！俺はレベル・ステイラーをリリースし、クイック・シンクロンをアドバンス召喚する！」

クイック・シンクロン

5

ATK700

「さらに俺はジャンク・ウォリアーのレベルを1下げ、レベル・ステイラーを特殊召喚する！」

ジャンク・ウォリアー

5
4

レベル・ステイラー

1

ATK600

「レベル1、レベル・ステイラーにレベル5、クイック・シンク
ロンをチューニング！ 集いし力が大地を貫く槍となる。 光さす
道となれ！」

1 + 5 〃 6

「シンクロ召喚！ 砕け、ドリル・ウォリアー！」

ドリル・ウォリアー

6

ATK 2400

「ドリル・ウォリアーの効果を発動！ 攻撃力を半分にし、相手に
直接攻撃する事が出来る。」

ドリル・ウォリアー

6

ATK 2400 1200

「バトル！ ドリル・ウォリアーでダイレクトアタック！ ドリル・シュート……！」

ギューーン！

ドリル・ウォリアーが私のモンスターを通り抜けて私に向かっていく。

「くっ………」

結衣 LP 3200 2000

「さらにジャンク・ウォリアーでそのセットされているモンスターを攻撃！ スクラップ・フィスト！」

ジャンク・ウォリアーの拳が私のセットしたモンスターに当たる。

クリッター

3

DEF 700

「墓地へ送られたクリッターの効果を発動！ デッキからA・ジャンクス・バードマンを手札に加える！」

「俺はメインフェイズ2に入り、ドリル・ウォリアーのレベルを下げ、レベル・スティーラーを特殊召喚する！」

ドリル・ウォリアー

6 5

レベル・スティーラー

1

DEF100

「俺は手札を1枚捨て、ドリル・ウォリアーを除外する！ ターンエンドだ！」

ズボッ！！

ドリル・ウォリアーは地面に潜り込んだ。

遊星/L1500

手札1枚

モンスター/ジャンク・ウォリアー（攻）、レベル・スティーラー

Ⅰ（守）

魔法・畏ノリバース×1
フィールド／霞の谷の神風

「私のターン！」

次のターンにまたドリル・ウォリアーが戻ってくる・・・厄介ね。
でも欲しいカードが来た。

「私はシールド・ウイングを手札に戻し、A・ジェネクス・バード
マンを特殊召喚する！」

A・ジェネクス・バードマン

3

ATK1400 1900

「さらにシールド・ウイングが手札に戻った事により、霞の谷の神
風の効果でデッキから女忍者ヤエを特殊召喚する！」

女忍者ヤエ

3

ATK1100

「私は手札のシールド・ウィングを捨て、女忍者ヤエの効果を発動！ 相手の魔法・罠カードを全て手札に戻す！ 忍法・突風の舞！」

ヒュルルル・・・

風が相手の伏せカードを巻き起こし始めた。

「（おそらく相手はこのターンで決めさせるつもりだ・・・念の為に発動しておくべきだな。）俺は女忍者ヤエの効果にチェインしてジャンク・ウォリアーをリリースし、シンクロ・バリアーを発動！ このターンとその次のプレーヤーのターン、俺の受けるダメージは0となる！」

ジャンク・ウォリアーが光の粒となり、遊星の周りにバリアを張った。

「私はレベル3、女忍者ヤエにレベル3、A・ジェネクス・バードマンをチューニング！ 封印されし雷槍の龍よ、秘めたる氷の力を解き放て！」

3 + 3 〳 6

「シンクロ召喚！ 凍結せよ、氷結界の龍 ブリューナク！」

氷結界の龍 ブリユーナク

6

ATK2300

戦闘ダメージは与えられないけどレベル・ステイラーを墓地に残すわけにはいかないわね。

「私は手札を1枚捨て、レベル・ステイラーを手札に戻させる！
氷結封印！」

カチカチカチカチ……………

レベル・ステイラーが凍りついた。

「私はカードを2枚セットし、ターンエンド！」

結衣/LP2000

手札1枚

モンスター/氷結界の龍 ブリユーナク（攻）

魔法・罨/リバーズ×2

フィールド/霞の谷の神風

「俺のターン！ このスタンバイフェイズ、ドリル・ウォリアーは戻ってくる！」

ギューーーーーン！

地面から穴が開き、ドリル・ウォリアーが現れた。

ドリル・ウォリアー

6

ATK2400

「ドリル・ウォリアーの帰還により、俺は墓地からクイック・シンクロンを手札に加える！ そしてもう1度ドリル・ウォリアーの効果を．．．」

逃がさない．．．！！

「永続罠、デモンズ・チェーンを発動！ ドリル・ウォリアーの効果は無効となり、攻撃を行えなくなる！」

ガシッ！

鎖がドリル・ウォリアーを縛った。

「何！？」

「これでドリル・ウォリアーの厄介な効果はなくなったわ。」

「なら、俺は手札のレベル・ステイラーを捨て、クイック・シンクロンを特殊召喚する！」

相手の場にテングロンハットを被ったモンスターが現れた。

クイック・シンクロン

5

ATK700

「さらに墓地のレベル・ステイラーの効果を発動！ ドリル・ウォリアーのレベルを下げ、特殊召喚する！」

ドリル・ウォリアー

6
5

レベル・ステイラー

1

ATK600

「レベル1、レベル・ステイラーにレベル5、クイック・シンクロンをチューニング！ 集いし絆が更なる力を紡ぎだす。 光さす道となれ！」

1 + 5 〃 6

「シンクロ召喚！ 轟け、ターボ・ウォリアー！！」

ターボ・ウォリアー

6

ATK 2500

「バトル！ ターボ・ウォリアーで氷結界の龍 ブリューナクを攻撃！ ここでターボ・ウォリアーの効果を発動！ ターボ・ウォリアーの攻撃対象となったレベル6以上のシンクロモンスターは攻撃力が半分となる！」

氷結界の龍 ブリューナク

6

ATK 2300 1150

「アクセル・スラッシュ!!」

「.....」

ズバア!

ターボ・ウォリアーの爪がブリューナクを切り裂いた。

「私はガード・ブロックを発動! 自分が受ける戦闘ダメージを0にし、カードを1枚ドロウする!」

結衣 LP 2000 2000

「さらにターボ・ウォリアーはレベル6以下の効果モンスターの効果の対象にはならない効果がある。俺はドリル・ウォリアーを準備表示へ変更し、レベルを1下げてレベル・ステイラーを特殊召喚する! ターンエンドだ!」

ドリル・ウォリアー

54

DEF 2000

レベル・ステイラー

1

DEF0

遊星／LP1500

手札1枚

モンスター／ターボ・ウォリアー（攻）、ドリル・ウォリアー（守）、レベル・ステイラー（守）

魔法・罠／なし

フィールド／霞の谷の神風

ターボ・ウォリアー・・・ドリル・ウォリアーと同じくらい厄介ね。

「私のターン！」

これだ！

「私はジャンク・シンクロンを召喚する！」

ジャンク・シンクロン

3

ATK1300

「ジャンク・シンクロンの効果発動！ 墓地からシールド・ウィングを特殊召喚する！」

シールド・ウィング

2

DEF 900

「レベル2、シールド・ウィングにレベル3、ジャンクシンクロンをチューニング！」

2 +

3 //

5

「シンクロ召喚！ 蹂躞せよ、A・O・J カタストル！」

A・O・J カタストル

5

ATK 2200

「あのモンスターは！」

「そうよ、このモンスターと戦闘を行った闇属性以外のモンスターはダメージ計算を行わず破壊されるわ。そしてこの効果は対象をとる効果ではない。バトル！ A・O・J カタストルでターボ・ウォリアーを攻撃！ ディストラクティブ・レイ！！」

ビューーーーーン・・・・・・・・・・チュドーン！

カタストルのレーザーがターボ・ウォリアーに直撃し、撃破した。

「くっ、ターボ・ウォリアーがあっさりと・・・・・・・・・・」

「私はこれでターンエンド！」

結衣 / LP 2000

手札 2枚

モンスター / A・O・J カタストル（攻）

魔法・罫 / デモンズ・チェーン（ドリル・ウォリアー指定）、リバー x 1

フィールド / 霞の谷の神風

「俺のターン！ 俺はカードガンナーを召喚する！」

カードガンナー

3

ATK400

「カードガンナーの効果を発動！ デッキからカードを2枚捨て、攻撃力を上昇させる！」

カードガンナー

3

ATK400 1400

「バトル！ カードガンナーでA・O・J カタストルを攻撃！」

ドギューン！

カードガンナーの両腕に装備されているキャノン砲からカタストルへ目掛けてビームを放った。

ビビィー！

チュドーン！

しかしカタストルのビームに歯が立たず、カードガンナーは粉碎した。

遊星 LP 1500

「A・O・J カタストルの効果は強力だ。だがその反面、戦闘ダメージを与えられない。そして俺はカードガンナーの効果を発動する。このモンスターが破壊された時、カードを1枚ドロースる！」

「それは自爆特攻してまでやる事かしら？」

「俺はカードを1枚セットし、ターンエンド。」

遊星 / LP 1500

手札1枚

モンスター / ドリル・ウォリアー（守）、レベル・ステイラー

（守）

魔法・罨 / リバース x 1

フィールド / 霞の谷の神風

ドリル・ウォリアーのレベルは調整されている・・・後でシンク

口素材として使われてしまいかもしれないわね。

「私は霞の谷のファルコンを召喚する！」

霞の谷のファルコン

4

ATK2000

『やれやれ・・・また俺の出番か。』

「私はデモンズ・チェーンを手札に戻し、霞の谷のファルコンでレベル・ステイラーを攻撃！ 疾風一閃！」

『ハア！』

ズバア！

「さらにA・O・J カタストルでドリル・ウォリアーを攻撃！
ディストラクティブ・レイ！」

ビー・・・・・・チュドーン！

「カードをセットし、ターンエンド！」

結衣／LP2000

手札2枚

モンスター／A・O・J カタストル（攻）、霞の谷のファルコン（攻）

魔法・罨／リバーズ×2

フィールド／霞の谷の神風

「俺のターン！俺は二トロ・シンクロンを召喚する！」

彼の場合に消火器のようなモンスターが現れた。

二トロ・シンクロン

2

ATK500

「さらに俺は手札からダブル・サイクロンを発動する！俺の伏せカードとお前のそのカードを破壊する！」

ブオオオオオ．．．．．

巨大な竜巻が遊星の伏せカードと私の伏せたデモンズ・チェーンを巻き込む．．．．

「俺はダブル・サイクロンにチェーンしてギブ&テイクを発動！相手の場にカードガンナーを特殊召喚する！」

カードガンナー

3

DEF 400

バリーン！

発動したギブ&テイクはダブル・サイクロンによって破壊された。

「ダブル・サイクロンのデメリットをチェーンで回避した！？」

「ギブ&テイクの効果により、カードガンナーのレベル分、ニトロ・シンクロンのレベルがアップする！」

ニトロ・シンクロン

25

「さらに墓地のボルト・ヘッジホッグの効果を発動！ 自分の場にチューナーモンスターが存在する場合、特殊召喚する事が出来る！」

相手の場に背中にネジが生えたハリネズミが現れる。

ボルト・ヘッジホッグ

2

DEF 800

「カードガンナーのコストで送られていたか・・・」

「レベル2、ボルト・ヘッジホッグにレベル5、ニトロ・シンクロンをチューニング！ 集いし思いがここに新たな力となる。光さす道となれ！」

2 + 5 = 7

「シンクロ召喚！ 燃え上がれ、ニトロ・ウォリアー！」

緑色の悪魔のようなモンスターが現れる。

ニトロ・ウォリアー

7

ATK 2800

「ニトロ・シンクロンの効果を発動！ ニトロ・シンクロンが「ニトロ」と名の付いたモンスターのシンクロ素材として墓地へ送られた時、カードを1枚ドロウする！」

デモンズ・チェーンは既に破壊されている．．．もし彼の手札に発動できる魔法カードがあつたら私が負ける．．．．．

「バトル！ ニトロ・ウォリアーで霞の谷のファルコンを攻撃！
ダイナマイト・ナックル！」

『ハアア！！！』

チュドーーーン！

『ぐああー！』

ニトロ・ウォリアーの拳がファルルに直撃する。

「くっ．．．．．」

結衣 LP 2000 1200

「ニトロ・ウォリアーの効果を発動！ このモンスターが戦闘によつて相手モンスターを破壊した場合、相手フィールド上の表側守備表示モンスターを攻撃表示に変更し、続けて攻撃することが出来る

！俺はカードガンナーを攻撃表示に変更させる！」

カードガンナー

3

ATK400

「ダイナマイト・インパクト！」

私は……まだ負けるわけにはいかない！

「私は2枚目のガード・ブロックを発動する！戦闘ダメージを0にし、カードを1枚ドロウする！」

バチチチ……

私の周りをバリアが張った。

チュドーーン！

結衣 LP1200

ドロウしたカードは……ミラーフォース……

「俺はメインフェイズ2に入り、ニトロ・ウォリアーのレベルを1下げ、レベル・スティーラーを特殊召喚する！」

ニトロ・ウォリアー

7
6

レベル・スティーラー

1

DEF0

「カードを2枚セットし、ターンエンドだ！」

遊星/LP1500

手札0枚

モンスター/ニトロ・ウォリアー（攻）、レベル・スティーラー

（守）

魔法・罠/リバーズ×2

フィールド/霞の谷の神風

「私のターン！」

私だつて．．．ここまで来たんだ．．．あの女を倒す為に．．．
恨みを晴らす為に．．．負けるわけにいかない！

私はデツキに手を当てた。

その時．．．．．

ジュワ．．．．．

「！！」

私の右腕が．．．．．痣が光り始めた。

「これは．．．．．」

よくわからない．．．でも、負ける気がしない！

「ドロー！！」

来た、ダーク・シムルグ！

「不動 遊星．．．．．」

「？」

「あなたはいい相手になったわ。」

「そうか．．．お前も中々の実力だ。 学生でありながらフォーチ
ュンカップに招待されただけの事はある。」

「ありがとう。 でも、私は．．．どうしても負けるわけにはい
かないの。 ここであなたを倒させてもらっわ。」

そう言っ て私は手札からカードを抜いた。

「私は墓地のクリッターとドラゴンフライを除外し、ダーク・シム
ルグを特殊召喚する！」

ダーク・シムルグ

7

ATK2700

「さらに私はデッキトップからカードを1枚捨て、アームズ・ホー
ルを発動！ デッキから装備魔法、ビッグバン・シュートを手札に
加える！ そして私はビッグバン・シュートをカタストルに装備し、
攻撃力がアップする！」

A・O・J カタストル

5

ATK2200 2600

「バトル！ A・O・J カタストルでレベル・ステイラーを攻
撃！ ディストラクティブ・レイ！」

ビビィー！

「レベル・ステイラーは闇属性だから戦闘ダメージは受けるわ。」

カタストルのレーザーがレベル・ステイラーを貫く。

「俺はスピリット・フォースを発動！ 戦闘ダメージを0にする！」

バチチチ・・・

遊星 LP 1500

「さらにスピリット・フォースの効果により、墓地から攻撃力1500以下の戦士族チューナーモンスターを手札に加えることが出来る！ 俺はジャンク・シンクロンを手札に加える！」

「私はダーク・シムルグでニトロ・ウォリアーを攻撃！」

「何！？ 攻撃力の低いダーク・シムルグで攻撃だと！？」

「私は墓地から罠カード、スキル・サクセサーを発動！ このカードを除外し、ダーク・シムルグの攻撃力を800ポイントアップさせる！」

「！！（そうか、ブリューナクのコストで送ったのか）」

ダーク・シムルグ

7

ATK 2700 3500

「ダーク・テンペスト！」

ブオオオオオ！

ダーク・シムルグの羽ばたき起こす風がニトロ・ウォリアーを包み込んだ。

『グアアア！』

「くっ……………」

遊星 LP 1500 800

「私はカードを2枚セットしてターンエンドよ。」

このターンで勝利にはならなかった……でも、私の勝ちだ。

結衣／LP1200

手札0枚

モンスター／ダーク・シムルグ（攻）、A・O・J カタストル
（攻）

魔法・罾／ビッグバン・シュート（A・O・J カタストルへ装
備）、リバーズ×2

フィールド／霞の谷の神風

「俺のターン．．．．．ドロー！（．．．．．二重召喚！！）」

「．．．．．」

彼の表情．．．．．一見、迷っているけど冷静な表情。
それでも勝てるという印象がその顔に書いてある。

「もう、何をしても無駄よ。 いい加減に諦めたらどう？」

「．．．．．確かにこの状況だと俺の負ける確率は90%以上だ。
だが、カード達は今まで俺に応えてくれた。 だから俺は最後まで
でデッキを信じて戦う！」

無理よ．．．私には相手のカードのセットを封じるダーク・シム
ルグ．．．殆どのモンスターを破壊できるカタストル．．．そして
攻撃モンスターを破壊するミラーフォースと攻撃モンスターを除外
する次元幽閉が伏せてある．．．
どうあがこうと、あなたの負けよ。

「そう？ でも私にはどうしても勝たなければならない。これがあなたのラストターンよ。」

「俺のターン！ 俺は二重召喚デュアルサモンを発動！」

「えっ！？」

何をしているの？

たった残り1枚の手札で二重召喚を発動するなんて……

「チューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを召喚する！」

ジャンク・シンクロン

3

ATK1300

「ジャンク・シンクロンの効果を発動！ 墓地からチューニング・サポーターを特殊召喚する！」

チューニング・サポーター

4

DEF100

「レベル1、チューニング・サポーターにレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング！ 集いし魂の結束が、勝利へ導く右腕となる。 光指す道となれ！」

1 + 3 = 4

「シンクロ召喚！ 砕け、アームズ・エイド！」

彼の場合に機械の腕が現れる。

アームズ・エイド

4

ATK1800

「あなた・・・正気なの？ そのモンスターでどうあがくというの？」

「チューニング・サポーターの効果を発動！ このモンスターがシンクロ素材として墓地に送られた場合、カードを1枚ドロウする！ だから俺はこのドロウに賭けるぜ！」

まさか．．．いや、出来る筈がない！

「ドローー！！」

「．．．．．」

「．．．．．フツ。」

「！？」

彼の表情が．．．．．微笑んだ。
もしかして．．．引いたというの、逆転のカードを！？

「（まだいける．．．．．）俺はシンクロン・エクスペローラーを召喚する！」

遊星の場に輪の形をしたモンスターが現れる。

シンクロン・エクスペローラー

2

ATK0

「シンクロン・エクスペローラーの効果を発動！ このモンスターの召喚に成功した時、墓地からシンクロンと名の付いたモンスターを特殊召喚する事ができる！ 現れよ、クイック・シンクロン！」

クイック・シンクロン

5

DEF 1400

「さらに永続罨、エンジェル・リフトを発動！ 墓地からレベル2以下のモンスター、チューニング・サポーターを特殊召喚する！」

チューニング・サポーター

1

ATK 300

「さらに俺はクイック・シンクロンのレベルを下げ、墓地のレベル・ステイラーを特殊召喚する！」

クイック・シンクロン

5
4

レベル・ステイラー

1

DEF0

「そしてレベル1、チューニング・サポーターとレベル2、シンクロン・エクスプローラー、そしてレベル1、レベル・ステイラーにレベル4となったクイック・シンクロンをチューニング！ 集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます。光さす道となれ！！」

この台詞は……………！！

1 + 2 + 1 + 4 = 8

「シンクロ召喚！ 粉碎せよ、ジャンク・デストロイヤー！」

『トアアア！』

ジャンク・デストロイヤー

8

ATK2600

「ジャンク・デストロイヤーの効果を発動！ このモンスターがシンクロ召喚に成功した時、チューナー以外のシンクロ素材の数までフィールド上のカードを破壊する事が出来る！ 対象はビッグバン・シュートと2枚の伏せカードだ！ タイダル・エナジー！！」

『ハアアア！』

ビュン！ ビューーン！

チュドドーン！

ジャンク・デストロイヤーは拳からエネルギー弾を放ち、対象となったカードを破壊した。

「さらに、ビッグバン・シュートがフィールドを離れた為、装備されていたA・O・J カタストルは除外される！」

シュルルル・・・

次元の裂け目が現れ、カタストルが吸い込まれた。

「俺はチューニング・サポーターの効果でカードをドローする。さらにアームズ・エイドの効果を発動！ ジャンク・デストロイヤーの装備カードとなり、攻撃力が1000ポイントアップする！」

ガシャガシャ・・・ガチイ！

ジャンク・デストロイヤー

8

ATK 2600 3600

「そんな……………」

あれほどの攻めと守りを築き上げたのに……
私の……負け……………!?

「バトル！ ジャンク・デストロイヤーでダーク・シムルグを攻撃
！！ デストロイ・フォース！」

「嘘だ……負ける筈が無かった！」

ここまで……………ここまで来れたのに……これで終わってしまう
なんて……………

『トリヤアアア！！！！』

ジャンク・デストロイヤーがダーク・シムルグを握りつぶした……
……………

ズドドーン！

結衣 LP 1200 300

「そしてアームズ・エイドの効果を発動！ このモンスターを装備したモンスターが開いてモンスターを戦闘によって破壊し墓地へ送った場合、そのモンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

結衣 L P 3 0 0 0

遊星 W I N N E R

負けた

プッン！

- Side End -

- Side / 遊星 -

危なかった．．．．．もし俺がジャンク・デストロイヤーを召喚出来なかったら負けていた。

彼女も中々いいデュエリストだった。

このようなデュエルをしたのはジャックを相手にした時以来だ。

「いいデュエルだった、神風 結衣。」

俺は彼女に近づいた。

その時．．．．．

ガクッ！

「！！！」

結衣は膝を突いた。

「あ．．．ああ．．．」

「大丈夫か！？」

「あわわ．．．．．」

「・・・手を貸そうか？」

そして彼女の表情は・・・まるで絶望に満ちたような表情であった。

それを見た俺は彼女が言っていた言葉を思い出した。

「ありがとう。でも、私は・・・どうしても負けるわけにはいかないの。ここであなたを倒させてもらっわ。」

まさか・・・彼女にとって負けられなかった理由があったというのか？

S i d e E n d

- S i d e / ルーカス -

「これは面白いものを見た。」

さすが不動 遊星．．．シグナーなだけな事はある。
お前の勝利のおかげで神風 結衣は完全に．．．

「フツ．．．．．」

やはり思ったとおりだ。

神風 結衣．．．彼女の精神は闇に染まっている。
これはチャンスだ．．．．．

俺は携帯電話を取り出した。

「コンタクト．．．ナンバーXII！」

ブルルルルル．．．．．

「ルーカスカ。 何だ？」

「慎太郎．．．あのサテライトはいい仕事をしてくれた。」

『どういう意味だ？』

「彼女の心は．．．乱れている。」

『ん？ それは本当か？』

「ああ、俺の眼に狂いはない。 今の彼女は負けたショックで墮落し始めている。」

『そうか．．．それはいい。 早くも俺達、組織の戦力の役に立ちそうだな。』

「ああ。意外と簡単にモノに出来そうだが、「豪火の竜」の力をな。」

To Be Continued

ゲストキャラ紹介・フォーチュンカップ編・（前書き）

今回はフォーチュンカップでの出場者を紹介します

ゲストキャラ紹介・フォーチュンカップ編・

オリジナルキャラ

おおでら しんたろう
大寺 慎太郎

容姿／茶髪に黄色いメッシュが塗っており、ビジュアルバンド系のような服装をしている。

「轟くスーパースター」の異名を持つデュエリスト。

デュエルディスクに変形出来るエレキギターを所有している。

第6試合を勝ち抜き、第9試合で遊星とデュエルする。

実力は高く、遊星を圧倒するほどである。

バーン、連続攻撃、そしてロックなど様々な戦略を発揮する。

一時的に遊星を押していたが、彼の《ドリル・ウォリアー》と《速攻のかかし》のコンボによって逆転されてしまう。

しかし遊星との試合でのデッキは全力ではなかったらしい。

ゴドウィンの差し金であるが、何者かとの接触がある模様であり、敗北した後、鉄也と結衣の観察を始めた。

使用デッキは【エレキ】、エースモンスターは《エレキマイラ》

あきやま
秋山 ホムラ

容姿／赤髪 of 青年、ミリタリージャケットを着ている。

「炎の指揮官」の異名を持つデュエリスト。

ゴドウィンの差し金であり、第7試合で結衣とデュエルする。デュエルではバーン効果を活かし、殆ど攻撃する必要が無い。

《ブレイズ・キャノン》による破壊とバーンで結衣を圧倒していたが、彼女の鉄也から貰った《ジャンク・シンクロン》により、敗北する。

使用デッキは「ヴォルカニック・バーン」、エースモンスターは《ヴォルカニック・デビル》

橘 たちはな かずお
和夫

容姿／スキンヘッドで筋肉質。

「鉄壁の番兵」の異名を持つデュエリスト。

第8試合でシュウとデュエルするが、シュウにあっさり1ターンで、しかもオーバーキルをされて戦意喪失する。

ゴドウィンの差し金であったかどうかは不明。

使用デッキは「アステカ」だったが、シュウに速攻キルされたため、発揮する事は無かった。

橘「あはは．．．はははは．．．．．（ポカーン）」

原作登場キャラ

死羅^{しらい}

容姿／死神のようなコスチュームを着ており、顔が見えない。

「蘇る死神」の異名を持つデュエリスト。

彼とデュエルした者は2度とデュエルが出来なくなるといわれている。

原作では出番が全くなかったキャラだったが、作者が親切だった為、特別に入れてもらった。

鉄也とデュエルし、鉄也による《ダーク・ダイブ・ボンバー》の使用により先行1キルされた。

その後、再戦のチャンスをもらい、鉄也に善戦したが、鉄也の《ジャンク・ウォリアー》と《ザ・カリキュレーター》のコンボによってオーバーキルされた。

それでも原作の時より扱いがいい。

ちなみにこの小説では「蘇る死神」の由来は彼が所持している邪悪な精霊が宿っているカードによる事が設定されている。

使用デッキは【アンデット族】、エースモンスターは《真紅眼の不死竜》

炎城^{えんじょう} ムクロ

容姿／立っている赤髪に黄色い前髪がある。 サングラスをかけ

ている。

打倒キングに執念を燃やすデュエリスト。

原作では乱入だったがこの小説では普通に出場している。

原作通り遊星とデュエルし、敗北した。

その後、遊星との再戦を約束したのだが出番は全くない。

正直、原作で1回ぐらい再登場しても良かったと思うんだが。

多分、この小説でも登場しない。

使用デッキは「スピード・キング スカル・フレイム」、エース
モンスターは《スピード・キング スカル・フレイム》

ボマー

容姿／背が高く筋肉質な黒人。 髪が長い。

「黒き暴風」の異名を持つデュエリスト。

ゴドウィンから故郷への支援を条件として協力していたが、彼によつて故郷が滅ぼされ、復讐を誓った。

原作通り、龍可（龍亞）とデュエルして勝つ。

《ダーク・ダイブ・ボンバー》を所持していたが、鉄也の禁止カードになった理由である行動によつて使えなくなった。

その後原作とは異なり、鉄也とデュエルする事になる。

何者かからOCG版の《ダーク・フラット・トップ》を貰い、改良されたプレイングセンスと復讐への執念によつて鉄也を圧倒するが、鉄也の逆転ドローによつて敗北した。

ちなみに鉄也は《ダーク・ダイブ・ボンバー》が禁止カードにした事を恨まれていると思っていた。

その後、ゴドウィンへの復讐を始めようとしたが、鉄也によって止められ逮捕された。

使用デッキは【ジャイアントボマー・エアレイド】、エースモンスターは《ジャイアントボマー・エアレイド》

ジル・ド・ランスポウ

容姿／金色の鎧を着ており、顔に髭が生えてる。

原作通り、アキとデュエルして負ける。

ゴドウィンの差し金だが、多分、そんなに悪いキャラではない。

使用デッキは【マスクド・ナイト】、エースモンスターは《マスクド・ナイト レヴ》

プロフェッサー・フランク

容姿／帽子を被っている。

「デュエルカウンセラー」の異名を持つデュエリスト。

鉄也の嫌いなキャラランキング第1位。

温暖な表情をしているが、本性は非常に最悪なサディストであり、鉄也曰く「ロリコンサディスト」。

作者から見てもぶん殴りたいキャラである。

原作通り、敗者復活戦で龍可とデュエルし、彼女を精霊世界へ引

きずり込む事に成功したが、自分も精霊世界へ引きずり込まれた。
その後、命は無事助かったが精神崩壊した。

エースモンスターは《超魔神イド》

「ロリコン」「さあ、龍可さん。おじさんと一緒に行こうじゃないか。」

龍可「きゃあああぁー！」

なのは（A's）「スターライトブレイカー！！」

フェイト（A's）「プラズマザンバー！！」

はやて（A's）「響け終焉の笛、ラグナロク！」

ロリコン「ぎゃあああぁー！！」

龍可「助けてくれてありがとうございます。」

鉄也「3人とも、グッジョブ。」

来宮きのみや 虎堂こどう

容姿／メガネをかけた青年。 服の肩が角ばっている。

「デュエルプロファイラー」の異名を持つデュエリスト。
鉄也の嫌いなキャラランキング第5位

フランク程ではないが、人の過去を暴いて苦しめるサディストである。

鉄也曰く「肩メガネ」。

原作通りアキとデュエルし、半殺しにされる。

エースモンスターは《マッド・プロファイラー》

アキ「カース・オブ・ローズ！」

肩メガネ「ぎゃあああああ！！（バタツ）」

銀さん「新八いいいい！ 大丈夫かああ！！？（虎堂のメガネに叫ぶ）」

新八「だからそいつは新八じゃねえ！ 新八のメガネですらねえよ！」

鉄也「そうだよ銀さん、そいつは新八じゃなくてマダオだよ。 あ
るいはマダプロ（まるで駄目なプロファイラー）だよ。」

新八「いや、あんたもツツコミ所が違うんだけど。」

第30話 人生とは縛られるか戦うかの選択肢である

- Side / 鉄也 -

「そうか．．．．．彼女にはそういう事情があったのか。」

遊星と結衣さんの試合が終わった後、次の試合まで15分ぐらいの休憩時間があった。

俺と遊星は自動販売機の近くにあるベンチに座っている。

俺は遊星に飲み物を奢り、彼に結衣さんの事情を説明していた。

「ああ。一応、試合前にお前に教えておこうと思ったんだが．．．俺も結衣さんと約束したんだ。彼女がお前に勝ったら俺は棄権すると。」

「そうか。それほど彼女は執念を燃やしていたんだな。」

「遊星．．．俺は近くにいなかったんだが、結衣さん．．．どうなっていた？」

「彼女の表情は暗くなっていた。それほど傷ついてしまったようだ。」

「そうか．．．．．」

「あわわ．．．．．」

「大丈夫か？」

「ナイスデュエルだ、結衣。」

そこには黒崎さんがいた。

「黒崎．．．．．！」

「さすが不動くん、君は中々の者だ。いいデュエルだったよ。機会があればまた彼女と相手してやってくれ。」

「．．．．．」

黒崎さんは笑顔で遊星と接し、結衣を迎えに来た。

「シュウ．．．．．」

「結衣、君も大分疲れただろう。部屋へ戻ってゆっくり休もう。」

結衣さんは．．．遊星に負け、目的が果たせなくなったのが原因

で完全に鬱になってしまった。

でも結衣さんには悪いが、アキを彼女のやり方で負かせるわけにはいかなかった。

「で、遊星．．．お前はと思う？　十六夜　アキの事を．．．」

「十六夜か。　俺が彼女から感じるのは．．．怒りと拒絶だ。」

「ゴクッゴクッ．．．怒りと拒絶ね．．．」

原作通りだな。

まあ、無理もないな。

理想郷という目的でサイコデュエリストたちを騙して人類に復讐を企むおっさんが保護者だったらああってしまうのも無理もないな。

もし会う事があったら北斗神拳をくらわせよう。

「しかし鉄也、お前は大丈夫なのか？　次の相手がその十六夜だぞ。」

「

遊星が聞く。

確かにやばいよな、彼女が相手だというのは．．．

メインキャラの1人だし、植物族デツキは結構強いし、バーンも使ってくるし、ダメージが実体化するし、最悪なことに棘と鞭を使ってくるし．．．

最悪な事に俺は一度彼女と対峙して殺されかけたし．．．ただでさえ向き合つのが気難しい。

「お前はどつするんだ？　棄権するか？」

だが、俺は続ける．．．続けるしかないんだ。

「いいや、試合開始前に言っただろ？　俺は自分自身を見つけ出すためにここへ来た。こっちだって色々事情があるんだ。もう、後戻りはねえよ。俺の希望は戦うことで掴みだすしかないんだ。勝ってみせるさ。たとえ相手が黒薔薇の魔女、十六夜　アキだろ」と。

無論、俺は彼女を対等に挑むつもりだ。

「そうか．．．わかった。試合、頑張れよ。」

「ゴクゴクゴク．．．ぷはあー。ああ、遊星。もしもの事があったら決勝戦、頼んだぞ。」

「ああ．．．．．死ぬなよ、鉄也。」

「大丈夫だ、俺は死なない（ような気がする）。」

ありがとう、遊星．．．．．

俺は飲み物を飲んだ後、待合室へ戻った。

「やあ、村上くん。」

あ、黒崎さん。

「彼女はどうです？」

「がっかりしてるよ。　ここまで来れて敗北が彼女を落ち込ませてしまった。」

まあ多少、気持ちは分かるが……………

「入りますけどいいですか？」

・待合室

中には結衣さんがいた。

「結衣さん？　少しいいですか？」

「……………」

「……………まあ、次は俺の番です。　何か言いたい事がありますか？」

「ねえ、鉄也……………」

「ん？」

「やはり…………あの魔女とデュエルをするの？」

「ああ。」

「そう……………少しいい？」

「何ですか？」

「私の分までやってくれる？」

「結衣さん、元々あなたの事情は俺と関係ありません。まあ、俺は負けるつもりなどありませんけど。」

「そうだよね．．．わかってたけど。ごめん、わがまま言って。」

「気持ちはわかります．．．」

「．．．．．」

結衣さんが半分俺を疑っている眼をしている。

「本当にわかりますよ。まあ、違うような状況です。実は俺、ある男に殺されかけたことがあったんです。」

「嘘．．．．．」

「なんとかこうして生き残ってたんです。でも、その代償に俺は家族とも友人とも会えなくなっただんです。」

「何故そんな事が．．．」

「そこは説明すると長いし、俺もよく理解できる領域ではありません。とりあえずそんな出来事が俺を長い間、絶望に押されています。俺はその男が憎いと思います。でも、仕方ないんです。俺はその思いを背負って生きていかなければならないんですよ。だから俺は希望を掴むために戦うんです。まあ、はっきり説明

出来てませんね。機会があれば後で話しても構いませんよ。」

そろそろ時間だな。

「じゃあ、俺の試合が始まるので行ってきます。せっかくの友達の頼みなのであなたの分まで頑張ってやりますよ、デュエリストとして。」

「鉄也．．．」

「はい？」

「．．．死なないで。」

「わかってる。」

さっきの遊星もそうだが、「死なないで」と言わないでください。そう言われる人はかえって逆に死んでしまう確立が高くなりますから。

そう言っただけ俺は部屋を出た。

「じゃあ頑張るな、村上くん。」

「黒崎さん、あなたから貰ったカードで強化できたデッキ．．．この試合で発揮して見せます。」

「へえ、それは楽しみだ。」

「それから黒崎さん．．．．．」

「ん？」

「あなたには聞きたい事がたくさんあります。フォーチュンカッ
プが終わったら色々教えてください。」

黒い痣．．俺とそっくりの少年．．平行世界．．邪神 ア
バターを使っていた謎の男．．あんなら知らない事ではないは
ずだ。

「そうか．．わかった。」

「じゃあ、行つてきます。後、結衣さんを頼みます。行こう、
ジャンク、クリボー。」

『頑張るっすよ！』

『クリクリ〜！』

・デュエルステージ・

『さあ、いよいよ準決勝第2試合目の始まりだ！ まずはサテライ
トの逆転ファイター、村上 鉄也だ〜！』

正義超人か？ 俺はキン肉マンになったのか？
まあ、奇跡的に逆転勝利を達しているけど。

『そして彼の相手になるのは．．黒薔薇の魔女、十六夜 アキ！』

俺の前にアキが現れる・・・

「魔女を倒せ！」

「化け物を追い出せ！」

観客からは彼女へ対するブーイングが降り注ぐ・・・
酷いな・・・彼女はまだ子供だろ。

「久しぶりだな、十六夜 アキ。 ダイモンエリアで1度会ったの
覚えているか？」

「覚えてるわ・・・あなたは忌むべき印を持つもの・・・私がこの
手であなたを倒すわ。」

「言うておくが、前のように上手くいかないぜ。」

「それはあなたの戦績でわかっているわ。」

『それではデュエル・スタンバイ!!』

「「デュエル!!」」

鉄也 LP4000

VS

アキ LP4000

「私が先行を貰うわ。」

「いいですよ。」

「私のターン！ 私は偽りの種を発動！ 手札からレベル2以下の植物族モンスターを特殊召喚する事が出来る。 私はイービル・ソーンを特殊召喚する！」

イービル・ソーン

1

ATK100

「私はイービル・ソーンをリリースし、相手に300ポイントのダメージを与える。」

イービル・ソーンが爆発し、棘が俺に飛び散る。

「ぐっ……………」

鉄也 LP4000 3700

小さい棘が何本か俺に刺さる。

腕で防いだから顔には当たらなかったから何とか大丈夫だが・・・

「さらに私はイービル・ソーンを2体デッキから特殊召喚する。」

イービル・ソーン×2

1

ATK100

「私はイービル・ソーン2体をリリースし、フェニキアン・クラスター・アマリリスをアドバンス召喚する！」

フェニキアン・クラスター・アマリリス！？

まずい・・・あのモンスターは厄介だ。

イービル・ソーンが消え、鳥のような形をした花が現れる。

フェニキアン・クラスター・アマリリス

8

ATK2200

「私はフレグランス・ストームを発動！ フィールド上の植物族モ

ンスターを破壊する事でカードを1枚ドロースる。 私はフェニキ
シアン・クラスター・アマリリスを破壊する！」

フェニキシアン・クラスター・アマリリスが破壊され、花びらと
なった。

「私が引いたカードはダーク・ヴァージャー。 フレグランス・ス
トームの効果によってドロースされたカードが植物族モンスターカー
ドだった場合、そのカードを見せる事でもう1枚ドロースできる。」

「マジかよ……………」

しかもそれだけじゃない…………

「フェニキシアン・クラスター・アマリリスの効果を発動。 この
モンスターが破壊されて墓地へ送られた時、相手に800ポイント
のダメージを与える。」

フェニキシアン・クラスター・アマリリスの花びらが俺の体に飛
び散って来る……………

「うわああああ！」

熱い…………火傷しそうだ……………

鉄也 LP3700 2900

「熱ちちちち．．．．．」

「ターンエンド．．．．．このエンドフェイズ、墓地に存在する植物族モンスターを除外する事で墓地からフェニキアン・クラスター・アマリリスを守備表示で特殊召喚する事が出来る。墓地のイービル・ソーンを除外し、フェニキアン・クラスター・アマリリスを特殊召喚する。」

フェニキアン・クラスター・アマリリス

8

DEF0

アキ/LP4000

手札4枚

モンスター/フェニキアン・クラスター・アマリリス(守)

魔法・罫/なし

「くっ．．．．．」

先行1ターンで再生可能な上級モンスターを召喚して手札を補充してダメージ．．．

このデュエル．．やはりただではおかないな(汗)。

T o B e C o n t i n u e d

- S i d e ? ? ? -

- サテライト -

ブルルルル

「はい、もしもし？ ルーカスか？」

『シエン あのカードは見つかったのか？』

「全然見つかんねえよ。 ったく 鉄也の野郎、一体何処に隠してんだよ。 で、フォーチュンカップはどうなんだ？」

『その鉄也の番だ。 そして彼の相手は十六夜 アキだ。』

「黒薔薇の魔女か . . . 確かそいつはサイコデュエリストだっけ？」

『ああ。彼のことが心配か?』

「馬鹿言え。あいつが負けるなんてありえねえよ。」

『シエン、わかっているだろう。お前の知っている村上 鉄也はあの鉄也とは違うという事を。』

「んな事あ、わかってるに決まってんだろ。それでも俺の勘があいつなら勝つと言ってんだよ。」

『そうか・・・とりあえずあのカード、「不屈の戦士」のカードを探せ。俺と慎太郎は観察に戻るから。』

「はいはい。」

ピッ!

「さて・・・一体何処にあるんだろうな・・・」

- Side End -

第31話 激戦！ 戦え、ジャンクヒーローズ！（前書き）

ジャンク『な〜に〜か、な〜に〜かな？ 今回はこれ！』

鉄也のオリジナルカード

ジャンク・ストライカー

ジャンク・シューター

ジャンク・コマンダー

ジャンク『俺たちの新しいカードだ！ オリジナルカードの説明はストーリーの後に出るよ。じゃあ、楽しんでね。』

第31話 激戦！ 戦え、ジャンクヒーローズ！

前回のあらすじ

カツオ「おじさーん！ーん！！」

それは予想もならない出来事であつた・・・

ワカメ「そんな・・・」

タラオ「おじさんが・・・」

刺殺された波野 ノリスケ・・・・・・・・

タイ子「あなたあああ！！」

イクラ「バブーバブー！！」

悲しみだす家族達・・・

波平「ノリスケえええええ！！」

マスオ「これは・・・ダイイングメッセージ!?」

そして彼の血で残されたメッセージ・・・・・・・・

サザエ「『ワカモト』・・・?」

マスオ「ワカモト．．．犯人は．．．．．まさか！」

「名探偵MASUO」．．．始まります。

第6話 さよならノリスケさん

鉄也「何やってんだテメーは!？」

ドガア!

作者「ぎゃあああああ! 何って・・・前回のあらすじを面白く書いてだけで・・・」

鉄也「なんでサザエさんだー!! 何でノリスケさんを殺してんだテメーは・・・しかもダイイングメッセージがあれって犯人はあのキャラかよ!」

作者「ほらあ、ノリだよ、ノリ。ノリスケさんだけに。」

鉄也「上手くねーよ! てゆうかこれってただの行数稼ぎだろ!」

作者「はい。」

鉄也「あっさり答えたな・・・ アキ戦だぞ? 小説がシリアスな状況に進んでいるのに、俺が十六夜アキとデュエルを始めていきなりダメージを負っているのに、何でお前は余裕で伝統的な家庭アニメに殺人事件を起こしているわけ!？」

作者「でも、このサイトではドラえもんとかバイオハザードを合わせたものもあるじゃないか。」

鉄也「それもそうだが空気読め! 読者の気持ちを考えて空気読め!」

作者「いや、これ一応、ギャグ要素も入ってる小説だからこんな時こそ臨機応変に行くべきじゃなきか。」

鉄也「これの何処が臨機応変だああ！！」

バキィ！

作者「ぎゃあああああ！！！」

鉄也「はあ．．．この作者の^{バカ}冗談はこれくらいにして．．．．．」

作者「今、僕の事を馬鹿と呼んだよね？ 『作者』と書いて『バカ』と読んでたよね？」

鉄也「．．．本編に戻ります。どうぞ、ご覧ください。」

作者「ノリスケの命に免じてご覧ください。」

鉄也「スクラップ・フィストオ！！！」

ズドーーーーー！！

作者「ぎゃああああああ！！！」

鉄也「じゃあ、本編に戻るぞ。」

作者「は、はい．．．．．（よし、今ので1000文字ぐらい稼げた）」

- Side / ??? -

村上 鉄也．．彼は僕の親友である。

彼とはサテライトとの付き合いが長かったな．．まあ、「あの騒動」以来、彼と全く会う事なんてなくなってしまったんだが。

でも、ある日僕はテレビを見た。

そう、フォーチュンカップに鉄也が出場していた事を。

久しぶりに鉄也に会える．．僕はそう思っていた。
しかし僕は既に知っていた。

彼は僕の知っている村上 鉄也ではない事を。
でも、それでも見に行こうとこの会場へ来た。
それは．．．彼が別人であろうと僕の知っていた鉄也とはあまり
変わらないと思ったからだ。

そしてもう1つの理由．．．僕は彼にこのカードを届けに来た．．
．．．「不屈の戦士」を。

幸い奴らにこのカードを奪われなくて助かった。

この世界はもうすぐ危機に訪れてしまう。

鉄也はあの力を目覚めさせなければならない．．．．．奴らが
動き出す前に。

「．．．．．」

こうして僕はフォーチュンカップへたどり着いた。

鉄也は今、黒薔薇の魔女、十六夜 アキとデュエルをしている。
いきなり傷を付けられたようだが、僕は彼を信じる．．．彼は必
ず勝つという事を。

- Side End -

- Side / 鉄也 -

アキ / LP 4000

手札 4 枚

モンスター／フェニキシアン・クラスター・アマリリス（守）
魔法・畏／なし

鉄也／LP2900

手札5枚

モンスター／なし

魔法・畏／なし

「はあ．．．はあ．．．．．はっ！！」

何だ今のは！？

サイコデュエルで頭に何の衝撃も無いのに急に妙な幻覚が見えたぞ．．．

何故かサザエさんで殺人事件のドラマが頭の中に入ってきたな。

ノリスケ何故死んだ．．．

しかも犯人は若本ボイスかよ。

その後、何故か突然俺が出てきて見知らぬメガネの男を何回か殴ってたな．．．．．

あれは一体、何だ？ 痣を持つ者同士の戦いの影響か？

「．．．．．．．．．．．．．．．．」

．．．いや、それは絶対ないな。

何考えてんだ、俺は。

「どうしたの？ あなたのターンよ。」

「ああ、すまん。俺のターン！」

危ねえ．．．何か取り乱すかと思っただぜ。
まずはどう動こうか．．．

「俺は手札のチューニング・サポーターを墓地へ送り、ワン・フォー・ワンを発動する。俺はデッキからミスティック・パイパーを特殊召喚する。」

ミスティック・パイパー

1

ATKO

「俺はミスティック・パイパーの効果を発動。このモンスターをリリースし、カードを1枚ドローし、お互いに確認する。」

何かいいカード来い．．．

「俺が引いたカードは金華猫だ。ミスティック・パイパーの効果でレベル1のモンスターカードをドローした場合、もう1枚ドローする事が出来る。」

サーバントか．．．．．

「さらに俺はジャンク・シンクロンを召喚する。」

ジャンク・シンクロン

3

ATK1300

『鉄也！ 大丈夫か？』

「ああ、これくらいなんともねえ。俺はジャンク・シンクロンの効果で墓地からチューニング・サポーターを特殊召喚する。」

チューニング・サポーター

1

DEF100

「さらにフィールド上に「ジャンク」と名の付いたモンスターが存在する場合、このモンスターを特殊召喚することが出来る。現れよ、ジャンク・サバント！」

ジャンク・サバント

4

ATK1500

ジャンク・・・今からお前の新しい姿を見せようぜ。

『おう、行くつすよ！』

「レベル4、ジャンク・サバントとレベル1、チューニング・サポーターにレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング！ 集

いし魂の振る舞いが、疾風の如く闇を切り裂く力となる。 光指す道となれ！」

4 + 1 + 3 = 8

「シンクロ召喚！ ジャンク・ストライカー！！」

薙刀を持った青色のロボット戦士が現れる。

ジャンク・ストライカー

8

ATK2500

「俺はチューニング・サポーターの効果でカードをドローする。」

「大したモンスターね。でも、私のフェニシアン・クラスター・アマリリスを破壊したらあなたはダメージを受けるわ。そして次のターンで蘇るわ。」

「ああ。だが、俺のジャンク・ストライカーも効果が2つある。

1つはこのモンスターが戦闘によって相手モンスター破壊した場合、そのモンスターは墓地へは行かず、ゲームから除外される。

もう1つはこのモンスターが守備表示モンスターを攻撃した場合、もう1度攻撃できる。」

「何ですって！？」

「バトル！ ジャンク・ストライカーでフェニキシアン・クラスタ
ー・アマリリスを攻撃！ スクラップ・トルネード！！」

ジャンク・ストライカーの薙刀が巨大なカマイタチを巻き起こし
た。

「私は手札からガード・ヘッジの効果を発動！ このモンスターを
手札から捨てる事でこのターン、フェニキシアン・クラスター・ア
マリリスは戦闘によって破壊されない。」

フェニキシアン・クラスター・アマリリスの前に蔓で出来た壁が
現れ、カマイタチから守った。

「破壊できなかったか。 カードを2枚セットし、ターンエンドだ。」

「

鉄也 / LP 2900

手札 3枚

モンスター / ジャンク・ストライカー（攻）

魔法・罠 / リバーズ × 2

「私のターン。 私はフェニキシアン・クラスター・アマリリスを
リリースし、アドバンスドローを発動。 カードを2枚ドローする。
さらに私はコアキメイル・グラヴィローズを召喚する。」

棘の鞭を持った薔薇の形をしたドレスを着た女性が現れた。

コアキメイル・グラヴィローズ

4

ATK1900

「ぐ、グラヴィローズ……………（汗）」

怖いつて…………アキ姉さんマジ怖い……………（汗）

棘と鞭怖い……………（汗）

流石DSヒロイン……………（汗）

「カードを3枚セットし、ターンエンド。このエンドフェイズ、私はコアキメイル・グラヴィローズの維持コストとして手札のダイク・ヴァーリジャーを見せる。」

アキ/LP4000

手札1枚

モンスター/コアキメイル・グラヴィローズ（攻）

魔法・罾/リバーズ×3

フェニキシアン・クラスター・アマリリスを蘇生させなかったか。まあ、その判断は正しいな。

「俺のターン！俺は金華猫を召喚する。」

金華猫

1

ATK400

「金華猫の効果を発動！ このモンスターが召喚・リバーズに成功した時、墓地からレベル1のモンスターを特殊召喚することが出来る。俺は墓地からミスティック・パイパーを特殊召喚する。」

ミスティック・パイパー

1

ATK0

「俺はミスティック・パイパーをリリースし、カードをドロ―。俺が引いたカードはバトルフェ―ダー。レベル1モンスカーカードである為、もう1度ドロ―する。そしてバトル！ ジャンク・ストライカーでコアキメイル・グラヴィローズを攻撃！ スクラップ・トルネード！！」

ジャンク・ストライカーは薙刀を振り回し、竜巻を起こした。

「この瞬間、私は畏発動、棘の壁！ 自分の植物族モンスターが攻撃対象になった場合、相手の攻撃表示モンスターを全て破壊する！」

植物版のミラーフォースか・・・だが甘い！

「俺は棘の壁にチェ―ンしてトラップ・スタンを発動！ このターン、畏カードの効果はすべて無効となる。」

「何．．．．．なら、私はトラップ・スタンにチェーンして和睦の使者を発動！ このターン、私のモンスターは戦闘によって破壊されず、戦闘ダメージは0になる。」

「何だと！？」

グラヴィローズの周りにバリアが現れた。

「（まさかトラップ・スタンを潰すとは．．．．．）なら、俺はその和睦の使者にチェーンして手札から速攻魔法、連鎖爆撃を発動！」

「連鎖爆撃！？」

C h a i n 4 連鎖爆撃

C h a i n 3 和睦の使者

C h a i n 2 トラップ・スタン

C h a i n 1 棘の壁

「チェーンは4回積まれている。これで合計1600ポイントのダメージを与える。」

連鎖爆撃から4本の鎖が飛び出し、十六夜の体に刺さった。

「くっ．．．．．」

アキ LP 4000 2400

安心しろ、彼女のカードが実現化しても俺のカードは実現化しないから。

「俺はこれでターンエンドだ。このエンドフェイズ、金華猫はスピリットモンスターである為、手札に戻る。」

鉄也 / LP 2900

手札 3枚

モンスター / ジャンク・ストライカー（攻）

魔法・罠 / リバーズ × 1

これでやっとダメージを与えられた……………

- Side End -

- Side / アキ -

この男……………なんて強さなの。

ただ強いだけではない……………私を相手に全く屈せず、臆してもいない。

前の試合で相手にした2人と比べてレベルが確実に違う。
まさかここまで挑んで来られるとは・・・でも、私も負けるわけにはいかない。

「私のターン。このスタンバイフェイズ、コアキメイル・グラヴィローズの効果を発動。デッキからレベル3以下のモンスターを墓地へ送る。私はデッキからグローアップ・バルブを墓地へ送る。」

グラヴィローズは鞭を振り、鞭が私のデッキに入る。

そしてデッキから鞭に巻きつかれた目玉があつたつぼみのモンスターが引きずり出され、別次元に放り投げられた。

「そして永續罫、アイヴィー・シャックルを発動！ 相手フィールド上のカードは全て植物族となる。まあ、それは関係ないけどね。私はアイヴィー・シャックルを墓地へ送り、マジック・プランターを発動。カードを2枚ドローする。そして私はウィードを召喚する。」

私の場に草で出来た小さなモンスターが現れた。

ウィード

2

ATK1200

「レベル4、コアキメイル・グラヴィローズにレベル2、ウィードをチューニング！ 聖なる森に潜みし華麗なる棘の狩人よ、戒めの鞭を持ちて今こそ姿を現せ！」

4 + 2 〃 6

「シンクロ召喚！ 現れる、スプレندیッド・ローズ！」

黒と緑色の服を着た金髪の女性が現れる。

「（あの．．頼むから棘と鞭は控えてくれ。 改心した後にも影響が出るから。（汗）」

スプレندیッド・ローズ

6

ATK 2200

「スプレندیッド・ローズの効果を発動。 私は墓地の2枚目のイービル・ソーンを除外し、効果を発動！ ジャンク・ストライカーの攻撃力を半分にする！」

ジャンク・ストライカー

8

ATK 2500 1250

「バトル！ スプレندیッド・ローズでジャンク・ストライカーを攻撃！ スプレندیッド・ウィップ！！！」

スプレندیッド・ローズはジャンク・ストライカーへ鞭を振るった。

「(すまん、ジャンク・ストライカー……)俺はスピリット・フォースを発動！ スプレندیッド・ローズが与える戦闘ダメージを0にする！」

鉄也 LP 2900

「さらにスピリット・フォースの効果で墓地から守備力1500以下の戦士族チューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを手札に加える！」

甘いわ……その程度じゃスプレندیッド・ローズは止められない。

「私は最後のイービル・ゾーンを除外し、スプレندیッド・ローズの効果を発動！ 攻撃力を半分にし、追加攻撃する。」

スプレندیッド・ローズ

6

ATK 2200 1100

「俺は手札からバトルフェーダーの効果を発動！ 手札からこのモンスターを特殊召喚し、バトルフェイズを終了させる！」

彼の場合にバトルフェーダーが現れ、スプレندیッド・ローズの攻撃を受け止めた。

バトルフェーダー

1

DEF0

「くっ……………」

攻撃が…………全然通らない……………」

「私はカードを1枚セットし、ターンエンド。このエンドフェイズ、私は墓地のウィードを除外し、墓地からフェニキシアン・クラストー・アマリリスを特殊召喚する。」

アキ／LP2400

手札1枚

モンスター／スプレندیッド・ローズ（攻）、フェニキシアン・クラストー・アマリリス（守）

魔法・罠／リバーズ×1

どうやら彼はやはり倒すべき敵ね……………」

- Side End

Side / 結衣

「鉄也．．．．．」

私はモニターから鉄也のデュエルを観戦している。

凄い．．．強いなんてメじゃない。

あの十六夜を相手に全く退かず、戦略とプレッシャーで彼女を圧倒している。

「これが村上クンだね。」

「シュウ．．．」

「彼は並のデュエリストじゃないのはもうわかっている筈だ。十六夜 アキも全力を出しているというのに鉄也はそれ以上のプレイングで彼女を押している。このまま彼を応援しようじゃないか。」

「鉄也．．．．．」

私は『頑張つて』と心の奥底で呟いた。

Side End

S i d e / 鉄也

「俺のターン！（機械複製術！）俺はジャンク・シンクロンを召喚する！」

ここは機械複製術と加速ドローに賭けるか。

ジャンク・シンクロン

3

A T K 1 3 0 0

「ジャンク・シンクロンの効果を発動！墓地からチューニング・サポーターを特殊召喚する！」

チューニング・サポーター

1

D E F 1 0 0

「俺は機械複製術を発動！デッキからチューニング・サポーターを2体特殊召喚する！」

チューニング・サポーター×2

1

ATK300

「レベル2、チューニング・サポーター2体とレベル1、チューニング・サポーターにレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング！ 集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます。 光さす道となれ！」

2+ 2+ 1+ 3 8

「シンクロ召喚！ 粉碎せよ、ジャンク・デストロイヤー！」

ジャンク・デストロイヤー

8

ATK2600

『鉄也．．主は大丈夫か？』

「問題ない、こんなのかすり傷だ。 それにこういう体験は既に経験済みだ。」

『そうか．．．．なら、わしも主に応えねばならぬのう。』

頼むぜ！

「ジャンク・デストロイヤーの効果を発動！ このモンスターのシンクロ召喚の成功により、フィールド上のカードを3枚まで破壊できる！ 俺はスプレندیッド・ローズとその伏せカードを破壊だ！ タイダル・エナジー！！」

「私はその効果にチェインし、スプレندیッド・ローズをリリースしてシンクロ・バリアーを発動！ このターン、自分が受けるダメージを0にする！」

「へっ……………」

残念だが俺の目的は単にカードを破壊する事ではない。

あくまで手札増強が目的だ！

「俺はチューニング・サポーターの効果を発動！ 3体使用した為、カードを3枚ドローする！」

何か引けるか……………来た！

「俺はシンクロ・キャンセルを発動！ ジャンク・デストロイヤーをエクストラデッキに戻し、墓地からシンクロ素材を特殊召喚する！」

ジャンク・シンクロン

3

ATK1300

チューニング・サポーター×3

1

ATK300

「俺はレベル2、チューニング・サポーターとレベル1、チューニング・サポーターにレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング！ 集いし思いが悪を貫く弾となり、同志を支える活路となる。光指す道となれ！」

2+ 1+ 3〃 6

「シンクロ召喚！ 狙い打て、ジャンク・シューター！！」

ライフルを持った迷彩の柄をしたロボットが現れる。

ジャンク・シューター

6

ATK2000

「さらにチューニング・サポーターの効果を発動！ カードを2枚ドロースる。そして俺は手札を1枚捨て、クイック・シンクロンを特殊召喚する！」

クイック・シンクロン

5

ATK700

「さらに俺はクイック・シンクロンのコストで墓地に送ったボルト・ヘッジホッグを特殊召喚する！」

ボルト・ヘッジホッグ

2

DEF800

「レベル2、チューニング・サポーターとレベル1、バトルフェーダーにレベル5、クイック・シンクロンをチューニング！ 集いし力の結束が新たな未来へ導く指導者となる。 光指す道となれ！」

杖を持った軍人の司令官の容姿をしたグレーの大型ロボットが現れる。

2 + 1 + 2 + 5 || 10

「シンクロ召喚！ 導け、ジャンク・コマンダー！！」

ジャンク・コマンダー

10

ATK3000

「俺はチューニング・サポーターの効果でカードを1枚ドロウする。そしてジャンク・コマンダーの効果を発動！ 1ターンの1度、墓地から「ジャンク」と名の付いたモンスターを特殊召喚することが出来る。俺はジャンク・ストライカーを墓地から特殊召喚する！ フェローズ・リターン！！」

『ハアアア！』

ジャンク・コマンダーは杖をフィールドに向けた。

『トアアア！！』

ジャンク・ストライカー

8

ATK2500

「バトル！ ジャンク・ストライカーでフェニキシアン・クラスタ
ー・アマリリスを攻撃！ スクラップ・トルネード！！」

ジャンク・ストライカーが巻き起こす巨大竜巻がフェニキシアン・
クラスター・アマリリスを一刀両断した。

「くっ……………」

「ジャンク・ストライカーで戦闘破壊したフェニキシアン・クラスタ
ー・アマリリスは除外されるため、墓地へ送られることも無く、

ダメージを与えることも無い。追加攻撃したいが、シンクロ・バリアーの影響でダメージを与えられないな。カードを2枚セットし、ターンエンドだ。」

ようし、とにかくこれで形勢逆転だ。

鉄也／LP2900

手札3枚

モンスター／ジャンク・シューター（攻）、ジャンク・ストライカー（攻）、ジャンク・コマンダー（攻）

魔法・罠／リバース×2

「私のターン．．．．私は命削りの宝札を発動。カードを5枚になるまでドローする。」

おいおい．．．また手札増強かよ！

まあ、俺もさっきからやってるから人の事を言えないけど．．．

．

「手札のパペット・プラントを墓地へ送り、効果を発動。ジャンク・コマンダーのコントロールを得る。」

「何だと!?!」

地面から草が現れ、ジャンク・コマンダーを巻き付いた。そしてジャンク・コマンダーは相手の場へ移った。

「バトル。ジャンク・コマンダーでジャンク・ストライカーを攻

撃。
」

ジャンク・コマンダーはジャンク・ストライカーへ向かって杖を振り下ろした。

「俺はくず鉄のかかしを発動！ これでジャンク・コマンダーの攻撃を無効だ！」

ジャンク・ストライカーの前にかかしが現れ、衝撃を受け止めた。

「くっ．．．．．私はメインフェイズ2に入るわ。ジャンク・コマンダーをリリースし、ギガプラントをアドバンス召喚する。」

うわ、せっかくコマンダーを召喚したのに．．．しかもまた厄介なのが出たな。
アキのフィールドに．．．．．昆虫の足を持った巨大植物の化け物が現れる。

ギガプラント

6

ATK2400

「カードを1枚セットし、ターンエンド。」

アキ/LP2400

手札2枚

モンスター/ギガプラント（攻）

魔法・罨／リバーズ×1

「俺のターン！」

来た、サイクロン！

「俺はサイクロンを発動！ その伏せカードを破壊させてもらうぜ！」

「私はサイクロンにチェーンして威嚇する咆哮を発動！ このターン、あなたは攻撃宣言を行えない。」

また攻撃が出来ないか・・・このままだとギガプラントを止める事ができない。

「だったら俺はジャンク・シューターの効果を発動！ 1ターンに1度、デッキ、またはエクストラデッキから『ジャンク』と名の付いたカードを墓地へ送り、相手プレイヤーに500ポイントのダメージを与えられる。俺はデッキからジャンク・シンクロンを墓地へ送る！ アサルト・バレット！」

ジャンク・シューターはライフルからエネルギー弾を射出した。

アキ LP 2400 1900

「いいぞー！ あのマーカ―野郎、魔女を押してるぞ！」

「魔女を倒せー！」

「このまま行けー！」

「うう．．．．．」

止めるよ．．．お前等が呼ぶその魔女の気持ちの方も考えろ。

お前らの言葉がどれだけ彼女を傷つけているのかわからないのか？

しかし現実を見れば仕方ないかもしれない．．．．人間には

そういう者だからな．．．

俺だって原作知識というものが無かったら彼女を同じ目で見ていたかもしれない。

「ん？」

カラン．．．．．カラン．．．．．

ゾクッ！

「まずいな．．．」

何があったという．．．．十六夜の髪飾りが落ちてしまった。

「ハハ．．ハハハハ．．．．じゃあ、私のターンね」

「ゴクッ．．．」

まずいな．．．どうやら今の観客の罵声が彼女の怒りに触れたようだ．．．．．

「俺はモンスターをセットし、ターンエンドだ。」

鉄也／LP2900

手札2枚

モンスター／ジャンク・シューター（攻）、ジャンク・ストライカー（攻）、裏側守備表示モンスター1体

魔法・罠／リバーズ×2

今のところ、俺の伏せカードはくず鉄のかかし．．．そしてそれを守るカードが無いから非常食だな。

そして今セットしたモンスターはライトロード・ハンター ライコウ．．．これで多少、どうにかなるだろう．．．

「フッフ．．．私はデッキトップからカードを墓地へ送り、墓地からグローアップ・バルブを特殊召喚するわ。」

あれ？ ギガプラントをデュアル状態にしないのか？

グローアップ・バルブ

1

ATK100

「レベル6、ギガプラントにレベル1、グローアップ・バルブをチューニング！ 冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の華よ、開け！」

しまった、そういう事が……………

6 + 1 〃 7

「シンクロ召喚。現れよ、ブラック・ローズ・ドラゴン！」

『グオアアアア！』

「くっ……………」

出た…………シグナーの竜であり、アキのエースモンスター…………
ブラック・ローズ・ドラゴン！

ブラック・ローズ・ドラゴン

7

ATK2400

「ブラック・ローズ・ドラゴンの効果を発動…………フィールド上のカードを全て…………破壊する！ ブラック・ローズ・ガイル……！」

『グオオオオオ!!』

ブラック・ローズ・ドラゴンはフィールド上のカードを全て吹き飛ばし始めた……

「俺はその効果にチェインして非常食を発動！ セットされているくず鉄のかかしを墓地へ送り、ライフを1000ポイント回復する！」

鉄也 LP 2900 3900

『グオオオオオ!!』

「ぐっ!!」

ブラック・ローズ・ドラゴンは巨大な暴風を巻き起こす……
そして俺のジャンクモンスター達はブラック・ローズ・ドラゴンによって破壊されたが、これで何とか……

「この瞬間、破壊されたジャンク・シューターの効果を発動！ このモンスターが破壊された時、墓地から『ジャンク』と名の付いたカードを2枚まで手札に加えることが出来る！ 俺は墓地のジャンク・シンクロンとジャンク・サーバントを手札に加える！」

「ハハハ……それで逃げたつもり？ 私は永続魔法、増草剤を発動。墓地から植物族モンスターを特殊召喚できるわ。私は墓地からギガプラントを特殊召喚する。」

なっ．．．増草剤だと！？

ギガプラント

6

ATK2400

「まずい．．．」

増草剤を発動したターン、通常召喚を行えない。

だからあえてブラック・ローズ・ドラゴンでフィールドを全滅させて上級モンスターで俺にダイレクトアタックを仕向けるようにしたのか。

しかもよりによってギガプラントを．．．

「ハハハハ．．．．．」

まずい．．．アキが暴走している．．．．．

「バトル．．．ギガプラントでダイレクトアタック。 ハード・パ
ニッシュ。」

『グオオオオオ．．．．．』

「喰らいなさい、私の力を！！」

ギガプラントは獲物を狙うような表情で爪を上げた。
あんなの喰らったら一溜まりもねえぞ！

「！！！」

ギガプラントは爪を振り下ろした。

ズシャッ！！

「ぐああっ！！！」

鉄也 LP3900 1500

俺はとっさに避けた・・・と思ったが少し遅かった。

「ぐあああああ！！！」

そう・・・ギガプラントの爪が俺の胸を切り裂いた。
思ったより速かったのだ、今の一撃が。

何とか上手く急所を避けたが。

「「「きゃあああああ！！！」「「「

急に観客が悲鳴を上げた。

「がはっ……………」

急に俺は血を……………吐き出した……………

この感覚……………邪神の男と闇のゲームをした時の事を……………

この世界へ転生してしまった理由を思い出す……………

駄目だ……………胸の出血がやばい……………

くそっ、何でこうなるんだよ……………

「ゴハッ……………」

「た、大変だあああ！ 誰か……………今すぐ救護班を……………!!」

Side End

Side / シュウ

「て、鉄也……………」

モニターを見る所、村上クンはギガプラントの攻撃によって体を

切りつかれた。

「あわわ．．．．．」

結衣は．．今の光景を見て臆してしまった。

「結衣。」

シュウが私に話しかける。

「君は悪くない。これは彼の意志で決まった出来事だ。」

「ああ．．．．．」

「村上クン．．．．．」

頼む、立ち上がってくれ。

ここでやられる君ではない筈だ。

そしてそうでなければ．．そうでなければボクは約束を破ったことになる．．．．．美央との約束を。

その時．．．．．

『ああ！これは何だああー！！』

「ん？」

「えっ？」

「．．．立ち上がったか。　流石だ。」

- Side End

- Side / アキ -

「魔女だー！」

「うわあああ！！！」

「化け物は巢に帰れー！！！」

「ここから立ち去れー！！！」

そうよ．．．．．私は魔女よ。

人を傷つけることを楽しんでいる女よ。

そう、楽しいわ．．．この力で人を傷つけるのが．．．私を孤独に追いやる者達を痛めつけるのが．．．

そしてこうしてまた私は人を傷つけた．．．見てて叫ぶしか能の無い臆病者達の罵声を浴びながら死に追いやるほどの傷を．．．．．

「ハハハ．．．アハハハ．．．．．」

「消え失せろー!」

「ここは化け物が来る場所じゃないんだ!」

「巢に帰れ!!」

「ハア．．．ハア．．．．．」

そうよ、勝手に叫びなさい。

恐れなさい、私を．．．魔女を恐れなさい。

「何．．．勝手に変な妄想してんだよ。」

え！？

『ああ！　これは何だああ！！　彼が．．．村上　鉄也が立ち上がり始めたああ！』

気付けば彼は．．．村上　鉄也は胸の傷を押さえながら立っていた。

「あなたは．．．まだやるというの？」

「はあ．．．はあ．．．まあな。　てゆうかここまで来て今更引きたかねえよ。　死ぬ前に色々やりたいことが色々残ってるし．．．むしろ俺が生きていた方が幸いだろが。　死んでたらお前は失格だぞ。　それよりさあ．．．．．」

「え？」

「何故笑っていた？」

「それは．．．」

「はあ．．．．．はあ．．．．．楽しいからか？」

「！？」

「はあ．．．人を傷つけるのが．．．楽しいからか？」

「．．．．．そうよ。」

「はあ．．．はあ．．．なら．．．いいだろう、俺が最後まで相手してやる。」

「．．．．．．．．．」

「ちょっと君、こんな状態じゃ危険だ！ 早く医務室へ．．．」

ちょうど救護班がデュエルステージへ入ってきた。

「大丈夫だ、これぐらい。」

「何言ってるんだ！？ こんな傷で．．．」

「大丈夫って言ってるだろ。 リョーマ君を見る。 彼は片目を怪我しても最後までデニス続けて勝てたじゃないか。」

「いや、そんなことが現実でありえるわけ無いだろ！」

「．．．いいから続けさせる。」

「．．．死んでも知らないぞ。」

救護班は呆れて退き始めた。

「はあ．．．はあ．．．じゃあ、デュエル．．．．．続行だ！！」

「うつ．．．．．．．．．」

この時、私は気付いた。

この男の心には恐ろしい程の闘志が籠められている事を。

S i d e E n d

S i d e / ? ? ?

「立ち上がったか・・・」

僕にはわかっていたよ、君がここで倒れるはずが無いと。

君は僕が知っている鉄也とは完全に別人だ。

でも君は彼と共通している所がある・・・彼も不屈の闘志を宿っている。

そろそろ君に渡すべきだな。

不屈の戦士・・・「ギガンテック・ファイター」のカードを・・・

S i d e E n d -

To Be Continued

今回のオリジナルカード

ジャンク・ストライカー

風属性/戦士族シンクロモンスター

8

ジャンク・シンクロン+チューナー以外のモンスター1体以上

ATK2500/DEF2400

このモンスターが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、そのモンスターは墓地へ行かずゲームから除外される。

このモンスターが守備表示モンスターを攻撃した場合、もう1度攻撃する事ができる。

ジャンク・シューター

地属性/戦士族シンクロモンスター

6

ジャンク・シンクロン+チューナー以外のモンスター1体以上

ATK2000/DEF2400

1ターンに1度、「ジャンク」と名の付いたモンスターをデッキ、またはエクストラデッキから墓地へ送る事で相手ライフに500ポイントのダメージを与える事ができる。

このモンスターが破壊された場合、墓地から「ジャンク」と名の付いたカードを2枚まで手札に加える事ができる。

ジャンク・コマンダー

閻属性ノ戦士族シンクロモンスター

10

ジャンク・シンクロン+チューナー以外のモンスター2体以上

ATK3000/DEF2000

1ターンに1度、自分の墓地から「ジャンク」と名の付いたモンスターを墓地から特殊召喚することが出来る。

自分フィールド上の「ジャンク」と名の付いたモンスターモンスターが守備表示モンスターを攻撃した場合、攻撃力が守備力を超えていればその数値分、相手ライフに戦闘ダメージを与える。

第31話 激戦！ 戦え、ジャンクヒーローズ！（後書き）

オリカの募集を初めました。

詳細については活動報告をご覧ください。

第32話 脅威なる魔女（前書き）

今回のオリジナルカード

宝札の代償

今回はアキがやばいです。

追加ドローやモンスターの展開とか文字通り魔女と言いたいくらいです。

後、デッキの枚数とかもはや気にしないでください。

最近考えたこと：植物族と強制終了は相性がいい。

第32話 脅威なる魔女

S i d e / 真選組一番隊隊長

「え〜〜、今回は俺が前回のあらすじを説明しまさア。」

「え？」

「あ、鉄也の旦那。」

「旦那！？」

「今回は俺がその役なんでさア。 じゃあ、説明させてもらっぜい
〜〜」

「少し不安なんだが……………」

「まず、鉄也の旦那と魔女の姉ちゃんがデュエルを始めてさア〜〜
一時的に魔女の姉ちゃんが鉄也の旦那を圧倒していたんだが、旦那
が何とか新しいカードで魔女の姉ちゃんを圧倒し始めてさア〜〜」

「（まあ、間違っていないな。）」

「その後、また魔女の姉ちゃんが逆転し始めてさア。 さすが
遊戯王一の棘と鞭を使いこなすドS魔女ヒロインと言いたい所だぜ
イ。」

「おいイ！ 何余計な事を言っただテメーは！？」

「そしてそのドSアタックに耐えられた旦那の立場はどちらか言つと蟹並みのドMですなア。」

「殴るぞこの野郎。」

「しかしあの女．．この俺を差し置いて偉そうにドSを演じるとはな．．俺とあの魔女．．．．どっちがSの頂点に立つか勝負してみてえ位ですぜイ。」

「おいいいい！！ 謝れえ！ 遊戯王ファンに謝れええ！！」

「そして俺があを女をドSからドMに調教して見てえぜイ。」

「放送コードギリギリイ！ いい加減にしろこのドS野郎があ！！」

「では本編に入りますぜイ。」

S i d e E n d

S i d e / ルーカス

立ち上がったか．．．．．さすが不屈の闘志といたい所か。
だが、そこからどこまでいけるかな？

彼女のデッキは俺が色々改良を加えて置いたからな。

十六夜 アキの強さが発揮されたら文字通り、魔女と言ってもいい位だ。

どこまでいけるか楽しみだ、村上 鉄也よ。

S i d e E n d

- S i d e / 鉄也 -

「はあ．．．はあ．．．．．」

なんかまた嫌なイメージが入って来てたな。

今度は真選組のドS王子が前回のあらすじを説明していたようなイメージが見えたぞ。

「．．．．．私はカードをセットし、ターンエンド。」

アキ／LP1900

手札1枚

モンスター／ギガプラント（攻）

魔法・罠／増草剤、リバーズ×1

鉄也 / L P 1 5 0 0

手札 4 枚

モンスター / なし

魔法・罠 / なし

さて．．．．．じゃあ、ここはもう1度ジャンク・デストロイ
ヤーだな。

「俺のターン！ 俺はジャンク・シンクロンを召喚する！」

ジャンク・シンクロン

3

A T K 1 3 0 0

「さっきから呼び出してばっかですまん、ジャンク。過労死し
たりしないよな？」

「俺たちは平気ですよ。それより鉄也．．．あんたの方は大丈夫
ですか？」

「ああ．．．俺はこのとおり大丈夫だ．．．ごはっ！」

俺はまた少し血を吐いた。

「ちょっと．．．全然大丈夫じゃないっすよ、それ！ このままじ

「や本当に死んじゃいますよ！ 見え張ってないで早く医務室に．．．」

「ジャンク！」

「！」

「．．．．．頼む。」

「え？」

「俺は．．このデュエルに賭けたいんだ。俺の力を目覚めさせると。それに約束したんだ、結衣さんと。必ず勝つと。」

「でも鉄也．．結衣さんの意見には同意できないんじゃないじゃ．．．」

「それでも約束は約束だ。俺は勝って見せる。」

「鉄也．．．．．じゃあ、俺っちにも約束してくださいよね、死なないと。俺っちよりクリボーの方が悲しんでいますから。」

ああ、約束するさ。

「俺はジャンク・シンクロンの効果を発動！ 墓地からチューニング・サポーターを特殊召喚する！」

チューニング・サポーター

DEF 100

「さらに俺は手札のジャンク・サーバントを特殊召喚する！」

ジャンク・サーバント

4

ATK 1500

「レベル4、ジャンク・サーバントとレベル1、チューニング・サポーターにレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング！」

4 + 1 + 3 = 8

「シンクロ召喚！ 粉碎せよ、ジャンク・デストロイヤー！！」

ジャンク・デストロイヤー

8

ATK 2600

『主・・・そこまでやると言つのなら仕方があるまい。』

ジャンクといい、お前といい色々心配をかけてすまないな。

「ジャンク・デストロイヤーの効果を発動！ お前のギガプラントとその伏せカードを破壊だ！ タイダル・エナジー！！」

ジャンク・デストロイヤーは4本の腕を振り上げた。
その時……………

「私は手札のダーク・ヴァージャーを捨て、天罰を発動！ ジャンク・デストロイヤーの効果が無効にし、破壊する！」

「何！？」

空から雷が落下し、ジャンク・デストロイヤーに直撃した。

「くっ……だが、召喚が無効にしたわけではない。俺はチューニング・サポーターの効果でカードをドローだ。」

やはりそう簡単に逆転できないか。

「俺はカードをセットし、ターンエンドだ。」

鉄也 / LP 1500

手札 2枚

モンスター / なし

魔法・罠 / リバース × 1

「私のターン。私はギガプラントをデュアル状態にする。そしてデュアル状態になったギガプラントの効果を発動。1ターンに1度、墓地から植物族モンスターを特殊召喚する。私は墓地から

スプレندیッド・ローズを特殊召喚するわ。」

スプレندیッド・ローズ

6

ATK2200

「バトル・・・スプレندیッド・ローズでダイレクトアタック。
スプレندیッド・ウィップ!!」

「俺は和睦の使者を発動! このターン、俺が受ける戦闘ダメージ
は0となる。」

俺の周りにバリアが現れ、スプレندیッド・ローズの鞭の衝撃
を受け止めた。

「私はカードをセットし、ターンエンドするわ。」

アキ/LP1900

手札0枚

モンスター/ギガプラント(デュアル状態、攻)、スプレンディ
ッド・ローズ(攻)

魔法・罫/増草剤、リバーズx1

「俺のターン!」

・・・・・・リビングデッド!

「俺は金華猫を召喚！」

金華猫

1

ATK400

「金華猫の効果を発動！俺はミスティック・パイパーを特殊召喚する！」

ミスティック・パイパー

1

ATK0

「俺はミスティック・パイパーをリリースし、カードをドロウする！俺が引いたカードは・・・激流葬だ。俺はカードを2枚セツトし、ターンエンド。このエンドフェイズ、金華猫は手札に戻る。」

鉄也／LP1500

手札2枚

モンスター／なし

魔法・罨／リバーズ×2

「私のターン。 私は貪欲な壺を発動。」

ここで貪欲が来たか……………

「私は墓地のコアキメイル・グラヴィローズ、グローアップ・バルブ、パペット・プラント、ガード・ヘッジ、そしてブラック・ローズ・ドラゴンデッキに戻し、カードを2枚ドローする。」

「……………」

「私はボタニカル・ライオを召喚する。」

ボタニカル・ライオ

4

ATK1600

「ボタニカル・ライオは自身の効果により、攻撃力がアップするわ。」

ボタニカル・ライオ

4

ATK1600 2500

「はあ、はあ……俺はボタニカル・ライオの召喚により、激流葬を発動だ！ フィールド上のモンスターを全て破壊する！」

フィールド上に巨大な洪水が起こり始めた。
これでどうだ！

「私はボタニカル・ライオをリリースし、カウンター罠、ポリノシスを発動！ 激流葬の効果は無効にし、破壊する！」

「何！？」

洪水が収まってしまった。

「私はギガプラントの効果を発動。 墓地からボタニカル・ライオを特殊召喚する。」

ボタニカル・ライオ

4

ATK1600 2500

「バトル！ ボタニカル・ライオでダイレクトアタック！」

「俺はリビングデッドの呼び声を発動！ 俺はジャンク・コマンドーを蘇生させる！」

『トアアア！』

ジャンク・コマンドー

10

ATK3000

「くっ．．．私はボタニカル・ライオの攻撃を中止する。そしてカードをセットし、ターンエンドよ。」

アキ／LP 1900

手札 0 枚

モンスター／ギガプラント（デュアル状態、攻）、スプレンディッド・ローズ（攻）

魔法・罨／増草剤、リバーズ×1

「俺のターン！俺はジャンク・コマンダーの効果を発動！墓地からジャンク・ストライカーを特殊召喚する！フェローズ・リターン！！」

ジャンク・ストライカー

8

ATK 2500

ここはギガプラントを攻撃して破壊できればいいんだが．．．あの伏せカードが棘の壁かミラーフォースの可能性がある．．．

「俺はカードをセットしてターンエンドだ。」

鉄也／LP 1500

手札2枚

モンスター／ジャンク・コマンダー（攻）、ジャンク・ストライカー（攻）

魔法・罨／リビングデッドの呼び声（ジャンク・コマンダー指定）、リバーズ×1

「私のターン。私はカードをセットし、ターンエンド。」

アキ／LP1900

手札0枚

モンスター／ギガプラント（デュアル状態、攻）、スプレンディッド・ローズ（攻）

魔法・罨／増草剤、リバーズ×2

こつちも動きを考えないとな・・・

「俺のターン。俺は金華猫を召喚する！」

金華猫

1

ATK400

「俺は金華猫の効果でミスティック・パイパーを特殊召喚する！」

ミスティック・パイパー

1

ATK0

「ミスティック・パイパーをリリースし、カードをドロ―!! 俺が引いたカードはアームズ・ホール。さらに俺はジャンク・コマンドーの効果を発動! フェローズ・リターン!!」

ジャンク・シューター

6

ATK2000

「ジャンク・シューターの効果を発動! エクストラデッキからジャンク・アーチャーを墓地へ送り、500ポイントのダメージを与える。アサルト・バレット!!」

「ハア!!」

アキ LP1900 1400

「そしてバトル! ジャンク・ストライカーでギガプラントを攻撃! スクラップ・トルネード!!」

「私は罠カード、聖なるバリア ミラーフォースを発動! 攻撃表示モンスターを全て破壊する!!」

アキのモンスターゾーンにバリアが現れた。

「それを読んでいた！ 俺は魔宮の賄賂を発動！」

「何！？」

アキのモンスターを囲んでいたバリアが消えた。

「でも、魔宮の賄賂の効果でドローさせてもらっわ。」

「バトル続行！ ギガプラントを破壊！ ギガプラントは墓地へ行かず、除外される！」

アキ LP 1400 1300

「増草剤によって蘇生されたギガプラントがフィールドを離れた為、増草剤を破壊だ！」

「くっ……………」

「さらに植物モンスターが減ったため、ボタニカル・ライオの攻撃力がダウンする。」

ボタニカル・ライオ

4

ATK 2500 2200

「さらにジャンク・コマンダーでスプレディッド・ローズを攻撃！
レイジング・ブレイク！！」

ジャンク・コマンダーの杖がスプレディッド・ローズに直撃する。

「私はガード・ブロックを発動！ 戦闘ダメージを0にし、カードをドローする！」

アキ LP 1400

ボタニカル・ライオ

4

ATK 2200 HP 1900

「さらにジャンク・シューターでボタニカル・ライオを攻撃！ スクラップ・シューティング！」

アキ LP 1400 HP 1300

「さらに、金華猫でダイレクトアタック！」

アキ LP 1300 900

「はあ．．．はあ．．．カードを2枚セットし、ターンエンドだ。」

何とか．．．状況を巻き返せた。

鉄也 / LP 1500

手札 1枚

モンスター / ジャンク・コマンダー（攻）、ジャンク・ストライカー（攻）、ジャンク・シューター（攻）

魔法・罠 / リビングデッドの呼び声（ジャンク・コマンダー指定）
、リバーズ×2

「私のターン。」

しかし．．．．．状況を巻き返せたのはいいが、彼女に手札を増強させてしまったな。

「私はカードを2枚セットし、モンスターをセットする。ターンエンド。このエンドフェイズ、私は命削りの宝札の効果で手札を全て捨てる。しかし私の手札は0。」

アキ / LP 900

手札 0枚

モンスター / 裏側守備表示モンスター 1体

魔法・罠 / リバーズ×2

「俺のターン！俺はもう1度金華猫を召喚する。」

金華猫

1

ATK400

『ニャ~~~~~』

何か金華猫が眼を回している。
すまん、何かこう使いまわしてばっかで。

「俺は金華猫の効果で墓地からレベル1のモンスターを特殊召喚する。
もちろん、対象はミスティック・パイパーだ！」

ミスティック・パイパー

1

ATK0

「俺はミスティック・パイパーをリリースし、カードをドロ〜。
引いたカードはカオス・ネクロマンサーだ。ミスティック・パイパーの効果により、もう1度ドロ〜する。」

「この瞬間、私はミスティック・パイパーの効果にチェーンして永続罫、便乗を発動するわ。」

「な．．．便乗!？」

「まあ、今の効果でドローされてもカードをドローできないけどね。」

「はあ．．．はあ．．．一体、どれだけ追加ドローするつもりなんだよ。」

「それはあなたが言う義理なんてないと思うけど。」

それもそうだな．．．．．

「なら．．．俺はジャンク・ストライカーでモンスターを．．．．．」

「させないわ。私は永続罠、強制終了を発動。セットされているモンスターを墓地に送り、バトルフェイズを終了させる。」

「何!？」

くそ．．．．．相手に手札を稼いってしまった上に攻撃を止められた。

鉄也／LP1500

手札1枚

モンスター／ジャンク・コマンダー（攻）、ジャンク・ストライカー（攻）、ジャンク・シューター（攻）

魔法・罠／リビングデッドの呼び声（ジャンク・コマンダー指定）

、リバーズ×2

「私は壺の中の魔術書を発動。お互いのプレイヤーはカードを3枚ドローする。」

「そして便乗か．．．．．」

「そうよ。便乗の効果により、カードを2枚ドローするわ。そして手札を1枚捨て、—D・D・R《ディファレント・デイメンション・リバイバル》を発動。除外されているモンスターを特殊召喚する。 召喚するのは．．．」

『グオアアアア!』

ギガプラント

6

ATK2400

「またかよ．．．」

あのモンスター怖いよ！
植物戦力その1だよ!!

「私はギガプラントをデュアル状態にする。そして効果を発動。墓地からローンファイア・ブロッサムを特殊召喚する。」

ローンファイアだと!?

「D・D・Rのコストで墓地に送ったか……………」

まずい…………あれは植物戦力その2…………
爆弾の形をしたつぼみが現れる。

ローンファイア・ブロッサム

3

ATK500

「私はローンファイア・ブロッサムをリリースし、デッキから椿姫
ティタニアルを特殊召喚する。」

またやばいのが…………頼むから棘と鞭は勘弁してくれ！！
もう、嫌だから！！

SMプレイが好みのようなモンスターの実現化するダメージは嫌
だから！！

これを諸に喰らったら次こそ死ぬから。

コアキメイル・グラヴィローズの容姿に似た大人の女性が現れる。
これは植物戦力その3だ。

椿姫ティタニアル

8

ATK2800

「バトル。椿姫ティタニアルでジャンク・ストライカーを攻撃。」

カメラリア・ウィップ!」

くそっ．．．伏せカードは全部ブラフだ．．．今は攻撃反射系カードが全くない．．．

「ぐっ．．．．．」

鉄也 LP1500 1200

「カードを2枚セットし、ターンエンド。」

アキ/LP1900

手札1枚

モンスター/ギガプラント(デュアル状態、攻)、椿姫ティタニアル(攻)

魔法・罨/D・D・R(ギガプラントに装備)、便乗、強制終了、リバーズ×2

「俺のターン!」

これならいけるか．．．．．

「はあ．．．はあ．．．俺は金華猫をもう1度召喚する!」

金華猫

1

ATK400

「俺は墓地からミスティック・パイパーを特殊召喚する！」

ミスティック・パイパー

1

ATK0

「俺はミスティック・パイパーをリリースし、カードをドロースする！」

『クリクリ〜！』

クリボー！

『クリリ〜？』

クリボーが俺を心配している・・・

「俺のドロースしたカードはクリボー。よって、もう1度ドロースする！」

「じゃあ、私もさらに2枚ドロース・・・」

くそっ・・・背は腹に代えられない・・・

「俺は手札を1枚捨て、ライトニング・ボルテックスを発動！ 相手フィールド上の表側表示モンスターを全て破壊する！ この効果は対象を取る効果ではない為、ティタニアルの効果では無効に出来ない！」

ようし、これで……………

「何！？」

ギガプラントとティタニアルは破壊されてなどいなかった。

「私はライトニング・ボルテックスにチェインして魔宮の賄賂を發動したわ。これで貴方のライトニング・ボルテックスは無効となった。」

くっ…………ライトニング・ボルテックスが無効にされただけじゃねえ…………また彼女にも……………

「俺は魔宮の賄賂の効果でカードをドローする。」

「私は便乗の効果で2枚ドローするわ。」

手札が6枚に……………

……………だったら俺は強制終了の効果を使わせるか。

「俺はジャンク・エンペラーの効果でジャンク・ストライカーを蘇生！ フェローズ・リターン！！」

ジャンク・ストライカー

ATK2500

「俺はジャンク・ストライカーでギガプラントを攻撃！」

「私は強制終了の効果を発動！ セットしたカードを墓地へ送り、相手のバトルフェイズを終了させる！」

ジャンク・ストライカーは攻撃を構えていたが、動きが止まった。

「俺はメインフェイズ2に入り、ジャンク・シューターの効果を発動。エクストラデッキからジャンク・デストロイヤーを墓地へ送り、ダメージを与える。」

アキ LP900 400

「そして俺はジャンク・シューターを守備表示に変更し、光の護封剣を発動する！」

まずい．．．手札が良くても強制終了とティタニアルの前では無力だ！

何本もの光の剣が俺の周りに現れた。

「ターンエンドだ。 エンドフェイズにまた金華猫は手札に戻る。」

鉄也 / LP1500

手札4枚

モンスター／ジャンク・コマンダー（攻）、ジャンク・ストライカー（攻）、ジャンク・シューター（守）

魔法・罠／リビングデッドの呼び声（ジャンク・コマンダー指定）、光の護封剣（残り3ターン）、リバーズ×2

「はあ．．．はあ．．．．．」

今は光の護封剣で凌ぐしかない．．．

「はあ．．．はあ．．．うっ！」

まずい．．．出血のせいで頭が少しふらついてきた．．．．．

「私のターン．．．．．私は椿姫ティタニアルをリリースし、神秘の中華なべを発動。」

アキ LP400 3200

「私はギガプラントの効果を発動。 椿姫ティタニアルを墓地から特殊召喚する。」

椿姫ティタニアル

8

ATK2800

植物族は本当にえげつないよな．．．．．アンデット族並に。

「さらに私はロードポイズンを召喚。」

ロードポイズン

4

ATK1500

「カードを2枚セットし、ターンエンド。」

アキ／LP3200

手札2枚

モンスター／ギガプラント（デュアル状態、攻）、椿姫ティタニアル（攻）、ロードポイズン（攻）

魔法・罨／D・D・R（ギガプラントへ装備）、便乗、強制終了、リバース×2

「俺のターン．．．．．」

ここで金華猫とミスティック・パイパーを合わせたら彼女の思う壺だ。

ここは少しでも多く彼女のライフを削ってカードを削るか．．．

「ジャンク・シューターの効果を発動！エクストラデッキからジャンク・ウォリアーを墓地へ送り、ダメージを与える。アサルト・

バレット！」

アキ LP 3200 2700

「さらに俺はジャンク・コマンダーの効果を発動！ フェローズ・リターン！！」

ジャンク・デストロイヤー

8

ATK 2600

「バトル！ ジャンク・ストライカーでギガプラントを攻撃！」

「私は強制終了を発動！ セットされているカードを墓地へ送り、バトルフェイズを終了させる！」

「俺はターンエンドだ。」

鉄也 / LP 1500

手札 2 枚

モンスター / ジャンク・コマンダー（攻）、ジャンク・ストライカー（攻）、ジャンク・デストロイヤー（攻）、ジャンク・シユーター（守）

魔法・罫 / リビングデッドの呼び声（ジャンク・コマンダー指定）、光の護封剣（残り 2 ターン）、リバーズ × 2

「私のターン．．．私は異次元からの埋葬を発動。除外されているフェニキアン・クラストー・アマリス、イービル・ソーン、そしてウィードを墓地に戻す。そしてギガプラントの効果を発動。蘇れ、イービル・ソーン！」

イービル・ソーン

1

ATK100

「私はイービル・ソーンをリリースし、ダメージを与える。」

「ぐっ．．．．．」

鉄也 LP1500 1200

痛い．．．

攻撃が行えない代わりにバーンで攻め始めたか．．．．．

「私はまだ通常召喚を行っていない。私はスポーアを召喚する。」

可愛らしい綿飴のようなモンスターが現れた。

スポーア

1

DEF800

「私はこれでターンエンド。このエンドフェイズに私は墓地のウィードを除外し、フェニキアン・クラスター・アマリリスを特殊召喚する。」

フェニキアン・クラスター・アマリリス

8

DEF0

アキ/LP2700

手札3枚

モンスター/ギガプラント（デュアル状態、攻）、椿姫ティタニアル（攻）、ロードポイズン（攻）、スポーア（守）、フェニキアン・クラスター・アマリリス（守）

魔法・罫/D・D・R（ギガプラントへ装備）、便乗、強制終了、リバーズ×1

「俺のターン！俺はジャンク・ストライカーでギガプラントを攻撃！」

「私は強制終了の効果でスポーアを墓地に送り、バトルフェイズを終了させる！」

「くっ……………」

これじゃあ、光の護封剣の意味が無い！

「俺はジャンク・シューターの効果を発動！ エクストラデッキからジャンク・アーチャーを墓地へ送り、ダメージを与える！」

アキ LP 2700 2200

「ターンエンドだ……………」

鉄也 / LP 1500

手札 3枚

モンスター / ジャンク・コマンダー（攻）、ジャンク・ストライカー（攻）、ジャンク・デストロイヤー（攻）、ジャンク・シューター（守）

魔法・罫 / リビングデッドの呼び声（ジャンク・コマンダー指定）、光の護封剣（残り1ターン）、リバーズ×2

「私のターン…………このターンで光の護封剣も最後ね。 私は生還の宝札を発動。」

「あれは！」

またまずいカードが出た…………あれはまだ禁止されていないのか。しまった…………俺も入れておけばよかった…………

「ギガプラントの効果を発動。墓地からローンファイア・ブロッサムを蘇生させる。」

ローンファイア・ブロッサム

3

ATK1400

「私は生還の宝札の効果により、カードをドローするわ。そしてフェニキアン・クスター・アマリリスをリリースし、デッキから2体目のギガプラントを特殊召喚する。」

ギガプラント

6

ATK2400

「ターンエンドよ。このエンドフェイズ、私は墓地のイービル・ソーンを除外し、フェニキアン・クスター・アマリリスを蘇生させ、生還の宝札でカードをドロー。」

フェニキアン・クスター・アマリリス

8

DEF0

アキノLP2200

手札5枚

モンスター／ギガプラント（デュアル状態、攻）、ギガプラント（攻）、椿姫ティタニアル（攻）、ロードポイズン（攻）、フェニキシアン・クラストー・アマリリス（守）

魔法・罾ノ便乗、強制終了、生還の宝札、リバーズ×1

やばい……厄介なモンスターが勢揃いだ……

「俺のターン！」

強制終了がある限り、俺のバトルフェイズは終了される。

そしてギガプラントがあるからモンスターを墓地に送ってバトルフェイズを終了させて次のターンで蘇生できる……

しかも生還の宝札でドロ……最悪だー！

！（汗）

アキ、お前は魔女ではない……お前は極度のドSだー！！

「カードをセットし……モンスターをセット。ジャンク・シューターの効果を発動。エクストラデッキからジャンク・ウォリアーを墓地へ送り、ダメージを与える。はあ……はあ……ジャンク・エンペラー以外のモンスターを守備表示へ変更し、ターンエンドだ。」

アキ LP 2200 1700

鉄也 / LP 1200

手札3枚

モンスター／ジャンク・コマンダー（攻）、ジャンク・ストライカー（守）、ジャンク・デストロイヤー（守）、ジャンク・シューター（守）、裏側守備表示モンスター1体
魔法・罾ノリビンゲデッドの呼び声（ジャンク・コマンダー指定）
、リバーズ×3

ここはセットしたミラーフォースに賭けてみるか……………

「私のターン……………私はフェニキシアン・クラスター・アマリリスを攻撃表示に変更する。」

フェニキシアン・クラスター・アマリリス

8

ATK2200

「バトル！ 椿姫ティタニアルでジャンク・ストライカーを攻撃！」

「俺は聖なるバリア・ミラーフォースを発動！ これでお前のモンスターは全滅だ！」

「甘いわね……………私は手札を1枚捨て、ディストラクション・ジャマーを発動！ モンスターを破壊する効果を無効にし、破壊する！」

「何！？」

ミラーフォースが消えた。

くそ、唯一の手段が……

「バトル続行！」

ティタニアルの攻撃により、ジャンク・ストライカーは破壊された。

「はあ……はあ……」

「さらに……フェニキシアン・クラスター・アマリリスでジャンク・デストロイヤーを攻撃！ フレイム・ペタル！」

フェニキシアン・クラスター・アマリリスの攻撃により、ジャンク・デストロイヤーは破壊された。

「フェニキシアン・クラスター・アマリリスの効果を発動！ ダメージステップ終了時に自身を破壊し、800ポイントのダメージを与える！ スキャッター・フレイム！」

「ぐあああああ……！」

鉄也 LP 1200 400

「がはっ！」

ガクッ……

まずい……傷が悪化している……

俺は膝をついた。

「ターンエンド。 エンドフェイズに私は墓地のイービル・ソーンを除外し、フェニキシアン・クラストー・アマリリスを特殊召喚する。 そして生還の宝札の効果で1枚ドロウするわ。」

アキ／LP 1700

手札6枚

モンスター／ギガプラント（デュアル状態、攻）、ギガプラント（攻）、椿姫ティタニアル（攻）、ロードポイズン（攻）、フェニキシアン・クラストー・アマリリス（守）

魔法・罠／D・D・R（ギガプラントデュアル状態へ装備）、便乗、強制終了、生還の宝札

「はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

くそっ・・・勝てない・・・

何も出来ねえ・・・次のターンで確実に俺の負けだ・・・
しかもこの傷だと負けたら完全に死ぬな。

『クリクリ〜〜〜！！』

クリボーが俺に声をかけた。

「ゴホッ、ゴホ・・・すまん、クリボー。 どうやら・・・俺はここまでのようだ。」

『クリリ〜〜〜！』

もう無理だな……………

「村上 鉄也……………私を相手にここまで出来たのは褒めてやるわ。」

「そりゃあ、どうも。もし俺が刀持ってたら腹切っていたくらいだぞ。」

「一つ聞いて良いかしら？ あなたは何故ここまで挑むの？ あの時、そのままギブアップすればこんなことにはならなかったのに……………」

「まあ、さっきも言ってたんだが俺には色々事情があるんだよ。負けられない理由が色々とな。」

「じゃあ、もう一つ聞かせてもらっわ。 あなたは何故、私に臆せずデュエル出来たの？ 私を相手に全然退かず恐れず私のような魔女に真っ向に挑めたの？」

「……………簡単な理由だ。 相手が魔女であろうと関係ない。カードを持つ相手は皆同じ立場だ。俺はその相手に全力を尽くす、ただそれだけだ。 十六夜……………こっちも1つ聞かせてもらう。お前は……………考え直すことは出来ないのか？」

「考え直す？」

「ああ。 人と向き合えよ。 人を傷つけて楽しむなんてただ寂しいだけだ。 お前だって……………本当は人を傷つけないんだろう。 本当は寂しいんだろう。」

「あなたに．．．．何がわかる!？」

「．．．．正直に言うとうわからないな。でも、心の中でお前が傷ついていることはわかる。」

「．．．．負け惜しみは見苦しいわ。」

「はあ．．．はあ．．．まあ、今更こんな状態で何を言っても無理か。俺の負けだ。」

「．．．．じゃあ、次のターンで私が止めを刺すわ。」

ああ、煮るなり焼くなり好きにしろ、どうせ俺の負けだからな。
後は遊星に任せておくか。

『それはどうかな?』

！？

「だ、誰だ？」

S i d e E n d

S i d e / ルーカス

「少しやり過ぎたか。」

彼女のデッキを強化させたとはいえ、やり過ぎたと言つべきか。
まあ、あいつは終わったな。

しかし、それはそれで好都合だ。

これで「豪火の竜」だけでなく「不屈の戦士」の力も手にする事が出来るかもしれないからな。

S i d e E n d

Side / ????

鉄也．．．．．悩んでいるな。

あそこまで追い詰められてたら仕方が無いか．．．
でも、君がそんなところで諦めるなんて僕が許さない。
君の為にも、そして友の為にも．．．

『鉄也．．．．．君はそこまでやって行けたんだ。　今更、君が
諦めるなんて情けないよ。』

「だ、誰だ！？　誰が俺に話しかけているんだ！？」

『落ち着いてくれる？　僕は今、君にテレパシーをかけているだけ
だから。』

「なおさら落ち着いていられるか！？」

『まあまあ．．．．．話の続きと行こうじゃないか。　鉄也．．．
諦めないでくれ。　ここで諦めたら君は終わりだ。』

「容易く言われてもな．．．もう無理だ、あんな状況から勝てるの
は！」

『君らしくないな。　君にはこのターンがまだあるじゃないか。
ドローする前に諦めるのはデュエリストとして情けないだろう。』

「．．．．．」

『ここまで来て諦めるなんて君のために戦ってきたカードにも傷がつくだろう。だから……………引け、カードを!』

「!」

『僕の名は藍沢^{あいざわ} 遊斗^{ゆうと}……………君にこのカード、痣のカードを届けに来た。』

そう言つて、僕は手に持っていたカードを消滅させた。

「遊斗!? お前はもしかして……………」

プッン!

僕はテレパシーを切った。

「じゃあ、鉄也……………頑張れよ。」

S i d e E n d

S i d e / 鉄也

「はっ……………!」

何だ今のは．．．．．しかし礼を言わせて貰うぜ．．．．．
遊斗。

「いや待て、十六夜 アキ．．．．．」

「え？」

俺は立ち上がり始めた。

「はあ．．．はあ．．．さっき言った事を撤回だ。俺はまだ行ける。」

（ここからは遊星のデュエルBGMを想像して下さい。）

そつだ．．．．．これがラストチャンスだ。

「俺のターン．．．ドロー！！」

！！

そつだった．．．まだこのカードがあつた！

「俺はジャンク・エンペラーの効果を発動！ 墓地からジャンク・ストライカーを特殊召喚する！」

ジャンク・ストライカー

8

ATK2500

「俺は宝札の代償を発動！ 自分フィールド上に2体以上存在する時に発動する事が出来る。 自分フィールド上のシンクロモンスターを全て除外し、除外したシンクロモンスターの枚数分+2枚デッキの上からカードを手札に加える！」

「何ですって!?!」

俺のジャンクモンスターたちが消え、光の粒となった。

「墓地へ送ったモンスターは3体。 よって5枚加える！ ちなみに「ドローする」効果ではなく「手札に加える」効果である為、乗は発動しない。」

「くっ……………」

意地でも賭けるぜ…………この引きに。

1枚…………2枚…………3枚…………4枚…………5枚…………ようし!!

「俺はお前の便乗を墓地へ送り、トラップ・イーターを特殊召喚する！」

ガブッ…………ゴクン。

トラップ・イーター

ATK1900

「さらに俺は戦士の生還を発動！ ジャンク・シンクロンを手札に加え、召喚する！」

ジャンク・シンクロン

3

ATK1300

『大丈夫か、鉄也！？』

「ああ。少し取り乱していたが、もう俺は大丈夫だ。最後まで付き合ってくれよな。」

『もちろんっす！』

「それこそ俺の相棒だ。」

『クリクリリリリリリリ！！』

「あ、ごめんごめん。お前にも期待してるからな、クリボー。」

『クリクリリリ！』

2人とも心配かけてすまん。俺も本格的に動くぜ。

「ジャンク・シンクロンの効果を発動！ 墓地からチューニング・サポーターを特殊召喚する！」

チューニング・サポーター

1

DEF100

「俺はチューニング・サポーターの特殊召喚により、地獄の暴走召喚を発動！ 墓地からチューニング・サポーターを2体特殊召喚する！ そしてこの効果は対象を取らない効果であり、ティタニアルの効果では無効に出来ない。そしてお前も同名モンスターを呼べるが、フィールドが满满っている為、無理だ。」

チューニング・サポーター×2

1

DEF100

「さらに俺は大嵐を発動！ フィールド上の魔法・罫カードを全て破壊する！」

巨大な嵐が起こり、アキの魔法・罫カードと俺の魔法・罫カードを破壊した。

「D・D・Rが破壊された為、ギガプラントは除外される。」

「くっ……ここで一気に逆転しようと言うの……」

「ああ。 見せてやるぜ、俺の戦いを!!」

ピカア……………

「ん!？」

俺の左腕が……上腕の黒い痣が光り始めた。

そして痣だけでなく……デュエルディスクのエクストラデッキを収納する所が光り始めた。

俺はエクストラデッキを確認した。

「これは……………」

中には1枚のカードが輝いていた。

俺はカードを眺めた。

「これが……………俺の痣のモンスターか。」

まあ、悪くは無いな。

格好いいし、ほぼ不死身だし。

「いいだろう、一緒に戦ってくれ! 行くぞ、ジャンク!!」

『おう!』

「レベル1、チューニング・サポーターにレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング! 集いし力が勝利へ導く右腕となる。光指す道となれ!」

1 + 3 〓 4

「シンクロ召喚！ いでよ、アームズ・エイド！」

アームズ・エイド

4

ATK1800

「チューニング・サポーターの効果を発動！ カードをドロ―する
！」

じゃあ行くぜ・・・

ビリイ！

俺は左腕の袖の上腕の所を破った。
人型の痣が完全に見える・・・

「レベル2、チューニング・サポーター2体にレベル4、トラップ・
イーターをチューニング！ 集いし兵の魂つわものよ・・・不屈の戦士を呼
び覚まし、・・・」

感じる・・・俺の痣が・・・とりあえず力を感じる・・・
・・・

「・・・己の闘魂を拳に今、大地を砕け！」

2 + 2 + 4 || 8

「シンクロ召喚！ 唸れ、我が闘志……………ギガンテック・ファイター！！」

『トアアアアア！』

緑色のサングラスをかけた白銀の巨人が現れる。
その姿は正に力そのものを表すような印象を持っていた。

ギガンテック・ファイター

8

ATK2800

「何なの…………あのモンスター……………」

「はあ…………はあ…………はあ…………はあ…………ここから……………」
クライマックスと行こうぜ、十六夜 アキ。」

T o B e C o n t i n u e d

今回のオリジナルカード

宝札の代償

通常魔法

自分のフィールド上にシンクロモンスターが2体以上存在する場合に発動可能。

自分フィールド上のシンクロモンスターを全て除外し、その枚数分+2枚デッキの1番上からカードを手札に加える。

このカードを発動したターン、自分はバトルフェイズを行えず、次のターン、ドローフェイズをスキップする。

第32話 脅威なる魔女（後書き）

次回予告

鉄也「十六夜 アキ．．．．．もう、魔女を止める。」

アキ「私にそんな道は無いわ。」

鉄也「逃げるな、十六夜！！ 本当はお前も望んでるんじゃないのか？ 皆一緒に笑って楽しんで生きていける世界を！」

アキ「うるさい．．．．．シンクロ召喚、ブラック・ローズ・ドラゴン！！」

1117

鉄也「うおおおお！ 行つけえええええ、ギガンテック・ファイター！！ コンバット・ブレイカー！！」

次回、遊戯王5D's The Power of Fellows

第33話「Witch vs Fighter 3 黒薔薇竜
vs 不屈の戦士」

フォーチュンカップ編．．．．．遂に完結。

第33話 激闘！！ 不屈の闘士（前書き）

この話で鉄也 vs アキもラストになります。
では、どうぞご覧ください。

第33話 激闘！！ 不屈の闘士

- 前回のあらすじ -

鉄也「言わせるかああああ！！ もう、ウザいからそんなのいらねえよ！ どうせまた前回の2つのような口クでもない物ばっかだろ！ てゆうかどんだけ行数稼ぎしてえんだテメーは！ そんなのいらねえからさっさと始めろ！！」

作者からのお願い

読者のみなさん、小説を読むときは部屋を明るくして画面から離れて読んでください。

Side / 結衣

「あのモンスターは．．．．．」

「ほお、あれが君のモンスターか。初めて見るな、ギガンテック・ファイター．．．。」

見ただけでわかる．．あのモンスター．．ギガンテック・ファイターは巨大な力そのものだというのが．．．．．
まさか鉄也があんなに強いなんて．．．．．
私がデュエルした時と比べてはるかに超えている．．．．．

「結衣．．．．．君の痣は輝いているか？」

「え？」

私は袖をめくった．．．．．
確かに．．確かに私の右腕の痣が輝いている．．．

「何で．．．．．」

「簡単に言えば、村上クンの闘志に反応しているという事だ。」

「鉄也の闘志．．．．．」

最後まで．．．．．続けるという意味なの？

「（しかし村上クン．．．．．いったいどうやってそのカードを手に入れたんだ？）」

「鉄也．．．．．死なないで。」

S i d e E n d

- S i d e / ルーカス -

- A M 車内 -

鉄也 / L P 4 0 0

手札 5 枚

モンスター / ギガンテック・ファイター（攻）、アームズ・エイド（攻）、裏側守備表示モンスター 1 体

魔法・罠 / なし

アキ / L P 1 7 0 0

手札 6 枚

モンスター / ギガプラント（攻）、椿姫ティタニアル（攻）、ロードポイズン（攻）、フェニキシアン・クラスター・アマリリス（守）

魔法・罾／なし

「何だ、あのモンスターは．．．．．」

デヴァインはモニターに映っている村上 鉄也が召喚した白銀の巨人、ギガンテック・ファイターを見て驚いていた。

「ギガンテック・ファイターか．．．．．」

．．．．．どうやら、探させただけ時間の無駄だったようだな。
仕方があるまい、後でシエンに報告しよう。
しかし．．．．．あいつは何時、あのカードを手に入れたんだ？

- Side End -

- Side / 鉄也 -

『村上鉄也が召喚したギガンテック・ファイター．．．．．これは見た目からしていかにも強そうだー！ 一体どんな力を秘めているのだろうか！？』

「はあ．．．はあ．．．はあ．．．はあ．．．ここから．．．．．」

クライマックスと行こうぜ、十六夜 アキ。」

危ねえ．．．また何か妙なイメージが見えてくるところだった．．
．何とか理性を保てたぜ。

ギガンテック・ファイター

8

ATK2800

「俺はギガンテック・ファイターをシンクロ召喚した為、チューニング・サポーターの効果により、カードを2枚ドロする。」

ようし．．．．．

「さらにギガンテック・ファイターは自分・相手の墓地の戦士族モンスター1体につき攻撃力が100ポイントアップする。」

鉄也の墓地

ジャンク・シンクロン

ジャンク・シンクロン

ジャンク・サーバント

ジャンク・デストロイヤー

ジャンク・デストロイヤー

ジャンク・ウォリアー

ジャンク・アーチャー

アキの墓地

戦士族モンスターなし

ギガンテック・ファイター

8

ATK 2800 3400

「地味な効果ね．．．．．」

まあ、そう焦るな。

ギガンテック・ファイターの効果はこれだけじゃない。

「そして、手札から地砕きを発動！ 相手フィールドの守備力が一番高いモンスターを破壊する。」

突然椿姫ティタニアルの足元が崩れ始め、落ちてしまった。

「ティタニアルが．．．」

「さらに俺はアームズ・エイドをギガンテック・ファイターに装備する。」

ギガンテック・ファイター

8

ATK 3400 4400

「こ、攻撃力4400．．．．．（私には強制終了がもう無い．．．）」

「はあ．．．はあ．．．．．ここで攻撃できたら俺の勝ちだ．．．だが、宝札の代償を使用したターン、俺はバトルフェイズを行えない。俺はカードを3枚セットし、ターンエンドだ。」

鉄也／LP 400

手札3枚

モンスター／ギガンテック・ファイター（攻）、裏側守備表示モンスター1体

魔法・罫／アームズ・エイド（ギガンテック・ファイターへ装備）
、リバーズ×3

「はあ．．．はあ．．．はあ．．．はあ．．．．．」

「私のターン．．．．．（今の私にギガンテック・ファイターの攻撃力を超えるモンスターは存在しない．．．）私はギガプラントをデュアル状態に変更する。」

「この瞬間．．．俺は奈落の落とし穴を発動！ ギガプラントを破壊し、除外する！」

『グオオオオオ！！！』

ギガプラントの足元が崩れ、落ちてしまった。

「くっ．．．私はロードポイズンを守備表示へ変更するわ。」

ロードポイズン

4

DEF1000

「さらにカードを3枚セットし、ターンエンド。」

アキ／LP1700

手札4枚

モンスター／ロードポイズン（守）、フェニキシアン・クラスタ

！・アマリリス（守）

魔法・罨／リバーズ×3

「俺のターン。宝札の代償を発動したターン、俺は次のドローフ
エイズをスキップされる。だが、それは問題ない。俺は金華猫
を召喚する。」

金華猫

1

ATK400

「金華猫の召喚により、俺は墓地からミスティック・パイパーを特殊召喚する。」

ミスティック・パイパー

1

ATKO

「俺はミスティック・パイパーをリリースし、効果を発動。カードをドロウする。」

「ドロフェイズがスキップされても問題ないことね……………」

「俺が引いたカードは精神操作。俺はそのまま発動し、フェニキシアン・クラスター・アマリリスのコントロールを得る。」

「どうするの…………そのモンスターのコントロールを得て？」

「こうするんだ、俺はモンスターを反転召喚する。」

俺の場に機械の竜が現れる。

サイバー・ヴァリー

1

ATKO

これは世界観からすればサイバー流のカード……………

何故が入ってたんだよな．．．黒崎さんから貰ったカードの中に。

「俺はサイバー・ヴァリーとフェニキシアン・クラスター・アマリスを除外し、効果を発動。カードを2枚ドロウする。」

「カードをドロウしただけでなくフェニキシアン・クラスター・アマリスの自己再生を防ぐなんて．．．．．」

「さて．．．．．俺の切り札の力を見せてやるぜ。」

(BGM:ジャックデュエル)

「ギガンテック・ファイターで．．．．．ロードポイズンを攻撃！ハイパー・アーム・クラッシュュー！」

『トアアアアア！！』

ギガンテック・ファイターはアームズ・エイドを装着した腕でロードポイズンを攻撃し始めた。

「リバーズカードオープン、サイクロン！私はあなたのアームズ・エイドを破壊する！」

竜巻がギガンテック・ファイターの腕に包み込み、ギガンテック・ファイターに装着されたアームズ・エイドが消えた。

ギガンテック・ファイター

8

ATK 4500 3500

「だが、ギガンテック・ファイターの攻撃力はまだ十分に高い！
ロードポイズンを破壊だ！」

ギガンテック・ファイターの拳がロードポイズンに直撃した。

「でも、アームズ・エイドの効果ダメージは避けられるわ。そしてロードポイズンの効果を発動！ このモンスターが戦闘によって破壊された場合、墓地から植物族モンスターを特殊召喚できる。現れよ、椿姫ティタニアル！！」

椿姫ティタニアル

8

DEF 2600

「まだまだあ！！ 悪いが椿姫も退場させてもらっぜ・・・俺は罠カード、破壊神の系譜を発動！！」

「あのカードは！」

「相手フィールド上の守備表示モンスターを破壊したターン、俺はレベル8のモンスターを選択して発動することができる。俺は勿論、ギガンテック・ファイターを選択する。そしてギガンテック・ファイターはこのターン2回攻撃ができる。ギガンテック・ファイターで椿姫ティタニアルを攻撃！ コンバット・ブレイカー！！」

『トアアアア!!』

ギガンテック・ファイターの拳がティタニアルに直撃する。

「うつ．．．．．」

彼女の伏せカードはブラフか？

彼女は戦力を殆ど削られて動けなくなり始めたか？
だが、あいにく俺は攻撃を休めないからな。

「はあ．．．はあ．．．．．カードを2枚セットし、ターンエンドだ。このエンドフェイズ、金華猫は手札に戻る。」

鉄也／LP400

手札4枚

モンスター／ギガンテック・ファイター（攻）

魔法・罠／リバーズ×3

「私のターン．．．．．」

「十六夜。」

「何？」

「はあ．．．はあ．．．もう1度聞く。お前は．．．．．人を傷つけたいのか？」

「そうよ．．．私は魔女よ。人を傷つけるのが楽しくてたまらない魔女よ。」

「．．．．．嘘つけ。」

「え？」

「お前は人を傷つけて楽しいと思ってなんていないだろう。」

「何を言つて．．．．．」

「周りの人々はお前の力を恐れ、お前から遠りはじめた。それでお前は人々に向き合う事が出来ず、孤独感を覚えた。そうではないのか？」

「何を言いたいの？」

「だからお前はその恐れられる力で人々を傷つける事でその孤独感を．．．自分自身の気持ちをごまかしているんだ、そうじゃないのか！？」

「．．．．．うるさい。」

「人を傷つけて笑っているお前の心の底では悲しんでいるんじゃないのか？」

「うるさい．．．．．あなたは何で私に臆さないのよ。何故私を怖がらない？ 何故私に立ち向かえる！？」

「それは．．．俺とお前は似た者同士からだ．．．」

「!？」

「俺はある時から大切なものを全て失った．．．大事な家族も．．．友達も．．．大切なものが全て俺から離れてしまった．．．それはもう、俺にとって死んでいるのも当然だった。」

そうだ．．．俺は忘れない．．．．．

あの邪神の男を．．．俺の命を奪ったあの男のことを．．．全て失ったことを．．．

「だが、その俺も再び輝く事が出来た．．．なぜなら俺にとって大切なものが出来たからだ。」

ジャンクにクリボー、氷室さんとじいさん、龍亞と龍可、結衣さんに黒崎さん、そして遊星．．．

「俺にも希望がある。だからこそお前のような奴を受け入れられる。」

はは．．．．．何偉そうに言っただ、俺は。

所詮、俺は原作知識を利用しているアニメ好きなフリーターだっというのに。

「まあ、俺が言いたい事は十六夜．．．．．お前は魔女をやめろ。」

「何を．．．．．」

「本当はお前も望んでるんだろう？ 人々と一緒に向き合える、一

緒に楽しく笑って過ごせる事を。」

「私にそんな道は．．．．．無いわ。」

大丈夫だ、問題ない。

しばらくの間、待っておけ。

十六夜アキ．．．．．俺はお前を受け入れられるぜ。

それにお前にはジャックや苦労、龍亞と龍可、そして遊星との絆が芽生えるからな。

でも、今はデュエル中だな。

「まあ、今は仕方ないかもしれないな。あとでゆっくり考える。そこまでして自分を否定するなら、今はその力を．．．．．思い切り俺にぶつける！」

「私はコアキメイル・グラヴィローズを召喚する！」

コアキメイル・グラヴィローズ

4

ATK1900

「さらに私は墓地のスポーアの効果を発動！ 墓地の植物族モンスターを除外することで特殊召喚することが出来る。私は墓地のダーク・ヴァーシヤーを除外し、特殊召喚する！」

スポーア

1

ATK400

「この効果で特殊召喚されたスポーアは除外された植物族のモンスターのレベル分、自身のレベルを上げる。」

スポーア

1 3

また来るか．．．彼女のエースが．．．．．

「レベル4、コアキメイル・グラヴィローズにレベル3、スポーアをチューニング！ 冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の華よ、開け！」

4 + 3 〓 7

「シンクロ召喚！ 現れよ、ブラック・ローズ・ドラゴン！」

『グアアア！』

ブラック・ローズ・ドラゴン

7

ATK2400

「ブラック・ローズ・ドラゴンの効果を発動．．．．．フィール
ド上のカードを全て破壊する．．．ブラック・ローズ・ガイル!!」

『グオオオオ!!』

ブラック・ローズ・ドラゴンが周りを吹き飛ばし始める．．．．

「うわあああ! また来るぞー!!」

「伏せろー!」

「また魔女が襲い掛かってくる!!」

「何とかしろ、このマーカ―野郎!」

「はあ．．．はあ．．．」

まずいな．．．このままだと会場が吹き飛ばされるな。

あと、最後の方。人に頼む時に「マーカ―野郎」は無いだろ。

「俺はブラック・ローズ・ドラゴンの効果にチェーンして、禁じら
れた聖杯を発動! 攻撃力が400ポイント上がり、このターン、
ブラック・ローズ・ドラゴンの効果は無効となる!」

ブラック・ローズ・ドラゴン

7

ATK2400 2800

ブラック・ローズ・ドラゴンが巻き起こそうとする風が収まり、
ブラック・ローズ・ドラゴンの動きが止まった。

「よって、ブラック・ローズ・ドラゴンの効果は無効となる！」

「くっ……なら、私はカードをセットし、ターンエンド。」

ブラック・ローズ・ドラゴン

7

ATK2800 2400

アキ/LP1700

手札3枚

モンスター/ブラック・ローズ・ドラゴン（攻）

魔法・罠/リバーズ×3

「俺のターン！俺はギガンテック・ファイターでブラック・ローズ・ドラゴンを攻撃！コンバット・ブレイカー！！」

ギガンテック・ファイターはブラック・ローズ・ドラゴンへ目掛けて飛び掛った。

そして、拳を振り下ろす。

「私は攻撃の無力化を発動！ ギガンテック・ファイターの攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる！」

ブラック・ローズ・ドラゴンの前に謎の渦が現れ、ギガンテック・ファイターの拳を受け止めた。

「この状況でもそう簡単には通らないか．．．．．ターンエンドだ。」

鉄也／LP400

手札4枚

モンスター／ギガンテック・ファイター（攻）

魔法・罠／リバーズ×2

「私のターン！ 私は大嵐を発動！ フィールド上の魔法・罠カードを全て破壊する！」

「くっ．．．．．」

まずい、伏せておいたガード・ブロックと炸裂装甲が破壊された。

「私は．．．墓地のスポーアを除外し、ブラック・ローズ・ドラゴンの効果を発動！ ローズ・リストラクション！」

地面から茨の蔓が現れ、ギガンテック・ファイターを縛った。

ギガンテック・ファイター

8

ATK35000

「はあ．．．はあ．．．今度こそ終わりよ！　ブラック・ローズ・ドラゴンでギガンテック・ファイターを攻撃！　ブラック・ローズ・フレア！！」

『グオオオオオ！』

ブラック・ローズ・ドラゴンの炎がギガンテック・ファイターに向かって来る．．．．．

「俺は手札のクリボーの効果を発動！　このモンスターを手札から捨て、戦闘ダメージを0にする！」

『クリクリ〜！』

俺の前にクリボーが飛び出した。

クリボーは光の粒となり、俺の周りに張った。

『ハアアアア！』

ギガンテック・ファイターはブラック・ローズ・ドラゴンの攻撃を両腕で受け止めた。

ズドーーーーーン！

しかし攻撃力0になってしまったギガンテック・ファイターはブルック・ローズ・ドラゴンの攻撃に耐えられず、腕が砕け、体がビームによって貫かれた。

「ぐっ……………」

大きな衝撃波が起こり、ほこりを巻き上げた。

「はあ……………はあ……………はあ……………はあ……………ありがとう、相棒。」

クリボー、いつもありがとうな。

お前のおかげで助かったぜ。

『クリクリ〜』

鉄也 LP400

ガクガクガクガク……………

「ぐっ……………」

やばい……………腕が震えてきた……………

『クリ……………』

「これは……………流石にやばいな。」

やはり傷の所為で限界が近づいているか。

「どうやらダメージは凌げたようね。でも、あなたのモンスターは破壊されたわ。」

「へ、それはどうかな……………」

「……………どういう意味？」

「伊達に不屈の闘士と呼ばれているわけではないって事だ……ギガンテック・ファイターのもう1つの効果を発動！ アンブレイカブル・ソウル！！」

ゴゴゴゴ……………

地面が突然割れ始めた。

「！？ 一体何が……………」

「ギガンテック・ファイターのもう1つの効果……………それはこのモンスターが戦闘によって破壊された時、自分・相手の墓地から戦士族モンスター1体を選択し、特殊召喚する。」

「戦士族？ まさか……………」

「そうだ……………」

ピキピキ……………ガラガラ……………

『ハアアアアア！！！！』

「．．．．．自身も例外ではない！」

ギガンテック・ファイターが地面の中から現れた。

パキパキ……

先程のギガンテック・ファイターがついた胸の傷が治り、腕も治った。

ギガンテック・ファイター

8

ATK2800 3500

「そんな効果があるなんて．．．．．」

「これが．．．．．俺の闘志だ。たとえ砕けようと、潰されようと、俺は立ち上げられる限り戦い続ける！」

「私はこれで．．．．．ターンエンド。」

アキ／LP1700

手札3枚

モンスター／ブラック・ローズ・ドラゴン（攻）

魔法・罠／なし

（BGM：遊星デュエル）

「俺の．．．．．ターン．．．．．がはっ!!」

まずい．．．早く治療受けないと死亡確定だな。

「ふう．．．．．俺は墓地のジャンク・シンクロンを除外し、イージーチューニングを発動。攻撃力が除外したチューナーの数値分、アップする。」

一緒に行こうぜ、ジャンク。

『おう!』

ここは一気に活気を上げるか。

「うおおおおおおお!!」

俺は心の底から一気に叫んだ。

『ハアアア．．．．．』

ギガンテック・ファイター

8

ATK3500 3400 4700

「いいデュエルだったぜ、十六夜．．．また相手してやる。だが、次に俺が相手にしたいのは魔女であるお前ではなく、純粹にデュエ

ルを楽しむお前だな。」

「うつ……………」

「ギガンテック・ファイターで……………ブラック・ローズ・ドラゴンに攻撃！ コンバット・ブレイカー！！」

『ハアアア！！』

ギガンテック・ファイターはブラック・ローズ・ドラゴンへ突撃した。

ズドーーーーーン！！

ギガンテック・ファイターの拳がブラック・ローズ・ドラゴンに直撃した。

『グオオオオオ！！』

ブラック・ローズ・ドラゴンはギガンテック・ライターの拳によって碎け散った。

アキ LP 17000

鉄也 WINNER

「はあ……………はあ……………」

『決まったあああ！！ 彼がああ黒薔薇の魔女に打ち勝った！！
！！ 勝者は村上 鉄也！！』

「はあ．．．はあ．．．勝った．．．」

ソリッド・ビジョンのギガンテック・ファイターは俺を見つめている。

「へへっ．．．」

よろしくな、ギガンテック・ファイター．．．

プッン！！

「あ．．．」

あれ．．．？

緊張の糸が切れたのかな．．．何故か体に力が入らない．．．

あ、そうか．．．出血がやばかったんだ．．．

『これで決勝進出は．．．サテライトの流れ星、不動遊星！
そして奇跡の逆転ファイター、村上でっ．．．』

ドサッ！！

『え？』

「ああっ．．．」

『鉄也ああ!』

『クリリ〜〜!』

- Side End -

- Side / ルーカス -

「倒れた……………」

「フツ……………」

どうやら勝ちが出来たが深手を負ったか。

「あの状態だと決勝進出は無理だな。」

『こ、これはどういたしましょう、ゴドウィン長官!』

『あの状態では次の試合は無理でしょう。彼を医務室に連れておきなさい。そして、十六夜 アキを決勝戦に進めなさい。』

『か、かしこまりました！ 勝者である村上 鉄也が進出不可能とみなした為、決勝進出するのは黒薔薇の魔女、十六夜 アキだ！』 は、早く救護班を！』

こうして村上鉄也は担架によって運ばれた。

「まあ、これでアキは進出だな、デイヴァイン。」

「ああ。 しかし、まさかあの少年がアキをここまで追いやるとは……驚いたものだ。」

「まあ、あの實力は大したものだな。」

瀕死したとはいえ、あの魔女の力に退かず臆さず、勝利を収めるとはな。

これが不屈の闘志か……それとも単なる馬鹿か。

まあ、どちらにしろ面白いものを見せてもらった。

もし、この試合をシエンが見ていたら何と言っただろうな……まあ、あいつが気にするほどではないか。

S i d e E n d

S i d e / 結衣

「鉄也・・・・・・・・」

「村上クン・・・・・・・・」

「そんな・・・・・・・・」

「いや、死ぬ筈が無い・・・・・・・・」

「あわわ・・・・・・・・あ・・・・・・・・」

また・・・・・・・・また1人が魔女の手によって・・・・・・・・
十六夜アキ・・・・・・・・あの女の所為で・・・・・・・・

S i d e E n d

S i d e / 遊星

「行くのかい、あんちゃん？」

「ああ。鉄也の為に俺は行かなければならない。」

「気をつけるよ、遊星。」

「頑張れよ、遊星！」

「頑張つてね。」

拒絶と怒り、二つの感情が向けられているのはあの痣．．．その中に十六夜のもう一つの感情が隠されているとしたら．．．．．この痣は確実に俺達を繋いでいる。

鉄也．．．．．お前は彼女の苦しみを理解していたんだな。

だからお前は傷を負っても彼女と向き合おうと最後まで戦った．．．違つか？

ゴドウィンも痣の存在を知っていて俺達を利用するというのか．．十六夜を取り巻くあの連中も結局はシグナーとしての彼女を．．．俺達は利用されてはいけない。

鉄也．．．お前は彼女の心を開く為に築いた活路を無駄にしない。そのためにも彼女の閉ざされた心を．．．それをこじ開け、本当の十六夜に会わなければ．．．

そして、この戦いの果てにジャック．．．お前がいる。全力で行くしかないな．．．．．

「力を貸してくれ．．．．．スターダスト・ドラゴン！」

S i d e E n d

S i d e / 遊斗

医務室

「どう見ても無理です！ 彼には傷と出血が酷いです！ もう、治療の所がありません！」

ああ、いたいた．．．．．

「彼には気の毒だが仕方がない．．． 元はと言えば彼自身が悪かったんだ、あんな状態で続けようなんて行為をするから．．．．．」

あゝあ、無茶しすぎだよ、鉄也。

まあ、続けさせた僕にも責任があるけど。
さすがにあれは致命傷になるな。

よく頑張ったよ、鉄也。

「ちよつと待ったー。」

「誰だ君は？」

致命傷．．．．．と言ってたが、そんな問題ない。

彼はもう、救いようがない．．．．．まあ、「この世界」での技術ならでの話だけだね。

「その人．．．．．僕が治療します。」

鉄也．．．君は死ぬわけにはいかない。

もうすぐ奴らが．．．．「ブラザーフッド」が動き出すところだ。

それに対抗するには君の力が必要だ。

君は僕が治す。

S i d e E n d

S i d e / ルーカス

『で、どうするんだ、ルーカス？』

「俺達は次の標的を目指すでしょう。次の標的は．．．．．」
「豪火の竜」に選ばれし者、神風 結衣だ。」

『「不屈の戦士」はもういいのか？』

「俺もそう思ったんだが、どう考えても彼は俺達の手には落ちなさそうだ。どうせ、動かそうとしても動かないだろう。」

『そうか。で、どうやって「豪火の竜」の方を誘う？』

「正直、今はわからないな。彼女の心に潜む闇があるのがわかってても、具体的にはつきりしていない。だから、まずはそれを明らかにするしかないな。」

『なんか策はあるのか？』

「ああ。丁度良くアルカディア・ムーブメントももう、不必要になつて来た所だ。フォーチュンカップが終わったら壊滅しても良さそうだ。」

『なるほど、アルカディア・ムーブメントを利用しようということか。じゃあ、俺達ブラザーフッドの為に成功させるとするか。』

「まあ、まずはゆっくりシグナー同士のデュエル観戦でしよう。」

S i d e E n d

デュエル・オブ・フォーチュンカップ編『完』

第33話 激闘！！ 不屈の闘士（後書き）

これでフォーチュンカップ編が終了しました。

気付いていたかもしれないですけどアキはフォーチュンカップ編のボスのポジションでした。

次回もお楽しみにください。

第34話 動き出す魔の手

これまでの話

(BGM：ドラ ンボール)

準決勝で勝利した村上 鉄也は十六夜 アキとのデュエルによって重傷を負った。

その後、救護班によると彼が負った傷は致命傷だと判明された。死に迫る彼に謎の青年、藍沢^{あいざわ} 遊斗^{ゆうと}が現れ、彼を治療すると言った。

遊斗は鉄也を救う自身があつたが、治療は上手くいかず、鉄也は死んでしまった。

その後、鉄也は神様の手によつて「あの世」へ連れて行かれた。

「あの世」で鉄也は1年後に最強最悪の宇宙人、ヤサイ人達が地球を侵略する事を知る。

それを知った鉄也は閻魔大王の許可を得て、堺王様の下でセクシ―コマンドを修得するための修行をする事を決意した。

そのためにはまず、鉄也は鰻の道をわたらなくてはならない。

さて．．．．鉄也は無事、堺王様の所にたどり着けるのか？
そして堺王様の下で修行は上手くいくのか．．．．「闘魂ボ―ル？」、始まります。

第34話 オッス！ オラ、あの世で修行するぞ！

遊斗「いや、作者さん何勝手にデタラメ言ってるんですか？ 何でドラゴンボールのパロディ？ 手術中ですから騒がないで下さい。鉄也は大丈夫だよ。ちゃんと助かるよ。てゆうかBGMを消してください。ここ、病院だから。迷惑だから。」

作者「すいません……………本編に入ります。」

- 病院では静かにしましょう -

S i d e / 遊斗

「ふう……………」

終わった……………

致命傷だったけど、「僕の世界」の技術のおかげで命拾いしたな。ちなみに言っておくけどドラ ンボールは使っていないよ。

「信じられん……………」

「本当に無事なのか？」

まあ、ゆっくり寝かせればいいな。

傷口が開かないように1週間ぐらい休めば十分だろう。

「何という腕だ……………」

「本当に生きているのか？」

「はい、しばらく休めば立ち直れます。」

「なあ、君．．．うちの病院で働かないか？」

「お断りします、無免許なんです。」

「え、免許無いの！？」

「はい。」

「無免許なのにそんな腕が！？」

「ちなみに僕はブラック・ジャックではありません。」

「いや、そこはどうでもいいんだけど。」

「じゃあ、用事があるんで．．．彼をよろしくお願いします。
と、料金は僕が払いますから。」

あ

さて．．．．．今後の事について策を考えないとな。
誰か信用出来る者を探さないと．．．．．

「．．．．．」

．．．あの人ならいいか。

「あ、ちなみに彼や周りの人に僕の事を教えなくてください。
分で伝えたいんで。」

自

S i d e E n d -

S i d e / 結衣

病院

午後10:00

スウ・・・スウ・・・

「鉄也・・・」

私が見たあの試合・・・鉄也は物凄く傷ついてたようだった。

血にまみれてボロボロになりながら最後まであの女に立ち向かっていた・・・

「何でこうなるの・・・」

鉄也は勝った・・・でも傷が祟って倒れた。

魔女を倒せたのに負傷のせいでまた魔女が1歩進んだ。

「鉄也・・・」

十六夜によって重傷を負った鉄也は傷が酷い為、病院へ連れられた。

医者の話によると治療に失敗していたら死んでしまう程危険な状態であった。

傷は酷かったらしいけど、何とか一命を取り押さえたらしい。鉄也は上半身が包帯で巻かれて昏睡状態になっている。勝ったのに、倒れた。

そして十六夜は決勝進出した。

鉄也の勝利が無駄になったように．．．．．これって不公平じゃない。

「結衣、もう遅いから家に帰ったほうがいい。」

「シュウ．．．．．」

「送って行くよ。彼の事はボクが面倒見るから。」

S i d e E n d

S i d e / シュウ

『そうなんだ．．．．．てっちゃんは大丈夫なのね。』

「ああ、しかしあそこまで戦えたなんて大したものだったな。」

『そう．．．ごめんね、シュウ。出張で出来なかった私の変わり

に彼の面倒を見てくれて。』

「いやいや、大した事じゃないよ。それにいいものを見させてもらった。彼はすごく強かったよ。」

『じゃあ、私は明日帰ってくるからね。てっちゃんにも会いたいし。』

「ああ。明日迎えに行くよ、美央^{みお}。」

『ありがとう。ところで、結衣ちゃんはどう？ 不動 遊星との試合を見たら心配になって来たんだけど。』

「結衣は……………」

『そう…………… 私たちは彼女を守らないとね。』

「…………… ああ、士郎の為にも。」

『じゃあ、また明日。』

ピッ！

「じゃあ、ボクが知っていることを全て結衣と村上クンにいろいろ伝えないとな。」

村上クンが倒れた後、不動 遊星と十六夜 アキの決勝が始まった。

そのデュエルで不動クンは勝利を収めた。
そしてその後、優勝者である不動 遊星とキング、ジャック・ア

トラスの2人がキングの座を賭けたライディング・デュエルが始まった。

激しいライディング・デュエルの中、ある事が……………

「痣が……………」

ボクの痣が勝手に光り始めた。
そして、ある現象を見た。

「ここは……………」

「何だ!？」

『グオオオオオ!』

「あれは……………赤き竜!！」

ボクが見た現象……………ライディング・デュエルが別の空間で行われていた。

あの2人だけではない。

出場者であった少女、龍可……………そして村上クンに敗北した十六夜 アキもいた……………まるでそれは赤き竜がシグナー達を呼び寄せたように。

なるほど……………ゴドウィンはこれを目論んでいたのか。

こうしてスターダスト・ドラゴンとレッド・デーモンズ・ドラゴンの激しい戦いとなった。

そして……………

「これでファイナルだ！ 俺達の絆は、誰にも負けはしない！ スター・ダスト・ドラゴン！ 響け、シューティング・ソニック！！」

「うわあああ！」

ジャック L P O

不動クンは優勝し、あの現象は消えた。

ちなみに観客達はあのデュエルが全く見えなかったらしい。

どうやら痣を持つ者達しか見えないようだな。

その後、多数のマスコミ達が取材のため不動クンに向かい始めたが、不動クンはいつの間にかその場を去ってしまった。

こうしてフォーチュンカップは幕を降ろした。

ボク達は村上クンの様子を見る為、彼が入院している病院へ向かった。

見た所、彼は助かったようだ。

奇跡と言えようとはしないか。

ちなみに結衣も見舞いに来た。

もう遅いから、結衣を家に送った後、ボクが病院に残ることにした。

病室だと彼の身は無防備だからね、そのためにボクが側に付いている。

「ん？ 誰だい、ボクの後を付いているのは？ そろそろ姿を現した方が良くないよ」

ボクがそれを言うと、誰か現れた。

「気付いてたんですか。 流石ですね。」

ボクの目の前に現れたのは長い白髪を後ろに結んでキャップ帽を被った青年であつた。

「初めまして、黒崎さん。」

「君は？」

「初めまして黒崎さん、藍沢 遊斗と申します。」

「じゃあ初めまして、遊斗くん。 何の用だい？」

「黒崎さん．．．ボクはあなたと話をしに来ました。」

「話が。 奴らの事に関してか？」

「はい、あなたを信じて話をしに着ました。」

「じゃあ、『ブラザーフード』の関係について聞かせてもらおうか。」

「わかりました。 でも、その前に．．．．．」

「そうだな。 そこにいるのはわかっている。 さっさと姿を現したらどうだ？」

そう言っ てボクと遊斗クンはそちらの方向に向いた。

「……………ばれてしまいましたか。」

そこには黒いフードの男がいた。

「まあ、邪悪な気配がしていてね。　どうやらあなたでしたか。」

「仕方がありませんね……………不屈の闘志を持つ者を狙うつもりでしたが、そう簡単にはいきませんでしたか。」

ん？　その声……………どこかに聞き覚えが……………

「もしかして、あなたは帝さんですか？」

「え？」

「ほお……………気付かれましたか。」

男はニヤリと笑った。

「そうですね、黒崎さん。」

「黒崎さん、彼の事を知っているんですか？」

「ああ、彼の名は帝^{みかど} 修三^{しゅうざん}。　元プロデュエリストだ。　凄腕のデユエリストだったがある日、負けてしまっ てプロを辞めさせられたんだが……………まさかあなたのような人がここまで墮ちてしまいましたとはね。　あなたのような方が村上クンに何の用ですか？」

「フツ．．．．．黒崎さん、どいてもらえます？ 私はその少年に因縁がありましてね、その部屋の少年をおとなく渡せばあなたに何の被害も出ませんよ。」

「ハハ、ボクがそんな臆病者に見えますか」

まあ、幸い探す手間が省けたな。

「遊斗くん、ここはボクに任せてくれないか？ 君の信用を得ているにはそれ位の實力を見せなければならぬだろう？」

「そうですね。じゃあ、ここはあなたに任せます。」

「黒崎さん．．．．．あなたは私に勝てると思っと思っていますかね？」

「まあ、プロデュエリストとして逃げるわけにはいかないからね。」

「愚かですね．．．いいでしょう、私が手に入れた力で闇のデュエルを思い知らせてあげましょう．．．．．」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ．．．．．

ボクと帝さんの周りに魔方陣みたいのが現れた。

「デュエル！！」

シュウ LP4000

VS

帝 LP4000

その時・・・・・・・・

「あんた達――！！」

「「「ん？」」」

急に誰かが怒鳴り出した。

「いい加減にしなさいーい！！」

パンチパーマをした看護婦のおばさんであった。

「あんた達、もう午後の１０時よ！　そしてここは病院よ！！　静かにしなさいーい！！」

かなりうるさい看護婦さんであった。

「「「す、すいません・・・・・・・・（汗）（）（）てゆつかあんたの方が一番うるさいよ・・・・・・・・（）（）」「」」

「いい歳こいて中学生の喧嘩か！？　喧嘩なら外でやりなさい！！」

「すいません・・・・・・・・てゆつか看護婦さん、闇のゲームが始まる所はスルーですか？」

「・・・・・・・・外でやろうか？」

「・・・ああ、そうしよう。」

「あはは・・・」

という訳で闇のゲームは一時的に中断となった。

病院では静かにしましょう

S i d e E n d

S i d e / 鉄也

何だ・・・周りが真っ暗だ・・・

何でここに・・・そういえば俺はアキとデュエルして・・・何とか勝利して・・・

傷口がやばかったから倒れたっけ・・・

・・・

「えええええー！！！！！！！！！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

(BGM：俺も、もうジャンプ卒業しなきゃいけねえ歳だよなあ)

ちよ、待って・・・・・・・・俺、死んじゃったの！？

ふざけんなー！！

まだダグナー編にも入ってねえぞ！

結衣さん、黒崎さん！！

ドラ ンボール集めて俺を生き返らせてくれー！！

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

まあ、待っている間に嫌いなキャラランキングを20位まで伸ばすか。

と言つてもそんなに悪いキャラがいるわけではないからな。
適当に書き込んでおこう。

鉄也の嫌いなキャラランキング

- 第01位 ロリコンサディスト
- 第02位 鼻毛所長
- 第03位 尻軽女
- 第04位 苦勞
- 第05位 肩メガネ
- 第06位 自称神様
- 第07位 金取り野郎
- 第08位 バイク男
- 第09位 真駄王
- 第10位 リアリスト
- 第11位 ダーク満足
- 第12位 リアリストの兄
- 第13位 ヒロイン魔女モード
- 第14位 ハゲシグナー
- 第15位 ダッシュ老人
- 第16位

「いや、何か意味がわかりませんけど。」

そうだな。

原作知識がないキャラがわかる訳ないな。

「ん？」

今、誰かツツコミをしたような……………

「もしかして斬月か！？」

「え？」

そこにはギガンテック・ファイターと同じ形をした緑色のサン
グラスをかけた黒マントを着た少年がいた。

「斬月——！！」

「あの……斬月って誰ですか？」

S i d e E n d

S i d e / 結衣

「ごめん、鉄也……私が勝てなかったからあなたにそんな思いを
させて……」

何で私の周りの人達が傷つくの？

「そうだ．．．あの人が悪いんだ．．．．．」

あの女がいたから．．．兄さんが．．．鉄也が．．．皆酷い目に遭う．．．．．

「憎いか？。」

今．．．背後から誰かの声が．．．．．

「だ、誰！？」

振り向くとそこには．．．．．青い髪青年がいた。

「憎いだろう、その黒薔薇の魔女が。」

「あなたは一体．．．」

「俺の名は．．．ルーカス・アンデルセンだ。それより、これを君に渡そう。」

ドサツ！

ルーカスという者は私の前に書類が入った封筒のような物を床に落とした。

封筒には「ARCADIA MOVEMENT」と書かれていた。

「これは……………」

「黒薔薇の魔女に辿り着きたければ、この資料を使え。」

「どうしてそれを……………!!」

「まあ、気をつけな。下手すれば今度は君が血祭りになってしまうかもしれないからな。」

ピカア……

「うわっ！」

彼の体が突然光だし、眩しくなった。

「あれ？」

気がついたら彼はいなくなった。

「……………」

私は封筒を開けてみた。

- Side End -

Side / 鉄也

「なぐんだ、斬月じゃなかったのか。」

「鉄也さん．．．僕が誰なのかわかっているでしょう?。」

少年はサングラスを外しながら喋った。

「ああ．．．．．久しぶりだな、少年。」

「はい、もう1年になりますね。」

「そうだな．．．．．すまん、お前の大事な体をこんな目に遭わせて。」

今の俺の体には顔にマーク、そして胸にギガプラントで斬りつけられた傷跡がある。

「それはいいですよ。元々、あなたをこんなことに巻き込んでしまった僕が悪いんですから。」

「いや、俺が殺されたのもお前を助けられなくなったのも、全て俺が自分で取った行動だ。こんな事になった責任は俺にもある。」

「鉄也さん、あなたがそう言うのなら．．．．．でも、本当にごめんなさい。何も伝えられずにこんな事になってしまって、本当に申し訳ございませんでした!。」

少年は俺の前に礼をした。

「なあ、俺はまた死んだのか？」

「いえ、あなたは死んでいません。 どういう形かわかりませんけど死ぬ寸前にあなたは救われました。」

「そうなのか。」

悪運だけは強いな、俺は。

「じゃあ、この世界も一時的だという事が。 その間、色々教えてもらおうか。」

「わかりました。」

「その前に少年、お前の名は…………村上 鉄也か？」

「はい、そうです…………正確に言うと僕は「この世界」の村上 鉄也です。」

「やはり平行世界という事が…………」

「では、始めましょうか。 僕のサテライトの暮らしの所から。」

- Side End -

- Side / シュウ -

- 病院外 -

「ククク．．．．．あなたがプロデュエリストと名乗っている間に私がどれだけ強くなっているか証明しましょう。」

「フン．．．なら見せてもらおうか、帝さん」

「「デュエル!!」」

シュウ LP 4000

VS

帝 LP 4000

Side End

To Be Continued

第34話 動き出す魔の手 (後書き)

もう1つの小説、遊戯王―銀色の魂―を書き始めました。
良かったら読んでみてください。

R e : 第35話 プロのタクティクス（前書き）

どうも、BRAVEです。

このデュエルの展開をリメイクする事にしました。

正直、リメイク前はオリカが自重していなかったなので新しく作り直させてもらいました。

Re：第35話 プロのタクティクス

S i d e / 遊斗

こうして僕達は外へ出た。

出来るだけ被害を起こさない為に車の少ない駐車場へ行った。
ここなら被害が少ない。

彼が鉄也に近づかれては困る……それにこの帝という男、只者ではない雰囲気を感じさせる。

僕はポケットからi P h n eを取り出し、スクリーンをタッチした。

R E C

「では改めて。若き新人よ、私の実力を思い知らせてやりましょう。」

「じゃあ、ボクは先輩の期待に応えてボクのタクティクスを見せてあげましょうか。」

まあ、黒崎さんのデュエルは試合では見たことがあるがあれだと不十分だ。

このような相手とデュエルしてこそ真の実力というものが見えるはずだ。

「デュエル!!」

シュウ LP4000

VS

帝 LP4000

キュピーーーーーン!!

「!？」

帝という男のデュエルディスクが光りだした。

ゴゴゴゴ……

「地面が急に……」

急に地面に光の線が入り始めた……

その線は黒崎さんと帝という男の周りに円で囲んだ。

「これは一体……」

その円は魔法陣となった。

「この魔方陣は……」

管理局の資料によるとあれは確か……ブラザーフッドのデュエリストが使っていた物だ。

見るからに魔法陣には結界が張られており、僕が外から入るのは不可能だ。

「これはカイの魔方陣…… あなたも使っているのですか。」

「フッフ……私を相手にしたことを後悔させてあげましょう。」

「（カイ……） まあ、こんな事は既に予想していたけどね。 悪いけど村上くんには近づけさせないよ。」

「味わうが良い、私の力を……！」

「じゃあ、始めましょうか。 僕のターン！ 僕は手札のダーク・ホルス・ドラゴンを捨て、トレード・インを発動！ カードを2枚ドロウする！ そしてミラージュ・ドラゴンを召喚する。」

黒崎さんの場に金色の竜が現れた。
効果は強いがステータスが微妙だ。

ミラージュ・ドラゴン

4

ATK1600

「カードを2枚セットしてターン終了だ。」

シュウ／LP4000

手札3枚

モンスター／ミラージュ・ドラゴン（攻）

魔法・罠／リバーズ×2

「では、私のターン！ 私は手札のレベル・ステイラーを墓地へ送り、ワン・フォー・ワンを発動する！」

「（ワン・フォー・ワン……帝さんのデッキは確か上級モンスターを活かしたデッキだったな……）」

「現れよ、黄泉ガエル！！」

黄泉ガエルを選んだか……あのモンスターの効果は強力だ。

黄泉ガエル

1

DEF 100

「私は黄泉ガエルをリリースし、邪帝ガイウスをアドバンス召喚する！」

黄泉ガエルが消え、紫色の鎧の悪魔が現れた。

邪帝ガイウス

6

ATK 2400

「邪帝ガイウスの効果を発動！ このモンスターがアドバンス召喚に成功した時、フィールド上のカードを1枚除外する！ 私が除外するのは勿論、ミラーージュ・ドラゴン！ シャドー・プリズン！！」

『ハアアア!!』

ミラージュ・ドラゴンの周りに紫の空間が包み込み始めた。

「……………!! (何だ、この違和感は…………) ボクは邪帝ガイウスの効果にチェーンし、亜空間物質転送装置を発動! このターンの間、ミラージュ・ドラゴンをゲームから除外する!」

ミラージュ・ドラゴンは姿を消し、ガイウスの空間から抜け出した。

「ならば、バトル! 邪帝ガイウスでダイレクトアタック! シャドー・ウェーブ!」

邪帝ガイウスはさっきの空間とは違う黒い波動を掌から放った。

「そうはさせない。ボクはドレインシールドを発動。邪帝ガイウスの攻撃を無効にし、その攻撃力分ライフを回復する!」

黒崎さんの前にバリアが現れ、邪帝ガイウスの攻撃を吸収した。

シュウ LP 4000 6400

「攻め損ねましたか。私はメインフェイズ2に入り、邪帝ガイウスのレベルを1下げ、レベル・ステイラーを特殊召喚します。」

背中に星の着いたテントウムシが現れた。

邪帝ガイウス

6
5

レベル・ステイラー

1

DEF 0

「私はこれでターンエンドです。」

帝 / LP 4000

手札 3枚

モンスター / 邪帝ガイウス（攻）、レベル・ステイラー（守）
魔法・罠 / なし

「ボクのターン！ ボクはデルタフライを召喚する！」

黒崎さんの場に翼が大きいドラゴンが現れた。

デルタフライ

3

ATK 1500

「デルタフライの効果を発動！ 自分フィールド上のモンスター1体を選択し、そのモンスターのレベルを1上げる！ 対象は勿論、ミラーージュ・ドラゴン！！」

ミラーージュ・ドラゴン

4
5

「レベル5、ミラーージュ・ドラゴンにレベル3、デルタフライをチューニング！ 麗しき」

5 + 3 〃 8

「シンクロ召喚 輝け、ライトエンド・ドラゴン！！」

『グオオオオ！！』

天使のような翼を広げた純白の竜が現れた。

ライトエンド・ドラゴン

8

ATK2600

「バトル ライトエンド・ドラゴンで邪帝ガイウスを攻撃！ 発動するカードはありますか？」

「いいえ、ありません……」

「なら、ダメージ計算に入る。　ライトエンド・ドラゴンの効果を発動！　このモンスターが戦闘を行う場合、自身の攻撃力・守備力が500ポイントダウンする。」

ライトエンド・ドラゴン

8

ATK	2600	2100
DEF	2100	1600

「何です？　自分の首を絞めておいて……」

「まあ、落ち着いてください。　ライトエンド・ドラゴンと戦闘を行うモンスターは攻撃力・守備力が1500ポイントダウンしますよ。　ライト・イクスパンション！！」

「何！？」

ライトエンド・ドラゴンの体から放つ光が邪帝ガイウスを包み込んだ。

『グウウウウ……』

邪帝ガイウスは力を削られたかのように膝を突いた。

邪帝ガイウス

6

ATK2400 900

「シャイニングサプリメーション!!」

ビィィィィィィ!!

ライトエンド・ドラゴンは邪帝ガイウスに光の閃光を放った。

「くっ……」

帝 LP4000 2800

「くっ……」

「……?」

どうしたんだ、急に帝という男は少し苦しみだしたような表情になっていた。

「カードを1枚セットし、ターンを終了だ。」

シュウ/LP6400

手札2枚

モンスター/ライトエンド・ドラゴン（攻）

魔法・罨／リバーズ×1

「私のターン！ 私は墓地の黄泉ガエルの効果を発動！ 墓地から特殊召喚します。」

黄泉ガエル

1

DEF 100

「さらに魔法カード、至高の木の実を発動！ このカードは相手プレイヤーのライフが私のライフより高い場合、ライフを2000ポイント回復させる！」

帝 LP 2800 4800

「私は永続魔法、冥界の宝札を発動！ このカードが存在する限り、自分はモンスター2体以上のモンスターのリリースによるアドバンス召喚に成功する度にカードを2枚ドローできる。 私は黄泉ガエルとレベル・ステイラーをリリースし、ダークネス・デストロイヤーをアドバンス召喚します！」

大型の悪魔のようなモンスターが現れた。

ダークネス・デストロイヤー

7

ATK2300

「そして冥界の宝札の効果により、カードを2枚ドロウします！」

上級モンスターのリリースを確保し、手札の損失を補う……流石に元プロデュエリストの実力だけはあるな。

「そして私はダークネス・デストロイヤーのレベルを下げ、レベル・ステイラーを特殊召喚します。」

ダークネス・デストロイヤー

7
6

レベル・ステイラー

1

DEF0

「さらにこの瞬間、私は地獄の暴走召喚を発動します！ このカードは相手フィールド上に表側表示でモンスターが存在し、攻撃力1500以下のモンスターが特殊召喚に成功した場合のみ発動可能です。私は特殊召喚したモンスターと同名モンスターを自分の手札・デッキ・墓地から可能な限り特殊召喚します。」

レベル・ステイラー×2

DEF0

「そしてあなたも自分のモンスター1体を選択して特殊召喚できますよ。しかしあなたのフィールドに存在するのはシンクロモンスターであるライトエンド・ドラゴンのみ。よって、召喚する事はできない。」

「まあ、元々1枚しか積んでないけどね。」

「レベル・ステイラーが増えたか……だが、今のライトエンド・ドラゴンのステータスならダークネス・デストロイヤーが相手でも十分だ。」

「甘い！ 私は手札から地砕きを発動！ 相手の守備力が1番高いモンスターを破壊させてもらいます。」

「何!?!」

ピキッ！ ピキッ……!!

『グアアアアア!』

ライトエンド・ドラゴンの足元の地面が崩れ、ライトエンド・ドラゴンが谷底に落ちた。

「くっ……ライトエンド・ドラゴンが消されたか。」

「さあ、バトルです！ ダークネス・デストロイヤーでダイレクト

アタック!!」

ダークネス・デストロイヤーは鋭い爪を黒崎さんへ目掛けて振り下ろしてきた。

「（ダークネス・デストロイヤーは2回攻撃を行う事ができる……通すわけにはいかないな。）ボクは聖なるバリア ミラーフォースを発動! ダークネス・デストロイヤーを破壊する!」

ダークネス・デストロイヤーの前にバリアが現れ、ダークネス・デストロイヤーの攻撃を跳ね返し始めた。

「そんなことは読んでいる! 私はライフを1500払い、我が身を盾にを発動!」

帝 LP 4800 3300

「何!?!」

「この効果で私のダークネス・デストロイヤーは破壊されない!」

黒崎さんを守る聖なるバリアは砕け散った。

ダークネス・デストロイヤーは黒崎さんに向かって爪を振り下ろした。

「おっと。」

ズガッ!!

黒崎さんはタイミング良く攻撃をかわした。
ダークネス・デストロイヤーの爪は地面に直撃した。

シュウ L P 6 4 0 0 4 1 0 0

服に切り口が出来たが、黒崎さんは無傷だ。
しかし無傷とはいえ、服は掠っている……

「やはりこのゲームは……」

そう、このゲームは闇のゲーム……
モンスターは全て実現化するのだ。
つまりモンスターの攻撃に触れる事自体危険な事だ。

「もう1度ダイレクトアタック！」

同じく次の攻撃も避けた。

シュウ L P 4 1 0 0 1 8 0 0

「さらに私はダメージを与えた時に速攻魔法、セベクの祝福を発動します。このカードの効果により、直接攻撃で与えた戦闘ダメージの数値分ライフを回復します！」

帝 LP3300 5600

ただでさえライフが十分に高いのに我が身を盾にでの損失を取り戻したか。

「危なかった……やはりダメージを受けても直接モンスターの攻撃を間に受ける必要はなさそうだな。」

黒崎さんはドレインシールドを使っていなかったら負けていた……しかしそれ以前に攻撃を避けていなかったら彼は確実に殺されていたという事だ。

「私はこれでターンエンドです。」

帝 / LP5600

手札3枚

モンスター / ダークネス・デストロイヤー（攻）、レベル・ステイラー×3（守）

魔法・罠 / 冥界の宝札、リバース×1

「ボクのターン！ ボクはサイクロンを発動！ その伏せてあるカードを破壊する！」

つむじ風が相手の伏せカードを包み込んだ。

「次元幽閉が破壊されましたか……」

「ボクは未来融合 フューチャー・フュージョンを発動する！！
ボクはエクストラデッキからF・G・Dを選択し、デッキから5体
のドラゴン族モンスターを墓地へ送る！！」

選択したモンスター：F・G・D

融合素材

ダークストーム・ドラゴン

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン

真紅眼の飛竜

真紅眼の飛竜

マテリアルドラゴン

「ボクはダーク・アームド・ドラゴンを特殊召喚する！！」

ダーク・アームド・ドラゴン

7

ATK2800

「バトルです、ダーク・アームド・ドラゴンでダークネス・デスト
ロイヤーを攻撃！ ダーク・アームド・パニッシャー！！」

帝 LP5600 5100

「さらにメインフェイズ2に入り、ダーク・アームド・ドラゴンの

効果を発動！ 墓地のレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンと
ダークストーム・ドラゴン、そしてダークストーム・ドラゴンを除
外し、3体のレベル・ステイラーを破壊する！ ダーク・ジャベ
リンー！！」

「くっ……」

これでリリース要因がいなくなり、冥界の宝札が存在している為、
黄泉ガエルが召喚できない。

「モンスターをセットし、カードを1枚セット。」

シュウ／LP1800

手札0枚

モンスター／ダーク・アームド・ドラゴン（攻）、裏側守備表示
モンスター1体

魔法・罨／リバーズ×1

「私のターン！ 私はモンスターをセットする！ ターンエンドで
す！」

「今だ！！ このエンドフェイズ、ボクは闇次元の開放を発動！」

「何！？」

「闇次元の開放の効果によってボクは自分の除外されている闇属性
モンスターを特殊召喚する事ができる！ ボクが呼ぶのは……現れ
よ、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン！！」

『グオオオオ!!』

「レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン!! 確かあのモンスターは……」

「その通り、ボクのフェイバリットカードだ。ボクのターン!! レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンの効果を発動! 墓地からドラゴン族モンスターを特殊召喚する! 現れよ、マテリアルドラゴン!!」

「マテリアルドラゴン……（まずい、私のモンスターは……）」

「バトル! ダーク・アームド・ドラゴンでセットされているモンスターを攻撃! ダーク・アームド・パニッシャー!!」

セットされていたモンスターは球体の生物であった。

ジャイアントウィルス

2

DEF100

「成る程…… ジャイアントウィルスは相手プレイヤーに500ポイントのダメージを与える効果がある。しかしマテリアルドラゴンの効果により、代わりにライフを回復する!」

シュウ LP1800 2300

「くっ…… 私はジャイアントウィルスのもう1つの効果を発動する！ 同名モンスターを2体攻撃表示で特殊召喚する！」

ジャイアントウィルス×2

2

ATK1000

「バトル続行！ レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンとマテリアルドラゴンでジャイアントウィルスを攻撃！」

黒崎さんのモンスターはジャイアントウィルスを全滅させた。

帝 LP5100 3700 1900

「くっ……」

「さらにジャイアントウィルスの効果を発動 マテリアルドラゴンの効果で逆に回復させてもらっよ。」

シュウ LP2300 2800 3300

「ボクはメインフェイズ2に入り、レッドアイズ・ダークネスメタ

ルドラゴンをリリースし、アドバンスドローを発動！デッキからカードを2枚ドローする！」

上級モンスターを手札に変えたか……

「さらに、カードを1枚セットし、ターンエンドだ。」

シュウ／LP3300

手札1枚

モンスター／ダーク・アームド・ドラゴン（攻）、マテリアルドラゴン（攻）、裏側守備表示モンスター1体
魔法・罠／未来融合 フューチャー・フュージョン、闇次元の開放（対象無し）、リバーズ×1

「このエンドフェイズ、ボクは墓地から真紅眼の飛竜レッドアイズ・ワイバーンを除外し、効果を発動！」

「何！？」

「このモンスターは通常召喚を行っていない自分のターンのエンドフェイズに効果を発動する事ができる。墓地からこのモンスターを除外し、『レッドアイズ』と名のついたモンスターを墓地から特殊召喚する事ができる！戻って来い、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン！！」

『グアアアアアア！！』

「また厄介なモンスターを……!!」

「上手い……」

なるほど……アドバンスドローで手札の補充をして通常召喚を行っていないターンで復活させる。

お陰でレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンは闇次元の開放との関係を断ち切り、完全蘇生した。
上出来だな、試合の時以上に凄い。

「（このままではまずい……） 私のターン！ これは……」

「？ 何かいいカードが引けたのか!？」

「どうやら私の運も尽きた訳ではなさそうですね。 私は2枚目の冥界の宝札を発動!」

「2枚目だと!？」

2枚あると……レベル7以上のモンスターのアドバンス召喚に成功すれば4枚ドローできるという事が……

「私は二重召喚を発動！ このターン、私は通常召喚を2回行える!」

「これは少しまずいな……」

「私はダブルコストンを召喚する!」

ダブルコストン

4

ATK1700

「さらに私はダブルコストンをリリースし、暗黒の侵略者をアドバンス召喚する！」

黒装束の鎧の男が現れた。

暗黒の侵略者

8

ATK2900

「暗黒の侵略者の召喚により、冥界の宝札の効果でカードを4枚ドローする！」

まさか上級モンスターを召喚して4枚もドローとは……
手間がかかる戦略だな。
しかしそれを使いこなしてこそそのプロデュエリストか。

「バトルです。暗黒の侵略者でレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを攻撃！ シャドー・インベージョン……！」

ブワアアア！！

暗黒の侵略者は掌から黒い波動を繰り出した。

「くっ……（伏せておいたカードは収縮……暗黒の侵略者は速攻魔法の発動を封じる効果を持つ。このカードじゃあのモンスターを止める事はできない。）」

シュウ LP 3300 3200

「すまない、レッドアイズ……」

『グアアアアア……！』

レッドアイズはガラスの様に砕け散った。

「……！！（何だ、今は……！！）」

「私はメインフェイズ2に入り、レベル・スティーラーの効果を発動！ 暗黒の侵略者（攻）のレベルを3下げ、墓地からレベル・スティーラーを特殊召喚する！ そしてサイクロンを発動！ 未来融合 フューチャー・フュージョンを破壊する！」

暗黒の侵略者

8 5

レベル・スティーラー×3

1

DEF 0

「これで次のターンでF・G・Dを召喚する事ができなくなったか……。」

ちなみに僕はレベル・ステイラーの使用はシンクロン使い以外認めない。

「カードを2枚セットし、ターンエンドです。」

帝 / LP 1900

手札 2枚

モンスター / 暗黒の侵略者（攻）、レベル・ステイラー × 3（守）

魔法・罨 / 冥界の宝札 × 2、リバーズ × 2

「ボクのターン！（ボクの墓地の闇属性モンスターはレッドアイズのみ……ダーク・アームド・ドラゴンの効果を早まっではいけない。）ボクはガード・オブ・フレムベルを召喚する！」

炎に包まれた鎧の竜が現れた。

ガード・オブ・フレムベル

1

DEF 2000

「レベル7、ダーク・アームド・ドラゴンにレベル1、ガード・オ

ブ・フレムベルをチューニング！」

7 + 1 = 8

「シンクロ召喚！ 舞え、ダークエンド・ドラゴン！」

ライトエンド・ドラゴンとは対照的に黒い悪魔の様な竜が現れた。

ダークエンド・ドラゴン

8

ATK 2600

「ダークエンド・ドラゴンの効果を発動 ダーク・フォッグ！」

「ようし、バトルフェイズだ！」

「そうはせん！ 私は威嚇する咆哮を発動！ このターン、相手プレイヤーは攻撃宣言を行えない！」

罨カードから凄い音の咆哮が響いた。

黒崎さんのモンスター達はその音に抑えられ、動かなくなってしまった。

「攻撃損ねたか…… 念の為、ボクはマテリアルドラゴンを守備表示へ変更する。 ターンエンドだ。」

マテリアルドラゴン

6

DEF2000

シュウ／LP3100

手札1枚

モンスター／ダークエンド・ドラゴン（攻）、マテリアルドラゴン（守）、裏側守備表示モンスター1体
魔法・罾／闇次元の開放、リバーズ×1

「私のターン！ フッフ……いきますよ、黒崎さん。」

「!？」

「私は……レベル・スティーラーを3体リリースする！」

3体のレベル・スティーラーが黒い煙に包まれ始めた……

ざわ…ざわ……

「この空気は……」

「重く感じるな……」

レベル・スティーラーが包み込まれると同時に風が吹き始めた。
妙な感覚だ……

周りが飲み込まれてしまいそんな感覚が……

ブワアアア……

レベル・ステイラーが消え、黒い霧がさらに濃くなり、フィールドを包み込んだ。

「恐怖をもたらす邪悪なる神よ……今、我の前に現れよ！」

ジュワ……

急に光りだした……黒崎さんの腕から……

「黒崎さん、あなたの痣が……！」

「いでよ我が邪神、ドレッド・ルート……！」

ブワア……！！

『グオアアアアア……！！』

霧が吹き飛ばされ、その中から現れたのは、白い髑髏の鎧を身につけた緑色の巨大な悪魔であった。

邪神ドレッド・ルート

10

ATK4000

「あのモンスター……ボクの痣はあのモンスターから危険を感知し

ている。」

「邪神だど!?!」

まずい、あのカードは……

『グフフフ……』

「私が邪神を召喚した限り、あなたにはもう、勝機がありませんよ、クククク……　まずは冥界の宝札の効果でカードを4枚ドロ―させてもらいましょう。」

「（このプレッシャー……　やはりあのカードは只者ではないな。）」

「邪神ドレッド・ルートが存在する限り、このモンスター以外のモンスターの攻撃力・守備力は全て半減する!!」

「何!?!」

ダークエンド・ドラゴン

8

ATK 2100 1050

マテリアルドラゴン

6

DEF 2000 1000

「リバーズカードオープン！ 永続魔法、ウィキッド・ドレインを発動！ このカードは自分フィールド上に存在する『邪神』と名のついたモンスターが相手モンスターを戦闘によって破壊した場合、そのモンスターの攻撃力・守備力の高い方の数値分ライフを回復する！」

これはまずい……圧倒的に差をつけられてしまう。

「バトル！ 邪神ドレッド・ルートでダークエンド・ドラゴンを攻撃！ ファイアーズ・ノックダウン！！」

邪神ドレッド・ルートは闇の波動を拳に包み込み、襲い掛かってきた。

「ボクはダメージ計算時に速攻魔法、収縮を発動！ 邪神ドレッド・ルートの攻撃力を半分にする！」

シュウウウウウ……

邪神ドレッド・ルートの体が縮んだ。

邪神ドレッド・ルート

10

ATK4000 2000

『グオオオオ！！』

黒崎さんのダークエンド・ドラゴンはドレッド・ルートの攻撃に
歯が立たず倒された。

「うぐうつ……………ぐああああ!!」

シュウ LP 3100 2150

「!？」

もし、収縮を発動していなかったらライフポイントに圧倒的な差
をつけられていた。

しかし今の黒崎さんのリアクション……

「大ダメージを回避しましたが。まあ、私にはウィキッド・ドレ
インの効果が発動します。

帝 LP 1900 4500

「カードを1枚セットし、ターンエンドです。」

「はあ……はあ……はあ………今の衝撃……………どうやらその邪神ド
レッドなんかは……………ただのカードではない様だな。」

「!?!」

黒崎さんは胸を押さえて苦しそうな表情になっていた。

「大丈夫ですか、黒崎さん!？」

「はあ……はあ……何とかね。」

「どうです、邪神の力は?」

「……まあ、とりあえず凄いカードだということはわかった。ところで、聞きたい事があるが……」

「ほお……何です?」

「このデュエル……モンスターが受けるダメージもプレイヤーが受けるのか?」

「何だって!？」

「ククク……その通りです!!」

「やはりそうなのか……」

モンスターが受けるダメージもプレイヤーが受けるのか!？
僕が手に入れた資料によるとこれまでの闇のゲームはモンスターが実体化するだけであつた……

まさかブラザーフッドの技術がそこまで進んでいるとは……

「私はカードを1枚セットし、ターンエンドです!!」

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

「どうです？ 怖気つきましたか？」

「はあ……はあ…… 何勘違いしているんですか？ 元プロデュエリストならここで油断する事は禁物だという事ぐらいお分かりでしょう。デュエルはまだこれからですよ」

「……………」

やはりあなたには信用する価値がありました、黒崎さん。
流石ブラザーフッドを相手にしてきただけの事はありますね。

「クククク……面白い。私はあなたのような余裕を保っているデュエリストのプライドを崩すのが好きなのでね！！」

「なら続けましょうか。 どちらのプライドが崩れるか見てみようではないですか」

しかし今はこの相手をどうにかしないといけませんね。

T o B e C o n t i n u e d ……………

今回のオリジナルカード

《ウィキッド・ドレイン》

永続魔法

自分フィールド上に存在する「邪神」と名のついたモンスターが相手モンスターを戦闘によって破壊し墓地へ送った場合、その墓地へ送ったモンスターの攻撃力・守備力のどちらかの高い方の数値分ライフを回復する。

R e : 第 3 6 話 竜王の反撃（前書き）

修正終わりました。

Re：第36話 竜王の反撃

Side / 遊斗

現在の状況

シュウ / LP 2150

手札 1枚

モンスター / マテリアルドラゴン（守）、裏側守備表示モンスター 1体

魔法・罨 / 闇次元の開放

帝 / LP 4500

手札 6枚

モンスター / 邪神ドレッド・ルート

魔法・罨 / 冥界の宝札×2、ウィキッド・ドレイン

「はあ…はあ…はあ…はあ………」

「大丈夫ですか？」

「何の……これくらい大丈夫だ。ボクのターン！（まずは不利な手札の差を埋めるか……）ボクはモンスターを反転召喚する！」

メタモルポット

2

ATK700

「メタモルポットの効果を発動！ お互いのプレイヤーは手札を全て捨て、カードを5枚ドローする！！」

「丁度いい。 私も手札に困っていたのでね。」

「（ようし……） ボクはメタモルポットをリリースし、魔法カード、痛み分けを発動！」

「痛み分けだと！？」

「上手いな、これなら相手はドレッド・ルートをリリースせざるを得まい。」

「仮に相手がレベル・ステイラーを召喚していたとしてもレベル・ステイラーはアドバンス召喚以外でのリリースはできない。」

「ドレッド・ルートを排除するつもりだろうがそうはいかん！ 私は魔宮の賄賂を発動！ 痛み分けの発動を無効にし、破壊する！」

「…………… ボクは魔宮の賄賂の効果でカードを1枚ドローする。 カードを2枚セットし、モンスターをセットする。 ターンエンドだ。」

「まあ、幸いメタモルポットを攻撃対象される事がなくなった。」

シュウ／LP2150

手札2枚

モンスター／マテリアルドラゴン（守）、裏守備表示モンスター
1体

魔法・罨／闇次元の開放、リバーズ×2

「私のターン！ 私はバトルフェイズに入る！」

「そうはさせない！ ボクは威嚇する咆哮を発動！ このターン相手プレーヤーは攻撃宣言を行う事ができない！」

「クククク……いいでしょう、私はカードを2枚伏せ、ターン終了です。」

帝／LP4500

手札4枚

モンスター／邪神ドレッド・ルート（攻）

魔法・罨／冥界の宝札×2、ウィキッド・ドレイン、リバーズ×2

「このエンドフェイズにボクは砂塵の大竜巻を発動する！ ボクが破壊するのはその右の伏せカードだ！」

「チッ…… 小賢しいですね。」

破壊された伏せカードは2枚目の魔宮の賄賂だ。

「ボクのターン！ ボクは闇次元の開放を墓地へ送り、マジック・

プリンターを発動！ カードを2枚ドロ―する！」

ここで手札増強…… 良いカードを引ければ良いんですが……

「来た！ 魔法カード、大嵐を発動！ フィールド上の魔法・罫力ードを全て破壊する！」

「何！？」

これで相手は何もできない……

「ボクはボマー・ドラゴンを召喚する！」

「ボマー・ドラゴンだと！？」

手に爆弾を持った青い竜が現れた。

ボマー・ドラゴン

3

ATK1000 500

「そしてマテリアルドラゴンを攻撃表示に変更する。」

マテリアルドラゴン

6

ATK1200

「行くよ…… バトル！ ボマー・ドラゴンで邪神ドレッド・ルートを攻撃！！ エクスプロード・アタック！！」

『ガウウウウ！』

ボマー・ドラゴンは邪神ドレッド・ルートに向かって飛び掛った。

チュドーン！！

ボマー・ドラゴンは邪神ドレッド・ルートにぶつかり、爆発した。

「ぐっ……」

「ボマー・ドラゴンが攻撃した場合、その攻撃によって受ける戦闘ダメージは0となる。」

シュウ LP 2150

ズキィ！

「ぐっ……！！」

「言った筈でしょう、モンスターが受けるダメージはプレイヤーも受けるのです！！ 戦闘ダメージがあるうとなかろうと……」

「そうだったな……バトルだ！ マテリアルドラゴンでダイレクトアタック！ マテリアル・スパーク！！」

『クオオオオ!!』

マテリアルドラゴンは体から光を放った。

「ぐああああ!!」

帝 LP4500 2100

「ぐっ……」

「カードを2枚セットし、ターンエンドだ。」

シュウ/LP2150

手札1枚

モンスター/マテリアルドラゴン(攻)、裏守備表示モンスター
1体

魔法・罠/リバーズ×2

「邪神を破壊したほうが甘い!! 私手札の邪神の信教者の効果を発動! 邪神と名のついたモンスターが破壊されたターンのエンドフェイズにこのモンスターと手札のモンスターカードを墓地へ送る事でそのモンスターを墓地から特殊召喚する!! 私は手札のこのモンスターと手札の創造神
ザ・クリエイター

を墓地へ送り、邪神を蘇らせる!!」

『J a w k e r j i l l … r e k e J g e w l k … r h r L g 4 i w
…』

黒装束の男が現れ、妙な言葉を呟いた。

ブワアアア……

黒装束の男は魔法陣を描いた。

「復活せよ、邪神ドレッド・ルート!!」

『グオオオオ!!』

魔方陣の中から再び邪神ドレッド・ルートが現れた。

邪神ドレッド・ルート

10

ATK4000

「くっ……また復活したか。」

しかもエンドフェイズである為止める事ができない!!

「そしてドレッド・ルートが再び存在する為、モンスターの攻撃力は半減する!!」

「私のターン! バトル! 邪神ドレッド・ルートでマテリアルド

ラゴンを攻撃！ ファイアーズ・ノックダウン！！」

邪神ドレッド・ルートはマテリアルドラゴンに襲い掛かってきた。

「このダメージ計算時にボクはガード・ブロックを発動！ 自分が受ける戦闘ダメージを0にし、カードを1枚ドロウする！！」

バチイイ！！

黒崎さんの周りにバリアが現れ、ドレッド・ルートの攻撃を防いだ。

「おやおや、運が良いですね。 私はカードを2枚セットし、ターンエンド。」

帝 / LP 2100

手札1枚

モンスター / 邪神ドレッド・ルート（攻）

魔法・罠 / リバース×2

「ボクのターン！！ ボクはモンスターをセットする！！」

「守備モンスターで時間を稼ぐつもりですか？ しかしそんな考えは甘い！！」

「（守備モンスターで時間を稼がせないつもりか？ するとあの伏せカードは……） カードを1枚セットし、ターンエンドだ。」

シュウ／LP2150

手札1枚

モンスター／裏守備表示モンスター2枚

魔法・罾／リバーズ×1

「このエンドフェイズに永続罾、最終突撃命令を発動！！ このカードが存在する限り、表側表示モンスターのモンスターは全て攻撃表示となる！！」

「……………！！！」

黒崎さんのモンスターは裏守備表示……………だが、裏守備表示モンスターはダメージ計算時に攻撃表示となる。

邪神ドレッド・ルートの攻撃力だと敗北は避けられない。

「私のターン！ 私は邪神ドレッド・ルートでそのセットされているモンスターを攻撃！！ ファイアーズ・ノックダウン！！」

『ハアアアアア！！！！』

邪神ドレッド・ルートはセットされたモンスターへ向かって掌を振り下ろした。

どうする、黒崎さん……………あの伏せカードはこの状況を救えるのか？

「……………読んでいたよ。」

「何！？」

「邪神ドレッド・ルートのような力強いモンスターを使っているのなら相手モンスターを守備表示にさせないカードを使う事くらい予想していた！！ 罨発動！ デイメンション・ウォール！！」

「！！ し、しまっ……」

「そうだ。 高すぎる攻撃力が仇となったな。 さあ、姿を見せよ、ボクのモンスター！！」

仮面をつけた赤い竜が現れた。

仮面竜

3

ATK1200 600

シュルルルウ……

次元の裂け目が現れ、邪神ドレッド・ルートの腕を吸い込んだ。

「邪神の力が仇となったな。」

帝の頭上から腕が現れた。

「くっ…… チェーン発動！！」

その腕は帝へ目掛けて落ちてくる……

「うっ…… うわあああああ！！」

ズドォーーーーーーッ！！

帝は自らのモンスターの攻撃によって押しつぶされた。
今の衝撃によって物凄い埃が巻き上がった。

「……やったか？」

「はあ……はあ……」

「……！！」

煙が収まり始め、人影が見える様になった。

「くっ……小癪な真似を……!!」

帝 LP400

彼のボロボロになりながらも立っていた。

「……大丈夫でしたか。」

「危なかったですね……邪神の力が無ければ負けていました。私はディメンション・ウォールの効果にチェーンして罠カードを発動しておきました。」

そう言う帝の前には罠カードが開いてあった。
そのカードは……

「ダメージ・ダイエットか……あのカードは発動されたターンに自分が受けるダメージを半分にさせるカードだな。」

今のは良かった……だが、フィニッシュには至らなかったか……

「では、戦闘破壊された仮面竜の効果を発動！デッキから攻撃力1500以下のドラゴン族モンスターを特殊召喚する！現れよ、ボマー・ドラゴン!!」

ボマー・ドラゴン

3

ATK1000 500

「くっ……またボマー・ドラゴンを……（このままだと黒崎は次のターンで確実に邪神を破壊してくる……そして次の攻撃で確実に負ける！！）」

「どうします？　ここはメインフェイズ2に入って対策を立てるべきですよね？」

「ちっ……（私の手札にはこのカードがある！！　しかし良く分からないがリスクがあると……）」

「……このカードは？」

「正式にブラザーフッドに加わったものに与えられるカードだ。」

「……………」

「このカードを使えばただでさえ強い邪神は更に強くなる。　まあ、使ったらデュエリストにリスクがあるがな。」

「少し聞いて良いですか？」

「ん？」

「何であなたはブラザーフッドの一員になったのですか？」

「……」

「あなたの實力ならまたプロへ復帰するのも訳などない筈です。しかし今のあなたを見てるとプロデュエリストに戻る気はなさそうですね。むしろ勝利への欲望が満ちて来た様に見えます。」

「フッ……」

「何があつたんですか？」

「フッ……いいでしょう、話しましょう。」

私は元はプロデュエリストとして名を上げた事があつた。

「ダークネス・デストロイヤーでプレイヤーに直接攻撃！」

「うわあああああ！」

プレイヤー LP12000

プロデュエリストとして素晴らしい実績を持ち、ほぼ負けたことが無かった。

しかしある時……

??? LP4000

帝 LP2000

「これで終わりだ！ エクストリーム・クリムゾン・フォース！」

「うわあああああ！」

帝 LP2000

そうだ……私は負けたのだ。

プロデュエリストになったばかりの新人である青二才に……

その後、私は……

「何です！！ たかが一敗ではないですか！！」

「残念ですが、帝さん。あなたはあの若いデュエリストに負けたのです。それも余裕に倒されたのです。その一敗がもう、あな

たはプロとはなりません。」

こうして私はプロを辞めさせられた。

そして生き甲斐を失った私は地下デュエルを始めた。

「偉大魔獣ガーゼットでジエネティック・ワーウルフを攻撃！」

「うわああああ！」

プレイヤー LP 800 0

「ふっ……」

しかし地下デュエルで勝ち続けていながらも、私の渴きは満たされてはいなかった。

何故なら……

「力が欲しいか？」

「！？」

この時、私は何者かと出会った。

「うわあああああ！！！」

帝 LP 600 0

??? WINNER

その男は強かった……私は手も足も出ず、あの男に敗北した。
正にあの時のデュエリストの様に……

「お前…… どうやらあのドラゴンの力が忘れられないようだな。」
「うつ……」

「お前の望んでいるもの…… それはプロデュエリストとしての栄光ではない。 望みはあのドラゴンのような圧倒的な力による勝利…… 違うか？」

「……………」

……正にそうであった。
その者は私の心の内を読んでいた。

「力が欲しいのなら……邪神なんてのはどうだ？」

「邪神!？」

「ニヤッ」

私はその者に3枚のカードを渡された。

「そんな事が……あなたはその力を望んでブラザーフッドに入ったという事ですか。」

「さて、デュエル続行！！ 私はメインフェイズ2に入る！ 私は魔法カード、邪式闇染術じゃしきあんせんじゅつを発動！！」

「邪式闇染術……？」

「ぐっ……ぐああああ！！」

「何！？」

帝は急に苦しみだし、体からは黒い霧が放出された。

シュウウウウウウ……

帝 LP 400 200

シュウウウウ……

その黒い霧は邪神ドレッド・ルートに纏わり始める……

ゾクッ……！！

「何だ、これは……？」

ジュワ……

「黒崎さん、あなたの痣が……！！」

黒崎さんの左腕の痣が光りだした。

「（痣が……今の魔法カードに危険を感じているのか！？）」

「あのカード……どう見ても危険ですね。」

『グオオ……グアアアアアア！！』

黒い霧に纏われた邪神ドレッド・ルートは苦しみ、暴れ始めた。

「何だ……」

一体何が起きているというんだ！？

『グオオオオオオ！！』

「はあ……はあ……さあ、更なる闇の力を得て進化せよ！！我が邪神ドレッド・ルートよ！！」

『グオアアアアアア！！』

邪神ドレッド・ルートは黒い霧を吸収し、叫び上げた。

邪神ドレッド・ルートの骨は黒くなり、緑色の肌は茶色となった。

「これこそ邪神ドレッド・ルートの究極の姿！！ 狂魔神
きょうましん
ドレッド・ルート！！」

邪神ドレッド・ルートは更に凶悪な姿と化した。

狂魔神ドレッド・ルート

10

ATK5000

「！！（何だ、あのモンスターは！？）」

一体何が……あの魔法カードも邪神の進化もデータベースには無
かった！！

これは本部に報告するべきだ……

「さあ、私はターンエンドです！！」

帝/LP200

手札/2枚

モンスター/狂魔神ドレッド・ルート(攻)

魔法・罠/最終突撃命令、リバーズ×1

「ボクのターン！（相手はボクの方にボマー・ドラゴンがあるの
を知ってて邪神を進化させた…… だったらボマー・ドラゴンでは
倒せないのも当然…… だが、最終突撃命令の所為で守備表示にで

きないのなら仕方ない。」 バトル！ ボマー・ドラゴンで狂魔神
ドレッド・ルートを攻撃！ エクスプロード・アタック！！」

『ガウウウウウ』

チュドーーーーン！！

「ボマー・ドラゴンの効果を発動！ このモンスターが相手モンスターとの戦闘によって破壊された場合、その相手モンスターを破壊する！」

「フツ…… 無駄です！！」

ボマー・ドラゴンが起こした煙が消えると狂魔神ドレッド・ルートはまだフィールドに残っていた。

「残念でしたね……狂魔神ドレッド・ルートは魔法・畏カードの効果を受けず、効果モンスターの効果によってフィールドを離れさせる事ができない！！」

「そういう事でしたか……まあ、ボマー・ドラゴンは自身の攻撃によって与える戦闘ダメージは0です。」

シュウ LP2150

「クククッ…… しかしボマー・ドラゴンの痛みは受けてもらいますよ。」

「その行動に何の意味があるのか…… まあいい、バトルです！
狂魔神ドレッド・ルートでその裏守備表示モンスターを攻撃！！」

「！？（モンスターを召喚して来ないだと！？）」

狂魔神ドレッド・ルートは掌にエネルギーを溜め、襲い掛かってきた。

「ネガフォース・クラッシュ！！」

「（まあ何れにせよ、助かった……） ボクは罠カード、トラップ・
スタンを発動！！ このターンの間、罠カードの効果は無効となる
！！」

「何！？」

バチイイイ！！

帝のフィールドに存在している最終突撃命令に電撃が走った。

「まあ、このターンもボクは無事の様ですね。」

「チッ…… 悪あがきもいい加減にしてもらいたいですね？ プロな
らプロらしく敗北を認めるべきではないですか？」

「…… 負けても無いのに負けを認めるのはプロとしておかしいと思
うけどね。」

「まあいい、次のターンは必ず仕留めましょう。 先ずはそのモン

スターを破壊しようか！」

狂魔神ドレッド・ルートは裏守備表示モンスターを掴んだ。
その伏せられたモンスターは黄色い首の長いドラゴンであった。

ミンゲイドラゴン

2

DEF200

ミンゲイドラゴンは狂魔神によって握りつぶされた。

「ミンゲイドラゴンの攻撃力は400！ダメージを受けてもらい
ましょう！ ドレッド・プレッシャー！！」

「ぐああああああー！！」

シュウ LP1150 750

「はあ…はあ…はあ…はあ……」

これはまずい……黒崎さんはこれまでの攻撃によって相当なダメージを受けている。

「さて……今度こそ次のターンで終わらせましょう。 ターンエンド。」

帝／LP200

手札／3枚

モンスター／狂魔神ドレッド・ルート（攻）

魔法・罾／最終突撃命令、リバーズ×1

「ボクのターン！ ドロー！！（何時までも壁で凌げる訳はないな。このターンで決めないと負ける。）」

『シュウ……！！』

「……！（パルス……）」

『シュウ、大丈夫？』

「（アハハ……正直、大丈夫じゃないよ。ボクはボロ雑巾だよ、もう。）」

『そうか……』

「（パルス、あのモンスター、狂魔神ドレッド・ルートから何かを感じ取れるかい？）」

『そうだね。あのモンスター……あのモンスターからには負のエネルギーを感じる。』

「（負のエネルギー？）」

『うん、負のエネルギーがあのもンスターを侵食して理性を失った

と言う事かな?」

「(邪神ともいえるモンスターが侵食されるだ?)」

『まあ、そうなんだけど。』

「……………(君が言っている事が本当だとそれは物凄く恐ろしい存在だと言う事になるな。)」

「何をしている! さつさと最後のターンを進めんか!」

「すみません……………じゃあ、このドローに賭けましょう。リバー
スカードオープン、無謀な欲張り!! ボクはこのカードの効果に
より、カードを2枚ドローできる! しかしこのカードを発動した
場合、次の2ターンの間ドローフェイズをスキップする!!」

「最後の悪あがきですか…………… 良いでしょう、引きなさい!!」

「ドロー!」

どうだ……………状況を変えられるか!?

「このカードか…………… このカードじゃどうにも……………!! (いや、
待てよ……………勝てる!!)」

ニヤッ……………

黒崎さんの表情が微笑み始めた。
どうやら逆転のカードを引いたのか。

「ボクのターン！！ このスタンバイフェイズに墓地のミンゲイドラゴンの効果を発動！！ 自分フィールドにモンスターが存在せず、墓地にドラゴン族モンスターしか存在しない時、墓地から特殊召喚できる！」

ミンゲイドラゴン

2

DEF200

「そのモンスターで何をするという？ 上級モンスターで対抗するつもりか？」

「いいや、コストに使うだけさ。 ボクはミンゲイドラゴンをリリースし、痛み分けを発動！！」

「痛み分け！？ そうか……」

「そんなカードで何ができる！？ 狂魔神ドレッド・ルートは魔法・罠カードの効果を受けない事を忘れたのか！？」

「それはどうかな？」

ピシッ……！！

「！」

今の音は……

ピシッ…ピシッ…

「ば、馬鹿な…… 何故だ!？」

そう、この音は狂魔神ドレッド・ルートの体に亀裂が入った音だ。

パキパキ……

その亀裂は広がり、ドレッド・ルートの体が砕け始めたのだ。

「何故だ!？」

「痛み分けの効果さ。痛み分けの効果はモンスターに影響しない。影響されるのはプレイヤーだ。」

「プレイヤー……だと!？」

「そう、痛み分けは相手プレイヤーにリリースを強要させるカードだ。このカードが発動された場合、相手プレイヤーは必ず自分のモンスター1体をリリースしなければならない。どんな無敵のモンスターであろうとな。」

『グオオオオオオ……』

パキパキパキパキ……バリーン!!

狂魔神ドレッド・ルートは砕け散った。

「ば、馬鹿な…… ぐあああああ!！」

どうやら狂魔神が倒された事で相当なダメージを受けたらしい。

「さて、フィニッシュだ。ボクは墓地のダーク・アームド・ドラゴンとミラーージュ・ドラゴンを除外する！じゃあ、任せるよ。」

『わーーーーい！ 久々の出番だー！！』

「現れよ、ライトパルサー・ドラゴン！！」

胸に宝玉を込めた光り輝く白銀の竜が現れた。

ライトパルサー・ドラゴン

6

ATK2500

『ねえねえ、折角だからフレアも出してよ。』

「（はは、悪いけど君の弟は出せないよ。手札に來ていないしサ
ーチカードもない。）」

『シュウのケチ~~~~~!!』

「（まあ、彼には今度出番が来るだろう。）バトル！ライトパ
ルサー・ドラゴンでプレーヤーヘダイレクトアタック!!」

ゴゴゴゴゴゴ……

ライトパルサー・ドラゴンの宝玉に光が集まり始めた。

「これで決まりだ！ シャイニング・パルス・ストリーム！！」

ピカアアア……

ライトパルサー・ドラゴンは集めた光を一気に放出した。

「ぐああああああああ！！」

帝 LP2000

「お疲れ、パルス。」

『じゃあ、また手助けが必要になったら呼んでね。 体に無理しちゃ駄目だよ。』

シュウウウウ……

こうしてデュエルは終了し、魔方陣は消えた。

シュウは勝ったのだが、彼は少し汗だくになっており、息が途切れていた……

「危なかった……何とか勝てた。」

「大丈夫ですか？」

「一応、大丈夫だ、遊斗くん」

「う、うおおお……うああああ!!」

「ん!？」

「はあ…はあ……くそ、まさかありえん！私が…私が負けるなんて……うあああ!!」

帝は急に悲鳴を上げ始めた。

「……どうやらあの魔法カード、モンスターを強力にさせるだけにそれなりの代償があつたようだな。」

「ああ、その通りだ。」

「!？」

急に空から声がした。

「この声は……」

「久しぶりだな、黒崎 シュウ。」

空には白いペガサスが飛んでいた。

そのペガサスの上に青い髪の青年が乗っていた。

「相変わらずお前のデッキはえげつないな。」

「……ルーカス・アンデルセン。」

彼はペガサスから降りた。

「はあ…はあ…君も村上クンを襲撃しに来たのか。」

「フツ、安心しろ。今回は帝を迎えに来ただけだ。帝がここに
来たのは単独行動だったからな。そしてついでに挨拶という事だ。」

「はあ…はあ…ああ……………」

帝はまだ呻き声を上げている。

「はあ…だから闇染術を無闇に使うなど言っただ。使用した時の代償は激しいからな。しかし面白いものを見させてもらった。」

「…今度の目的は何だ……………」

「今にわかるさ。じゃあ帰るぞ、帝。」

「嘘だ…まさか負けるはずが……………」

ドスッ！

「忠告された筈だろ？ 無理に使うなど。」

「うぐっ！…！」

ルーカスと呼ばれた青年は腹に拳を突いた。

「じゃあ、遠慮なく帰りますね。」

「はあ……はあ……（残念だが、止めるほどの体力が無いな。）」

「じゃあ、行くぞ。」

『ああ、ルーカス。』

そう言ってルーカスは帝をペガサスに乗せて飛んで行った。

「……そろそろ何か対策を考えておかないとな。」

病院

「……今日はこれで終わりですね。」

僕達は激戦の後、鉄也の部屋に戻りました。

「あなたには手当が必要ですね。」

「ありがとう、遊斗くん。」

「じゃあ話しましょうか、ブラザーフッドの今後の目的について。」

「いや、待ってくれ。それは明日にしてくれないか？」

「？」

「ちょっと体が疲れてしまってね。それに明日は迎えにいかなきやならない人がいるんだ。そしてその人にも情報を知らせておい

たほつが良いと思う。」

「……そうですか。いいですよ、明日でも。」

という事で話は明日へとまわした。

T o B e C o n t i n u e d ……

今回のオリジナルカード

《邪神の信教者》

3

闇属性/魔法使い族

ATK600/DEF600

「邪神」と名のついたモンスターが破壊されて墓地へ場合、エンドフェイズに手札からこのカードとレベル8以上のモンスターカードを墓地へ送る事によって墓地から破壊されたモンスターを召喚条件を無視して特殊召喚する事ができる。

《邪式闇染術》

魔法カード

テキスト表示：己の魂を捧げよ。 己の僕に更なる力を授けるとしよう。

（効果：自分のライフを半分払い、フィールド上のモンスター1体を選択して発動する。 選択されたモンスター以外は全て破壊され、選択したモンスターは闇化あなか
モンスターとなる。 このカードはデュエル中1度しか使用できない。）

《狂魔神ドレッド・ルート》

10

闇属性/悪魔族・闇化モンスター

ATK5000/DEF5000

闇化モンスターは自分フィールド上に1体しか存在できない。

このモンスターをコントロールしている限り自分はモンスターを召喚・セット・特殊召喚を行えない。

このモンスターは罨・魔法カードを効果を受けず、効果モンスターの効果によってフィールドを離れない。

このモンスターが表側表示で存在する限り、このモンスター以外のフィールド上の表側表示のモンスターは全て攻撃力・守備力を半分にする。

このモンスターが開いてモンスターを戦闘によって破壊した場合、そのモンスターの攻撃力・守備力の高い方の数値分相手プレイヤーにダメージを与える。

R e : 第 3 6 話 竜王の反撃（後書き）

次回は通りすがりのデュエリストさんとのコラボを書く予定です。
楽しみにしてください。

コラボ特別編 大天使の結末（前書き）

今回は通りすがりのデュエリストさんとのコラボになります。
初めてですから少し緊張しています。

ついでに気付いたらアクセスPVが38000になりました。

コラボ特別編 大天使の結末

Side / 鉄也

「俺は．．．．．一体どうなるんだ。」

俺の周り．．．．．何もかも真っ暗だ。
眼が覚めたらそうになっていた。

俺はデュエル・オブ・フォーチュンカップ、準決勝戦で十六夜
アキとデュエルをした。

展開は激しく、それはまさに激闘だったものだ、特にサイコデュ
エルの力を体感していた俺にとっては一瞬。

だが最終的に俺は勝てた．．．．．しかしアキの力によって出
来た傷のせいで俺は倒れてしまった。

「．．．．．」

俺はデュエルディスクのエクストラデッキの中からカードを取り
出し、そのカードを眺めた。

「ギガンテック・ファイター．．．．．」

このカードは俺がアキとの激戦の中、突然現れたカードだ。

そしてギガンテック・ファイターが現れたと同時に俺の黒き痣が．
．形は巨人の痣に似ているな。

ジャンク達を外せばスターダスト・ドラゴンやブラック・ローズ・
ドラゴンを持つていない今の俺の唯一の戦力、言わば切り札だ。

俺の黒き痣が覚醒するという事は俺を、そして同じ痣を持つ黒崎さ

んを狙う者が動き出すという事だ。

結衣さんは．．．．．とりあえず眼が覚めたら聞いてみよう。
とりあえず動き出す者達、おそらく邪神を使っていた男もその一員だろうな。

そいつらがダークシグナーかどうか分からないが何れ知っておく必要がある。

俺はわかっている、戦い続けなければならない。

「強くなるしかないな．．．．．」

俺は死んでいない．．．．．あくまで今は気を失っているだけだ。

受けてやるさ．．．．．誰が相手だろうと俺は．．．．．

「．．．．．受けて立つ!」

「「えっ?」」

「!」

振り返ると．．．．．そこには茶髪の男と少し茶色が入った黒い長髪の女がいた。

今の俺と同じ位の歳だな。

「あゝ．．．．．」

S i d e E n d

S i d e / 澪

今日は珍しく、私は遊騎君と一緒に登校していた。
珍しく結や匠君達が近くにいない・・・

「・・・・・・・・／／／」

どうしよう・・・・・・・・ちょっと恥ずかしいな。

「ねえ、君達。」

私達はある長い白い髪を後に結んでキャップ帽をかけた青年に声をかけられた。

「その服装、君達はデュエルアカデミアの生徒だろ。」

「え、そうだけど。」

ちよつと・・・・・・・・これってもしかしてナンパ!?

見た目からして悪い人には見えないけど私は遊騎君の後に隠れた。

「僕の名は藍沢 遊斗。 怪しい者じゃないから安心してくれ。
ただ、君達を見て2人ともいいデュエリストだな思ったんだ。」

「いや、そんな程でも。」

「どうも、褒め言葉ありがとうございます。」

「ははは、ところで君達は別次元、あるいは異世界の存在を信じているかい？」

「別次元．．．．．」

まあ、私や遊騎君はそういう存在を何度か経験しているな。
まさかまた．．．．．

「俺たちはそういうのを経験しているな。」

「もしかして挑戦なのか？」

「まあ、そういう事だ。早速がある者とデュエルをしてもらいたい．．．．．君に。」

そう言っ て彼は私に指を指した。

「突然だがいいか？」

「どうする澪さん？」

「私は受けるよ。」

これはいい機会だ．．．前の時のように未知なるデュエリストとデュエルする事が出来る！

「じゃあ2人とも、少し目を閉じてくれ。」

そう言われて私は目を閉じた。

「……………」

「……………受けて立つ!!」

「えっ?」

目を開けるとそこには赤が入った黒髪の男が叫んでいた。

S i d e E n d

S i d e / 鉄也

「・・・・・・・・・・／／／」

俺は両手で顔を隠していた。

どうしよう・・・見られちゃったよ・・・誰もいないかと思って
つい叫んでしまつて・・・まさかいたとは・・・やばいよ・・・恥
ずかしいじゃねえか・・・

「そ、そう気を落とすなよ。」

「そうだ・・・何も見ていなかったからな。」

いや、見ていただろう・・・そのセリフは見ていたという意味だ
ぞ。

「ちくしょおおおおおおおおお！！！」 鉄也崩壊

「お、落ち着けーーーー！！！」

「H A N A S E ! ! !」

「取り乱してすまん。」

「い、いや大丈夫だ。」

「ああ、俺の友人達と比べたら案外マシな方かもだからな。」

「そ、そうか……」

幸いかめはめ波の練習をしなくて良かったな。

「あ、あの……ところで私はデュエルの挑戦を申し込まれたんだが……もしかしてあんたが相手か？」

「挑戦？」

そうか……ついに来たか、俺にも異世界からの挑戦者というものが……。
だったら答えは決まっている。

「ああ、受けて立つぜ！」

これは今後の展開へ向けて良い特訓になるな。

「じゃあ初めまして、俺は村上鉄也。」

「私は竹内漣だ、よろしくな。」

「俺は海条遊騎だ、よろしく。」

竹内 澪 よく見たらけいおん！の秋山 澪に似てるじゃねえか！！

改めて見ると 可愛い . . . / / /
俺はけいおん！では澪派だったー！

「？」

「いややや何でもない！ 早速始めようぜ！」

「あ、ああ 始めような。」

いかん、危うく取り乱す所だった。

「「デュエル!!」」

鉄也 LP 4000

VS

澪 LP 4000

（今回のデュエルは2011年3月01日のルールとなります。）

「先攻は譲るよ。」

とりあえず彼女のデッキがどんなのか知っておくべきだな。

「ありがとう . . . 私のターン！ 私は手札のヘカテリスを墓地へ

送り、神の居城　ヴァルハラを手札に加える！」

ヴァルハラ．．．．．天使族デッキか。

だったらほつきり言おう．．．．．先攻を譲らなかった方が良かったー！！

「私は手札に加えた永続魔法、神の居城　ヴァルハラを発動！　自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、手札から天使族モンスターを特殊召喚できる！　私は光神テテュスを特殊召喚する！」

大きな羽が生えた女性の天使が現れる。

光神テテュス

5

ATK2200

「更に私はコーリング・ノヴァを召喚する！」

光り輝く輪のようなモンスターが現れた。

コーリング・ノヴァ

4

ATK1400

「私はこれでターンエンドだ！」

澪／LP4000

手札3枚

モンスター／光神テテユス（攻）、コーリング・ノヴァ（攻）

魔法・罾／神の居城 ヴアルハラ

「俺のターン、ドロー！」

彼女の場合には天使族をリクルートするコーリング・ノヴァ・・・
そして追加ドローを可能とさせる光神テテユス・・・どちらも残し
ておくわけにはいかないな。

「俺は手札断殺を発動！ お互い手札を2枚捨て、カードを2枚ド
ローする！」

相手が天使族となら、こっちも油断出来ねえな。

「（天使族モンスターを引いていないな・・・）」

「俺はジャンク・シンクロンを召喚する！」

『とおおー！』

ジャンク・シンクロン

3

ATK1300

「あれは不動遊星が使っていたカード!!」

「本当だ・・・鉄也君も持っているんだな。
（つまりシンクロデ
ツキという事か。）」

『鉄也、ここにいたんすか!』

「ああ、心配かけてすまん。」

『あんたが無事ならそれで嬉しいすよ。』

「じゃあ頼むぜジャンク!!」

『おう、早速暴れるっすよ!!』

「なあ、そのジャンク・シンクロン・・・精霊か?」

「!」

「零さんも精霊が見えるのか・・・」

「ああ、こいつが俺の相棒だ。」

『ジャンクと申します。よろしくつす。』

「ああよろしく。」

「じゃあ続けるな、俺はジャンク・シンクロンの効果を発動! このモンスターが召喚に成功した時、墓地からレベル2以下のモンスターを特殊召喚することが出来る! 現れよ、ザ・カリキュレータ

「！」

ザ・カリキュレーター

2

DEF0

「（ジャンク・シンクロンとレベル2という事は．．．まさかあのモンスターか！？）」

「レベル2、ザ・カリキュレーターにレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング！ 集いし星が新たな力を呼び起こす。光指す道となれ！」

『行くつすよ～～～！！！！』

2 + 3 〳 5

「シンクロ召喚！ いでよ、ジャンク・ウォリアー！！！」

『ハアア．．．．．トアアア！！！！』

ジャンク・ウォリアー

5

ATK2300

「あれはジャンク・ウォリアー!!」

「まさかあの不動遊星が使っていたカードを直ぐに見れるとは．．．．．」

ここはオネストを警戒するべきか．．．．．1000ポイントを超える程度のダメージならOKだな。

仮にオネストが無かったとしてもコーリング・ノヴァでオネストをリクルートしてくるかもしれない．．．だったら!

「バトル! ジャンク・ウォリアーでコーリング・ノヴァを攻撃、スクラップ・フィスト!!」

出来るだけダメージを与えておくか!

『トアアアア!!』

ジャンク・ウォリアーの拳がコーリング・ノヴァに直撃する。

零 LP 4000 3100

「この瞬間、私はコーリング・ノヴァの効果を発動! このモンスターが戦闘で破壊されたため、デッキから光属性・天使族モンスターを特殊召喚する!」

少しボロボロの服を着た天使が現れた。

小天使イル

2

DEF300

小天使イル．．．．．オリジナルカードか。

「小天使イルの効果を発動！ このモンスターが召喚・特殊召喚に成功した時、お互い手札を1枚捨てる！」

「地味だがいい効果だな．．．．．俺はカードを1枚セットし、ターンエンドだ！」

鉄也／LP4000

手札2枚

モンスター／ジャンク・ウォリアー（攻）

魔法・罾／リバーズ×1

「私のターン．．．このドローフェイズ、私は光神テテユスの効果を発動！ ドローしたカードが天使族モンスターだった場合、カードをもう1度ドローする事ができる！ 引いたカードはコーリング・ノヴァ！ よってもう1度ドローできる！」

ここで手札稼ぎか．．．．．

「引いたカードはマスター・ヒュペリオン！ もう1度ドロー！ 次はジェルエンデュオ！ 更にドロー！ 小天使クール！ 更にド

ロー！ アテナ！ そしてドロー．．．．オネスト！！」

「！！！」

オネストが来たか．．．．

光神テテウスを攻撃していれば手札が増える事も無く、オネストも手札に来ることはなかった、すなわちオネストを警戒して攻撃対象を変更したのが過ちだったか。

まあ、いいか．．．．

「次のカードは．．．．天使族じゃないな。でもこれで戦力が揃った！ 私はテラ・フォーミングを発動！」

テラ・フォーミング．．．．天空の聖域か？

だが聖域なら天空の使者ゼラティウスがある筈だが．．．．

「私はデッキからフィールド魔法、天空の領域を手札に加えてそのまま発動する！」

「聖域じゃなくて領域？」

オレたちが居る黒かった世界は、ソリッドビジョンによって地面に魔法陣のようなものが描かれ、柱が等間隔に建っているフィールドになった。

「さらに小天使イルは天空の領域が存在する為、チューナーとなる！」

「そして私はレベル5、光神テテウスにレベル2、小天使イルをチューニング！ 天空の領域に封印されし最も悪魔に近き大天使よ！

今こそ戦場に降り立ち、愚かな者どもに災厄をもたらせ！」

「最も悪魔に近い大天使!？」

なんか凄く強そうな台詞だな!!

5 + 2 〃 7

「シンクロ召喚! 荒らせ、大天使イルフェイテッド!」

天空の領域の光の柱から白い羽を持つ悪魔のような風貌の天使が現れた。

大天使インフィルテッド

7

ATK 2200

大したモンスターらしいが攻撃力はジャンク・ウォリアーより低い……オネストを使うか?

だが俺には聖なるバリア ミラーフォース が伏せてある……

「……………あ。」

やべえ、今の考えはフラグだ!!

「大天使インフィルテッドの効果を発動! このモンスターがシン

クロ召喚に成功した時、このカードと天空の領域以外のカードを全て破壊する！ ちなみにこのモンスターのシンクロ召喚と効果の発動に対してカウンター罠を発動することは出来ない！ イルフェイテッド・ストーム！」

滅茶苦茶強力じゃねえか！！

ブラック・ローズより強ええーーーー！！

これがフラグの答えか！

『ウオオオオオー！！』

「ジャンク・ウォリアー！！」

イルフェイテッドは激しい嵐を巻き起こし、フィールド上のカードが吹き飛ばされ、ジャンク・ウォリアーも巻き込まれた。

「更に私はオネストを召喚する！！」

嵐が収まった後、澪さんの場に翼が生えた筋肉質の天使が現れる。

オネスト

4

ATK1100

「バトル！ オネストでプレイヤーにダイレクトアタック！ オネステイ・クライニング！！」

『はあああー！！』

オネストは俺に向かって羽を飛ばした。

「くっ……………」

鉄也 LP 4000 2900

「さらに大天使インフィルテッドでダイレクトアタック！ イルフ
エイトッド・シャイニング！」

大天使インフィルテッドは俺に激しい光を放った。

「ぐお、眩しっ！！」

鉄也 LP 2900 700

「私はメインフェイズ2に入り、オネストを手札に戻す！」

オネストは澪さんの手札に飛んでいった。

「私はカードを1枚セットし、ターンエンド！」

澪 / LP 3100

手札 6枚

モンスター / 大天使インフィルテッド（攻）

魔法・罾ノリバース×1
フィールド／天空の領域

この人．．．．かなり強いな。
だったら俺も燃えてきたぜ！！

「俺のターン！」

「この瞬間、天空の領域の効果を発動！」

「！？」

「来た、澪さんの絶対防御！」

絶対防御．．．．．？

「相手スタンバイフェイズに手札の天使族モンスターを見せる事で
そのターン、自分が受けるダメージは0となる！」

「何だと！？」

「私は手札のコーリング・ノヴァを見せる！」

待て待て、つまり戦闘ダメージだけでなく効果ダメージも0か！？
天空の聖域より強力だな。

テテュスのおかげで発動コストは豊富になったという事か。
だがそれが俺を退かせたりなどしねえぜ！

「俺はダーク・バーストを発動！ 墓地から攻撃力1500以下の

闇属性モンスターを手札に加える！」

「墓地には……………」

「戻って来い、俺の相棒！ ジャンク・シンクロン！！」

『とああ！！！』

ジャンク・シンクロン

3

ATK1300

「そうか……………ジャンク・シンクロンには種族・属性によってサルベージが豊富だ。自身の効果もあつて最も優秀なチューナーだという事か……………」

お、遊騎は物分りがいいな。

「ジャンク・シンクロンの効果を発動！ 墓地からモンスターを特殊召喚する！ 選択するのは……………こいつだ！」

『とあ！！』

チューニング・サポーター

1

DEF100

「そして俺は機械複製術を発動！ 攻撃力500ポイント以下の機械族モンスターを選択し、同名モンスターをデッキから2体特殊召喚する！」

チューニング・サポーター×2

1

DEF100

「チューニング・サポーターはシンクロ素材になる時、レベルを2に変更する事ができる！」

チューニング・サポーター×2

1 2

「レベル変更！！」

「そしてチューナーが・・・」

「レベル2となったチューニング・サポーター2体とレベル1、チューニング・サポーターにレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング！！ 集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます。 光さす道となれ！」

2 + 2 + 1 + 3 〓 8

「シンクロ召喚！ 粉碎せよ、ジャンク・デストロイヤー！」

『トアアア！！』

ジャンク・デストロイヤー

8

ATK2600

「ジャンク・ウォリアー以外に別の姿が！？」

「ご存じないようだがジャンク・シンクロンには幾つかのバリエーションがある。これがそのもう1つの姿だ！」

「（攻撃力はインフィルテッドの方が低い．．．でも私の手札にはオネストがある！）」

「そしてジャンク・デストロイヤーの効果を発動だ！ シンクロ召喚に成功した時、チューナー以外のシンクロ素材の数までフィールド上のカードを破壊する事ができる！」

「そんな効果が！」

「つまり、4体のモンスターでシンクロ召喚したから3枚も破壊可能か！」

「俺が選択するカードは大天使インフィルテッド、その伏せカード、

そして．．．．．天空の領域だ、　タイダル・エナジー!!」

「ハアアアア．．．．．トリアアアア!!」

ジャンク・デストロイヤーは4本の腕からエネルギー球を投げた。

「うああああ!!」

大天使インフィルテッドと伏せカードが破壊された。

伏せカードはリビングデッドの呼び声．．．．．手札断殺の時に手札から強力なモンスターを墓地へ送っていたか。

幸い対処出来て良かったな。

「これで厄介な鉄壁は．．．．．何!？」

俺が見た景気．．．それは天空の領域はまだ存在していた。

「天空の領域にはもう1つ効果がある!　フィールド上のこのカードが効果によって破壊、または除外される場合、手札の天使族モンスターを手札から捨てる事で破壊・除外されない!」

「それって強すぎないか．．．．．」

なるほど、テテユスと相性が良いな。

絶対防御とはその事か。

じゃあ、このターン攻撃しても意味がないな。

「だが、シンクロ召喚に成功した為、チューニング・サポーターの効果を発動!　デッキからカードを1枚ドロウする!　俺は3体使用したから3枚ドロウだ!」

俺はドローしたカードを見た．．．．．これだ！
こいつに賭ける！

「カードを破壊してドローを．．． 澪さんを相手に鉄也も中々やるな．．．．．」

「反撃を狙っていたが無理か．．．カードを2枚セットしてターンエンドだ！」

鉄也／LP700

手札2枚

モンスター／ジャンク・デストロイヤー（攻）

魔法・罠／リバーズ×2

フィールド／天空の領域

「私のターン！ 私は小天使クールを召喚する！」

「また天使か．．．」

小さい天使が現れた。

小天使クール

1

ATK800

オネストを使ってギリギリの差で勝つつもりか!?

「私はコート・オブ・ジャスティスを発動! レベル1の天使族モンスターが存在する場合、手札から天使族モンスターを特殊召喚することが出来る! 現れよ、マスター・ヒュペリオン!」

太陽を思わせる衣装を纏ったモンスターが現れた。

マスター・ヒュペリオン

8

ATK2700

「また厄介のが出たな……………」

「さらに私は小天使クールをリリースし、効果を発動!」

「何?」

「手札から大天使クリステアを特殊召喚する!」

紅が入った白い天使が現れる。

やはり入っていたか……………

あの小天使も結構強いな……………

大天使クリステア

8

ATK2800

「マスター・ヒュペリオンの効果を発動！ 墓地の光属性・天使族モンスターを除外する事でフィールド上のカードを1枚破壊する！私はコーリング・ノヴァを除外し、右の伏せカードを破壊だ！」

『ハッ！！』

マスター・ヒュペリオンは掌から炎の球を放った。

俺の破壊されたカードはくず鉄のかかしだ。

出来ればフリーチェーンのこっちを選択して欲しかったな。

「俺はサイクロンを発動！ このカードで天空の領域を破壊だ！！」

「私は手札のアテナを墓地へ送り、天空の領域の破壊を無効にする！」

一応、1枚でも多く手札を減らせないと。

じゃあ、掛かって来い！

「なら私は大天使クリスティアでジャンク・デストロイヤーを攻撃！」

『ハアアア！！』

ここはダメージ計算に入らせるわけにはいかない……………

「俺は墓地のネクロ・ガードナーの効果を発動！ このモンスターを除外し、大天使クリスティアの攻撃を無効にする！」

ネクロ・ガードナーが現れ、大天使クリスティアの攻撃を受け止めた。

「なら、私はマスター・ヒュペリオンでジャンク・デストロイヤーを攻撃！」

「だが、ライフは残る……………」

来い……………

「私はこのターンで決める！ 手札のオネストの効果を発動！ このカードを墓地へ送り、ジャンク・デストロイヤーの攻撃力の数値をマスター・ヒュペリオンの攻撃力に加算させる！」

マスター・ヒュペリオンの背中に翼が生え、眩しい光を放った。

マスター・ヒュペリオン

8

ATK 2700 5300

この瞬間を待っていた！！

「シャイニング・プラスト！！」

マスター・ヒュペリオンの放つ炎の弾がジャンク・デストロイヤーを飲み込んだ。

ドッカーーーン！！

「うわあああー!!」

「これで……………」

鉄也 LP700

「え？」

「はははは……………流石に危なかったぜ。でも油断したな、
澪さん。」

「な、何でライフが……………?」

「俺はダメージ計算時にオネストの効果にチェーンしてこのモンス
ターの効果を発動しておいた。」

俺は墓地からカードを引いて澪さんに見せた。

『クリ〜〜!!』

俺はカードを見せたと同時にクリボーが現れた。

「あれは……………クリボー!!」

『クリクリ〜〜!!』

「こいつの効果を知っているよな？」

「確か手札から捨てる事で相手バトルフェイズによる自分が受ける戦闘ダメージを1度だけ0にする効果が・・・」

「その通りだ。いくらフィニッシャー並みの攻撃力でも戦闘ダメージが与えられなければ意味が無いだろ？」

「うつ・・・オネストが無駄打ちにされたか。決着をつける事に焦ってしまったか。」

「手札で発動できるカードを持っているのはあなただけではない事だな。ありがとう、クリボー・・・お前のおかげで助かったぜ。」

『クリクリ〜〜！』

クリボーは俺に頼ずりした。

「（か、可愛い・・・／／／）やるな・・・私はこれでラインエンドだ！」

『クリリ〜〜！』

クリボーは俺の墓地に戻っていった。

零／LP3100

手札0枚

モンスター／大天使クリスティア（攻）、マスター・ヒュペリオン（攻）

魔法・罠／コート・オブ・ジャスティス

フィールド／天空の領域

「俺のターン！」

これでオネストの脅威は無くなった．．．．だがそれでも不利なのに変わらないな．．．．

だが、俺はクリボーがくれたチャンスを無駄にはしない！
このカードに賭けるぜ．．．．

「俺は貪欲な壺を発動！ 墓地に存在するジャンク・ウォリアー、ジャンク・デストロイヤー、クリボー、チューニング・サポーター2体をデッキに戻し、カードを2枚ドローする！」

引いたカードは．．．．メタモルポットとおろかな埋葬！！

「俺はモンスターをセットし、おろかな埋葬を発動！ デッキからADチェンジャーを墓地へ送る！」

これに賭けるしかない！

「墓地のADチェンジャーの効果を発動！ 俺は裏側守備表示のモンスターを攻撃表示に変更させる！」

さあ、困った時の~~~~~

メタモルポット

2

ATK700

「メタモルポット!! ここで手札補充か!？」

「メタモルポットの効果でお互い手札を捨ててカードを5枚ドロ―だ!」

来い来い来い来い……………キターー(。°)!!

「澪さん……………俺の勝ちだ。」

「え!？」

「確か天空の領域が発動する効果はスタンバイフェイズの時だけだったよな。つまりメインフェイズならダメージを与えられるという事だな?」

「まさかこのターンで決めるつもりなのか!？」

「まず1枚目! 俺は禁じられた聖杯を発動! 大天使クリスティアの攻撃力を400上げ、効果を無効にする!」

大天使クリスティア

8

ATK2800 3200

「そして2枚目! 俺は二重召喚を発動! このターン、俺はもう1度通常召喚を行える!」

「まさか本当に逆転するつもりか!？」

「3枚目！俺はジャンク・シンクロンを召喚する！」

ジャンク・シンクロン

3

ATK1300

「クリスティアの効果が無効化されている為、レベル2のモンスターを蘇生できるか……」

「俺は墓地からザ・カリキュレーターを特殊召喚する！」

ザ・カリキュレーター

2

DEF0

「そして4枚目！ザ・カリキュレーターの特異召喚により、俺は手札から速攻魔法、地獄の暴走召喚を発動！ザ・カリキュレーターを2体デッキ・手札・墓地から特殊召喚する！現れよ!!」

ザ・カリキュレーター×2

2

ATK0

「この効果であなたも自分のモンスターを特殊召喚できますよ。」

「いや、私はそれぞれ1枚しかない。」

「じゃあ、続けるぜ。 ザ・カリキュレーターの攻撃力は自分フィールド上の合計のモンスターのレベルの300倍となる。 デジタル・チャージ！」

鉄也のフィールド

ジャンク・シンクロン	3
メタモルポット	2
ザ・カリキュレーター	2
ザ・カリキュレーター	2
ザ・カリキュレーター	2

合計レベル 11

『ビビ~~~~~!!』

ザ・カリキュレーター x2

2

ATK 3300

「もつとも、ジャンク・シンクロンの効果で特殊召喚された1体目のカリキュレーターは効果が無効になっているがな。」

「凄い．．．一気に攻撃力3000越えが2体も．．．」

「しかも上級モンスターじゃなくて下級モンスターの結束での力か．．．．．」

「でも、まだ私には十分ライフがある！」

「まだまだ！ 俺のモンスター達の結束はその程度じゃないぜ！
今からジャンク・シンクロンで最も強力なコンボを見せてやるぜ！」

「最も強力なコンボ！？」

「それは一体．．．楽しみだな。」

「レベル2、ザ・カリキュレーター（1体目）にレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング！ 集いし星が新たなる力を呼び起こす。 光指す道となれ！」

「その台詞は！！」

2 + 3 = 5

「シンクロ召喚！ 再びいでよ、ジャンク・ウォリアー！！」

『ハアアア．．．．．トアアア!!』

ジャンク・ウォリアー

5

ATK2300

「ジャンク・ウォリアー!? そのモンスターじゃ私のモンスターに勝てはしない筈じゃ．．．．．」

「（零さんの言うとおりだ．．．でもジャンク・ウォリアーを召喚した事には何か意味がある筈だ．．．．．まさか!!） そうか、その為のカリキュレーターか!？」

「そうだ! ジャンク・ウォリアーはシンクロ召喚に成功した時、自分フィールド上に表側表示で存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力分アップする!!」

「．．．．．という事は!!」

鉄也のフィールド

メタモルポット 2 ATK700

ザ・カリキュレーター 2 ATK3300

ザ・カリキュレーター 2 ATK3300

「アルティメット・パワー・オブ・フェローズ!!」

『ハアアア．．．．．』

ジャンク・ウォリアーは白いオーラを纏った。

ジャンク・ウォリアー

5

ATK 2300 9600

『トアアアア！！』

「攻撃力9600！！」

「凄え．．．．．あの遊星でもそんな数値は出なかったぞ！」

「もう、オネストの心配はねえ！ バトルだ！ ザ・カリキュレーターでマスター・ヒュペリオンを攻撃！ デジタル・チャージ・ビーム！！」

『ビビビビ〜』！

ザ・カリキュレーターはマスター・ヒュペリオンにビームを放った。

零 LP 3100 2500

「これで決まりだ！ ジャンク・ウォリアーで大天使クリスティアを攻撃！ アルティメット・ブレイカー！！」

『トアアアアアー！！』

ジャンク・ウォリアーの膨大なエネルギーを込めた拳がクリスティアに直撃した。

チュドドーン！

攻撃力があまりにも高い為、大爆発が起こった。

「うわあああ！」

零 LP 2500 0

鉄也 WINNER

「よっしゃー！！！」

少し危なかったが勝ったぜ！

「いいデュエルだったぜ、零さん。」

「ああ、結構楽しかったよ、そんなプレイングもあったんだな。」

「いや、それ程でも。最終的に俺が勝てたのは運が良かったから

な。」

「それでもいいデュエルだったよ。」

俺は澪さんと握手した。

うわぁ・・・・・・・・澪さんと握手だ／／・・・・・・・・秋山じゃないけど。

「（み、澪さんと握手している・・・・・・・・）」

「は・・・・・・・・（ゾクッ！）」

な、何だ・・・・・・・・遊騎から殺気が感じるぞ・・・・・・・・

「・・・・・・・・」

・・・・・・・・なるほど、そういう事か。

一瞬の間考えていた俺は何故殺気がただよるのか気づいた。
俺は手を離れた。

「凄いな、お前は。今度は俺ともデュエルしようぜ、鉄也。」

あ、殺気が消えた。

「ああ遊騎、今度は俺の友達も一緒に会わせたいな。」

「じゃあまた会おうぜ。」

「今度は負けないからな！」

そう言つて2人は光の粒となつて消えた。

「……………いい特訓になつたな。」

良い人たちじゃねえか。

また会おうぜ、遊騎、澪さん。

S i d e E n d

S i d e / 澪

「はっ！」

「ん？」

目を開けるとアカデミアに行く道に置いてあるベンチに座つていた。

「「うわっ／／！！！」」

気がつけば遊騎君と一緒に座つていた……………／／／

「デュエルは楽しかったかい？」

「あんたは……………」

前には別の次元に行く前に出会つた遊斗さんがいた。

「楽しかったです、鉄也君は結構凄かったですよ。 負けたけど楽しかったです。」

「そうか、だとすると彼も楽しめたようだな。 また君達を誘っても良いかな？」

「構わないさ、今度は俺達の友達も連れて行きたいぜ。」

「そうだな、結も喜ぶし。」

「そうか。 じゃあ、今度もよろしくね。」

そう言つて彼は歩き始めた。

その時．．．．．

「あ、ついでに聞くが君達は恋人同士かい？」

聞いてきた．．．．．

「ち、違う．．．／／！！」

「私達は恋人でも何でもない／／！！」

「はははは．．．．．（成る程、両思いか。） そうかそうか。 じゃあ、またね。」

シュッ！！

遊斗さんは笑った後、一瞬で消えた。

「はあ．．．はあ．．．．．／／／」

「はあああ．．．．．／／／」

びつくりした．．．．．あ。

「遊騎君、遅刻しちゃうよ！」

「あ、やべえ！！」

こうして私達は急いでアカデミアへ走った。

The End

今回のオリジナルカード

天空の領域

フィールド魔法

このカードのコントローラーから見て相手ターンのスタンバイフェイズ時、手札の天使族モンスターを見せてもよい。

そうした場合、このターン、コントローラーへのダメージは0になる。

また、このカードが破壊、または除外される時、このカードのコントローラーは手札の天使族モンスター1枚を捨てることで、このカードは破壊、または除外されない。

小天使イル

2

光属性／天使族

ATK300/DEF300

このカードはフィールド上に「天空の領域」が存在する場合、チューナーになる。

このカードが召喚、特殊召喚に成功した時、お互いは手札を1枚ランダムに捨てる。

このカードをシンクロ素材にする場合、「大天使」と名の付いたシンクロモンスターの素材にしか使えない。

大天使イルフェイテッド

7

光属性／天使族・シンクロモンスター

「小天使」と名の付いたモンスター＋チューナー以外の天使族モンスター

ATK2200/DEF800

このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分フィールド上に「天空の領域」が存在する場合、フィールド上のこのカードと「天空の領域」以外のカードを全て破壊する。

このカードのシンクロ召喚と効果の発動に対してカウンター罫を発動する事はできない。

小天使クール

1

光属性／天使族

ATK800/DEF600

自分フィールド上に存在するこのカードをリリースする事で手札から大天使クリスティアを特殊召喚することが出来る。

コラボ特別編 大天使の結束（後書き）

今回のゲストキャラ

かいじょつゆつき
海条遊騎

「遊戯王5D's Another Story」アカデミアの伝説」の主人公。

デュエルアカデミア高校1年生。

小説のオリジナルカード、L・A（りきつど・あーみー）を使うデュエリストであり、かつては全く知られていないL・Aを使っていた為人々に相手されずに孤独でいたがあるきっかけでデュエルへの情熱を取り戻し、デュエルアカデミアに入学する事になる。父親は軍人であり、死別している。ちなみに極度のけいおん！好きであり、けいおん！に関する事となると異常になる。小説のヒロイン、竹内澪に好意を抱いている。

たけうちみお
竹内澪

「遊戯王5D's Another Story」アカデミアの伝説」のヒロイン。

遊騎と同じデュエルアカデミア高校1年生。

けいおん！の秋山澪に似ており、性格も同じく怖がりで恥ずかしがり屋。

使用デッキは天空の領域が主軸であり、「大天使」「小天使」のカードを使っている。

料理の腕は「壊滅的」らしく、チョコレートに青酸カリを入れようとしたこともあった。

主人公の遊騎に恋心を抱いているが恥ずかしがり屋であるため打ち明ける事が全く無い。

「遊戯王5D's Another Story」アカデミアの伝説」
は通りすがりのデュエリストさんの小説です。

面白い小説なので良かったら読んでみてください。

通りすがりのデュエリストさん、コラボレーションのご協力ありがとうございました。

デュエルの展開と遷のキャラが上手く出せていなかったらすいません。

第37話 鉄也の過去 サテライトの人斬り

Side / 鉄也

「じゃあ、僕の過去を教えますね。」

「どうぞ……ってあれ？」

何故か黒い世界にちゃぶ台があった。

少年……すなわちこの世界の村上鉄也はお茶を入れていた。

「どうしました？」

「いつの間にちゃぶ台あったんだ？ しかも何故か俺たちは座布団に座ってるし。」

「あ、それならコラボに入った時に用意しました。お茶は熱いうちにどうぞ。」

「そうか……とりあえず、初めてくれ。」

「はい。それは僕がサテライトで住んでいた時でした……」

Side End

Side / 鉄也 (5D'sの世界)

「ツイン・ブレイカーでゴブリン突撃部隊を攻撃！」

「くっ……」

「ツイン・ブレイカーは守備表示モンスターを攻撃した時、貫通ダメージを与える！」

不良 LP 2500 900

「ツイン・ブレイカーは守備表示モンスターを攻撃した場合、もう1度攻撃することが出来る！ダイレクトアタック！！」

「うわああああ！！」

不良 LP 900 0

「さあ、僕の勝ちだ。おとなしくここから退いてもらうぞ。弱者達からカードを奪う奴等なんて二度と見たくない。」 弱

「ひiiiiiiii！！」

不良は逃げて行った。

「ふう……」

僕の名は村上 鉄也。

年齢15歳。

ただのサテライト育ちの少年だ。

「あ、ありがとうございます。」

「いや、これ位何ともないです。」

サテライトは毎日こうだ……シティの者達からは『クズ』として見下される。

そして住民達が争い合い、カードを奪い合う。

太陽の光も滅多に浴びえず四六時中闇の中だ。

そしてこの街から抜け出そうとすればセキュリティに閉じ込められる。

まさに絶望の街だ。

「父さん……どうしたら良いんですか？」

僕はデッキケースから『ギガンテック・ファイター』のカードを眺めた。

僕は生まれつき父さんとサテライトで暮らしていた。

母さんは……僕が赤ん坊のころに亡くなったらしい。

僕が13ぐらいになった時、父さんは彼の大切なカード、『ギガンテック・ファイター』を僕に託して病死した。

それ以来父さんの形見、『ギガンテック・ファイター』はいつも僕を支えてくれた。

でも、もしかしたら僕がその絶望に耐えられるのも時間の問題か

もしれない。

「やあ、鉄也。」

「！！ 遊斗君。」

黒いキャップ帽を被った白い長髪の青年が僕に話しかけてきた。
彼の名は藍沢遊斗……最近知り合ったミステリアスな男である。

「また悩み事かい、鉄也？」

「まあね……」

「確かに君のいうことに一理はあるね。 ここで暮らし続けるのは
まさに絶望だ。」

「はあ……」

最近、弱い者達はカードを奪い出そうとする。
僕と遊斗君はカードを奪う者達を何とか追い払ってカードを取り
返している。

「そういえば鉄也、人斬りの噂を知っているかい？」

「もしかして『サテライトの人斬り』か？聞いたことはあるけど。」

人斬り……最近サテライトである噂だ。

夜に彼と会う者は強制的にデュエルを申し込まれる。

そして人斬りに敗れた者はデュエルディスクを破損される……と
いう噂だ。

破損されたデュエルディスクは刀で斬られていたらしい。
それが理由で「サテライトの人斬り」と呼ばれている。

「会ってみないかい、その人斬りを？」

「……………」

この街は絶望的だ。

しかしその人斬りはやり方があれだとはいえサテライト同士の争いを抑えている。

案外良い者かもしれない。

「僕は行くよ。」

そうだ、一度会ってみよう。

もう夜になっている。

噂によるとこの場所で正しい筈だ。

僕は遊斗君と待っておくことにした。

「そろそろ来るかな……」

一体どんな奴だろう……

「おいお前等…人の縄張りで何してんだ？」

「！！！」

「どうやら君かい、『サテライトの人斬り』というの？」

そこには覆面の男がいた。

彼は背中に刀を背負っていた。

「いかにも俺だ。何だ、お前もデュエルの兆戦をしに来たのか？」

「まあな。」

「いいだろう、俺に勝てると思うなよ。」

そう言っつて覆面の男は腕に付けてあるデュエルディスクを起動した。

「僕だつて負ける覚悟で来たわけじゃない。」

そう言っつて僕もデュエルディスクを起動した。

「デュエル！！！」

鉄也 LP4000

VS

人斬り LP4000

「僕のターン！僕はモンスターをセットする。カードを2枚伏せてターンエンドだ。」

鉄也 / LP4000

手札3枚

モンスター / 裏側守備表示モンスター1体

魔法・罠 / リバース×2

「なら、俺のターン！俺は手札から増援を発動！」

増援……彼も戦士族を使っているのか……

「俺はデッキから六武衆 イロウを手札に加える！そしてそのまま召喚するぜ！」

黒いコートの上に一部だけ鎧を着て刀を持った男性が現れる。

六武衆 イロウ

4

ATK1700

六武衆……聞いた事があるな。

確か日本の歴史で有名な者達をベースとしたカード群だったな。

「俺は六武衆 イロウでそのセットされているモンスターを攻撃だ
！」

イロウは僕の裏側表示のカードへ向かって来た……

『はあああ！』

イロウは刀を振り下ろしたが、僕のモンスターを切る事は出来な
かった。

「何？」

「僕のモンスターはビッグ・シールド・ガードナーだ。」

ビッグ・シールド・ガードナー

4

DEF 2600

人斬り LP 4000 3100

「ち、じゃあカードを2枚セットしてターンエンドだ。」

人斬り / LP 3100

手札3枚

モンスター／六武衆 イロウ（攻）

魔法・罾／リバーズ×2

「僕のターン。僕は手札断札を発動。お互いカードを2枚墓地へ送り、カードを2枚ドローする。」

「ふ、俺の墓地を肥やさせる事に気をつけるんだな。」

六武衆は墓地にいる事も戦力なのか。

「……僕は闇魔界の戦士 ダークソードを召喚する。」

闇魔界の戦士 ダークソード

4

ATK1800

「そして僕はビッグ・シールド・ガードナーを守備表示に変更。

バトル！ 闇魔界の戦士 ダークソードで六武衆 イロウを攻撃！」

「させるかよ！ 俺は次元幽閉を発動！ ダークソードを除外だ！」

ダーク・ブレードの前に次元の裂け目が現れた。

「それはさせない。僕は魔宮の賄賂を発動する。次元幽閉の効果は無効にし、破壊する！」

「何!？」

ダークソードを吸い込もうとする次元の裂け目が消えた。

「ち、魔宮の賄賂の効果でカードをドロ―だ。」

「バトル続行! ダークソードで六武衆 イロウを攻撃!」

ダーク・ブレードの剣がイロウを切り裂いた。

人斬り LP 3100 3000

「カードを1枚セットしてターンエンドだ!」

鉄也 / LP 4000

手札1枚

モンスター / 闇魔界の戦士 ダークソード（攻）、ビッグ・シールド・ガードナー（守）

魔法・罠 / リバース × 2

「中々やるな……俺のターン! 俺は六武衆 ヤイチを召喚する!」

青い柄の鎧を着た侍が現れる。

六武衆 ヤイチ

3

ATK1300

「そして俺はリバーズカードオープン！ 六武衆推参！ このカードは墓地の六武衆を特殊召喚できる！ 俺は墓地の六武衆 ザンジを特殊召喚する！」

今度は金色がかった鎧を着て薙刀を持った武士が現れる。

六武衆 ザンジ

4

ATK1800

「六武衆 ヤイチの効果を発動！ 同名モンスター以外の『六武衆』と名の付いたモンスターが存在する時、1ターンに1度、攻撃する代わりにセットされている魔法・罠カードを破壊できる。俺はその伏せカードを破壊だ！」

「僕はその効果にチェインしてライフを1000払い、スキルドレインを発動。このカードが存在する限り効果モンスターの効果は無効となる！」

「何！？」

鉄也 LP4000 3000

「ち、だったら俺は装備魔法、漆黒の名馬を発動！ 六武衆 ザンジに装備する！ このカードを装備したモンスターは攻撃力が200ポイントアップする！」

六武衆 ザンジ

4

ATK1800 2000

「バトルだ！ 六武衆 ザンジで閻魔界の戦士 ダークソードを攻撃だ！」

ザンジの薙刀がダークソードを切り裂いた。

鉄也 LP3000 2800

「俺はカードをセットし、ターンエンドだ！ このエンドフェイズ、六武衆推参！ によって特殊召喚された六武衆 ザンジは破壊される！ だが漆黒の名馬を装備したモンスターが破壊される時、変わりにこのカードを破壊できる！」

六武衆 ザンジ

4

ATK1800

人斬り／LP3000

手札2枚

モンスター／六武衆 ヤイチ（攻）、六武衆 ザンジ（攻）

魔法・罨／リバーズ×1

「僕のターン。僕は闇の量産工場を発動。墓地から通常モンスターを2枚手札に加えることが出来る。僕が手札に加えるのは闇魔界の戦士 ダークソードとアックス・レイダーだ！」

「手札断札の効果で墓地に送っていたか……」

「僕はリバーズカード、凡人の施しを発動する！ カードを2枚ドロし、手札のアックス・レイダーを除外する！」

「つまり……手札が4枚まで増えたという事か！」

さて、どう動こうか……

「僕はもう1度闇魔界の戦士 ダークソードを召喚する！」

闇魔界の戦士 ダークソード

4

ATK1800

「僕は巨大化を発動！ 闇魔界の戦士 ダークソードに装備する！僕のライフは君のより低いいため、ダークソードの攻撃力は倍とな

る！」

『ハアアア……』

ダークソードは大きくなり始めた。

闇魔界の戦士　ダークソード

4

ATK1800　3600

「そして僕はダークソードで六武衆　ヤイチを攻撃！」

ダークソードは巨大な剣をヤイチに振り下ろす……

「だったら俺は六武衆　ヤイチをリリースし、六武衆の理を発動！
墓地から『六武衆』と名の付いたモンスターを特殊召喚する！」

ダークソードが狙ってたヤイチは消えた。

「特殊召喚するモンスターはコストでリリースした六武衆も可能だ
！」

六武衆　ヤイチ

3

DEF800

「だったら相手フィールド上のモンスターが変わった為、攻撃対象を六武衆 ザンジに変更だ！」

『トアアア！』

ダークソードの巨大な剣がザンジを切り裂いた。

「くっ……」

人斬り LP 3000 1200

「だが巨大化を装備したダークソードはライフが上回ってしまった為、攻撃力が半減するぜ。」

ダークソードは縮み始めた……

闇魔界の戦士 ダークソード

4

ATK 3600 900

「わかっている。僕はダークソードをリリースし、馬の骨の対価を発動！ このカードは通常モンスターをリリースする事でカードを2枚ドローする！」

「何！？ 巨大化のデメリットを打ち消してカードをドローだと！」

「僕はカードを2枚セットしてターンエンドだ！」

鉄也 / LP 2800

手札1枚

モンスター / ビッグ・シールド・ガードナー (守)

魔法・罠 / スキルドレイン、リバーズ×2

「俺のターン！ (なるほど…こいつのデッキはスキルドレインで相手の動きを封じつつ、自分はスキルドレインが存在しても都合がいいモンスターで攻める戦略か。) 俺は永続魔法、六武衆の結束を発動！『六武衆』と名のついたモンスターが召喚・特殊召喚される度に、このカードに武士道カウンターを1個乗せる！ 俺は六武衆 ニサシを召喚する！」

緑色の鎧を纏った二刀流の筋肉質の侍が現れる。

六武衆 ニサシ

4

ATK 1400

六武衆の結束：武士道カウンター 0 1

「さらにこのモンスターは自分フィールドに六武衆が存在する時、手札から特殊召喚できる！ 現れよ、六武衆の師範！！」

人斬りのフィールドに眼帯をつけた老人が現れる。

六武衆の師範

5

ATK2100

六武衆の結束：武士道カウンター1 2

「俺は六武衆の結束を墓地へ送り効果を発動！ このカードに乗った武士道カウンターの数だけカードをドロースる！」

「これで手札の消費を補ったか……」

「更に俺は手札から地砕きを発動！ 守備力が1番高い相手モンスターを破壊する！ 破壊対象は勿論ビッグ・シールド・ガードナーだ！」

ビッグ・シールド・ガードナーの足元が砕け、ビッグ・シールド・ガードナーは落ちた。

「くっ……」

「俺は六武衆 ヤイチでダイレクトアタック！」

「僕はドレインシールドを発動！ 六武衆 ヤイチの攻撃を無効にし、その攻撃力分ライフを回復する！」

僕はバリアを張り、ヤイチの矢を吸収した。

鉄也 LP 2800 4100

「だったら俺は六武衆 ニサシでダイレクトアタック！」

「うわあああ！」

鉄也 LP 4100 2700

「そして六武衆の師範でダイレクトアタックだ！」

「この瞬間、僕はガード・ブロックを発動！ 自分が受ける戦闘ダメージを0にし、カードをドローする！」

僕の前にバリアが現れ、師範の剣激を受け止めた。

「防いだか……俺はカードをセットし、ターンエンドだ！」

人斬り／LP 1200

手札0枚

モンスター／六武衆の師範（攻）、六武衆 ニサシ（攻）、六武

衆 ヤイチ（攻）

魔法・罠／リバース×1

「僕のターン！（来た……）僕は墓地からモンスター効果を発動する！」

「墓地からだと！？」

「このモンスターはスタンバイフェイズで墓地に戦士族モンスターのみに存在し、自分フィールドにモンスターが存在しない場合のみ墓地から特殊召喚することが出来る。現れよ、不死武士！！」

……
僕のフィールドに体中に何本もの矢が刺さった落ち武者が現れる

不死武士

3

ATK1200

「お前も俺と似たようなカードを持ってんじゃねえか……（手札断札で墓地へ送ったカードのもう1枚か……）」

「まあ、このカードだけだね。さらにこのモンスターは墓地からモンスターが特殊召喚した時、手札から特殊召喚することが出来る！現れよ、ドッペル・ウォリアー……」

僕の場合に黒い軍隊服を着た兵士が現れる。

ドッペル・ウォリアー

2

ATK1000

「そして僕はチューナーモンスター、チューン・ウォリアーを召喚する！」

今度は赤いロボットの戦士が現れた。

チューン・ウォリアー

3

ATK1600

「チューナーモンスターだと!? まさか……」

「そうだ。レベル2、ドッペル・ウォリアーとレベル3、不死武士にレベル3、チューン・ウォリアーをチューニング! 集いし兵の魂よ…不屈の戦士を呼び覚まし、己の闘魂を拳に今、大地を砕け!」

2 +

3 +

3 //

8

「シンクロ召喚! 唸れ我が闘志、ギガンテック・ファイター!!」

『ハアアアア……トアアア!!』

僕のフィールドに白銀の巨人が現れる……

ギガンテック・ファイター

8

ATK2800

「さらに僕はスキルドレインを墓地へ送り、マジック・プランターを発動。カードを2枚ドロウする。」

「これでモンスター効果も有効となったか……」

「ギガンテック・ファイターは自分・相手の墓地の戦士族モンスター1体につき攻撃力が100ポイントアップする！」

鉄也の墓地

闇魔界の戦士 ダークソード

ビッグ・シールド・ガードナー

ドッペル・ウォリアー

不死武士

チューン・ウォリアー

人斬りの墓地

六武衆 イロウ

六武衆 ザンジ

六武衆 ヤリザ

「墓地のモンスターは合計9体！ よって攻撃力が900ポイントアップする！」

「くっ……」

ギガンテック・ファイター

8

ATK2800 3600

手札には我が身を盾にがある……これなら万が一ミラーフォースを伏せてあつたら守れる。

「ギガンテック・ファイターで六武衆 ヤイチを攻撃だ！ コンバット・ブレイカー！！」

「俺はこの瞬間、和睦の使者を発動！ このターン、自分のモンスターは戦闘によって破壊されず戦闘ダメージも0となる！」

「何！？」

ヤイチの周りにバリアが現れ、ギガンテック・ファイターの攻撃を防いだ。

戦闘から守るカードだったか……

「……僕はカードを2枚セットし、ターンエンドだ。」

鉄也 / LP 2700

手札 0枚

モンスター / ギガンテック・ファイター

魔法・罠 / リバーズ × 2

「俺のターン！ 残念だがスキルドレインを消してしまったのはミスだったな。」

「えっ！？」

「スキルドレインがまだあったら勝っていたかもしれないという事なんだよ！ 俺は六武衆の露払いを守備表示で召喚する！」

尼を来た和風の女性が現れた。

六武衆の露払い

3

DEF 1000

「六武衆 ヤイチの効果を発動！ 1ターンに1度だけこのモンスターは自分フィールド上に同名モンスター以外の『六武衆』と名の付いたモンスターが存在する時、フィールド上のセットされている魔法・罠カードを破壊できる！ 俺が破壊するカードはその伏せカードだ！」

『はっ！！』

ヤイチは僕の伏せカードへ目掛けて矢を放った。

「伏せカードは我が身を盾にだったか。今度は六武衆の露払いの効果を発動！ 自分フィールド上に存在する六武衆をリリースし、フィールド上のモンスターを1体破壊する！ 俺は六武衆 ヤイチをリリースし、ギガンテック・ファイターを破壊する！」

ヤイチの姿が消え、露払いは突然動き出した。

『ぐあああ！』

露払いは背後からギガンテック・ファイターを刺した。

「ギガンテック・ファイター！！」

「これでがら空きだな。俺は六武衆 ニサシでダイレクトアタック！」

「俺はこの瞬間、聖なるバリア ミラーフォース を発動！ 攻撃表示のモンスターを全て破壊する！」

ニサシの前にバリアが現れた。
これで……

「何！？」

どういう事だ……ニサシの前に露払いが立っていてニサシの身代

わりになっている……

「残念だな。これが六武衆が共有する効果だ。自身が破壊される場合、代わりに他の『六武衆』を墓地に送ることが出来る。」

「そんな効果が……」

「さて、ミラーフォースで破壊された六武衆の師範の効果を発動。このモンスターがカードの効果によって破壊されて墓地へ送られた時、墓地から六武衆と名の付いたモンスターを手札に加える。

俺は墓地から六武衆 ヤリザを手札に加える。そして攻撃続行！
六武衆 ニサシでダイレクトアタック！」

「うわあああ！！」

鉄也 LP 2100 700

「あともう1体モンスターがいれば勝ってたのにな…仕方ないか。俺はこれでターン終了だ。」

人斬り / LP 1200

手札 0 枚

モンスター / 六武衆 ニサシ（攻）

魔法・罠 / なし

「僕のターン！」

「おいお前…」

「？」

「中々やるじゃねえか。この俺と六武衆を相手にここまでやって
いられるとはな。俺をここまで押してきた奴はお前が始めてだぜ。」

「そうですか……あなたも中々ですよ。」

何だろう……この人は多少荒っぽい人だが、人斬りにしてはそんなに悪い人だとは思えない。

デュエルで実感してそう思った……

「あの……僕は村上鉄也といいます。あなたの名前は何ですか？」

「俺か？ いいだろう、特別に教えてやる。」

そう言いながら人斬りは覆面を外した。

覆面の下顔はバサバサした金髪で耳にピアスが付いていた。

「俺の名は天将^{てんじやう} シエン、この俺こそ『サテライトの人斬り』だ。」

「天将シエン……」

「何であなたは人斬りをやっているんですか？」

「ふん、簡単な理由だ…俺はサテライトを制覇するんだよ。」

「サテライトを制覇？」

「ああ。 お前らも気付いていないのか？ この街はすでに絶望的だ。 誰かが治めなければこの街はいつまでもこのままだ。」

「それは……」

「僕たちも気付いた事だ……」

「だから俺は勝つことにした。 勝って勝って勝ちまくれば権力と言うものが手に入る！ シティを下克上出来るほどにな。」

「なるほど……デュエルを続けよう。 僕はこのスタンバイフェイズ、不死武士を特殊召喚する！」

不死武士

3

ATK1200

「僕は復讐の女戦士ローズを召喚する！」

黒い服を着た赤いポニーテールの女性が現れた。

復讐の女戦士ローズ

4

ATK1600

「レベル3、不死武士にレベル4、復讐の女戦士ローズをチューニング！ 光り輝き雷の戦士よ！ 己の腕で敵を砕き悪を裁け！」

3 + 4 = 7

「シンクロ召喚！ 轟け、ライトニング・ウォリアー！！」

『トアアア！』

僕のフィールドに白い鎧を身に着けた金髪の戦士が現れる。

ライトニング・ウォリアー

7

ATK 2400

「バトル！ ライトニング・ウォリアーで六武衆 ニサシを攻撃！
ライトニング・パニッシャー！！」

ライトニング・ウォリアーは掌に雷を込め、それを一気にニサシにぶつけた。

「くっ……」

シエン LP 1200 200

これでライフはわずか200……だが僕のライフもわずか700だ……

「ターンエンドだ……」

鉄也／LP700

手札0枚

モンスター／ライトニング・ウォリアー（攻）

魔法・罠／なし

「俺のターン！ ……俺の勝ちだな。」

「！！！」

「俺は戦士の生還を発動！ 墓地から戦士族モンスターカードを手札に加える！ 俺が加えるのは……六武衆の師範だ！」

六武衆の師範……彼の手札にはそのカードとサルベージされたヤリザのみ……

「もしかしてヤリザに効果が！？」

「その通りだ！ 俺は六武衆 ヤリザを召喚だ！」

今度は藍色の鎧を纏って槍を持った武士が現れる。

六武衆 ヤリザ

3

ATK1000

「そして六武衆が存在する為、手札から六武衆の師範を特殊召喚する！」

六武衆の師範

5

ATK2100

「六武衆 ヤリザは同名モンスター以外の『六武衆』と名の付いたモンスターが存在する場合、直接攻撃を行える！」

「うつ…やはりそんな効果があつたか……」

「六武衆 ヤリザでダイレクトアタック！」

ヤリザは僕に槍で襲い掛かり始めた……

「うわぁー!!」

鉄也 LP700 0

（ちなみに鉄也はシンクロ召喚せずに復讐の女戦士ローズで二サシで攻撃して不死武士で直接攻撃を行っていたら勝っていました。）

「うつ……………」

負けた…どうやら僕のデュエルディスクを壊す気だな。

「フツ…………俺は数々のデュエリストを相手にしてきたがこの六武衆を相手にそんなデッキで立ち向かう相手は初めてだ。」

「そうか……………」

「なあお前…………俺と手を組まねえか？」

「……………」

「お前の腕…………気に入ったぜ。俺と組めよ。サテライトを制覇しようぜ。」

「鉄也…君はどうするんだ？」

「……………」

確かにサテライトを制覇すれば…シティからの差別を終わらせる為の布石になる。

「わかった、僕も仲間になろう。」

「こうなりゃ話が早い。」

「ちょっと待つて。それなら僕も入っていいかな？」

「ん？」

「遊斗君。」

「お前か？ おめえ、強いのか？」

「僕は結構強いよ、あまりデュエルはしないけどね。」

「（こいつも只者ではないな……）いいだろう。じゃあ早速結成だ……『チーム・天下』をな……！」

「ああ。」

「面白そうだね。」

「じゃあやろうぜお前達……！」

「「おおお……！！」」

こうして僕たち3人は「チーム・天下」となった

Side End

T
O

B
E

C
O
n
t
i
n
u
e
d
.....

第38話 遊戯王では大抵の過去話が黒歴史であるのがお約束

Side / 遊斗

「結衣、君は大丈夫なのか？」

『どうしたの、シュウ？』

「大丈夫なのか……」

『別に大丈夫だけど……』

「そうか……なら良い。結衣、頼むけど明日まで家の中にいてくれ。」

『え？』

「結衣、明日まで外出るな。あと、何か危ない事が起きたらボクが今教える番号に連絡しろ。」

『……どうしたの、いきなり？』

「なら良い……結衣、君には色々教えなければならない。明日になったら全て話す。」

『……わかった。』

「（ふう……これなら彼女への危機を避けられそうだ。） 結衣……」

悪いな。」

『え?』

「不動遊星との試合……相当ショックだった。悪かった、何もしてやれなくて。」

『……………』

ピッ!

「じゃあ、いつてくるね。頼んだよ、遊斗くん。」

「わかりました、では行つてらっしゃい。」

彼には迎えに行く人がいるらしく、僕が鉄也を見張っておく事になった。

そして結衣という子に何か連絡があったら彼女の場所に駆けつけておく事になった。

S i d e E n d

S i d e / 鉄也

「何てこつた……………orz」

「あの…………大丈夫ですか?」

「いや、何でもない。とりあえず続けてくれ。」

もう1人の俺……もう1人の村上鉄也の話を聞いていると何だかチーム・サティスファクションの話と似ている……

この世界の俺の話を聞いていると大体何が起こるかわかって来た……これは絶対黒歴史フラグだ。

「じゃあ、続けますね……」

「ああ……」

S i d e E n d

S i d e / 鉄也 (5 D , s)

今のサテライトは最近、デュエルギャング同士の戦いが広まっている。

1つの団体が他の団体を倒してその陣地を制圧する……そういうルールのゲームとなった。

僕達はシエンの提案として天下を治めるよう、『チーム・天下』となった。

トレードマークは……一応、僕と遊斗君はシエンから日本刀を1本ずつもらった。

一体何処で手に入れたんだろう……
あまり使いたくないけど。

「チーム・ビースト!! このエリアは我々チーム・天下の物となる!!」

「そうはいくか!! お前達やれ!!」

「ははあ!!」

「俺達チームの初デュエルだ…特別に部下にリーダーを譲るぜ。」

僕達の初めてのデュエル……最初の相手はチーム・ビーストだった。

相手チームはトレードマークとして全員毛皮のジャケットを着ている。

「じゃあ僕は遠慮しておくよ、あまり目立つのは趣味じゃないんだよね。鉄也、君がやって良いよ。」

「………わかった。」

「じゃあ行くぜ!」

「ああ。」

「『デュエル!!』」

シエン LP4000

VS

チーム・ビースト一員A LP4000

遊斗 LP4000

VS

チーム・ビースト一員B LP4000

「じゃあ僕が相手だ。」

「ふん、愚か者が。我々チーム・ビーストを相手に勝てると思うのか？」

「僕達は態々負ける為に来た訳ではない……」

「フン、身の程知らずが。」

「デュエル!!」

鉄也 LP4000

VS

チーム・ビーストリーダー LP4000

「僕のターン！僕はモンスターをセットする！カードを1枚セツトし、ターンエンドだ！」

鉄也 / LP4000

手札4枚

モンスター / 裏側守備表示モンスター1体

魔法・罾／リバーズ×1

「俺様のターン！俺は神獣王バルバロスを召喚する！神獣王バルバロスはレベル8だが、リリースなしで召喚することが出来る！この方法で召喚された場合、攻撃力は1900となる！」

神獣王バルバロス

8

ATK1900

神獣王バルバロス……これはちょっとしたミラーマッチになりそうだな。

「俺は神獣王バルバロスに装備魔法、愚者の斧を発動！装備モンスターは攻撃力が1000ポイントアップし、効果は無効となる！」

神獣王バルバロス

8

ATK1900 3000 4000

「神獣王バルバロスでその裏側表示のモンスターを攻撃！」

バルバロスの槍がセットされたモンスターに突き刺さった。

不死武士

3

DEF 600

「俺はカードをセットし、ターンエンドだ!」

「このエンドフェイズ、僕は砂塵の大竜巻を発動! そのセットされたカードを破壊する!」

「何!? スキルドレインが!」

チーム・ビーストリーダー/LP 4000

手札 3枚

モンスター/神獣王バルバロス(攻)

魔法・罠/愚者の斧(神獣王バルバロスへ装備)

「僕のターン! このスタンバイフェイズ、墓地から不死武士の効果を発動! 自分フィールド上にモンスターが存在せず、自分の墓地に戦士族モンスターの場合、特殊召喚する!」

不死武士

3

ATK 1200

「僕は不死武士をリリースし、光帝クライスをアドバンス召喚する

！
」

光帝クライス

6

ATK2400

「光帝クライスの効果を発動！ このモンスターがアドバンス召喚に成功した時、フィールド上のカードを2枚まで破壊する事ができる！ 対象は神獣王バルバロスだ！ フラッシュ・ブレイク！」

「何！？」

クライスは輝きだし、相手の神獣王バルバロスを破壊した。

「安心しろ。破壊されたカードのコントローラーはその枚数分ドローする。そしてクライスは召喚されたターン攻撃する事はできない。カードを2枚セットし、ターンエンドだ。」

鉄也／LP4000

手札2枚

モンスター／光帝クライス（攻）

魔法・罫／リバーズ×2

「俺のターン！ 俺は可変機獣 ガンナードラゴンを召喚だ！」

可変機獣 ガンナードラゴン

7

ATK1400

「さらに魔法カード、禁じられた聖杯を発動！ モンスター1体の効果を無効にし、攻撃力を400ポイントアップさせる！ 選択するカードは可変機獣 ガンナードラゴンだ！」

可変機獣 ガンナードラゴン

7

ATK1400 2800 3200

「可変機獣 ガンナードラゴンで光帝クライスを攻撃だ！」

「僕はその瞬間、和睦の使者を発動！ このターン僕のモンスターは戦闘によって破壊されずダメージは0となる！」

鉄也 LP4000

「ちっ………カードをセットし、ターンエンドだ！」

チーム・ビーストリーダー/LP4000

手札1枚

モンスター/可変機獣 ガンナードラゴン（攻）

魔法・罨ノリバース×1

「僕のターン！　僕はトラパートを召喚する！」

下半身をくつつけた双子の魔法使いみたいなモンスターが現れる。
こう見えても魔法使い族ではなく戦士族だ。

トラパート

2

ATK600

「レベル6、光帝クライスにレベル2、トラパートをチューニング！　集いし兵の魂よ…不屈の戦士を呼び覚まし、己の闘魂を拳に今、大地を砕け！」

6 + 2 〓 8

「シンクロ召喚！　唸れ我が闘志、ギガンテック・ファイター！！」

ギガンテック・ファイター

8

ATK2800

「ギガンテック・ファイターは墓地の戦士族モンスター1体につき
100ポイントアップする……」

鉄也の墓地

不死武士

光帝クライス

トラパート

ギガンテック・ファイター

8

ATK2800 3100

「更に僕は一族の結束を発動！ 墓地のモンスターの種族が1種類
のみの場合、僕のその種族のモンスターの攻撃力は800ポイント
アップする！」

ギガンテック・ファイター

8

ATK3100 3900

「そしてバトル！ ギガンテック・ファイターで可変機獣 ガンナ
ードラゴンを攻撃！」

「この瞬間、俺は聖なるバリア ミラーフォースを発動！ これ
でギガンテック・ファイターは破壊だ！」

ERROR!!

「何!？」

「無駄だ。トラパートをシンクロ素材としたモンスターが攻撃を行う時、相手プレイヤーはダメージ計算終了時まで罨カードを発動出来ない。コンバット・ブレイカー!!」

「くっ……」

チーム・ビーストリダー LP 4000 2900

「更に僕はギガンテック・ファイターをリリースし、バスター・モルドを発動! この効果はギガンテック・ファイターを進化させる!」

「ハアアア……」

ギガンテック・ファイターの体の周りに青いオーラが纏い、ジェット機の翼が生えた鎧となった。

「トアアアア!!」

「現れよ、ギガンテック・ファイターノバスター!!」
スラッシュ

ギガンテック・ファイターノバスター

10

ATK 3300 4100

「バスター・モードだと!？」

「バスター・モード……それはシンクロモンスターの進化だ!」

「シンクロモンスターの進化だと!？」

「まだ僕のバトルフェイズは終了していない! ギガンテック・ファイター/バスターでダイレクトアタック!」

ギガンテック・ファイターはジェット噴射で飛行し、相手プレイヤーへ突撃した。

「ミラーフォースと解つてて攻撃してくる奴がいるか!? 聖なるバリア ミラーフォース を発動だ!」

バスター・モードとなったギガンテック・ファイターはミラーフォースがあるにも関わらず突撃した。
そして相手の周りにバリアが現れた。

「これで破壊だ……」

『トアアア!』

ギガンテック・ファイターはバリアを突き破った。

「な、何!？」

「バスター・モードの効果……それは召喚されたターン、戦闘によつて破壊されず、魔法・罠・効果モンスターの効果を受けない。（O V A 効果）」

「何だと!？」

「これで決まりだ。ギガンテック・ファイターノバスターで直接攻撃! コンバット・ブラスト・ブレイク!!」

『ハアアア!!』

ギガンテック・ファイターノバスターの拳が相手に直撃した。

「うわあああ!!」

チーム・ビーストリダー L P 2 9 0 0 0

鉄也 W I N N E R

「僕の勝ちだ。」

「くっ、だが俺だけ倒せてもチームが勝った事には……」

「おいおい、お前のチーム弱すぎじゃね?」

「こっちも終わったよ、鉄也。」

「あ、2人共お疲れ様。」

「遅すぎるぞ鉄也。俺だったら1ターンキルだぞ。」

「な、何——!?!」

「じゃあ、これでこのエリアは俺達の物だな。わかったらさっさと立ち去れ。」

「ひいひい——!!」

チーム・ビーストは逃げていった。

「ようし、これが俺たちの初勝利だな。祝杯をあげるぜ!」

こうして僕達は勝ち続けた。

「六武衆 ザンジで魂を削る死霊を攻撃! ザンジに攻撃されたモンスターはダメージ計算後に破壊だ!」

「くっ……」

「そして六武衆 ニサシでダイレクトアタック! 六武衆 ニサシは他の六武衆が存在する場合、2回攻撃が可能だ!」

「うわぁ！」

モブ太 L P 2 6 0 0 1 2 0 0 0

シエン W I N N E R

「レベル4、戦士ダイ・グレファアにレベル2、ジュツテ・ナイトをチューニング！ 誇り高き騎士よ！ 純真なる信念と正義のもとに悪を貫け！」

4 + 2 〃 6

「シンクロ召喚！ 駆け抜けろ、大地の騎士ガイアナイト！」

『トアア！』

大地の騎士ガイアナイト

6

A T K 2 6 0 0

「更に僕は装備魔法、竜殺しの剣を発動！ 大地の騎士ガイアナイトに装備する！」

大地の騎士ガイアナイト

6

ATK 2600 3300

「バトル！ 大地の騎士ガイアナイトでお注射天使リリーを攻撃！」

「させるか！ 俺はライフを2000払い、お注射天使リリーの攻撃力を1000ポイントアップさせる！」

モブ吉 LP 3600 1600

「僕は手札を1枚捨て、天罰を発動！ お注射天使リリーの効果を無効にし、破壊する！」

「な、何！？」

「効果は無効となっても支払ったコストは戻らない。 僕の勝ちだ。大地の騎士ガイアナイトでダイレクトアタック！」

モブ吉 LP 1600 0

鉄也 WINNER

「僕はパワー・グラディエーターでマシユマロンを攻撃。」

「させるか！ 俺は次元幽閉で攻撃モンスターを除外だ！」

「残念。僕はトラップ・スタンを発動。このターン罫カードの効果は無効となる。」

「さらにパワー・グラディエーターは守備表示でモンスターを攻撃した場合、攻撃力が守備力を超えていればその数値分相手プレイヤーに戦闘ダメージを与える。」

モブ助 LP2000

遊斗 WINNER

まあ、こうして色々あったな。

僕達は結構強かったな、勝利の数はあのサテライト最強であるチーム・サティスファクションの次に多かったな。

まあチーム・サティスファクションのほうが比較的に多かったからあまり目立っていないけど。

暴れすぎだよ、あのチームは。

噂によると一生抜け出せないサテライトで満足するのが目的らしい。

それをする事が出来る位ならサテライトから出ることが出来るそうなんだけど。

チームの仲？

まあ、良いほうだったな。

僕と遊斗君は元々気が合うほうだったしシエン君も少し荒っぽいけど良い友達だった。

でもある日……

「ねえ、鉄也。君はどうするんだい？ サテライトを抜けたら。」

「まあ、最初は普通にアカデミアに行ってみたいね。父さんはもし僕たちがサテライトで暮らしていなかったらアカデミアに通わせたいと言っていたからね。」

「そうか…… シエンはどうするんだい？」

この時、シエン君はこう言った。

「特に無いな。」

「え？」

「俺の目的……俺はただトップスに下克上するだけだ。」

「それだけなのか？」

「俺は……基本的に頂点に立つ事だけなのが目的だ。」

「……頂点に立つのが夢なんですか？」

「夢ではない。俺の本能だ。」

「本能？」

「俺は下にいるのが嫌いなんだよ。」

善悪など関係無く、ただ勝って頂点に立ちたい本能……

単純な理由だけど僕は彼を尊敬している。

彼は絶望になりかけた僕に立ち上がる為の力を貸してくれた。
それだけで感謝している。

このまま友達でなれたらいいな。

でも本能というのは自分で認めるもののかな？

「デュエル!!」

シエン LP 4000

VS

モブ雄 LP 4000

「俺様のターン！ 俺は巨大ネズミを召喚する！」

巨大ネズミ

4

ATK 1400

「カードを1枚セットし、ターンエンドだ！」

モブ雄 / LP 4000

手札 4 枚

モンスター / 巨大ネズミ (攻)

魔法・罾 / リバース × 1

「フン、ネズミを守る防御が薄いな。俺は二重召喚を発動！このターン俺は通常召喚を2回行える！そして俺は永続魔法、六武衆の結束を発動！俺は六武衆 ヤイチを召喚だ！」

六武衆 ヤイチ

3

ATK 1300

六武衆の結束 / 武士道カウンター 0 1

「更に俺は六武衆の露払いを召喚！」

六武衆の露払い

3

ATK 1600

六武衆の結束 / 武士道カウンター 1 2

「俺は六武衆の結束を墓地へ送り、効果を発動！ 武士道カウンターの数だけカードをドロウするぜ！ そして俺は自分フィールド上に六武衆が存在する為、このモンスターを特殊召喚だ！」

六武衆の師範

5

ATK2100

「俺は六武衆 ヤイチの効果を発動！ セットされているそのカードを破壊だ！」

「何！ 炸裂装甲が！！！」

「俺は六武衆の露払いの効果を発動！ 六武衆 ヤイチをリリースし、巨大ネズミを破壊する！」

「くっ……」

「さらに俺は六武衆が2体存在する為、手札から大將軍 紫炎を特殊召喚する！」

大將軍 紫炎

7

ATK2500

「……………全軍攻撃。」

「うわああああ！」

モブ雄 LP40000

シエン WINNER

「ちっ……………」

「ふっ、これでこのエリアは俺達のものだ。」

「お疲れ、シエン君。」

「流石だね。」

「……………まあな。今日はここまでだ。」

「……………」

「シエン君……………君、最近おかしくないかい？」

「……………何がだ？」

僕達は隠れ家に戻り始めた。

「鉄也…シエンって最近おかしいよね。」

「そうだね。」

チーム・天下が結成して1カ月後、チーム・天下は結構勝ち進んでいた。

まああのチーム・サティスファクション程ではないけどね。

あのチームは結構暴れすぎだ。

殆どのエリアを勝ち取っているね。

そして最近の事だが……遊斗君の言うとおりだ。

僕と遊斗君は最近のシエン君は変わってきたのに気付いていた。

「じゃあ、行ってくるな。」

「何処へ行くんだ？」

「お前らとは関係ない。」

「……………」

彼は最近、単独行動が多かった。

デュエルギャングと戦った後、彼は僕達を帰らせてどっかに行ってしまう。

その時は周りに聞いても彼を見かけた者はいなかったらしい。

「鉄也…… 君は誰かに狙われた事があるかと思ったことがあるかい？」

「？ いや……なかったけど。」

「そうか……なら後をつけてみよう、シエンの後を。」

こうして僕達は彼の後をつける事にした。

……しかしこの夜だった、まさかこんな事がおこるかと思っていた
なかった……

後を付けている度にシエン君は人があまりいない場所に行った。
シエン君は壊れている建物の中へ入った。

「入ろう……」

「うん……」

僕達は建物の中に入った。

「え!？」

「……」

そこにはいた……シエン君が。

「おいおい、お前達……わかってんだぞ、後を付けられていたのを。」

」

「ばれていたか……」

「……何となくな。」

「じゃあ、何故後を付けられていたのかわかるだろう?」

「どうやらお前も知っていたようだな、『奴等』の存在を。」

「奴等!?!」

奴等とはどういう事だ!?

「それは一体どういう……」

「詳しく教えてもらおうか、シエン。君がどういう接触していたか。」

「いいだろう、教えてやる。正し、お前が俺とのデュエルに勝ったんだ!」

「デュエルか……」

「…遊斗君とシエン君が……」

「お前は普段、全力を出さないようだからな。お前の实力を見せてもらおうじゃないか。」

この2人は何かを知っている……

「ちょっと待つてよ！ 全然解らないんだけど…… 第一、何で君は話す気はないんだ……？」

「…いいよ。」

「え？」

「シエン、悪いけど今の君の實力で僕に勝つ事は出来ないよ。」

「だったら見せろよ、貴様の實力を。」

「いいよ。」

「デュエル!!」

遊斗 LP4000

VS

シエン LP4000

「くそ…何なんだそのデッキは……」

遊斗 LP4000

シエン LP700

「悪いけどこのターンで決めるよ。ハイパー・ライブラリアンで君にダイレクトアタックだ。」

「うわあああー!!」

シエン LP7000

遊斗 WINNER

「凄い……」

これが遊斗君の実力……普段、あまり目立たないけどそんなカードを持っていたのか……

「さて、教えてもらおうか。お前は奴等と、何処で『ブラザーフッド』と接触しているのか。」

「ブラザーフッド?」

ブラザーフード…それがシエン君と接触している者なのか……

「フッ…もう、此処にいるぜ。」

「え？」

「何！？」

「どうする、天将シエン？」

急に後ろから声が……

振り返ると黒いフードを被って黒いコートを着た者が3人いた。

「ようし、俺は決めた。お前達の仲間になってやる。」

「そうか……いいだろう。」

「しまった…罠だったか……」

「まさか……こいつ等がブラザーフード……」

遊斗君が焦り始めた……

「ゆ、遊斗君……」

「鉄也、もう此処から逃げるしかない！」

「ど、どうい……」

「じゃあ、早速やれ。」

「はいはい……」

黒コートの1人がもう1人に命令し、そのもう1人がデュルディスクを起動し、カードをセットした。

「現れよ、天刑王ブラック・ハイランダー!!」

「も、モンスター!?!」

鎌を持った大柄の死神のようなモンスターが現れた。

「やれ。」

そのモンスターは僕達に襲い掛かり始めた。

ズシャッ!!

「が……はっ……」

遊斗君は鎌によって胸が斬られた。

「遊斗君!!」

今の光景……ブラック・ハイランダーと呼ばれるモンスターは本当に遊斗君を斬った。

立体映像じゃない……本当に斬った。

嘘だろ! これはソリッド・ヴィジョンじゃないのか?

「これで3つの任務の内、2つ完了だな。でかした、天将シエン。」

」

「ああ……」

「ど、どういう事だ……シエン！」

ブラザーフッドは何でこんな事を……全然理解できない！

「俺たちはこのしばらくの間、この3つの任務を果たすためにサテライトにいてな。1つ目は『ギガンテック・ファイター』のカードを手に入れる事……2つ目は我々組織にとって危険人物である『藍沢遊斗』を排除する事……」

遊斗君の暗殺と僕のカードを……

「そして3つ目は……『天将シエン』を我々ブラザーフッドに雇用する事だ。」

「何だって!？」

何でシエン君がこんな奴らと……

「冗談だろ、シエン君……」

「フン……」

「では、村上鉄也……君は我々と一緒に来てもらおう。」

「ふざけるな!！」

僕は刀を引き抜いた。

「ふっ、来ないと言うのなら結構。我々が欲しいのはお前ではなく《ギガンテック・ファイター》のカードだからな。命が惜しくないのならお前を殺して手に入れるのも問題ない。」

「うっ……」

黒装束の男3人とシエン君…

1人がデュエルモンスターを實現化させたという事は絶対他の2人もできる筈だ…

そして彼自身も刀の達人だ……

こんな状況で戦い勝てるはずがない。
だったらここは逃げるしか……

「遅えよ。」

シエン君は僕の目の前の近くにいた。
そして胸に苦痛が……

「うぐっ……」

気がついたらシエン君の刀が僕の胸に刺さっていた。

「がはっ……」

「おいおい鉄也よ。こういう場合、普通逃げるのが当然だろ？
4人を相手に勝てる筈がないだろ。」

「嘘だろ…シエン君……」

「好きに言ってる。」

シエン君は刀を引き抜いた。

「がはっ！」

「おいおい、少しやりすぎではないか？」

「では、《ギガンテック・ファイター》をもらうとしますか。」

「フッ、好きにしろ。」

「がはっ、ごほっ……冗談だろ……冗談だろ、シエン君！」

僕は胸の痛みを抑えながら叫んだ。

「悪いな……俺は先へ進ませてもらっぜ。その為には俺はお前らを排除しなければならぬようだ。だから死んでもらっぜ。」

「……………」

何故だ……

「ちくしょおおおー！！」

僕はシエン君に向けて刀を振った。

「おおっと。」

シエン君は後ろに退いた。

「今だ!!」

僕は遊斗君を担いで一気に走った。

「しまった!!」

「帝……奴を追え。」

「仕方ありませんね……」

「それにしてもシエン……まさか君が本当に仲間に刀を向けるとはね。」

「良いんだよ、俺は自分の本能に忠実だからな。」

何故こうなった!!

「はあ……はあ……　　うぐっ!!」

駄目だ……こんな傷で怪我人背負って逃げ切れる筈が無い！
最も、こんな状況で何処に逃げればいいんだ！！

「くっ……………！　まずい！」

足音が聞こえる……

血の跡で直ぐ居場所がわかってしまうから仕方が無い……

「どうすれば……」

「鉄也……」

「……　遊斗君！」

僕が担いでいた遊斗君は動き出した。

「無事だったんだ……」

「どうやら僕は不意打ちを喰らって気絶していたようだな。」

「良かった……がはっ！！」

まずい……もう直ぐ来る！

「静かに……　いいか、そのまま動くな。」

「え？」

遊斗君は僕から降りた。

「ちょっと…どうするつもりだ!？」

「やっと見つけましたよ。その傷でここまで逃げるとは大したものですね。」

しまった……とうとう見つかってしまったか！

「おや？ まだ生きていたんですか。　どうやら排除しないといけませんね。　現れよ、神獣王バルバロス!!」

『グオオオオ!!』

「ま、またモンスターが実体化……」

「すまない、鉄也……僕が不注意だったのが原因だ。」

「やれ。」

『グオオオオ!!』

「ぐっ……」

どうしよう……もう、逃げられそうにも無い！

「悪いけどもう、鉄也に触れさせるわけにはいかない。」

そう言って遊斗君は僕の肩に触れた。

バルバロスは僕達に向かって槍を突き出した。

『ヴォオオオオオ！』

「うわああああ！！」

「はあ……はあ……！！」

あれ……確か実体化したモンスターに襲われて……
気が付いたら先ほどいた場所と違う所にいた。

「大丈夫か？　驚かしてすまない。」

「遊斗君！」

「君がモンスターに襲われる前にさっきの場所から離れた所から瞬

間移動した。」

「そうか……ありがとう、遊斗君。」

危なかった、死ぬかと思った……って待てよ！

「遊斗君！ 今、瞬間移動って……」

「ああ。 すまない、移動できる距離にも限りがあるんだ。」

そう言えばブラザーフッドは言っていた……遊斗君を排除するのが任務の1つだと……

「遊斗君……君は一体何者なんだ？ そして僕の《ギガンテック・ファイター》も一体……がはっ！！」

「鉄也……君には傷が……」

「そんなのいい！ どうせ僕は体が長く持たないのはわかっている！ だから教えてくれ、一体何が起きているのか！！」

「……鉄也……」

「はあ……はあ……」

「……すまないな、色々黙ってて……君に色々教えなければならないようだ。」

「……」

「まず1つ言っておく……僕は君を監視する為に送られたんだ。」

「……！……どういう事だ……」

僕を……監視するためだと……

「僕は……この世界の住人ではない。」

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d
……

第39話 過去話の長さはNARUTOぐらいにしましょう。

ONE
PIE

鉄也「おいしいいいい！ もっと真面目なサブタイトルにしろよ！
せっかくのシリアスな状況を壊してるだろうが！」

S i d e / 帝

スウツ…スウウツ……

私の神獣王バルバロスは血の臭いを嗅いでいた。

『ガウウー!!』

どうやら見つけたようですね……

「さて、ネズミ共を追いなさい。」

『ガウウウウ………』

フッフッフ…我々から逃げられると思わないでもらいますよ……

S i d e E n d

S i d e / 鉄也 (5 D ・ s)

「はあ……はあ……はあ……」

「僕は……この世界の住人ではない。」

「ど……どういふ事だ!？」

「言ったとおりそのままだ。簡単に言えば、この世界を含めて様々な別世界が存在している。」

「……………」

「そして僕はね……僕の世界、『管理局』から来たんだ。」

「かんり……きよく……?」

「そうだ。ちなみに魔法少女とは関係ないからね。」

「魔法少女?」

「いや……知らないならそれでいい。」

「は、はあ……」

「管理局……それはそれぞれの世界の安定を保つ為の役割をしている世界なんだ。」

つまり政府みたいなものか……

「そして『ブラザーフッド』……あれは様々な上級ランクのデューリストが集まった組織であり、管理局にとって驚異なる存在なんだ。」

ブラザーフッド……遊斗君を排除しようとし、僕のカードを奪い、そしてシエン君を手に組ませた……

「あの組織は別世界の存在を知っていて、それを利用してこの世界に被害をくわえることが何度かあってね、僕達『管理局』はそれを阻止する為に色々戦っていたという事だ。」

「まさかそんな事が起こっていたなんて……じゃあ、サテライトとシティが分かれたのも『ブラザーフッド』が……」

「いや、それは違うね。あれは殆どこの世界の住人が起こした過ちによって出来た災害だ。悪いけど話を戻させてもらつよ。」

「あ、うん……」

「管理局の上層部は今度は君が狙われることを読んで僕に君を監視するのが命令だったんだ。」

「それって狙いは僕のカード、《ギガンテック・ファイター》の事なんだろう？ 何故父さんの形見を……」

「実はね、君の《ギガンテック・ファイター》は特別なカードなんだ。狙われていたらもうわかってるよね。あのモンスターは特別の力を持った伝説のモンスターなんだ。」

「伝説の力……」

「そして君は選ばれたんだ、そのカードに。」

「えー!? 冗談だろ……僕がそんな特別な存在な訳なんて無いだろ……」

「ところが、そうなんだ。後で君に打ち明けるつもりだったんだけど……君はその組織に立ち向かうべきな存在だったんだ。」

「……………」

「その力は重要なんだ。使い道によって色々変わってしまう可能性がある。その力を物にするのがブラザーフッドの狙いだったんだ。どうせ立ち向かうか物にされるしか君の選択肢は無いんだ。」

「はあ……はあ……だから僕のカードを……」

「ああ、その通りだ。」

「じゃあ、シエン君は……?」

「シエンは……僕にもよくわからない。でも、奴等は僕達が気が付く前にシエンと何かを交渉していたようだ……」

「交渉……………」

僕達に刀を向けてまで仲間入りしたなんて一体どういう事なんだ

……

「はあ…はあ…がはあ！」

また胸の痛みが……

シエン君……君は本当に変わってしまったのか…それとも元々あんな風だったのか……

「鉄也!!」

「遊斗君……どうすればいいんだ？」

「……すまない、鉄也。こんな事になったのも何も教えていないの僕が何も教えていなかったのが原因だ。」

「いや、いいよそれは……そんな大事な情報を簡単に喋るわけにはいかなかったんだろ……それよりどうしよう……」

「え？」

「今はもう……この問題をどうすれば良いかの筈だろ……だから、どうすれば良いんだ？」

「……それなら一つだけ提案がある。」

「……何かあるのか？」

「ああ、君を今から別の世界に移す。」

「！！ 別の世界！？」

「ああ、君は平行世界の説を知っているだろう？」

「！ まさか……………」

「そうだ、『別の世界に存在している村上鉄也』……………彼だけが頼りだ。」

「見つけましたよ……………今度は逃がしませんよ。」

『ガウウウ！！』

「！！！」

「追いつかれたか……………」

そこには神獣王バルバロスと側に黒いフードを被った黒いコートの男が現れた。

『ガルルル……………』

バルバロスがゆっくり僕達に近づいてくる……………

「まずいな……………（あと30秒……………）」

「遊斗君……………その別世界の僕は…本当に存在するんだよね……………」

「1人いるよ。」

「わかった、その提案……………乗った。」

「ようし…………じゃあ、25秒ぐらいあの化け物を凌がないとだめだ。」

「わかった…………」

「どうやらそちらの方はもう、体が持たないようですね。」

『グオオオ！！』

バルバロスは槍を遊斗君に向けた。

「危ない！！」

遊斗君は槍を避けて僕の肩を組んだ。

「じゃあ、25秒ぐらいこの状況を凌ぐんだ。」

「はあ…はあ……………うん。」

取りあえず走っていった。

「また逃げられるとでも？ 奴を追いなさい。」

『ガアアア！！』

バルバロスは凄いスピードで追っている……………
怪我人である僕達が逃げ切れる筈が無い……………

「（あと21秒……）　こうなったら……」

「ちょっと、何を……」

遊斗君は僕が背負っている刀を引き抜いた。

「はああああ！！！」

遊斗君はバルバロスの槍を持った腕を力強く斬った。

『ガアアア！！』

バルバロスは痛みあまり、槍を放した。

ドガッ！！

「ぐああ！！！」

遊斗君はバルバロスの拳に突き飛ばされた。

ドサッ！！

「痛ててて……（17…16…15……）」

「はあ…はあ……」

バルバロスは遊斗君が近づいてきた……

「遊斗君！！！」

「（１２…１１……）」

まずい……

「この野郎！！」

僕は刀を拾って後ろからバルバロスに飛び掛り、心臓の所に突き刺した。

『グアアア！！』

バルバロスは暴れだして僕を振り下ろして地面に叩きつけた。

「ぐあああ！！」

くっ、痛い……

「がはっ！！」

『ガアアア！！』

え！？

心臓を刺した筈なのにまだ生きている！？
まさか刺した所は心臓じゃないのか……
バルバロスは爪を輝かせている……

「はあ…はあ……」

やばい……間に合わない！！

「25秒経った、良くやった。」

遊斗君は僕の肩を掴んだ。

フッ!!

「また瞬間移動ですか…… 現れよ、レベル・スティーラー!!」

そう言って帝はデュエルディスクに複数のカードをセットした。

ブ~~~~ン!!

ブ~~~~ン!!

ブブブ~~~~ン!!

「危なかった……瞬間移動は5分に1度だけだったからね……」

「はあ……はあ……良かった……　　凄いね、遊斗君。」

「まあ、僕は人間じゃないからね。」

「え？」

「正確に言えば僕はヒューマノイドだ。でもそんな話をしている暇な無いだろう。」

確かに助かったのは良いけど僕達の体はボロボロだ……もう一刻を争う暇は無い……

「じゃあ、さっさと始めるよ。　　またいつ追いつかれるかわからない。」

そう言って遊斗君はポケットから小さい機械を取り出した。
見るからにしてiPhoneのようだ。

「うん……」

「よし……」

遊斗君はiPhoneから何か操作すると掌が光って小さいリモコンのような物が現れた。

「いいか、僕は君をもう1人の君が存在する別の世界へ転送させる。
その後、君は何でも良い……助けを呼ぶんだ。そうすると君の
思いがもう1人の君に伝わって来る可能性が高くなる。そして彼
が来たら事情を説明してこれを使うんだ、そうすると彼はこの世界

へ転送される。」

「そうか……………」

「しかしこれは大変な賭けだ。 仮に君の思いが伝わっても無視されるかもしれない……………そして仮に助けに来たとしても協力に同意しかもしれない。 それにこの機械はまだ完璧ではない代物なんだ。そしてこの賭けは君の残りの寿命に関わっている……………いいな。」

「わかった……………」

ブ……………ン！

「!?」

「虫!?」

今、虫が僕達の上を飛んでいた。
その虫は意外と大きかった。

「まずいな……………もう見つかってしまった。」

「…ちよつと待って!」

「!」

「遊斗君……………このカードを……………《ギガンテック・ファイター》を預かってくれ。」

「……………わかった。 じゃあ、転送するよ。」

「そして俺が引き寄せられたのか。」

「はい、その通りです。　後はわかるでしょう……」

「ああ、転送されたお前は後を追われたという事か。　そしてお前
を見つけた俺はその追っ手とデユエルした……」

「お前……こいつに何をした？」

「何故、あなたが知る必要がある？」

「……こいつは俺に助けを求めた。知る権利は十分以上にある。」

「君に助けを求めた？ ちょうどいい、あなたも死んでもらいましょう。」

「神獣王バルバロスで直接攻撃！」

「うわあああ！！！」

ぐっ…これが…闇のゲーム……

「バトルだ！ スターダスト・ドラゴンで人造人間・サイコ・ショッカーを攻撃！ シューティング・ソニック！！！」

『グオアアア！！！』

「力を制する邪神よ、今こそ我に示せ！！ 我が邪神、アバター！！！」

「集いし星の輝きが……新たな奇跡を照らし出す……光さす………道となれ！ シンクロ召喚！ 光来せよ、セイヴァー・スター・

ドラゴンー！」

「ア、アバターが…おのれ……」

「はあ…はあ……バトルだ！ スターダスト・ドラゴンで……ダイレクトアタック！」

「ぐああああー！！」

『一つだけお願いして良いですか？』

「？」

『僕の……代わりに……戦ってくれませんか？』

「はあ…はあ……言うておくが、俺はもう無理だぞ……出来ればやってあげても良かったんだが。」

『ねえ、鉄也……』

「……………」

『鉄也…起きてよ、鉄也……』

「ん？ ああ……」

『良かった、気がついて。』

「うわああああ！！」

『うわああああ！！』

「じゃ、ジャンク・シンクロン！？」

『ちょっと、いきなり大声出さないでくださいっすよ！ びっくりするじゃないっすか！！』

「あ、ああ…すまん……」

「なるほど……良く解かった。」

「すみません、僕のせいであなたにこんな目に遭わせて……」

「いや、いいさ別に。」

「え？」

「俺だって好きで自分の意志で動いてこういう目に遭ったんだからな。俺がこんな目に遭ったのも自分の性格のせいさ。」

「……………」

「死に掛けの人の頼みを断れないだろ？ だからお前はそこまで責任を負わなくて良い。俺だってこの世界を少し気に入ってきた所だ。」

「で、でも……………」

「確かに俺はあのきっかけで大切な物を色々失った。だが、その代わりにこの世界でも生きる希望を手に入れそう、そんな気がするんだ。」

「そうですね……………では、もう1度聞いて良いですか？」

「ああ。」

「お願いします……………僕の代わりに戦ってください。」

少年の……………もう1人の俺の思いは本気だ……………

「その言葉、聞き入れたぜ。いいだろう、ブラザーフッドでも何でも倒してやるよ。」

「ありがとうございます、鉄也さん。」

「いいんだよ、これから生きるためにはそうするしか無さそうだからな。」

「そうですか……じゃあ、せめてこれを受け取ってください。」

「これは……」

そう言つて少年はケースからデッキを取り出した。

「これは僕のデッキです。あまり役に立たないかもしれませんが、これ位の物しか無いので受け取ってください。」

「……………」

俺は少年のデッキを手にとった。

「ありがたく受け取らせてもらうぜ。」

今後の役に立つかもしれないからな。

「……………ん？」

俺の周りの黒い世界が光り始めた。

「どうやらあなたはそろそろ目を覚ます時間ですね。」

「そうみたいだな……じゃあな、少年。色々事情を教えてください。ありがとうな。それから正直、そろそろ成仏したほうが良いと思うぞ。」

「そうですね。ありがとうございます……」

眩しい光が黒い世界を包み込んだ。

「ふわぁ……………」

こうして俺は目を覚ました……
ブラザーフッドって組織を倒すのが俺の使命か……

『鉄也!!!』

『クリリ〜〜!』

「ジャンク…クリボー……………」

『目を覚ましたっすね!!!』

「ああ、すまんな2人とも。心配かけて。」

『無事で良かったっす……』

『クリ~~~~~!!』

クリボーが俺に抱きついて来た……

「ぎゃああああ!!」

頼む、嬉しいのは解かるが……離れてくれ!!

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い……

……

傷が~~~~~!!

「離れた方がよいよ、クリボー。治ったばかりだから、その傷。」

「ん？」

俺は声の方に振り向いた。

「やあ、村上鉄也。」

振り向くとそこにはキャップ帽を被った白い長髪の青年がいた。

「お前……もしかしてお前が遊斗か？ もう1人の俺の友達の……」

「ああ、テレパシーで1度会話してたよね。よろしく、鉄也。」

「ああ、よろしくな。」

「君は派手にやられていたけどもう大丈夫みたいだね。（驚いた

な……1週間は目を覚ます筈がないのにまさか1日で起きるとはね
……） 話は後にしよう。 病院の食事が用意してあるから栄養を
取ったほうが良いよ。」

「わかってる…丁度腹が減ってた所だ……」

さて…腹いっぱい食ったら準備でも整えるか……

S i d e E n d

S i d e / ? ? ?

『ただいま空港に着地します……』

……そろそろ時間ね。

「ふわあああ……よく寝た……」

そして飛行機が着地した。

さて、鉄ちゃんはどうしているかしらね。

空港

「お……い！」

「あ、シュウ……!!」

出口から出るとそこにはシュウがいた。

「会いたかったよ、シュウ。」

「ああ、ボクもだ……美央^{みお}。」

S i d e E n d

T o B e C o n t i n u e d

第40話 久しぶりの再会だというのに神はそんな暇など全く与えてくれたりな

Side / 鉄也

「ガツガツ!! バクバク!!」

旨い旨い…… 1日中寝てたから大量の食い物が喉を通るぜ。

「ふう……ごちそうさん。」

「大丈夫かい? もぐもぐ…… 飯にも君は怪我人だったぞ。 パク……」

「いいんだよ、これで体力が回復したぜ。 それより……」

「パクパク…… ん?」

「何でお前も食ってるんだ!?!」

ちなみに俺の部屋では遊斗も病院の食事を食っていた。

しかも瀕死して体力がかなり減少していた俺の倍ぐらい食っている……

「いや、僕は人間じゃないんで。」

それはもう1人の俺に聞いたな……

「それでも食い過ぎだろ!!」

「いやゝゝ、僕はエネルギーの消費が激しいので…… まあ、これでエネルギー満タンだ！」

何だこいつは…… 一体何者なんだ？

「ヒューマノイドです。」

堂々と言ったよ、この人……
それはともかく随分食ったな。

「ふう……………」

さて、ブラザーフードについてはこの遊斗って奴に聞くとするか。
ついでに管理局の事についても聞かせてもらおう。

ガチャッ！

「ヤッホゝゝ村上くん、目を覚ましたって？」

「ん？ あ、黒崎さん。」

黒崎さんが俺の病室に入ってきた……

「どうやら君は無事みたいだね。」

「ああ、おかげさまでな。」

「しかしあの傷から助かるなんて凄いタフだね。」

「流石にあればやばかった……もう、黒薔薇の魔女なんて相手にしたくないよ……」

マジやばいって……相手にするなら力を抑えられるようになったアキにしてくれ。

サイコデュエリストはもう勘弁だ。

まあ、また闇のゲームとかありそうだけど。

「ははは、まあ無事で何よりだな　あ、君に合いたい人がいてね、ちよつと良いかい？」

俺に合いたい人？

「構いませんけど……」

「じゃあ、入って良いよ……」

「久しぶりね、鉄ちゃん。」

「!!」

この人は……

「姉さん!!」

S i d e E n d

S i d e / 結衣

「此処から見ると……あの道ね。」

私は今、兄さんのD・ホイールに乗っている。

一応、15歳で無免許だけど必要な操縦テクニックは十分以上にある。

兄さんに教えてもらった甲斐があったね。

「じゃあ、続けるか。」

私は昨日、突然私の家に入ってきた男……確か名前はルーカス・

アンデルセンだったね……その人から封筒を渡された。

中にはカードキーとARCADIA アルカディア MOVEMENT ムーヴメントという組

織についての情報が載っている書類が入ってあった。

そして資料の中には本部の居場所が載っている地図とカードキー、そしてあの黒薔薇の魔女が……十六夜アキに関するデータも入っていた。

だったら話が早い、待っていなさい……十六夜アキ。

そう思いながら私はD ホイールを走らせた。

S i d e E n d

S i d e / 鉄也

俺が見た人物……それは白いコートを着てメガネを掛けた青い髪

の女性だった。

容姿が若干違っているけどその人が誰なのか直ぐにわかった。
何だか……嬉しくなってきた……

「姉さん……まさか姉さんなのか!？」

「そうよ、鉄ちゃん。久しぶりね。」

「姉さん……姉さああん……!!」

俺は嬉しさのあまり、美央姉さんに抱きついた。

「うっ…ひぐっ……」

「ごめんね。出来れば直ぐに会いたかったけど……仕事で忙しい時だから会えなかったの。」

「う、う……」

そんなのどうでもいい……まさか会えるなんて……本当に良かったよ……

彼女の名は丸藤美央……俺の従姉だ。

優しくて強くて、兄弟がいない俺にとって本当の姉のような存在だった。

俺が大学に入った時に行方不明になった人だ。

ちなみに彼女が俺が元の世界で遊戯王を始めるきっかけを作った人でもある。

「シュウ、私がない間に彼の面倒を見てくれてありがとうね。」

「いや、礼にも及ばないよ。彼は面白い子だったよ。」

姉さん……お母さんみたいな発言は止めてくれ……

「良かったな、鉄也。」

「そういえば姉さんはどうやってこの世界へ？」

俺は気分が落ち着いた後、美央姉さんに聞いた。

「そうね……私はね、研究所でちょっと発明しようとしてた時のことだったね。」

発明……そういや姉さんは機械いじりが得意だったな。

「発明って、何を？」

「ちょっと作ってみようと思ったんだけど、物質転送装置を。」

「え？」

この展開は……

「そして私はやってみたのよね…… 完成した後、テストとして自分を転送しようとしてみたんだけど…… 失敗して私が転送されてしまったの、この世界に。」

「ちょっと待って。 何でこの世界へ？」

「それは私が転送される時、『遊戯王5D's』のDVDを持っていたからだと思う。」

「うわっ…俺の時と全く違うじゃないか……」

なるほど…その理由で行方不明になったという事か……
しかし……

「姉さんは大丈夫だったの？ この世界に転生して……」

「私は大丈夫だったわ。 私の暮らしは悪くなかったし、こうして生きていけたし。」

「どのくらいこの世界にいたんですか？」

「そうね……私がこの世界に転送された時は高校生の歳に戻ったわ。だからもう……8年ね。」

な……長っ！！

まあ、これはこの世界で過ごされた時間帯だが……

「ちょっと姉さん……今、歳いくつですか？」

「この世界だと私は今、24歳よ。」

「こんなに長く暮らしていたんだ……寂しくなかったですか？ 元の世界に戻る可能性とかなかったんですか？」

「生憎無理だったのよね……一応、何度か試してみたけど失敗が多くてね……でも、未練がない訳でもないけどこの世界で暮らすことにしたのよ。今は大学を卒業してモーメントの研究員になってるわ。」

「そうだったのか……良かった……」

「え？」

「だってさ……姉さんも俺と同じように襲われたかと思ってしまっただけ……何ともなくて無事だったのが嬉しかったよ。」

「……あなたの事情はシユウから聞いたわ。あなたがあんな目に遭っていたなんて……何もしてあげられなくてごめんね。」

「いや姉さん……そんな事を言わないでください。俺は今、会えただけでも嬉しいですよ。」

良かった……1人じゃなかった……あれ？
少し話が変わるが……

「そう言えば姉さんは黒崎さんと知り合いなんですか？」

「そうよ、私は彼と付き合ってるわ。」

「ええ！？」

ちょっと驚いたぞ。

「そうなんですか！？」

「その通りよ。アカデミア時代で彼と知り合ったわ。そしてあのレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンは私があげた物よ。」

「へえ……………」

「シユウだけじゃないわ。結衣ちゃんの事も知っているよ。彼女のお兄さんの事もね。彼もシユウと同じくアカデミアで知り合ったからね。」

「ええ！？　じゃあ、結衣さんの事情も……………」

「勿論、知っているわ。私は出張で何も出来なかったけど。」

「そうですか……………」

「ねえ美央、そして村上クン。悪いけどもはや君達が懐かしがっている暇はなさそうだ……………」

「え？」

僕と姉さんが話し合っていると黒崎さんが喋り始めた。

「どうしたの、シユウ？」

「さっきから身の安全を確認しようとして電話を掛けているんだが、結衣が…………携帯をとらない。」

「結衣さんが？」

「結衣ちゃんが……これはまずいわね。」

「ああ……今の彼女を1人で行かせたら大変だ……」

「可能性を考えれば……恐らくあの場所ね。」

「そうだな……彼女が知る筈が無いと思うがそれ以外に考えられないな。」

あの場所……まさかアキの場所か!?

「悪いけど鉄ちゃん、私達は結衣ちゃんを探しに行くわ。」

「……………」

「僕も行きましょう、丁度あの組織も調べておかないといけないので。」

「いや、待ってくれ！俺も一緒に行かせてくれ。」

「駄目よ、鉄也。あなたはまだ傷が完全に治っていないわ。」

「分かっている、姉さん。でも俺は彼女を放っておけない!」

確かにそうだ……何とか回復して傷口は塞がったけどまだ完全に直っていない。

でも、彼女はこの世界で出来た大切な友達だ……友達を危険な目に遭うのを知って放っておくなんて出来ない!

それに……結衣さんはまだアキの事を理解していない……もう、状況を悪化させるわけにはいかない!

「……………」

「……………」

「……昔から変わっていないね、鉄ちゃんは。わかった、一緒に行きましょう。」

「姉さん！」

「でも、体も大事にしないと。無理をしないでね。」

「ああ。もう心配をかけないさ。」

「じゃあ、早速着替えて。行きましょう、アルカディア・ムーヴメントへ。」

S i d e E n d

S i d e / 結衣

私はD・ホイールを離れた場所に止めて目的地に着いた。

「此処がアルカディア・ムーヴメント……………」

「おおっと……………」

ドン！

私が歩き始めたその時……通りかかった背が高い金髪の男性とぶつかった。

ぶつかった時、彼はカードを落とした。

「すみません……」

私は落としたカードを拾った。

拾ったカードは…《天下人 紫炎》か……炎属性デッキかな……

「いやいや……気にするな、お嬢ちゃん。」

「はい。」

私は拾ったカードを手渡した。

「ありがとう、俺のお気に入りのカードだからな。まあ、別に使ったりしないが。ところでお嬢ちゃん、君はあの建物の中に入るつもりかい？」

気付かれたかしら……

「……………」

「ふふ、止めておいたほうがいいぜ。アルカディア・ムーヴメント……あの組織は悪い噂ばかりだからなあ。特にあの黒薔薇の魔女って奴がいるらしい。」

「そんなの……どうでもいいよ……………」

「はは、まあ好きにするが良さ。それじゃあ、失礼……」

そう言っ て彼は去って行った。

「はあ……」

何だったの、今の人……

「フフフフ……」

T o B e C o n t i n u e d

第40話 久しぶりの再会だというのに神はそんな暇など全く与えてくれたりな

次回からコラボになります。

コラボ特別編 闇と風の結束（前書き）

というわけでタイトルどおり今回はコラボとなります。

コラボ特別編 闇と風の結束

Side / ????

ん……………ここはどこだ？

気がつけば俺は黒い空間のような所にいた。
良く見ると側には沙耶が寝ていた。

「おい、沙耶。」

「ん……………嵐？　！！　ここは何処だ？」

「気がついたか。」

そう、俺たちはどういう訳か知らないが別の世界へ飛ばされてい
たと言って良いだろう。

「気がついたかい？」

すると、何者かが俺達に声をかけた。

キャップ帽を被った白い長髪の青年であった。

「誰だ、お前は？」

「僕の名は藍沢遊斗。　お二人さん、デートの最中に悪いね。」

「誰だ、お前は？」

「早速の事だが紫藤嵐君、君の作者から依頼があつてね、僕の次元の住人とデュエルするように頼まれた。」

「そうか……で、相手は誰なんだ？」

「それは僕がそこに送つたら会えるよ。」

S i d e E n d

S i d e / 鉄也

「……………ん？」

気がついたら俺は黒い世界にいた。

「……………」

そういえば1度あつたな、確か別世界とのコラボレーションってのが……

「そついや何で黒い空間ばつかなんだよ。他にいい場所とかないのかよ！ 森とか川とかさー!!」

ヒラ……

俺の足元に紙切れが落ちてきた。

「何々……」

『万が一、砂糖を吐く事があるかもしれないので気をつけてください。』

「どういう意味だ？」

「まあ、それより今回の相手は誰だろう……」

「シュッ……！」

「ここか……」

「暗いな……」

「今回の相手は、黒い長髪の男と同じく黒いショートヘアの女だ。俺と同じ年ぐらいだな。」

「2人共オベリスク・ブルーの制服を着ている。」

「GXの世界の住人という事か。」

「どうやらお前が俺の相手のようだな。」

「男は俺に話しかけた。」

「そうか、この人が俺の相手か。」

「てゆうかこの人、良く見ると……」

「お前……バクラか!？」

「! バクラじゃないがお前、もしかして……転生者か?」

「! じゃあ、お前もか。」

「俺は紫藤嵐だ、よろしく。」

「オレは加賀美沙耶だ。」

「俺は村上鉄也だ、2人ともよろしく。」

「数十分ぐらいの会話をした後」

「成る程。羨ましいな、お前の人生。」

「お前は色々災難だな、特に2回もアキに殺されかけるとは。」

「あれは大変だった……」

とりあえず嵐はGXの世界に転生してからの人生を語っていた。
どうやら嵐は転生して何故か盗賊王バクラの魂が中に宿っているらしい。

そして沙耶はアカデミアで知り合って馴れ合っている内に恋人となつたらしい。

他に海馬の知り合いとか成績優秀で女性にもてるとか色々な完璧な補正があるらしい……

何て羨ましいキャラ設定だ……

そして俺はとりあえず転生してからフォーチュンカップでの出来事を語った。

「じゃあ、そろそろデュエルを始めようぜ。」

「ああ。」

今回の相手は紫籐嵐……………一体どんなデッキだ？

「「デュエル!!」」

嵐 LP4000

VS

鉄也 LP4000

「俺のターン！俺はシールド・ウィングを召喚だ！」

シールド・ウィング

2

DEF900

「さらにカードを2枚セットし、ターンエンドだ。」

嵐/LP4000

手札3枚

モンスター/シールド・ウィング(守)

魔法・罠/リバーズ×2

「俺のターン！」

簡単に倒せないモンスターか……

それにシールド・ウィングだけじゃまだデッキ内容がわからないな……

「俺はモンスターをセットする！ さらにカードを1枚セットし、ターンエンドだ！」

鉄也 / LP 4000

手札 4枚

モンスター / 裏側守備表示モンスター 1体

魔法・罠 / リバース × 1

「俺のターン。俺は天使の施しを発動。カードを3枚ドロし、手札を2枚捨てる。」

天使の施し……そういやGXの世界はまだ使用許可があるか。そして墓地肥やしが狙いか……

「俺はトーチ・トークンを2体特殊召喚し、相手フィールド上にトーチ・ゴーレムを特殊召喚する。」

トーチ・トークン × 2

1

ATK 0

トーチ・ゴーレム

8

ATK3000

「俺は2体のトーチ・トークンと墓地のハーピィ・クイーンを除外し、手札からモンスターを特殊召喚する。」

その召喚条件は……

「現れよ、Theアトモスファイア！」

『クオオオオオ！！』

トーチ・トークンが消滅し、透明の球体を持った金色の鳥が現れた。

Theアトモスファイア

8

ATK1000

「出た、嵐の切り札！」

「まずいな……確かにトーチ・ゴーレムと相性がいいモンスターだな。」

『クオオオ!』

アトモスフィアの動きが少しおかしい。
普通のソリッド・ビジョンとは違うな。

「おい、もしかしてそのモンスター……お前の精霊か?」

「ああ、こいつはオレの精霊で切り札だ。アトモスフィアの効果
を発動! 表側表示で存在する相手モンスター1体を装備カードと
し、モンスターの攻撃力・守備力を装備したモンスターのそれぞ
れの数値分アップする。俺が吸収するのはトーチ・ゴーレムだ!」

Theアトモスフィアはトーチ・ゴーレムを球の中に吸い込んだ。

Theアトモスフィア

8

ATK1000 4000

手札2枚の消費で攻撃力4000とは強力だな。

「Theアトモスフィアでその裏側モンスターを攻撃! テンペ
ス・サンクションス!」

アトモスフィアは球から巨大な風を巻き起こした。
……だが、油断したな。

「聖なるバリア・ミラーフォースを発動! 守備表示のシールド・
ウィングは破壊できないがアトモスフィアを倒せるだけで十分だ。」

そうやって俺のモンスターの周りにバリアが現れ、竜巻を跳ね返した。

「ああ！ 嵐のアトモスファイアが！」

「やるな……だが簡単に破壊させるわけにはいかない。俺はミラーフォースにチェインしてTheアトモスファイアをリリースし、風霊術・「雅」を発動！ お前のそのモンスターをデッキの1番下に戻す！」

「!?!」

アトモスファイアはそよ風と化し、伏せたモンスターを包み込んだ。

「うわっ……ただではやられないということか。」

最近、俺のライコウ不発になってないかな……

「俺はメインフェイズ2に入り、強欲な壺を発動。カードを2枚ドロ―する。そしてカードを1枚セットし、ターンエンドだ。」

嵐/LP4000

手札2枚

モンスター/シールド・ウィング（守）

魔法・罨/リバーズ×2

「俺のターン！」

「この瞬間、俺は魔封じの芳香を発動。お互いに魔法カードはセツトしなければ発動できず、セツトしたプレイヤーから見て次の自分のターンが来るまで発動できない。」

何だと!?

丁度俺には使える魔法カードが手札にあるというのに、どうやら使うのを延期しなければならないようだな。

「うつ……俺はカードガンナーを召喚!」

カードガンナー

3

DEF 400

「カードガンナーの効果を発動! デッキトップを3枚墓地へ送り、1枚につき攻撃力を500ポイントアップさせる。カードを2枚セツトし、ターンエンドだ。」

表側守備表示で召喚の世界って本当に便利。

鉄也 / LP 4000

手札 2枚

モンスター / カードガンナー (守)

魔法・罠 / リバース x 2

「そのエンドフェイズにシールド・ウィングをリリースし、ゴッド
バード・アタックを発動。その伏せカードを2枚破壊する。」

「何だと!？」

くそ、俺の調律とワン・フォー・ワンが!

「俺のターンだな、俺は霞の谷のファルコンを召喚する。」

霞の谷のファルコン

4

ATK2000

「さらに俺は墓地のシールド・ウィングとトーチ・ゴーレムを除外
し、手札からモンスターを特殊召喚する。」

シールド・ウィングとトーチ・ゴーレム……風属性と闇属性か。

「まさか……」

召喚コストから見ると最も厄介なあれだな……

「現れよ、ダーク・シムルグ!」

ダーク・シムルグ

7

ATK2700

「俺は魔封じの芳香を手札に戻し、霞の谷のファルコンでカードガンナーを攻撃。」

霞の谷のファルコンはカードガンナーを切り裂いた。

「俺はカードガンナーの効果でカードをドローする……」

「俺はダーク・シムルグでプレイヤーへダイレクトアタック、ダーク・テンペスト！」

「うわあああ！」

鉄也 LP 4000 1300

まずいな……カードがセットできない状態で俺のフィールドのカードは0……何か手を打たないとまずい。

「俺はカードを2枚セットし、ターンエンドだ。」

嵐 / LP 4000

手札 0 枚

モンスター / ダーク・シムルグ（攻）、霞の谷のファルコン（攻）
魔法・罠 / リバース × 2

「俺のターン！」

「この瞬間、魔封じの芳香を発動！」

「やはりそのコンボか……」

ダーク・シムルグは相手のカードのセットを封じる……そして魔封じの芳香が存在する限り魔法カードをセットしなければ発動できない……つまり魔法も罫も発動できなくなってしまうという事だ。だが幸い、たった今ドロしたカードが救いの手だ。

「俺はチューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを召喚する！」

ジャンク・シンクロン

3

ATK1300

「ジャンク・シンクロン……シンクロデッキだったか。」

「まあな。」

「（ジャンク・シンクロン……見た事ないモンスターだ！）チューナー？ シンクロデッキ？ 嵐、チューナーって何なんだ？」

「チューナーモンスターはシンクロモンスターの鍵となるモンスターだ。シンクロモンスターの事は召喚される時に説明しておく。どうやらカードガンナーで良いカードが墓地に送れたようだな。」

『ようし！ 行くつすよ、鉄也！！』

「ああ、行くぜ相棒。」

「そのジャンク・シンクロン……お前の精霊か？」

「ああ、こいつは俺の相棒だ。」

『どうもよろしくつす！』

「俺はジャンク・シンクロンの効果を発動！ 墓地からレベル2以下のモンスターを特殊召喚する！ 現れよ、チューニング・サポーター！」

チューニング・サポーター

1

DEF100

「そして自分フィールドにジャンクと名のついたモンスターが存在する場合、手札からこのモンスターを特殊召喚することができる。

現れよ、ジャンク・サバント！」

ジャンク・サバント

4

ATK1500

「レベル合計は8……あのモンスターを召喚する気か。」

「レベル4、ジャンク・サーバントとレベル1、チューニング・サポーターにレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング！ 集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます。 光さす道となれ！」

4 + 1 + 3 = 8

「シンクロ召喚！ 粉碎せよ、ジャンク・デストロイヤー！」

ジャンク・デストロイヤー

8

ATK 2600

「やはり来たか。 まさかあの状況から召喚するとは……」

「シンクロ召喚？」

「シンクロ召喚とはチューナーと呼ばれるモンスター1体とそれ以外のモンスターをフィールドから墓地に送り、送ったモンスターのレベルの合計と同じレベルのシンクロモンスターを特殊召喚する。

それがシンクロ召喚だ。 そしてあのモンスターはシンクロ召喚された時に発動する効果がある。」

「その通りだ。 ジャンク・デストロイヤーの効果を発動！ このモンスターがシンクロ召喚に成功した時、チューナー以外のこのモ

ンスターのシンクロ素材の数までフィールド上のカードを破壊することができる。俺が破壊するカードはダーク・シムルグと魔封じの芳香だ！ タイダル・エナジー……！」

ジャンク・デストロイヤーが放つ拳の弾が相手のカードを粉碎した。

「さらにチューニング・サポーターの効果を発動！ カードを1枚ドロースる！ そして手札からサイクロンを発動！ その伏せカードを破壊だ！」

破壊されたカードはミラーフォースだったか……危ない。

「バトルだ！ ジャンク・デストロイヤーで霞の谷のファルコンを攻撃！ デストロイ・ナツクル！」

「くっ……」

嵐 LP4000 3400

「これでターンエンドだ！」

鉄也 / LP1300

手札3枚

モンスター / ジャンク・デストロイヤー（攻）

魔法・罫 / なし

「今の状況を切り抜けるとはやるな……俺のターン！俺はモンスターをセツトし、ターンエンドだ！」

嵐／LP3400

手札0枚

モンスター／裏側守備表示モンスター1体

魔法・罠／なし

「俺のターン！ジャンク・デストロイヤーでモンスターを攻撃！デストロイ・ナックル！！」

ジャンク・デストロイヤーが攻撃したモンスターは……

キラー・トマト

4

DEF1000

「キラー・トマトの効果を発動！デッキから攻撃力1500以下の閻属性モンスターを特殊召喚する！俺はデッキからクリッターを特殊召喚する！」

クリッター

3

ATK1000

「俺はメインフェイズ2に入り、ジャンク・デストロイヤーのレベルを1下げ、レベル・ステイラーを特殊召喚する！」

レベル・ステイラー

1

DEF0

「さらに俺はモンスターをセットし、ターンエンドだ！」

鉄也／LP1300

手札2枚

モンスター／ジャンク・デストロイヤー（攻）、レベル・ステイラー（守）、裏側守備表示モンスター1体

魔法・罠／なし

「俺のターン！俺は天よりの宝札（原作効果）を発動！お互い手札が6枚になるようにドロウする！俺に手札はないから6枚ドロウする。」

「……俺は4枚ドロウする。」

まずいな…手札が増えるのは良いが、相手の手札が増えたらまずい……

「俺はクリッターをリリースし、邪帝ガイウスをアドバンス召喚する！」

邪帝ガイウス

6

ATK2400

「邪帝ガイウスの効果を発動！ このモンスターがアドバンス召喚に成功した時、フィールド上のカードを1枚除外する！ 俺が除外するのはレベル・ステイラーだ！」

ガイウスが作り出した次元のゆがみがレベル・ステイラーを吸い込んだ。

「さらにレベル・ステイラーは闇属性モンスターだ。 よって1000ポイントのダメージを与える。」

鉄也 LP1300 300

「くっ、レベル・ステイラーを壁にしたのが仇となったか……」

しかも除外されたから2度と使えない……

「さらにクリッターの効果を発動！ デッキから攻撃力1500以下のモンスターカードを手札に加える！ 俺が加えるのは2枚目のTheアトモスフィアだ！」

「2枚目があつただと!？」

大体分かってきた……嵐のデッキはTheアトモスフィアとダーク・シムルグが共存できるデッキだ。

「俺は死者蘇生を発動! 墓地からモンスターを特殊召喚する! 俺が特殊召喚するのはTheアトモスフィアだ!」

Theアトモスフィア

8

ATK1000

「召喚条件を満たせば蘇生できるモンスターだったか……」

「さらに俺は墓地の霞の谷のファルコンとダーク・シムルグを除外し、手札から2枚目のダーク・シムルグを特殊召喚する!」

ダーク・シムルグ

7

ATK2700

「苦手なモンスターがまた現れたな……」

「アトモスフィアの効果を発動! ジャンク・デストロイヤーを吸収する!」

Theアトモスフィア

8

ATK1000 3600

「邪帝ガイウスで直接攻撃！ 裏側守備表示モンスターを攻撃！」

ライトロード・ハンター ライコウ

2

DEF100

「残念だったな、ライトロード・ハンター ライコウのリバース効果を発動！ フィールド上のカードを1枚破壊する事ができる！俺が破壊するのはダーク・シムルグ！」

『ガウウウウ！！』

ライコウはダーク・シムルグに飛び掛った。

「さらにライコウのもう1つの効果を発動！ デッキからカードを3枚墓地へ送る！」

「ダーク・シムルグがやられたか……」

「だが、嵐にはまだアトモスフィアが残っている！ 攻撃が通れば嵐の勝ちだ！」

「アトモスファイアでプレイヤーへダイレクトアタック！ テンペスト・サンクシヨンスー！」

『クオオオオ！！』

俺の場にはカードが無い……だが、そう簡単に終わる俺ではない！

「だが、俺は手札からモンスター効果を発動！」

『クリクリ〜〜〜！』

俺の前にクリボーが現れ、アトモスファイアの攻撃から身を守った。

鉄也 LP300

「クリボーでライフを守ったか……」

「惜しかったな、俺はしぶといんだ。 そう簡単に俺に勝てると思うなよ。」

「そうか…俺はカードを2枚セットし、ターンエンドだ。」

嵐 / LP3400

手札2枚

モンスター / Theアトモスファイア（攻）、邪帝ガイウス（攻）
魔法・罠 / ジャンク・デストロイヤー（Theアトモスファイアに

装備)、リバーズ×2

「俺のターン！」

「(ジャンク・シンクロンを利用したシンクロデッキなら、少なくとも魔法カードの補助が要るはず……だったら) この瞬間、俺は魔封じの芳香を発動！ これでこのターンで魔法カードを発動する事はできない。」

2枚目か…だが同じ手を喰らうほど甘くない！

「悪いが天よりの宝札が仇となったな、俺はお前の魔封じの芳香を墓地に送り、トラップ・イーターを特殊召喚する！」

トラップ・イーター

4

ATK1900

「何！？」

「これで手札から魔法カードが発動可能だ。俺は増援を発動！ デッキからレベル4以下の戦士族モンスターを手札に加える！ 俺が手札に加えるのは……ジャンク・シンクロンだ！ 俺はジャンク・シンクロンを召喚する！」

ジャンク・シンクロン

3

ATK1300

「ジャンク・シンクロンの効果を発動！ 墓地からチューニング・サポーターを特殊召喚する！」

チューニング・サポーター

1

DEF100

「さらに手札から機械複製術を発動！ チューニング・サポーターをデッキから2体特殊召喚する！」

チューニング・サポーター×2

1

DEF100

「俺はチューニング・サポーター2体のレベルを2に変更する！ レベル2、チューニング・サポーター2体とレベル1、チューニング・サポーターにレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング！ 集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます。 光さす道となれ！」

チューニング・サポーター×2

1

2

2 + 2 + 1 + 3 〃 8

「シンクロ召喚！ 再び粉碎せよ、ジャンク・デストロイヤー！」

ジャンク・デストロイヤー

8

ATK2600

「ジャンク・デストロイヤーの効果を発動！ フィールド上のカードを3枚まで破壊することが出来る！ 俺の破壊対象はTheアトモスフィアと邪帝ガイウス、そしてその伏せカードだ！ タイダル・エナジー！！」

『ハアアア！！』

「これは流石にまずいな……俺はジャンク・デストロイヤーの効果にチェーンして終焉の焰を発動！ 焰トークンを2体特殊召喚する！」

嵐の1枚の伏せカードは破壊を逃れ、2体の黒い炎の悪魔が現れた。

焰トークン×2

1

DEF0

だが、ジャンク・デストロイヤーは相手のアトモスフィアとガイウスを破壊した。

「壁が出来たか……だが、俺はチューニング・サポーターの効果を発動！ カードを3枚ドローする！」

「カードを破壊するだけでなくカードをドロー！？ それってインチキじゃねえか？」

「まあ、一応インチキじゃねえが。」

これがインチキ？

一度、苦勞クローウに会って見たほうが良いぞ。
あいつの方が余程インチキだぜ。

「更に俺はシンクロキヤンセルを発動！ ジャンク・デストロイヤーをエクストラデッキに戻し、墓地からシンクロ素材となっていたモンスターを特殊召喚する！」

ジャンク・シンクロン

3

ATK1300

チューニング・サポーター×3

1

DEF 100

「俺はレベル2、チューニング・サポーター2体にレベル4、トラップ・イーターをチューニング！集いし兵の魂よ。不屈の戦士を呼び覚まし、己の闘魂を拳に今、大地を砕け！」

2 + 2 + 4 = 8

「シンクロ召喚！ 唸れ我が闘志、ギガンテック・ファイター！」

ギガンテック・ファイター

8

ATK 2800

「ギガンテック・ファイター……戦闘に強いモンスターか。」

「こいつが俺の切り札だ。ギガンテック・ファイターはお互いの墓地に存在する戦士族モンスター1体につき攻撃力が100ポイントアップする！」

鉄也の墓地

ジャンク・シンクロン
ジャンク・サーバント
ネクロ・ガードナー
ジャンク・デストロイヤー

嵐の墓地

なし

ギガンテック・ファイター

8

ATK 2800 3200

「墓地にネクロ・ガードナーがあるか……」

「そしてもう1度チューニング・サポーターの効果を発動！ カードを2枚ドロースる！ そして俺のフィールドにはチューナーモンスター、ジャンク・シンクロンが存在する為、墓地からボルト・ヘッジホッグを特殊召喚する！」

『キュ~~~~~!!』

ボルト・ヘッジホッグ

2

DEF 800

「更に俺の場にはチューナーが存在する為、手札からこのモンスターを準備表示で特殊召喚することが出来る！ 現れよ、ブースト・ウォリアー！！」

背中にジェットエンジンをつけた戦士が現れる。

ブースト・ウォリアー

1

DEF 200

「レベル1、ブースト・ウォリアーとレベル2、ボルト・ヘッジホッグ、そしてレベル2、チューニング・サポーターにレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング！ 集いし闘志が怒号の魔（ry

チューニング・サポーター

1
2

1 + 2 + 2 + 3 〓 8

「シンクロ召喚！ 今回3度目の登場、ジャンク・デストロイヤー！！」

ジャンク・デストロイヤー

8

ATK2600

ギガンテック・ファイター

8

ATK3200 3300

「ジャンク・デストロイヤーの効果を発動！ カードを3枚まで破壊できる！ 俺が破壊するのは焰トークン2体だ！」

『ハアアア！！』

ジャンク・デストロイヤーは2本の腕で焰トークンを潰した。

「更にチューニング・サポーターの効果でカードをドロー！」

「凄いな……あれだけの展開だというのに手札がまだ豊富だ。」

「バトル！ ジャンク・デストロイヤーでダイレクトアタック！
デストロイ・ナックル！！」

「くっ……」

嵐 LP3400 800

「これで止めた！ ギガンテック・ファイターで直接攻撃！ コンバット・ブレイカー！！」

「フツ……」

この攻撃が通れば俺の勝ちだ……だが、あいつの表情は余裕だ。ネクロ・ガードナーかクリボーでもあるのか？

「俺はネクロ・ガードナーを除外し、ギガンテック・ファイターの攻撃を無効にする！」

嵐の場にネクロ・ガードナーが現れ、ギガンテック・ファイターの拳を受け止めた。

「このターンでのフィニッシュは無理だったか。俺はカードを4枚伏せてターンエンドだ！」

鉄也 / LP 300

手札 4 枚

モンスター / ギガンテック・ファイター（攻）、ジャンク・デストロイヤー（攻）

魔法・罠 / リバース × 4

「俺のターン……流石だな。」

「ん？ 何がだ？」

「俺がここまで追い込まれるとはお前のようなデュエリストを相手

にするのは久しぶりだ。俺も結構熱くなつてたぜ。」

「そうか……俺もかなりドキドキしてたぜ。」

「でも嵐、まだ負けたわけじゃないだろ！ 頑張れ！！」

沙耶が必死に窮地に立っている嵐を応援している。
いいな……そんな恋人いいな……

「覚悟しろよ、鉄也。もう1つの切り札を使わせてもらっぜ。」

「もう1つの切り札？ それは楽しみだな……」

嵐の奴……ただでさえ強いのにまだあるのかよ。

「面白い……掛かって来い！」

「俺は大嵐を発動！ フィールド上の魔法・罠カードを全て破壊する！」

げっ！ この状況で大嵐かよ！？

嵐が起こり始め、俺の魔法・罠カードが吹き飛ばされ始めた。

「俺は大嵐にチェーンして月の書を発動！ ギガンテック・ファイターを裏側守備表示にする！」

「！！！」

「これなら万が一、アトモスファイアに吸収されたりはしない。」

「やるな……俺は手札からモンスターカード、時を司る神鳥 ユリウス の効果を発動！ ライフを半分払い、このカードを墓地に送る！」

嵐 LP800 400

『ピイイイ！』

時計を持った小鳥が現れた。

「時を司る神鳥 ユリウス ……前代未聞だな。 オリジナルか？」

「ああ、こいつが俺のもう1つの切り札だ。 さて、効果を発動。 リバース・オブ・タイム！」

Theアトモスファイア

8

ATK1000

ダーク・シムルグ

7

ATK2700

邪帝ガイウス

6

ATK2400

ジャンク・デストロイヤー

8

ATK2600

「モンスターが蘇っただ！？」

良く見ればそのモンスター達はさっき俺が破壊したモンスター達だ。

「！！ 時が逆戻りしたということか！？」

「そういう事だ。 このモンスターは手札から墓地へ送る事で墓地から前の自分、または相手のターンで墓地に送られたモンスターを可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。」

「ジャンク・デストロイヤーも蘇ったという事は自分のフィールドに存在していれば相手の墓地からでも蘇生可能という事か。 チートだな、そのモンスター。」

「確かに。 だが、その反面蘇生されたモンスターが破壊されたら元々の攻撃力分のダメージを受けるデメリットが存在するがな。」

「……でも、それってリリースやシンクロとかされたら問題ないという事か？」

「俺はTheアトモスフィアの効果を発動！ 相手モンスターを吸

収する！」

「持ち主であるお前なら知っているかもしれないが、アトモスファイアが吸収できるのは表側表示モンスターだけだ。裏側表示となっているギガンテック・ファイターを吸収する事はできない。」

「ああ、俺はお前のジャンク・デストロイヤーを吸収する！」

Theアトモスファイア

8

ATK1000 3600

「俺はTheアトモスファイアで裏側表示モンスターを攻撃！ テンペスト・サンクションズ！！」

ギガンテック・ファイター

8

DEF1000

「ギガンテック・ファイターの効果を発動！ このモンスターが戦闘によって破壊されて墓地に送られた場合、自分、または相手の墓地から戦士族モンスター1体を選択して特殊召喚する！ この効果はギガンテック・ファイター自身も例外じゃない。アンブレイカブル・ソウル！！」

地面が割れ、ギガンテック・ファイターが現れた。

ギガンテック・ファイター

8

ATK2800 3200

「ただでさえ強いのに蘇生するモンスターだと!？」

「残念だが、ギガンテック・ファイターを破壊できるモンスターはお前のフィールドには存在しないぜ。」

「そうだな……俺はメインフェイズ2に入り、邪帝ガイウスとジャック・デストロイヤー、そして墓地のクリッターを除外し、2体目のアトモスフィアを特殊召喚する!」

Theアトモスフィア

8

ATK1000

「アトモスフィアの効果を発動! ギガンテック・ファイターを吸収する!」

Theアトモスフィア

8

ATK1000 3800

「俺はこれでターンエンドだ。」

嵐／LP400

手札0枚

モンスター／Theアトモスファイア2体（攻）、ダーク・シムルグ（攻）

魔法・罠／ジャンク・デストロイヤー（Theアトモスファイア1体目に装備）、ギガンテック・ファイター（Theアトモスファイア2体目に装備）

「（嵐の方が有利だとはいえ、あの男……嵐のユリウスまで凌いだとは……）」

「（こいつ……やはり只者ではないな。）やるな……ユリウスを凌いだのはお前が始めてだぜ。褒めてやるよ。」

「マジかよ。」

俺が初めてか、あのフィニッシャーを凌いだのは……

こりゃあ、ギガンテック・ファイターを盾にしなければ完全に負けていたな。

「だったら、俺はこの状況を乗り越えて見せるぜ！」

「そうか……ならやってみろ。」

「俺のターン……」

今の俺の手札には使者蘇生がある。

だが、それだけでは不十分だ。

でもあのカードが手札に加えられれば俺の勝ちだ！

頼むぜ、俺のデッキよ！！

「……ドロー！！」

勝った！

「俺は戦士の生還を発動！ 墓地からジャンク・シンクロンを手札に加え、召喚する！！」

ジャンク・シンクロン

3

ATK1300

「またそのモンスターか。 余程好きなようだな、そいつ。」

「まあな、こいつは俺の相棒だからな。 俺はジャンク・シンクロンの効果を発動！」

ライトロード・ハンター ライコウ

2

DEF100

「合計はレベル5……まさかカタストルを召喚する気が!？」

「残念だが、俺はそのモンスターを持っていない。俺は使者蘇生を発動! 墓地からモンスターを特殊召喚する!」

ザ・カリキュレーター

2

ATK 0

「……なるほど、そういう事か。」

「ザ・カリキュレーターは攻撃力が自分フィールド上のモンスターのレベルの合計の300倍となる!」

鉄也のフィールド

ジャンク・シンクロン 3

ライトロード・ハンター ライコウ 2

ザ・カリキュレーター 2

レベル合計: 7

ザ・カリキュレーター

2

ATK 0 2100

「さらにレベル1、レベル・ステイラーにレベル4、クイック・シンクロンをチューニング！ 集いし星が新たな力呼び起こす。光指す道となれ！」

1 + 4 = 5

「シンクロ召喚！ いでよ、ジャンク・ウォリアー！！」

ジャンク・ウォリアー

5

ATK 2300

「攻撃力2300！？ あれじゃどのモンスターも倒せないじゃねえか！」

「いや、あのモンスターも特殊効果がある……俺の負けだ。」

「その通りだ！ ジャンク・ウォリアーの効果を発動！ このモンスターがシンクロ召喚に成功した時、自分フィールド上に存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分、攻撃力がアップする！ パワー・オブ・フェローズ！！」

鉄也のフィールド

ザ・カリキュレーター 2 ATK 2100

合計 ATK 2100

ジャンク・ウォリアー

5

ATK 2300 4400

「攻撃力が4000を超えた!!」

「まさか攻撃力の差でアトモスフィアが倒されるとはな。」

「いいデュエルだったぜ、紫藤嵐。」

「俺もだ、中々楽しませてもらったぜ。」

「ギガンテック・ファイターは返してもらっぜ。バトル! ジャンク・ウォリアーでTheアトモスフィアを攻撃! スクラップ・フィストォ!!」

『トアアアア!』

嵐 LP 4000

鉄也 WINNER

ふう、激しいデュエルだったぜ……

「嵐!!」

あ、沙耶さんが嵐に抱きついた。

「すまん、沙耶……負けちまった。」

「そんな事ねえよ！ 嵐も中々良くやったぜ！」

嵐は沙耶の頭を撫でた。

沙耶は顔を赤らめている……

「!!?」

何だこの展開は……甘い！ 甘すぎる!!

「ぶはあっ!!」

俺は何となく砂糖を吐いた。

そつえば手紙に書いてあったな……

『万が一、砂糖を吐く事があるかもしれないので気をつけてください。』

そついう事だったのか。

「村上鉄也……お前のようなしぶとい奴は始めてだ。まさか逆転の切り札を使って凌がれるとはな。」

「俺もギガンテック・ファイターを盾にしなかったら負けていた。」

「またデュエルしようぜ。今度は負けないからな。」

「望むところだ。ついでにもう1つ。」

「？」

「人の前でイチャつくのはやm……」

S i d e E n d

S i d e / 嵐

「あ。」

鉄也が言い終える前に俺と沙耶はデュエルアカデミアに戻った。

「戻れたな、嵐。」

「ああ。」

「やあ、お2人さん。」

「お前、確か遊斗だったな。」

「どうだったかい、デュエルは。」

「中々面白かったぜ。しかし次から勝手に次元に引きずり込むのはやめろ。迷惑だから。」

「はいはい、すいません。じゃあまたお願いしても良いのかな?」

「ああ。お前は強いのか?」

「まあね。じゃあ、また会おう。」

フッ!!

S i d e E n d

T o B e C o n t i n u e d.....

今回のオリジナルカード

時を司る神鳥 - ユリウス -

風属性 / 鳥獣族

1

ATK100 / DEF100

この効果は自分のターンのメインフェイズにのみ発動することができる。手札からこのカードを墓地に送り、ライフポイントを半分支払う。

このターンの前の自分、または相手のターンに自分フィールド上から墓地に送られたモンスターを可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたモンスターが破壊された時、自分は破壊されたモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受ける。

コラボ特別編 闇と風の結束（後書き）

ゲストキャラ紹介

紫藤嵐
むらさきとうげ

加賀見沙耶
かがみ さや

今回登場したゲストキャラは語り部さんの『遊戯王GX』闇纏う風と盗賊王『』からの登場です。

とても面白い小説ですので、是非ご覧ください。

語り部さん、コラボの協力ありがとうございました。

正式キャラ設定 村上鉄也

村上 むらかみ
鉄也 てつや

イメージ声優／杉田 智○

年齢／22歳（現世） 15歳（転生後） 16歳

身長／170cm

体重／51kg

容姿／茶髪に赤がかつてある。

目は黒であり、左の頬に逆三角形（ ）のマークが付いてある。

服装／オレンジ色のフード付きトレーナーと青いジーンズ。

デュエルディスクはアキの形と同様でオレンジ色。

性格／基本的にツツコミキャラであるが、たまにボケることもある。真面目で人思いな性格であり、正義感が強い。もし、自分に間違いを認めればそれを出来るだけ正そうとする。他人を見下すような人間が嫌いであり、そういう者には怒りを現し、拳を振るう事もある。ネバギバ（ネバーギブアップ）精神が強く、やると思うときは必ずやる。だがその反面、傷つきやすい一面もあり、ネガティブになることもある。しかしそれを乗り越えて強くなる努力をしている。ちなみにホラーやサスペンションが苦手な一面もあり、それに耐えられなくなると崩壊してしまう。女性に関しては二次元程度なら平気だが、色気に弱い。フリーターであるこ

とを誇りに思っており、ニートになることを嫌っている。
一人称は『僕』。しかし、記憶を取り戻して以来、『俺』となっている。

詳細／ある日突然5D'sの世界へトリップしてしまったこの物語の主人公。原作知識はクラッシュタウン編までしかない。トリップする前はフリーターであり、色々な仕事を経験している。オタク程ではないが、漫画やゲームも好きであり、特に好きなのは遊戯王。容姿もいいのでもてないわけではないのだが、女性との付き合いが苦手である。現世で彼女が一応出来たらしいが、初デートの前にトリップしてしまった。どっかの幻想殺し程ではないが、何となく不幸。転生しても何となく不幸。

ある事情でサテライト出身に転生されたが生活はあまり困っていない。しかしサテライトとシティの差別に耐えられず、それにニートになる可能性が高い為、脱出計画を練っていた。とりあえず彼の精霊のカード、『ジャンク・シンクロン』と共に5D'sの世界でどうすればいいのか考えながら日々を過ごしている。

ちなみにかなりの怪力で、拳でボマーの巨大D・ホイールをバラバラにした事もある。

【サテライト脱出編】

5D'sの世界へトリップして以来1年、サテライトの生活に耐えられなかった彼は脱出を決行する。脱出は何とか成功したのだが、遊星とジャックのライディング・デュエルに見惚れてしまい、逃げる機会を逃してしまう。その結果、赤き竜の出現に巻き込まれ、気を失ってしまい、セキュリティに捕まってしまう。その後、顔にマークを付けられ収容所に連れ去られる。その経験が彼に辛い思いをさせたが、ジャンクとクリボーに励まされ、困難に立ち向かうことを決意する。そして収容所で遊星と出会い、彼と友人

関係を築いた。そして漆黒のキングと呼ばれるプロデュエリスト、黒崎 シュウと出会い、自分が特別な痣を持つ存在だと知る。強制プログラムによって場所を移された彼は人をクス扱いる鷹栖に怒りを現し、処罰覚悟で彼を殴り飛ばした。そして遊星が鷹栖とのデュエルする事になった時は力になろうと彼に自分の相棒であり、彼のカードでもある《ジャンク・シンクロン》を貸した。しかしそれが原因で原作では勝てた筈の遊星が原作以上にピンチになり、それを見た彼は自分を攻め、デュエルを中止させようとした。しかし遊星は鉄也も信じてデュエルを続け、鉄也の切り札である《ジャンク・デストロイヤー》で勝利を収めた。その後、遊星は釈放され、いつかデュエルをしようと約束をした。それからしばらくして彼自身も釈放され、自分の潜在能力を引き出す為、十六夜 アキに挑戦する為にダイモンエリアへと向かった。

【デュエル・オブ・フォーチュンカップ編】

シュウに誘われて痣を覚醒させる為にフォーチュンカップへ出場した。最初の試合で死羅とデュエルした。おまけキャラの筈なのに苦戦したが、勝った。ちなみにここで何故この世界へ転生したのか記憶を取り戻した。そして次の試合でボマーとデュエルし、また苦戦したけど勝った。そして準決勝でアキを相手にすることになった。このデュエルで鉄也はアキのサイコパワーによって体がボロボロになりながらもデュエルを続けた。途中で遊斗から《ギガンテック・ファイター》を貰い、重傷を負いながらもアキに逆転した。しかし傷が酷かった為、瀕死状態となった。

キャラ構築

ボケ

クール

マジメ

ツツコミ

天然

基本的に真面目なツツコミキャラであり、ボケる事が少ない。

使用デッキ

ジャンク・シンクロンやザ・カリキュレーターを生かしたローレ
ベルビートダウン。

戦略はジャンク・シンクロンでザ・カリキュレーター、またはチ
ューニング・サポーターを蘇生させ、地獄の暴走召喚でシンクロ素
材を集めてジャンク・ウォリアーのパワーアップ、またはジャンク・
デストロイヤーの破壊効果を利用する。 光属性と闇属性が多く、
カオス・ソーサラーも使用する。

切り札は《ジャンク・ウォリアー》《ザ・カリキュレーター》《
ジャンク・デストロイヤー》《ゴヨウ・ガーディアン》《カオス・
ソーサラー》《ギガンテック・ファイター》

体力は高く、学力は平均である。

好きなもの

カップラーメン、アニメ、漫画、ゲーム、デュエル、ハルヒ、カ
レー、特撮、ドラゴンボール

嫌いなもの

ニート、弱い者いじめ、メタデッキ、アンティルール

得意なもの

家事様々、様々な仕事、肉弾戦

苦手なもの

借金、女性との付き合い、ホラー系（アンデット族はある程度いける。）

5D・Sで嫌いなキャラランキングトップ5

第1位 ロリコンサディスト（プロフェッサー・フランク）

第2位 鼻毛所長（鷹栖）

第3位 尻軽女（バーバラ）

第4位 苦勞（苦勞・ホーガン）

第5位 肩メガネ（来宮虎堂）

P o w e r o f F e l l o w s 特別カード設定第1弾 (前書き)

一応、アニメの世界なのでカードの設定を書いてみました。
色々追加して欲しいカードがあつたら教えて下さい。

Power of Fellows 特別カード設定第1弾

これは一応、作者が考えたこの小説でのカード設定です。

《青眼の白龍》

価格：3億円〜

DMが広まり始めた時代ではあまりの強さの為に生産中止となったカード。その所為か世界で4枚しか存在しないカードとなった。（しかしあるきっかけにより、3枚となった。）DMが誕生された世代では海馬瀬人が所持していた切り札であり、彼の象徴でもある。現在ではどうなっているのかは不明。

《スターダスト・ドラゴン》

価格：7000万円〜

デュエルキング、不動遊星が所持しているカード。シグナーの竜の1つであり、世界で1枚しか存在しない。

《ブラック・ローズ・ドラゴン》

価格：7000万円〜

十六夜アキが所持しているカード。スターダスト・ドラゴンと同様、シグナーの竜の1つであり、世界に1枚しか存在しないレアカード。

《レッド・デーモンズ・ドラゴン》

価格：250円

元デュエルキング、ジャック・アトラスが所持しているカード。
スターダスト・ドラゴンと同様、シグナーの竜の1つであり、世界に1枚しか存在しないレアカード。

《ブラック・フェザー・ドラゴン》

価格：7000万円

サテライトの住人、ロバート・ピアスンが所持しているカード。
スターダスト・ドラゴンと同様、シグナーの竜の1つであり、世界に1枚しか存在しないレアカード。

《氷結界の龍トリシューラ》

価格：8000万円

世界に30枚しか存在しないレアカード。 召喚条件は難しいが、効果が強力であり、シンクロデッキには捨てがたい存在。 青眼の白龍程ではないが、ステータスとレア度で高価なカードである。

《大天使クリスティア》

価格：200万円

天使族で最も強力なレアカード。 あまりにも強力であり、召喚すれば相手は勝てなくなってしまうほどである。 強力すぎる為、滅多に量産されない。

《ギガンテック・ファイター》

価格：4000万円

戦士族でほぼ不死身的能力を持つモンスター。 世界に1枚しか存在しない。 藍沢遊斗が保管していたが、今は村上鉄也が所持し

ている。

《ブラック・マジシャン》

価格：700万円

初代デュエルキング、武藤遊戯が所持していたエースモンスター。その存在は青眼の白龍と匹敵する。

《ブラック・マジシャン・ガール》

価格：60万円

ブラック・マジシャン同様、武藤遊戯が所持していたモンスターカード。レアカードであり、最も人気が高い。

《TGシリーズ》

価格：未定

謎のD・ホイラーが所持していたカードシリーズ。正式に生産されていないカードであるため価格は決まっていない。

《宝玉獣シリーズ》

価格：約3000万円

I2社の社長、ペガサス・J・クロフォードが古代ローマの王、ユリウス・カエサルが世界中から集めた7つの宝石の成分を使用して作られたカード。世界に1種類1枚しか生産されていないが、5D'sの時代で若干量産され始めた。（しかし究極宝玉神は量産されなかった。）しかしそれでもレア度かなり高いカードである。しかしこのシリーズは相応しいデュエリストを選ぶ。ブラザーフッドの一員、ルーカス・アンデルセンはこのカードを

使用している。

《究極宝玉神レインボー・ドラゴン》

価格：10億円

ペガサス・J・クロフォードが精霊の石版を元にして作ったカード。 宝玉獣の切り札である。 宝玉獣は量産されたが、このカードは量産されなかった。 よって世界に1枚しか存在しない貴重なレアカード。

《六武衆》

価格：数万円

日本の歴代に実在した戦国武将をモデルにしたシリーズ。 マニアの中では有名。

《サイバー流》

価格：数十万円

《サイバー・ドラゴン》と《サイバー・ドラゴン》を融合素材としたカテゴリ。 オーバーキルを達成させるほどの実力を持つ。 サイバー流を受け継ぐ者にしか手に入れることが出来ない。

《E・HEROシリーズ》

価格：300円～10万円

《融合》を戦力とするカテゴリ。 様々なバリエーションに加え、様々な召喚方法があり、その実力は半端ない。

特に最強のE・HERO、《E・HERO アブソルートZero》は10万円もする。

《オシリスの天空竜》 《ラーの翼神竜》 《オベリスクの巨神兵》

価格：100億円

絶大な力を持つ3枚のカードであり、《三幻神》と呼ばれる神のカード。3000年前の古代エジプトの神官 セトが残した壁画を見たデュエルモンスターの生みの親であるペガサスが、そこに刻まれていた3体の幻神獣の絵を元にカードとして作り上げられた。

宇宙万物の両極性を象徴するとされ、この3枚のカードを全て手に入れたものは永遠不敗の伝説と共に決闘界の支配階級の頂点に君臨し決闘王の称号を得ると言われる。三幻神のカードはあまりにも強力な為、かつては封印された。また、複製の神のカードを使った者は天罰を喰らうという。また、千年アイテムに縁のある人間しか操ることが出来ない。（オレイカルコスの結果を通してオベリスクの巨神兵を使用したグリモや一時的にラーの翼神竜と共闘した遊城十代など例外もある。）そして第1バトルシティで3体の神が戦う展開が起こり、そしてそのバトルシティで初代デュエルキングとなった武藤遊戯が3枚の神のカードの所持者となった。現在での3枚の神のカードの存在は不明。

《聖帝オーディン》 《極神皇トール》 《極神皇ロキ》

価格30億円

《三極神》と呼ばれる神属性のシンクロモンスター。その強さは《三幻神》に匹敵すると言われる。チーム・ラグナロクのメンバー、ハラルド、ドラガン、ブレイブが1枚ずつ所有している。

P o w e r o f F e l l o w s 特別カード設定第1弾 (後書き)

色々追加して欲しいカードがあったら教えて下さい。

第41話 分かり合えない気持ち（前書き）

すいません、今回はあまり文章に自信ないです。

第41話 分かり合えない気持ち

S i d e / ルーカス

アルカディアムーブメント本部

アルカディアムーブメント……それはディヴァインがサイコデューリストの理想郷のために構成された組織だ。

組織の活動内容はサイコデューリストの純粋な研究とされているが、実は裏でサイコデューリストたちの持つ超能力をデューエルによって増幅させてデューエル以外でも能力が使えるように訓練し、兵士として育て上げる事だ。

そしてその兵士を使い、やがて世界を掌握しようと目論むのがディヴァインの目的だ。

ちなみに俺はサイコデューリストではない。

まあ、似ている能力を持っているが。

俺は半年辺りでこの組織に手を貸している。

別にサイコデューリストの理想などに興味があるわけではない。

能力の情報を俺の本部に送りつけるのが仕事だ。

まあ、この組織ももう直ぐ潰れるがな。

そついや自己紹介が遅れたな。

俺はブラザーフッド・ナンバーIX、ルーカス・アンデルセンだ。

「！！ 来たか……」

S i d e E n d

S i d e / 結衣

とりあえず私は中に入っていた……アルカディアムーブメントの中へ。

資料は色々教えてくれた、サイコデュエリストの存在……ディヴァインという者が指導している事……そして十六夜アキもそのサイコデュエリストの1人だという事……

そして資料に十六夜が見つかる場所が書いてあり、それを辿ってみたら……

「久しぶりね……十六夜アキ。」

「あなたは……確かフォーチュンカップで……」

「あら……それ以前にお会いした事があるじゃない、デュエルアカデミアで。やはりあなたが黒薔薇の魔女だったのね。」

「……………」

「どうやら私の事を覚えていないようね。でも、丁度良い……私はあなたを倒す為に来たわ。」

「どうやらあなたは侵入者ね……悪く思わないでもらうわ。」

私と十六夜はデュエルディスクを起動した。

「「デュエル!!」」

結衣 LP4000

VS

アキ LP4000

「私のターン！ 私は霞の谷の戦士を召喚する！」

霞の谷の戦士

4

ATK1700

「さらに永続魔法、エレメントの泉を発動！」

フィールドの一部に泉が現れた。

「カードを1枚セットし、ターンエンド！」

結衣/LP4000

手札4枚

モンスター/霞の谷の戦士（攻）

魔法・罠/エレメントの泉、リバース×1

「私のターン……私はサイクロンを発動！ その伏せカードを破壊する！」

竜巻が私の伏せておいた次元幽閉を包み込み、破壊した。

「更に手札のダンディライオンを捨て、ワン・フォー・ワンを発動。デッキからグローアップ・バルブを特殊召喚する。」

グローアップ・バルブ

1

DEF100

「そしてダンディライオンの効果を発動。このカードが墓地に送られた場合、綿毛トークンを2体特殊召喚する。」

綿毛トークン×2

1

DEF0

「私はボタニカル・ライオを召喚する。」

ボタニカル・ライオ

4

ATK1600

「ボタニカル・ライオは自分フィールドに存在する植物族モンスター

ー1体につき攻撃力が300ポイントアップする。私の植物族モンスターは4体。よって1200ポイントアップする。」

ボタニカル・ライオ

4

ATK1600 2800

「バトル……ボタニカル・ライオで霞の谷の戦士を攻撃。」

『ガウウウウ!!』

ボタニカル・ライオは霞の谷の戦士を切り裂いた。

結衣 LP4000 2900

「くっ……でも、霞の谷の戦士の効果を発動！ダメージ計算終了時に戦闘を行ったモンスターを手札に戻す！」

ボタニカル・ライオの周りに突風が入り、吹き飛ばされた。

「さらにエレメントの泉の効果を発動！モンスターが手札に戻る度にライフを500ポイント回復させる！」

結衣 LP2900 3400

「……カードを2枚セットし、ターンエンド。」

アキ／LP4000

手札1枚

モンスター／綿毛トークン2体（守）、グローアップ・バルブ（守）

魔法・罨／リバーズ×2

「私のターン！ 私はフィールド魔法、霞の谷の神風を発動！」

「来るようね……バウンスコンボが。」

「私は霞の谷の雷鳥を召喚する！」

霞の谷の雷鳥

3

ATK1100

「このモンスターを手札に戻し、手札からA・ジェネクス・バードマンを特殊召喚する！」

A・ジェネクス・バードマン

3

ATK1400 1900

「さらに霞の谷の雷鳥は手札に戻った場合、特殊召喚する！」

霞の谷の雷鳥

3

ATK1100

結衣 LP3400 3900

「さらに霞の谷の神風の効果を発動！ 風属性モンスターが手札に戻った場合、デッキからレベル4以下の風属性モンスターを特殊召喚する事が出来る！」

霞の谷の雷鳥

3

ATK1100

「そして手札に戻った霞の谷の雷鳥の効果を発動！ 手札から特殊召喚する！」

霞の谷の雷鳥

3

ATK1100

「レベル3、霞の谷の雷鳥2体にレベル3、A・ジエネクス・バードマンをチューニング!」

3 + 3 + 3 〓 9

「シンクロ召喚! ミスト・ウォーム!」

ミスト・ウォーム

9

ATK2500

「ミスト・ウォームはシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上のカードを3枚まで選択し、手札に戻す。」

「それはシンクロ召喚に成功した場合……私はグローアップ・バルブをリリースし、ポリノシスを発動! ミスト・ウォームの特殊召喚を無効にし、破壊する!」

「何!？」

グローアップ・バルブは花粉と化し、ミスト・ウォームを包み込んだ。

『グオオオオオ!』

ミスト・ウォームは花粉に苦しみ、破壊された。

「私は……カードを1枚伏せ、ターンエンド。」

結衣 / LP 3900

手札1枚

モンスター / なし

魔法・罠 / エレメントの泉、リバーズ×1

フィールド / 霞の谷の神風

「私のターン。私はもう1度ボタニカル・ライオを召喚する。」

ボタニカル・ライオ

4

ATK 1600 2500

「バトル。ボタニカル・ライオでダイレクトアタック。」

ズバッ！！

ボタニカル・ライオは爪で私の腰の横辺りを斬る……

結衣 LP 3900 1400

「うつ……!!」

私は急に腰に痛みを感じた。

私の服は攻撃を受けた所に切られてあり、腰に血が出ていた。

「い、痛い……」

私は腰の傷を抑えた。

これがサイコデュエル……デュエルでのダメージが実現する力……

「更に私はメインフェイズ2に入り、フレグランス・ストームを発動。植物族モンスターを1体破壊し、カードをドロウする。私は綿毛トークンを破壊する。私が引いたカードはキラ・トマト。フレグランス・ストームの効果によって植物族モンスターカードを引いた場合、カードをもう1度ドロウする。ターンエンド。」

ボタニカル・ライオ

4

ATK2500 2200

アキ/LP4000

手札2枚

モンスター/ボタニカル・ライオ（攻）、綿毛トークン（守）

魔法・罨/リバーズ×1

「はあ……はあ……私のターン!」

傷は思ったより深くなさそうだ……

鉄也…あなたもこんな目に遭っていたのね。

「どうしたの？ あなたのターンよ。」

この女……私がこんな目に遭っているのを知っておいて私を挑発しているの？

しかし彼女の言う通り…こうなったからには勝たないといけない

……

「はあ…はあ……」

あの伏せカード……フリーチェーンなの？ それとも攻撃反応型？

一応、破壊しておくべきね。

「私はサイクロンを発動！」

「私はその効果にチェーンしてリミット・リバースを発動！ 墓地から攻撃力1000以下のモンスターを攻撃表示で特殊召喚する！」

ダンディライオン

3

ATK300

「リミット・リバースがフィールドから離れた為、ダンディライオンは破壊される。」

綿毛トークン×2

1

DEF0

「植物族モンスターが増えた為、ボタニカル・ライオもまた攻撃力が上昇する！」

ボタニカル・ライオ

4

ATK2200 2800

「うっ……」

サイクロンを使ってしまった上に彼女の手には踊らされた……

「……私はモンスターをセットし、ターンエンド。」

結衣/LP1400

手札0枚

モンスター/裏側守備表示モンスター1体

魔法・罫/エレメントの泉、リバーズ×1

フィールド/霞の谷の神風

「私のターン。私は綿毛トークンをリリースし、ギガプラントを

アドバンス召喚する！」

ギガプラント

6

ATK2400

あれは……鉄也を殺しかけたモンスター……

「バトル……ギガプラントで裏側表示のモンスターを攻撃。　ハ
ド・パニッシュー！」

メタモルポット

2

DEF600

「メタモルポットの効果を発動！　お互い手札を全て捨て、5枚に
なるようにドローするー！」

「でも、これでフィールドはがら空き。　私が攻撃した時に発動し
なかったという事はその伏せカードは攻撃反応ではない。」

「……………」

「つまりこの攻撃が通ればあなたの負けね。　ボタニカル・ライオ
でダイレクトアタック。」

この攻撃が通ったら私の負けになる……

S i d e E n d

S i d e / 鉄也

「まだなんですか？」

「すまない……あと1時間で着く。」

俺達は今、黒崎さんの車に乗っている。

黒崎さんたちの話によると、俺が眠っている間にブラザーフッドに襲われそうになったらしい。

まあ、襲われる前に黒崎さんが追い払ったらしいけど。

2回も殺されかけたりまた襲われそうになったり、何か色々やばくなってきたな。

流石5D's……GXと違って平和な日常は滅多に來ないな。

「黒崎さん……結衣さんが行った場所つてもしかして…アルカディアムーブメントですか？」

「ああ、多分ね。」

「でも、おかしくないですか？ 結衣さんはアルカディアムーブメントの存在を知らなかった筈じゃないですか？」

「確かにその通りだが……もしかしたらあいつが彼女に手引きした

可能性がある。」

「あいつ?。」

「そうね…彼ならやりかねない事ね。」

黒崎さんの発言に姉さんも同意している。

「……………」

「あいつって…………誰なんですか?。」

「ルーカス・アンデルセン…………ブラザーフッドの参謀だ。」

「ルーカス…………アンデルセン?。」

そいつが組織の参謀か…………

「成る程…………彼がアルカディアムーブメントにいたのか。」

遊斗も納得している…………

「誰だよそいつ……………」

「とりあえず彼と関わるのは危険だと言っておこう……………」

「……………」

一体どんな奴なんだよ…………

そう思いながら車は走り続けた…………

S i d e E n d

S i d e / 結衣

結衣 L P 1 4 0 0

「ガード・ブロックでダメージを帳消しにしたのか……」

「……」

危なかった…何とかこのターンは凌げた。

「やるわね……流石フォーチュンカップで勝ち続けた実力ね。でもメタモルポットのおかげで私の手札も増えたわ。カードを2枚セツトし、ターンエンド。」

アキ L P 4 0 0 0

手札3枚

モンスター／ボタニカル・ライオ（攻）、ギガプラント（攻）、

綿毛トークン2体（守）

魔法・罨／リバーズ×2

「私のターン！」

これで手札が7枚……手札のアドバンテージが出来た。
ここからが本番よ……

「相手フィールド上に地属性モンスターであるギガプラントとボタニカル・ライオが存在するため、手札から神禽王アレクトールを特殊召喚出来る！」

神禽王アレクトール

6

ATK2400

「そして私は魔導戦士ブレイカーを召喚する！」

魔導戦士ブレイカー

4

ATK1600

「魔導戦士ブレイカーは召喚に成功した時、魔力カウンターを乗せ、1つにつき300ポイントアップする。」

魔導戦士ブレイカー

4

ATK1600 1900

「魔導戦士ブレイカーの効果を発動！ 魔力カウンターを取り除き、その伏せカードを破壊する！ マナ・ブレイク！！」

『ハア！』

「私はその効果にチェーンして和睦の使者を発動。 このターンモンスターは戦闘によって破壊されず、ダメージは0となる。」

「フリーチェーン……カードを2枚セットし、ターンエンド……！」

何故なの……何故私は魔女にかすり傷すら付けられないの……
これが黒薔薇の魔女……

結衣/LP1400

手札3枚

モンスター/神禽王アレクトール（攻）、魔導戦士ブレイカー（攻）

魔法・罨/リバーズ×2

「私のターン……私は綿毛トークンを2体リリースし、フェニキシアン・クラスター・アマリスをアドバンス召喚する。 さらに装備魔法、スーペルヴィスを発動。 ギガプラントに装備し、デュアルモンスターをデュアル状態にする。 そしてギガプラントの効果を発動！ 墓地から植物族モンスターを特殊召喚する！」

ダンディライオン

3

DEF 300

ボタニカル・ライオ

4

ATK 1600 2800

「うつ……」

まずい……鉄也が圧倒された時と同じ展開だ……
このままでは……

「バトル……ボタニカル・ライオで神禽王アレクトールを攻撃。
フラワー・スラッシュ!!」

「私も和睦の使者を発動! このターン自分のモンスターは戦闘に
よって破壊されず戦闘ダメージは0となる!」

私の周りに修道女が現れ、バリアを張った。

「甘いわ……私はフェニキシアン・クラスター・アマリリスで魔導
戦士ブレイカーを攻撃! フレイム・ペタル!!」

結衣 LP 1400

「和睦の使者が無効にするのは戦闘ダメージだけ……フェニキシア

ン・クラスター・アマリリスの効果を発動！ ダメージ計算後にこのモンスター自身を破壊し、800ポイントのダメージを与える。
スキッター・フレイム！！」

フェニキアン・クラスター・アマリリスは爆発し、花卉が私に向かって吹雪のように飛んだ。

「うつ……」

花卉が私の体に当たり、体を焼き尽くす……

「うああ……」

結衣 LP 1400 600

熱い……やはりダメージは本物……

鉄也……あなたはこのような相手とデュエルしていたの？

「……私はメインフェイズ2に入り、生還の宝札を発動！」

まずい……もう1度フェニキアン・クラスター・アマリリスの効果喰らえばやられてしまう……

「うつ……」

怖い……怖くなってきた。

「私はこれでターンエンド。このエンドフェイズ、私は墓地のイ

ービル・ソーンを除外し、フェニキシアン・クラスター・アマリリスを特殊召喚する！」

フェニキシアン・クラスター・アマリリス

8

DEF0

「墓地からモンスターが特殊召喚され、生還の宝札の効果を発動。カードを1枚ドロウする。」

アキ LP4000

手札3枚

モンスター／ボタニカル・ライオ（攻）、ギガプラント（攻）、
フェニキシアン・クラスター・アマリリス（守）、ダンディライオ
ン（守）

魔法・罨／生還の宝札、リバーズ×1

フィールド／霞の谷の神風

「見つけたな。しかし……彼女にとって大変な事になっているな。」

Side End

Side／ルーカス

やってるな……流石アキ。

流れは完全に彼女の物だ。

それに神風結衣……俺から見れば君の考えていることは分かる。

恐れているんだろう、黒薔薇の魔女を。

ここからどう動くか考えておく事だな。

「しかし参ったな……俺が強化を手伝ったとはいえ、アキが想像以上に強くなってしまうているな。」

今後の禁止制限の変化に彼女のデッキの弱体化を期待しよう……

S i d e E n d

S i d e / 結衣

「私の……ターン……」

どうしよう……私はこんな人を相手に選んでしまった……
勝てる筈がない、あんなデュエリストに……

「一つ聞いていいかしら？」

「!？」

突然十六夜が私に聞きだした。

「どうしてあなたは私に恨みを持っているの？」

「!?!」

そうよ……私はこの女を倒しにここまで来たのよ……

目の前にいるこの女を……兄さんを……そして鉄也を傷つけた魔女を……

「決まってるじゃない……あなたは私の兄を傷つけた！」

「!?!」

「あなたは知らないようだけど私の兄は……あなたの力によって重傷を負ったのよ！」

「!?!」

「だから私はあなたを叩き潰すと決めた！ 私のターン！」

ピカアアア……

「!?!」

私の右腕にフォーチュンカップの時と同じように痣みたいなものが現れた。

何だろう……勝てる気がしてきた……

そうよ、私は恐れているわけにはいかない！

「私は魔導戦士ブレイカーを手札に戻し、A・ジェネクス・バード

マンを特殊召喚する！」

A・ジエネクス・バードマン

3

ATK1400

「さらに私は霞の谷のファルコンを召喚！」

霞の谷のファルコン

4

ATK2000

「結衣……大丈夫か！？」

「私は……大丈夫よ！ あれでいくわよ！」

「あれ……雷神様か。」

「私はレベル4、霞の谷のファルコンにレベル3、A・ジエネクス・バードマンをチューニング！ 霞の谷の雷神よ、今こそその雷の力を解き放て！」

4 + 3 = 7

「シンクロ召喚！ 轟け、霞の谷の雷神鬼！」

霞の谷の雷神鬼

7

ATK 2600

「私は装備魔法、ビッグバン・シュートを発動！ 私はギガプラントに装備する！」

ギガプラント

6

ATK 2400 2800

「さらに霞の谷の雷神鬼の効果を発動！ ビッグバン・シュートを手札に戻し、攻撃力が500ポイントアップする！」

ギガプラント

6

ATK 2800 2400

霞の谷の雷神鬼

7

ATK 2600 3100

「フィールド上から離れたビッグバン・シュートの効果を発動！
装備モンスターを除外する！」

ギガプラントは消えた……

ボタニカル・ライオ

4

ATK2800 2500

「私は霞の谷の雷神鬼でボタニカル・ライオを攻撃！ 業雷激烈掌
！！」

「私はこの瞬間、聖なるバリア ミラーフォースを発動！！ 相手
の攻撃表示モンスターを全て破壊する！」

十六夜アキの周りにバリアが現れた。
まずい……このままでは負けてしまう！

「私は亜空間物質転送装置を発動！ この霞の谷の雷神鬼を除外す
る！！」

雷神鬼は姿を消し、攻撃の反射を免れた。

「私はメインフェイズ2に入り、ビッグバン・シュートをフェニキ
シアン・クラスト・アマリスに装備する！ そして……カード
を1枚セツトし、ターンエンド！」

霞の谷の雷神鬼が再び姿を現した。

霞の谷の雷神鬼

7

ATK2600

結衣/LP600

手札1枚

モンスター/霞の谷の雷神鬼(攻)

魔法・罠/ビッグバン・シュート(フェニキアン・クラスター・アマリリスへ装備)、リバーズ×1

「私のターン……」

「このスタンバイフェイズ、霞の谷の雷神鬼の効果を発動！ ビッグバン・シュートを手札に戻し、攻撃力をアップさせる！！」

霞の谷の雷神鬼

7

ATK2600 3100

「そしてビッグバン・シュートが離れたため、フェニキアン・クラスター・アマリリスは除外される！！」

これでフェニキアン・クラスター・アマリリスによるダメージ

から回避できる……そして簡単に雷神鬼を超えるモンスターを出す
ことなんて出来ない筈……

「私のターン……私は大嵐を発動。 フィールド上の魔法・罠カー
ドを全て破壊する。」

「!」

まずい……この展開は……

「（どうやら彼女の負けだな。）」

「私は墓地のキラ・トマトを除外し、薔薇の刻印を発動。
相手モンスターのコントロールを得る。」

『グアアアア!』

「私の雷神鬼が!」

私の雷神鬼に黒い薔薇の刻印が写り、十六夜のフィールドに移っ
た。

「私は……霞の谷の雷神鬼でダイレクトアタック。」

そんな……1度もダメージを与えられずに……何もできずに私の
……負け……

駄目……ここで殺される……

「私を倒したかったらしいけどどうやら来るだけ無駄だったようね……
……やってしまいなさい、雷神鬼。」

『グオオオオオオ!!』

雷神鬼は私に向かって襲い始めた。

「うつ……」

ごめん……兄さん……ごめん、鉄也……

「そこまでだ、アキ。」

S i d e E n d

S i d e / ルーカス

「そこまでだ。」

「はあ……はあ……」

雷神鬼の掌は神風結衣の目の前で止まった。

いや、正確に言うと俺が止めた。

俺がペガサス型のモンスターを召喚してギリギリで雷神鬼の攻撃を受け止めたのだ。

結衣 L P O

アキ WINNER

「アキ……今は流石に危ない。下手をしたら彼女を殺していたぞ。」

「ルーカス……」

「アルカディアムーブメントの目的はサイコデュエリストの素晴らしさを人々にわからせる事だろう。ここで人を殺めてしまつては問題になる。違うか？」

「……」

「アキ……俺から見れば彼女が言つた事が真実かどうか解からない。何れにしろそれが君の運命だ。自分を受け入れるのならその運命を背負う覚悟は持つべきだ。」

「……わかつているわ、ルーカス。」

「はあ……はあ……」

一方、神風結衣の眼には涙が流れていた。

ガクッ……

結衣は息が途切れた後、膝を突いてしまった。あまりの恐怖感に耐えられなくなったか。

「……………」

アキは結衣を眺めている……
俺は彼女に触れてみた。

「……大丈夫、気を失っただけだ。先程のダメージも命に問題は無い。」

「……………」

「それよりアキ、デイヴァインが呼んでいる。俺も呼ばれているから救護班を呼んでから来るな。」

「……………わかった。」

さて……彼女を、神風結衣を我々の手にする事には成功した。
後は彼女と接するタイミングを考えないとな……………

「あ、あれ……？」

「気がついたかい、龍亞君？」

「ああ、龍可あー！」

「……………」

龍可という子は今、ガラスの窓の後ろにいる、アキとディヴァインと一緒に。

状況を説明しよう。

俺がデュエルを観戦している間に客が来ていたらしい。

何とその1人がフォーチュンカップに出場していた龍可という子であった。

一応、来客達はアルカディアムーブメントに協力して欲しいと交渉していたが、ディヴァインは交渉するふりして逆に捕まえたらしい。

これがディヴァインが俺を呼んだ理由だ。

龍可はシグナーなのは既にブラザーフッドでも判明している。

そして龍亞は龍可とは双子の兄妹だから隠された力があるかもしれないらしく、俺がこの子を試す役割となった。

しかしディヴァイン……己の目的の為ならこんな子供にまで手を出すとはね。

まあ、こっちが言える事ではないか。

今日はアルカディア・ムーブメント最後の日だ……ブラザーフッドが特別に人肌脱いであげるのも悪くはないだろう。

「龍亞君、君の妹は人質にかかっている。」

「ええ！？ な、何で……」

「この俺とのデュエルに勝て……彼女を返して欲しければな。」

ガシャ、ガシャーン……

俺はデュエルディスクを起動した。

「！！」

さて……君に隠された力を試させてもらおうか。

S i d e E n d

T o B e C o n t i n u e d

ストラクチャーデッキ マグネティック・フォース (前書き)

ストラクチャー予告第3弾です。

いる筈だ……マグネット・バルキリオンが好きだった人はきっといる筈だ。

何となくそう信じている僕である。

ストラクチャーデッキ マグネティック・フォース

CV：武藤遊戯

「、、……………3体の磁石の戦士達よ。マグネット・ウォリアー 今こそ結束の力を見せる時だ！ 磁石合体！ 磁石の戦士マグネット・バルキリオン！」

「遊戯王5D'sオフィシャルカードゲーム、ストラクチャーデッキ マグネティック・フォース。好評発売中。」

2011年07月22日発売
1050円（税込み）

収録カード：モンスターカード20枚、魔法カード10枚、罠カード10枚
制限カード2枚

詳細：岩石族、または通常モンスターに関するカードが収録されている。

《磁石の戦士マグネット・バルキリオン》×1

《磁石の戦士》×1

《磁石の戦士》×1

《磁石の戦士》 x 1
《岩石の巨兵》 x 2
《巨大ネズミ》 x 2
《ジェム・マーチャント》 x 1
《迷宮壁 ラビリンスウォール》 x 1
《アステカの巨像》 x 1
《牙城のガーディアン》 x 1
《破壊のゴーレム》 x 2
《伝説の柔術家》 x 1
《ジェネティック・ワーウルフ》 x 1
《ロックストーン・ウォリアー》 x 1
《メタモルポット》 x 1
《バニーラ》 x 1
《地球巨人 ガイア・プレート》 x 1
《ハリケーン》 x 1
《光の護封剣》 x 1
《地砕き》 x 1
《悪魔への貢物》 x 1
《凡骨の意地》 x 1
《馬の骨の対価》 x 1
《闇の量産工場》 x 1
《ナチュラル・チューン》 x 1
《戦線復活の代償》 x 1
《突撃指令》 x 1
《補充要員》 x 1
《地霊術 「鉄」》 x 1
《ジャステイブレイク》 x 1
《岩投げアタック》 x 1
《化石岩の開放》 x 1
《凡人の施し》 x 1

《D2シールド》x1
《進入禁止！No Entry！！》x1
《奇跡の残照》x1
《スキルドレイン》x1

第42話 勇気と力をドッキング！（前書き）

今回は出来るだけ龍亞を活躍させました。

今後、何時出番が来るかわからないので……

おまけ

最近通常魔法カードをセットしたターンに発動できるのを知った。

第42話 勇気と力をドッキング！

S i d e / 龍可

「あ……あれ？」

眼を覚ますとそこにはアキさんとディヴァインさんがいた。

「静かにして。」

アキさんはそう私に言った。

「る、龍亞……！」

窓から見るとデュエルステージに龍亞と……青髪の男性がいた。

「な、何をしているの……！」

「テストよ……」

「ど、どういう事なの？」

「龍可ちゃん、君には精霊と話す事が出来る不思議な能力がある。双子である彼にも何か能力があると思ってね。だから私の部下が彼を試すのだ。」

「そんな……私達を騙したの……」

「アキ……君も見るがいい。ルーカスがデュエルするのを見るのは初めてだろう。」

S i d e E n d

S i d e / 龍亞

そんな……俺達は騙されたんだ。
力を貸すと言われて俺達が捕まってしまうなんて……
そして龍可……ごめん、俺のせいで。

「龍可！ 逃げろ、龍可あ！」

「悪いけど龍可ちゃんに君の声は届かない。」

「ど、どういう事だよ！ 俺達に力を貸すのは嘘だったのか？」

「悪いがディヴァインはダークシグナーに興味は無い。彼の目的はサイコデュエリスト達を集めて兵士に育てる事だ。」

「兵士！？」

「そうだ。デュエルを使ってサイコデュエルの力を増幅させ、兵士として使う。」

「そんな……」

「やがて世界はサイコデュエリスト達の物となる。それが彼の陰謀だ。」

「デュエルを戦争に使うなんて……まさか、アキ姉ちゃんもそれを知ってて!?!」

「残念だがデイヴァインは彼女に教えていないようだ。それよりデュエルを始めよう。」

ガシャ、ガシャーン!

「お、俺のディスクが!」

「君の妹を預かっているんだ。君に拒否権が無いのを解かっているだろう。さあ、思い切りかかって来い。」

「うつ……」

やるしかないんだ、龍可を助ける為には!

「サイコデュエリストを相手にするのは初めてだろう。気をつけた方がいい。さて……」

「「デュエル!」」

龍亞 LP4000

VS

ルーカス LP4000

「先攻は君に譲っておく。」

「わかったよ！ 勝てばいいんだろう！？ 俺のターン！ 俺はD・ディフォーマーラジオンを召喚する！」

俺のフィールドにラジオが現れ、人型に変形した。

D・ラジオン

4

ATK1000

「俺はD・ラジオンは攻撃表示である場合、「ディフォーマー」と名のついたモンスターの攻撃力は800ポイントアップする！」

D・ラジオン

4

ATK1000 1800

「さらにカードを1枚セットしてターンエンド！」

龍亞/LP4000

手札4枚

モンスター/D・ラジオン（攻）

魔法・罠/リバーズ×1

「俺のターン。（彼のデッキはディフォーマー……表示形式で効果変動するデッキか。彼のデッキがどういう構築になっているかどうかは知らないが、ディフォーマーのポテンシャルは高い。油断しない方が良いな。）まずはこれで行くか……」

そう思っ て俺は手札からカードを引く。

「俺は宝玉獣 トパーズ・タイガーを召喚する！」

彼の場合に角が生えた白い虎が現れた。

宝玉獣 トパーズ・タイガー

4

ATK1600

「バトル！ 宝玉獣 トパーズ・タイガーでD・ラジオンを攻撃！」

宝玉獣 トパーズ・タイガーが俺のラジオンに飛び掛った。

「え？ でも俺のラジオンの方が攻撃力が上だよ！」

「まあ、見てみるが良い。」

宝玉獣 トパーズ・タイガー

ATK1600 2000

「攻撃力がラジオンを超えた!!」

「宝玉獣 トパーズ・タイガーは攻撃する時、ダメージステップの間攻撃力が400ポイントアップする。この効果により、攻撃力は2000だ。トパーズ・バイト!」

トパーズ・タイガーはラジオンを噛み付き、ガラスのように砕いた。

龍亞 LP4000 3800

そして砕けたモンスターの残骸が俺に飛んだ。

「うわあああ!」

な、何だこの感じ……

「今の衝撃は……」

「これがサイコデュエルだ。普通のデュエルとは違う。カードを1枚セットし、ターンエンドだ。」

ルーカス/LP4000

手札4枚

モンスター／宝玉獣 トパーズ・タイガー（攻）

魔法・罾／リバーズ×1

「俺のターン！俺はD・モバホンを召喚する！」

俺の場に携帯電話が現れ、変形した。

D・モバホン

1

ATK100

「D・モバホン…ディフォーマーのキーカードを召喚したか。」

「俺はモバホンの効果を発動！モバホンが攻撃表示で存在する場合、モバホンのダイヤルに出た数字の枚数分、デッキからカードをめくり、その中にディフォーマーと名の付いたモンスターがいれば特殊召喚する事が出来る！ダイヤル……オン！」

ピポパポッ！

「ようし、4が出た！この中から俺はD・ボードンを特殊召喚する！」

D・ボードン

3

ATK500

「D・ボードンが攻撃表示で存在する場合、ディフォーマーは全て相手プレイヤーへ直接攻撃をする事ができる！」

「悪いけど君は伏せカードを警戒するべきだ。俺はD・ボードンが特殊召喚された時に激流葬を発動。フィールド上のモンスターを全て破壊する。」

「ええ！？」

巨大な洪水が現れ、俺のディフォーマー達を流した。

「うわあああ！！」

激流葬は俺まで巻き込んだ。
溺れかけたけど助かった……

「はあ……はあ……」

キラキラキラキラ……

「あれ？ トパーズ・タイガーが……」

よく見ると激流葬によって破壊されたトパーズ・タイガーはフィールドから消えずに黄色の宝石になっていた。

「『虎は死して皮を残す』というのがあるだろう。宝玉獣 トパーズ・タイガーは破壊された時、墓地へは行かず永続魔法カードと

して魔法・罨ゾーンに置く事ができる。 宝玉獣は死んでも美しい
宝石として場に残る。 これが俺のデッキ、『宝玉獣』だ。」

「一体その効果に何の意味が……」

「それは後にわかる。 それよりターンエンドを宣言するのか？」

「お、俺はカードを1枚セットし、ターン終了だ！」

龍亞 / LP 3800

手札 4枚

モンスター / なし

魔法・罨 / リバース × 1

「俺のターン、俺は宝玉獣 アメジスト・キャットを召喚する。」

今度は桃色の猫が現れた。

宝玉獣 アメジスト・キャット

3

ATK 1200

「さらに装備魔法、宝玉の開放を発動。 このカードは『宝玉獣』
と名のついたモンスターの装備カードとなり、攻撃力が800ポイ
ントアップする。」

宝玉獣アメジスト・キャット

3

ATK1200 2000

「バトル。 宝玉獣 アメジスト・キャットでプレイヤーにダイレクトアタック。」

アメジスト・キャットは俺に飛び込んできた。

この攻撃を受けたら……

「お、俺はD・スクランブルを発動！ 自分フィールド上にモンスターが存在しない場合で相手が直接攻撃を宣言した時、手札から『ディフォーマー』と名のついたモンスターを特殊召喚し、その攻撃を無効にする！ 行け、D・パッチン！！」

俺のフィールドにパチンコが現れ、ロボットに変形した。

D・パッチン

4

ATK1200

バチチチチッ！！

D・パッチンの周りにバリアが現れ、アメジスト・キャットの攻撃を防いだ。

「そう来なくては面白くない。俺はカードを2枚セットし、ターンエンドだ。」

ルーカス／LP4000

手札1枚

モンスター／宝玉獣 アメジスト・キャット（攻）

魔法・罾／宝玉の解放（宝玉獣 アメジスト・キャットへ装備）、

宝玉獣 トパーズ・タイガー、リバーズ×2

ここはどうかしないと……このカードに賭けるしかない！

「俺のターン！ 俺はジャンクBOXを発動！」

「ジャンクBOX……モバホンを蘇生させるか……」

D・モバホン

1

ATK100

「俺はD・モバホンの効果を発動！ ダイアル・オン！！」

ピポポポ……

「ようし、6が出た！ 俺はこの中からD・クリーナンを特殊召喚するー！」

俺のフィールドに掃除機が現れた。

D・クリーナン

1

DEF0

「D・クリーナンの効果を発動！ このモンスターが守備表示の場合、1ターンに1度だけ相手フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスターを装備カード扱いとしてこのカードに1体のみ装備する事ができる！ この効果で宝玉獣 アメジスト・キャットを吸収だ！！」

D・クリーナンはアメジスト・キャットを吸い込んだ。

「装備モンスターがフィールドを離れた為、宝玉の解放は破壊される。そしてその瞬間、宝玉の解放の効果を発動。デッキから『宝玉獣』と名のついたモンスター1体を永続魔法カード扱いとして自分の魔法・罠カードゾーンに表側表示で置くことができる。俺はデッキから宝玉獣 サファイア・ペガサスを魔法・罠カードゾーンに置く。」

青い宝石が彼の場合に現れた。

「俺はD・パッチンの効果を発動！ このモンスターは自分以外のデIFOォマーをリリースする事でフィールド上のカードを1枚破壊できる！俺はモバホンをリリースし、その伏せカードを破壊だ！」

パツチンはパチンコと化し、モバホンを乗せ、伏せカードに向かって射出した。

「ジャンクBOXで召喚したモバホンを蘇生させてリリースする事でデメリットを回避させるとは、子供にしてはやるな。だが、この伏せカードはフリーチエーンだ。俺はD・パツチンの効果にチエーンして威嚇する咆哮を発動！」

伏せカードは直撃する直前に開き、何かの咆哮が起こった。

「このターン、君は攻撃宣言を行えない。」

「……」

駄目だ……全然攻撃が通らない！

「俺は……カードを1枚セットしてターンエンドだ！」

龍亞 / LP 3800

手札 2枚

モンスター / D・パツチン（攻）、D・クリーナン（守）

魔法・罠 / 宝玉獣 アメジスト・キャット（D・クリーナンへ装備）、リバーズ×1

「俺のターン……俺は魔法カード、レア・ヴァリユを発動。このカードは自分の魔法・罠カードゾーンに「宝玉獣」と名のついたカードが2枚以上存在する時に発動する事ができる。相手プレイヤーは自分の魔法&罠カードゾーンに表側表示で存在する『宝玉獣』

と名のついたカード1枚をが選択して墓地へ送り、俺はカードを2枚ドローする。」

えっと……トパーズ・タイガーは攻撃力を上昇させる効果があるから……

「じゃあ、俺はトパーズ・タイガーを選択する！」

「いいだろう、俺はカードを2枚ドローする。そして俺は2枚目の宝玉獣 サファイア・ペガサスを召喚する。」

今度は白いペガサスが表れた。

宝玉獣 サファイア・ペガサス

4

ATK1800

「宝玉獣 サファイア・ペガサスの効果を発動。このモンスターが召喚、反転召喚、または特殊召喚に成功した時、自分の手札・デッキ・墓地から『宝玉獣』と名のついたモンスター1体を永続魔法カード扱いとして自分の魔法・罠カードゾーンに表側表示で置く事ができる。俺はデッキから宝玉獣 ルビー・カーバンクルを魔法・罠カードゾーンに置く。 サファイア・コーリングー!!」

サファイア・ペガサスの角が光り、彼のフィールドに赤い宝石が現れた。

「……（しかし今の所、彼からは何も感じないな…… やはりただ

の無能力者か？） さらに俺は宝玉の契約を発動。 このカードは自分の魔法・罾カードゾーンに存在する『宝玉獣』と名のついたカードを特殊召喚する。 俺は宝玉獣 ルビー・カーバンクルを特殊召喚する！」

『ビー~~~~~！』

次は尻尾に赤い宝石が付いた紫色の猫のようなモンスターが現れた。

宝玉獣 ルビー・カーバンクル

3

ATK300

「さらに宝玉獣ルビー・カーバンクルの効果を発動！ このモンスターが特殊召喚に成功した時、魔法・罾ゾーンに存在する宝玉獣を可能な限り特殊召喚する！ ルビー・ハピネス！」

ルビー・カーバンクルは尻尾の先から光りを照らし、青い宝石に当たった。

宝玉獣 サファイア・ペガサス

4

ATK1800

「更にもう1度サファイア・ペガサスの効果を発動！ デッキから

宝玉獣 アンバー・マンモスを魔法・畏ゾーンに置く！」

サファイア・ペガサスはオレンジ色の宝石を出した。

「バトルフェイズに入らせてもらおうか。俺は宝玉獣 ルビー・カーバンクルでD・クリーナンを攻撃！」

ルビー・カーバンクルは尻尾から光を放ち、クリーナンに当てて破壊した。

「うわぁ……」

「さらに、宝玉獣 サファイア・ペガサスでD・パッチンを攻撃。この瞬間俺は畏カード、幻獣の角を発動！ このカードは発動後、獣族、または獣戦士族モンスターの装備カードとなり、攻撃力が800ポイントアップする！」

サファイア・ペガサスに鹿のような角が生えた。

宝玉獣 サファイア・ペガサス

4

ATK1800 2600

「サファイア・ホーン!!」

サファイア・ペガサスは角でパッチンを突いて破壊した。

「うっ……」

龍亞 LP 3800 2400

「幻獣の角の効果を発動。 装備モンスターが相手モンスターを戦闘によって破壊する度にカードを1枚ドローする。 そして俺はもう1体の宝玉獣 サファイア・ペガサスでプレーヤーヘダイレクトアタック。 サファイア・トルネード!!」

ブオオオオ!!

サファイア・ペガサスは俺に向かって物凄い風を飛ばした。

「うわあああ!!」

龍亞 LP 2400 600

ドン!

風に吹き飛ばされる所だったけど、足枷の所為で床に叩きつけられた。

「うつ……」

「俺はカードを1枚セットし、ターンエンドだ。」

ルーカス／LP4000

手札2枚

モンスター／宝玉獣 サファイア・ペガサス・1（攻）、宝玉獣
サファイア・ペガサス・2（攻）、宝玉獣 ルビー・カーバンク
ル（攻）

魔法・罾／幻獣の角（宝玉獣サファイア・ペガサス・1に装備）、
リバーズ×1

「い、痛いよ……痛いよ……」

駄目だ……勝てる筈が無い！
怖いよ……

「どうした？ 掛かってこないのか？」

「うっ……うわあ〜ん！」

「……（まあ、無理もないな。子供だから仕方ない。だが、それで逃がす俺ではない。） 早く立ち上がった方がいい。 龍亞君、君がここで諦めたらどうなるか解かるか？」

「ひぐっ……？」

「俺はディヴァインの目的を君に教えた。つまりディヴァインが君を生かしてくれる保証は無い。そして君の妹は永遠にここに囚われる事になる。」

「あ……ああ……」

「大切な者を助けたければ覚醒するんだ、君の能力を……」

「俺の……能力……」

「どんな事があっても龍可は俺が守らなきゃいけないんだ！」

「そうだ…龍可は俺が守るんだ!!」

「（復活したか……） そうだ、その意気だ。」

「俺のターン！ 俺はD・スコープンを召喚！」

顕微鏡が現れ、変形した。

D・スコープン

3

ATK800

「D・スコープンの効果を発動！ 1ターンに1度、手札のレベル4のディフォーマーを特殊召喚することが出来る！ 俺は手札から

2体目のD・パッチンを特殊召喚する！」

D・パッチン

4

ATK1200

「さらに俺は永続罫、リミット・リバーズを発動！ 墓地から攻撃力1000以下のモンスターを特殊召喚する！ 現れよ、D・モバホン！」

D・モバホン

1

ATK100

「D・モバホンの効果を発動！ ダイアル〜オン！」

ピポポポポ……

「出た数字は……3だ！」

「3か…確率は低そうだな。」

「（頼む……出てきてくれ！） ようし、俺はD・チャッカンを特殊召喚だ！」

D・チャッカン

3

ATK1200

「俺はD・チャッカンの効果を発動！俺はモバホンをリリースし、相手プレイヤーに600ポイントのダメージを与える！」

ボワア……

チャッカンは彼に向かって火を噴いた。

「くっ……」

ルーカー LP4000 3400

「更に俺はD・パッチンの効果を発動！D・チャッカンをリリースして幻獣の角を装備している宝玉獣 サファイア・ペガサスを破壊する！」

パッチンはチャッカンを射出してサファイア・ペガサスに直撃した。

「だが、サファイア・ペガサスは破壊された時、墓地へは行かずに魔法・罠ゾーンに置くことが出来る。」

サファイア・ペガサスは輝く青い宝石となった。

「まだまだあ！俺はレベル4、D・パッチンにレベル3、D・スコープンをチューニング！世界の平和を守るため、勇気と力をドッキング！」

4 + 3 = 7

「シンクロ召喚！愛と正義の使者！パワー・ツール・ドラゴン……！」

『クオオオオオ！』

俺の場に右腕にシャベル、左腕にドライバーが付いたロボットの形をしたモンスターが現れた。

「パワー・ツール・ドラゴン…… やっと手応えがありそうなモンスターを召喚したか。」

「これが俺の切り札だ！」

パワー・ツール・ドラゴン

7

ATK2300

「そしてパワー・ツール・ドラゴン（アニメ効果）の効果を発動！1ターンに1度、自分のデッキからランダムに装備魔法カード1枚を手札に加える事ができる！パワー・サーチ！！」

「装備魔法をランダムにサーチする効果か。　（地味な効果だな…
…　しかし何だ、この感覚は？）」

「やった！　俺は装備魔法、ダブルツールD&Cを発動！　このカードはパワー・ツール・ドラゴンの装備カードとなり、自分のターンの間、攻撃力が1000ポイントアップする！！」

ガシャガシャ……ジャキーン！

パワー・ツール・ドラゴンの腕がカッターとドリルに変形した。

パワー・ツール・ドラゴン

7

ATK2300　3300

「攻撃力が3000を超えたか……」

「行っけえええ、パワー・ツール・ドラゴン！　宝玉獣　ルビー・カーバンクルを攻撃！　クラフティ・ブレイク！」

ギューーーーーーン！！

頼む、通ってくれ！

「（まあ、この程度の攻撃は伏せてある次元幽閉を発動すれば問題ないが、ライフは十分残る。　彼の手札にリミッター解除があれば話は別だがここはあえて通すでしょう。）」

ギューイーーーーーーッ！！

パワー・ツール・ドラゴンのドリルがルビー・カーバンクルに直撃した。

ルーカス L P 3 4 0 0 4 0 0

「やったー！！」

「（シグナーかどうかは知らないが、この子……何か力が宿っているのは間違いないな。しかし覚醒からは程遠いみたいだな。）やるな……しかしルビー・カーバンクルは墓地へは行かず、宝玉となる。」

「それもわかってるよ！ ダブルツール D & a m p ; C は自分のターンの間、装備モンスターの攻撃対象となったモンスターの効果は無効になる！」

「何！？ 宝玉獣が宝玉になる効果はフィールドで発動する効果……つまりルビー・カーバンクルを魔法・罠ゾーンへは置く事はできないという事が……」

「どうだ！ 俺は……俺こそ5人目のシグナーだ！ ターンエンド！」

パワー・ツール・ドラゴン

7

ATK 3300 2300

龍亞 / LP 600

手札 1枚

モンスター / パワー・ツール・ドラゴン (攻)

魔法・罠 / ダブルツール D & C (パワー・ツール・ドラゴンに装備)

「俺のターン…… (やるな…… 手を抜いたとはいえ俺をこま
でやるとは。しかし所詮、彼は子供。俺から見ればデュエリス
トとしての経験がまだ浅い。) 悪いけど君の負けだ。俺はおろ
かな埋葬を発動。デッキからグローアップ・バルブを墓地へ送る。」

「グローアップ・バルブ…… 確かあれはアキ姉ちゃんが使っていた
墓地から召喚できるチューナーモンスター！」

「その通りだ。デッキトップ1枚を墓地へ送り、墓地からチュー
ナーモンスター、グローアップ・バルブを特殊召喚する！」

グローアップ・バルブ

1

DEF 100

「(悪いが君がルビーに与えた屈辱はこのカードで晴らさせてもら

う。〕　そして俺は2枚目の宝玉の契約を発動。　この効果により、魔法・罨ゾーンに存在する宝玉獣　サファイア・ペガサスを特殊召喚する。」

宝玉獣　サファイア・ペガサス

4

ATK1800

「俺は宝玉獣　サファイア・ペガサスの効果を発動！　デッキから宝玉獣　エメラルド・タートルを魔法・罨ゾーンに置く。」

彼の場合に緑色の宝石が現れた。

「まさか……シンクロ召喚！？」

「そうだ。　俺をここまで追いやった褒美として特別に見せてやるう。　レベル4、宝玉獣　サファイア・ペガサス2体にレベル1、グローアップ・バルブをチューニング！　史上最強の氷の龍よ、今ここに封印を解き放ち天地を制圧せよ！」

4 + 4 + 1 〃 9

「シンクロ召喚！　氷結界の龍　トリシューラ！！」

『『『グオオオオオ！！！！』』』

ルーカスのフィールドに巨大な三つ首のドラゴンが現れた。
その姿はいかにも強そうだった。

「あ、あれは……氷結界の龍 トリシューラ!!」

「どうやら知っているようだな。」

「確か…世界で30枚しか存在しない史上最強のシンクロモンスター……」

「そう、その通りだ……」

氷結界の龍 トリシューラ

9

ATK2700

「でも、パワー・ツール・ドラゴンは破壊される場合、自身に装備されている装備カードを墓地に送ることで破壊を免れる!」

「（力が宿っていることは間違いないが、ディヴァインには黙っておくか…… 何れにせよアルカディアムーブメントはもう直ぐ潰れるからな。） 良い効果だな。 だが、トリシューラはその効果を遥かに凌ぐ。 俺は氷結界の龍 トリシューラの効果を発動する。」

このモンスターがシンクロ召喚に成功した時、相手の手札、フィールド、そして墓地のカードを1枚ずつ除外する事ができる。 俺は君の1枚の手札、フィールドのパワー・ツール・ドラゴン、そして墓地のD・モバホンを除外する。 氷結封殺閃!!」

『『グオオオオオ！！』』

ヒュオオオオオ……

トリシューラのそれぞれの首が俺の手札・フィールド・墓地に氷の息を吹いた。

除外されたカード

ガジェット・トレーラー（手札）

パワー・ツール・ドラゴン（フィールド）

D・モバホン（墓地）

『グアアアアア！』

ピキピキピキ……パリーン！

「ああっ！ パワー・ツール・ドラゴンが！」

パワー・ツール・ドラゴンは凍りついて砕けた。

「（まあ、子供には楽しませてもらったな……） 残念だな、パワー・ツール・ドラゴンは破壊に耐久はあっても除外にはない。バトルだ。 氷結界の龍 トリシューラでプレーヤーヘダイレクタアタック。 氷結三槍波！」

『『グオオオオオオオ！！』』

氷結界の龍トリシューラは俺に向かって光線を吹き出した。

「うわああああ!!」

龍亞 LP6000

ルーカス WINNER

「はあ……はあ……ごめん、龍可……負けちゃった……」

バタッ!

Side End

Side / アキ

「龍亞君は負けてしまったようだね…… ところでアキ。 どうだ、彼の实力は?」

「す、凄い……」

それにあの宝玉獣をこの目で見るなんて……
そして今の環境で宝玉獣を使いこなし、シンクロモンスターと合わせる事で更なる力を引き出した……

「どうやら彼は役に立たない無能力者だったようだね。」

「龍亞!!」

「安心したまえ、龍可ちゃん。彼は無闇に人を殺したりする事はない。それに君が同意して貰うように生かせておかないとね。」

「龍亞……龍亞あ!!」

S i d e E n d

S i d e / 鉄也

1時間後

「ここだ。」

「ようし……」

やっと着いた……アルカディアムーブメントに。
結衣さん大丈夫かな……

S i d e E n d

T
o

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d
.....

第43話 サイバー流を受け継ぐ者

前回のあらすじ

「うわああああー!!」

何てことだ……僕は人を殺してしまった。

「はあ……はあ……」

確かにあの人は重罪だ……しかし殺す必要なんてあったのか？

「はあ……はあ……」

いや、待て……

そうだ……世界は腐っている……

罪人は死で懲らしめなければならない。

「これは……神が僕に与えた使命なんだ……」

そう……僕こそ正義だ……

悪い人間を全て排除し、この世から消しさり……そして世界に悪は存在しなくなる！

そして……

「僕は新世界の神となる！」

「やっぱ人間って…………面白〜」

鉄也「いや全然違うだろ、ダメ作者。作品自体違うだろ。
真面
目にやれ。さもないとノートにお前の名前を書くぞ。」

S i d e / ? ? ?

『ギョオオオオ……』

「……………」

私の中にいる化物が私にこう言っている……
復讐の時が来たよね。

そろそろ私も行くべきね……あの男を倒すために。
そう……あの男のせいで……あの男の野望のせいで私はたった1
人の弟を失った。

今、敵を取ってあげるわ……………トビー。

『グオオオオオ……』

S i d e E n d

S i d e / 鉄也

やっと着いたな、アルカディアムーブメントに。
今の所、遊斗がドアを開けようとしている。
どうやらパスワード式になっているらしい。
遊斗はiPhoneらしい機械でパスワードを説こうとしていた。

「しかし厄介な事になるな……」

やばいよこれ……アルカディアムーブメントがやばいと言っている訳じゃない。

この組織にはこれから大変な事が起こるからやばいと言っているんだ。

そう思っただけは姉さんに聞いてみた。

「姉さん、黒崎さんには原作展開を教えてくださいましたか？」

「…………一応、教えておいたわ。でも、私から考えてみれば原作知識は頼りにならないわ。」

「え、何で？」

「鉄ちゃん、私はあなた以上にこの世界を経験しているのよ。あなたが知っている原作と同じ展開が来る保証はないわ。」

「え？」

「あなたも気付いているでしょう？ この世界は『アニメの世界』ではなく、『アニメと似ている設定と展開が存在している世界』だ

という事を。」

「……………」

確かに姉さんの言うとおりだ……………」

俺や姉さんがこの世界に転生したという理由で世界が丸ごと変わっているはずなんてない。

この世界は元々そういう世界だったという事だ。

「それだから原作には関わりのない筈のシュウに結衣ちゃん、ブラザーフード、そしてあなたが持つ黒き痣が存在している。」

「……………」

ブラザーフード……………」

「ようし、開いた。行こう、みんな。」

「じゃあ、手分けして探そう。」

「そうね。」

俺達は清掃員の服を着て潜入する事になった。

俺と黒崎さんは顔が知られているので帽子とサングラスをかけた。

「じゃあ、僕と黒崎さん、そして美央さんと鉄也に分かれよう。」

「わかった。」

「じゃあ、何かあったら連絡してくれ。」

こうして2組と分かれた。

「そついえば姉さん。」

「何？」

「姉さんはブラザーフッドのことを知っているんだ。」

「まあね。あなたが来る前に色々なことがあったからね。」

「色々？ まさか姉さんも関わっていたのか、ブラザーフッドと？」

「そうね。あまり良い思い出ではないのは確かよ。」

「そうなんだ……」

「まさかあなたまで巻き込まれてしまうなんて……」

「それはいいよ、姉さん。そう言えば姉さんはどうして俺がこの世界に来るのを知っていたんですか？」

「それは……昔、占い師に会ってね。その人がいつかあなたの大切な人がこの世界に来ると言ったの。」

「……それが俺なのか。」

「そうよ。じゃあ、そっちへ行ってみましょう。」

「ああ。」

そう言っ て俺達は行こうとすると……

「お前達。」

「……」

見るとそこにはディヴァインとアキが通りがかっていた。

「ここで何をしている？」

「掃除……ですけど？」

「お前達は見ない顔だな。」

「今日は何時の方が風邪気味なので私達が代わりにやる事になりました。」

「はい、そういう事で僕達が此処にいるわけです。」

「……………そうか。（この少年、何処かで聞いたことがあるような声だな。）」

「では、これで失礼。」

危なかった……………

俺は帽子とサングラスを外した。

「……」

原作知識で覚えているな。

確か龍亞がディヴァインとデュエルした場所だ。

「これは……………」

「何か嫌な予感がするわね……………」

確かに嫌な予感が……………テレビゲームで格ステージのボスと戦うような展開が……………

「やはり君だったか。」

「あ。」

後ろにはデイヴァイン、そしてアキがいた。

「何しに来たの、村上鉄也？」

「げっ！」

「ばれてしまった……」

「ばれたわね。」

「もう1度聞こう。何故お前がここにいる？」

「それは簡単な理由だ。俺達は人質を連れ戻しに来た。」

「人質？（あのシグナーの小娘の事か？ 何故知られた？）」

「そうだ。わかったらさっさと開放してもらおうか。」

「残念だが、それは出来ない。それにお前達はただで帰らせるわけにはいかなさそうだ。」

「……………」

「とはいってもただ始末するだけじゃつまらない。ここはデューエルでどうだ？」

「デュエル？ ふざけてるのか？」

「君達はアルカディアムーブメントの存在を知っているだろう。なら、我々のデュエルの事も知っているだろう。」

「そうだな……」

どうやらあいつは黒崎さんや遊斗が潜入している事に気付いていないようだ。

だったら俺がデュエルをして時間稼ぎをするか……

「デイヴァイン、ここは私が……」

「いいや、アキは見ててくれ。私は腕を鈍らせたくなくてね。」

「良いだろう、相手になってやる！」

ここでお前を倒してトカゲの餌以下にしてやる！！

「ふふっ……」

しかし傷は治っているとはいえ、今の俺がサイコデュエルを受けるのは流石にまずい……

「待ちなさい。」

「ん？」

「私が相手になるわ。」

「女……貴様には用はない。」

「悪いけど鉄ちゃんとは退院したばかりよ。そんな状態で危険な目に遭わせるのは私が許さないわ。」

「ほお……威勢がいいな。」

美央姉さんは上着を脱いだ。

「……その刺青は！」

「……」

美央姉さんの服装は黒いノースリーブのシャツとジーンズだ。そして姉さんの右肩には……蛇と思わせるような形をした竜の刺青があった。

「そうよ、これはサイバー流継承者の印よ。」

サイバー流に刺青？

そんな設定であつたか？

まあ、格好いいから良いや。

「ほお……なら、強いという事か。」

「自慢ではないけど私はかなり強いよ。」

「いいだろう、サイバー流の継承者は最も強いデュエリストと聞く。なら、君が相手になってもらおうか。」

こうして姉さんとディヴァインがデュエルする事になった。

「デュエル!!」

ディヴァイン LP 4000

VS

美央 LP 4000

「私のターン。私はクレボンスを召喚。」

クレボンス

2

ATK 1200

「さらにカードを1枚セットし、ターンエンド。」

ディヴァイン

手札 4枚

モンスター/クレボンス（攻）

魔法・罠/リバーズ×1

「私のターン。私はサイバー・ドラゴンを特殊召喚する!」

『グオオオ!』

「あれは……」

姉さんのフィールドに蛇の形をした黒い機械の竜が現れた。

言っておくけど「黒」だよ。

「銀」の間違いじゃないよ。

サイバー・ドラゴン

5

ATK 2100

終わったな、デイヴァイン……

「攻撃力2100のモンスターをノーコストで特殊召喚だど!？」

「サイバー・ドラゴンはレベル5だけど、相手フィールドにモンスターが存在し、自分フィールドに存在しない場合、特殊召喚できる効果を持っているわ。折角だから見せてあげるわ……サイバー流の実力を。」

強いよな、サイバー・ドラゴンって。

レベル5で攻撃力2100の上に特殊召喚できるなんて。

今の時代じゃシンクロ召喚の補助にもなれる。

Side End

S i d e / ルーカス

「これは……」

俺は監視カメラのモニターを覗いていた。

村上鉄也……彼がここに来たという事は結衣を探しに来たか。

そして丸藤美央……まさか彼女もここに来るとはな。

久しぶりだから見ておくか、彼女のデュエルを。

「……………」

しかし潜入されてしまうとはシエンの奴……見張りをサボったな。

「はあ……………」

S i d e E n d

S i d e / 鉄也

「私は魔法カード、エヴオリュション・バーストを発動！」

『グオオオ……………』

ビューーン！！

サイバー・ドラゴンは口から光の粒子のビームを放った。

「なっ……ミラーフォースが！」

「エヴォリューション・バーストはサイバー・ドラゴンが存在する場合、フィールド上のカードを1枚破壊することが出来る。でも安心しなさい、このカードを発動するターンサイバー・ドラゴンは攻撃できない。」

「くっ……（だが、彼女はまだ通常召喚を行っていない……）」

「私は融合呪印生物 - 光を召喚する！」

出た出た、サイバー・ドラゴンに欠かせない存在が。
何だか良く解からない物が混ざった謎の物体が現れた。
てゆうか岩石族だから石なんだそれ。

融合呪印生物 - 光

3

ATK1000

「これは……融合代用モンスター！」

「私はサイバー・ドラゴンと融合呪印生物 - 光をリリースし、効果を発動！ エクストラデッキからリリースしたモンスターを素材とした光属性の融合モンスターを特殊召喚する！ 現れよ、サイバー・ツイン・ドラゴン！」

サイバー・ドラゴンと呪印生物は混ざり合い、大きな2つの首がある白銀の機械竜となった。

『グオオオオオオ!!』』

サイバー・ツイン・ドラゴン

8

ATK2800

「サイバー・ドラゴンは攻撃できなくてもサイバー・ツイン・ドラゴンは攻撃できるわ。 バトル! サイバー・ツイン・ドラゴンでクレボンスを攻撃! エヴォリユーション・ツイン・バースト!!」

『グオオオオオオ!!』

ビーーーー!!

サイバー・ツイン・ドラゴンはクレボンスへ向かってビームを放った。

「私はクレボンスの効果を発動! ライフを800払い、攻撃を無効にする!」

『ヒヒヒヒ!』

クレボンスはバリアを張り、サイバー・ツイン・ドラゴンの攻撃を打ち消した。

ディヴァイン LP 4000 3200

「残念だけど甘いわ。サイバー・ツイン・ドラゴンは1ターンに2回攻撃できる！エヴォリュション・ツイン・バースト、第2連打！」

「何！？」

ビューーン！

「私はもう1度クレボンスの効果を発動！」

ディヴァイン LP 3200 2400

上手い……これならクレボンスが相手でも関係ない！

「くっ……モンスターをフィールドに残したとはいえ、ライフの損失が大きくなったか……」

「私はカードを1枚セットし、ターンエンド。」

美央 / LP 4000

手札 2枚

モンスター / サイバー・ツイン・ドラゴン（攻）

魔法・罠 / リバース × 1

「くっ……（この女……長期戦になると確実に私の負けだ……）」

「どうしたの？ あなたのターンよ。」

「私のターン。 私はメンタルプロテクターを召喚する。」

メンタルプロテクター

3

ATK 500

「全力で行くしかないな…… 私はレベル3、メンタルプロテクターにレベル2、クレボンスをチューニング。 心の深淵に燃え上がる我が憎しみの炎よ、黒き怒濤となりてこの世界を蹂躞せよ！」

3 + 2 〓 5

「シンクロ召喚！現れる、マジカル・アンドロイド！」

マジカル・アンドロイド

5

ATK 2400

「マジカル・アンドロイド……でも、残念だけどそのモンスターでは私のサイバー・ツイン・ドラゴンの攻撃力に勝らないわ。」

「それはわかっている！ 私は巨大化を発動！ 私のライフが相手のライフより低い場合、攻撃力が倍となる！」

マジカル・アンドロイド

5

ATK 2400 4800

「攻撃力4800……大した事ないわね。」

まあ、サイバー流から見れば攻撃力4000少しなんて紙同然だね。

「（攻撃したい所だが……サイバー・ドラゴンもサイバー・ツイン・ドラゴンは光属性だ……手札にオネストがある可能性は高い！）私はカードを2枚セットし、ターンを終了する！ このエンドフェイズ、マジカル・アンドロイドの効果を発動！ サイキック族モンスター1体につきライフを600ポイント回復する！」

デイヴァイン LP 2400 3000

デイヴァイン / LP 3000

手札1枚

モンスター / マジカル・アンドロイド（攻）

魔法・罾ノ巨大化（マジカル・アンドロイドに装備）、リバー
ス
× 2

「私のターン！（手札にマジカル・アンドロイドを何とかできる
カードがないわね。それにこのターンエンドを宣言したら手札に
オネストがないことがばれてしまうわね。） 私はモンスターをセ
ットする！ そしてカードを1枚セットしサイバー・ツイン・ドラ
ゴンを守備表示に変更する！ ターンエンド！」

美央 / LP 4000

手札 1枚

モンスター / サイバー・ツイン・ドラゴン（守）、裏側守備表示
モンスター 1体

魔法・罾ノリバー ス × 2

「私のターン！（そうか……オネストが手札にないのか。 なら
良い！） 私はサイコ・コマンダーを召喚する！」

サイコ・コマンダー

3

ATK 1400

「マジカル・アンドロイドでサイバー・ツイン・ドラゴンを攻撃！」

マジカル・アンドロイド

5

ATK4800

「さらにサイコ・コマンダーで裏側守備表示モンスターを攻撃する！」

シャイン・エンジェル

4

DEF800

「私はシャイン・エンジェルの効果を発動！ デッキから攻撃力1500以下の光属性モンスターを特殊召喚する！」

オネスト

4

ATK1100

「だが、私がオネストを手札に戻させると思っかね？ 私は緊急同調を発動！ このバトルフェイズ中、シンクロ召喚を行える！（これでメンタルスフィア・デーモンをシンクロ召喚すれば……）」

「私はこの瞬間、王宮のお触れを発動！ このカードが存在する限り、畏カードの効果は無効となる！」

「何!？」

「これで緊急同調の効果は無効となる。」

「なら、私は王宮のお触れにチェーンしてサイコ・トリガーを発動！ このカードは自分のライフが相手より少ない場合、発動可能となる！ 墓地のサイキック族モンスターを2枚除外し、カードを2枚ドローする事ができる！ 私は墓地のクレボンスとメンタル・プロテクターを除外し、カードを2枚ドローする！」

「デヴィヴァインも上手いな……王宮のお触れにチェーンして発動するとは。」

「これでバトルフェイズは終了かしら？」

「……ターン終了だ。このエンドフェイズ、マジカル・アンドロイドにより私のライフは回復する。」

デヴィヴァイン LP 3000 4200

「でも、私のライフを超えた為、巨大化のデメリットが発生するわ。」

マジカル・アンドロイド

5

ATK 4800 1200

デヴィアイン／LP4200

手札3枚

モンスター／マジカル・アンドロイド（攻）、サイコ・コマンド
ー（攻）

魔法・罾／巨大化（マジカル・アンドロイドに装備）

「私のターン！ 私はオネストの効果を発動！ 自身を手札に戻す！ さらに私はサイバー・ドラゴンを特殊召喚する！」

サイバー・ドラゴン

5

ATK2100

「2体目か……」

「私はサイバー・ドラゴンでマジカル・アンドロイドを攻撃！ エヴォリューション・バースト！！」

ようし、これで大ダメージだ！

「私は手札のオネストの効果を発動！ このモンスターを手札から墓地へ送り、光属性モンスターと戦闘を行うモンスターの攻撃力分、攻撃力をアップさせる！」

『グオオオオオオ！！！！』

サイバー・ドラゴン

5

ATK 2100 3300

「くっ……」

ディヴァイン LP 4200 2100

「さらに私はモンスターをセットし、ターンエンド。」

美央 / LP 2000

手札 0 枚

モンスター / サイバー・ドラゴン（攻）、裏側守備表示モンスター 1 体

魔法・罠 / 王宮のお触れ、リバース×1

フィニッシュする事が出来ないのにオネストを使うとは姉さんも何か考えているな。

「まさか……ディヴァインが押されるなんて……」

流石姉さん……俺が挑戦しても中々勝てなかったのを覚えているな。

「私のターン！ 私はディストラクターを召喚する！」

何か……説明が面倒だからロボットで良いや。

ディヴァインのフィールドにロボットが現れた。

ディストラクター

4

ATK1600

「ディストラクターの効果を発動！ ライフを1000払う事で相手フィールド上にセットされている魔法・罠カードを1枚破壊する！」

ディストラクターは伏せカードへ向かってビームを放った。
破壊されたカードは……サイクロン。

ディヴァイン LP2100 1100

「そして私はサイクロンを発動！ 王宮のお触れを破壊する！」

巨大な竜巻が現れ、王宮のお触れを飲み込んだ。

「さらにレベル4、ディストラクターにレベル3、サイコ・コマンダーをチューニング！ 同士の骸を使い、生命に代えよ！」

4 + 3 〃 7

「シンクロ召喚！ 出でよ、サイコ・ヘルストランサー！！」

半分機械で出来た緑色の女性が現れる。

サイコ・ヘルストランサー

7

ATK 2400

「サイコ・ヘルストランサーの効果を発動！ 墓地のサイキック族モンスターを除外してライフを1200ポイント回復する！ 私は墓地のサイコ・コマンダーを除外し、ライフを回復する！」

デヴィアイン LP 1100 2300

「さらに私は緊急テレポートを発動！ デッキからメンタルマスターを特殊召喚する！」

今度は……脳が容器の中に入った機械が現れた。

メンタルマスター

1

ATK 100

「レベル7、サイコ・ヘルストランサーにレベル1、メンタルマスターをチューニング！ 逆巻け、我が復讐の黒炎！」

7 + 1 〃 8

「シンクロ召喚！ 来い、メンタルスフィア・デーモン！」

『グオオオオオ！！』

デーモンの召喚を緑色にした感じのモンスターが現れた。

メンタルスフィア・デーモン

8

ATK 2700

「バトルだ！ メンタルスフィア・デーモンでサイバー・ドラゴンを攻撃！ メンタル・ドミネーション！！」

メンタルスフィア・デーモンはビームを放ち、サイバー・ドラゴンは碎けた。

美央 LP 4000 3600

「くっ……」

「この時、メンタルスフィア・デーモンの効果を発動！ サイバー・ドラゴンの攻撃力分ライフを回復する！」

デイヴァイン LP 2300 4100

「やるわね……」

「私はカードを2枚セットし、ターンエンドだ！」

デイヴァイン / LP 4100

手札0枚

モンスター / メンタルスフィア・デーモン（攻）

魔法・罠 / リバース × 1

「（私の伏せカードはドレインシールドだ…… たとえメンタルスフィア・デーモンを超えるモンスターが現れようと無駄だ……）
どうだ？ 多少押されていたが、これがサイコデュエルだ！ サイコデュエリストの力に怖気ついたか？」

「悪いけど私は別に恐れていないわ。」

「何!？」

「あなたは知らないようだけど私は既にそんなの経験しているわ。」

「はったりか？」

「私のターン…… 私はカードをセットし、モンスターを反転召喚する！」

メタモルポット

2

ATK700

なるほど、だから早めにオネストを使ったのか。

「メタモルポットの効果を発動！ このモンスターが反転召喚に成功した時、お互い手札を全て捨ててカードを5枚ドロウする！」

「丁度いい。 私も手札に困っていたところだ。」

「私はプロト・サイバー・ドラゴンを召喚する！」

プロト・サイバー・ドラゴン

3

ATK1100

「さらに未来融合 フューチャー・フュージョンを発動！ 私はエクストラデッキからモンスターを選択し、その素材となるモンスター

ーをデッキから墓地へ送る！ 私はキメラティック・オーバー・ドラゴンを選択し、素材となるモンスターを墓地へ送る！」

融合モンスター：キメラティック・オーバー・ドラゴン

融合素材

サイバー・ドラゴン×1

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ×3

速攻のかかし×2

ブルーサンダーT45×2

マシンナーズ・フォートレス×2

マシンナーズ・ピースキーパー×2

エメス・ザ・インフィニティ×1

来た、サイバー流の必殺コンボ！！

「キメラティック・オーバー・ドラゴン……モンスターを大量に消費するとはどうやら余程強いらしいな、そのモンスター。しかし融合モンスターを召喚するには時間がかかる！」

「私も2ターン待つほど余裕じゃないわ。私は先ほど伏せておいた魔法カードを発動！ オーバーロード・フュージョン！！」

「オーバーロード・フュージョン！？」

「このカードはフィールド、または融合素材となるモンスターをフィールド、または墓地から除外し、エクストラデッキから闇属性・

機械族モンスターを特殊召喚する！」

「何！？」

除外するモンスター

サイバー・ドラゴン×3

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ×3

サイバー・ツイン・ドラゴン×1

プロト・サイバー・ドラゴン×1

速攻のかかし×2

ブルーサンダーT45×2

マシンナーズ・フォートレス×2

マシンナーズ・ピースキーパー×2

エクス・ザ・インフィニティ×1

「現れよ、キメラテック・オーバー・ドラゴン！」

『グオオオオオ！！』

巨大な機械の竜が現れた。

サイバー・ドラゴンと違い、凶暴に見える。

キメラテック・オーバー・ドラゴン

9

ATK0

「キメラティック・オーバー・ドラゴンの効果を発動！ このモンスターが融合召喚に成功した時、このモンスター以外の自分フィールド上の存在するカードを全て墓地に送る。」

キメラテック・オーバー・ドラゴンの周りに電磁波が起こり、メタモルポットとフューチャー・フュージョンを破壊した。

「何かと思えば攻撃力0のモンスターの雑魚か……」

「いいえ、違うわ。キメラティック・オーバー・ドラゴンのもう1つの効果……それは融合素材となったモンスター1体につき攻撃力が800ポイントアップするわ。」

「何！？」

「私が使用したモンスターの数は16体。よって攻撃力は12800となる！」

キメラテック・オーバー・ドラゴンの胴体から首が沢山生えてきた。

キメラテック・オーバー・ドラゴン

9

ATK 12800

「こ、攻撃力12800だと！？」

そりゃあ、恐ろしいよな。

俺はジャンク・ウォリアーを1万超えさせるのにカードを結構消費するのに姉さんのようなサイバー流はカード1枚でそんな芸を出せるなんてな。

「こんなモンスターが存在するなんて……」

「これがサイバー流の力だ。」

「バトル！ キメラテック・オーバー・ドラゴンでメンタルスフィア・デーモンを攻撃！ エヴォリューション・レザルト・バースト！！！」

キメラテック・オーバー・ドラゴンの1つの頭からビームを放った。

「そうはせん！ 私はドレインシールドを発動！ キメラテック・オーバー・ドラゴンの攻撃を無効にし、その攻撃力分ライフを回復する！」

ディヴァインの前にバリアが現れ、攻撃を吸収した。

ディヴァイン LP 4100 16900

「折角のモンスターも攻撃を止められて残念だったな。」

「悪いけど残念なのはあなたの方よ。折角のライフを今から全部消してあげるわ。」

「何!？」

「キメラテック・オーバー・ドラゴンは融合素材の数だけ相手モンスターを攻撃することが出来る!」

「な、何だと!？」

「もう1度攻撃!」

ビィーーーーー!!

「だ、だが……ライフは残る!」

「甘いわね。私はこのダメージ計算時、リミッター解除を発動!私の機械族モンスターの攻撃力は全て倍となる!」

キメラテック・オーバー・ドラゴン

9

ATK 12800 25600

「教えてあげるわ、サイバー流の最大の特徴を……」

「!？」

「それは……オーバーキルよ。」

やっぱりそうだね、サイバー流って。

「くっ……くそっ!!」

「エヴォリユーション・レザルト・バースト! 15連打!!」
（ジウウグオレンダア 攻撃1回分）」

「グオレンダア!」みたいな発言だな。
サイバー流で流行ってるのそれ?
キメラテック・オーバー・ドラゴンはメンタルスフィア・デーモンに向かって残りの首から一斉にビームを放った。

チュドーン!

チュドーン!

チュドドドドドーーーーーン!

「うわああああ!」

あまりにも威力が凄いのか、サイコデュエリストの力でもないのにディヴァインは吹き飛ばされた。

ディヴァイン LP 169000 (-8700)

さすがキメラテック・オーバー・ドラゴン……16000以上のライフを一気に削り取ったよ。

「こっ……これがサイバー流の力……」

「デイヴァインが……負けた……」

「あなたの敗因は1つ……復讐の為に何もかも利用しようとするそのくだらない野望よ。」

姉さん超怖ええ……………さすがサイバー流はあまり相手にしたくないな。

S i d e E n d

T o B e C o n t i n u e d……………

第43話 サイバー流を受け継ぐ者（後書き）

オーバーキルしないサイバー流なんてサイバー流じゃないやい!!

第44話 何故こうなる……

前回のあらすじ

鉄也と遊斗は食事に誘われていた。

遊斗「紬さんって眉毛が太いですね。」

鉄也「そついやそつだな……」

紬「ええ。実はこれ……たくあんのよ。」

鉄也「え？　たくあん！？」

遊斗「これは驚きましたね……」

紬「良かったら食べてみます？」

鉄也&遊斗「……」

パクッ！！……ゴクッ！！

鉄也&遊斗「……美味しい！！」

ド□□□……

鉄也「お、おい！　どうした！？」

紬「実は私、眉毛のたくあんが無くなると溶けてしまうの……」

鉄也「そ、それって俺達の所為!？」

遊斗「ごめんなさい、紬さん……」

紬「大丈夫です、代わりのたくあんを付ければ元に戻ります。」

鉄也「そうなの!？」

紬「もしくは分度器でも構いません。」

鉄也「分度器でもOKなの!？」

遊斗「しかしこれは一刻を争ってる暇はありませんね……」

鉄也「よし、じゃあ早速たくあん買いに行くぞ!」

遊斗「ラジャー!」

鉄也「……って真面目にやれ作者!」

S i d e / ルーカス

そろそろ俺もずらかるか……ここにいてもやばいな。

「サファイア・ペガサス。」

『はっ！！』

「そろそろ隠れ家へ戻るぞ。」

『わかった。』

「連れも一緒に乗せるがいいか？」

『構わん、その事ぐらい。　そう言えばシエンと一緒にいたはずだが?』

「あいつの事は知らん。　どうせ後で自分で帰ってくるだろう。」

『そうか。　じゃあ乗れ、ルーカス!』

「ああ……サファイア・ペガサス。」

『何だ?』

「お前を……お前達宝玉獣をこんな事に巻き込んですまないな。」

『ルーカス、お前は祖父と同じく俺達を愛してくれた。　俺達はお前の為なら何だってやるさ。』

「そうか……じゃあ乗せてくれ。」

S i d e E n d

S i d e / 鉄也

「はあ……はあ……　馬鹿な……私が負けただど!?!」

「観念しなさい、ディヴァイン。」

「くっ……」

「ついでにあなたの悪事も治安維持局に報告させておこうかしら？」

「悪事！？」

アキが今の発言に驚いている。

「くっ……」

「！！」

ディヴァインは急にカードをデュエルディスクにセットした。
やべえ、こいつはサイコデュエリストだったんだ。

「ファイヤー・ボール！！」

火の玉が俺に向かって飛んできた。
てゆうかファイヤー・ボールって懐かしい……

ドッカーン！

Side End

Side / ????

ようし……着いた、アルカディアムーブメント！！

私は絶対……ここで絶対シグナーの手がかりを掴むんだから！

「おい、そこで何をしている？」

「……！」

後ろから声が聞こえた。

振り返って見るとそこには背が高い金髪の男性が話しかけていた。
良く見たら……背中 knife を背負ってるじゃないの！

「お嬢さんは一体何者だ？ 治安維持局の差し金か？ それとも遊
斗の差し金か？ まあ、どうでもいい。 アルカディアムーブメン
トに入りたければこの俺を倒す事だな。」

「えっ！？」

「俺はここを見張って関係者以外の侵入を防ぐのが仕事だったんだ
が、仕事を少しサボってから来るとはな。 ちなみに言っておくが、
俺の眼に敵が現れたらそいつは……死だ！！」

「ひ、ひいいいい！！」

「……と言っても単に殺すだけじゃつまらないからな。 どうだ、
俺と闇のゲームを始めようじゃないか？」

そう言っ て彼は私にデュエルディスクを放り投げた。

「や、闇のゲーム……」

私が……あの時のようなデュエルに挑戦を申し込まれた……！

もし、私が拒否したら……

スウ……

「！！」

その男性は刀に手を掛けようとした。

「拒否したらどうなるかわかっているよな？ デッキ持っているんだろ？ だったらさっさと始めようじゃないか。」

「くう……」

もうこうなったらやるっきゃない！

あの時からデュエルの猛勉強したんだから！

ポワア……

だって……私の夢はいつか記者を卒業して……ジャックとの夫婦デュエリスト……

「ああ……」

「……命懸けだというのに妄想とは偉く余裕だな。」

「はっ！！……受けて立つわ。」

「「デュエル……」」

??? LP4000

VS

??? LP4000

「せっかくだから先行はお嬢さんに譲ってやる。」

「私のターン！ ドロー！！ いいい！？」

占い魔女 チーちゃん

通常モンスター

星6 / 地属性 / 魔法使い族 / 攻 0 / 守 0

このカードをドローした今日のあなたの運勢はスーパーピンチ！！

ラッキーナンバーは6。

ラッキーカラーは黒。

ラッキーアイテムは革靴。

ライバルに差をつけられちゃうかも！がんばれ！

や、闇のゲーム……デュエルの全てが実体化する……

占いが最悪でも何とかするしかないんだから！

「どうした？ いきなり事故か？」

「う、うるさい！ 私は占い魔女 スィーちゃんを召喚する！」

私のフィールドに青い妖精が現れた。

占い魔女 スイーちゃん

4

ATKO

「さらに私は魔法カード、幸運の前借りを発動！ 自分フィールドに表側表示で存在する「占い魔女」と名のついたモンスター1体を選択し、選択したモンスターよりもレベルが低い「占い魔女」と名のついたモンスター1体を自分の手札・デッキから特殊召喚する！ 私は占い魔女 スイーちゃんを選択し、デッキから占い魔女 エンちゃんを特殊召喚する！」

スイーちゃんに続いて赤い妖精が現れる。

占い魔女 エンちゃん

2

ATKO

「そして私は二重召喚を発動！ このターン通常召喚を2回行える！ 私は占い魔女 ヒカリちゃんを召喚する！」

続いて今度は黄色い妖精が現れた。

占い魔女 ヒカリちゃん

1

ATKO

「攻撃力0の通常モンスターを攻撃表示でそろえてどうする？ レベルから見ても弱肉一色の役にも立たないステータスだ。」

「これからよ！ 私は永続魔法、開運ミラクルストーンを発動！ このカードが存在する限り、「占い魔女」と名のついたモンスターは「占い魔女」と名のついたモンスター1体につき攻撃力が1000ポイントアップする！」

占い魔女 スーちゃん

4

ATK 3000

占い魔女 エンちゃん

2

ATK 3000

占い魔女 ヒカリちゃん

1

ATK 3000

「ほお……一気に攻撃力3000が3体もか。」

「私はこれでターンエンド！」

??? / LP 4000

手札1枚

モンスター / 占い魔女 スィーちゃん（攻）、占い魔女 エンちゃん（攻）、占い魔女 ヒカリちゃん（攻）

魔法・罨 / 開運ミラクルストーン

「まあ、少しは出来るじゃねえか。だが、終わりだ。俺のターン！俺は六武衆 カモンを召喚だ！」

六武衆 カモン

3

ATK 1500

「さ、侍！？」

彼の場合にダイナマイトを武装した侍が現れた。

「（まあ、カモンの効果を発動してミラクルストーンを破壊すれば一気に始末出来るが……それだとつまらねえからな。）俺も二重召喚を発動！俺は六武衆 ザンジを召喚だ！」

六武衆 ザンジ

4

ATK 1800

「さらにフィールド上に六武衆が存在する場合、こいつを特殊召喚できる！ いけ、師範よぉー！！」

六武衆の師範

5

ATK2100

「あんたもモンスターが一気に3体！？ でも、私の占い魔女達の方が上なんだから！」

「構わねえよ。俺は魔法カード、六武式三段衝ろくぶしきさんだんしゅうを発動だぁ！ このカードは「六武衆」と名のついたモンスターが3体以上存在する場合のみ発動だ！ そしてこのカードは3つのうち1つの効果を発動可能だ。」

「み、3つの効果！？」

「1つ目は相手フィールドの表側表示の魔法・罨カードを全て破壊する効果……2つ目は相手フィールド上のセットされている魔法・罨カードを全て破壊する効果……そして3つ目は相手フィールド上の表側表示で存在するモンスターカードを全て破壊する効果だ！！」

「な、何だつてえー！！」

「滅殺の陣！」

六武衆達は一斉に私の占い魔女へ突撃してくる……

ズバッ!!

私のモンスターは六武衆の攻撃によって全滅した。

「これで終わりだな。言っておくがこれは闇のゲームだ。 攻撃を受けるのを覚悟しておくんだな。」

「うっ……」

「じゃあ、全軍攻撃だ。 六武衆 カモンでダイレクトアタック！
爆炎破碎!!」

カモンは私に爆弾を投げつけた。

「うわあああ!!」

??? LP 4000 2500

「そして六武衆 ザンジでダイレクトアタック！ 抜刀斬!!」

ズバッ!!

「うっ……」

刀が私の腰に斬った……

「がはっ……」

??? LP2500 700

「うつ……うつ……」

い、痛い……腰から出血が止まらない……
立っでいられるのがやつとだ……
まさかこんな事になるなんて……

「さて、次の一撃で終わりだな……といたい所だが、お前はここを調べに来たんだろ。それじゃあ、アルカディアムーブメントの事を特別に教えてやる。」

「……………」

「アルカディアムーブメントはサイコデュエリストの能力の発展が目的だが、あれは嘘だ。本当の目的はサイコデュエリスト達を兵士として育て上げ、世界を支配する事だ。」

「……！　そ、そんな事が……」

「俺から見れば組織としては中々だな。」

「こ、こんな事をして治安維持局が黙っていると……」

「生憎それは無理らしい……　アルカディアムーブメントはレクス・ゴドウィンの弱みを握っているらしいからな。」

「え!？」

「その弱みはな……ゴドウィンがサテライト出身だという事だ。」

「そ…そんな… うぐっ!！」

「やれやれ、女を痛めつけるのは趣味じゃないからな……そろそろ
楽にしてやるよ。」

「……………」

「六武衆の師範でダイレクトアタックだ……透破斬り。」

グサッ!!

刀が……私の心臓に突き刺さった……

??? LP7000

「がはっ……………」

う、嘘……………」

ジャック……………」

ジャック……………」

もう会えないの…………ジャック……………」

嫌だ……そんなの……嫌！！

「ジャック！！」

バタッ！

「どうやら死ぬ前に未練があったらしいな、この女…… しかしいい眼をしていたな。 殺すには勿体無かったか。 占い魔女 チーちゃんか…… なるほど、このカードをドロ―したか。 文字通り運が悪かったな。」

嫌だ… まだ死にたくない！！

『クオオオオオ！！』

S i d e E n d

S i d e / 鉄也

「ふう……危なかった。」

『クリクリ〜〜!!』

クリボーが俺の前に現れてファイヤー・ボールの狙撃から庇ってくれた。

危なかった……

「ありがとう、クリボー相棒。」

「なっ……貴様もサイコデュエリストだったのか!？」

「違いよ。クリボーが特別なだけだ。」

「くっ……」

ディヴァインはまたカードをセットしようとする……

「させるか！」

『クリリリ〜〜〜！』

ガシッ！

クリボーはディヴァインのデュエルディスクへ飛んでしがみ付いた。

俺はポケットからカードを取り出し、セットした。
あまりやりたくねえが……

「クリボー、機雷化だ！」

『クリ〜〜〜！』

ドッカーン！

クリボーは爆発した。

悪い、クリボー。

一応、時間が経てば自然に戻って来るが。

「うつ……」

大丈夫だ、デュエルディスクが壊れただけでカードにもディヴァインにも問題ない。

「無駄な抵抗はこれで終わりだ。」

「あなたが結成したアルカディアムーブメントの本当の目的……そ

れはサイコデューリスト達を集めて兵士として育て上げることでしょう。」

「……………」

「へ、兵士!？」

「そして、その兵士となったサイコデューリスト達を使って世界を支配する……そうでしょう?」

「!？」

アキは激しく動揺している……そっぴや知らなかったな、彼女は。

「それは……本当なの、デイヴァイン?」

「うっ……………」

「デイヴァイン!」

「…………… 本当だ。」

「アキ! 君にもあるだろう……憎しみという感情が! 力を恐れて君を捨てた両親、他人からの軽蔑、それらが君を傷つけたはずだ! 私は誓ったのだ! その世界を叩きのめす為に我々が持つ力で世界の愚かな人間共に思い知らせると!」

「……………」

「君も思った事があるだろう、そんな奴らにいつか復讐したいと!」

「うつ……」

「だから私は君のようなサイコデュエルを集めてアルカディウム・ブメントを結成した！」

「デイ、デイヴァイン……」

この状況で彼女を説得しようとする気が！？
まずいぞ、これは。

ここで彼女が…アキが納得してしまったら取り返しがない！

「アキ、君の力で今すぐこいつ等を始末しろ！」

「や、やめろ！-」

それはマジやばい……

「だったらその理想の為なら多くの犠牲者を出しても良いという事かしら？」

「！-」

「え？」

入り口から声がした……

「だ、誰だ！？ 貴様の仲間か！？」

いや、声が黒崎さんでも遊斗でもない……確かこの声は……

「あなたがこの総帥、ディヴァインね。」

「こいつは……」

「この人は……」

「トップモデルのミスティ・ローラ！ 何故こんな所に！？」

背の高く、黒い長髪の女性が入ってきた。

「まずいわね…… まさか今日だったなんてね……」

「まずい…… 今日がこの日だったのか！？」

もう、一体どうすればいいんだ！？

ただでさえ悪い状況が悪化してしまう！

「ちょっと待て！ 早まるな！！」

そう言っただけ俺は女を止めようとするが……

ボワアア……

「うわあああ！」

俺の前に紫色の炎の壁が現れ、ディヴァインと女を囲んだ。
仕方ねえな……

「な、何だこれは……！！」

「おい、デイヴァイン。」

「な、何だ!？」

「一応、これはお前の死亡フラグだけど頑張れ。」

どう考えても無理なので見放す事にしました。(。(

「さて、デイヴァイン…… あなたにはトビーが味わった同じ苦しみを味わってもらおうわ。」

「変わった!？」

そうだ…… あの女性の服装が変わった。

しかし妙だな…… 彼女に恨みがあるのはアキの筈だが……

「どうする姉さん？」

「…… 私達がここから出る事は許されないようね。」

ちくしょう…… 何故こうなる!!

Side End

Side / ????

ピカッ! コロコロ……

「ん？」

何だ、この嵐は……

「はあ……はあ……」

「！？」

声がした方向へ振り返るとそこには立っていた……先ほど俺が殺した筈のお嬢さんが。

「ほお……この世に未練でもあつて亡霊となつたか？」

「フ、フフフフ……」

服装が……変わった？

一般的な服装がダークなイメージをした柄に変わったな。

「ほお、随分と可愛らしくなったじゃねえか、お嬢さん。」

しかし先程まで無かつた妙な力が今の彼女には感じるな。
少なくとも俺の直感からだが……

「その腕の痣……（成る程、聞いたルーカスが言っていたダーク
シグナーって奴か。）」

「もう1度やりましょう、闇のゲームを。今度はあなたの運命を
占ってあげるわ。」

「占いか……面白い。相手にしてやるぜ、お嬢さん。特別に俺の名を教えてやる……俺は天将シエン！ 何れこの世を支配する男だ！！」

S i d e E n d

T o B e C o n t i n u e d

第45話 蘇る地縛神

S i d e / シュウ

ドン！ ドン！！

「おーい！ 誰かー！ 誰かいるかー！！」

「ん？」

たった今声が聞こえたような……

「遊斗くん、君は先を行ってくれ。」

「そうですか。 僕も少し気になっている事がありましたね。 別行動を取って良いですか？」

別

「気になっている事？」

「どうやら僕の旧友がここにいるような気がするんです。」

「……解かった。」

S i d e E n d

S i d e / 鉄也

「これはやばいな……」

「ディヴァイン……」

状況はあれだ。

折角ディヴァインをお縄につけるチャンスがあったのだがミス
テイが来てしまった。

「こ、これは一体……」

そして俺はこう言った。

「ディヴァイン、一応気の毒だから教えてやる。これは死亡
フラグだ。」

「し、死亡フラグだと!？」

「簡単に言えば彼女はサイコデュエリストと似たような者だ。つ
まり命が惜しけりや彼女とのデュエルに勝たないと駄目だ。ちな
みに彼女はお前を殺す気満々らしいから気をつけるよ。」

「何だと!？」

「どうやらあなたはダークシグナーの存在を知っているようね。
何故か私がここに来た理由も知っているみたいけど……まあ、良
いわ。その坊やの言う通りよ。私はあなたを殺しに来たわ。」

「「坊や」って呼ぶなコラ。」

「では、早速闇のゲームを始めるわ。」

「俺は無視かよ!！」

「くっ…… ならば仕方ない！」

「デュエル!！」

ミステイ LP4000

VS

ディヴァイン LP4000

「私のターン！ 私はモンスターをセットする！」

「さらにフィールド魔法、サベージコロシウムを発動！」

ゴゴゴゴ……

ミステイとディヴァインの周りにコロシウムが現れた。

やはり強制的に攻撃させる戦略か……

「カードを1枚セットし、ターンエンド！」

ミステイ/LP4000

手札3枚

モンスター／裏側守備表示モンスター1体
魔法・罾／リバーズ×1
フィールド／サベージ・コロシウム

「私のターン！」

「私はクレボンスを召喚する！」

『ヒヒヒヒ……』

クレボンス

2

ATK1200

「さらに最古式念導を発動！ フィールド上のカードを1枚破壊し、自分は1000ポイントのダメージを受ける！ 私はその伏せカードを破壊だ！」

クレボンスから電磁波が起こり、伏せカードを破壊した。
どうやら伏せてあったカードはダメージレプトルであった。

「（ダメージレプトル……爬虫類族デッキか。）」

デブアイン LP4000 3000

「さらに私は緊急テレポートを発動！ デッキからメンタルプロテクターを特殊召喚する！」

メンタルプロテクター

3

DEF 2200

「レベル3、メンタルプロテクターにレベル2、クレボンスをチェーンニング！ 心の深淵に燃え上がる我が憎しみの炎よ、黒き怒濤となりてこの世界を蹂躞せよ！」

3 + 2 〃 5

「シンクロ召喚！ 現れよ、マジカル・アンドロイド」

マジカル・アンドロイド

5

ATK 2400

「バトル！ マジカル・アンドロイドでその裏守備モンスターを攻撃！」

『ハッ！！』

マジカル・アンドロイドの光線が裏側表示のモンスターに直撃した。

『ウフフ……』

ディヴァインが攻撃したモンスターは蛇の被り物を被って下半身が蛇である金髪の少女が現れた。

レプティレス・ナージャ

1

DEF 0

「残念だけどレプティレス・ナージャは戦闘によって破壊されない。そしてサベージ・コロシアムの効果を発動。自分フィールド上のモンスターが攻撃を行った場合、そのコントローラーはダメージステップ終了時にライフが300ポイント回復する。」

ディヴァイン LP 3000 3300

「私のライフの損失を戻してくれるとはありがたい。私はメインフェイス2に入る。」

「待ちなさい。レプティレス・ナージャの効果を発動。このモンスターと戦闘を行ったモンスターはバトルフェイス終了時に攻撃力が0となる。」

「何!？」

ピシッ…ピシッ…

『う、うあああ………』

マジカル・アンドロイドの体が石化した。

マジカル・アンドロイド

5

ATK 2400 0

「くっ…… カードを1枚セットし、ターンエンドだ! このエンドフェイズ、私はマジカル・アンドロイドの効果を発動! 自分フィールド上のサイキック族モンスター1体につきライフを600ポイント回復させる!」

ディヴァイン LP 3300 3900

ディヴァイン / LP 3900

手札2枚

モンスター / マジカル・アンドロイド (攻)

魔法・罫 / リバース × 1

フィールド / サベージ・コロシウム

「私のターン……来たわね。私は手札からサイクロンを発動！
その伏せカードを破壊するわ。」

「くっ……」

ディヴァインの破壊されたカードは奈落の落とし穴……ガチだな
オイ。

「更に私は自分のレプティレス・ナージャとあなたのマジカル・ア
ンドロイドをリリースし、手札からこのモンスターを特殊召喚する
！ 現れよ、レプティレス・ヴァースキ！！」

マジカル・アンドロイドとレプティレス・ナージャが消え、ミス
ティの場に4本の腕が生えて下半身が蛇である女性が現れた。

レプティレス・ヴァースキ

8

ATK2600

「何！？ 私のモンスターがリリースされただ！？」

「このモンスターは自分、または相手フィールド上に存在する攻撃
力0のモンスターを2体リリースする事で特殊召喚が可能となる。」

「うつ……」

「バトル！ レプティレス・ヴァースキでダイレクトアタック！」

シュルルル……

レプティレス・ヴァースキの尾がディヴァインの体に巻きついた。

ギュウウウ……

「ぐああああー!!」

ディヴァイン LP3900 1300

「うぐっ……」

バキ…バキ……

こ、この音は……

「や、やめろ…… ぎゃああああー!!」

ミステイ怖ええー……!!

これがブラコンの怒りなのか!!

ドサッ!

レプティレス・ヴァースキはディヴァインを落とした。

「ぐっ……」

「サベージ・コロシアムの効果を発動。 ライフを300回復する。」

「

ミステイ LP4000 4300

「私はこれでターンエンドよ。」

ミステイ/LP4300

手札2枚

モンスター/レプティレス・ヴァースキ(攻)

魔法・罾/なし

フィールド/サベージ・コロシウム

俺は姉さんに話しかけた。

「姉さん…あれは……(汗)」

「……完全に崩壊してるわね。(汗)」

「あなたがトビーに与えた苦しみはこの程度ではないわ。あなた
にはまだまだ味わってもらっわ。」

そそそ……そうですか？

俺から見れば今ので十分だと思いますけど……(汗)

Side End

S i d e / シュウ

「ありがとうございます、黒崎さん。」

「何とか助かったの……」

僕が助けた人物は元プロデュエリスト、氷室仁と収容所で知り合った矢薙のじいさんであった。

「何でお二人さんは此処に？」

「色々事情があつて、アルカディアムーブメントに協力を申し込もうと思つていたんだが……」

「わし等は騙されて此処に閉じ込められてしまったのじゃ。」

「そうですか。この組織は噂の通り、良い場所ではありません。一刻も早く此処から出たほうが良いですよ。」

「ちょっと待ってくれ！ここにはまだ子供が閉じ込められているんだ！」

「子供？まさか子供も巻き込まれているんですか？」

S i d e E n d

S i d e / シエン

「デュエル!!」

シエン L P 4 0 0 0

V S

??? L P 4 0 0 0

「先行はあなたに譲るわ。」

「ほお…… いいのか？ 俺のターン！ 俺は永続魔法、六武の門を発動！」

俺の背後に紋章が写っている門が現れた。

「そして俺は永続魔法、六武衆の結束を発動！ そして俺は六武衆ニサシを召喚する！」

六武衆 ニサシ

4

A T K 1 4 0 0

「六武の門の効果を発動！ 「六武衆」と名のついたモンスターが召喚・特殊召喚される度に武士道力ウンターを2つ乗せる！」

六武の門：武士道カウンター 0 2

「それだけじゃねえ。 六武衆の結束にも武士道カウンターが1つ乗る。」

六武衆の結束：武士道カウンター 0 1

「俺はこれでターンエンドだ！」

シエン / LP 4000

手札 3枚

モンスター / 六武衆 ニサシ（攻）

魔法・罠 / 六武の門（武士道カウンター×2）、六武衆の結束（武士道カウンター×1）

「私のターン！ 私はテラ・フォーミングを発動！ この効果でデッキからフィールド魔法を1枚手札に加える！ 私はフューチャー・ヴィジョンを手札に加え、発動する！」

俺達の周りが宇宙と化した。

「さらに私は永続魔法、魂吸収を発動！ そして私はフォーチュンレディ・ライティーを召喚する！」

黄色い髪と黄色いドレスの女性が現れた。
良く見ればさっきの占い魔女が大きくなった姿だな。

フォーチュンレディ・ライティ―

1

ATK0

「フォーチュンレディ・ライティ―は自身のレベル1につき攻撃力が200ポイントアップする！」

フォーチュンレディ・ライティ―

1

ATK0

「フューチャー・ヴィジョンの効果を発動！ モンスターが召喚に成功した時、そのモンスターを除外する！ フォーチュンレディ・ライティ―は除外される！」

突然次元の裂け目が現れ、フォーチュンレディ・ライティ―は未来に吸い込まれた。

「フューチャー・ヴィジョンで除外されたモンスターは次のスタンバイフェイズに表側攻撃表示でフィールドに戻る！」

「……………」

召喚したモンスターを除外するとはそれなら召喚してから発動すれば良い筈だ。

しかしわざわざ自分で召喚したモンスターを除外するとは……

「まさかそれがモンスターの効果の発動条件か？」

「そうよ…… フォーチュンレディ・ライティーはカードの効果によつてフィールドから離れた場合、デッキから「フォーチュンレディ」と名のついたモンスターを特殊召喚する事ができる！ 現れなさい、フォーチュンレディ・ファイリー！！」

今度は赤い髪と赤いドレスを着た女性が現れた。

フォーチュンレディ・ファイリー

2

ATK 0

「フォーチュンレディ・ファイリーは自身のレベル1につき攻撃力・守備力が200ポイントアップする！」

フォーチュンレディ・ファイリー

2

ATK 0 400

「それでも攻撃力が低いな…… だが、わざわざ手間を掛けさせて

呼び出す筈がないな。何を狙っている？」

「フォーチュンレディ・ファイリーの効果を発動！ このモンスターが「フォーチュンレディ」と名のついたカードの効果によって表側攻撃表示で特殊召喚に成功した時、相手フィールド上の表側表示のモンスター1体を破壊し、そのモンスターの攻撃力分相手プレイヤーにダメージを与える！」

「何！？」

『ハアアア！』

フォーチュンレディ・ファイリーは炎を巻き起こし、六武衆ニサシを包み込んだ。

「くっ……」

シエン LP 4000 2600

「そして魂吸収の効果を発動。カードが除外される度に除外されるカード1枚につきライフを500回復する。」

??? LP 4000 4500

「まだ私にはフォーチュンレディ・ファイリーの攻撃が残っているわ。」

「ハアア!!」

フォーチュンレディ・ファイリーは俺に向かってエネルギー弾を放った。

「くっ……!!」

シエン LP 2600 2200

「フフッ…… どうやら異変は見た目だけじゃねえ様だな。」

「私はこれでターンエンドよ。」

??? / LP 4500

手札3枚

モンスター / フォーチュンレディ・ファイリー（攻）

魔法・罠 / 魂吸収

フィールド / フューチャー・ヴィジョン

「俺のターン！ 俺は六武衆・ヤイチを召喚する!!」

六武衆・ヤイチ

3

ATK 1300

「この瞬間、フューチャー・ヴィジョンの効果を発動！ 六武衆・ヤイチを除外する！」

俺のヤイチは未来へ飛ばされた。

??? LP 4500 5000

「だが、召喚に成功した事には変わらない。 六武の門と六武衆の結末に武士道カウンターを乗せる！」

六武の門：武士道カウンター 2 4

六武衆の結末：武士道カウンター 1 2

「俺は六武衆の結末の効果を発動！ このカードを墓地に送り、このカードに乗っていた武士道カウンターの数だけカードをドロースる！ フッ……………」

フューチャー・ヴィジョンの所為で展開が遅れるのが残念だな。 だったら俺の見せ場は次のターンとなるか。

「俺は六部の門の効果を発動！ 武士道カウンターを4個取り除き、デッキから『六武衆』と名のついたモンスターを手札に加える！」

俺が手札に加えるのは……六武衆の師範だ！」

六武の門：武士道カウンター40

さっきと比べて強くなっているのは認めよう。
だが、俺の敵ではない。

「俺はカードを2枚セットし、ターンエンドだ！」

シエン／LP2200

手札3枚

モンスター／なし

魔法・罫／六武の門（武士道カウンター×0）、リバーズ×2
フィールド／フューチャー・ヴィジョン

「フフフ……」

「私のターン！ このスタンバイフェイズにフューチャー・ヴィジョンの効果を発動！ 除外されたフォーチュンレディ・ライティールは戻って来る！」

フォーチュンレディ・ライティール

1

ATK200

「そしてこのスタンバイフェイズ、私のフォーチュンレディのレベルは1つ上がる！」

「なるほど、レベルによってステータスが変動する訳か。」

フォーチュンレディ・ライティー

1 2

ATK 200 400

フォーチュンレディ・ファイリィ

2 3

ATK 400 600

「私はフォーチュンレディ・ウィンディーを召喚する！」

今度は緑だ。

フォーチュンレディ・ウィンディー

4

ATK 0

「フォーチュンレディ・ウィンディーはレベル1につき攻撃力が300ポイントアップする！」

フォーチュンレディ・ウィンディー

4

ATK 1200

「フォーチュンレディ・ウィンディーの効果を発動！ このモンスターが召喚に成功した時、相手フィールド上の魔法・罠カードを破壊する！」

フォーチュンレディ・ウィンディーは風を巻き起こそうとした。

「待ちな。この瞬間、俺は禁じられた聖杯を発動！ このターン、フォーチュンレディ・ウィンディーの攻撃力は400ポイントアップし、効果が無効となる！」

フォーチュンレディ・ウィンディー

4

ATK 1200 400

「くっ……効果だけは封じたか。」

「おっと、自分のフィールド魔法の効果を忘れるなよ。」

フォーチュンレディ・ウィンディーは次元の裂け目に吸い込まれ、未来へ飛ばされた。

??? LP5000 5500

「私はフォーチュンレディ・ライティーとフォーチュンレディ・ファイリーを守備表示に変更する。」

フォーチュンレディ・ライティー

2

DEF400

フォーチュンレディ・ファイリー

3

DEF600

「カードを1枚セットし、ターンエンドよ!」

??? / LP5500

手札2枚

モンスター/フォーチュンレディ・ファイリー(守)、フォーチュンレディ・ライティー(守)

魔法・罠/魂吸収、リバース×1

フィールド/フューチャー・ヴィジョン

「俺のターン!」

ようし、ここから反撃だ！

「このスタンバイフェイズ、六武衆・ヤイチは帰還する！」

六武衆・ヤイチ

3

ATK1300

「さらにリバーズカードオープン！ 六武衆推参！！ このカードは墓地から六武衆を1体特殊召喚する！ 現れよ、六武衆 ニサシ！！」

六武衆 ニサシ

4

ATK1400

武士道カウンター 2

「そしてフィールド上に六武衆が存在する場合、こいつを特殊召喚する！ 行け、師範よお！」

六武衆の師範

5

ATK2100

武士道力ウンター2 4

「六武衆・ヤイチの効果を発動！ 自分フィールド上にこいつ以外の六武衆が存在する場合、このターン攻撃する代わりに相手フィールド上にセットされている魔法・罠カードを破壊する事が出来る！」

「なっ…… ミラーフォースが！」

「良いカードを選んだな。 まだだ！ こいつは俺のフィールドに六武衆が2体以上存在する場合、手札から特殊召喚が可能だ！ 来い、俺の分身、大將軍 紫炎！」

大將軍 紫炎

7

ATK2500

「バトル！ 六武衆 ニサシでフォーチュンレディ・ライティーを攻撃！」

ズバッ！！

六武衆 ニサシは刀でフォーチュンレディ・ライティーを切り裂いた。

「まだだ！ このモンスターは自分フィールドに自身以外の六武衆

が存在する場合、2回攻撃可能だ！ この効果でフォーチュンレディ・ファイリーを攻撃だ！」

ズバッ！！

「くっ……だが、この瞬間私はフォーチュン・インハーリットを発動！ このカードは『フォーチュンレディ』が表側表示で破壊されたターンに発動可能！ 次のスタンバイフェイズに手札から『フォーチュンレディ』と名のついたモンスターを2体まで特殊召喚する！」

「だが、俺の攻撃は止まらなねえよ。俺は六武衆の師範でプレーヤーヘダイレクトアタックだ！」

「くっ……」

??? LP 5500 3400

「さらに……大將軍 紫炎で攻撃！」

「ぐっ……」

??? LP 3400 900

「俺はメインフェイズ2に入り、六武の門の効果を発動。武士道カウンターを4つ取り除き、デッキから六武衆・カモンを手札に加

え、召喚する。」

六武衆・カモン

3

ATK1500

「そして六武衆・カモンはフューチャー・ヴィジョンの効果によって除外される。」

??? LP900 1400

「俺はカードを1枚セットし、ターンエンドだ。このエンドフェイズ、六武衆推参で召喚された六武衆・ニサシは破壊される。」

シエン / LP2200

手札1枚

モンスター / 大將軍 紫炎（攻）、六武衆の師範（攻）、六武衆・ヤイチ（攻）

魔法・罨 / 六武の門（武士道カウンター×4）、リバーズ×1
フィールド / フューチャー・ヴィジョン

Side End

S i d e / 鉄也

ミステイ / LP 4000

手札 2 枚

モンスター / レプティレス・ヴァースキ（攻）

魔法・罾 / なし

フィールド / サベージ・コロシウム

ディヴァイン / LP 1300

手札 2 枚

モンスター / なし

魔法・罾 / なし

フィールド / サベージ・コロシウム

「くっ…… がはっ…… （今の攻撃…… 胸の骨が 2、3 本折れた
な…… 私が知っているサイコデュエルの力を遥かに超えている！
！）」

ディヴァインが吐血した。

序盤でいきなり大打撃を喰らったな、ディヴァイン。

まあ、相手のモンスターをリリースできるヴァースキってかなり
強力だからな。

てゆうかそれ以前に闇のデュエリストの力が問題だな。

「さあ、立ちなさい、ディヴァイン。 正直、あなたにはもっと痛
い目に遭わせたいけどこうなった私に遊んでいる暇はないわ。 だ
からあなたに最後のターンをあげるわ。」

出た、死亡フラグ！

「くっ……私のターン！（どうやらあの女の言っている事は本当の様だな。このままでは本当に殺されてしまっ……）」

「さあ、これがあなたのラストターンよ。全力を尽くすべきじゃないの？」

「（この女……！！） うぐっ……私はライフを800払い、早すぎた埋葬を発動！ 墓地からマジカル・アンドロイドを特殊召喚する！」

ディヴァイン LP 1300 500

マジカル・アンドロイド

5

ATK 2400

「更に……私はチューナーモンスター、サイコ・コマンダーを召喚する！」

サイコ・コマンダー

3

ATK 1400

「レベル5、マジカル・アンドロイドにレベル3、サイコ・コマンダーをチューニング！ 逆巻け、我が復讐の黒炎！」

5 + 3 = 8

「シンクロ召喚！ 来い、メンタルスフィア・デーモン！」

『グオオオ！』

メンタルスフィア・デーモン

8

ATK 2700

「バトル！ メンタルスフィア・デーモンでレプティレス・ヴァースキを攻撃！ メンタル・ドミネーション！」

メンタルスフィア・デーモンは口からビームを放ち、レプティレス・ヴァースキに直撃した。

ミステイ LP 4300 4200

「くっ……」

「私はサベージ・コロシアムの効果を発動！ ライフを300ポイント回復する！」

デイヴァイン LP 500 800

「更にメンタルスフィア・デーモンの効果を発動！ このモンスターが戦闘によって破壊して墓地に送ったモンスターの攻撃力分ライフを回復する！」

デイヴァイン LP 800 3400

「さらにメインフィイズ2に入り、巨大化を発動！ メンタルスフィア・デーモンに装備する！」

メンタルスフィア・デーモン

8

ATK 2700 5400

「私はこれでターンエンドだ！」

デイヴァイン / LP 3400

手札0枚

モンスター / メンタルスフィア・デーモン

魔法・畏／巨大化（メンタルスフィア・デーモンに装備）

「私のターンね…… 私は闇の誘惑を発動！ カードを2枚ドロし、手札の闇属性モンスター、レプティレス・バイパーを除外する。そして墓地のレプティレス・ヴァースキを除外し、レプティレス・スポーンを発動！ レプティレストークンを2体特殊召喚する！」

ミステイのフィールドに2匹のトカゲが現れた。

レプティレストークン×2

1

DEF0

「来るわね、《あのモンスター》が。」

「ああ……」

「私は2体のレプティレストークンをリリースする！ 我が命蘇らせし神よ、さあ、この魂を捧げる！ 永き呪縛から解き放たれよ！」

地縛神 コカライア Cc ar a y h u a ! ! 「

ゴトゴト……

地震が起こり始めた。

「なっ……地面が……！」

「デイヴァインよ…… 我が地縛神が貴様を葬り去ってくれるわ！
」

「何！？ 貴様のモンスターは何処に！？」

「デイヴァイン！ 後ろ！！」

地縛神 C c a r a y h u a

10

A T K 2 8 0 0

アルカディア・ムーブメントの窓の外には緑色の模様がある巨大な黒い蜥蜴が現れた。

その大きさはあまりにも巨大であり、ソリッドビジョンにしては大きすぎるものであった。

てゆうかあまり怖くないように見えるのは気のせいかな？

「な、何だ……あのモンスターは！！」

「私は一族の結束を発動。 墓地の種族が一種類のみの場合、自分フィールド上に存在する同じ種族のモンスターは攻撃力が800ポイントアップする！」

地縛神 C c a r a y h u a

10

A T K 2 8 0 0 3 6 0 0

「バトルよ……地縛神 C c a r a y h u a で攻撃！」

『グオオオオオー!!』

「ば……馬鹿め！ 攻撃力は私のメンタルスフィア・デーモンの方が上だ！」

「それは問題ないわ。 何故なら地縛神は相手に直接攻撃が可能だ
！」

「な、何!?!」

ガシャーン！

地縛神 C c a r a y h u a は窓を割って手を伸ばし、ディヴァ
インを掴んだ。

「うわあああ！」

「ディヴァイン!!」

S i d e E n d

S i d e / シエン

「私のターン！ このスタンバイフェイズ、除外されたフォーチュ

ンレディ・ウィンディーは帰還する！」

フォーチュンレディ・ウィンディー

3

ATK 900

「さらにフォーチュン・インハーリットの効果を発動！ 手札からフォーチュンレディ・ウォーテリーを特殊召喚する！」

黄色、赤、緑に続いて青が現れた。

フォーチュンレディ・ウォーテリー

4

ATK 1200

「フォーチュンレディ・ウォーテリーの効果を発動！ 自分フィールドにフォーチュンレディが存在し、このモンスターが特殊召喚に成功した時、カードを2枚ドローする！」

「ここで手札を補充か……」

「ここで見せてあげるわ、私の神を……」

「ん？ 神だと？」

「私はフォーチュンレディ・ウォーテリーとフォーチュンレディ・

ウィンディーをリリースする！ 今再び、五千年の時を越え、冥府の扉が開く！ 我らが魂を新たな世界の糧とするがいい！」

シューウウウウ……

「ん？」

魂みたいなものが沢山空へ飛んでいった。

「あれは……」

俺が見上げると空には心臓のような物が魂みたいなものを吸い込んでいた。

「降臨せよ！ 地縛神 アスラ Aslla ビスク piscu！」

心臓っぽい物が光った。

『クオオオオオオ！！』

どうやら封印が解けたみたいな雰囲気だな。
黄色い線の模様がある巨大な黒い鳥が現れた。

「ほお………。」

地縛神 Aslla piscu

10

ATK2500

「でかいな……」

これがかつて赤き竜に敗れて五千年も眠っていた神……『地縛神』か。

「ほお…… 大したモンスターだな。 だが、ただでかけりや良いつてもんじゃないぜ。 お前はフューチャー・ヴィジョンを忘れたか!? その効果でお前の神は未来へ飛ばされるぜ!」

「それが狙いよ! 地縛神 Aslla piscu の効果を発動! このモンスターがフィールドを離れた時、相手フィールド上のモンスターを全て破壊し、破壊したモンスター1体につき800ポイントのダメージを与える!」

「何だと!?!」

「さあ、地縛神の力をその身に刻むが良い!」

『クオオオオオ!!!』

地縛神 Aslla piscu は俺の六武衆へ向かって両翼から閃光を放った。

Side End

Side / 鉄也

「美央。これが……あの『地縛神』という奴か？」

「シュウ！」

「鉄也！」

「鉄也君!!！」

「氷室さんにじいさん！」

気付いたら黒崎さんが此処に来ていた。
黒崎さんと一緒に氷室さんとじいさん、そして龍亞と龍可がいた。

「何であんた達が此処に？」

「まあ、色々あるんだけど。」

そして龍可達はアルカディアムーブメントから協力してもらう為に此処に来たよな。

「そうよ……あれが地縛神よ。」

「あのモンスター……恐ろしく感じる。」

「まさか……世界が本当に危機に入るのか？」

「そ、それよりあの人、トップモデルのミスティじゃないのか!？」

「」「えええ!?!」「」

「！！ 確かにそうだ……彼女はトップモデルであるミスティ・ローラだ。」

「これは……………」

「この資料に書いてある通り、君の弟を含め、サイコデュエリスト達は研究の犠牲になった。デイヴァインは君の弟が死んでしまう可能性があるのを知っておきながら研究を続けた。彼の死因はデイヴァインが招いたという事だ。そしてお前の察していた通り、ゴドウィンは弱みを握られていた為、捜査は事情聴取のみとなっていた。」

「そう…… ありがとうね、ルーカス。」

「ああ、問題ない。しかし本当にそれでいいのか？ 神はただ敵を取る機会を与える為にお前に力を与えた訳ではない。復讐なんて他にも方法がある筈だ。」

「解かっているわ。でも、トビーがいない世界なんて私は生きていけない。私の心の闇があつた男を殺せと呟いているわ。私は敵を取る為なら世界が滅んでも構わない。」

「そうか…… しかし勿体無いな。世界のトップモデルであるあなたの様な美くて優しいお方があんな醜い男に復讐する為に自らの手を汚すなんてね。復讐を諦めれば新しい幸せを掴めるのに。」

「褒め言葉はありがたいわ。でも私はあの時から人間を辞めた。もう、私にとって幸せなんてないわ。」

「そうか。なら止める権利は無いな。」

「さあ。死んで償いなさい、デイヴァイン。」

はいはい、舌で絡めてパッくんチョですね。

『グオアアアア！！』

「う、うわあああ！！」

「あれ？」

もう1つの手がデイヴァインに近づいてきた。

「ぐっ……ぐぎゃあああああ！！」

グシャー！！

「！！」

「うわああ……………」

握り……潰した……

ディヴァインは地縛神 C c a r a y h u a によって握りつぶされ、血の雨が降り注いだ。

完全に R 18 指定だ……

ディヴァイン L P O

ミステイ W I N N E R

「ディヴァイン………ディヴァイーン……」

アキは叫んだ。

確かに今のは残酷だ……

「い、一体どうなっているの？」

「……君達は見ない方が良い。」

黒崎さんは今の光景が見えないように龍可と龍亞の目を隠していた。

確かにこんな光景を子供に見せるのは過酷過ぎる。

「フハハハ……アッハッハッハ……」

復讐を達成したのか、ミステイは狂喜に笑い始めた。

ミステイさん、もう病んでるよ。

あんたヤンデレ決定だよ。

S i d e E n d

S i d e / ? ? ?

「フフフ………」

これで彼のライフポイントは0……私の勝ちね。

「おいおい、結論を急ぎすぎじゃねえの?」

「何! ?」

六武衆の師範

5

A T K 2 1 0 0

六武衆 ヤイチ

3

A T K 1 3 0 0

大將軍 紫炎

7

A T K 2 5 0 0

シエン LP2200

良く見ると彼のモンスターは破壊されておらず、無傷である。

「フフフ……残念だったな。 勝ったつもりだと思ったのが甘かったな。」

「何だと……何故生きている？」

「おまえが俺のモンスターを破壊しようとした時、これを発動しておいた。」

良く見ると六武衆の師範は勾玉が付いたペンダントを握っていた。

「俺は地縛神 Aslla piscuの効果が発動した時、六尺^{むさか}瓊勾玉^{にのまがたま}を発動した。 このカードは自分フィールドに『六武衆』と名のついたモンスターが存在する場合、カードを破壊する効果を無効にし、破壊する。 これで地縛神 Aslla piscuのモンスターを破壊する効果を無効にした。 モンスターが破壊できないければ与えるダメージもない。」

「くっ………魂吸収の効果を発動。 ライフを500回復する。」

???1400 1900

「カードを2枚セットし、ターンエンドよ。」

??? / LP 1900

手札1枚

モンスター / なし

魔法・罨 / 魂吸収、リバース×2

フィールド / フューチャー・ヴィジョン

この2枚の伏せカード……これならこのターンを凌げる！
そして次のターンに地縛神 Asllapiscuは戻ってきて
直接攻撃を与えれば私の勝ちだ！

「俺のターン！ このスタンバイフェイズ、未来へ飛ばされた六武
衆 カモンは戻ってくる！」

六武衆 カモン

3

ATK 1500

「さらに俺は手札から魔法カード、六武式三段衝を発動！ この力
ードの効果でセットされている魔法・罨カードを全て破壊だ！」

「何！？」

相手の武衆達は私の伏せたカードを全滅させた。

「ちなみに聞いておくが、フューチャー・ヴィジョンで除外されたモンスターはフューチャー・ヴィジョンがフィールドに存在しなけりゃ戻って来ないという事だよな？」

「ま、まさか……」

「そのまさかだ。俺は六武衆 カモンの効果を発動！ 1ターンに1度、相手フィールドの表側表示の魔法・罫カードを破壊するこ
とが出来る！ 俺はこの効果でフューチャー・ヴィジョンを破壊する！」

カモンはフューチャー・ヴィジョンへ目掛けて爆弾を投げた。

ドッカーン！

フューチャー・ヴィジョンは爆発し、風景が元に戻った。

「フッフ……折角の切り札だというのに残念だったな。たとえ巨大な神様であろうと俺の前だと無力同然という事だ。そしてお前のフィールドはがら空になった。俺の勝ちだ。」

「うっ……」

まずい……私はまた死ぬというのか！？
折角、力を手に入れたというのに……

「じゃあな。暇潰しにはなったぜ。」

「えっ！？」

そう言っ て彼は歩き去ろうとした。

「どうした？ 折角生き返ったのにまた死ぬつもりか？」

「……………」

「フフ………… まあ、俺を手こずらせる事が出来た事を褒めてやる。

次に会ったら特別に六武衆の「真」の力を見せてやるぜ、お嬢さん。

」

そう言葉を残して彼は歩き去って行った。

S i d e E n d

S i d e / 鉄也

ディヴァイン………… 原作より酷い死に方だ…………

しかしこれは………… ディヴァインの自業自得だという事にしよう。

「ディヴァイン………… ディヴァインー！！」

アキは必死に叫んでいた。

俺は彼女の肩に触れた。

「アキ………… もう手遅れだ。 あいつは死んだ。」

ガブツ………… ゴクツ！！

地縛神 C c a r a y h u a はディヴァインを握りつぶした後、
飲み込んだ。

まあ、二度と現れたりしないだろうな。

『グオアアアアアア！！』

ガクッ……

「あ……ああ……」

アキはショックのあまり膝をついた。

「フッフ…… 敵を取ったわ、トビー。 十六夜アキ、次はあなたの番よ。 運命が私達の決着を待っているわ。」

「おい、逃げる気か！？」

『グオオオオオオ！！』

地縛神 C c a r a y h u a は咆哮をあげ、暴れ始めた。

ガタガタガタ……

「まずい……」

地縛神 C c a r a y h u a が暴れると同時にアルカディアムー
ブメントが崩れ始めた。

「おい、此处から脱出するぞ！」

「はあ……はあ……」

俺はアキに叫んだのだが、アキはショックのあまり、立つ事が出来なかった。

「仕方ない、とりあえず早く逃げるぞ!!」

こうしてアルカディアムーブメントは崩壊した。

S i d e E n d

T o B e C o n t i n u e d

第46話 現実は色々厳しい

前回のあらすじ

鉄也「う〜〜〜ん、どれにしようかな……」

遊戯王ZEXAL モンスター投票

? ガガガマジシャン

? ズババナイト

? ガンバラナイト

? アチャチャアーチャー

? ゴゴゴゴーレム

? ゴ布林ドバーク

? クリボルト

? 針剣士

? ビッグ・ジヨーズ

? ベビー・トラゴン

? ブラック・レイ・ランサー

? 潜航母艦エアロ・シャーク

ギャラクシーアイズ・フォントドランゴン

? 銀河眼の光子竜

鉄也「まあ、3つに絞っておくか。」

絞った結果

？クリボルト

？ベビー・トラゴン

？銀河眼の光子竜

鉄也「後はよくありそうなモンスターだから没だ。多分投票される確率も低いと思うな。まあ、小さい子なら投票するかもしれないけど。銀河眼の光子竜もやっぱいいや。ようし、俺はクリボルト派だから……こいつに決定だ！！」

？クリボルトに一票！

鉄也「……………頼むから一度ぐらいまともなあらすじの説明をしろ。」

S i d e / ルーカス

「ほお……中々豪華な住まいだな。」

「当たり前だ、ここはトップモデルの家だ。」

アルカディアムーブメントを脱出した後、俺達はここで待ち合わせをする事になっていた。

「で、お前はどうかってこんな場所を借りれたんだ？」

「さっきも言っただろ。俺がミステイ・ローラに情報を提供した礼としてここに一泊させてくれる事になったんだよ。」

「ふっ……いいのか？ 俺達がトップモデルの家を貸してもらって？」

「まあ、彼女はもう家に帰って来ないと言っていたからな。好きだけ寛いで良いと言っていた。まあ、俺達が寛ぐのは今日限りだけだな。」

「ふっん。で、例の女は何処にいる？」

「黒薔薇の魔女による恐怖感で気絶したままだ。だから寝室に寝かせておいた。」

「で、俺達は何時実行する？」

「まあ、冥界の王の封印が解け始めている。俺達が動くべき時は……もう直ぐだ。『邪神』の封印を解く為の準備をしないとな。」

「ほお……」

「……ちなみに言うておくが、今度からは自分勝手な行動を慎め。」

「いいじゃねえか、それくらい。この家、酒でもあるかな……」

「……とりあえず俺達は明後日に『精霊世界』へ行く予定だ。」

そういつて俺はデッキを眺めた……

「……は……一体……」

「……ん？」

どうやら、眼が覚めたようだな。

S i d e E n d

S i d e / 鉄也

翌日

「何か頭痛え……」

色々あった……

アルカディアムーブメントが崩壊したその日……

ガラガラ……

アルカディアムーブメントは崩れ始めていた。

「おい、ここから逃げるぞ！」

「……」

「おい、十六夜……！」

しかし十六夜はショックのあまり動く事などなかった。

ガララ……

瓦礫がアキの所に落ちた。

俺達はやむを得ずアルカディアムーブメントを脱出した。
原作通りなら彼女は多分、大丈夫だろうと思った。

ギューイーーーーーン！！

「！！」

外から白いD・ホイールが現れた。

「おい、ここで何があった！」

「あなたは……」

そのD・ホイールに乗っていたのは白いライディングスーツを着た金髪の青年であった。

彼はレギュラーメンバーの1人……

「元デュエルキング、ジャック・アトラス！」

「元キングは余計だ！……て、お前は大会に出場していた村上鉄也！ それに同じく龍可に黒崎シュウ、そして元デュエリスト、氷室仁！？ 一体ここで何があった！？」

「アトラス！ 緊急事態なんだ！ ダークシグナーが襲ってきた！ 詳しい話は後にしてくれ！ 今は大変なんだ！ 十六夜があのピルの崩壊に巻き込まれている。」

「何！？ 十六夜がだと！？」

「ああ、そうなんだよ！」

「わかった、十六夜は俺が連れてくる！ お前達は先に病院へ行って部屋を予約してくれ！」

「ああ。じゃあ、頼んだぞー！」

……という事であった。

彼女は怪我をしたが一命を収めた。

しかし彼女は昏睡状態となっている。

で、何で俺達が病院にいるかって？

まあ、俺は一応……アルカディアムーブメントに潜入したからな。それからもう1つ……

「じゃあ、彼女はいなかったのね。」

「ああ、ボクが場所を全て探したんだが、彼女はいなかった……」

「一体どうなっているのかしら……」

「可能性だと彼女が何者かにさらわれたとしか思えない……」

「……………」

元々俺達がアルカディアムーブメントへ潜入したのは結衣さんがそこへ行つたのかもしれないと思つたからだ。

しかし彼女は結局いなかった。

これで彼女を探すのに振り出しに戻つた。

まあ、D・ホイールが置いてあつたらしいからあそこにいたのは事実だという事だ。

アルカディアムーブメントの住人は地縛神 C c a r a y h u a の生け贄にされてしまっているしディヴァインは握り潰された。

一応、アキが目を覚ましたら知っていることを聞き出そうと思つて此処にいる訳だ。

「はあ……………」

で、これからどうすればいいんだ？

原作だともうすぐダークシグナーとの戦いが始まつてしまつし、それからブラザーフッドって奴らが一体何をするのかもまだわからないし……………」

まだ俺はブラザーフッドに会つた事すらないんだが……………」

「ん？」

「そういえば黒崎さん、遊斗は？」

「彼か？ 彼は調べたい事があるらしくて昨日から別行動を取る事になつた。」

遊斗はパーティーを離れた

S i d e E n d

S i d e / 遊斗

「……………」

……間違いない、彼はここにいた。

シエン……君は一体何を……

それから結衣さんは本当にアルカディアムーブメントにいたな。
だったらブラザーフッドは結衣さんを狙っていたらしいな……

「精霊世界で起こった事件と関係しているみたいだな……少し確認してみるか。」

僕はi P h n eを取り出した。

「もしもし。」

『はい、もしもし遊斗さん。 どうしました？』

「あの、少し聞きたいんですけど…… 精霊世界で例の『黒い城』
に異変が起きました？」

『は、はい！ 起きていましたよ、信じられない位の異変が。 あ

れはさすがに大変でしたよ!」

「!!! 何があつたか説明してくれ!」

『それは……………』

S i d e E n d

S i d e / 鉄也

「アキさん大丈夫かな…………」

「大丈夫だよ。」

「本当に大変だな。」

アキは今、病室で眠っている。

アルカディアムーブメントが崩壊した後、アキは傷を負ってしまい、昏睡状態となっていた。

「アキ!!!」

「!」

振り向くとそこには顎鬚が生えた壮年の男性とアキと同じ色をした髪の女性がいた。

「アキ……アキ!!」

「誰です、あの人達？」

「あれは……」

「あの人は十六夜英雄。ネオ童実野シティの議員だ。そしてあの人は多分、十六夜議員の奥さんだろう。」

説明ご苦労、黒崎さん。

「え？ 十六夜ってまさか……」

そう、あの人はアキの両親だ。

1人は十六夜英雄^{ひであ}。

アキの父親であり、黒崎さんの言った通りネオ童実野シティの議員である。

過去に彼が自分の娘を「化け物」と呼んでしまい、彼女を今の姿に変えてしまった本人である。

まあ、そういう経緯があったもの、娘の溺愛者である。

もう1人は十六夜節子^{せうこ}。

アキの母親だ。

詳しくはアニメ第40話を見てくれ。

てゆうか何ネタバレしてんだ俺は？

「失礼。私達は……アキの両親です。」

「「ええっ!?!」」

「どうしてアキさんの両親が此処に……?」

「そりゃあ、娘があんな目に遭って親が見捨てて置ける筈が無いだろう。」

「ああ、先生！！」

「！」

「あの子の親です。」

「あの……娘の容態は？」

「それが……手を尽くしてはいるのですが。こちらへ……」

おい先生、手を尽くしているようには見えないんですけど。
彼女は患者意を着ていないし手当てされていたようには見え
ないし。

しかし何故か彼女の傷は治っているし服も新品同然だし完璧に無
傷だろ！！

何か不公平だなオイ！！ 俺は死に掛けたのに何でお前は回復力
が早いんだよ。

まあ、後でアキが患者衣を着て遊星とデュエルするのも何となく
不自然だが。

「アキ……アキ…… お願い……起きてちょうだい…… パパとママを
許してちょうだい……」

お母さんの方は十六夜に抱きついて泣いていた。
するとジャックが病室に入った。

「ただ一人、この女の心の扉を開きかけた男がいた。」

「それは……」

「誰です？」

そのお方は……みんな大好き『蟹えもん』！！

「不動遊星！」

「よ、遊星。」

「お前は……鉄也！！」

俺は十六夜さんのへりに乗って一緒にマーサハウスへ来ました。
どうやら遊星はD・ホイールの手入れをしていた所だ。
そっぴいや遊星は鬼柳との戦いで負けたんだっただな……

「聞いたぜ、お前がデュエルキングになったと。出世おめでとつ。」
「」

「お前こそ十六夜とのデュエルで酷い傷だと聞いたんだが、大丈夫なのか？」

「安心しろ、仲間が7つの球を集めてこの通りだ。」

「……意味がわからないな。」

「それよりこの人がお前に話がある。時間あるだろ？」

こうして俺達はマーサハウスの中で話を始めた。

「私は……十六夜アキの父親、十六夜英雄です。」

「十六夜の…父親…それで、一体俺に何の用が？」

「娘を……アキを救ってほしい！ 今、アキは昏睡状態で意識が…意識がなく……」

「親なのに……親だというのに私達では駄目なんだ！ あの子を…救ってあげられない！」

「落ち着いてください、十六夜さん。ちゃんと事情を話さないと何もわかりませんよ。」

俺が割り入った。

ちなみに俺と一緒にいる理由は遊星に会う為だ。

「あ、ああ……」

十六夜さんは娘の過去を話し始めた。

彼は議員生活の忙しさで、娘であるアキと付き合っただけで時間
がなかった。

誕生日でさえその時間がなかったらしい。

その気持ちはわかるな。

まあ、これが現実だからな。

どの親がある子供だって親が仕事で忙しくて一緒にいてやれない
事は沢山ある。

特に彼女の父親は議員である為、人々の為に普通の仕事人より多
く働かなければならない事が多い。

しかしその時の十六夜がそんな現実を理解するには幼すぎたとい
う事だ。

そして彼女には友達がいなかった。

「しかしそれでも私は努力したんです。あの時も……」

ようやく時間が取れて2人でデュエルをした時、父親は突然また
仕事をする事が必要になった。

その事実を認めなくなかった十六夜はデュエルを続行した。

その時、彼女にサイコデュエルの力が目覚めてしまった。

十六夜さんはその力に恐れて言うてはいけない言葉を口にしてし
まった……『化け物』と。

「それは……取り返しのつかない一言でした。」

「……」

まあ、心を閉ざすのも無理もないな、実の親に言われたら。
そして彼は娘と接する事を恐れてしまった。

まあ、あんな力を経験したら恐れてしまっても仕方がない。

「それから私はアキをデュエルアカデミアに預けたんです。彼女の為になるだろうと。しかしアキはその力の所為で娘は周りから軽蔑されてばかりでした。そしてある日、アキはアカデミアを抜け出したんです。そしてアキは見たんです、家で楽しそうに笑っている私達の光景を。」

その時、それを見た彼女は両親に言葉をかけずに逃げてしまったらしい。

「あの時のアキの顔が忘れられない……」

どうやら自分は捨てられたと思ったんだな。

よく考えてみればアキはファザコンだったんだな……

パパが自分がいなくなつた後に笑っている光景を見てしまつていとファザコンにとつてかなり辛辣だろうな……

「そして今の十六夜となつたという事か。」

「娘のは……アキの心は硬く閉ざされて今の私の声では届かない！」

「それでお前に来たんだ、遊星。彼女を助けてもらおうと。」

「だが……今の俺に彼女を救う事など……」

「お願いします！ 私は、あのジャック・アトラスから聞いた。フオーチュン・カップでアキを助けようとした君なら、必ずアキを救い出してくれると！」

「しかし……俺が入つたところで何が出来ると。」

「頼む、遊星君！」

「遊星。 大の大人がこんなに頼んでるんだ。 助けてやんな。」

「……………」

「お前、鬼柳を恐れているね。」

「マーサは遊星に話しかけた。」

「……！」

「そっぴやそうだな。」

「遊星は鬼柳とのデュエルで敗れたっけ。」

「もしD・ホイールの故障でデュエルが中断されていなかったら遊星は死んでいたな。」

「お前はかつて仲間だった鬼柳と戦う事を恐れている。 向き合う事をね。 ちゃんと向き合えなくて何が仲間だよ。」

「俺は…鬼柳に恨まれても仕方が…」

「わっかんない子だね！ 今のお前は心の扉を閉ざしている！ その扉を開けるのが仲間じゃないのか？」

「……！」

「仲間という事が…その扉を叩く事になる。」

「……………」

「まずは仲間に向き合わなきゃ。なあ、遊星。」

「……うん。」

遊星は笑顔で頷いた。

流石肝っ玉母ちゃん的な存在だ。
とりあえずこれで交渉成立だな。

「ありがとう、遊星君！早速出発しよう！」

しかしその前に……

「遊星、あのアキちゃんって子が好きなんでしょう。」

マーサは爆弾を投下した。

「あ、違っ……」

「照れなくていいんだろう！未来の嫁さん捕まえておいで。」

「待ってくれ、マーサ！」

まあ、今のは大胆すぎるだろう、肝っ玉母ちゃん。

十六夜アキにも会っていないあんたがそんな事を言うなんてな。
初対面である父親の前での発言だったし。

「あっははははは！こりゃあ、いい。」

雑賀は笑い始めた。

いたんだ、雑賀君。

「はははは……」

ちなみに今の会話で空気だった俺も笑っていた。

「それでは、行きましょう。」

遊星は出発する準備を始めた。

「おおっと。 待て、遊星。」

「！ 鉄也。」

今のアキは原作の時よりかなり強い。

俺が相手にした時はデッキが現実でも使われる植物族デッキだったからな。

遊星がフォーチュンカップでどんな形で勝ったのかは知らないが、勝てる可能性が低いのに変わりはない。

「遊星。 このカードを受け取ってくれ。」

「！！ これは……」

このカードなら遊星のデッキと相性がいいたろう。

サテライトで物資の貧しさでなければ当然投入されていただろう。

「しかしいいのか、こんな貴重なカードを？」

「いいんだ。 遊星、俺は収容所でお前に大きな借りが出来た。」

その借りを今、これで返させてくれ。」

あの時、お前は自分自身を攻めて諦めかけていた俺を信じてくれた。

それだけで十分だ。

「……わかった。じゃあ、受け取らせてもらっぜ。」

じゃあ、行くか……

「ちよつとあんた、フォーチュンカップに出場していた村上鉄也でしょう?」

マーサさんが俺に話しかけていた。

「はい、そうですけど。」

「うちの子供たちがね、テレビであんたの活躍を見て気に入っちゃったんだよ。たまにうちにおいでよ、子供達が喜ぶから。」

「あ、ありがとうございます。機会があればお邪魔させてもらいます。」

そうか……俺も意外と有名人になったんだな。

「戻ってきたよ。姉さん、黒崎さん。」

「原作通りだった？」

「ああ。ちなみに遊星にカードをあげた。」

「どんなカードなの？」

「それはお楽しみだ。遊星のデッキなら絶対役に立つ筈だ。」

「う……うん……」

「十六夜……」

「遊星……助けに来てくれたの？」

どうやらアキは気がついたようだな。

「アキ……」

「！！！」

「何であなたが此処に！？ あたしにはもう……あなたは必要ない！！ 私には…ディヴァインが……！！！」

悪いがディヴァインはもう、死んだんD Aー！！

「ああ……ディヴァインは、もういない。ディヴァインは言ったのよ…… もう考えなくてもいいって… 私の代わりに考えてくれるって……」

「落ち着け、十六夜！」

「ディヴァインはパパが取り上げたものを与えてくれた。帰って来られる居場所を与えてくれた……。その居場所が無くなった今、貴方は私を笑いに來たのね！？」

本当に落ち着け。

お父さんは笑いに來た様な表情をしているか？
ちなみに若干黒いですけど、彼女はヒロインです。

「だったらもう1度……」

「やめろ、十六夜！ お前のお父さんも苦しんでいるんだ！」

「見せてあげるわよ！ 化け物の力を！」

アキはデュエルディスクを手にして起動した。
今頃言うが何で病室にデュエルディスクが置いてるんだよ！！
サイコデュエルの力をまた使ってしまう恐れがあるかもしれない

と知ってて置いてるのか？

色々不注意だな、この病院。

「貴方も敵よ、私から居場所を奪う…敵！」

「アキ！！」

「十六夜の心を救うにはもう、デュエルするしかないという事か。」

「違う！ このデュエルは仲間であることを確かめる為のデュエルだ！ 来い！！」

そう言つて遊星もデュエルディスクを起動した。

「始まるか……………ん？」

この時、俺はある大事な事に気付いた。

「外でやれよ2人とも！！」

ここは病院だぞ。

それにしても意外と広いな、この病室。

「デュエル！！」

遊星 LP4000

VS

アキ LP4000

俺の意見はスルーかよ。

遊星にまでスルーされた…… orz。

遊星……俺は信じていたぞ、お前は常識人だと。

S i d e E n d

T o B e C o n t i n u e d ……

番外編 開闢の復活についてのトーク

この禁止・制限改訂に……………全デュエル脳界に衝撃を与えた。

鉄也「……………」

ジャンク『鉄也?』

鉄也「……………」

ジャンク『大丈夫ですか?』

鉄也「何だこれは……!」

2011年9月1日禁止・制限カード

【禁止】

《フィッシュボーグ・ガンナー》（最近の悩み：クエーサーとシーラカンスに用済みにされた。）

《メンタルマスター》（最近の悩み：カームたんにふられた。）

《ハリケーン》

《王宮の弾圧》

【制限】

《カオス・ソルジャー - 開闢の使者 -》（最近の悩み：大勢の人に禁止解除される事を批判されている。）

《真六武衆・シエン》（最近の悩み：歳をとると効果が弱まる事。）

《TG ハイパー・ライブラリアン》（最近の悩み：パワー・グラディエーターに「ざまあ」と言われた。）

《デブリ・ドラゴン》（最近の悩み：制限化された。）

《フォーミュラ・シンクロン》（最近の悩み：せっかく召喚しやすくなったのに制限化された。）

《ローンファイア・ブロッサム》（最近の悩み：どうせ場に出ても直ぐにリリースされる。）

《大嵐》

《原初の種》

《紫炎の狼煙》

《貪欲な壺》

【準制限】

《召喚僧サモンプリースト》（嬉しい事：猫アレルギーから立ち直った。）

《トラゴエディア》

《ネクロ・ガードナー》

《氷結界の虎王ドウローレン》

《デステニー・ドロ》（イヤッホオオオオオオ！！）

《光の護封剣》

《マインドクラッシュ》（イエッ！！）

《リビングデッドの呼び声》

【制限解除】

《裁きの龍》

《魂を削る死霊》

《オーバーロード・フュージョン》（消えろ……敗者は！！）

《サイクロン》

《巨大化》

《グラヴィティ・バインド - 超重力の網 -》

《ゴッドバードアタック》

ジャンク『新しい禁止制限っすね。 フィッシュボーグ ガンナーは水属性シンクロで、メンタルマスターはカームエグゾーキルの影響でしょうから禁止される必要があるっすね。 弾圧も強力だから同じだね。 ハイパー・ライブリアンとフォーミュラ・シンクロン、そして真六武衆 シエンは強力だから制限かって当然っすね。 サイクロン3枚積み可能になってハリケーン禁止化で大嵐解禁は少し納得いかないけど代わりにスターライト・ロードの見せ場が増えるからまあまあ…… 他には大した事無いと思うけど……』

鉄也「俺が注目している所は……あのカードだ!!」

ジャンク『ん?』

《カオス・ソルジャー - 開闢の使者 -》 コレ

ジャンク『そんなに問題事なんすか?』

鉄也「今はカオス・ソーサラーが無制限の時代だぞ…… それに加えて開闢復活なんてありえねえだろ!!」

ジャンク『……………』

鉄也「攻撃力3000で追加攻撃可能って、オネスト使われたらワ
ンキル可能だぞ！それに制限解除されたライトロードと組み合わ
せられたらネクロ・ガードナーを増やせるようになって逆に勝てね
えだろうが！」

ジャンク『あのカード1枚でそんなに慌てるっすか？』

鉄也「お前が存在していなかった時代だから知らないかもしれない
が、開闢が現役だった時代はかなり大変だったぞ。それだからカ
オス・ソーサラーも1度禁止カードになったんだよ！あゝゝゝ、
もう、一体どうなってんだよ！誰だこんな最悪な展開を起こした
奴は！！DDB時代並みに脅威になるぞ！！！」

ジャンク「でも、マインドクラッシュや光の護封剣の制限が緩くな
ったんじゃない……」

鉄也「そんなの大嵐の再び使用可能やサイクロンや裁きの龍が無制
限になった今、全くの無意味だ！！まさかZEXALのOPに入
っていた『踊れ天地開闢』の部分はフラグだったのか……」

「？？？「私もその意見に同意だ。」

鉄也「？」

振り向くと、そこには長身の金髪に一部が青い髪の男性が現れた。
彼の顔には赤い模様があつた。

鉄也「誰だお前は？」

「？？？「私はパラドックス。未来から来た。」

鉄也「未来から？」

パラドックス「未来は今、滅びかけている。私はその未来を変える為に来たのだ！」

鉄也「この番外編とどう関係あるんだよ？」

パラドックス「私の時代ではデュエリスト達のカードの強さに対する醜い欲望が世界を滅ぼし始めている……ある異変によって。」

鉄也「ある異変？ まさか……」

パラドックス「そうだ。そのまさかだ！ この2011年9月1日の禁止制限が世界を崩壊に導いているのだ。」

鉄也「あんたの未来ってどのくらい先の未来だよ？」

パラドックス「そこで私は過去に戻ってデュエルモンスターの創造者、ペガサス・J・クロフォードを抹殺し、デュエルモンスターズを歴史から抹消させようと考えた。」

鉄也「無視すんなコラ！ てゆうかそこまでやらなくていいだろ！ 多分、半年くらいでもう1度禁止カードになるかもしれないだろ、あのカード！」

パラドックス「君にあったのも何かの縁だ。このカードをあげよう。」

鉄也は《S i n t ウルース・ドラゴン》を手に入れた。

鉄也「いらねえよ。俺のデッキと全くシナジーしねえぞ。」

パラドックス「未来を変えるにはもう、これしかない。では、また会おう、村上鉄也。」

鉄也「おい待て！！　　どんだけやばいんだよ、デュエル脳の世界！！」

フツ！！

鉄也「消えた……」

今後のパラドックスの行動は劇場版で観よう！

ジャンク「それでいいんすか？」

鉄也「さあな……まあ、半年でカオス・ソルジャーがもう1度禁止されなかったらもう嫌だ。俺はデュエリストを諦める。」

ジャンク「そこまでしなくても……　鉄也も使えばいいんじゃないすか？」

鉄也「何でも使えばいいというものじゃないぞ。あれだと相手をリスペクトしなくなるだけだ。カオス・ソーサラーの無制限もそうだが……　俺は相手にそんなプレイングをされたくはないし、したくもない。デュエリストはそれぞれ使いたいデッキの形があるからな。そんな人達が開闢の餌食になったら悲劇になるぞ。文字通りカオスだ！！　恐怖政治見たいな出来事になってしまう。」

それ程にはなりません、多分。（by作者）

鉄也「はあ……しばらくの間辛抱するしかないな。とりあえずおまけとして作者の今後の禁止制限の希望だ。」

《レスキューラビット》（最早猫シンクロの脅威とあまり変わらねえ……せめて制限カードになればこの外道ウサギ！）

《次元幽閉》（何故あの効果で準制限にも達しない？）

《神の警告》（制限化してくれ……）

《奈落の落とし穴》（何で準制限のままなのだ……制限になればよ。）

《ブラック・ホール》を禁止化（何故戻ってきた……ストラクチャーかSTARTERに収録されない限り、ZEXAL時代から遊び始める初心者達が簡単に手に入る筈がねえ……）

《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》（3枚積みする人はいないかもしれないが、念の為制限化してくれ。）

ジャンク『……簡単に言えばただのわがままっすね。』

鉄也「まあ、レスキューラビットは制限化するべきだな。あのカード1枚でラギアを簡単に出したりリヴァイエルで再び使用したりする戦略が流行ってしまったっているからな。」

フツ！！

2人が話し合っていると先程の青年、パラドックスが戻ってきた。

ジャンク「あ、さっきの人が戻ってきたっす。』

鉄也「おお、パラドックス。どうだった？」

パラドックス「……………失敗した。」

鉄也「駄目じゃん。」

パラドックス「まさか歴代の主人公3人を相手にするとは思わなかった。」

鉄也「え、そうなの？　とりあえずもう、半年後に期待するしかないよ。」

パラドックス「……………orz」

鉄也「てゆうかお前は何しにここに来たんだよ？」

THE END

番外編 今回のシャークさんと次のストラクの件について

作者「えー……………突然の事ですが、今日はシャークさんについて語りたいと思います。」

鉄也「何だ、このコーナー？」

作者「君は今週のZEXALを見たかい？」

鉄也「ああ、カイトとシャークのデュエルか……………」

作者「そういう話について語りたいと思ってこの番外編を開きました。」

鉄也「（意味ねえ……………」

作者「それでは本日のゲスト、神代凌牙さんどうぞ。」

あ！ やせいのシャークがあらわれた！

鉄也「登場早々、人間扱いされてないのかよ。」

作者「どうぞ、シャークさん。」

シャーク「神代凌牙だ。視聴者のみんな、ZEXALを応援して

くれて感謝する。」

作者「コレがシャークさんのプロフィールです。」

神代凌牙（1?歳）

中学?年生

記録：全国大会出場者

特徴：髪のみ

使用デッキ：海産物

その他：キック力が高い、身体能力が凄い、D・ホイールを操縦できる

鉄也「未成年がバイクを操縦するな！！俺だって乗りてえよ！」

作者「それではシャークさん、あなたが天城カイトとデュエルした時の感想を教えてください。」

シャーク「奴には……全く歯が立たなかった。まさか俺の戦略を読んでそれを逆に利用するなんて思っただけだった。あんな強いデュエリストは始めて見た……」

鉄也「そうなのか……（現実から見ればまあまあと思うが……）」

「

作者「それではあなたはボコボコにされましたね。」

鉄也「魂抜かれてフカヒレになったよな。今度から出番が大幅に減るな。」

シャーク「だ、大丈夫だ…… 必ず遊馬が助けてくれる！」

鉄也「大会が終わってから助かるかもしれないんじゃない？ それだったらかなり遅いぞ。」

シャーク「いや、アストラルがカイトとデュエルして助かるかもしれない！」

作者「多分それもないと思う。」

シャーク「ぐはっ!!」

鉄也「まあ、お前が負けることは放送される前からわかっていたけどな。」

グサッ！

鉄也「しかしアシッド・ゴーレムを奪うなんて間抜けだな…… 強奪する前に効果を聞けよ。」

グサッ！

作者「確かにもし君が効果を知っておけばそんな事にはならなかったのにね。」

鉄也「てゆうかOCGより酷いデメリット持ちだったな。」

シャーク「うつ……」

鉄也「もう、今後から魚シンクロ使えよ。」

作者「いや、F B Gが禁止になった今じゃもう、無理だけど。」

鉄也「まじ？ もはや水属性って最弱属性的ポジションになってね？」

作者「まあ、トリシューラやブリューナクも水属性デッキ以外で全然採用OKだからね。」

シャーク「うつ……………」 否定できない

作者「今後からリチュアの戦力が辛くなるな。」

鉄也「こりゃあシャーク、次からお前は噛ませ犬になるぞ。」

グサリッ！！

シャーク「うぐつ…………… まだだ！ まだ次のストラクにチャンスがあるはずだ！」

鉄也「次のストラク？」

シャーク「そうだ…………… フィッシュボーグ・ガンナーが禁止カードになった今、水属性を強化する為に絶対に水属性のストラクチャーデッキが来る筈だ！！」

シャークの予想

ウォリアーズ・ストライク（炎）

マシンナーズ・コマンド（地）

ドラグニティ・ドライブ（風）

ロスト・サンクチュアリ（光）

デビルズ・ゲート（闇）

次は水属性（？）

鉄也「そついや水属性のストラクって『海竜神の怒り』しかなかったな。使えるカードが何枚が入ってたけど。」

シャーク「そうだ……次のストラクチャーデッキが水属性だったら評価も上がる……そして天城カイトを見返せる………」

鉄也「……………」

作者「……………」

シャーク「な、何だその目は!？」

鉄也「いや、お前の期待に対して言い辛いんだが……………」

作者「実はもう、次のストラクチャーデッキが決まっている。」

シャーク「何!？」

作者「次のストラクチャーデッキは『ドラゴニック・レギオン』。
光属性と闇属性混合のドラゴン族デッキだ。」

グサツ
愚狭!!

シャーク「な、何……!？」

鉄也「そりゃ、驚くよな…… 開闢が復活しただけでやばい時代なのにコ ミは何をしたいんだ? 光と闇なんてもう、開闢で十分だろ!?! 今度は終焉の使者まで復活させるつもりか?」

作者「流石にそれはない…… しかし遊戯王がさらに無理ゲーになりそうだな……」

鉄也「前回のトークでパドックスが過去を変えようとしたのが解かってきた気がするな…… もう、お前もドラグニティを諦めて力オスにしたらいいんじゃない?」

作者「嫌だ! 先日ファランクス1枚を手に入れたばかりなんだ!」

鉄也「でも、作者は大学生だからあまり遊戯王やらねえだろ。あと、シンクロはゲイボルグとバルーチャしか持っていないだろ。シンクロドラグニティ作っても代行天使と暗黒界に勝る可能性は低いぞ。」

作者「それでもドラグニティだけは…… ゼピュロスも手に入れたばかりなんだ! あ、でもレダメの再録が出たら買おうかな……」

鉄也「ドラグニティ・ドライブにファランクスが再録されなかったらレダメが再録されるわけないだろ。」

作者「でも、ロスト・サンクチュアリでクリスティアが再録されたじゃないか。」

鉄也「確かに…… まあ、俺も力オスにやられる事だけは避けたいな。せめて開闢をこの小説に出すなよ。」

作者「安心しろ。ボスキャラ以外に使わせたりなどはしない。」

鉄也「使用確定！？ 結局登場させるのかよ！」

作者「だってあれ、最強だよ？　ボスキャラに使わせないでどうするんだよ？」

鉄也「やめろ！ そんなことをしちゃいけない！」（ATM口調）

作者「安心しろ、十代もあのカードには勝てた。」

鉄也「ふざけるな！　今はオネストが存在してる時代だぞ！　俺にまで現実の無理ゲーの犠牲者にさせる気か！？」

作者「まあ、それは主人公補正で何とかしたまえ。」

鉄也「主人公補正つて、宣言した時点で勝率低くなるぞ……！」

シャーク「ぽかーーーーーん。」

見てみるとシャークは誰かさんのフォトンハンドによって魂を抜かれたような姿をして倒れていた。

鉄也「…………どうやら今の事実がショックでフカヒレになってしまったみたいだな。」

作者「そうだね。まあ、こんな無駄話に付き合っていたいただいた読者の皆さん、ありがとうございます。」

鉄也「次回からまた本編に戻るからな。じゃあ、よろしく。」

第47話 蟹の鉄壁は1000万パワー（前書き）

今回は遊星とアキの再戦です。

正直、会話がうまく書けねえ……

第47話 蟹の鉄壁は1000万パワー

前回のあらすじ

カウント・ザ・メダル!!

現在、鉄也の使えるメダルは……

タカ	×2
クジャク	×1
コンドル	×1
ライオン	×2
トラ	×2
チーター	×1
クワガタ	×2
カマキリ	×1
バッタ	×1
シャチ	×3
ウナギ	×3
タコ	×3
サイ	×1
ゴリラ	×1
ゾウ	×2

前回までの3つの出来事……

1つ!! ダークシグナーの襲撃により、アルカディアムーブメントが崩壊する。

2つ!! 鉄也は遊星と再会する。

3つ!! 遊星とアキの絆を賭けた決闘^{デュエル}が始まる!

鉄也「外でやれよ2人とも!!」

遊星・アキ「デュエル!!」

Side / 鉄也

「デュエル!!」

遊星 LP 4000

VS

アキ LP 4000

「遊星……」

「大丈夫かな……」

「ここはあいつを信じるしかない。ただそれだけだ。」

「……………」

こうして2人のデュエルが始まった……

とりあえずアキはともかく遊星……お前はここが病院だということを知っているかな？

誰かカカシ先生を呼んでくれ！

あの2人のぶつかり合いを止めてくれ！

病院では静かにしましょう by 作者

「私のターン！ 私はローンファイア・ブロッサムを召喚する！！」

ローンファイア・ブロッサム

3

ATK500

「ローンファイア・ブロッサムだと!？」

「早速来るか……」

「私はローンファイア・ブロッサムの効果を発動! 1ターンに1度、植物族モンスターをリリースする事でデッキから植物族モンスターを特殊召喚する! 私はローンファイア・ブロッサムをリリースし、デッキから2体目のローンファイア・ブロッサムを特殊召喚する!」

「何で同じモンスターを？」

不思議に思った龍亞は聞き出した。

「簡単に言えば彼女の狙いはデッキを圧縮させ、墓地を肥やす事だな。」

「墓地肥やしとデッキ圧縮？」

「知らないのか？」

まあ、小学生だから知らないのも無理もないか。

それともデIFOーマーは墓地を利用する戦略が少ないからか？

「簡単に言えば墓地肥やしはカードを墓地へ送る事だ。そしてその墓地にあるカードを利用する戦略だ。」

「へえ……じゃあ、デッキ圧縮は？」

「デッキ圧縮は自分のデッキの量をわざと減らして必要なカードを

手に入れる確率を上げる戦略だ。サーチやリクルートも例に入る。

「

「そうなんだ……じゃあ、アキ姉ちゃんは今のでその2つの戦略を發揮したという事なの？」

「ああ、植物族は殆ど墓地からモンスターを復活させる戦略が多い。言っておくがこの戦略はデッキや使い道によってかなり強力だ。だが、場合によっては自分の首を絞めてしまう危険性もあるから気をつけたほうがいい。」

考えてみればアニメで墓地肥やしの展開ってあまりないな。
GXでヘルカイザーがパワーウォール使った程度だし。

「そしてもう1体のローンファイア・ブロッサムを發動できるようにする。」

とりあえずこうして解説は俺とジャックがする事になった。

「私はローンファイア・ブロッサムをリリースし、ギガプラントを特殊召喚する！」

『グオオオオオー!!』

ギガプラント

6

ATK2400

ズキッ！！

「うぐっ！！」

急に俺の胸の傷が騒ぎ出した……………

「ハハハ…それで逃げたつもり？ 私は永続魔法、増草剤を発動。墓地から植物族モンスターを特殊召喚できるわ。私は墓地からギガプラントを特殊召喚する。」

『グオオオオ！！』

「くっ……………」

「ハハハハ…バトル…ギガプラントでダイレクトアタック。ハ
ード・パニッシュ。」

『グオオオオ…』

「ぐああっ！！」

「はあ…はあ…ぐっ……………」

くそつ、見ただけで胸の傷が騒ぐ……
殺されそうな感じが頭に伝わってくるな……
彼女のギガプラントに反応しているのか？

「！！ 貴様、大丈夫か？」

「はあ……はあ…… あ、ああ……何とかな。」

まずいな……どうやらこの体はギガプラントに対する恐怖感を覚えてしまったようだ。

（ちなみに遊星はローズ・テンタクルスにトラウマがあります。笑）

「いや、それは笑い事じゃねえから！！ 笑えねえから！ 俺にまでローズ・テンタクルスのトラウマを作らせる気か！？（第9話参照）」

頼む遊星、ギガプラントだけは早めに排除してくれ！
てゆうかジャックに心配されるのって何か不愉快だ。

（失礼だぞオイ。 by 作者）

「カードを1枚セットし、ターンエンド。」

アキ/LP4000

手札4枚

モンスター/ギガプラント（攻）

魔法・罾ノリバース×1

「序盤あのモンスターを召喚してくるとはな……あのモンスターを生かしておくわけにはいかないな。」

さすが遊星、学習能力は高いな。

「俺のターン！俺はシールド・ウォリアーを召喚する！」

シールド・ウォリアー

3

DEF1600

「俺はカードを2枚セットし、ターンエンドだ！」

遊星/LP4000

手札3枚

モンスター/シールド・ウォリアー（守）

魔法・罾ノリバース×2

遊星でもさすがに今の状況を簡単に突破は出来ないか……

「私のターン！私はギガプラントをデュアル状態にする！」

『グオオオオオオ！！』

「私はギガプラントの効果を発動！ 1ターンに1度、墓地から昆虫族、または植物族モンスターを特殊召喚する事ができる！ 蘇りなさい、ローンファイア・ブロッサム！！」

ローンファイア・ブロッサム

3

DEF 1600

「ローンファイア・ブロッサムをリリースし、効果を発動！ デッキからダンディライオンを特殊召喚する！」

ダンディライオン

3

DEF 3000

「私は永続罫、アイヴィ・シャックルを発動！ このカードは相手フィールド上のモンスターを全て植物族にする！」

この状況でアイヴィ・シャックルだと？

「私は永続魔法、世界樹を発動する。」

なるほど、そう来るのか。

「さらに私はフレグランス・ストームを発動！ フィールド上の植

物族モンスター1体を破壊し、カードを1枚ドローする！ この効果は相手フィールド上の植物族モンスターを破壊することもできる。私はシールド・ウォリアーを破壊し、カードをドローする。」

急にシールド・ウォリアーがガラスの様に砕けた。

「くっ……」

「私がドローしたカードは凜天使クイーン・オブ・ローズ。よつてもう1枚ドローする。」

「何という戦略だ…… 相手モンスターをノーコストで破壊して手札を補充させるとはな。」

「それだけじゃない。今の破壊によって世界樹にカウンターが乗る。」

世界樹：フラワーカウンター0 1

「私は二重召喚を発動！ このターン、通常召喚を2回行える！ 私はダンディライオンをリリースし、凜天使クイーン・オブ・ローズをアドバンス召喚する！」

「ハアッ！――」

白い仮面を被り、赤い翼が生えた天使が現れた。何かアキのイメージに合いすぎて怖い。

凜天使クイーン・オブ・ローズ

7

ATK2400

「あれ？ あのモンスター、レベル7なのにモンスター1体のリリースで召喚したよ？」

「あのモンスターは植物族1体のリリースでアドバンス召喚できるモンスターだ。それに加えてリスク付きだが強力な効果が備わっている。」

「バトル！ ギガプラントでプレイヤーへダイレクトタック！
ハード・パニッシュュ！！」

「畏発動、くず鉄のかかし！ このカードは相手モンスター1体の攻撃を無効にする！」

ガン！！

遊星の防御手段であるくず鉄のかかしが現れ、儀がプラントの爪を受け止めた。

「そしてくず鉄のかかしは墓地へは行かず、再びセットされる！」

「なら、凜天使クイーン・オブ・ローズでダイレクトアタック！！
ローズ・トリマー
薔薇剪定斬！！」

『ハアアア！！』

凜天使クイーン・オブ・ローズは剣を遊星へ振り下ろした。

ズバッ！！

あのモンスターの剣は遊星の方を切りつけた。

「ぐあああ！！」

遊星 LP 4000 1600

「私はカードを2枚伏せ、ターンを終了する。」

アキ/LP 4000

手札1枚

モンスター/ギガプラント（攻）、凜天使クイーン・オブ・ローズ（攻）、綿毛トークン×2（守）

魔法・罠/世界樹（フラワーカウンター×1）、アイヴィ・シャックル、リバーズ×2

「ぐっ……」

「遊星！！」

「大丈夫か！？」

遊星は肩を抑えて苦しそうな表情をしていた。
考えてみればあいつは鬼柳とその前にデュエルしてた筈だ。
その時のダメージも完全に治っていないかもしれない。

「俺は大丈夫だ…… このエンドフェイズ、俺はリミット・リバー
スを発動！ 墓地から攻撃力1000以下のモンスターを特殊召喚
する！ 来い、シールド・ウォリアー！！」

シールド・ウォリアー

3

ATK800

「俺のターン！ 俺はダブル・サイクロンを発動！ 俺の伏せカー
ドと、お前のそのリバーズカードを破壊する！」

「くっ…… ポリノシスが……」

お、さすが遊星。

これで心配なく攻めに入れるな。

でも遊星、お前はサイクロンを1枚も持ってないのか？

「この世に不要な物は存在しない」という主義はいいが、やはり
サイクロンは必須だぞ。

「俺は手札のレベル・ステイラーを捨て、クイック・シンクロン
を特殊召喚する！」

クイック・シンクロン

5

ATK500

「さらに俺はクイック・シンクロンのレベルを1下げ、レベル・ステイラーを特殊召喚する！」

クイック・シンクロン

5
4

レベル・ステイラー

1

DEF0

「レベル3、シールド・ウォリアーとレベル1、レベル・ステイラーにレベル4となったクイック・シンクロンをチューニング！！集いし希望が新たな地平へいざなう。光さす道となれ！」

3 + 1 + 4 = 8

「シンクロ召喚！ 駆け抜けろ、《ロード・ウォリアー》！」

『トアアア！！』

金色の王族の雰囲気をしたモンスターが現れた。

ロード・ウォリアー

8

ATK3000

「え？」

ちよつと待て、遊星！

ここは普通、ニトロ・ウォリアーかジャンク・デストロイヤーだろ？

何でそんなモンスターを……

「俺はロード・ウォリアーの効果を発動する！ 1ターンに1度、デッキから戦士族、または機械族モンスターを特殊召喚する！俺はデッキからニトロ・シンクロンを特殊召喚する！」

ニトロ・シンクロン

2

ATK3000

「さらに俺はロード・ウォリアーのレベルを1下げ、レベル・ステイラーを特殊召喚する！」

ロード・ウォリアー

8
7

レベル・ステイラー

1

DEF0

「そして俺はまだ通常召喚を行っていない。俺はマックス・ウォリアーを召喚する！」

マックス・ウォリアー

4

ATK1800

なるほど、今度はニトロ・ウォリアーか！

「レベル4、マックス・ウォリアーとレベル1、レベル・ステイラーにレベル2、ニトロ・シンクロンをチューニング！！集いし思いがここに新たな力となる。光さす道となれ！」

4 + 1 + 2 〃 7

「シンクロ召喚！ 燃え上がれ、ニトロ・ウォリアー！」

『グオオオオ！！』

ニトロ・ウォリアー

7

ATK2800

「ニトロ・シンクロンの効果を発動！ このモンスターをシンクロ素材にした『ニトロ』と名の付いたモンスターのシンクロ召喚に成功した時、カードを1枚ドローする！」

凄いな……強力なシンクロモンスターを2体も召喚した。
だが、その反面手札を消費しすぎたな。

「バトル！ ニトロ・ウォリアーでギガプラントを攻撃！ ダイナマイト・ナックル！」

『ハアアア……ドアア！！』

ニトロ・ウォリアーはギガプラントに鉄拳をぶつけた。

「くっ……」

アキ LP4000 3600

「でも、世界樹の効果を発動。 フラワーカウンターを1つ乗せる。

」

世界樹：フラワーカウンター1 2

どうやら伏せカードは次元幽閉でも棘の壁でもなさそうだな。
あれなら安心してニトロ・ウォリアーの追加攻撃は通せるな。

「ニトロ・ウォリアーの効果を発動！ このモンスターが相手モンスターを戦闘によって破壊した場合、相手フィールド上の守備モンスターを攻撃表示に変更し、もう1度攻撃する事ができる！ ダイナマイト・インパクト！！」

『トアアア！！』

「この瞬間、私はガード・ブロックを発動！ 戦闘ダメージを0にし、カードを1枚ドローする！」

アキ LP3600

世界樹：フラワーカウンター2 3

「！！」

まずいな、世界樹にカウンターが乗っている……
世界樹を使用される前にフィニッシュさせるつもりだったかもしれないが、あれだと無理だな。

「2回目の攻撃は通させてくれなかったか…… だが、まだ俺に口

ード・ウォリアーの攻撃が残っている！　ロード・ウォリアーで凜天使クイーン・オブ・ローズを攻撃！　ライトニング・クロー！！」

ロード・ウォリアーは爪でクイーン・オブ・ローズを切り裂いた。

アキ　LP 3600　3000

世界樹：フラワーカウンター3　4

「俺はマジック・プランターを発動！　このカードは自分フィールド上の永續罫カードを墓地へ送る事でカードを2枚ドローする。

俺はリミット・リバーズを墓地へ送り、カードを2枚ドローする！　そしてカードを1枚伏せ、ターンエンドだ！」

「ホワット！？」

おい待て、今のマジック・プランターってさっきのニトロ・シンクロンの効果で引いたよな？

ニトロ・ウォリアーで引いたカードが更なるドローカードって何っ！引きだよ。

遊星／LP 1600

手札1枚

モンスター／ロード・ウォリアー（攻）、ニトロ・ウォリアー（攻）

魔法・罫／リバーズ×1

「ようし、遊星の有利だ！ あれなら遊星は勝てる！」

「いや、違う。ここから彼女の反撃が来てしまう。」

「え？」

「遊星は猛攻が出来たのはいいが、世界樹に十分以上のカウンターを乗せてしまった。遊星もそれに気づいている筈だ……」

やっぱりジャンク・デストロイヤーを召喚した方がよかったんじゃない？

しかしジャンク・デストロイヤーを召喚したらニトロ・ウォリアーは召喚できなくなってしまうな……

でもデストロイヤーを出したら世界樹と伏せカードを破壊出来てニトロ・ウォリアーを召喚する必要自体なかったんじゃない？

まあ、これはアニメの世界だが。

（実際、遊星はジャンク・デストロイヤーを出すべきな所にスターダスト・ドラゴンを出したりしている。）

「私のターン！ 私は世界樹の効果を発動する！ フラワーカウンターを2つ取り除き、フィールド上のカードを1枚破壊する！ 私はロード・ウォリアーを破壊する！」

世界樹：フラワーカウンター4 2

「俺はその効果にチェーンしてシンクロ・バリアを発動！！ ロー

ド・ウォリアーをリリースし、このターンと次のターンの間、自分が受けるダメージを0にする！」

ロード・ウォリアーは光の粒となり、遊星の周りにバリアを張った。

「……………！！！」

「上手い、このターンで自分が受けるダメージを回避しただけでなく、フラワーカウンターを増やす事を防いだ！」

「なら、私は2枚目のフレグランス・ストームを発動！植物族扱いとなっているニトロ・ウォリアーを破壊し、カードをドロースる！私がドロしたカードは……パペット・プラント！よってカードをもう1度ドロする！」

『ぐああああ！』

バリーン！

ニトロ・ウォリアーはガラスの様に碎け散った。

「この状況で手札補充か……………」

しかもフラワーカウンターが3つになってしまったな…………

世界樹：フラワーカウンター2 3

「でも、幸い破壊するカードがもう無いよ。」

「いや、世界樹にはもう1つ効果がある。」

「私はフラワーカウンターを3つ取り除き、効果を発動！ 墓地から植物族モンスターを特殊召喚する！ 現れなさい、ギガプラント
！！」

世界樹：フラワーカウンター3 0

『グオオオオオ！！』

「くっ……」

ギガプラント

6

ATK2400

「私はまだ通常召喚を行っていない！ 私はギガプラントをデュアル状態にする！」

『グオオオオオ！！』

「デュアル状態のギガプラントの効果を発動！ 墓地から植物族モンスターを特殊召喚する！ 現れなさい、凜天使クイーン・オブ・ローズ！！」

凜天使クイーン・オブ・ローズ

7

ATK2400

「あああ！ 遊星がせっかく破壊したのに！」

「あれが植物族の力だ。 甘く見るとああなってしまう。」

やっぱアキ姉さん強ええー！ー！ー！

俺もあの人には殺されかけてたのもわかる……

ジャックや苦勞クローが彼女の相手をしていたら確実に負けるだろうな。
苦勞がこれを見たら「インチキ効果もいい加減にしろ！」とか言いそうだな。

あいつが言える台詞じゃないが。

「このターンでダメージを与えられないのが残念ね。 私はカードを1枚伏せ、ターンを終了よ。」

アキ/LP3000

手札1枚

モンスター/ギガプラント（攻）、凜天使クイーン・オブ・ローズ（攻）、綿毛トークン（守）

魔法・罫/世界樹（フラワーカウンター×0）、アイヴィ・シャックル、リバーズ×1

「俺のターン！俺はゼロ・ガードナーを召喚する！」

ゼロ・ガードナー

4

DEF 0

「俺はこれでターンエンドだ！」

遊星 / LP 1600

手札 1枚

モンスター / ゼロ・ガードナー（守）

魔法・罠 / なし

「私のターン！私は凜天使クイーン・オブ・ローズの効果を発動！フィールド上の1番低い攻撃力のモンスターを破壊するわ。そのモンスターは…あなたのゼロ・ガードナーよ！」

「俺はその効果にチェインしてゼロ・ガードナーの効果を発動！このモンスターをリリースし、このターン俺が受ける戦闘ダメージは0となる」

ゼロ・ガードナーが消え、遊星の周りにバリアが現れた。

「なら、私は凜天使クイーン・オブ・ローズの効果を発動！この効果で綿毛トークンを破壊する！」

綿毛トークンはガラスのように砕け散った。

世界樹：フラワーカウンター 0 1

「さらに私はギガプラントの効果を発動！ 墓地から植物族モンスターを蘇らせる！ 再び現れなさい、ローンファイア・ブロッサム
！！」

ローンファイア・ブロッサム

3

ATK500

「私はローンファイア・ブロッサムの効果を発動！ このモンスターをリリースし、デッキから椿姫ティタニアルを特殊召喚する！」

椿姫ティタニアル

8

ATK2800

「さらに私はロードポイズンを召喚する！」

ロードポイズン

4

ATK1400

「私はこれでターンエンドよ。」

アキ/LP3000

手札1枚

モンスター/ギガプラント(攻)、椿姫ティタニアル(攻)、凜
天使クイーン・オブ・ローズ(攻)、ロードポイズン(攻)

魔法・罠/世界樹(フラワーカウンター×1)、アイヴィ・シャ
ツクル、リバース×1

「くっ……俺のターン！ ドロー！！ 俺はミスティック・パイ
パーを召喚する！」

ミスティック・パイパー

1

ATK0

「あれって鉄也のカードじゃん！」

「まあ、俺のデッキは殆ど遊星のに似ているからな。」

ジャンク以外のシンクロン、そしてスターダストを使わない所以
外は完全に同じデッキだと言って良い。

「……………」

………　そっぴゃこの小説も人気が上がって40話超えた今頃の事だが………　少しはキャラが被っている所を考えろよ、作者。

「俺はミスティック・パイパーをリリースし、カードをドローする！　俺が引いたカードはレベル1の速攻のかかし！　よってもう1度ドローする！　俺はこれでターンエンドだ！」

遊星／LP1600

手札3枚

モンスター／なし

魔法・罠／なし

「（彼の手札は速攻のかかし………　どうやら使わせるしかないようね。）　凜天使クイーン・オブ・ローズの効果を発動！　ロード・ポイズンを破壊する！」

世界樹：フラワーカウンター1　2

「さらにギガプラントの効果を発動！　墓地からローンファイア・ブロッサムを蘇生させる！」

ローンファイア・ブロッサム

ATK500

「私はローンファイア・ブロッサムをリリースし、デッキからもう1体の椿姫ティタニアルを特殊召喚する！」

椿姫ティタニアル

8

ATK2800

これじゃあ、世界樹を破壊する事が余計に難しくなったな。

「バトルよ……椿姫ティタニアルでダイレクトアタック！ カメリア・ウィップ！！」

椿姫ティタニアルは遊星へ目掛けて棘の鞭を振り下ろした。

「俺は手札から速攻のかかしの効果を発動！ 相手プレイヤーが直接攻撃を宣言した時、このモンスターを手札から墓地へ送る事でその攻撃を無効にする！」

グラサンをかけた鉄のかかしが現れ、ティタニアルの鞭を受け止めた。

「さらに相手のバトルフェイズは終了する！」

遊星、何つー鉄壁だよ。

バッドファローマン並にタフじゃねえか。

流石甲殻類だけである事か！？

「……どうしたのよ、遊星？ 私から逃げるつもり？」

「……………」

無理を言っなよ。

どう見ても一方的なデュエルじゃねえか。

遊星はこれでも精一杯だぞ。

「私はこれでターンエンドよ。」

アキ／LP3000

手札2枚

モンスター／ギガプラント（攻）、椿姫ティタニアル（攻）×2、

凜天使クイーン・オブ・ローズ（攻）

魔法・罨／世界樹（フラワーカウンター×1）、アイヴィ・シャ
ツクル、リバーズ×1

「俺のターン……（流石に凌ぎ辛くなって来たな……これでは彼女
に届く事ができない……スターダスト・ドラゴンの力が必要だ……
あのカードを引かなければ……）ドロー！！」

まずいな……流石の遊星も押されすぎているか。

このままだと俺があげたあのカードが出てても意味がないかもしれ
ないな。

「（……………これは！？）」

遊星の表情が変わった。

何か逆転のカードを引けたか？

「鉄也！」

「ん！」

「お前が託したカード……使わせてもらっぜ！」

！ あのカードを引いたか……

「俺は手札のダンディライオンを墓地へ送り、ワン・フォー・ワンを発動！ デッキからレベル1のモンスター、チューニング・サポーターを特殊召喚する！」

チューニング・サポーター

1

DEF100

「さらに墓地へ送られたダンディライオンの効果を発動！ 綿毛トークンを2体特殊召喚する！」

綿毛トークン×2

1

DEF100

「俺はデブリ・ドラゴンを召喚する！」

デブリ・ドラゴン

4

ATK1000

「デブリ・ドラゴンの効果を発動！ このモンスターが召喚に成功した時、墓地から攻撃力500以下のモンスターを特殊召喚する！
来い、ダンディライオン！！」

ダンディライオン

3

ATK300

「やっと来たか……」

あのカードの効果は強力だ。

しかも使い易い。

遊星のデッキなら相性がいいし、物資が貧しいのなら持ってないだろうと思って託しておいた。（アキと被るけど。）

遊星…… 収容所での借りはそいつで返えさせてもらうぜ。

「俺はレベル3、ダンディライオンとレベル1、チューニング・サポーターにレベル4、デブリ・ドラゴンをチューニング！ 集いし願いが新たに輝く星となる。 光さす道となれ！」

3 + 1 + 4 || 8

「シンクロ召喚！ 飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！」

『グオオオオオ！！』

スターダスト・ドラゴン

8

ATK2500

「来たか……… スターダスト・ドラゴン。」

久しぶりだな……… そいつを見たのはあの日以来だったか。
今はもう、持っていないが懐かしい………

「チューニング・サポーターの効果を発動！ デッキからカードを
1枚ドロ―する！」

ここから反撃開始だという事だな、遊星。

「さらにダンディライオンの効果を発動！ このカードが墓地へ送
られた為、綿毛トークンをさらに2体特殊召喚する！」

綿毛トークン×2

D E F O

「俺はトークン復活祭を発動！ このカードは自分フィールド上のトークンを全て破壊し、その数だけフィールド上のカードを破壊する！」

「何！？」

「俺が破壊するカードは2体の椿姫ティタニアル、その伏せカード、そして世界樹だ！」

『『『キユウ~~~~ン！』』』

「そうか、トークン復活祭は対象を取らない効果だ！ 椿姫ティタニアルでは無効化できない！」

凄いな……相手のカードを4枚も破壊できるぞ。
綿毛トークン達はオーラを纏い、相手のフィールドへ突撃した。

チュドーーン！！ チュドドーーン！！

『きゃああああー！！』

『ぐおおおおー！！』

「くっ……………」

「バトルだ！ スターダスト・ドラゴンでギガプラントを攻撃！」

シューティング・ソニック!!」

『グオオオオオ!!』

『グアアア!!』

スターダスト・ドラゴンはギガプラントへ目掛けて口から光線を放った。

その攻撃により、ギガプラントは消滅した。

アキ LP3000 2900

「くっ……」

とりあえずこれで形勢逆転だな。

「十六夜……俺はこのデュエルで……必ずお前を救ってみせる!」

To Be Continued……

おまけ

鉄也から見る原作キャラへの視点

遊星 頼もしい仲間

アキ ドS的な意味で怖い（少なくとも友達になってもいいとは思う）

ジャック マダオ（まるでだめな王者）、あるいはニート

苦勞 徹底的に潰したい

龍亞 必要なムードメーカー

龍可 精霊が見える友達、いざという時に頼れる

ボマー DDBの件で悪い事をして悲劇を増やしてしまった……

すいません、ボマーさん

プロフェッサー・フランク ロリコン爆発しろ！！

ミステイ ヤンデレ的な意味で怖い

ディヴァイン 嫌なキャラだったけど何気なく同情

ゴドウィン 結局この人、俺とは何の関係もなさそうだな……

他のキャラとはコネクションがないので視点はありません。
しかし苦勞は例外。

第48話 飛翔せよ！ スターダスト・ドラゴン/バスター（前書き）

久々に更新できた~~~~~

これでアルカディアムーブメント編が終了します。

第48話 飛翔せよ！ スターダスト・ドラゴンノバスター

これまでのZEXAL

遊馬「ZEXALだ！！」
ゼアル

アストラル「遊馬……私のターン！ 私は私自身と遊馬でオーバーレイ・ユニットを構築！」

遊戯「なあにこれえ……」

アストラル「来い、遊馬！」

遊馬「カットびんぐだぜ、俺！！ エクシーズ・チェンジ・ゼアル！！」

遊馬は超サイヤ人になった。

遊戯「なあにこれえ……」

鉄也「本当に何だこりゃ？」

遊馬・アストラル「最強デュエリストのデュエルは全て必然！ ドローカードはデュエリストが創造する！ 集中しろ、遊馬。シャイニング・ドロー！！」

遊戯「なあにこれえ……」

鉄也「おい、カードの創造は完全に違反行為だろ…… 一応、主人
公は皆やってるけど。」

遊戯「なあにこれえ……」

鉄也「一々煩い！」

S i d e / 遊 星

「くっ……」

「俺はこれでターンエンドだ！」

現在の状況

遊星 / LP 1600

手札 0 枚

モンスター / スターダスト・ドラゴン（攻）

魔法・罠 / なし

アキ／LP2900

手札2枚

モンスター／凜天使クイーン・オブ・ローズ（攻）

魔法・罾／アイヴィ・シャックル

ようし、これで遊星が優勢になったぜ。

何とか十六夜の戦略を崩せたな……まだ油断は出来ないが。

「……………しなさい。」

「!?」

「いい加減にしなさい、不動遊星!!」

「十六夜……………」

「私を認めてくれたのはディヴァインだけ……。私の居場所はない、無いのよ!」

「違う! お前には帰る場所がある!」

「煩い! そんな口先よ! 誰も私を救うことなど出来ない!」

「考えなおせ、十六夜!」

「煩い……………煩い! デュエル続行よ。私のターン!」

「……………」

「遊星、俺は貴様のお陰で地獄を見てきた。貴様にこの恨みを嫌
と言っほど味わせてやろう！」

「ヒヤハハハハ！！ 踊れ遊星！」

「ここで貴様らの因縁に決着をつけてやる。」

「遊星……………この裏切り者おおおー！！！」

「行け、我が地縛神 C c a p a c A p u ！！！」

俺はあの時を悔やんだ……………

俺が止められなかった所為であいつは悪魔になってしまった。

変わってしまった鬼柳……………俺は奴を恐れて…奴と向き合うのが怖
くなってしまった……………

だが、俺はもう決めた！

俺はこれ以上仲間を傷つけない！

俺は仲間を助ける！

十六夜も鬼柳も必ず救う……救ってみせる！

「十六夜……俺はお前を必ず救う！ お前の憎しみ……悲しみ……全て俺にぶつけて来い！」

「私のターン！」

S i d e E n d

S i d e / 鉄也

これで遊星の形勢逆転になったな。

だが、相手は十六夜だ。

何時逆転されても可笑しくない。

「私のターン！」

「このスタンバイフェイズ、凜天使クイーン・オブ・ローズの効果が発動する！ その効果により、フィールド上に存在する攻撃力が1番低いモンスターを破壊する！ そのモンスターは自身も例外ではない！」

「……………分かっているわ。」

ドスッ……………

『くっ……ああああー!!』

凜天使クイーン・オブ・ローズは剣を自分の腹に突き刺した。

「うわ…切腹した……」

文字通り凜天使だな。

「私はアイヴィ・シャックルを墓地へ送り、マジック・プランターを発動！ カードを2枚ドローする！」

あの状況で手札増強か……

十六夜の実力だと色々まずいな。

「私は黒薔薇の魔女を召喚する！」

黒いドレスを着た紫色の髪の少女が現れた。

黒薔薇の魔女

4

ATK1600

「黒薔薇の魔女の効果を発動！ このモンスターが召喚に成功した時、カードを1枚ドローする！ その効果によってドローしたカードがモンスターカード意外だった場合、ドローしたカードを墓地へ送り、このカードを破壊する。 ドロー……」

「うわ……………」

補正だ……絶対補正の力か何かで薔薇の妖精を引きそうだ。

「私がドローしたカードは薔薇の妖精！ このモンスターがカードの効果で手札に加わった時、特殊召喚することが出来る。現れなさい！」

次は妖精が現れた。

薔薇の妖精

3

DEF 1200

やっぱり来た！！

補正の力であるカードを引くなんてほぼインチキだろ。

まあ、ミスティック・パイパーを使いまわしてレベル1を多く引いた俺が言う事じゃないが。

「えっと…3たす4は……………」

「……ブラック・ローズ・ドラゴン。」

「レベル3、薔薇の妖精にレベル4、黒薔薇の魔女をチューニング！ 冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の花よ、開け！」

3 + 4 = 7

「シンクロ召喚！ 現れよ、ブラック・ローズ・ドラゴン！！」

『グオオオオオ！！』

彼女の背後に薔薇の形をまとった竜が現れる。

あれこそ彼女の切り札……シンクロモンスターでも最も強く、採用価値の高いカードだ。

ブラック・ローズ・ドラゴン（OCG効果に変更）

7

ATK2400

「で、出た……」

「出たか、十六夜の切り札……」

「出たな……『第2の効果なんてなかった竜』。」

「どういう意味だ？」

「こっちの話だ。」

「私は装備魔法、憎悪の棘を発動！ このカードをブラック・ローズ・ドラゴンに装備し、攻撃力を600ポイントアップさせる！」

『グオオオオオ！！』

ブラック・ローズ・ドラゴンは棘の鞭を出し、体中から鋭い棘を身に纏った。

凶悪な姿になってるな。

アキのDSさを完璧に表現している姿だ。

ブラック・ローズ・ドラゴン

7

ATK 2400 3000

「バトルよ…… ブラック・ローズ・ドラゴンでスターダスト・ドラゴンを攻撃！ ヘイト・ローズ・ウィップ！！」

『グオオオオ！！』

ビューーン！！

「ああ！ 遊星のスターダスト・ドラゴンが破壊されちゃう！」

「いや、その問題はない。」

バシーン！！

ブラック・ローズ・ドラゴンの鞭はスターダスト・ドラゴンに直撃した。

『グアアア！！』

スターダスト・ドラゴンは鞭による痛みで叫びだした。

バシーン！！

ブラック・ローズ・ドラゴンはついでに遊星を攻撃した。

「ぐああああ！！」

「遊星！」

「遊星君！！」

遊星は鞭に打たれて吹っ飛んだ。

「大丈夫か！？」

「ぐっ……俺は、大丈夫だ。」

ちなみにスターダスト・ドラゴンと遊星が鞭に打たれるシーンは使い回しではなかったらしく、それぞれ違うシーンを作られていたらしい。

スタッフは何を目指しているんだ……

遊星 LP 1600 1100

「憎悪の棘の効果を発動！ 装備モンスターがモンスターを攻撃した場合、そのモンスターは戦闘によって破壊されず、ダメージ計算後に攻撃対象モンスターの攻撃力・守備力が600ポイントダウン

する！」

スターダスト・ドラゴン

8

ATK2500 1900

「私はカードを1枚セットし、ターンエンドよ。」

アキ／LP2900

手札1枚

モンスター／ブラック・ローズ・ドラゴン（攻）

魔法・罠／憎悪の棘（ブラック・ローズ・ドラゴンへ装備）、リ
バース×1

十六夜……俺は見える、お前の心の中の憎しみ、そして悲しみが

……

だったらぶつかって来い！

俺が全て受け止めてやる！

「俺のターン！俺はセカンド・ブースターを召喚する！」

遊星の前に細長いジェット機が現れた。

セカンド・ブースター

3

ATK1500

「セカンド・ブースターの効果を発動！ このモンスターをリリースする事で自分のモンスター1体の攻撃力を1500ポイントアップさせる！」

『グオオオオオ！！！』

スターダスト・ドラゴンの周りの炎が纏った。

スターダスト・ドラゴン

8

ATK1900 3400

「バトルだ！ スターダスト・ドラゴンでブラック・ローズ・ドラゴンを攻撃！ シューティング・ソニックー！！」

『グオオオオオ！！！』

アキ LP2900 2500

「俺はこれでターンエンドだ！」

スターダスト・ドラゴン

8

ATK 3400 1900

遊星 / LP 1100

手札 0 枚

モンスター / スターダスト・ドラゴン (攻)

魔法・罠 / なし

「くっ……でも、そのエンドフェイズに私はライフを800払い、永続罠、ウィキッド・リボーンを発動する！墓地からシンクロモンスターを特殊召喚する！この効果で特殊召喚されたモンスターは効果が無効となる！再び戻ってきなさい、ブラック・ローズ・ドラゴン！」

アキ LP 2500 1700

「グオオオオオー！！」

ブラック・ローズ・ドラゴン

7

ATK 2400

「はあ……はあ……」

「私のターン！ 私はブラック・ローズ・ドラゴンでスターダスト・ドラゴンを攻撃！ ブラック・ローズ・フレア！！」

ブラック・ローズ・ドラゴンはスターダスト・ドラゴンへ向かって炎を吐いた。

「俺は墓地のシールド・ウォリアーの効果を発動！ このモンスターを除外することでモンスターの戦闘破壊を無効にする！」

スターダスト・ドラゴンの前にシールド・ウォリアーが現れ、ブラック・ローズ・ドラゴンの攻撃を受け止めた。

「でも、ダメージは受けてもらっわ。」

『グオオオオオ！』

「ぐああああ！！」

遊星もブラック・ローズ・ドラゴンの攻撃による巻き添えを喰らった。

遊星 LP 1100 600

「私はこれでターンエンドするわ。」

アキ / LP 1700
手札 2枚

モンスター／ブラック・ローズ・ドラゴン（攻）
魔法・罨／ウィキッド・リボーン（ブラック・ローズ・ドラゴン
を蘇生）

「俺のターン！！俺は貪欲な壺を発動！墓地から速攻のかかし、
デブリ・ドラゴン、クイック・シンクロン、ニトロ・ウォリアー、
そしてロード・ウォリアーをデッキに戻し、カードを2枚ドローす
る！」

ここへ来て貪欲な壺か……

「俺はスターダスト・ドラゴンを守備表示へ変更する。カードを
1枚伏せてターンエンドだ。」

スターダスト・ドラゴン

8

DEF1400

遊星／LP600

手札1枚

モンスター／スターダスト・ドラゴン（守）

魔法・罨／リバース×1

「私のターン……私はブラック・ローズ・ドラゴンの効果を発動
！墓地の薔薇の妖精を除外し、相手守備表示モンスター1体を攻
撃表示へ変更させ、攻撃力を0にする！ローズ・リストラクショ

ン！！」

『グアアアアア！』

茨の蔓がスターダスト・ドラゴンに巻きつき始めた。

「俺はその効果にチェインし、エフェクト・ヴェーラーの効果を発動！ このモンスターは相手プレイヤーのメインフェイズに手札から墓地へ送る事で相手モンスターの効果を無効にする！！」

「何！？」

ブラック・ローズ・ドラゴンの前に白衣を着た青い髪の少女が現れ、ブラック・ローズ・ドラゴンの効果をかき消し、スターダスト・ドラゴンは蔓から開放された。

「ならバトルよ。 ブラック・ローズ・ドラゴンでスターダスト・ドラゴンを攻撃！ ブラック・ローズ・フレア！！」

ブラック・ローズ・ドラゴンはスターダスト・ドラゴンに炎を吐いた。

『グオオオオオ！！』

今度は防ぐ手立てが無かったらしく、スターダスト・ドラゴンは破壊された。

「私はこれでターンを終了する！」

アキ／LP1700

手札3枚

モンスター／ブラック・ローズ・ドラゴン（攻）

魔法・罾／ウィキッド・リボーン（ブラック・ローズ・ドラゴンを蘇生）

「このエンドフェイズ、俺は奇跡の残照を発動！ 墓地からこのターンで戦闘によって破壊されたモンスターを特殊召喚する！ 蘇れ、スターダスト・ドラゴン！！」

『グオオオオオ！！』

スターダスト・ドラゴン

8

ATK2500

「また…あの竜が私の邪魔をするというの……」

「俺のターン！ バトルだ！ スターダスト・ドラゴンでブラック・ローズ・ドラゴンを攻撃！ シューティング・ソニック！！」

『グオオオオオオ！！』

スターダスト・ドラゴンが放った光の光線が再びブラック・ローズ・ドラゴンを粉碎した。

「くっ……」

アキ LP 1700 1600

「俺はこれでターンを終了する！」

遊星 / LP 600

手札 1枚

モンスター / スターダスト・ドラゴン

魔法・罠 / なし

「私のターン！ 私はブルーローズ・ドラゴンを召喚する！」

彼女のフィールドにブラック・ローズ・ドラゴンに似た青い竜が現れた。

ブルーローズ・ドラゴン

4

DEF 1200

「カードを2枚セットしてターンを終了よ。」

アキ / LP 1600

手札 0枚

モンスター／ブルーローズ・ドラゴン（守）
魔法・罾／リバーズ×2

「俺のターン！ 俺は装備魔法、ジャンク・アタックを発動！ スターダスト・ドラゴンに装備する！」

『グオオオオオオ！！』

「俺はスターダスト・ドラゴンでブルーローズ・ドラゴンを攻撃！ シューティング・ソニック！！」

シューティング・ソニックはブルーローズ・ドラゴンを粉碎した。

「ジャンク・アタックの効果を発動！ このモンスターが戦闘によつて相手モンスターを破壊して墓地へ送った場合、相手プレイヤーにその破壊したモンスターの攻撃力の半分のダメージを与える！」

燃えた屑鉄が浮かび上がり、十六夜に飛び掛つてきた。

「はあ……はあ……」

アキ LP 1600 800

「くっ……私はブルーローズ・ドラゴンの効果を発動する！ このモンスターが破壊されて墓地へ送られた場合、墓地からブラック・ローズ・ドラゴンを特殊召喚する事が出来る！」

『グオオオオ!!』

ブラック・ローズ・ドラゴン

7

ATK2400

何だこのぶつかり合いは……

スターダスト・ドラゴンとブラック・ローズ・ドラゴンが互いにぶつかり倒され合って蘇り、またぶつかり合う……

遊星……お前はこうやって十六夜の気持ちを受け止めるつもりか？

「俺はカードを1枚セットし、ターンエンドだ!」

遊星/LP600

手札0枚

モンスター/スターダスト・ドラゴン(攻)

魔法・罠/ジャンク・アタック(スターダスト・ドラゴンへ装備)

、リバース×1

「私のターン……リバースカード、アームズ・ホールを発動!

デッキトップを墓地へ送り、墓地から憎悪の棘を手札に加える!」

「くっ……」

「私は憎悪の棘をブラック・ローズ・ドラゴンに装備する!」

ブラック・ローズ・ドラゴン

7

ATK 2400 3000

「さあ…… ブラック・ローズ・ドラゴンでスターダスト・ドラゴンを攻撃！」

「俺は荒野の大竜巻を発動！ フィールド上で表側表示で存在する魔法・罠カード1枚を破壊する！ 俺が破壊するのは憎悪の棘だ！」

ブラック・ローズ・ドラゴンの前に竜巻が吹き始めた。

「させないわ。 私は魔球の賄賂を発動！ 荒野の大竜巻の効果は無効にし、破壊する！」

「何！？」

魔球の賄賂によって荒野の大竜巻は消され、遊星はやむを得ずカードをドロートした。

「ヘイト・ローズ・ウィップ！！」

バシーーーーン！！

『グオアアアア！』

「ぐあああああ！！！」

ブラック・ローズ・ドラゴンの鞭は遊星に直撃した。

遊星 LP 600 100

スターダスト・ドラゴン

8

ATK 2500 1900

「……………私はこれでターンを終了よ。」

アキ/LP 800

手札1枚

モンスター/ブラック・ローズ・ドラゴン（攻）

魔法・罠/憎悪の棘（ブラック・ローズ・ドラゴンへ装備）

「はあ…はあ…はあ……………」

まずい……………遊星のライフが残り100……………

しかもこの十六夜の実力は原作以上だ……………このターンで遊星の勝敗が決まる！！

「俺のターン！俺はスターダスト・ドラゴンをリリースし、アドバンスドローを発動する！」

遊星……スターダスト・ドラゴンをリリースするのか!?

「……………!! (この2枚は!) 俺はカードを3枚セットし、ターンを終了する!」

遊星 / LP 100

手札 0 枚

モンスター / なし

魔法・罠 / リバーズ × 3

「あなたは自分の切り札を犠牲にしてまで手札を増やすことを選んだのね…… そうよ…それが本来のあなた。人を救うことなんて出来ない! あなたはただの偽善者よ!」

「そうだ…… お前の言うとおり、俺には力など無い!」

「え……?」

「誰かを助けることなど出来る筈も無い… だが……俺はただ…傷ついていく仲間から眼をそらす事は出来ない! それだけだ!」

「「「!」」」

「……フッ。」

まあ、遊星らしい答えだよな。

「だから俺はお前を救い出す!」

「私のターン！！ 私は手札からワンダー・クローバーを発動！
手札のコアキメイル・グラヴィローズを墓地へ送り、このターン、
ブラック・ローズ・ドラゴンは2回攻撃を行える！」

『グオオオオオ！！』

ブラック・ローズ・ドラゴンは再び暴れ始めた。

「遊星！」

「遊星……」

「止める、アキ！ これ以上人を傷付けることは止めるんだ！」

十六夜の父親が割り込んできた。

「済まなかった、アキ…… 私がいけなかったんだ」

「止めて。 今更何を言っただって……」

「私はお前の力が…… お前が恐かった。」

「……………！！」

「誤魔化しは無しだ。 正直に言う。 ただお前を恐れた。」

「解っていたわ。 だから貴方は私を捨てた…… 私が化け物だから
！」

「そう、私はあの時考えることを止めてしまったんだ。その先に、当たり前前の気持ちがあることにも気付かずに。だがようやく気付いた。いや、気付かされた！ 私は…私達は…お前を愛している！」

「そんな事……信じるんでも!?」

「信じてくれとは言わない。いや、信じるべきなのは私の方だったんだ。お前を愛していたのだから。」

「煩い、そんなの茶番よ!」

「よく見るんだ、十六夜！ お前のお父さんは今、お前と向き合おうとしているじゃないか！ たとえそのお前が魔女であろうと!」

「煩い……煩い!! 何を今更……今度は私があなたを捨てる番よ!」

『グオアアア!!』

ブラック・ローズ・ドラゴンは暴れだし、鞭を振り回し始めた。こんな所で暴れたら……

てゆうか暴れんな!

マジ危ないから!

ここ病院だから!

「うわあああ!!」

「きゃああああ!!」

ブラック・ローズ・ドラゴンは無差別に鞭を振り回していた。
鞭は龍可と龍亞に向かって来た。

「危ない！ アトラス、子供達を！！」

「下がれ！」

ガシッ！！

「んぐぐぐぐ……」

俺は憎悪の棘を素手で受け止めた。
正直痛いな……表面がザラザラしてるし。
その間にジャックは子供達を遠ざけた。

「十六夜！！」

「バトルフェイズよ…… ブラック・ローズ・ドラゴン、パパを叩
き潰して！」

『グオオオオオ！！』

ブラック・ローズ・ドラゴンは鞭を振り下ろした。

「危ない……」

「畏発動！ ガード・ブロック！！」

バチチィ！！

十六夜さんの周りにバリアが現れ、ブラック・ローズ・ドラゴンの攻撃を防いだ。

ブワアアア！！

今の衝撃によって周りが吹き飛ばされ始めた。

「うわぁっ……」

「ぐっ……」

「まだよ……ワンダー・クローバーの効果でブラック・ローズ・ドラゴンはもう1度攻撃する事ができる！ 今度こそパパを叩き潰しなさい！ ヘイト・ローズ・ウィップ！！」

「危険です、ここから避けてください！」

「いや、いいんだ…… 私はどうするべきかやっとなかった。」

遊星……この展開は原作とは若干違うぞ。

だが、俺にはわかる。

遊星なら必ず勝つ。

「俺はロストスター・ディセントを発動！ 墓地からシンクロモンスター1体を選択して守備表示で特殊召喚する！ この効果で特殊召喚されたモンスターは守備力が0となり、効果が無効となる！ 皆を守れ、スターダスト・ドラゴン！！」

スターダスト・ドラゴンは十六夜さんの前に立ち塞がった。

スターダスト・ドラゴン

8 7

DEF0

『グオオオ……』

『グルルル……』

睨んでいるブラック・ローズ・ドラゴンに対し、スターダスト・ドラゴンはそれに臆せず立っている、まるでブラック・ローズ・ドラゴンの怒りを止める様に……。

「あなたは自分の切り札を壁にする事を選んだのね。でも、それで何が出来ると言うの？ スターダスト・ドラゴンが壁になると憎悪の棘はあなたにも届く！」

「俺はスターダスト・ドラゴンをリリースする！」

え？

「スターダスト・ドラゴンをリリースだと！？」

この状況でリリース？

まさか……あのカードを発動する気が！？

「リバーズカードオープン！ バスター・モード……！」

『グオオオオオ……！』

ブオオオオ！！

スターダスト・ドラゴンの周りに凄い風が吹き始めた。

「バスター・モードだと！！」

「バスター・モード！？」

「ねえ、何なのあのカード？」

「バスター・モード……あのカードは特定のシンクロモンスターをモードチェンジさせ、更なる力を与えるカードだ。俺は持っているがまさか遊星のスターダスト・ドラゴンにまであったとは……あの姿が。」

まあ、俺のモンスターにもあるぜ、持っていないが。

「頼む、スターダスト・ドラゴン……十六夜の心に道を開いてくれ！」

ガシーン！ ガシーン！ ガシャーン！

「飛翔せよ、スターダスト・ドラゴンスラッシュバスター！！」

スターダスト・ドラゴンの体の周りに水色の鎧が現れ、装着した。

『グオオオオオ！！』

スターダスト・ドラゴン/バスター

10

ATK3000

「凄い……」

「か、格好いい……」

攻撃力は憎悪の棘を装備したブラック・ローズ・ドラゴンと互角だ……

「くっ…… 私はブラック・ローズ・ドラゴンの攻撃を中止するわ……」

攻撃中止を宣言したその時……

『グオオオオ!!』

「え……?」

十六夜が攻撃中止を宣言したのにも関わらずブラック・ローズ・ドラゴンは暴れていた。

「ぬおっ!?!」

俺はしゃがんでブラック・ローズ・ドラゴンの鞭を避けた。
ブラック・ローズ・ドラゴンは更に暴れ出した。

「うわあああ!」

「皆、下がれ！」

『一体どうなってるんすか、鉄也！？』

ジャンク！ 何で今頃出てくるんだよ？

「よく解からんが……多分、彼女は感情的になり過ぎて力のコントロールが収まらなくなっているかもしれん。」

『それじゃあ……』

「ああ。こんな所で暴れられたら大変だ。」

やばい……正にヤバス！

ヤバス×100！！＼（。3。）／

「あ……ああ……」

「やめろ十六夜！ バトルフェイズは終了した筈だ！」

「違う……私じゃない……」

「何！？」

『グオオオオオ！！』

「うわあああ！」

鞭が十六夜さんに直撃し、跳ばされた。

「十六夜さん！」

「アキ……」

『グオオオオオ！！』

「うわああああ！！」

「きゃああああ！！」

「危ない！」

俺は龍亞と龍可に飛び込み、暴走する鞭の乱舞から回避した。

『グオオオオオ！』

「まずい、こっちにも来るぞ！！」

鞭は他の人達にも襲って来た。

『グオオオオオ！！』

ガキン！ ガキン！！

「スターダスト・ドラゴン！！」

スターダスト・ドラゴンノバスターは人達の前に現れ、翼で鞭の

攻撃を防いだ。

「あのスターダスト・ドラゴン……俺達を守っているみたいだな。」

「はあ……はあ……」

「アキ……」

十六夜さんは立ち上がった。

「（もう、私は恐れない。これでアキに近づけるのなら……これ位の痛みを受けてもかまわない……）」

『グオオオオオ！！』

ブラック・ローズ・ドラゴンは鞭を十六夜さんに向かって振り下ろした。

「十六夜さん！」

「……………」

「嫌……………」

『グオオオオオ！』

「嫌…………やめて…………パパを傷付けないで！」

「……………!!」

ブラック・ローズ・ドラゴンの鞭は十六夜さんの前で止まっていた。
た。

風も収まり、音も止んだ。

ブラック・ローズ・ドラゴンも落ち着いた様だ。

「初めて…………… 初めて制御できた……………」

そう、彼女の今の思いがブラック・ローズ・ドラゴンの暴走を治めたのだ。

これは十六夜が始めてサイコデュエルの力を制御できたという事でもある。

「アキ……………」

「パパ……………!!」

これが親子が初めて心で向き合った瞬間であった……

「……………」

十六夜は遊星に振り向いた。

「遊星……終わらせて、この戦いを……………」

「……………ああ。」

アキ／＼LP800

手札0枚

モンスター／ブラック・ローズ・ドラゴン

魔法・罠／憎悪の棘（ブラック・ローズ・ドラゴンへ装備）

「俺のターン！ スターダスト・ドラゴン／バスターでブラック・ローズ・ドラゴンを攻撃！ アサルト・ソニック・バーン！！」

『グオオオオオ！』

『グオオオオオ！』

スターダスト・ドラゴンとブラック・ローズ・ドラゴンはお互いにビームを放った。

そしてそのビームは巨大な爆発を起こした。

「でも、今のでせつかくのスターダスト・ドラゴンが……………」

「いや、それでいい……」

「ああ、バスター・モードのもう1つの効果だ。」

「スターダスト・ドラゴン/バスターの効果を発動！ このモンスターが破壊された場合、墓地からスターダスト・ドラゴンを特殊召喚する！ 再び戻って来い、スターダスト・ドラゴン……！」

『グオオオオオ！』

スターダスト・ドラゴンはバスター・モードの装甲を脱ぎ捨てて再び舞い戻った。

スターダスト・ドラゴン

8

ATK2500

「今こそ魔女の呪縛を打ち破る時だ。 スターダスト・ドラゴンでアキにダイレクトアタック！ シューティング・ソニック……！」

スターダスト・ドラゴンは十六夜にシューティング・ソニックを放った。

アキ LP8000

遊星 WINNER

ソリッドビジョンが消えた。

こうしてデュエルは終わり、彼女も過去の自分から決別したのだ。

「アキ…」

「パパ…」

十六夜さんは娘を優しく抱いた。

「済まなかった。私が例えお前を恐れていたとしても、こうして抱きしめていれば良かったんだ。お前を愛していたんだから……」

「私だって愛してた。好きだった。だけど良いの？ 私はこんなにもパパを傷付けてしまったのに……」

「アキ、お父さんは受け入れるって言うてくれる。アキが望めば、そこが居場所になる。」

「私の居場所は……ここ。」

「皆この痣に引き寄せられる。そして仲間になっていく。忌むべき印じゃない」

「遊星……」

「でも、私にはかつて信じた仲間がいる。その想いは、まだ私の心にある……」

ディヴァインの事だな。

まあ、それはそれでいいじゃん。

それでこそ仲間になる意味があるからな。

「オレにもかつてそんな仲間がいた。 奴の想いとオレの想いがすれ違い、心を削っていく。 今は見えない、その想いがどんな決着を突き付けるのかは。 だが、かつて友と呼んだ仲間なら、その覚悟を背負い、オレは進んでいく。」

鬼柳の事が……まあ、こうしてアルカディアムーブメントでの戦いは幕を閉じたわけだ。

しかしこれは始まったばかり……

これから遊星達にはダークシグナーとの戦いが始まる。

そして俺にも……

S i d e E n d

S i d e / ルーカス

ビルの屋上

「フウ……………」

俺は見えていた……不動遊星と十六夜アキの戦いを。

中々面白い展開だったな……これがシグナー同士のデュエルか。

不動遊星……お前の実力は興味深い、赤き竜に選ばただけの実力はあるな。

「おいおい、何でこんな所で時間つぶしてんだ？」

シエンが俺に話しかけた。

「お前には興味など無かったのか？」

「確かに強いがな。だが俺があんな奴らに負ける筈がねえ。」

「はあ……その余裕な態度はやめた方がいいと言っているだろう？ その内痛い目に遭うぞ。」

しかし……村上鉄也といい、不動遊星といい、俺が最大限まで引き出したアキのデッキを倒してしまうとはな。

何時かは戦い合う相手だ。

見ておく価値があった。

「さて、そろそろ時間だ。精霊世界で他のメンバーが待っている。」

「フフフ……」

そして俺は振り向いた。

「じゃあ行こうか……結衣。」

「……うん。」

S
i
d
e

E
n
d

アルカディアムーブメント編……『完』

一周年企画……………

どうも、BRAVEです。

今頃気付きましたけど『遊戯王5D's The Power of Fellows』を更新してもうすぐ1年になりました。なので11月の頃には1周記念トークを出したいと思います。

基本的にこれまでにについて振り返ってみたり自分の個人的な感想を取り入れる話題です。

という事で、読者達からは小説の感想を色々聞きたいと思います。良い点とか悪い点とかどの話が良かったとかキャラについての感想とか……………まあ、一応知りたいですね。

これをご覧にいただけたのでしたら感想をユーザのメッセージに送って下さい。

それでは今後の活躍も期待してください。

一周年記念トーク 色々あったけどとりあえず振り返ってみよう(前書き)

どうも、BRAVEです

よかったら読んだ後にこのトークについて評価をください。

- 1 面白かった
- 2 良いトークだった。
- 3 まあまあだった。
- 4 つまらなかった。
- 5 途中で読むの止めようと思ったくらいつまらなかった。

一周年記念トーク 色々あったけどとりあえず振り返ってみよう

作者「クリムゾン・ブリーダーとジャンク・デストロイヤー、そしてギガンテック・ファイターをリリースし、インビンシブル・ファイター テツヤをアドバンス召喚する！」

インビンシブル・ファイター テツヤ

9

ATK10000000000000000

《インビンシブル・ファイター テツヤ》（ 使用不可オリジナルカード）

地属性 / 9 / 戦士族 / 効果モンスター

ATK10000000000000000 / DEF100000

このモンスターは特殊召喚する事が出来ない。

自分フィールド上に存在する以上のレベル8以上の戦士族シンクロモンスター3体をリリースした場合のみ通常召喚する事ができる。

このモンスターの召喚は無効化されない。

このモンスターが攻撃を行うとき、相手プレイヤーはダメージ計算終了時まで魔法・罫カードを発動する事ができない。

このモンスターはカードの効果によって破壊されない。

このモンスターは自身の攻撃による戦闘では破壊されない。

鉄也「おい！ 何でいきなり呼び出す！？」

作者「いいじゃん別に。 せっかくの一周年記念トークだし。」

鉄也「タイミング選べよ…… 今、『TIGER & amp; BUNNY』のいい所だったんだぞ。」

作者「そんなのどうでもいいだろ。」

鉄也「良くないよ。これほど面白いアニメは見たこと無い。」

作者「現実では既に終了しているぞ。」

鉄也「それもそうだが……てゆうかこの企画、お前一人でやるんじやなかったのか？」

作者「いや……折角だから一人でやるのも何だかね。それで主人公である君と一緒に記念トークをやらうと思って召喚した。」

鉄也「良く召喚できたな、俺を。（俺はカード化したら観賞用扱いか。てゆうか俺の守備力って攻撃力と比べたら意外と低いな。）わかったわかった。」

作者「それでは主人公、ご挨拶を。」

鉄也「それでは皆さん、遊戯王5D's The Power of Fellows、一周記念特別トーク、始まります!!」

オープニング「絆 キズナ」

鉄也「キズナか……まあ、いいけど。5D'sのOPならLAS

TRAINが欲しかったな。」

-では、始めます。-

鉄也「しかし約1年か……色々あったな。小説でも合計48話だったし、ちょうどアニメ1年分だな。」

作者「こうして振り返ってみると色々思い出すな。どんなアイデアでストーリー進めたり感想を楽しみに待っていたりとか。」

鉄也「最初は殆どの感想が悪い点だったよな。」

作者「ルールミスやダメージ計算とかでのミスが多いところだったな。最近は大分良くなっているけど。」

鉄也「それでもたまにミスがあったよな。ルールミスだけでなく文章にも色々ミスを起こす事も良くあった。」

作者「勘弁してください。自覚しているので勘弁してください。」

鉄也「まあ、それでも書いていく内に良い感想をもらえてきたんだという事だ。デュエルだけでなく小説としてな。」

作者「書いていた甲斐があったと思うよ。」

鉄也「読者達に小説のコンセプトを気に入られている事もあるし

な。」

作者「ちなみに最初は読者達の感想について語ろうと思う。」

鉄也「読者達の感想？」

作者「実はこのトークの為にこの小説に対する読者の個人的な感想を出来るだけ集めておいた。」

鉄也「へえ……やる気満々だな。」

作者「3つ来たから……まずはこれでいくか。」

とあるサイトの登録者その1の感想

鉄也「どこの禁書目録だよ。」

『まず思ったことは5D'sの世界観に鉄也たちが普通に馴染んできますね。オリキャラと原作キャラの絡みを書く自信がない私にとつてこれはかなり羨ましい点でもあります。』

鉄也「まあ、何も羨ましがらなくてもそっちもその気になれば出来ると思いますよ。」

作者「大体の人達は原作キャラがストーリーの中心になっているから原作キャラと絡ませたいのも分かる。」

鉄也「でも別に無理して絡ませなくてもストーリーを進めることが出来るのが二次創作の美点ですよ。」

『次に鉄也がジャンクたちにこだわっているところです。ジャンクをはじめクリボーやデストロイヤーたちに絶対の信頼をしてるのはデュエリストとして見習える点ですね。』

鉄也「いい事言ってくれるな、この人は。特別に説明しよう、遊戯王GXが終了した後、作者は遊戯王から興味を薄れていき始めていた。あの時はまだ色々なカードをごちゃ混ぜしても十分強い時代だったよな。」

作者「てゆうか考えてみればGX終盤位からガチデッキが流行り始めたような気がする。」

鉄也「そしてしばらくしてから作者は遊戯王にまたはまり始めた。

その時買ったSTARTER DECK - 2009デッキに入っていたジャンク・ウォリアーとジャンク・シンクロンが気に入ったという事だ。そして遊戯王二次小説を書こうとした時、このデッキを思いついたらしい。」

作者「復帰した時は色々驚いたよ。DUEL TERMINALが登場したりカードが強力すぎて時代後れている自分が勝てない位の思いだった。今思えば2008か2010、あるいはストラクチャーを買えばよかった。ロード・ウォリアーが召喚し難くて絶

望した。　　ちなみにクリボーは元々小説に入れるつもりは無かった。

「

鉄也「え？　じゃあ何で入れたんだ？」

作者「第1話でミラーフォースが敗れた所があっただろ？　そこからどうやって耐えるかどうか考えていたら自分も使っているクリボーを思い出したからだ。」

鉄也「バトルフェーダーが無かった頃は結構使われてたよな。」

作者「今でも入れる価値があるよ。　ブラック・ローズ・ドラゴンの攻撃から身を守ったりとかパワーボンドの貫通攻撃に耐えたりとかな。　まあ、入れるのは人次第だけどね。」

鉄也「クリボーには結構良い仕事させて貰ってるよ。」

作者「ちなみに鉄也はクリボーで凌いだデュエルは全て勝利している。　この小説ではクリボーは正に勝利へつなげる為の希望を象徴しているんだ。　まあ、実際に使ったのは第1話とアキ戦だけだね。」

「

鉄也「特別コラボでオネストを無駄打ちにさせたこともあったよな。　俺にとってクリボーの使用はあれが一番印象的だった。」

作者「ちなみに自分はドラグニティのサイドデッキに入れてます。　マスコットのにも汎用性的にも。　いつかはダムルグとドラグニティを合わせたりする事が出来るかもしれん。」

『最後に原作のストーリーを主軸に置きながらもうまくオリジナルの展開を絡めている点です。デュエルする相手を無理なく差し替えたりするのは私には到底無理です……』

作者「まあ、二次創作ですから少なくともレギュラーとのコネクションが欲しかったからね。」

鉄也「それは書く人の力量次第だろ。別に無理に絡めなくても良いだろう。」

作者「まあ自身持つてください。感想ありがとうございます。はい、次の感想！」

とあるサイトの登録者その2の感想

鉄也「作者は読者達を不幸にしたいのか？」

作者「そんなつもりはありません。」

『良いところ。 遊戯王小説によくある原作キャラが原作どりの展開にならずオリジナリティーがあるデュエルの展開が面白い。』

『悪いところ。 無し。』

鉄也「展開が褒められているな。」

作者「そりゃあ、展開をオリジナルにすれば読者にも盛り上がるだろう。」

鉄也「なるほど。そりゃあ、そうだよな。」

作者「個人的にオリジナリティーで一番印象持ったのはディヴィアインの虐殺だった。」

鉄也「そりゃあ、あんな事になるとは完全に予想外だよな。作者自重しろよ。仮にも遊戯王だぞ。」

『気に入ってる話し。フォーチュン・カップの一回戦で絶望に負けず、ジャック・ウォリアーのコンボで勝った所。』

鉄也「ここは俺が始めてジャンク・ウォリアーを最大限に生かした場面だよな。」

作者「ここがジャンク・ウォリアーの一番の見せ場だったよね。この場面を書いた時、やっとPower of Followersしかっと思った。」

鉄也「作者はタイトルがあれでありながら滅多にジャンク・ウォリアーを使ってこないからな。」

作者「そりゃあ、状況によってはジャンク・ウォリアーよりもジャンク・デストロイヤーを優先するのが当然だったからね。」

鉄也「てゆうかそのコンボ、1回しか使ってないよな。（コラボを抜いて）アキ相手に使えばよかったんじゃない？」

作者「アキを相手にコンボを出しても通ると思う？」

鉄也「……………逆に殺されるな（汗）。」

作者「そう、その通り。」

鉄也「じゃあ作者、今後はジャンク・ウォリアーももっと活躍するの？」

作者「勿論。」

鉄也「でも、俺に真の切り札、ギガンテック・ファイターが登場したぞ。逆にそっちが活躍したりしないか？」

作者「まあ、今後の展開で分かることだ。では、次行きましょう。」

とあるサイトの登録者その3の感想

鉄也「もしこの登録者達が不幸になったりしたらそれは多分、気のせいだ。」

『デュエルは内容的には熱いですね。特にフォーチュンカップでの鉄也vsアキや病院での遊星vsアキはどんどん引き込まれました。』

鉄也「おお、評価いいな！俺と遊星が十六夜とデュエルされる所が魅力的だってよ。やったな、作者。」

作者「この2つのデュエルには一番手を入れているね。『当たって砕ける』という思いでぶつかり合う展開が欲しくて書き上げた話だ。君と遊星の彼女に対する向き合いが結構気に入っている。」

鉄也「俺は色々やばかったけどな。ギガンテック・ファイターが登場して俺のイメージに合う切り札が来て嬉しかった場面だぜ。」

作者「アキを強くしたかったのでデッキの改造やどう展開を作るのかそれが一番大変だったな。ちなみにギガンテック・ファイターをこの小説に入れた理由は資金が貧しい僕が手に入れた唯一最強なカードだったからね。」

鉄也「この時の切り札ってスターダストとギガンテックしか無かったよな。先にスターダスト出してそれからギガンテック・ファイターと合わせるパワー攻めが唯一の戦略だったよな。今でもあまり変わらんが。続きだ……」

『その反面、モンスター同士の戦闘シーンやダイレクトアタック時の演出が一切入ってなかったりあっさりしすぎている事が多いので、そこに注意するともっとよくなると思います。』

作者「うつ……………」

鉄也「それは否定できないな。　作者はそういう場面が色々抜けている時とか多いからな。　基本的に作者は国語は素人レベルだから表現のレベルが低くて仕方ない。」

作者「頑張ります……………」

鉄也「勉強も頑張れ。」

作者「それはちよつと……………」

鉄也「頑張れよオイ。」

『ストーリーで言えば、結衣の今後が気になりますね。　深い復讐心を持ったまま敵サイドについてしまった彼女がどうやって鉄也達の下に戻り、なおかつアキと和解するのか楽しみです。　そう考えると、そちらの小説においてアキは何気にキーパーソンになってるんですよね。』

鉄也「まず言いたい事は十六夜のポジションが凄えな。　俺と遊星の強敵になったり結衣さんの因縁の相手になったりとか…………　完全にボスキャラだな。　キーパーソンだな。」

作者「うん。　アキはイメージからしてDSヒロインだったからそれくらい強くしなければと魔改造させた。　それに魔女時代のアキ

からは凶悪さがあまり見られなかったのもっと魔女らしい表現にしたかった。」

鉄也「いや、原作では十分に魔女だったろ。」

作者「何を言う、魔女というのは絶望から生まれて無差別に人間を殺す異形の存在のことを言うんだ。」

鉄也「違う……魔女違いだそれ！！十六夜もそんなんじゃないから。てゆうか嫌だよそんな魔女！」

作者「とりあえず、作者の好みでアキをそんなポジションにしたかったという訳です。」

鉄也「まとめ方適當すぎるだろ。」

作者「そして結衣が敵サイドになる件ですが……」

鉄也「え？ 結衣が敵サイド！？ どういうことだよ！？」

作者「ネタバレになるから君はさがってくれたまえ。」

鉄也「おい待て！ ずっと探してたんだぞ！ 教えるよ！」

作者「うるさいぜ。少し黙ってろ。」

鉄也「ふざけるな！」

作者「畏発動、マインド・クラッシュ！」

鉄也「ぎゃあああああ!!」

………ばったり。

作者「で、結衣が敵サイドになる件はどう書こうか正直迷っていますね。まあ、小説を書く次第あたりで思いつきます。しかし正直、闇堕ちヒロインを書くとは自分もどうにかしてると思ったりしています。まあ、その方が盛り上がる事もありますし。しかしやはり目指すのはハッピーエンドですね。出来れば連れ戻したいです。では、読者さん達の感想、ありがとうございました。」

鉄也「あああ………俺は………まるで今まで悪い夢を見ていたようだ。
(爽やか~~~~~)」

作者「あ、マインド・クラッシュの打ち所を間違えたか？」

鉄也「あれ？ さっき何か大事な事を聞きたかったような……」

作者「まあ、それは置いて色々驚いて仕方なかった。特に良くここまで書けたなど。お気に入りも今は約150件もあるしな。」

鉄也「確かにたまに妙な前回のあらすじを書いたり色んなネタを入れたりカードのミスをしたりしているからな、作者は。正直、ここまで人気が上がった自分の小説を疑っていたくらいだ。良く人氣が上がったものだな。で、今度は何をトークするんだ？」

作者「じゃあ、せっかくだから主人公について語ろうかな？」

鉄也「なるほど、俺の印象を語るのか。」

作者「君は勿論……『格好悪いけど格好良い主人公』だ。」

鉄也「うわあ……やっぱそれが。」

作者「鉄也は普段、一見おちついて一番の常識人だが、抜けている一面もある。そして人思いが熱く、仲間を守る為なら自分の身を危険に晒せようと戦うそんな闘志を燃やす戦士だ。」

鉄也「意外と褒められているな俺。」

作者「そしてツッコミが激しく、ホラーやサスペンションに弱くて冷静さを失って崩壊する一面もある。」

鉄也「さっき褒められた所が台無しだ！」

作者「事実だけだね。まあ、そんなところが君だ。」

鉄也「そうだな……まあ、それが俺だな……ってもう終わり!？」

作者「うん、それが鉄也の『格好悪いけど格好良い』印象だ。」

鉄也「短え……こんな説明で納得すんのか？　まあ、次は今後の展開について語ろうか？」

作者「そうしよう。　まず、今度は色々カードを出してみたいですよね……　こんな感じのデッキを。」

【ヴァイロン】

【フレムベル】

【ドラグニティ】

【リチュア】

【魔轟神】

【暗黒界】

【HERO】

【ナチュル】

【代行者】

鉄也「待て！　暗黒界は却下だ！！　最近の暗黒界はグラフィアが重いじゃない!!」

作者「落ち着け、この小説はそこまでガチじゃない。　グラフィア出るけど。」

鉄也「そうか……」

作者「それからちなみに君のデッキ、変わる予定だからね。」

鉄也「え、マジ?」

作者「うん、正直君のデッキは色々遊星と被ってるからね。ダークシグナー編を機会に鉄也らしいデッキに変えておこうと思うんだ。でも、ジャンクを使うことには変わらないけどね。」

鉄也「そうなのか…… てゆうかネタバレして良いのかよ?」

作者「まあ、これくらいなら問題ないだろ。」

鉄也「じゃあ新デッキを出すくらいなんだから俺の出番を増やせよ。俺はアルカディアムーブメントで殆どツツコミしかしてなかったからさ。」

作者「勿論、増やすさ。ダグナー編だから色々大事な所に主人公は欠かせないよ。ちなみに名前はダグナー編ではない。それでは読者さん達、今後の鉄也の活躍に期待してください。」

鉄也「半分くだらないトークだったが、付き合ってくれてありがとうな。じゃあ、これからもよろしく。」

デュエリストパック ジャック編

KONAMI

ジャック「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

デュエリストパック ジャック編

価格250円

1パック5枚収納

好評発売中！！

《レッド・デーモンズ・ドラゴン》 Super

《レッド・デーモンズ・ドラゴン/バスター》 Super

《ダーク・リゾネーター》

《トラップ・イーター》

《ダーク・リペアラ》

《ダブル・プロテクター》

《ツイン・ブレイカー》

《マッド・デーモン》

《リバイバル・ギフト》

《ハーフォーストップ》

《ナイトメア・デーモンズ》

《ビッグ・ピース・ゴーレム》

Rare

《スモール・ピース・ゴーレム》

《ミッド・ピース・ゴーレム》

《バイス・ドラゴン》

《マルチ・ピース・ゴーレム》 Rare

《ストロング・ウィング・ドラゴン》 Rare

《エクспロード・ウィング・ドラゴン》 Rare

《プライドの咆哮》

《クリムゾン・ヘルフレア》

《トラスト・マインド》

《天刑王ブラック・ハイランダー》 Ultra

《血涙のオーガ》 Rare

《ロストスター・ディセント》

《ニユート》

《転職の魔鏡》

《チェンジ・デステニー》

《バトルフェーダー》

《ダーク・スプロケッター》

期間限定カード

《トークン(C・バソキヤン)》

《トークン(C・ドンウーノ)》

《トークン(C・メンラード)》

数量限定カード

《簡易融合》(ピリ辛レッド・デーモンズ・ドラゴン版) Secret

《オネスト》 Holographic

鉄也「カード5枚で250円は高い。それにしても収録カードが微妙だ……。しかも何でオネストホロレアが入ってるの!? てゆうか250円って……。 (笑) ようし、トークンだけでも手に入れよう。」

リメイクの予定

どうも、
BRAVEです。

やっとアルカディアムーブメント編を終了しましたのですが、前の話を振り返ってみて編集したい話が少しありました。

という訳で第35話と第36話を作り直したいと思います。

一応、オリ力を自重させたいと思ったので。

では、ダークシグナー編に突入する前に作り直したいと思います。

作り直した時は活動報告に書き入れておきます。

（最後にスペースが余っているので適当に埋めさせてもらいます。悪ふざけなので気にしないでください。）

あんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱん
ばんあんぱんあんぱん
あんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱん
ばんあんぱんあんぱん
あんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱん
ばんあんぱんあんぱん
あんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱん
ばんあんぱんあんぱん
あんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱん
ばんあんぱんあんぱん
あんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱん
ばんあんぱんあんぱん

[illegible]

第49話 新章突入DA ZE!!（前書き）

作者「一周年経ったので新章突入だああ!!」

鉄也「妙にテンション高つ!!」

作者「だってこんな小説を1年も続けられたんだよ! 読者も1年も付き合ってくれたんだよ! テンションが高くないわけ無いだろ!」

鉄也「まあ、気持ちはわかるが。」

作者「というわけで今回からこのタイトルの小説を変更する!」

鉄也「おい! 1年も続けて今更変更するのか!?!」

作者「そうだ…… 1年も経ったからこそタイトルを派手に変える!」

鉄也「おい、考え直せ!!」

作者「これから遊戯王5D's The Power of Followsはこれから……」

『遊 戯 王5D's The Power of Follow
s』

作者「……となります。」

鉄也「実質的に変わっていないなオイ。 まあ変えない方が良いでしょう。 てゆうか気にして損した。」

作者「それでは読者の皆さん、『遊 戯 王5D's The Power of Follows』、始まります」

第49話 新章突入DA ZE!!

Side / \ゴ /

x 新聞

【サテライトの流れ星 キングの座を奪い、会場を去る!!】

以下省略

【デュエル・オブ・フォーチュンカップ出場者人気表】

第1位： 不動遊星（サテライトの流れ星）

第2位：村上鉄也（不屈のファイター）

第3位：黒崎シュウ（漆黒の竜王）

第4位：神風結衣（風纏いし姫）

第5位：ジャック・アトラス（“元”デュエルキング）

第6位：ボマー（黒き暴風）

第7位：龍可（デュエルの天使）

第8位：炎城ムクロ（炎のD・ホイラー）

「……………」

……どうやらキングの時代は終わったようですね。

さて、ようやくシグナー達も集まった事ですし、そろそろ私も準

備しておきますか。

私はジュラルミンケースから2枚のカードを取り出した。

太陽龍インティ

8

A T K / ? ? ? ? ?

D E F / ? ? ? ? ?

月影龍クイラ

6

A T K / ? ? ? ? ?

D E F / ? ? ? ? ?

『ゴドウィン長官、あなたと話したい方がいます。』

「……通しなさい。」

「やあ、ゴドウィン」

「これはこれは…黒崎さん。」

「……………」

「何のようです?」

「いやあ、フォーチュンカップで協力してくれたので礼を言いに来ましてね。あなたの協力のお陰で黒き痣を持つ者を集める事が出来ました。」

「それはどうも。しかしその割にはあなたはあまり良い仕事をしていますでしたね。あなたはシグナーとデュエルする事も無く敗北してしまいましたからね。」

「はは、それはもう勘弁してくれませんか？」

「まあ、その件はもう良いでしょう。私は忙しいのです。」

「それは治安維持局としての仕事かな？」

この男……まさか私の計画に気付いているのか？

「……あなたとは関係の無い事です。」

「まあ、良いですよ。こっちも暇ではありませんですし。」

S i d e E n d

S i d e / 鉄也

どうも、鉄也です。

ストーリーを進めるのが面倒くさいので簡単に内容を説明しておきます。

遊星と十六夜の激戦の後……2人は看護婦のおばさんに物凄いボリウムで叱られました。院長さんからは何とか許してくれたが看護婦のおばさんの方がさっきのデュエルの倍以上に煩かった。むしろこのおばさんの方が迷惑だ。そして何故か俺達全員このデ

ユエルに関わった人達は十分以上に謝らせられた。だから外でやれと言ったんだよ……遊星と十六夜はおばさんからビンタを食らった。まあ、病院で暴れてたから当然の報いだな。

その後、アキの父親が議員さんだった為、迷惑料とかは彼が何とかしてくれた。

しかし色々あって大変だ……もう帰ってテレビを見ていたい。最近アニメが面白い。

でも、テレビ持っていない!!

遊斗がどつかへ行ったし、黒崎さんは少し出かけて行ったらしい。今後の計画を立てる為に何だかんだで俺達は今、病院に残っている。

ちなみにレギュラーもまだ病院に残っている。まずは遊星の手当てが先だ。あいつは十六夜とのデュエルで傷を負っていたからな。

俺は今、廊下のベンチで遊星と座って話している。

「結構やられたな、遊星。」

「大丈夫だ、十分動ける。それより鉄也、お前の傷はもう大丈夫なのか？俺とは比べ物にならなかった筈だ。」

「……俺は特別だ。」

「そうか。」

「十六夜も良かったな、家族と和解する事が出来て。」

「そうだな。」

「しかしどうするんだ、遊星。ダークシグナー達が動き出してい

るんだろ？」

「ああ……しかし俺には未だダークシグナーの狙いが何なのか分からない。ついさっき俺達シグナーはゴドウィンに招かれた。ダークシグナーについては奴が教えてくれるはずだ。」

「そうか……」

「俺は何としてもダークシグナーを止めたい。」

鬼柳の事か……まあ、原作通りだな。

「……アキ。」

「あ、十六夜。」

十六夜がこっちへ来た。

「あの……」

ああ、遊星と話がしたいんだな。
だったら2人きりにさせよう。

「じゃあ俺、席外すわ。」

「いや、あの……鉄也、あなたと話したいんだけど。」

「え？」

「そうか。じゃあまた後でな、鉄也。」

[illegible]

「え？　ちよつと待って遊せえ……」

頼む遊星！ 置いて行かないでくれ！！
ちよつと不安なんだけど。

一応、十六夜だけは若干苦手なだけで！
怖いから！！ デュエルでは何故か強がってたけどやっぱり怖いから！！

不屈の闘志を持つてゐるらしいけど怖いものは怖いから！！
遊星カムバーーーーック！！

「あ、ありがとう。」

十六夜がベンチに座ったチクショーーーー！！！！
この空気じゃ逃げられない！
助けて、蟹えもーーーーん！！

「あの……鉄也？」

「な、なな何ですか？」

「あの時は……本当にごめんなさい……」

十六夜は謝った。

あの時か…… あれは酷かった、まじ酷かった。
十六夜怖い十六夜怖い十六夜怖い十六夜怖い十六夜怖
い十六夜怖い……

落ちて着け……落ちて着くんだけ鉄也くん。

今の十六夜は魔女ではない。普通に人として向き合おうとして
いるんだ。

ここは大人になるべきだ。

「傷……………大丈夫なの？」

「完治していないが、何とかな……………」

俺はシャツの胸倉を引きずり下ろした。

「……………！！！」

ギガプラントによって斬りつけられた傷口は大きかった。

もう、ギガプラントはトラウマ物だよ。

魔女の十六夜はもう嫌だよ。

最終的に遊斗に助けてもらっていないければ死んでいた。

「何とか助かったぞ。 凄い腕の医者がいたらしくてな。 ギリギリで三途の川から抜け出せた感じた。」

「あなたは……………人間なの？」

「失礼な質問だなオイ！！！（激怒）」

ちなみに現世での事だが何故か俺は身近の人に色々疑われる事が多い。

車を片手で止めたり建物一件を一撃で崩壊させたりチエーンソーの刃を素手で握りつぶしたり銃弾を指で弾いたりする事が出来ててそんなに可笑しいのか？

俺は純粋な人間だ！

決して地球を滅ぼすために送り込まれてきた宇宙人と地球人のハーフとか体の中に化け物が宿っている忍者とか悪魔の実を食べた海賊とかなどではない！ 多分！！

「ご、ごめんなさい。」

「もう良いよ、結構聞かれてるから。」

俺が意外とタフだった事は認めよう……てゆうか人間のレベルを超えている。

しかし流石に十六夜にやられた時や邪神の男に殺された時、俺は初めて死という物をを経験した。

死の境地を実感するのは人間として最大の経験かもしれん。

まるで俺はカイジを体験したみたいだ……ってカイジを体験したって何？

「あの……何か侘びとして出来ることがあれば……」

侘びか……

「侘びなんていらねえよ。」

……と言ったら格好いいと思う俺だが正直、侘びとして何かしてもらいたいな。こんな目に遭ったし。

しかし半分は自業自得だったかもしれない。

俺が彼女に挑まなければこんな事にはならなかったかもしれないし、それに挑んだとしてもギガプラントにやられた時にそのまま倒れていた方が良かったかもしれない。

そもそも俺が彼女に勝ったとしても特に得るものなんて無い。

俺は無能に蜂の巣に触れてしまったという事だ。

しかし何で俺は立ち向かおうとしたんだ？
多分、原作知識を買いかぶりすぎていただけだろうな。

「じゃあ、ブラック・ローズ・ドラゴンをください。」

「……………」

「……………ジョークです。」

流石にそれに同意は出来ないか。

冗談のつもりで言っていた事だが正直欲しかったぞ、ブラック・ローズ・ドラゴン。

あのカードはシンクロデッキの候補だ。

購入した時は高かった……

そして今は世界観のせいで通販でも手に入らないんだぞ。

てゆうか遊星といいアトラスといい、どうやって手に入れたんだあいつ等？

せめて未来ではレッド・デーモンズ・ドラゴンを大量量産させて1枚250円で売ってほしいな。

「じゃあ、聞きたい事がある。」

「……………」

「結衣さんが……………アルカディアムーブメントに来ていませんでした？」

「え……………結衣さん？」

「ああ、このくらいの高さの緑色の髪の女性です。　ちなみにフォ

「チュンカップに出場していましたよ。　準決勝まで進んでいたけど。」

元々俺達がアルカディアムーブメントに来た理由……それは結衣さんを探し出す為だったからだ。

結局、色々あってそんなことをしている場合じゃなかったんだよな。

そしてその結果、アルカディアムーブメントは崩壊した。

トドのつまり、振り出しに戻ってしまったわけだ。

だが振り出しに戻るままで終わっては駄目だ、何か良い情報を掴めればいい。

「あ、あの子は……」

「いたのか？」

「……来ていたわ。　あの子、私を倒したい為に一人で潜入したらしいわ。」

「……」

本当に潜入してたのか……情報ゲットの予感だ。

てゆうが無謀すぎるだろ、結衣さん。

知ってる筈だろ、十六夜の力の恐ろしさを。　（大事な事なので3回くらい言いました。）

「それで……」

「振り返りにしたわ。」

まあ、されない訳は無いよな。

「…………まさか殺していないよな？」

「少し傷つけてしまったけど、あなたの時と比べたら酷く無いわ。」

「そうか。良かった…………」

もし俺と同じ位やられたら死んでるよ彼女。

それ以前に俺が生きていたのが珍しい。（大事な事なので3回くらい言いました。）

「彼女が私に挑戦した時、彼女は恐怖で気を失ったけど。」

「そうか…………」

まあ、当然の事だが十六夜の魔女モードが余裕で想像出来てしま
う。

「でも、その前にルーカスが私を止めたわ。」

「え、ルーカス！？」

「アルカディアムーブメントのディヴァインの協力者よ。彼が彼
女を連れて行ったわ。」

ルーカス…………！？

「……………」

俺は実際にその男に会った事はないが……

「あいつって……誰なんですか？」

「ルーカス・アンデルセン……ブラザーフッドの参謀だ。」

「ルーカス……アンデルセン？ 誰だよそいつ？」

「とりあえず彼と関わるのは危険だと言っておこつ……」

「ごめんなさい……あの人はあなたの友達でした？」

十六夜は罪悪感を浮かべた表情になった。

「ああ、そつだ。」

まあ、異常な女だが友達だ。

「でも、もう今頃……彼女も地縛神の生贄に……」

「……そうかもしれないな。」

そう思いたいところだが実はそうではないかもしれない……

俺はルーカス・アンデルセンという人物は知らないし、ブラザーフッドがどういう奴らかは全く知らない。

しかしあいつ等は少なくとも闇のゲームを悪用していた。

それに邪神の男やシエン……俺から見ればあいつ等は放っておくわけにはいかない。

もしかしたら地縛神の生贄の犠牲になったと見せかけて彼女を連れ去っていた可能性が高い。

そうすれば都合よく姿を消せるしな。

俺はこの事を十六夜に黙っておく事にした。

この件は彼女は悪くないが、動揺させたら責任を感じさせてしまうだろう。

しかしブラザーフッド……一体何をするつもりなんだ？

「じゃあ十六夜、侘びとしてお前にしてもらいたい事がある。」

「……………!!」

「もし結衣さんと会うことが出来たら……仲良くしてくれ。」

「え？ でも、彼女は……」

「大丈夫。絶対大丈夫だ。」

「でも、彼女がそうしてくれるかどうか……」

「だからこそ仲良くしてやってくれ。結衣さんはお前を恨んでくれるけど根は良い子だ。和解すればいいだけだ。」

「……ええ、約束するわ。」

よし！

グッ！！

今の俺、格好良くな？（ドヤ顔）
俺は心の中でサムズアップした。

「じゃあ鉄也…… 一つ聞いて良いかしら？」

「ん？」

「私と……友達になってくれるかしら？」

「……………」

「アハハ……ハハハハ……じゃあ、私のターンね。」

「馬鹿ね……それで逃げたつもり？」

「ギガプラントでダイレクトアタック！！ ハード・パニッシュ！
！」

「ハハハ……アハハハ……………」

ざわ…ざわ……

ズキッ！！

「うぐっ……」

……遊星はともかく俺はこれでもトラウマ持ちだ。
如月弦太郎、お前なら何と言う？

「……………」

「う、ごめん……無理に聞いて。」

「いや待て。いいだろう、仲直りしようぜ。」

俺もお人好しだな……まあ、トラウマはいずれ何とかなるだろう。
てゆうか何このリアルタッグフォース？

俺は十六夜とフラグを立てる気はない、むしろ立てたくない。

「ありがとう……」

さて……どうしたらいいんだ？
結衣さんを探すか？
ブラザーフッドを倒すか？

「鉄ちゃん。」

「あ、姉さん。」

「そろそろ行くよ。」

「そうか……じゃあまた会おうぜ、十六夜。」

「じゃ、じゃあまた会いましょう。」

「新しい友達が出来たみたいだね。」

「まあな……」

俺達は人目が付かない場所に着いた。

黒崎さん、遊斗、美央姉さん、そして俺の4人だ。

「それでは皆さん、集まりましたね。」

「ああ。」

「正直、どうせなら戦うのならダークシグナーが良かったな。」

「はは……まあ、村上クンは仕方が無いよね　色々いきなり過ぎるからね。」

「今回の件については知り合いの精霊に頼んで精霊世界に入る為の通路を開けてもらった。」

「開けてもらう？　精霊世界へ行くのに許可でも必要なのか？」

「まあ、数十年前にある精霊が異世界に事件が起こしてね。彼は12の世界を融合させてしまいかけた事があったんだ。」

おいおい、その事件って……

会話しながら遊斗はi P h n eらしき物を取り出した。

「まあ、その世界の融合は何とか止める事ができたんだけど、この

ような惨劇を起こさせない為に異世界に守りを張るためにしたんだ。

」

「へえ……」

「で、それ以来僕達が別の世界へ移る為にはその世界の管理人からのアクセス許可が必要になったという事だ。」

「……なるほど。」

「そして今回の事だ。 あらかじめ精霊世界へ移る為に知り合いである精霊世界の管理人に準備を整えておいた。」

そう言いながら遊斗はiPh n eらしき機械のスクリーンをタッチしていた。

「ようし、これで開く。」

遊斗がスクリーンをスライドすると、空間に四角の裂け目が現れた。

「凄いね、君の世界の技術は。」

「そうね。 今度、私に見せてよ。」

「悪いけどそれは出来ませんね。 世界が無理に変わってしまいうすからな。」

「それでは皆さん、行きましょう。」

まあ、ここまで来たのなら最後までやり遂げたいよな。
俺達はその空間に入った。
いざ、精霊世界へ！！

S i d e E n d

S i d e / ルーカス

精霊世界

ここは精霊世界……文字通りデュエルモンスターの精霊が住む世界だ。

俺はここへ何度も来た事がある。

「ほお……これが精霊世界ってやつか。」

「始めて見る……私のモンスターの故郷……」

俺はシエンとブラザーフッドの新入りと一緒に精霊世界へ転送した。

そろそろ計画実行の時だ。

しかし俺達は他のメンバーよりも遅れてきた。

「さて……」

ここで仲間と合流するはずなんだが……怒っていたりしたないだ

ろくな？

「遅いぞルーカス！！ 何やってんだよ！」

ああ、いたいた。

「悪い、暁。 少し寄り道した。」

赤い髪のショートカットで背が低い女が俺を叱っていた。
彼女はブラザーフッド・ナンバー^{くまかへ}ⅠⅠⅠ、日下部^{あきり} 暁だ。
ちなみに小柄だが歳は20だ。

しかし性格はまるで子供の様だ。

「ったく……いつもルーカスは面白いものを見るといつもそつちに興味を持ち出すんだからよ！ 今は異世界へのアクセスが難しい事ぐらい分かってるだろ！」

「分かった分かった悪かった…… シグナー同士のデュエルを見て少し遅れただけだ、落ち着け。」

俺は暁を撫でた。

「うつ…… / / / こ、ここ今度はちゃんとしろよ！」

暁の顔が赤くなり始めた。

「どうした暁？ 熱でもあるのか？」

「ききき気安く触るな！」

暁が怒ったので俺は手を離れた。

「あ、すまない。」

「ったく……／＼／＼　今回はお前がリーダーなんだから少しはしっかりしろよ！」

「ああ……本当に悪かった……」

「で、この女がオレ達の新入りか？」

暁は俺の側にいる緑色の髪的女性へ振り向いた。

「おいおい、何の為にアルカディアムーブメントに潜入したんだ？
ろくな奴は１人もいなかったのか？」

茶髪に黄色のメッシュをつけたビジュアルバンド風のサングラスの男が話しかけた。

こいつはナンバーXIIおおでらしんたろう、大寺慎太郎だ。

一度フォーチュンカップで出場させて村上鉄也か神風結衣と対戦させるつもりだったが、シグナーにやられた。

しかしシグナーを追いつめる事もあって、実力は確かなものだ。

「アルカディアムーブメントで使えるデュエリスト達を集めるつもりだったが、メンバーに相応しいのは１人しかいなかった。しかしそいつはもう、俺達と組む事は無いだろう。」

つまり組織に協力した俺は損したという訳だ。

まあ、俺にとっては強くなったあいつの実力を見ただけでも十分だな。

「ふ~~~~ん。」

暁は新入りを睨んでいる。

「こいつ、本当に実力があるのか？」

「フォーチュンカップでも見ただろう、彼女の实力はその時より強くなっている。それにそいつにも黒き痣が宿っている。」

「ふん、足引つ張るなよ新入り!!」

「……はい。」

暁……何か気に入らないのか？

「……それより帝は復帰したんだろうな。全く見かけないが……」

「ああ、何とかな。精神が不安定だけだな。あいつは自分でどっか行っちゃったよ。」

「そうか……」

帝修造……黒崎とのデュエルで奴は究極邪神を使いながらも敗北し、そのリバウンドとして精神的ダメージを追ってしまった。そしてお陰で邪神ドレッド・ルートがただの紙となってしまった。

「良くあんなレベルでオレ達のメンバーをやっていられるな。」

「そこまで言うな。少なくともあいつは邪神の器として、今回の

件で必要だからな。」

「おいおい、邪神ってそんなに強い物なのかね？」

シエンが余裕に話している。

こいつがブラザーフッド・ナンバーXI、天将シエン。

正直、俺は奴の性格が気に入らない。

奴は自分の強さに自惚れ過ぎている。

しかし強さだけは確かだ。

だから余裕過ぎるのは敗北に至る事だ。

「てゆうか時間つぶしていいのか？」

「悪い慎太郎、そろそろ実行しよう。」

先ほど暁が言ったとおり、今回の任務のリーダーは俺だ……ナン
バーIX、ルーカス・アンデルセンがな。

「じゃあ、行こう。」

それぞれのメンバーはモンスターを召喚した。

サイバー・フェニックス

4

ATK1200

エレキジ

4

ATK1000

宝玉獣 サファイア・ペガサス

4

ATK1800

「じゃあ行くぞ、新入り。 お前は俺と一緒に行く。」

「……………」

彼女もモンスターを召喚した。

ドラグニティ・フランクス

2

ATK500

「じゃあ、乗るぞ。」

今回の任務、それは……邪神の生還！！

Side End

Side / 鉄也

「あれ……………」

ここは黒いトンネルであつた。

「精霊世界へたどり着いたんじゃないのか？」

「いや、これは精霊世界と現世の間にある空間だ。このトンネルを通れば精霊世界へ辿り着く。」

「そうか。じゃあ早速行こう。」

「そうだね、一刻を争っている暇はなさそうだしね」

こうして俺達はトンネルの中を歩く事にした。

「なあ遊斗。」

「ん？」

「お前だろ、死に掛けていた俺を治療したのは。」

「そうだよ。」

「ありがとうな、助けてくれて。」

「礼も何も、君を守ることが僕の使命だからね。」

「そうなのか……それでもさ、あの時は駄目だと思つたぜ。流石にあの形で死んでしまうのは嫌だったからな。」

「フフッ……」

「しかしその……展開が速すぎるというかあれだな。いきなり俺の周りに色々あつて敵と戦う事になったりして何だか混乱するな。」

「まあ、タイミングが悪かったと言う事だね。君、大丈夫？
多少し落ち着いて無さそうだが。」

「そりゃあ、仕方ないだろ。ブラザーフードが言いたいという組織なのか黒き痣が何故狙われているのかそもそも黒き痣が何なのか色々知らない事ばかりが多過ぎるんだよ。」

「確かにそうだね。じゃあ、今度ブラザーフードについては君に教えよう。でも、黒き痣の事は黒崎さんに聞いたほうがいい。」

「……わかった。てゆうかお前の存在も気になるが。」

「はいはい……今度教えますよ。」

「そろそろ出口だ。」

そして出口を通ると光が指した。

「ほお……ここが精霊世界か。」

俺達が着いた場所には草原があり、周りには妙な生物が空を飛び回ったり草原をうろつき回ったりしていた。

「ようこそ、皆さん。」

「ん？」

「どうもありがとう。 皆さん、この人が僕の友人です。」

「……………（。。）」

俺達の前に現れた人物……

それはバランスの取れた筋肉質の体に加えてイルカの顔……

正確に言えば気持ち悪い、というかキモい。

ある意味結構有名であるあのモンスターであつた……

「お前かいいいいいいいい！！！」

正直、俺の調子が狂ったので思わず突っ込んだ。

裏切られた……代行者やA・O・Jを期待していた俺は裏切られた。

S i d e E n d

新章 精霊世界編 始まります。

T o B e C o n t i n u e d……………

第49話 新章突入D A Z E！！（後書き）

次回からはリメイクを始めます。

番外編 もう1人の転生者 前編 (前書き)

今回は軽く番外編です。

番外編 もう1人の転生者 前編

S i d e / ? ? ? ?

「ねえ、あの子…… あれってうちのお隣の子じゃない？」

「あら、本当…… あの子、幼稚園に行くべきじゃない？」

「ちょっと警察に通報した方が良くないんじゃない？」

「いやいや、あんなのには関わらない方が良くいよ。」

ぼくはれいじ。

4さいです。

おとうさんとおかあさんといっしょにあばーとにすんでいます。

「このガキ！ 俺のズボンにジュースこぼしやがって！！」

このひとはぼくのおとうさんです。

おとうさんはきびしいひとです。

ぼくがふくをよごしてしまうとおとうさんはおこります。

「ごめんなさい！ ごめんなさい！……」

いたいです。 いたいのにおとうさんはやめてくれません。

「……………」

ぼくのおかあさんはなにもしないひとです。

へんなおかあさんです。

「お前はしばらくそこにいてろ！」

おとうさんはぼくがわるいことをするといつもベランダにおきま
す。

きょうもまたベランダにおかれました。

しょうがないよね。　ぼくがわるいんだから。

「おい雅子！　外で飯食うぞー！！」

「はい、あなた……」

おとうさんとおかあさんはぼくをおいてそとへいきました。
ぼくはわるいこなのでそとへでられません。

「……………」

なんだろう……わるいことをしたのにぼくはベランダにいること
がいやになりました。

このベランダ……ここからおりればこんなところになくてもい
いのかな……

「よいしょ……………」

ここからおりればいいのかな……

そうおもいながらぼくはベランダをこえようとします。

でもたかい……おちてしまいそうだ……

こんなたかさからおちたらどうなるのかな……
そうおもいながらおりよつとしたらてがすべりました……

「……………」

ぼくはどうなったんだろう……

「息子さんの手術、成功しました。もう、大丈夫です。」

「れいじ 怜治……………うっ……………」

あれ……ぼくのおかあさんってこんなひとだっけ？
いつもはぼくがいたいときはなにもしてくれなかったのに……

「もう、大丈夫よ。ママと一緒にいてあげるからね。」

おかあさんはぼくをだきしめてくれた。

「怜治……良かった……」

あれ？ おとうさんもないている……
いつもはおこってぼくをなぐっているのに……

「……………」

あれ……ぼくのとってこんなにちいさかったかな……

「……………」

まあ、どうでもいいや。　なんだかうれしい……
おかあさんにだかれるなんてはじめてだ……

S i d e E n d

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d
.....

番外編 もう1人の転生者 前編 (後書き)

次回からは怜治がデュエルを始めます。

番外編 もう1人の転生者 後編 (前書き)

番外編の後編です。

どうぞご覧ください。

番外編 もう1人の転生者 後編

Side / ????

「あの……このパックください。」

「ほらよ。」

ドキドキ……

初めてのパックを開ける時、僕はそんな感じだった。

どんなカードが出るかな……

格好良いカードが出ないかな？

僕はそう期待しながらパックをちぎった。

「このカードは……」

パックの中で初めて手に入れたカードは……それはとても美しく格好良くて強そうなカードであった。

「君……そのカードは……！」

偶然カードを見た店員さんは驚いた。

「え？」

「そのカードは正に……究極のシンクロモンスターだ！」

「究極の……シンクロモンスター？」

「そうだ。そのモンスターは召喚されただけでデュエリストの勝敗を大きく左右させるほどの力を持っている史上最強のモンスターなんだ。あまりの強さゆえに30枚しか作られていないんだ。」

「へえ……」

「（羨ましいが、あのモンスターとの交換に相応しいカードはうちの店にない。そもそも子供からカードなんて取るわけにはいかない。）君がそのカードを手に入れたのは何かの運命だよ。大事にしておくべきだ。」

「は、はい。ありがとうございます！」

そう、このカードを手に入れたのは僕が小学4年生の頃だった。それは同時にこのモンスターのシリーズに興味を持ち始めた頃でもあった。

「わあ……」

僕の名前は海棠^{かいどう}怜治、デュエルアカデミア中学2年生。
小学4年生の頃からデュエルモンスターズを始めた。
勉強も良くできているし運動もそれなりに出来る。
父さんも母さんも良い人だし、教師にも褒められている。
基本的に良い生活だ。

でも、僕には2つの悩みがある。

1つは……小さい頃から妙な夢を見る事だ。

時々見る夢……それは子供が親に虐められる事、すなわち虐待を受けている夢だ。

虐められた後、子供は何ともなかったような表情で大人しくしていた。

でも、わかる……あの子が傷ついて悲しんでいた事を。

そしてあの子の両親の顔……僕の両親に似ていた。

この夢の事を親に聞きたかったけど……僕にはそれが出来なかった。

父さんも母さんも優しく僕を大事に思っていてくれる。

そんな2人にこんな事をするなんて信じられる筈がない。

信じたくない、僕の両親があんな人間だとは。

「はあ……」

しかし今悩んでいる事はこの事ではない。

「ぐすつ……」

何でだろう……なんでこんな事に……

ごめん、僕の仲間^{カード}達。

「おい。」

「……………!!」

僕に話しかけた人物……………それは背の高い青い髪の青年だった。

「何悔やんでいるんだ？」

彼は僕にパンを差し出した。

S i d e E n d

S i d e / ? ? ?

1年経ったな……………俺があの子に才能を買われて以来。

まあ、任務がない限り俺は特に何もすることはないがな。

待機している間は普通にシティの中をうろついているだけだ。

ちなみに俺は今、パンを買い出した帰りだ。

俺はパンが大好きだ。

時間があれば何時も沢山買っている。

『ビィ〜〜!!』

「どうした、ルビー？」

俺の側には紫色の猫(?)が浮いている。

こいつは俺の精霊、ルビーだ。

てゆうか俺は誰に喋ってるんだ？

『ビー〜!』

「ん？」

俺はパンを買った帰りの途中、俺は公園の中に少年を見つけ出した。

歳は妹と同じ位か。

服装から見れば彼はデュエルアカデミアの生徒だな。

この時間だと生徒は授業を受けている筈だ。

そのクラスにいるべきの少年は何か悲しそうに座っていた。

「放っておけ。俺には関係ない。パクッ。」

『ン〜〜〜』

「モグモグ…」

『ビー〜〜〜!〜!』

ルビーは怒ってポカポカと俺を殴り始めた。

「モグモグ……」

『ビー〜! ビー〜〜!〜!』

「わかったわかった、お前には敵わない。」

俺はルビーに怒られながら少年の方に歩いていった。

「はあ……」

また面倒な事を……

じいさん……あんただったらそうするのか？

「おい。」

「……………！！」

「何悔やんでいるんだ？」

「パンでも食うか？ メロンパンにアンパン、カレーパンがあるぞ。食パンはないが。」

「…いえ、結構です。」

グ~~~~~……

「あ……………」

「無理するな。 昼食を抜いてまで学校をサボっているだろ。 戻
る気がないのならここで食え。 俺の奢りだ。」

「……………」

「悩み事でもあるんだろ。 俺が相談に乗ってやる。」

「何で関係のないあなたが？」

「さあな。 俺の気まぐれだ。」

「……それじゃあ、カレーパン下さい。」

「ほげよ。」

S i d e E n d

S i d e ノ レ イ ジ

「実は僕……最近デュエルにやる気がなくなっただけですよ。」

「……!?!」

「それでも作りたいデッキを作るのに努力はしたんですけど……」

「まさか君……ヴァンロードにはまったのか?」

「ち、違います。」

「………でダイレクトアタック!」

「っわああああ!?!」

怜治 WINNER

僕はあのカードを手に入れて以来、デッキを作る努力をした。カードを手に入れるのは大変だったけど作って完成させるのが楽しかった。

中学生になった時、やっとデッキらしくなって使い始めた実技試験で使った時は凄く楽しかった。

特に勝つ事にこだわりがあった訳じゃなかったけど、出来るだけ手持ちのカードを上手く活かして勝つ事ができた。

自分で作ったデッキで勝つ事ができたのは感動的で嬉しかった。でも……

「何だよあのデッキ……」

「少し強いからって調子に乗りやがって……」

「あんな奴、クラスにいて欲しくねえな。」

僕のデッキは強かった。

たまに負ける事もあったけど、クラスでは強い方だった。

別に調子に乗るつもりはなかった。ただ全力でデュエルしたかっただけなんだ。

でも、それが少し強すぎたのかクラスの人達からは批判を受ける様になった。

「ああ……」

周りの生徒からは嫌がらせを受けるようになり、カードを勝手に隠された事もあった。

「そんな……デッキが……」

たまには勝手にデッキをゴミ箱に捨てられた事もあった。

「うつ……うつ……」

嫌だ……この感じ……嫌だ……

「うわあああああああ！！」

S i d e E n d

S i d e / ? ? ?

「……そして逃げ出したという事か。」

こいつ……俺に似ているな。

まるで自分には居場所が無い様な事を言っている。

俺は同情したくないが……

「ご馳走様です。パンをありがとうございます。」

そう言っ て 怜治 という 子は 立ち 上がった。
多分、アカデミアに 戻る 気か？

駄目 だな…… 今の 状態 で 彼を 戻して も 同じ 事になる だけ だ。
なら……

「おい。」

「ん？」

「デュエルしろよ。」

「え？ 僕とですか？」

「君、強いんだろ？ ここで あつた のも 何か の 縁 だ。 デュエル しよう。 それ が 一番 分 かり 合える 方法 だ。」

「は、はあ……」

「良いから俺を信じろ。」

そう 言っ て 俺は 彼に デュエル ディスク を 差し 出した。

「俺の名はルーカス・アンデルセン…… お前、名前は？」

「僕は海棠怜治と申します。 よろしく お願い します。」

怜治 LP4000

VS

ルーカス LP4000

「デュエル!!」

「先行は君に譲る。」

「わかりました。僕のターン！僕は氷結界の武士を召喚します！」

彼の場合に水色の鎧武者が現れた。
下級モンスターとしては優秀なアタッカーだ。

氷結界の武士

4

ATK1800

「僕はこれでターン終了です。」

怜治 / LP4000

手札5枚

モンスター / 氷結界の武士 (ATK / 1800)

魔法・罠 / なし

モンスターを召喚しただけか。まずは様子見という事だな。

「俺のターン、ドロー！俺はモンスターをセットする。そして

カードを1枚セット。 ターンエンド。」

先ずはこれで良い。

??? / LP 4000

手札4枚

モンスター / 裏守備表示モンスター1体

魔法・罨 / リバース × 1

「僕のターン！（ここはどうしよう……氷結界の軍師を出そうかな。でも、相手の伏せカードも気になる。だったら……）僕は氷結界の舞姫を召喚します！」

首にマフラーを巻いた水色の髪のツインテールの女性が現れた。

氷結界の舞姫

4

ATK 1700

「氷結界の舞姫か……」

氷結界の舞姫を持っていると言う事は彼のデッキはやはり氷結界か。

珍しいな、氷結界を使うデュエリストは。最近のデュエリストはシンクロモンスターしか見ていない。

まあ、ブリーフナクをエクストラに入れている俺が言えた義理で

はないが。

そう言えば偶然手に入れた事あったな、舞姫のオーバーサイズ。

「氷結界の舞姫の効果を発動します！ このモンスターは手札の「氷結界」と名のついたモンスターを任意の数だけ見せる事で相手フィールド上にセットされている魔法・罠カードを手札に戻す事ができます！ 僕は手札の氷結界の軍師を見せてその伏せカードを手札に戻させます！ 白雪の舞！」

氷結界の舞姫は氷の盾を手に持ち、踊り始めた。

舞姫が踊ると吹雪が起こり始めた。

そしてその吹雪が俺の伏せカードを包み込む。

「残念だがこのカードはフリーチェーンだ。リバースカードオープン、マインド・クラッシュ！」

吹雪に包み込まれたカードは吹雪を払いつつ正体を現した。

「！！ そのカードは……」

「このカードは名前を宣言し、相手の手札にそのカードが存在していた場合、そのカードを手札から全て捨てる。外れた場合は君が俺の手札から1枚ランダムに選択して墓地に捨てる。俺が宣言するカードは勿論氷結界の軍師だ。」

「うつ……」

「さあ、君の手札を確認させてもらおうか。」

怜治の手札

氷結界の軍師

魔法の筒

成金ゴブリン

氷結界の御庭番

氷結界の封魔団

御庭番に封魔団……良いカードを持っているな。

「ようし、もう良いぞ。」

「まさか舞姫の効果を逆に利用されるなんて……僕は成金ゴブリンを発動します！ このカードによってカードをドロし、相手はライフを1000ポイント回復します！」

ルーカス LP4000 5000

「それじゃあ、バトルフェイズに入ります！ 氷結界の舞姫でセツトされたモンスターを攻撃！」

『はああ！』

氷結界の舞姫は氷の盾で伏せモンスターに攻撃した。

パキッ！

「え？」

逆に舞姫の武器にヒビが入り、怜治君はダメージを受けた。

怜治 LP 4000 3700

「残念だが俺のセットしたモンスターは宝玉獣 エメラルド・タートル。こいつの守備力が上だ。」

俺が伏せたモンスターは緑色の宝石のような亀であった。

宝玉獣 エメラルド・タートル

3

DEF 2000

「（あの守備力だと氷結界の武士でも倒せない。 だったら……）僕はメインフェイズ2に入り、氷結界の武士を守備表示に変更します。」

氷結界の武士

4

DEF 1600

「このモンスターが守備表示に変更した時、このモンスターを破壊

し、カードを1枚ドロします！」

マインド・クラッシュによって彼の手の内は明かされている。
その状況に応じての対策か。

『喝！！』

氷結界の武士は自らの刀で腹を突き刺し、砕け散った。

これが日本の切腹というものか……

切腹はラストサムライでしか見ていなかったがソリッドビジョンだと凄くリアルに見える。

「カードを1枚伏せてターンエンドです。」

怜治 / LP 3700

手札 4枚

モンスター / 氷結界の舞姫 (ATK 1700)

魔法・罾 / リバース × 1

「俺のターン。俺は速攻魔法、サイクロンを発動！早速その伏せカードを破壊させてもらおう。勿論魔法の筒かもしれないがな。」

相手の察しの通り、魔法の筒が破壊された。

「俺は宝玉獣サファイア・ペガサスを召喚する！」

俺の場に青い角が生えた白いペガサスが表れた。

宝玉獣 サファイア・ペガサス

4

ATK1800

「また、宝玉獣……」

「宝玉獣 サファイア・ペガサスの効果を発動！ このモンスターが召喚に成功した時、手札・デッキ・墓地から「宝玉獣」と名のついたモンスターを永續魔法扱いとして魔法・罠ゾーンに置く。俺はデッキから宝玉獣 ルビー・カーバンクルを置く。 サファイア・コーリング！」

サファイア・ペガサスは光を照らし、フィールド上に赤い鉱石が現れた。

「さらに俺は宝玉獣 エメラルド・タートルを攻撃表示へ変更する。」

「

宝玉獣 エメラルド・タートル

3

ATK600

「バトルだ。 宝玉獣 サファイア・ペガサスで氷結界の舞姫を攻撃！ サファイア・トルネード！」

俺のサファイア・ペガサスは相手の舞姫に巨大な風を巻き起こした。

怜治 LP 3700 3600

「さらに宝玉獣 エメラルド・タートルでダイレクトアタック！
エメラルド・カッター！」

エメラルド・タートルは体を甲羅の中に引っ込め、回転しながら相手に体当たりをした。

「うわああ！」

怜治 LP 3600 3000

「俺はメインフェイズ2に入り、宝玉獣エメラルド・タートルの効果を発動。このモンスターは1ターンに1度、表示形式を変更できる。」

宝玉獣 エメラルド・タートル
3

DEF 2000

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ。」

??? / LP5000

手札3

モンスター / 宝玉獣 サファイア・ペガサス (ATK / 1800)
、 宝玉獣 エメラルド・タートル (DEF / 2000)
魔法・罾 / 宝玉獣 ルビー・カーバンクル、リバーズ×1

「僕のターン！（相手に手札が知られている以上、状況が悪い…
… だったらこのドローしたカードが頼りになる！）僕は強欲な
ウツボを発動します！ このカードは手札の水属性モンスター2体
をデッキに戻してカードを3枚ドローします！」

「なるほど、君の手札には水属性モンスターが2枚あったな。手
札が知られている以上、発動するには良い機会だ。」

「僕は手札の氷結界の御庭番と氷結界の封魔団をデッキに戻し、カ
ードを3枚ドローします！」

「（これでマインド・クラッシュによる情報アドバンテージは無意
味となったな。）」

「このモンスターは相手フィールド上のカードが自分フィールド上
より4枚以上の場合、手札から特殊召喚する事ができます！」

長い緑色の髪的女性が現れた。

宝玉を置いたのが召喚条件を満たす鍵となってしまったか……

氷結界の交霊師

7

ATK2200

「バトル！ 氷結界の交霊師で宝玉獣サファイア・ペガサスを攻撃
！」

「……………」

氷結界の交霊師は何かの呪文を解き始めた。

「この瞬間、俺はリバースカードオープン、ラスト・リゾート！
このカードは相手プレイヤーの攻撃宣言時、デッキからフィールド
魔法、虹の古代都市 レインボー・ルインを選択して発動する！」
「デッキからフィールド魔法！」

ゴゴゴゴ……

公園だった景色が変形し始めた。
そして周りは古代文明の都市となった。

「まあ、それ以外何も無いから攻撃もダメージも通るがな。」

氷結界の交霊師の呪文によってサファイア・ペガサスは碎け散っ
た。

???? LP5000 4600

「そして俺は宝玉獣 サファイア・ペガサスの効果を発動！」

「え？」

「このモンスターが破壊された墓地へ送られる場合、墓地へは行かず代わりに永続魔法扱いとして魔法・罾ゾーンに置くことができる。」

「モンスターが永続魔法カードに？」

破壊されたサファイア・ペガサスの欠片が一点に集まり、青い鉱石となった。

「宝玉獣は全てこの効果を持っている。破壊された宝玉獣は墓地へ行かずに宝玉になる事ができる。」

「そんな効果があるんだ。そう言えば召喚された宝玉獣 サファイア・ペガサスの効果が発動した時も……でも、それに何の意味が……」

「それは後で説明しよう。これが宝玉獣の戦い方だ。」

「では、これでターンエンドです。」

怜治 / LP 3000

手札 4 枚

モンスター / 氷結界の交霊師 (ATK 1700)

魔法・罨／なし

S i d e E n d

S i d e / 怜治

宝玉獣か……始めて見る。

破壊されたら代わりに宝石になるなんて前代未聞だ。

一体どんな使い道があるんだろう……

「俺のターン。氷結界の交霊師か……あのカードが存在する限り俺は魔法・罨カードを1ターンに1度しか発動できないのか。厄介だな。俺は2枚目の宝玉獣 サファイア・ペガサスを召喚する！」

宝玉獣 サファイア・ペガサス

4

A T K 1 8 0 0

「宝玉獣 サファイア・ペガサスの効果を発動！俺はデッキから宝玉獣 アンバー・マンモスを魔法・罨ゾーンに置く！」

今度はオレンジ色の鉱石が現れた。
アンバーだから……あれは琥珀かな？

「そして装備魔法、宝玉の開放を発動。このカードは装備された
宝玉獣の攻撃力を800ポイントアップさせる。」

宝玉獣 サファイア・ペガサス

4

ATK1800 2600

「そして俺はもう1度宝玉獣 エメラルド・タートルを攻撃表示へ
変更する！」

宝玉獣 エメラルド・タートル

3

ATK600

「宝玉獣 サファイア・ペガサスで氷結界の交霊師を攻撃！ サフ
アアイア・トルネード！」

サファイア・ペガサスの風によって僕の交霊師は吹き飛ばされた。

「交霊師が……」

レイジ LP3000 2600

「さらに宝玉獣 エメラルド・タートルでダイレクトアタック！

エメラルド・カッター!!」

レイジ LP 2600 2000

凄い……また状況を一気に繰り返された。

この人……強い!!

「カードを1枚伏せ、ターン終了だ。」

??? / LP 4600

手札2枚

モンスター / 宝玉獣 サファイア・ペガサス (ATK / 1200)
、 宝玉獣 エメラルド・タートル (DEF / 2000)

魔法・罠 / 宝玉獣 ルビー・カーバンクル、宝玉獣 サファイア・
ペガサス、宝玉獣 アンバー・マンモス、宝玉の開放 (宝玉獣 サ
ファイア・ペガサスに装備)、リバーズ×1

フィールド / 虹の古代都市 レインボー・ルイン

「僕のターン!」

「待て。」

「え?」

「これで宝玉が3枚も揃っている…… そろそろレインボー・ルイ
ンの効果を教えるべきだな。」

言われてみれば良く見ると宝玉が増えていた。

「俺のレインボー・ルインは場の宝玉の数だけ効果を持つ。俺の宝玉は3枚。よって3種類の効果を持つ。」

「3種類の効果!？」

そんな凄いフィールド魔法が……

「俺のフィールドに宝玉が1枚以上ある場合、このフィールド魔法カードは破壊されない。2枚以上ある場合、1ターンに1度だけ俺が受ける戦闘ダメージを半分にできる。そして3枚以上の場合、相手が魔法・罫カードを発動してきた場合、俺がフィールドの「宝玉獣」と名のついたのモンスターを墓地へ送る事でその発動を無効にし、破壊する。」

「!?!」

凄い……そんな効果があるんだ!

でも、これじゃあ迂闊に動けない!

だったら……このターンはこのモンスターで耐えるしかない!

「僕はモンスターをセットし、カードを1枚伏せます! ターン終了です!」

怜治 / LP 2000

手札 3枚

モンスター / 裏守備表示モンスター 1体

魔法・罨ノリバース×1

フィールド／虹の古代都市 レインボー・ルイン

「俺のターン！ 俺は宝玉獣 エメラルド・タートルを攻撃表示に変更する！」

宝玉獣 エメラルド・タートル

3

ATK600

「宝玉獣 サファイア・ペガサスで裏守備表示モンスターを攻撃！ サファイア・トルネード！！」

サファイア・ペガサスが攻撃したモンスターは氷の銃を持った女性だった。

氷弾使いレイス

2

DEF800

「あれは……」

「僕の伏せたモンスターは氷弾使いレイスです！ このモンスターはレベル4以上のモンスターとの戦闘によって破壊されません！」

「戦闘に耐久を持つチューナーモンスターか。倒しておくべきだがレベル3のエメラルド・タートルでも倒せないな。俺は宝玉獣エメラルド・タートルを守備表示へ変更する。ターンエンドだ。」

宝玉獣 エメラルド・タートル

3

DEF2000

???/LP4600

手札3枚

モンスター/宝玉獣 サファイア・ペガサス(ATK1200)、

宝玉獣 エメラルド・タートル(DEF2000)

魔法・罠/宝玉獣 ルビー・カーバンクル、宝玉獣 サファイア・

ペガサス、宝玉獣 アンバー・マンモス、宝玉の開放(宝玉獣 サ

ファイア・ペガサスに装備)、リバーズ×1

フィールド/虹の古代都市 レインボー・ルイン

「僕のターン！」

この人……強い！

そして何も悪い事も感じない。

このデュエル……そうだ……僕がやりたかったのは……

「怜治君。」

「は、はい！」

「どうだ？　今のデュエル……楽しいか？」

「……はい、楽しいです！」

見た事がないカードと戦って相手も全力でまともに挑んでくれる！
実力で差別される事もなく、勝ち負けにこだわることもなく、ただ楽しむ！

そうだ、これが僕のやりたかったデュエル！！

「君に教えておこう。確かにデュエルでは弱い者は酷い扱いを受け、強い者は何やらの批判を受ける……君はその犠牲になった。

だが、デュエリスト達はそういう人間だけではない！　必ずお前の様に勝ち負けに拘らずデュエルを楽しむものが存在する。そして必ずお前の元にもやってくる！」

「……………！！！」

「だから諦めるな！　君が望むデュエルをやっていきたいのなら強く生きろ！」

そうだ……そうなんだ！

それが……それが答えなんだ！

「……はい！　デュエルを続けます！　僕は氷結界の封魔団を召喚します！」

赤い服を着た白い髪的女性が現れた。

氷結界の封魔団

4

ATK1200

「（ん？ あのモンスター……） 氷結界の封魔団か。 確か魔法カードの発動を封じる効果を持っていたな。 だが、既に発動されているフィールド魔法の効果は止められないぞ。」

「わかっています！ 僕はレベル4、氷結界の封魔団にレベル2、氷弾使いレイスをチューニング！ 氷に眠りし古の龍が今、雷槍の如く地を貫く！」

4 + 2 = 6

「シンクロ召喚！ 蹂躪せよ、氷結界の龍 ブリューナク！」

氷結界の龍 ブリューナク

6

ATK2300

「（氷結界の龍 ブリューナクを召喚したか。 彼の手札は3枚…… バウンスさせると言えば俺の伏せカード、サファイア・ペガサス、あるいはレインボー・ルインしかないな。 しかしそれだと勝てない。）」

「僕は氷結界の龍 ブリユーナクの効果を発動します！ 手札を1枚捨て、虹の古代都市 レインボー・ルインを手札に戻します！ 氷結封印！」

「やはりレインボー・ルインを選択したか……」

『クオオオオ……』

氷結界の龍 ブリユーナクは氷の光線を放ち、虹の古代都市を凍らせた。

「そして永続罫、リビングデッドの呼び声を発動します！ 僕は墓地から氷結界の虎将 グルナードを特殊召喚します！」

氷の鎧を着た将軍が現れた。

氷結界の虎将 グルナード

8

ATK2800

「グルナード……ブリユーナクの効果を手く利用したか。」

「僕は魔法カード、サルベージを発動します！ このカードは墓地から1500以下の水属性モンスター2体を手札に加えます！ 僕は墓地から氷結界の封魔団と氷結界の氷弾使いレイスを手札に加えます！」

これでブリューナクの手札が増えたな。

「まだです！ 氷結界の虎将 グルナードが存在する限り、氷結界と名のついたモンスターをもう1度通常召喚を行います！ この効果で僕は氷結界の封魔団をもう1度召喚します！」

氷結界の封魔団

4

ATK1200

「そして僕は氷結界の虎将 グルナードをリリースし、アドバンスドローを発動します！ この効果でカードを2枚ドローします！」

「アドバンスドローだと！？ （何だか上手く回っているな……）」

「そしてもう1度氷結界の龍 ブリューナクの効果を発動します！ 手札を1枚捨てて宝玉獣 サファイア・ペガサスを手札に戻します！ 氷結封印！」

氷結界の龍 ブリューナクは氷の光線をサファイア・ペガサスへ目掛けて放った。

「俺はブリューナクの効果にチェーンしてキャトルミューテーションを発動！ このカードはフィールド上の獣族モンスター1体を手札に戻し、手札から同じレベルの獣族モンスターを特殊召喚できる！ 俺は宝玉獣サファイア・ペガサスを手札に戻し、手札から宝玉獣 サファイア・ペガサスを特殊召喚する！」

一瞬、サファイア・ペガサスの姿が消え、ブリューナクの光線
かわした。

そして別の場所から現れた。

宝玉獣 サファイア・ペガサス

4

DEF 1200

「そしてブリューナクの効果は対象を失い、不発となる。だが宝
玉獣 サファイア・ペガサスの効果を発動される！俺はデッキか
ら宝玉獣 アメジスト・キャットを魔法・罠ゾーンに置く！」

フィールドに紫色の鉱石が現れた。

「回避された……」

でも、これで終わったわけじゃない！

「僕もまだ行きます！僕は魔法カード、浮上を発動！このカー
ドは墓地からレベル3以下の魚族・海竜族・または水族モンスター
を特殊召喚できます！僕が特殊召喚するのは氷弾使いレイス！」

氷弾使いレイス

2

DEF 800

「なるほど、ブリユーナクのコストを上手く利用しているな。」

「そして魔法カード、精神操作を発動！ 相手モンスター1体のコントロールを得ます！ 僕がコントロールを得るモンスターは……
宝玉獣 エメラルド・タートル！」

あの時に手に入れたのカード…… 実を言うと一度も使った事がなかった。

使う機会がなかったわけじゃない。

場合によっては召喚するのが最善の選択肢でもある機会もあった。ただ、怖かったんだ……

氷結界を使う事で否定されている僕が更に傷つく事を……

だからこのカードの強さを知った僕は使う事も無く封印した。

でも、今のデュエルで気付いたんだ。

このモンスターを召喚したいと……

全力を出したいと……

「（エメラルド・タートルを選んだと…… レイスと封魔団と合わせるレベルの合計は9…… まさかあのモンスターを召喚する気か！？ しかし珍しく長くフィールドに残り続けていたな、エメラルド・タートル。）」

「レベル3、宝玉獣 エメラルド・タートルとレベル4、氷結界の封魔団にレベル2、氷弾使いレイスをチューニング！ 史上最強の古の龍よ、今ここに封印を解き放ち天地を制圧せよ！」

3 + 4 + 2 = 9

「シンクロ召喚！ 氷結界の龍 トリシューラ！」

『『グオオオオオオ！！』』

氷結界の龍 トリシューラ

9

ATK2700

「これが……氷結界の龍 トリシューラ…… 凄い…格好いい……」

初めて召喚できた……この美しくて…綺麗な龍が……

「あれが……氷結界の龍 トリシューラか……始めてみる……見事だ。」

初めて召喚した僕の切り札……

僕はこのデュエルでここまで感じたことがあっただろうか……

ジュワ……

「……！」

何だろう、胸が痛くなってきた。

少し興奮しすぎたのだろうか……

「（こいつの胸……） 見事なプレイングだ、怜治君。 さあ、本領を発揮する時だ！」

「はい！ 氷結界の龍 トリシューラの効果を発動！ このモンスターがシンクロ召喚に成功した時、相手の手札・フィールド・墓地から1枚ずつカードを選択して除外します！ 氷結封殺閃！！」

氷結界の龍 トリシューラは氷の光線を彼のデュエルディスクに当てた。

除外されたカード

宝玉獣 エメラルド・タートル（墓地）

宝玉獣 サファイア・ペガサス（フィールド）

召喚僧サモンプリースト（手札）

「バトル！ 氷結界の龍 ブリューナクでダイレクトアタック！！
氷結雷槍波！！」

ブリューナクは強力な光線を相手に当てた。

??? LP 4600 2300

「くっ……」

「そして氷結界の龍 トリシューラでトドメを指します！」

氷結界の龍 トリシューラは3つの口からエネルギーを溜め始めた……

これで勝て……

「待て、俺は手札からモンスター効果を発動する！」

「え？」

シュワアア……

彼の前に黒い霧が集まり、それは悪魔のようなモンスターとなった。

トラゴエディア

10

DEF 1200

「トラゴエディアは自分が戦闘ダメージを受けた時、手札から特殊召喚する事ができる。ブリューナクの攻撃で発動させてもらった。」

「

「でも、ステータスはトリシューラの方が上です！ 氷結界の龍トリシューラでトラゴエディアを攻撃！ 氷結三槍波！！」

『『グオオオオオオ！！』『』』

トリシューラの強大な光線により、トラゴエディアは粉碎された。

「危なかったぜ……」

「このターンで決められませんでしたか。」

「中々やるな。（俺がここまで追い詰められるとはな……）」

「僕はこれでターンエンドです！」

怜治／LP2000

手札0枚

モンスター／氷結界の龍 トリシューラ（ATK2700）、氷

結界の龍 ブリューナク（ATK2300）

魔法・罠／リビングデッドの呼び声（対象なし）

ターンエンドを宣言した時、僕は気が付いた。

この人は次のターンで逆転する事を。

「……………」

でもいい、全て出し切ったから。

「怜治君。君は自分に自信が持てるようになった様だな。それでこそ君は立派なデュエリストだ。だから俺もここから全力で反撃させてもらう！」

「はい！」

「俺のターン！俺はもう1度虹の古代都市 レインボー・ルインを発動する！」

そう言えば彼の場の宝玉は4枚存在している！
と言う事は4種類もの効果を……！！

「虹の古代都市 レインボー・ルインの効果を発動！ 俺の場に宝玉が4枚以上ある場合、1ターンに1度だけカードを1枚ドロースる事ができる！」

破壊耐久、魔法・罠の無効、ダメージ軽減に加えて手札補助もあるんだ……

「やっと来たか……俺は4つの宝玉を全て墓地に送る！」

「……！」

4つの宝玉を墓地に……一体何を……！！

「魔法カード、宝玉の氾濫を発動！ このカードは自分フィールドの宝玉を4つ墓地へ送る事で発動可能だ。 フィールド上のカードを全て墓地に送る！」

「全て墓地に……！」

ピカアアア……

サファイア……アンバー……ルビー……そしてアメジストの4つの宝玉が一気に光りだした。

「この光は……」

『クオオオオオオ………』

『『グアアアアア！！』』

「ブリューナク！ トリシューラ！！」

僕のモンスター達は光に包み込まれ、消滅した。

「はあ…はあ……」

「そして宝玉の氾濫のもう1つの効果を発動。 この効果で墓地に送った相手のカードの枚数分、墓地から宝玉獣を可能な限り特殊召喚する。 墓地へ送ったカードは3枚。 よって3体特殊召喚する。」

ピカアアア……

彼のフィールドに新たなるモンスター達が召喚された。

宝玉獣 アメジスト・キャット

3

ATK1200

宝玉獣 アンバー・マンモス

4

ATK1700

宝玉獣 ルビー・カーバンクル

3

ATK300

凄い……僕のモンスター達が全滅されただけでなく一気にモンスターが並んだ。

「バトルだ。 宝玉獣 アンバー・マンモスと宝玉獣 アメジスト・キャット、そして宝玉獣 ルビー・カーバンクルで君にダイレクトアタック。」

彼の宝玉獣達は一斉に飛び掛ってきた。

「うわあああああ!!」

レイジ LP20000

???
WINNER

Side End

S i d e / ? ? ?

「……ありがとうございます。ここまでデュエルを楽しむことができたのは……はじめてです!」

「……まあ、それでいいだろう。良いデュエルだった。」

「ありがとうございます……」

「確かに周りの評価は厳しい。だが、それがお前を惑わさせるな。お前は強く生きるんだ、わかったか?」

「はい!」

「……」

これで俺は用済みだ。
帰って良いだろう、ルビー?

『!』

そうか、忘れていたな。

「君は気付いていないかもしれないが、君は1人じゃない。」

「え？」

「そろそろ姿を現したらどうだ、氷結界の封魔団。」

「カードが……」

そう、怜治君のカードが光り出したのだ。
光り出したカードから氷結界の封魔団が具現化したのだ。

「も、モンスターが……」

「それは君のデッキに存在するデュエルモンスターの精霊だ。」

「デュエルモンスターの…精霊……」

『始めまして、怜治様。』

「こ、こちらこそ始めまして…… ほ、本当に精霊なんですか？」

『はい、あなたとずっと一緒に過ごしていた氷結界の封魔団です。』

……今のデュエルの影響で精霊が見える様になったんだろう……

「ごめんね…… 僕が弱いばかりにいつも君達が傷ついてしまって
……どうする事も出来なくて…… うう……」

そう言って怜治は泣き始めた……

『怜治様、自分を責めないでください。 あなたの苦しみはずっと

分かっていました。 私達の方こそ何も出来なくてただ見ているだけではない……」

「僕は…約束するから…強くなると…約束するから…一緒に頑張ろう……」

『……はい!』

「……」

さて……もう、用は済んだろう。
俺は退場するか。
そう思って帰ろうとした時……

「……待ってください!」

「ん?」

怜治君は帰ろうとする俺を止めた。

「あの……このカードを受け取ってください!」

「カードだと……!」

彼が俺に差し出したカード……

「本気で言ってるのか? それはお前の大事なカードだろ。 何故……」

「僕はこのデュエルしている時、決めたんです! もっと強くなり

たいと！　そしてお互いリスペクトできるデュエリストになりたいと！　それに気づかせてくれたあなたには恩があります！　だから受け取ってください！」

「駄目だ。俺は君が思うほど良心的な人間ではない。君は俺を信じてもいいと思っではいけない。」

「な、何ですか？」

「俺はお前以上に黒い。最初に言っただろ、俺がお前を助けに来たのも俺の気まぐれだ。」

「でも……僕にはそんな人には見えません！　だから……このカードだけは…受け取ってください！」

この少年……

「いいだろう。だが約束しろ。お前はお前の理想のデュエリストになると！　そして……もしお前がそのデュエリストになった時、このカードをお前に返す！」

「！」

「このカードはお前が持つべきだ。俺が自分のものにする権利はない。だから強くなって見せろ！　このカードに恥じない様に！」

「は……はい！」

「……………じゃあな。」

『ビィ〜〜!』

ピカアアア……

ルビーは眩しい光を照らし出し、その光と共に俺は姿を消した。

「これで良かったんだろ、ルビー。」

『ビィ〜〜!』

ルビーは喜んでいる。

「はあ……」

しかし俺は……何故そんな真似をした。

俺はあの少年を自分と連想しすぎたのか……

「……………」

しかしあの時……

間違いなく怜治君の胸にはあつた……あの黒き痣が……

また会つ事になるだろう……

海棠怜治……彼なら俺達と組むかもしれないな……

S i d e E n d

T H E E N D

番外編 もう1人の転生者 後編 (後書き)

何か文章が少し滅茶苦茶な気がするけどどうしよう……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7243o/>

遊 戯 王5D's The Power of Fellows

2011年12月25日20時52分発行